續國譯漢文大成

文學部 二十一の上

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部 第二十一冊（第六帙の上ノ二）

杜少陵詩集 下の上ノ一

一

吉田待郎氏 寄贈本

309
65

杜少陵詩集 下卷の上 目次

卷十三

閬山歌……一
閬水歌……二
江亭王閬州筵餞蕭遂州……四
陪王使君晦日泛江就黃家亭子二首……六
泛江……八
收京……九
巴西聞收京闕送班司馬入京二首……一一
城上……一三
傷春五首……一五
天下兵雖滿……一五
鶯入新年語……一七
日月還相鬪……一八
再有朝廷亂……二〇
聞說初東幸……二三
暮寒……二五
遊子……二六
滕王亭子二首……二七
玉臺觀二首……三〇
奉寄章十侍御……三四
南池……三六
將赴荊南寄別李劍州……四〇
奉寄別馬巴州……四一

奉待嚴大夫……四三
渡江……四五
自閬州領妻子卻赴蜀山行三首……四六
別房太尉墓……五〇
將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公五首……五一
春歸……六一
歸來……六三
草堂……六四
四松……七一
題桃樹……七四
水檻……七六
破船……七八
奉寄高常侍……八〇
贈王二十四侍御契四十韻……八二
登樓……九二
寄邛州崔錄事……九四
王錄事許修草堂貲不到聊小詰……九六
歸雁……九七
絕句二首……九七
寄司馬山人十二韻……九九
黃河二首……一〇三
揚旗……一〇五
絕句六首……一〇八
絕句四首……一一三
寄李十四員外布十二韻……一一六
軍中醉歌寄沈八劉叟……一二〇
丹青引……一二一
韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬圖歌……一二八
送韋諷上閬州錄事參軍……一三五
太子張舍人遺織成褥段……一三八

憶昔二首……一四二

卷十四

寄董卿嘉榮十韻……一五一
立秋雨院中有作……一五四
奉和嚴鄭公軍城早秋……一五六
軍城早秋……一五七
院中晚晴懷西郭茅舍……一五八
宿府……一六〇
到村……一六一
村雨……一六三
獨坐……一六五
倦夜……一六六
陪鄭公秋晚北池臨眺……一六七
遣悶奉呈嚴公二十韻……一六九
送舍弟頻赴齊州三首……一七五
嚴鄭公堦下新松……一七八
嚴鄭公宅同詠竹……一七九
晚秋陪嚴鄭公摩訶池泛舟……一八〇
奉觀嚴鄭公廳事岷山沱江畫圖十韻……一八二
過故斛斯校書莊二首……一八四
懷舊……一八八
哭台州鄭司戶蘇少監……一八九
別唐十五誡因寄禮部賈侍郎……一九五
初冬……一九九
觀李固請司馬弟山水圖三首……二〇〇
至後……二〇四

寄賀蘭銛……二〇五
送王侍御往東川放生池祖席……二〇七
正月三日歸溪上有作簡院內諸公……二〇八
敝廬遣興奉寄嚴公……二〇九
營屋……二一一
除草……二一三
春日江村五首……二一六
春遠……二二一
長吟……二二三
絕句三首……二二四
三韻三篇……二二五
天邊行……二二八
莫相疑行……二二九
赤霄行……二三一
聞高常侍亡……二三四
去蜀……二三六
喜雨……二三七
宿青溪驛奉懷張員外十五兄之緒……二三八
狂歌行贈四兄……二四〇
宴戎州楊使君東樓……二四三
渝州候嚴六侍御不到先下峽……二四五
撥悶……二四六
宴忠州使君姪宅……二四七
禹廟……二四九
題忠州龍興寺所居院壁……二五〇
哭嚴僕射歸櫬……二五一
旅夜書懷……二五三
放船……二五四
雲安九日鄭十八攜酒陪諸公宴……二五五
答鄭十七郎一絕……二五六

別常徵君……二五七
長江二首……二五八
承聞故房相公靈櫬自閬州啓殯二首……二六一
將曉二首……二六四
懷錦水居止二首……二六七
青絲……二六九
三絕句……二七一
遣憤……二七三
十二月一日三首……二七四
又雪……二七九
雨……二八〇
南楚……二八一
水閣朝霽奉簡雲安嚴明府……二八三
杜鵑……二八四
子規……二八七
客居……二八八
石硯……二九二
贈鄭十八賁……二九四
別蔡十四著作……二九八
寄常徵君……三〇三
寄岑嘉州……三〇四

卷十五

移居夔州作……三〇七
船下夔州郭宿雨濕不得上岸別王十二判官……三〇八
漫成一首……三〇九
客堂……三一〇

引水……三一五
示獠奴阿段……三一六
上白帝城……三一八
上白帝城二首……三一九
陪諸公上白帝城頭宴越公堂之作……三二三
白帝城最高樓……三二四
武侯廟……三二六
八陣圖……三二七
晚望白帝城鹽山……三二八
灩澦堆……三二九
老病……三三〇
近聞……三三一
負薪行……三三三
最能行……三三六
寄韋有夏郎中……三三九
峽中覽物……三四〇
憶鄭南……三四二
贈崔十三評事公輔……三四三
奉寄李十五祕書文嶷二首……三四九
雷……三五三
火……三五六
熱三首……三六〇
夔州歌十絕句……三六四
毒熱寄簡崔評事十六弟……三七二
信行遠修水筒……三七六
催宗文樹雞柵……三七八
貽華陽柳少府……三八三
七月三日亭午已後校熱退晚加小涼穩睡有詩……三八七
牽牛織女……三九三
雨……三九七

雨……三九九
雨二首……四〇二
江上……四〇六
雨晴……四〇七
雨不絕……四〇八
晚晴……四〇九
雨……四一〇
奉漢中王手札……四一一
返照……四一四
晴二首……四一六
雨……四一八
殿中楊監見示張旭草書圖……四一九
楊監又出畫鷹十二扇……四二一
送殿中楊監赴蜀見相公……四二四
贈李十五丈別……四二七
種萵苣幷序……四三三
白帝……四三八
黃草……四四〇
白鹽山……四四一
謁先主廟……四四二
古柏行……四四六

卷十六

諸將五首……四五一
八哀詩……四六〇
贈司空王公思禮……四六一
故司徒李公光弼……四七〇

贈左僕射鄭國公嚴公武……四七六
贈太子太師汝陽郡王璡……四八六
贈祕書監江夏李公邕……四九二
故祕書少監武功蘇公源明……五〇五
故著作郎貶台州司戶滎陽鄭公虔……五一五
故右僕射相國曲江張公九齡……五二四
夔府書懷四十韻……五三三
往在……五四五
昔遊……五五三
壯遊……五五八
遣懷……五七四
奉漢中王手札報韋侍御蕭尊師亡……五七九
存殁口號二首……五八一

卷十七

贈李八祕書別三十韻……五八五
中夜……五九三
垂白……五九四
中宵……五九五
不寐……五九六
送十五弟侍御使蜀……五九七
江月……五九九
月圓……六〇〇
夜……六〇一
草閣……六〇二
宿江邊閣……六〇四
吹笛……六〇五

西閣雨望……六〇六
西閣三度期大昌嚴明府同宿不到……六〇八
西閣二首……六〇九
西閣夜……六一三
月……六一四
宗武生日……六一五
第五弟豐獨在江左近三四載覓使寄此二首……六一七
聽楊氏歌……六二〇
秋風二首……六二三
九日諸人集于林……六二四
秋興八首……六二六
玉露凋傷楓樹林……六二六
夔府孤城落日斜……六二八
千家山郭靜朝暉……六三〇
聞道長安似奕棋……六三一
蓬萊宮闕對南山……六三三
瞿唐峽口曲江頭……六三六
昆明池水漢時功……六三八
昆吾御宿自逶迤……六四〇
詠懷古跡五首……六四二
支離東北風塵際……六四三
搖落深知宋玉悲……六四五
羣山萬壑赴荆門……六四八
蜀主窺吳幸三峽……六五〇
諸葛大名垂宇宙……六五二
寄韓諫議注……六五四
解悶十二首……六五九
洞房……六七二
宿昔……六七三
能畫……六七五

鬪雞……六七六
歷歷……六七八
洛陽……六七九
驪山……六八〇
提封……六八二
鸚鵡……六八三
孤雁……六八四
鷗……六八五
猿……六八七
麂……六八八
雞……六八九
黃魚……六九一
白小……六九二
哭王彭州掄……六九四

杜少陵詩集　卷十三

文學博士　鈴木虎雄　譯解

[library seal]

閬山歌(一)

閬(二)州城(三)東靈(四)山白。
閬州城北玉(五)臺碧。
松浮欲盡不盡雲(六)。
江(七)動將崩未崩石(八)。
那知根(九)無鬼(一〇)神會(一一)。
已覺氣(一二)與(一三)嵩華敵。
中(一四)原格(一五)鬪且未歸。
應結(一六)(一七)茅齋著(一八)(一九)青壁。

閬山の歌

閬州城東靈山白く、
閬州城北玉臺碧なり。
松には浮ぶ盡きむと欲して盡きざるの雲、
江には動く將に崩れむとして未だ崩れざるの石。
那ぞ知らむ根に鬼神の會する無きを、
已に覺ゆ氣嵩華と敵するを。
中原格鬪且つ未だ歸らず、
應に茅齋を結びて青壁に著くべし。

【字解】【一】閬山　閬州の山。【二】閬州　四川省保寧府閬中縣、梓潼の南にあたる。【三】城東　東とはおほよその方位をいへり、實は東北なり。【四】靈山　一名仙穴山といひ、閬中縣の東北十里にありといふ。【五】玉臺　山の名、閬州城北七里にあり。【六】雲　山上にあるくも。【七】江　嘉陵江。【八】石　江流に横はる石。【九】根　山根をいふ、蓋し深谷の洞窟などをさすならん。【一〇】鬼神　神仙をいふ。

【一一】會　要合する。【一二】氛　雲氣。【一三】與嵩華敵　嵩華は五嶽の中なる中嶽嵩山と西嶽華山、敵は匹敵、雲氣のぼりたる高さが之とひとしきをいふ。【一四】中原　洛陽地方。【一五】格鬪　うちあひたたかふ、戰爭あるをいふ。【一六】結　むすぶ、拵へること。【一七】茅齋　かやぶきの書齋。【一八】著　その處にくつつけて置く。【一九】青壁　あをき山崖の絕壁。

【題義】閬州の山を見て感ずる所をのべたり。廣德二年閬州にての作。

【詩意】閬州の城の東北には靈山が白くみえ、また城の北には玉臺山が碧にみえてゐる。山の松の樹には盡きるかとおもへども盡きることなき雲がうかんでをり、山のふもとに流るる嘉陵江の水には今にも崩れるかとおもへどもまだくづれずにゐる所の石がゆれうごきつつある。このありさまを見ると、この山の根もとには神仙のたぐひが集會してゐるかもしれぬし（集會してゐぬといふことがどうしてわかるか）、うちみたところで、もはや山の高い雲氣が嵩山華山とひとしきかの感じがある。自分は中原（洛陽）の地方が戰爭をしてゐるのでいまだに故鄕へかへらずにゐる、あの山の崖の絕壁のところに茅ぶきの書齋をこしらへるべきである。

（一）閬水歌

閬水の歌

（二）嘉陵江色何所似。　嘉陵江色何の似たる所ぞ、
（三）石黛（四）碧玉相（五）因依。　石黛碧玉相因り依る。
正憐日（六）破浪花出。　正に憐む日の浪花を破りて出づるを、
更復春（七）從沙際歸。　更に復た春沙際より歸る。
（八）巴童（九）蕩槳（一〇）攲側過。　巴童槳を蕩かして攲側して過ぎ、
（一一）水雞（一二）銜魚來去飛。　水雞魚を銜みて來去して飛ぶ。
閬中（一三）勝事（一四）可腸斷。　閬中の勝事腸斷ゆるにたへたり、
閬州（一五）城南天下稀。　閬州城南は天下に稀なり。

【字解】【一】閬水　閬州の川をいふ、卽ち嘉陵江。この川の源は陝西省の鳳縣の嘉陵谷からでる、閬中縣ではその西、南、東、の三方を流れる。【二】嘉陵江色　嘉陵江は卽ち閬水なること上にいへり、江色とは江の水の色をいふ。【三】石黛　いしずみ、青黑色にして婦人の眉をゑがくに用ふ、これは水の深き處の色をいふ。【四】碧玉　みどりのぎよく、これは水の淺き處の色をいふ。【五】因依　よりそふ、くつつきあふ。【六】日破浪花　破とはその中央からでるをいふ。【七】春從沙際歸　春節にあたりて自己が歸り來りしこと、歸るとは梓州よりこの閬州にかへりしをいふならん。（仇注に春回二沙際一といひて「春色が沙際より回り來る」ときたり。されど「春歸」といふは春の立ち去る義なればそれを「春回」の義とするはいかがにや、故に余之を取らず。）【八】巴童　土地のこども、閬中は巴國の地なり。【九】蕩槳「かひ」をうごかす、舟をあやつること。【一〇】攲側　かたむき、かたむく、水流の急なるため舟體がよこになるをいふ。【一一】水雞「くひな」。【一二】銜　ふくむ、口でくはへること。【一三】勝事　風景のすぐれたることども。【一四】可腸斷　可は「たへたり」の意、腸斷といふは卽ち前詩の「中原未歸」といへると同意にして佳景をみて卻て故鄕をおもひ悲しみてはらわたをたつなり。【一五】城南　この語によれば作者は城の南面の江水をながめて此詩をよめるなり。

【題義】閬州の城南にて嘉陵江のうつくしきをながめてよみたる歌。廣德二年の作。

【詩意】嘉陵江の水の色は何に似てゐるか、まるで石黛と碧玉とがくつつきあうてゐる樣である。自

分は今ちやうど浪花のあひだから太陽のあらはれ出たのをおもしろいとおもつてゐるが、そのうへちやうど春の時節に自分は沙はらのあたりからこの地にたちかへつたのであるからなほさらおもしろいとおもふ。こどもらはかひをうごかして舟を横加減にこぎつつすぎゆくし、水雞は魚をくはへていつたりきたりして飛んでゐる。この閬州の城の南面の風景は天下にめつたにないものだ、この絶景をみるにつけてなにぞや自分の腸はちぎるるばかりにかなしくなるのである。

江亭王閬州筵餞蕭遂州

江亭王閬州が筵にて蕭遂州を餞す

離亭非舊國。春色是他鄉。
離亭舊國に非ず、春色是れ他鄉なり。

老畏歌聲繼。愁隨舞曲長。
老いては歌聲の繼がむことを畏る、愁は舞曲に隨ひて長し。

二天開寵餞。五馬爛生光。
二天寵餞を開く、五馬爛として光を生ず。

川路風煙接。俱宜下鳳凰。
川路風煙接す、俱に宜しく鳳凰を下すべし。

【字解】【一】江亭　江邊の亭。【二】王閬州　閬州の刺史王某。【三】筵　宴席。【四】蕭遂州　遂州の刺史蕭某、遂州は四川省潼川州遂寧縣。【五】離亭　わかれをする亭。【六】舊國　故郷のくに。【七】畏　おそれる、はばかる。【八】繼　一度やみてまたそれをあとからついでうたふ。【九】二天　天は人の最も尊敬するものをさしていふ。食物を天とし、夫を天とする類是なり、ここに故事あり、後漢の蘇章、冀州の刺史となる、其の舊友に清河の太守となれるものあり、章、部内をめぐりて清河太守の惡事を探知し併りて酒肴を設けて之を歡待す、太守喜びて曰く、人皆一天有り、我は獨り二天有りと、太守は章より惡をかくしてもらへるとおもひ之を天とかぞへしなり、ここは王閬州をあてていへり。【一〇】寵餞　蕭遂州を愛しての餞別の宴。【一一】五馬　漢の時郡の太守は馬車に五馬を用ふ、かりて刺史をいふ、ここは蕭遂州をさす。【一二】爛　かがやく貌。【一三】川路　川つづきの道路。【一四】接　接續する、閬、遂、二州の地勢かくのごとし。【一五】俱　ともに、王、蕭、二人をこめていふ。【一六】下鳳凰　政治のゆきとどきたるさま。漢の黃覇、潁川の太守たりしとき其地に鳳凰、神雀、多く集まりしとの故事あり。

【題義】嘉陵江の江邊の亭にて王閬州が開きたる送別の宴席で蕭遂州にはなむけ贈りたる詩。廣德二年春閬州にての作。

【詩意】この別れをする亭は故郷の地でなく、いまながめる春げしきは他鄉のそれである。自分の樣に年がよつては宴席で歌の聲がしてもそれが卻つて繼續することをはばかり、舞の曲がつづけばつづくほど愁の心がのびるばかりである。今、昔人が二天にもたとへた王閬州は蕭君の光榮のために此の別宴を開かれ、任地に赴かんとする蕭君の五馬は爛然と光輝を生じてゐる。ここから遂州へ赴かるるといつたところで川つづきの道路に於て風煙相接して遠くもない場所であるから、兩君ともどもに善い政治を施して、その感化で天上から鳳凰をくだしあつめるほどにされるのがよろしい。

陪王使君晦日泛江就黄家亭子二首

王使君に陪して晦日江に泛び黄家の亭子に就く　二首

山豁何時斷。江平不肯流。
稍知花改岸。始驗鳥隨舟。
結束多紅粉。歡娛恨白頭。
非君愛人客。晦日更添愁。

山豁にして何の時か斷えたる、江平かにして肯て流れず。
稍く知る花岸に改まるを、始めて驗す鳥の舟に隨ふことを。
結束紅粉多し、歡娛白頭なるを恨む。
君が人客を愛するに非ずんば、晦日更に愁を添へむ。

【字解】【一】王使君　王閬州なり、使君は刺史の敬稱。【二】晦日　正月三十日、唐時の假日なり、のち德宗の朝にいたり二月朔を中和節となしたり、其以前は正月晦を節日とす。【三】江　嘉陵江。【四】就　こちらからでむいてその場所にいたること。【五】黄家亭子　黄氏の設けし亭なるべし。【六】山豁　山あひがからりとひろくひらけたること、閬中縣の錦山圖といふ處あたりが平地の多くなれるところなりといへり。【七】斷　山の高地たちきれたること。【八】不肯流　どうしてもながれぬ。【九】稍　すこしづつ次第に。【一〇】花改岸　岸上に於ける花がかはりゆく。【一一】驗　まことのしるしあるをいふ。【一二】鳥隨舟　鳥も舟についてさがつてくる。【一三】結束　裝束におなじ、婦人は身にくさぐさのものをからがく。【一四】紅粉　べに、おしろい、をつけたもの、即ち妓女をいふ。【一五】君　王閬州をさす。【一六】人客　客人のこと、この日の賓客をいふ。

【題義】閬州刺史王君のともをして正月三十日に嘉陵江に舟をうかべ、黄家の亭に就きてあそんだことをのべた詩。廣德二年の作。

【詩意】いつのまに斷絶したのか知らぬ間に山がからりとひらいた、そうして江の水はまつたひらでちつとも流れやうとしない。次第に岸べの花がかはるので、それでやつと飛んでゐる鳥も自分たちの舟にくつついて下つてゐるのだなといふ證據になる。我我の席に侍してゐるものは多く身つくろひをした紅粉の妓女たちであるが、おもしろくたのしむにつけても自分の頭の白いのを殘念におもふ。けふは王君が賓客を愛してくれられるおかげでおもしろいめをしたが、もしさやうでなかつたならばこの晦日にはさらに愁を添へたことであらう。

〔二〕

有徑金沙軟。無人碧草芳。
野畦連蛺蝶。江檻俯鴛鴦。
日晩煙花亂。風生錦繡香。
不須吹急管。衰老易悲傷。

徑有り金沙軟かに、人無くして碧草芳し。
野畦蛺蝶連る、江檻鴛鴦に俯す。
日晩れて煙花亂れ、風生じて錦繡香し。
須ひず急管を吹くを、衰老悲傷し易し。

【字解】【一】徑　こみち、江邊、亭へ通ずる小路。【二】金沙　金色のすな。【三】無人　他に人なきをいふ。【四】野畦　野らのこみち。【五】連蛺蝶　連ばつづくこと、蛺蝶は「こてふ」。【六】江檻　かはぞひのてすり、亭に設けたるもの、「有徑」二句は途上のさま、「野畦」二句は亭に入りてのちみたる外面のさま。【七】錦繡　妓女の著けたる錦衣。【八】須　もちふ、まつ。【九】

急管　調子の急な笛。

【題義】この第二首は題の「就黃家亭子」といふ部分をのべたり。

【詩意】金色の沙がやはらかに横はつてゐるこみちが有り、だれもゐぬひつそりしたところに碧の草がかんばしくにほうてゐる、（こんなところをとほつて亭にはいると）野らのこみちに「こてふ」がならんでとんでゆくのがみえるし、また水ぎはのてすりによつてうつむいて鷺鷥などをながめる。日はくれかかつて煙を帶びた花がさきみだれ、風新におこりて舞女の錦繡がかんばしく感ぜられる。自分は衰老の身で容易にかなしくなるから、急調の竹管など吹いてきかされるまでもない。

泛江（一）

江に泛ぶ

（二）方舟不用楫。極目總無波。
方舟楫を用ひず、極目總て波無し。

（三）長日容（四）盃酒。深江淨（五）綺羅。
長日盃酒を容る、深江綺羅に淨し。

（六）亂離還奏樂。飄泊且聽歌。
亂離にも還た樂を奏す、飄泊且つ歌を聽く。

（七）故國流清（八）渭。如今花正多。
故國には清渭流る、如今花正に多からむ。

【字解】【一】江　嘉陵江。【二】方舟　舟を二つならべること。【三】長日　春の日長、時間のながきをいふ。【四】容盃酒　容は許容の意、しか然すもさしつかへ無きをいふ、盃酒は酒宴をするをいふ。【五】淨綺羅　淨の字は深江淨とつづき、江水のきよらかなるをいふ、綺羅は副詞として用ふ、綺羅の照り映ろふところにの意、綺羅はあやあるうすぎぬ、妓女の着る所のものなり。【六】亂離　世みだれ人人がちりぢりになるとき。【七】故國　長安地方をさす。【八】清渭　渭水の清きながれ。

【題義】嘉陵江に舟をうかべしことをのぶ。廣德二年春、閬州にての作。

【詩意】二艘をひとつにくくつた舟は楫なしにひとりでにういてゆく。みわたすかぎりすこしも波がたたぬ。春の日ながのをりだから酒もりをしてくらすにさしつかへなく、深いかはみづはすみきつて妓女のつけた綺羅の舞衣のかげをうつす。いま世は亂れてゐるにもかかはらず音樂を奏し、飄泊の身のうへながらかりそめにも歌曲をきいてゐるのだ。故鄉では清らかな渭水が流れてゐる、そのあたりは今ごろはちやうど花が多くさきさかつてゐることであらう。

收京（一）

京を收む

（二）復道收京（三）邑。兼聞殺犬（四）戎。
復た道ふ京邑を收むと、兼ねて聞く犬戎を殺すと。

（五）衣冠卻（六）扈從。車（七）駕已還（八）宮。
衣冠卻つて扈從す、車駕已に宮に還る。

（九）尅復誠如此。安危（一〇）在數（一一）公。
尅復誠に此の如し、安危數公に在り。

莫令回首地(一二)慟哭起悲風(一三)。　回首の地をして、慟哭悲風を起さしむること莫れ。

【字解】【一】收京　京師（長安）をとりかへしたこと。廣德元年十月、吐蕃の侵入により代宗は陝州へにげだしたり、郭子儀また戰ひて長安をとりかへす。十二月に至り代宗長安にかへる。收京せしときには作者は梓州にあり、次ぎの年になりて其の信をきしなり。【三】復道　道（いふ）とは世人がいふなり、復とは安祿山の亂のときと此のたびとにて二回なればしかいへり。【四】京邑　京及び近地。【五】犬戎　吐蕃をさしてあてていふ。【六】衣冠　文武の官員。【六】扈從　扈とはおそくなりながらかへつての意、扈從はあとからおともをすること。【七】車駕　天子のお乘りもの。【八】宮　長安の宮殿。【九】尅復　尅は剋に同じ、「かつ」なり、復はもとどほりにする。【一〇】安危　やすらかとあやふきと、但し安の方に重きをおきていふ、安レ危とよます說あれど取らず。【一一】數公　朝廷になる二三の大臣をさす。【一二】回首地　仇氏は首をめぐらしてながめやる地、卽ち長安をさすとときたり。之によれば下句の慟哭も京師の人に屬せしむるなり。これは不自然と考ふ、故に余は回首地とは作者がいまみづから首をめぐらしてみてゐるところ、卽ち閬州客寓の地をさすものとみる。【一三】慟哭　作者が大になげくなり。

【題義】官軍が吐蕃の手から長安をとりかへしたことをきいてよめる詩。廣德二年春閬州にての作。

【詩意】世間ではまた官軍が都をとりかへしたというてをる、そのうへ犬戎（吐蕃）をも殺したといふことだ。それでわが君（代宗）のお乘りものはもはや宮中へおかへりになつたといふに、そのころやつと文武の役人どもがそのお伴をしてくる。さてみやこのとりもどしは此の樣にしてできたが、天下の安危のかかる所は二三の大臣の身のうへに在るのである。今ここで自分はかうべをめぐらして都をみやりつつあるが、どうかここでふたたび自分をして慟哭して悲風を吹き起さしむる樣なことにならしめぬやうにしてもらひたいものだ、

巴西(一)聞收京闕(二)送班司馬(三)入京二首

巴西にて京闕を收むと聞き、班司馬が京に入るを送る　二首

聞道(四)收宗廟。鳴鑾(五)自陝(六)歸。　聞道く宗廟を收めて、鳴鑾陝より歸ると。

傾都(七)看黃屋(八)。正殿(九)引朱衣(一〇)。　都を傾けて黃屋を看、正殿には朱衣引かむ。

劍外(一一)春天遠。巴西(一二)勅使(一三)稀。　劍外春天遠く、巴西勅使稀なり。

念君(一四)經世亂。匹馬(一五)向王畿(一六)。　念ふ君が世亂を經て、匹馬王畿に向ふことを。

【字解】【一】巴西　閬州をいふ、閬州は巴西郡に屬するが故なり。【二】京闕　闕は門の左右の小門。【三】班司馬　司馬の官たる班某、司馬は州の屬官なり。【四】聞道　きくならく、「他人のいふをきくに」の意。【五】鳴鑾　鑾は車の衡につけたる鈴。【六】陝　河南の陝州、代宗の出奔してゐたる地。【七】傾都　都のものすつかり。【八】黃屋　天子の馬車、天子の車は車の屋根うらを黃色の絹張りとす、因て之を黃屋といふ。【九】正殿　おもてごてん、禮儀を行はるる場所なり。【一〇】引朱衣　引は導引する、參列の諸官の先きにたちて案內をするをいふ、朱衣は御史大夫の從官の着する衣なり、この役人が案內して朝會のとき諸官をその各々の班位に就かしめる。（卷六の六〇六頁「至日遣興」第二首の朱衣只在殿中間の句の解を參照せよ。）【一一】劍外　劍門の外、蜀の地をいふ。【一二】巴西　閬州をいふ。【一三】勅使　天子のおほせをつたへるお使ひ。【一四】君　班司馬をさす。【一五】匹馬

一匹の馬。【一六】王畿　都ちかくの地方。

【題義】巴西(すなはち閬州)で官軍が都の宮闕をとりかへしたとき、そのをり班司馬が都へでかけるのを送つた詩。廣德二年春の作。

【詩意】聞くところによると官軍は宗廟を我が手に收め、わが君主には車のすずを鳴らして陝州からおかへりになつたさうだ。さだめし都の人全體が行列してお乘りものをながめ、またおもての御殿では朱衣をきた屬官が先導して參列の役人たちをならばせてゐることだらう。この劍外の地方は都とは春のそら遠くはなれてをり、巴西の此地(閬州)は勝利をおつたへになる勅使のくることもほとんどない。この際、すでに世亂を經た身を以て君が匹馬をとばして近畿の地へ向はるるのを念ふとき、自分は一種の感にたへぬのである。

〔二〕

〔一〕羣盜至今日。先〔二〕朝忝從〔三〕臣。
歎君能戀〔四〕主。久〔五〕客〔六〕羨歸〔七〕秦。
〔八〕黃閣長司諫。丹〔九〕墀有故〔一〇〕人。
〔一一〕向來論社〔一二〕稷。爲〔一三〕話涕〔一四〕霑巾。

〔二〕

羣盜今日に至る、先朝從臣を忝なうす。
歎ず君が能く主を戀ふるを、久客歸秦を羨む。
黃閣長に諫を司る、丹墀に故人有り。
向來社稷を論せり、爲に話せよ涕巾を霑すと。

【字解】【一】羣盜　賊軍夷狄の輩すべて盜の類なり。【二】先朝　肅宗の朝。【三】從臣　侍從の臣、作者は左拾遺たり、供奉・諫諍・を掌る官なり。【四】君　班司馬をさす。【五】主　代宗をいふ。【六】久客　ながく旅をしてゐるもの、自己をさす。【七】歸秦　秦は長安、班司馬が長安へかへること。【八】黃閣　門下省をいふ、拾遺は之に屬す、詳は卷五の四五四頁「奉贈嚴八閣老」詩を參照せよ。【九】丹墀　あかく塗りたる土臺、宮殿の階下をいふ。【一〇】故人　舊友。【一一】向來　これまで、さきに。【一二】論社稷　天下の大事を論ずる。【一三】爲話　吾がために先方へはなせ。【一四】涕霑巾　仇氏は之をも向來の事としてみたり、今取らず、これは自己の現在のこととみるべし。

【詩意】自分は先朝のときには拾遺の官をつとめ侍從の臣を忝なくしたものだが、今日に至るも羣盜起りて已まぬのをみつつある。君が君主をこひしたはるるところは自分は感歎にたへぬ、自分の樣な長いあひだの旅客は君が都へかへられるのをみるとうらやましくてならぬ。都の丹墀には自分の舊友がある、それは門下省に屬していつも諫諍の職をつくす所のものである。その連中とはこれまでよく國家社稷の事を論じたものだ、君が彼等にあはれたならば、「今日の時世のさまはなんだ、自分は之をみて涕が巾をうるほしつつある」と話してもらひたい。

〔一〕城上

草滿巴〔二〕西綠。城空白日長。
風吹花片片。春〔三〕動水〔四〕茫〔五〕茫。

城上

草滿ちて巴西綠なり、城空しくして白日長し。
風吹きて花片片たり、春に動きて水茫茫たり。

(六)八駿隨天子(七)羣臣從武皇(八)。　八駿天子に隨ひ、羣臣武皇に從ふ。
遙聞出(九)巡狩(一〇)早晩偏遐荒(一一)。　遙かに聞く出でて巡狩すと、早晩遐荒に偏からむ。

【字解】【一】城　閬州の城。【二】巴西　閬州の地をさす。【三】春動　動くものは水なり、春が動くにあらず、「春」とは「春時にあたりて」の意。【四】水　嘉陵江をいふ。【五】茫茫　水面のひろき貌。【六】八駿　「穆天子傳」によれば、天子の八駿は赤驥・盜驪・白義・踰輪・山子・渠黄・華騮・綠耳・をいふ。王嘉の「拾遺記」には、絶地・翻羽・奔宵・超影・踰輝・超光・騰霧・挾翼・をあぐ。【七】天子　周の穆王、以て代宗をたとへたり、穆王は天下に車轍馬跡あらしめんとて諸國を巡遊せり、代宗は吐蕃の亂にあひてにげだしたるものなれどもとりなしてかくいへり。【八】武皇　漢の武帝。武帝も諸處に巡幸して其の里程一萬八千里といはる、これも代宗をたとへたり。【九】出巡狩　都からでかけて天下をめぐりて狩する。この狩はまことのかりに非ず、にげだしたことをとりなしていふなり、八駿・羣臣・の二句は卽ち巡狩の事實なり。【一〇】早晩　はやいか、おそいか、にて「いつしか」の意となる。【一一】遐荒　遐は遠きこと、荒は不毛の地にして、僻遠の場處をいふ。

【題義】閬州の城上に立ちてながめしときの感をのぶ。仇氏、顧震の注をひきて、此の詩は廣德二年の春、作者梓州より閬州に往きしときの作なりとなせり。之に從ふ。

【詩意】草がいつぱい生えて巴西(閬州)の地も綠になつた。城はさびしくて日が長い。風が吹くと花びらがはらはらちる、春とて動いてゐる江水は茫茫とひろく横はつてゐる。八匹の駿馬が天子のお伴をしていで、多くのけらいたちも武帝(代宗)のあとからつきそうてでた。それはすなはち遙かに聞くところでは天子が巡狩におでかけになつたためだ、その御樣子では巡狩の區域はいつしか遠方のはてまでくまなくゆきわたることであらう。

傷春五首

傷春五首【原注】(一)巴閬僻遠。(二)傷春罷。始知春前(三)已收宮闕(四)
春を傷む　五首【原注】巴閬僻遠、春を傷み罷みて、始めて春前に巳に宮闕を收めしを知る

〔一〕天下兵雖滿

天下兵雖滿。春光日自濃。　〔一〕天下兵滿つと雖も、春光日に自ら濃かなり。
(六)西京疲百戰(七)。北闕(八)任羣兇(九)。　西京百戰に疲る、北闕羣兇に任す。
(一〇)關塞三千里(一一)。煙花(一二)一萬重(一三)。　關塞三千里、煙花一萬重。
(一四)蒙塵清路急(一五)。御宿且誰供(一六)(一七)。　蒙塵淸路急なり、御宿且つ誰か供せむ。
(一八)殷復前王道(一九)。周遷舊國容。　殷は復す前王の道、周は遷る舊國容。
(二〇)蓬萊足雲氣(二一)。應合(二二)總從(二三)龍(二四)。　蓬萊雲氣足る、應合に總て龍に從ふなるべし。

【字解】【一】傷春　春げしきを見て心をいたましめしこと、代宗が逃げられたことを悲しみたるなり。【二】巴閬　閬州をいふ【三】傷春罷　この傷春の詩をつくり了りたるをいふ。【四】春前　春より以前に。【五】收宮闕　長安の宮門をとりかへす。官軍

は廣德元年十月に長安をとりかへし、代宗は十二月に還京せられしなり。【六】西京 長安。【七】百戰 たびたびの戰。【八】北闕 北方の城の門、北といふは吐蕃侵入の方位。【九】羣兇 多くのわるもの。吐蕃を導き入れたる高暉・王獻忠・の輩をさす。「通鑑」に、廣德元年、冬十月、吐蕃、京畿を陷る、渭北行營兵馬使呂月將、精卒三千を將ゐて吐蕃と盩厔に戰ひ擒にせらる、又た涇州刺史高暉・射生將王獻忠等、吐蕃を迎へて長安に入れ、邠王守禮が孫承宏を立てて帝となす、とみゆ。【一〇】關塞 閬州のとりでをさす。【一一】三千里 長安よりの距離。【一二】烟花 烟を帶びたる春の花。【一三】一萬重 多くかさなりてみゆ。【一四】蒙塵 天子の逃げだされしこと。【一五】清路急 清路は御通過の路すぢをはききよめること、急とは掃除の暇なきをいふ。【一六】御宿 天子の宿泊せらるること。【一七】供 宿泊に要用なる品物をおそなへする。【一八】殷復 殷の武丁(高宗)行を修めて先王の政を復せり。【一九】周還 還の字の主語は下の舊國容なり、國のすがたがかはつたといふこと、周ははじめ鎬に都せしに、犬戎に攻められ、平王のとき東の方洛邑に都をうつしたり、本詩の第四首に近傳王在洛とある如く、當時代宗が洛陽におにげになりしとのうはさありしによりかくいへり。【二〇】蓬萊 唐の宮中をさす、唐の宮城に蓬萊殿あり。【二一】足 多きこと。【二二】應合 二字にて「まさに云云すべし」。【二三】總 雲氣すべてが。【二四】從龍 「易」の文言に、雲從龍、風從虎とみゆ、龍は天子に比し、雲は羣臣に比す。

【題義】 春げしきをみて傷みたることをのぶ。題下の注の意は、閬州はゐなかだからこの傷春の詩をつくつてしまつてから、やつと春より以前に長安の御殿をとりかへしたことを知つた、といふのである。これは收京の事實を知つてからかきそへた文句である。詩のなかにはすこしも收京を知つたことは言うて無い。

【詩意】 天下ぢうに兵が滿ちいくさだらけだが、春のひかりは日日こまやかである。長安の都はたびたびの戰に疲れ、北の門は多くのわるものどもの手にまかせてある。ここの關塞は都から三千里の遠いところにあり、烟花のながめは無數にかさなつてみえる。このとき天子は都からおにげになつたといふが、道路の掃除をするひまもあるまい、おとまりになるにも、必要品をだれがおそなへするか。周の國はえびすに攻められ東にうつつてもとの國のすがたはかはつたが、殷は賢王が出てふたたび先王の政道にたちもどつたのである。吾が唐の宮中には雲氣が多いがその雲氣(羣臣)はさだめしみんな龍(天子)につき從うていつたことであらう。(それに自分はどうであるか、の意ならん)

〔一二〕 鶯入新年語

〔一二〕 鶯新年に入りて語る

鶯入新年語。花開滿故枝。
鶯新年に入りて語る、花開きて故枝に滿つ。

天清風卷幔(一)。草碧水連池。
天清くして風幔を卷き、草碧にして水池に連る。

(二)牢落官軍遠。蕭條萬事危。
牢落官軍遠く、蕭條萬事危し。

鬢毛元自白。淚點向來垂。
鬢毛もと自ら白し、淚點向來垂る。

不是無兄弟。其如(三)有別離。
是れ兄弟無きならず、其れ別離有るを如せむ。

(四)巴山春色靜。北望轉逶迤(五)。
巴山春色靜なり、北望轉た逶迤たり。

【字解】【一】幔 まく。【二】牢落 さびしき貌。【三】如 「如何」とおなじ。【四】巴山 閬州の山。【五】逶迤 はるかに

遠き觀、巴山のさまをいふ。

【題義】この第二首は國事よりして家事に及びて傷めり。

【詩意】新年になつて鶯はさへづりだし、花はもとの枝にそのまま咲きみちた。天が淸らかで風が幔幕を卷きあげ、草の色はみどりにして水が池の面につらなつてゐる。天子が急難を被つてをられるのに官軍はさびしく遠方にゐてたすけにこず、形勢さびしく振はず萬事が危い。自分の鬢の毛はもとから白いが、況んや今日をや、淚のしづくに至りては今日にはじめずこれまでから已に垂れつづけてをるのである。國の事ばかりではない。自分には兄弟がゐないのではない、ゐるにはゐるのだが別れといふ事實のあることをどうすることもできぬ。巴山をみると春の景色しづかに橫はつてゐるが北をながめるとその山はいよいよ遠くまでつづいてゐてとても都や兄弟のゐるところが見えさうにもない。

〔三〕　日月還相闘

（一）日月還相闘。（二）星辰屢合圍。（三）

不成誅（四）執法。焉得變危機。（五）

大角（六）纏兵氣。（七）鉤陳（八）出帝畿。（九）

〔三〕　日月も還た相闘ふ

日月も還た相闘ふ、星辰屢〻合圍す。

執法を誅するを成さずんば、焉ぞ危機を變ずることを得む。

大角兵氣纏ひ、鉤陳帝畿に出づ。

煙塵（一〇）昏御道。（一一）耆舊（一二）把天衣。（一三）（一四）

行在（一五）諸軍闕。來朝（一六）大將稀。（一七）

賢（一八）多隱屠釣。（一九）王（二〇）肯載同歸。（二一）

煙塵御道に昏く、耆舊天衣を把る。

行在諸軍闕け、來朝大將稀なり。

賢は多く屠釣に隱る、王肯て載せて同じく歸らむや。

【字解】【一】日月一句　「晉書」天文志に、數日俱に出でて闘ふ若くなれば天下兵を起し大戰ありとみゆ。【二】星辰一句　「漢書」天文志に、高祖の七年に月暈、參・畢（星宿の名）を圍むこと七重、とみゆ。【三】合圍　合圍とはつつみてかこむこと。【四】執法　星宿の名、刑法を掌る官、又は内常侍官の象ある星なり、「漢書」天文志に、哀帝の元壽元年十一月、歳星、太微に入り、逆行して右執法を干す、その占に曰く、大臣憂あり、執法者誅せられ有罪の若し、と。而して二年十月に高安侯董賢なる寵臣免職され且つ自殺せり。ここの執法は蓋し常侍の官の象をとりしものにて宦官程元振にあてたり、元振は吐蕃の侵入を隱蔽しおき遂に大事に至らしめ、或は武將を妨げし惡人なり。【五】危機　國家の危き場合。【六】大角　「史記」天官書に大角は天王の帝廷なり、とみゆ、以て帝王の居る所にかたどれり。【七】兵氣　いくさの氣。【八】鉤陳　紫微宮にある星宿の位置、闘訟・兵陣を主どる、ここは宿衞の軍をさす、（卷四の三〇一頁、「鉤陳蒼蒼玄武暮」の句州を參照せよ。）【九】帝畿　王の治むる千里四方の地、ここは陝州をさす。【一〇】煙塵　兵亂のちり。【一一】御道　天子のおとほりになるみち。【一二】耆舊　老人、民間の父老。【一三】把　とる、つかめて前へやらじとひきとむるなり。【一四】天衣　天子の御衣。【一五】行在　行在所、陝州の代宗のかりみやをさす。【一六】來朝　朝は朝廷へでむくをいふ。【一七】大將　天子をおまもりするための地方の武將。【一八】賢　賢人。【一九】隱屠釣　周の文王の時、呂尙（太公望）は牛を朝歌（地名）に屠り、磻溪に釣りしゐたりしが文王に見出されて用ひらるるにいたれり。【二〇】王　天子（代宗）。【二一】載　自己の車にのせること。

【題義】天變を敍し君心をいましむることをのべたり。

【詩意】 日や月でさへもあひたたかふことがあり、星辰はたびたび一方が他のものを包圍することがある。(之に應じて人事に凶變がおこることは已むを得ざる所である。)今は執法の星宿にあたるわるもの(程元振)を誅するにあらずんばどうして危機を變じて安らかなときと爲すことができよう。今、帝廷に相當する大角にはいくさの氣がまとひ、鈎陳に相當する宿衞の軍が近畿の地へと出かける。天子のおとほりすぢの道には煙塵がくらくこめ、父老たちは御衣にすがりてゆくてをさへぎる。行在所にはおまもりをすべき諸軍隊がかけてをり、參朝にくる大將は至つてまれである。かかるとき、賢人といふものは多く屠者・釣者のなかにかくれてゐるものだが、吾が君王にはおしきつてその人をごじぶんのお車に載せていつしよにおかへりになることができるであらうかどうか。(周の文王が太公望をひろひあげられたやうに。)

〔四〕　再有朝廷亂

再有朝廷亂。難知消息眞。
近傳王在洛。復道使歸秦。
奪馬悲公主。登車泣貴嬪。
蕭關迷北上。滄海欲東巡。
敢料安危體。猶多老大臣。
豈無嵆紹血。霑灑屬車塵。

〔四〕　再び朝廷の亂有り

再び朝廷の亂有り、知り難し消息の眞。
近ごろ傳ふ王洛に在りと、復た道ふ使秦に歸ると。
奪馬公主悲み、登車貴嬪泣く。
蕭關北上に迷ふ、滄海東巡せむと欲す。
敢て料らむや安危の體、猶は多し老大臣。
豈に嵆紹の血の、屬車の塵に霑灑する無からむや。

【字解】 【一】再有　再とはささに安祿山の亂、今また吐蕃の亂あるをいふ。【二】消息　たより。【三】王在洛　王は代宗。【四】洛　洛陽、仇氏は後漢の獻帝が洛陽に還りし故事を用ひたりとなせり。【五】使歸秦　張儀が故事。【六】秦　吐蕃に比し用ふ。秦の惠王、張儀が計を用ひ商於の地六百里を餌として楚をして齊と絶交せしめ、楚より地を得んと申し出でしとき然る約をなせしことなしとて楚を欺く。惠王また商於の地と楚の黔中の地と交換せんと欲す、楚の懷王商於の地は不要なり、張儀を得て黔中の地を獻ぜんといふ。張儀使として楚に至り懷王の寵姬鄭袖に賄ひ計を以て復た秦にのがれ歸る。吐蕃の使者にも張儀のごとき反復の計をなせしものあるならん。【七】奪馬一句　北魏の高歡、晉陽より滏口に出づ、道にて北鄉長公主に逢ふ、馬三百匹あり、盡く奪ひて之を易ふ。吐蕃侵入のとき之に類せる行爲ありしをいふ。【八】登車一句　晉の成帝の咸和三年五月、蘇峻逼りて天子を石頭城に遷す、帝哀泣して車に升る、宮中慟哭す。これも吐蕃侵入せしとき後宮の貴女を虜にして去りしをいふ。【九】蕭關　關の名、甘肅省平涼府鎭原縣の西北にあり、漢の武帝、元封四年に雍に行幸して五畤を祠り、回中の道を通じ、遂に北のかた蕭關を出づ。代宗を武帝に比す。【一〇】迷北上　北上は北行なり、北の地勢たかきを以て北上といふ、迷とはゆくともあてどなきをいふ。【一一】滄海一句　滄海はひろきうみ、東巡とは東方をめぐること。秦の始皇、帝位に卽き、三年東のかた郡縣を巡り、鄒の嶧山を祠る、始皇また渤海に竝びて東し、黃腄を過ぎ、成山を窮め、之罘に登り石を立てて秦の德を頌す。代宗を以て始皇に比したり。「奪馬」よりこの「滄海」の句に至る四事も亦傳聞中のことがらなり。【一二】敢料　反語なり、おしはかることをせぬといふなり。【一三】安危體　國家の安危のさま。【一四】老大臣　朝廷にある大臣の年より。【一五】豈無　無いことはあるまい、あるだらう。【一六】嵆紹血　晉の惠帝の時八王の亂あり、成都王穎、京師に入り丞相となり巳にして鄴に還る、東海王越、帝の命を奉じて穎を征す、穎之を蕩陰

に拒ぐ、帝を奉じたる趙が軍敗績す、侍中嵇紹、身を以て帝を衞り殺さる、血、帝の衣に濺ぐ、顒、帝を迎へて鄴に入る、左右帝の衣を浣ばんと欲す、帝曰く、嵇侍中が血なり、浣ふことなかれと、顒、帝を奉じて洛に還る。【一七】 濡灑 うるほし、そそぐ。【一八】 屬車 おとものくるま。

【題義】 此篇は、代宗出奔の前途の不安をいひ、側近に忠臣あらんことを望む意をのべたり。

【詩意】 また朝廷の亂がおこつたが、事件のまことの消息はわかりにくい。ちかごろは吾が君王は洛陽にをらるるといひつたへらるるし、また反復常なきこと張儀のごとき使者が秦(吐蕃)へ無事にもどされたともいふ、吐蕃の侵入のためには、馬をうばはれて悲んでゐる公主(天子の姬宮)もあり、虜にしてつれゆかれんとして車にのぼらせられて泣く貴嬪もある。吾が君王は漢の武帝の樣に蕭關の方へ北行するについて迷はれ、或はさらに秦の始皇の樣に東方に巡幸しようかとお考へになつてゐる。(以上は皆傳聞の事。)朝廷にはなんとしてもまだ老年の大臣が多く居らるることだから自分ごときものが國家の安危のすがたをかれこれおしはかることはようせぬ。またいざ大事といふ際には昔の嵇侍中のごとく血を以ておともの車の塵にうるほしそそぎ、一死を以て君王のおまもりをするものが無いこともあるまい。

〔五〕 聞說初東幸

〔五〕 聞說く初めて東幸せしとき

聞說初東幸、孤兒卻走多。　聞說く初めて東幸せしとき、孤兒卻走せしもの多かりきと。
難分太倉粟、競棄魯陽戈。　分つを難かる太倉の粟、競ひて棄つ魯陽の戈。
胡虜登前殿、王公出御河。　胡虜前殿に登り、王公御河に出づ。
得無中夜舞、誰憶大風歌。　中夜の舞無きを得むや、誰か憶はむ大風の歌。
春色生烽燧、幽人泣薜蘿。　春色烽燧に生じ、幽人薜蘿に泣く。
君臣重修德、猶足見時和。　君臣重ねて德を修めなば、猶は時和を見るに足らむ。

【字解】【一】 聞說 きくならく、他人の說くを聞くなり、「聞道」と同意。【二】 東幸 代宗長安より逃れ東の方陝州に行幸す。【三】 孤兒 漢の時、從軍死事者の子を取りて羽林(禁軍)に養ひ之に武技を敎へたり、之を「羽林孤兒」と號せり、ここは近衞軍をさせり。【四】 卻走 しりぞきはしる。【五】 難分 難ははばかる、それを容易にせぬことをいふ。分は分給すること。【六】 太倉 天子のおこめぐら。【七】 粟 もみのままの米。【八】 競棄 きそひあらそうてすてる。【九】 魯陽戈 「淮南子」に魯陽公、韓と戰ひて日暮る、戈を援きて之を麾けば日返へること三舍(一舍は三十里)なり、との話みゆ、魯陽戈は卽ち落ちかかる太陽を呼び返へす法なり、頽勢を挽回する武器の義に用ひたり。【一〇】 胡虜 胡のえびす、吐蕃をさす。【一一】 前殿 長安のごてん。【一二】 御河 天子の巡幸中に屬する河。河は黃河、陝州は黃河のほとりにあり。【一三】 中夜舞 晉の祖逖が故事、晉の亂れしとき祖逖、劉琨とともにかいまきをきて寢れたり、中夜に雞の鳴くをききて起きて舞うて曰く、此惡聲に非るなりと、國事をうれへてたちあがりしなり。【一四】 大風歌 漢の高祖天下を平げてのち故鄕の沛に歸り宴をなせしとき作りし歌なり。辭に曰く、大風起兮雲飛揚。威加海内兮歸故鄕。安得猛士兮守四方。と、「天下は一統したが猛士を得て四方を守りさらに平和をつづけてゆきたいものだ」との意を

のべしうたなり。【一五】烽燧　晝ののろし火、夜ののろし火、（或はその逆との解もあり）危急を報知するあひづに用ふるもの。【一六】幽人　幽靜にくらす人、自己をさす。【一七】薜蘿　つたかづら、山中にあるもの、隱退生活の象徵なり。【一八】時和　時世の平和。

【題義】此篇は軍士逃散し、幽人烈士の慨歎するものあるをいひ、平和を致すは君臣の德を修むるに在るを說けり。

【詩意】きくところによると吾が君が東方（陝州）へ巡幸（實は逃げだしたるなり。）あそばされたときには羽林孤兒（近衞軍）は退御逃走したものが多かつたとのことだ。それは御倉米を分給することを躊躇したものだからそれで彼等が天日を旣墜に回へすべき戈を爭うてなげすてたのである。その結果はえびす（吐蕃）がごてんにかけのぼり、王公の御歷歷が黃河のほとりまで出てゆくことになつた。このとき祖逖のごとく夜なかに雞の聲をきいて起きて舞ふ憂國の士が無いといふことはありえないが、「大風歌」にいふごとく、猛士を得て四方を守るといふことを憶ふものはだれも居ない。烽燧、危急を報ずるときに無心に春げしきは生じてくるが、自分のごとき幽人は山奧で薜蘿のかげに泣くばかりである。今でも君臣もろともにふたたび德を修めたならばまだ時世の平和を見るには十分である、決しておそくはない、それが肝要である。

（一）暮寒

霧隱平郊（二）樹。風含（三）廣岸（四）波。
沈沈（五）春色靜。慘慘（六）暮寒多。
戍鼓（七）猶長擊（八）。林鶯遂不レ歌。
忽思高宴會（九）。朱袖（一〇）拂（一一）二雲和（一二）一。

暮寒

霧に隱る平郊の樹、風は含む廣岸の波。
沈沈春色靜に、慘慘暮寒多し。
戍鼓猶ほ長擊す、林鶯遂に歌はず。
忽ち思ふ高宴會、朱袖雲和を拂ひしことを。

【字解】【一】暮寒　ひぐれのさむさ。【二】平郊　たひらなのはら。【三】風含　含とはなかにいれておくこと。【四】廣岸　ひろき岸とは遠方までもの岸をいふ。「霧隱」の句は「暮」を寫し、「風含」の句は「寒」を寫したり。【五】沈沈　しづかにくれゆくさま、此句は「霧隱」の句を承く。【六】慘慘　しみじみと陰氣くさきさま、此句は「風含」の句を承く。【七】戍鼓　屯戍するもののならす太鼓、時に吐蕃、松・維・保・三州を陷れしを以て鼓聲やまざるなり。【八】長擊　うつことのたえざるをいふ。【九】高宴會　さかんなる宴會、前に見えたる王使君に陪して江に泛びしときのことなどおもひだせるなるべし。【一〇】朱袖　妓女のつけたるあかきそで。【一一】拂　手ではらひ糸を彈くこと。【一二】雲和　地名、良材を產す、琴瑟を作るにふさはし、轉じて樂器の名となる、琴のたぐひならん。王昌齡が詩に「斜抱二雲和一」の語あれば琵琶のごとくだきかかへてひくものとみゆるも其製未レ詳。

【題義】夕寒のをりの感懷をのべたり。廣德二年春、閬州にての作。

【詩意】平な野原の樹木が霧のなかにかくれる、遠方の岸までもの波をこめて風が吹きわたる。春のけしきが靜かにくらくくれゆく、くれどきの寒さがしみじみと增してくる。屯戍の太鼓はいまなほ擊

ちつゞけられてゐる、林の鶯も逃げうせたかとうとう歌はすじまひである。かかるをり自分は以前江で盛な宴會をしたとき酒席の美人があかい袖をつけた手で雲和の樂器をかきならしたことをふと思ふのである。

遊子（一）

遊子

巴蜀（二）愁誰語。吳門（三）興杳然（四）。　巴蜀愁誰とか語らむ、吳門興杳然たり。

九江（五）春草外。三峽（六）暮帆（七）前。　九江春草の外、三峽暮帆の前。

厭就成都卜（八）休爲吏部眠（九）。　就くことを厭ふ成都の卜、爲すことを休めよ吏部の眠り。

蓬萊（一〇）如可到。衰白（一一）問羣仙（一二）。　蓬萊如し到る可くんば、衰白羣仙を問はむ。

【字解】【一】遊子　たび人、自己をさす。【二】巴蜀　ひろく蜀の地をさす、ここは閬州を意味す。【三】吳門　吳の城門、今の江蘇省城の地。【四】杳然　はるかなる貌。【五】九江　江西省にあり。【六】三峽　瞿唐峽・巫山峽・西陵峽をいふ、四川省より湖北省に通ずる江の沿岸にあり、蜀より出でて吳に向ふは先づ三峽を經、次に九江を過ぐる順序なり。【七】暮帆　閬中の嘉陵江をわたるゆふぐれの舟の帆。作者は閬中より合州、巴州（重慶）にいでて揚子江の本流を下り東下せんとの志ありしなり。【八】成都卜　漢の嚴君平が故事。嚴遵、字は君平、成都の市中に賣卜す、日に數人を閲し、百錢を得、自ら養ふに足れば肆を閉ぢ簾を下して「老子」を授く。「就成都卜」といふは成都で賣卜なする事に就く義、必すしも賣卜して生活するを意味せず、成都に居住することをかくいへるなり。【九】吏部眠　晉の畢卓が故事。卓、吏部の郎となる、或る夜鄰りの舍に至りて甕の酒を盜みて飲み、酒の番人に縛られ夜明けになりて見あらはされたり。吏部眠とは畢卓のごとく醉ひてねむり居るをいふ。【一〇】蓬萊　これは海上の仙山たる蓬萊をさす。【一一】衰白　おとろへてしらがになる。【一二】羣仙　蓬萊の山に住んでゐる多くの仙人。

【題義】たび人としての感じをいふ。蜀を出でたしといへるなり。廣德二年春、閬州にての作。

【詩意】巴蜀の地に於ける愁は何人とともに之を語らうか、かたるべき人はない。吳門の方まで遊びにゆきたいとおもふがその興はあてどもなくはるかなものだ。いまここに春の草が生えつらなつてをるが九江はその草のはてにある。暮の帆舟がめさきにみゆるが三峽はその前の方に橫はつてをるのだ。自分は嚴君平の樣に成都へゆいて賣卜生活をするのはいやだ。鄰舍の同僚の酒を盜み飲んで眠る樣な畢卓のまねもしてはならぬ。（早くこの蜀を立ち去ることだ。）海原とほき蓬萊の山がもし往きつけるものなら、老年ながらそこへ仙人たちをたづねていきたいとおもふのだ。

滕王亭子二首（一）

滕王の亭子　二首

【原注】亭在玉臺觀（二）內。王刱典此州（三）。　原注】亭は玉臺觀の內に在り、王刱て此の州を典どる。

君王（四）臺榭（五）枕（六）巴山（七）。　君王の臺榭巴山に枕す、

【字解】【一】滕王　名は元嬰、

高祖の第二十二子、調露年間に壽州の刺史より隆州の刺史に移る、隆州は後に先天二年に玄宗の諱（隆基）を避けて閬州と改められたり。【三】玉臺觀　次に「玉臺觀」の詩あれば併せ看るべし。【四】典　つかさどる、即ち州の長官たる刺史に任ぜられしをいふ。【五】君王　滕王をさす、君の字敬稱として用ふ。【六】臺榭　土を高く盛りたるを臺といふ、臺上に木あり室なきを榭といふ。【七】

萬丈丹梯(八)尙(九)可攀。　萬丈の丹梯尙ほ攀づ可し。
春日鶯啼脩(一〇)竹裏。　春日鶯啼く脩竹の裏、
仙(一一)家犬吠白雲間。　仙家犬吠ゆ白雲の間。
清(一二)江錦(一三)石傷(一四)心麗。　清江の錦石傷心麗はしく、
嫩(一五)蘂濃(一六)花滿目斑。　嫩蘂の濃花滿目斑なり。
人(一七)到於今歌(一八)出(一九)牧。　「人今に到るも出牧せしとき、
來(二〇)遊此地不知還。　此の地に來遊して還るを知らざりき」と歌ふ。

枕　まくらす、のぞむ。【七】巴山　巴地の山の意、閬州の城北七里にある玉臺山をいふ。【八】丹梯　あかきはしご、赤色土の石段の道をいふ。【九】尙　今日もなほ。【一〇】脩竹　せのたかい竹、漢代、梁の孝王の園に脩竹あり、句暗に之を用ふ。【一一】仙家犬吠　「神仙傳」に八公、淮南王劉安と白日天に昇る、去る時に藥器をあまして中庭に置く、雞犬之を舐り啄みことごとく天に升ることを得たりと。句暗に之を用ふ。【一二】清江　嘉陵江、山の下にみゆるもの。【一三】錦石　錦紋の石。【一四】傷心麗　吾が心をいたしめながらうるはし。【一五】嫩蘂　みづみづしき花しべ。【一六】濃花　色こきはな。【一七】人　州人をいふ。【一八】歌　此の一字は下の九字を管（支配）す。【一九】出牧　中央よりいでて地方の人民を牧ふこと、王が刺史たりしことをいふ。【二〇】來遊　王が來遊せしをいふ、此一句は王の出牧當時、即ち往昔のことを追敍せし句なり。

【題義】滕王の建てた亭にあそんで古をおもうたことをのぶ。廣德二年春の作なるべし。

【詩意】滕王様のお築きになつた臺榭は閬州城北の山にさしかかつてたつてをる、そこは今も萬丈の丹梯をつたうてよぢることができる。よぢてみれば春日にあたつて鶯はせのたかい竹林のなかで鳴き、仙家とおぼしきところに犬が雲間に吠えつつある。江べりの錦石はうるはしいがそれをみると心が傷み、みづみづしいしべをもつた濃い色の花が眼にいるかぎりまだら模樣をなして咲いてゐる。今日にいたるも州の人民は「王がこの州を支配してをられたころには、この地（玉臺山）へ遊びにこられておかへりになることをも知らずにをられた」といふことを歌にいひあらはしてをる。

〔二〕

寂寞春山路。君(一)王不復行。　寂寞たり春山の路、君王復た行かず。
古墻猶竹色。虛(二)閣自松聲。　古墻猶ほ竹色、虛閣自ら松聲。
鳥(三)雀荒村暮。雲(四)霞過(五)客情。　鳥雀荒村の暮、雲霞過客の情。
尙思歌(六)吹入。千騎擁(七)霓(八)旌。　尙ほ思ふ歌吹入りて、千騎霓旌を擁せしことを。

【字解】【一】君王　滕王。【二】虛閣　人なき小にかい。【三】鳥雀　その聲をいふ。【四】雲霞　その色をいふ。【五】過客　暗に自己をいふ。【六】歌吹　歌の聲、吹奏するものの聲、この句鳥雀より連想す。【七】擁　かかへる。【八】霓旌　にじのごとき色彩のはた、この句雲霞より連想す。黄生曰く、歌吹・霓旌の二句は李邕が絃管變成山鳥哢、綺羅留作野花開と同意なりと。

【題義】 前作とおなじく弔古の意を寫したり。

【詩意】 ひつそりとしてゐる春の山の路、そこには滕王はふたたびおでかけにはならぬ。しかし古い檻にはいまだにむかしながらの竹の色がみえ、だれも居らぬ閣にはひとりでに松風の音がしてゐる。鳥や雀がさわぎたつ荒れた村の夕ぐれ、このとき夕ばえの雲霞に對するみちゆき人のこころもち、いまさへなほむかし王が歌樂を奏してここにはいつてこられ、千騎の兵が霓旌をかかへつつあつたありさまがしのばれるのである。

玉(一)臺觀二首　【原注】 滕王造。

玉臺觀　二首　【原注】 滕王造る。

中(二)天積(三)翠玉(四)臺遙。　中天積翠玉臺遙なり、
上(五)帝高居絳(六)節朝。　上帝の高居絳節朝す。
逢有馮(七)夷來擊(八)鼓。　逢に馮夷の來つて鼓を擊つ有り、
始知嬴(九)女善吹簫。　始めて知る嬴女の善く簫を吹くを。
江(一〇)光隱(一一)見黿(一二)鼉窟。　江光隱見す黿鼉の窟、
石(一三)勢參(一四)差烏(一五)鵲橋。　石勢參差たり烏鵲橋。
更肯紅(一六)顏生(一七)羽翼。　更に肯て紅顏羽翼を生せむや、
便應黃(一八)髮老(一九)漁樵。　便ち應に黃髮漁樵に老ゆべし。

【字解】 【一】 玉臺觀　閬州城北七里玉臺山にある道教の寺にして滕王の造りしものなり、觀內にある臺を玉臺といふ、山はけだし臺によりて名を得たるなり。【二】 中天　天に中する、そらのなかほどまでとどく、高きをいふ。【三】 積翠　つみかさなれる翠氣。【四】 玉臺　この觀內の臺をいふ、玉臺は道敎にて上帝の居る所と稱せらる、觀內の臺はそれに象りて造れるなり。【五】 上帝高居　卽ち玉臺をさす、高居は高きところの住居なり。【六】 絳節朝　絳節はえび色のはた　朝とは參朝すること、上帝のところへもろもろの仙官たちが敬禮のため絳節をたてて參朝する。【七】 馮夷　河をつかさどる仙人なり。【八】 擊鼓　魏の曹植が洛神賦に馮夷擊ㇾ鼓とみゆ。【九】 嬴女吹簫　嬴は秦の姓、嬴女とは秦の穆公の女弄玉をいふ、弄玉簫を吹くことを蕭史に學び一日倶に仙となりて鳳凰にのり天へ飛び去りしこと「神仙傳」にみゆ。（巻一の四四頁、「鄭駙馬宅宴洞中」詩の「秦樓」の句解を參照。）【一〇】 江光　嘉陵江の水のひかり。【一一】 隱見　みえたりかくれたり。【一二】 黿鼉　おほがめ、よろひがめ。【一三】 石勢　江中の石のありさま。【一四】 參差　たがひちがひのさま。【一五】 烏鵲橋　「淮南子」に烏鵲河を塡め橋を成して織女を渡すとの古傳說みゆ、「江光」二句は臺外の景をいへり。【一六】 紅顏　少年の血色よきかほをいふ。【一七】 生羽翼　つばさ生え天へ飛びうる樣になること。【一八】 黃髮　白髮さらにふるびるときは黃色を呈す。【一九】 老漁樵　漁樵に伍して老ゆるなり。

【題義】 厚く積つた山の翠氣が高く天半に橫はつて玉臺がはるかにみえる。ここは上帝の住居せらる高地であつて羣仙が絳節をたてて參朝にくる。いろいろなやつがくるが遂には馮夷といふ河伯が來て太鼓をうつし、また弄玉のやうな仙女が上手に簫を吹くのもここなればこそと知らるるのである。

山上からみわたすと江の水のてるところ黿鼉の窟が見えがくれしたり、石がくひちがひにならんで烏鵲が造つたといふ橋にもまがふ樣にみえる。自分はすこし慾張つたことをいふが、更にもし自分が紅顏であつて羽翼がからだに生える樣になることができぬものだらうか。できるといふのなら、甘んじてこの黄髮の老體をもつてこの山間の漁樵とまじつてくらしてゆくであらう。

〔二〕

浩(一)劫因王(二)造、平臺(三)訪古遊(四)。
彩雲(五)蕭史(六)駐(七)、文字(八)魯恭(九)留(一〇)。
宮闕通羣帝(一一)、乾坤(一二)到十洲(一三)。
人傳有笙鶴(一四)、時過北山(一五)頭。

〔二〕

浩劫王の造るに因る、平臺古遊を訪ふ。
彩雲蕭史駐まり、文字魯恭留む。
宮闕羣帝を通ず、乾坤十洲に到る。
人は傳ふ笙鶴有りて、時に北山の頭を過ぐと。

【字解】【一】浩劫　師民瞻の解に曰く、俗に塔の一級二級を謂ひて一劫二劫となす、子美が「岳麓道林二寺行」にも塔劫宮牆壯麗敞の語あり、若し劫を世劫の劫となさば玉臺は高宗の調露中に造る所、子美を去ること未だ百年ならず、豈に浩劫因王造といふべけんやと。案ずるに此說は劫の字を解して盡し當を得たるものならん。ただ浩の字を說明せず、「塔劫宮牆」の句を引きても浩劫の說明とはならず、余因つて考ふるに「浩」の字は「塔」の字の訛に非ざるか、但し杜の詩文他處にまた浩劫といひて塔劫といはず、暫く疑を存す。余は「浩劫」は「塔劫」なりとして此句を解くべし。仇注に「廣韻」を引きて、浩劫宮殿大階級也をあぐ。余「廣韻」を檢するに未だ之を見ず、錄して旁證となす。ともかく「浩劫」は佛教語の時間を意味する語としては解しがたし。【二】王　滕王。【三】平臺　梁の孝王の園に平臺あり、借りて玉臺に比す。【四】古遊　古昔遊賞の跡をいふ。【五】彩雲　現在見る所の五色の雲をいふ。【六】蕭史　秦の穆公の女弄玉の夫なり、前詩の「嬴女吹簫」の句解をみよ、以て滕王に比す。【七】駐　これは蕭史がとどまるをいふ。【八】文字　觀內滕王の題詠あるを以ていふ。【九】魯恭　漢代の魯の恭王、名は餘といへる人。建築を好み靈光殿を造る。以て滕王に比す。【一〇】留　これは文字がとどまりのこるをいふ。【一一】通羣帝　羣帝は羣仙、通とはここに往來するをいふ。【一二】乾坤　これは副詞として用ふ、「到」の字の主語に非ず、「天地間に於て」の義。【一三】十洲　仙境をいふ。東方朔撰と稱せらるる「十洲記」に四方巨海の中に祖洲・瀛洲・玄洲・炎洲・長洲・元洲・鳳麟洲・聚窟洲・流洲・生洲ありとの話あり。【一四】笙鶴　仙人王子喬が故事。「神仙傳」にいふ、王子喬は周の靈王の太子晉なり、好みて笙を吹き鳳鳴を作し伊洛の間に遊ぶ。道士浮丘公接へて嵩山に上る。三十餘年の後、白鶴に乘じて緱氏山の頂に駐まり、手を擧げて時人を謝して去る、と。【一五】北山　玉臺山をさす、閬州城の北にあるによる。

【題義】遺跡により神仙譚を敍べたり。

【詩意】平臺に古人の遊んだ跡を訪ねてみると、滕王の造つたまま塔級がのこつてゐる。五色の雲の浮んでゐるのをながめてはいまも蕭史(滕王)がとどまつてをられるかとおもひ、かきつけてある文字をみればそれは魯の恭王(滕王)がのこしておかれたものだと知る。建物が宏壯だから小門のところにさまざまの仙人たちが往來する。この場所は天地の廣がりに於て十洲といふ仙境までつづいてゐるかとおもはれる。人のいふ所によると、時時笙を吹く仙人をのせた鶴がこの山のうへの方をとほりすぎるといふことだ。いかにも靈境である。

奉寄(一)章十侍御 【原注】 時初罷梓州刺史・東川留後。將赴朝廷。

章十侍御に寄せ奉る 【原注】 時に初めて梓州の刺史・東川の留後を罷め、將に朝廷に赴かんとす。

(二)淮海維揚一(三)俊人
淮海維揚の一俊人、

(四)金章紫綬照(五)青春。
金章紫綬青春を照らす。

(六)指揮能事(七)迴天地。
指揮の能事天地を迴らす、

訓練強兵(八)動鬼神。
強兵を訓練するは鬼神を動かす。

(九)湘西(一〇)不得歸(一一)關羽。
湘西關羽に歸するを得ず、

(一二)河內猶宜(一三)借寇恂。
河內猶ほ宜しく寇恂を借るべし。

(一四)朝覲(一五)從容(一六)問(一七)幽仄。
朝覲するとき從容幽仄を問ふも、

勿云(一八)江漢有(一九)垂綸。
云ふ勿れ江漢に垂綸有りと。

【字解】【一】 章十侍御 章彝なり。巻十二の六六二頁「章留後侍御」の解をみよ。【二】 淮海維揚 江蘇省揚州府の地をいふ。章は揚州の人なり、出身の地をあぐ。【三】 俊人 材千人にすぐるるもの。【四】 金章紫綬 黃金の印、それを掛くる紫のひも、高官の服飾なり。【五】 青春 青は五行說に於ける春の色なり、これは季節をいへり。【六】 指揮能事 軍隊を指揮する能力。【七】 迴天地 天地をも回旋せしむる大なる力あり。【八】 動鬼神 めにみえぬかみをも感動せしむ。【九】 湘西 三國の時の荊州の地をいふ。ここは梓州に比したり。晉の陸機が辨亡論に、漢王(劉備)志報關羽之敗。圖收湘西之地。とみゆ、羽は嘗て董督荊州事の職に居りしことあり、吳の孫權、羽を襲ひて荊州を取る、備因つて之を收めんとせしことをいへるなり。【一〇】 不得歸 歸は其人の手に歸屬するをいふ。(仇注に歸朝せしむる義となせるは余之を採らず。)【一一】 關羽 劉備が將なり、章彝に比す。【一二】 河內 漢代の郡の名、ここは梓州に比したり。【一三】 借寇恂 寇恂は以て章彝に比す。後漢の光武帝、寇恂を以て河內の太守となす、後、潁川に移し、また汝南に移す。潁川に盜賊起るやその人民光武にむかひ復び寇君を借ること一年ならんと請ひたり、乃ち恂を留む、と。この事實によれば寇恂を借りしものは潁川にして河內にあらず、河內を言ふは作者の誤用なり、然らずんば事實に頓着せざる作者の活用なり。二者其の一に居る。清の陳廷敬は誤用について辯護して曰く、詩の意には謂ふ、潁川盜起る、固より宜しく之(寇恂)を借るべし、河內は盜無きも猶宜しく之を借るべし、誤用に非ざるなり、と。陳說は牽强といふべし。誤用・活用を必ず正さんとするは「北征」の詩の「不聞夏殷衰、中自誅褒妲、」の夏殷を改めて殷周となさんとする類にして拘泥にすぐ。【一四】 朝覲 臣、其の君にまみゆるに春には朝といひ、秋には覲といふ、いまは春なるも天子に謁見することをさしてひろく朝覲といへり。【一五】 從容 ゆつたり、天子の御樣子。【一六】 問 天子がおたづねになる。【一七】 幽仄 山すみ、ひつこんだかたよりの場所になる人、「宋書」恩倖論に、明揚幽側(側仄同じ)惟才是與の語あり。【一八】 江漢 涪江、西漢水(嘉陵江)の流域、ここは巴閬の地をさす。【一九】 垂綸 つり絲を垂るる者、自己をさす。

【題義】 梓州の刺史で、東川節度使の留守役で、また侍御史の職を帶びてゐる章彝が刺史・留後の職をやめて朝廷の方へ出かけるときに寄せた詩で、章の功績をはめ、別れを惜み、兼ねてその自分を推薦することの無い樣にたのんだ詩である。廣德二年春、閬州から梓州へ寄せた作であらう。

【詩意】 君は揚州から出た一のすぐれた人で、腰におびてゐる金印紫綬は春の世界を照らしてゐる。君が軍隊をさしづする能力の大なることは天地をも回旋せしむるに足り、君が强い兵を訓練する力は鬼神をさへも感動さすに足る。君がここから去つてしまへば湘西(梓州)は關羽(章)の手に歸すること(君の支配をうけること)ができぬし、河內(梓州)の地はどうしても寇恂の樣な人(章)を借りておく方

がよろしいのである。(それがさうできぬのはをしい。)君が參朝したとき天子がゆつたりと「だれか山野に退居してゐる賢人は無いか」とおたづねになつても、「江漢(巴閬の地)のあたりに釣絲を垂れてゐる男(作者)がをります」などというてはくださるな。

(一)南池

南池

(二)峥嶸(三)巴閬間。所向盡山谷。　峥嶸たり巴閬の間、向ふ所盡く山谷なり。

安知有蒼池。(四)萬頃浸(五)坤軸。』　安んぞ知らむ蒼池有りて、萬頃坤軸を浸す。」

(六)呀然閬城南。(七)枕帶(八)巴江(九)腹。　呀然たり閬城の南、枕帶す巴江の腹。

(一〇)菱荷入異縣。(一一)秔稻(一二)共(一三)比屋。　菱荷異縣に入る、秔稻比屋に共す。

(一四)皇天(一五)不無意。(一六)美利(一七)戒止足。　皇天意無きならず、美利止足を戒む。

(一八)高田(一九)失(二〇)西成。(二一)此物頗豐熟。　高田西成を失ふも、此の物頗る豐熟す。

(二二)清源多衆魚。遠岸富喬木。　清源衆魚多く、遠岸喬木富む。

(二三)獨嘆(二四)楓香林。春時好顏色。』　獨り嘆ず楓香の林、春時顏色好きを。」

(二五)南有漢(二六)王祠。(二七)終朝走(二八)(二九)巫祝。　南に漢王の祠有り、終朝巫祝走る。

歌舞(三〇)散靈衣。(三一)荒哉(三二)舊風俗。　歌舞靈衣散ず、荒なる哉舊風俗。

(三三)高皇亦明主。魂魄猶(三四)正直。　高皇も亦た明主、魂魄猶ほ正直なり。

不應(三五)空陂上。(三六)縹緲(三七)親酒肉。　應に空陂の上、縹緲酒肉に親しむべからず。

(三八)淫祀自古昔。非惟一川(三九)瀆。　淫祀古昔自りす、惟に一川瀆のみに非ず。

干戈浩茫茫。地僻(四〇)傷極目。』　干戈浩として茫茫たり、地僻にして極目傷む。」

平生(四一)江海興。遭亂身(四二)局促。　平生江海の興、亂に遭ひて身局促たり。

駐馬問(四三)漁舟。(四四)躊躇慰(四五)羈束。』　馬を駐めて漁舟を問ひ、躊躇羈束を慰む。」

【字解】【一】南池　彭道將の池をいふ。東西二里、南北約五里あり、閬州城南十里に在り。【二】峥嶸　けはしき貌。【三】巴閬　閬州はむかしの巴郡の地なるゆゑ之を巴閬といふ。【四】萬頃　ひろき面積をいふ。百畝を頃となす。【五】坤軸　地軸なり。【六】呀然　呀は口を張りたる貌、大に空しき貌。【七】枕帶　枕とあれば此の池の位置江よりは高處にありて江にのぞめるなるべし、帶とは江を帶にせるをいふ。【八】巴江　卽ち嘉陵江。【九】腹　江の彎曲處をいふ。【一〇】菱荷　ヒシ、ハスの實。【一一】秔稻　秔はねばりけ無きいね。【一二】共　「供」に同じ、供給すること。【一三】比屋　やなみ、竝びたる家どれにもの意。【一四】皇天　てん。【一五】不無意　意志なきにあらず。【一六】美利　「易」の文言に、乾、始能以美利利天下、とみゆ、美利とはうつくしき利益。【一七】戒止足　「老子」に、知足不辱、知止不殆、とみゆ。止足を戒むとは止足を知れよと戒むるをいふ、一處のみが

美利を受けぬ様にするをいふ。【一八】高田　高地の田。【一九】失　得る能はざるをいふ。【二〇】西成　秋のみのりをいふ、西とは五行說にて秋の方位なり、「書」の堯典に平秩西成。とみゆ。【二一】此物　菱荷秔稻をさす。【二二】淸源　池水をいふ。【二三】南　池の南。【二四】嘆　嘆美する。【二五】楓香林　楓林をいふ、楓に脂ありて香し、よつて楓香の林といふ。【二六】漢王祠　漢の高祖(劉邦)のこと、項羽、邦を立てて漢中王となす、故に之を漢王といふ、漢中は閬の東北鄰なる關係により此地に王の祠あるなるべし。【二七】終朝　あさいつぱい。【二八】走　奔走する。【二九】巫祝　みこ、はふり(祠官)。【三〇】散靈衣　靈衣は神靈ののりうつりたる巫の舞衣なり。散とは舞ふとき衣のはらはらとみだるるをいふ。【三一】荒　迷亂を荒と曰ふ。【三二】舊風俗　ありきたりのならはし。【三三】高皇　漢の高祖。【三四】正直　「左傳」に聰明正直、之謂神とみゆ。【三五】空陂　人の居らぬつつみ。【三六】縹緲　魂魄の有るか無きかのさまをさしていふ。【三七】親　近づき用ふるをいふ。【三八】淫祀　「禮記」曲禮に非其所祭而祭之。名曰淫祀とみゆ。祭るべからざるものをまつるが淫祀(みだらなまつり)なり。【三九】川瀆　瀆は溝をいふ、ここに川瀆といへるも作者の原意は蓋し此の池をさすなり。【四〇】傷極目　極目傷に同じ、見るかぎり心いたまし。【四一】江海興　江海に遊ばんとの興、揚子江をくだりて吳地の方にゆかんとのこころ。【四二】局促　せぐくまる。【四三】問漁舟　蓋し釣絲を垂れて悶を遣らんと欲するなり。【四四】躊躇　ためらふ、ここにてぐづつくをいふ。【四五】羈束　つながれ、しばらるる、不自由なる旅況をいふ。

【題義】閬州城南の地にあそびその景物を敍し、且つ旅情をうつたへたり。

【詩意】けはしき地勢の巴閬ではうち向ふ所ことごとく山や谷ばかりだが、意外にもあをあをとした池があつてそれが萬頃の廣さを以て地軸をひたしてゐる。』その池は閬州の城の南に於てあんぐりと口をあけ、巴江の中腹に於て高處により且江を帶びてをる。ここで產する菱や荷の實は他の縣へもはいりこむし、ここでできる稻や秔は家竝に供給せられるのである。天といふものはさすがに意志が無いわけではなく、一地に無制限に美利を與へぬ、美利に對して止まる所、足る所を知れと戒めてをる。それで高地の田が秋の成熟を得なかつたときにはここの地方では前述の產物がすこぶるゆたかに熟するのである。またこの池のきよきみなもとにはおほくの魚がをり、遠き岸には喬木がたくさんはえてをる。そのほか自分だけについていへば春のころ楓の林がいい葉色をあらはすところも感心すべきながめである。』池の南には漢王の祠があり、朝ぢう巫や祝が奔走してをり、歌ひつ舞ひつして衣のすそをはらはらさせてをる、在來の風俗はまことに荒んだものといふべきである。漢の高祖ともいはるる人は聰明な君主であり、死して魂魄となつてもその魂魄は正直であるはずで、その正直な魂魄がこのさびしいつつみのほとりでふはふはとして酒や肉にちかづいてゐるはずがない。みだらなおまつりはむかしから有るのであつてここの水際ばかりではないが、いま亂世でどこもひろく武器を動かしてゐるときだから、ここの樣なゐなかでは殊に見るものみな自分の心をいたましめるのである。』元來自分はふだんから江海に遊びたい念をもつてゐるのだが、世の亂れにあうてからだがせぐくまつてのびずにゐるのである。仕方がないから水邊に馬をとめ漁舟のあるやなしやをたづね、かかるところでぐづつきながら不自由なたびごころを慰めようとおもふのである。』

將赴荊南(一)寄別李劍州(二)

將に荊南に赴かむとして李劍州に寄せ別る、

(三)使君高義驅(四)今古。　使君の高義今古を驅る、
(五)寥落(六)三年(七)坐劍州。　寥落三年劍州に坐す。
但見(八)文翁能化俗。　但だ見る文翁の能く俗を化するを、
焉知(九)李廣未封(一〇)侯。　焉んぞ知らむ李廣の未だ侯に封せられざるを。
路經(一一)灔澦(一二)雙蓬鬢。　路灔澦を經雙蓬鬢、
(一三)天入滄浪一釣舟。　天滄浪に入る一釣舟。
(一四)戎馬相逢更何日。　戎馬相逢ふ更に何の日ぞ、
春風迴首仲宣(一五)樓。　春風首を迴らさむ仲宣が樓。

【字解】【一】荊南　湖北省荊州府江陵縣。【二】李劍州　劍州の刺史李某、劍州は閬州の西北にあたる、綿州梓潼縣これなり。【三】使君　李をさす、使君は太守の敬稱なれども唐人は刺史をさしてしかいふ。【四】驅今古　仇注に今古並驅の義とす、然らば不倫の句法といふべし、余は、今人古人を驅遂する義かと考ふ、儔すくなきをいふ。【五】寥落　さびしき貌。【六】三年　蓋し刺史の任期なり。【七】坐　じつとしてなる。【八】文翁　漢の時、文翁蜀郡の守となり、成都に學宮を修め起し吏民大に化す。【九】李廣　漢の武帝の時の武將、功ありて用ひられず、廣曰く、豈に吾が相、侯なるべからざるか、と。【一〇】封侯　侯の爵にとりたてられる。【一一】灔澦　堆の名、瞿唐峽口にあり。虁州より荊州へ赴く途中に經る所なり。【一二】雙蓬鬢　左右のもつれたびんの毛。【一三】天入滄浪　滄浪の天に入るをいふ、滄浪は綠水をいふ。「禹貢」の漢水東流して滄浪の水となるの「滄浪水」なりと說くは當らず、荊州へゆくに滄浪水は關係なし。【一四】戎馬　兵亂の時をいふ。【一五】仲宣樓　魏の王粲、字は仲宣、荊州の劉表に依り、當陽縣の城樓にのぼり懷鄕の念をのべて登樓賦をつくる。荊州の州治は今の江陵縣にして當陽縣にはあらざれども、當陽は附近の地なるゆゑ、其地の名蹟をあげ用ひたり。

【題義】荊南へ赴かうとして劍州刺史李某に寄せ別れを告げた詩。作者は寶應元年より廣德二年三月までの間に綿・梓・閬・三州に來往し、其の梓・閬にあるや、しばしば船にのりて峽を出でんとせり。此篇も其の意をのべたり。廣德二年春の作。下の「別馬巴州」詩によりて推せば、此篇も梓州にての作ならんか。

【詩意】あなたの義の高い行は古今人をおひのけるほどであるが三年のあひださびしく劍州にじつとしてをられる。われわれの見る所ではあなたの政治はむかし文翁が教育を以て蜀の風俗を感化したと同じであるが、李廣にも比すべきあなたが意外にもいまだに侯位に封せられずにゐるのである。自分はこれから左右のびんの毛のもつれた老軀をもつて灔澦堆の路をとほり、一扁の釣舟に乘じて滄浪の天に入らうとする。兵亂の際だからまたおあひするのはいつのことであるやら、定めし自分は荊州についたのち仲宣登樓の遺跡で春風に對してあなたの方をふりむいてながめることでござらう。

奉寄別馬(一)巴州

馬巴州に寄せ別れ奉る

【原注】時甫除(二)京兆功曹。在(三)東川。

【原注】時に甫京兆の功曹に除せられ、東川に在り。

勳業終歸(四)馬伏波。
(五)功曹非復漢(六)蕭何。
扁舟繫(七)纜沙邊久。
(八)南國浮雲水上多。
獨把漁竿終遠去。
難隨鳥翼一相過。
知君未愛(九)春湖色。
(一〇)興在(一一)驪駒(一二)白玉珂。

勳業終に歸す馬伏波、
功曹復た漢の蕭何に非ず。
扁舟纜を繫いで沙邊に久しく、
南國浮雲水上に多し。
獨り漁竿を把つて終に遠く去る、
鳥翼に隨つて一たび相過り難し。
知る君が未だ春湖の色を愛せざるを、
興は在り驪駒白玉珂。

【字解】【一】馬巴州　巴州の刺史馬某。巴州は保寧府巴州。【二】京兆功曹　京兆府功曹參軍の官、當時作者はこの官に就かざりき。本傳に之を上元二年のこととせるは誤、本詩によりてその廣德二年に在ることを知るべし。【三】東川　東川節度使の治所、卽ち梓州をいふ、梓州は潼川府三臺縣治。【四】馬伏波　後漢の伏波將軍馬援、同姓の故事を用ふ。【五】功曹　京兆功曹をさす。【六】漢蕭何　蕭何は漢の高祖の謀臣。蕭何はじめ沛の主吏となる、主吏は功曹なり、後ち高祖を助け天下を一統す。【七】繫纜　ともづなをつなぐ、舟をとめておくこと。【八】南國　荊南地方をさす。【九】春湖　湖は洞庭湖、作者の將に泛ばんと期する所。【一〇】興　興趣、馬巴州のもつ所。【一一】驪駒　くろごま、馬巴州の乘る所。【一二】白玉珂　白玉にて作りし馬飾、馬あるくときさらさら鳴るものなり、これ仕官せるもののさまなり。

【題義】作者梓州に在り京兆功曹に任ぜられて赴任せず、荊南に赴かんとして巴州刺史馬某に寄せたる詩。廣德二年春梓州にての作。

【詩意】現世での勳業は伏波將軍馬援の樣なあなたに歸すべきである。自分は功曹に任ぜられたが功曹は功曹でも漢の天下を平定した蕭何とは似てもつかぬものである。自分は江を下らうとおもうてながらく扁舟のともづなを沙邊につないでゐるが、荊南地方の水上にはいたづらに浮雲が多く橫はるのをみる。いま思ひきつて獨り釣竿をとつて遠く去つてしまはうとする。鳥の翼についてあなたの處へよぎれぬのが遺憾である。自分はこれから春の湖水の景色を賞愛しようとおもふが、あなたはまださうはできぬ。それはあなたは驪駒にのつて白玉珂を鳴らすところに興味をもつてをらるるからである。

奉待(一)嚴大夫

(二)殊方又喜(三)故人來。
(四)重鎭還須濟世才。
常怪(五)偏裨(六)終日待。
不知(七)旌節隔(八)年回。
欲辭(九)巴(一〇)徼啼(一一)鶯合。
遠下(一二)荊門去(一三)鷁催。

嚴大夫を待ち奉る

殊方又た喜ぶ故人の來るを、
重鎭還た須つ濟世の才。
常に怪む偏裨終日待ちしことを、
知らず旌節隔年に回るを。
巴徼を辭せむと欲すれば啼鶯合す、
遠く荊門に下らむとして去鷁催す。

【字解】【一】嚴大夫　劍南節度使嚴武なり。節度使を稱して大夫といへり。寶應元年、武、東川節度使となり、更に西川節度使に任ぜられて東川を攝す、六月召されて入朝す、作者「奉送嚴公入朝十韻」(卷十一の五一四頁)あり、同年の秋に至りて「九日奉寄嚴大夫」(卷十一の五四八頁)あり、今年廣德二年正月八日、

身老時危思會面。(一四)　身老い時危くして會面を思ふ、
一生(一五)襟抱(一六)向誰開。(一七)　一生襟抱誰に向つてか開かむ。

武、黄門侍郎を以て成都尹に拜し、劍南節度使に充てらる。【三】殊方　他方、異方、都よりして蜀地をさす。
【四】故人　舊知の人、嚴武をさす。【五】重鎭　重要なるしづめの場所。【五】偏裨　部下の將領。【六】終日待　あさから晩まで來れかしとまつ。【七】旌節　ふさふさとした羽をつけたはたじるし、節度使の象徵。【八】隔年回　寶應元年より今年まであしかけ三年、中一年のへだてなり。【九】鮭　いとまごひして去る。【一〇】巴徼　巴地の國境。【一一】啼鶯合　合とは四方にとりまくをいふ、鶯の鳴くは蓋し二月ならん。【一二】下荊門　荊門は山の名、荊州にあり、荊門に下るは卽ち荊州に下るをいふ。【一三】去鷁催　鷁は水鳥の名、船の首にこの鳥をゑがく、よりて船首を鷁首といふ、去鷁は立ち去らんとする船の意、催はせまりきたる義。【一四】會面　武と面會すること。【一五】一生　生涯。【一六】襟抱　むねのうち。【一七】向誰開　だれに向つて開かうかとは、あなたより外には開くべき人なしとの意。

【題義】廣德二年の春(二月ならん)作者嚴武が劍南節度使となりて來任すときき之を待つこころをのべて寄せたる詩。梓州に於ての作か閬州に於ての作かは明かならず。

【詩意】この異方で舊友が赴任してくるときいて又うれしくおもふ。蜀の樣な重鎭にはやはり時世を濟ふだけの才能をもつた人が必要なのだ。自分はなんで部下の舊將領があなたを朝から晩まで待つてゐたかを怪んでゐた、(あなたにはそれだけの德があるのだ。)それに一年とんであなたの旗じるしがふたたびこちらへもどらるるとは意外にうれしいことだ。自分は鶯が四方に啼きこめてゐるいま巴地を立ち去らうとしたのだ。遠く荊州の方へ下らうと出船の用意までしたのだ。(それはもはややめた。)身は老境にのぞみ、時世は危難が多いので、ただあなたに面會したいとばかりおもふ、あなたでなくては自分は生涯自分のむねのうちをだれに向つてぶちまけようか。

渡江(一)

江を渡る

春江不可渡。二月已風濤。　春江渡る可からず、二月已に風濤なり。
舟楫(二)攲斜疾。(三)魚龍(四)偃臥(五)高。(六)　舟楫攲斜疾く、魚龍偃臥高し。
渚花張(七)素錦。汀草亂(八)青袍。　渚花素錦張り、汀草青袍亂る。
戲問垂綸客。(九)悠悠(一〇)見汝曹。(一一)　戲れに問ふ垂綸の客に、悠悠汝が曹を見る。

【字解】【一】江　此詩は下の閬州より發せし詩とあはせ考ふるに閬州を出發せんとして先づ江を渡りしときの作ならん。然らば江は嘉陵江なるべし。【二】攲斜　かたむく、ななめ。【三】疾　とし、はやし。【四】魚龍　水中にすむもの。【五】偃臥　ふし、ふす。【六】高　濤高き故に臥も亦たかし。【七】張素錦　白にしきを張りたるがごとし。【八】亂青袍　青袍のみだるるが如し、古詩に靑袍似春草の句あり。【九】垂綸客　釣糸をたるる人。【一〇】悠悠　氣長の樣子。【一一】汝曹　なんぢら。

【題義】閬州を發せんとし嘉陵江をわたりしときの詩。廣德二年二月の作。

【詩意】春の江は渡ることができぬ、二月にはや風濤が起つてゐる。舟や楫をあやつれば橫むきにな

りながらはやくはしるし、水にすんでゐる魚龍の寢ばしよも高くういてゐるかとおもふ。渚の花は白にしきを張つた樣にうつくしく、汀の草は青色の袍のみだるるかとあやしまる。(いいけしきだ。)自分は戯れに釣を垂れてゐる人に向つていふが、このとき氣長にみえるのはおまへたちである、と。(作著蓋し自己もまた成都に到着せば閒適の生活を爲し得んとの希望を抱きしならん。舊說に自己の釣客の如くなるを得ざるを歎ずといへるは余之を取らず。「戯」の字を見て舊說の然るべからざるを知るべし。)

自閬州(一)領妻子(二)卻赴蜀(三)山行(四)三首

閬州自り妻子を領し卻つて蜀に赴くとき山行す　三首

(五)汩汩避群盜、(六)悠悠經十年(七)。　汩汩として群盜を避く、悠悠十年を經。

不成向南國(八)、復作遊西川(九)。　南國に向ふことを成さず、復た西川に遊ぶことを作す。

(一〇)物役水虛照(一一)、魂傷山寂然(一二)。　物に役せられては水虛しく照らし、魂傷みては山寂然たり。

(一三)我生無倚著(一四)、盡室(一五)畏途邊(一六)。　我生倚著無し、盡室畏途の邊。

【字解】【一】領　ひきゐる。【二】卻　はじめは閬州若くは梓州より江を下りて荆州へ赴かんとせしものなるにそれとは反對にといふこと。【三】蜀　成都をさしていふ。【四】山行　やまぢをゆく。【五】汩汩　水の疾く流るる貌。【六】悠悠　はるかなる貌。【七】十年　天寶十四年、安祿山の亂起りしより今年廣德二年まで十年なり。【八】南國　荆州地方をさす。【九】西川　蜀は一時東川・西川の二部に分ちたり、西川節度使は成都に治す、因つてこの西川は成都をさす。【一〇】物役　我が一身が外物(主として衣食の計をさす)に使役せらるること。【一一】水虛照　虛とは無效なること、「いたづらに」の意なり。山の水は淸澄にしてよく景物を照映す、之を玩賞しうるならば水に照映の效ありといふべし、之を玩賞し得ざるならば水の照映するは無效の照映なりといふべし。【一二】山寂然　この寂然も上の虛照の類なり、山の風景吾が心を慰むるに足らば山も寂寥ならずといふべし、今慰むるに足るものなければさびしくおぼゆるのみ。【一三】我生　自己の生涯。【一四】倚著　倚賴附着の意。【一五】盡室　一家族全體。【一六】畏途　おそろしき旅途、盜賊險阻あるは畏途なり。

【題義】閬州から妻子をひきゐて豫定とはうつてかはつて蜀(成都)の方へ赴かうとして山路をとほつたときの詩。廣德二年二月の作。

【詩意】自分は流れの奔るがごとく多くの盜賊を避けてあるいてゐるが、それ以來はるかに十年の月日を經てをる。南方の國荆州の方へゆくつもりなのがそれを果さずしてふたたび西川(成都)に遊ぶのである。途、山水を跋涉するのであるが、外物に使役されてゐる身にとつては澄める水もいたづらに物象をうつし、魂の傷んでゐる身にとつてはおもしろかるべき山もさびしいとだけの感じである。吾が生涯はまことにたより無いものであつて、いま家族をこぞつて畏るべき旅途にあるのである。

〔二〕

(一)長林偃(二)風色、迴(三)復意(四)猶迷。　長林風に偃す色あり、迴復意猶ほ迷ふ。

衫（五）裛（六）翠微潤。馬銜青草嘶。
（七）棧懸斜避石。橋斷（八）卻尋溪。
何日干戈盡。飄飄媿老妻。

衫翠微に裛はれて潤ひ、馬青草を銜みて嘶く。
棧懸りて斜に石を避け、橋斷えて卻つて溪を尋ぬ。
何の日か干戈盡きむ、飄飄老妻に媿づ。

【字解】【一】長林　とほくまでつづいた林。【二】偃風色　風に吹かれて臥すごときさまみゆ。【三】迴復　回轉往復の義、溪流山崖にそうてゆくときは同じやうな路を紆回し、またたちもどる様のことあり。【四】意猶迷　迷とは蓋し天候の良否についてまよふなり。【五】裛　裛は「纏ふ」なり。【六】翠微　山氣のかすかにみどりなるをいふ。【七】棧　かけはし。【八】卻尋溪　あともどりして溪路をたづぬる。

【題義】此篇は「妻を領する」ことをのぶ。

【詩意】遠方までつづいた林がさつと風に吹かれてうちふすやにみえた。これをみて自分はうねりつもどりつしながらけふの天候はどうかと迷ひつづける。衫は嵐氣につつまれてしめり、馬は青草をくはへながらいなないてゐる。ぶらさがつてゐる様な危いかけはしがあるので身をかはして斜に石をよけたり、橋がとぎれてゐるのでたちもどつて溪ぞひの路をたづねたりする。いつになつたら兵亂がなくなるのやら、かくさまようてゐることは老妻に對して自分のはづるところである。

〔二〕

〔三〕

（一）行色遞隱見。（二）人煙時有無。
（三）僕夫（四）穿竹語。（五）稚子入雲呼。
轉石驚（六）魑魅。（七）抨弓落（八）狖（九）鼯。
眞供一笑樂。（一〇）似欲慰（一一）窮途。

行色遞に隱見す、人煙時に有無。
僕夫竹を穿ちて語り、稚子雲に入りて呼ぶ。
石を轉じて魑魅を驚かし、弓を抨きて狖鼯を落す。
眞に一笑の樂に供す、窮途を慰めむと欲するに似たり。

【字解】【一】行色　進行しつつあるありさま。【二】人煙　人家のけむり。【三】僕夫　めしつかひの男。【四】穿竹　竹林のなかをとほるをいふ。【五】稚子　をさなご。【六】魑魅　物の精怪、もののけ。【七】抨　弾くなり、はじきてつる糸をひびかすなり。【八】狖　そり鼻にて尾の長きさる。【九】鼯　むささび。【一〇】似欲　単に「欲す」といはずして「似」の字を加へたるは自己をいはずして稚子輩のさまをいへるなり。【一一】窮途　ゆきづまりのみち。

【題義】此篇は「子を領する」をのぶ。

【詩意】だんだんゆくと、みなのもののたびすがたがたがひにみえがくれする、人家の煙は有つたり無かつたり。竹林をとほりながらしもべが話しをしたり、雲のなかにはいりながらをさなごが大聲でさけんだりする。また石をころがして物の怪を驚かしてみたり、弓弦をはじいて狖やむささびを高い處から落ちる様にしたりする。これらの事はまことに一笑するだけの樂として供せらるる、彼等はこんなことでゆきつまつた旅途の憂さを慰めようとかんがへてゐるらしいのである。

別房太尉墓（一）

房太尉の墓に別る

他郷復行役（二）。駐馬別孤墳。　他郷復た行役す、馬を駐めて孤墳に別る。
近淚（四）無乾土（五）。低空有斷雲。　淚に近きは乾土無く、空に低れて斷雲有り。
對碁（六）陪謝傅。把劍（七）覓徐君。　對碁謝傅に陪しき、劍を把りて徐君を覓む。
惟見林花落。鶯啼送客（八）聞。　惟だ見る林花の落つるを、鶯啼客を送りて聞かしむ。

【字解】【一】房太尉　宰相房琯なり、太尉はその贈官なり、琯、字は次律、玄宗蜀に幸せしとき相に拜せらる。陳濤斜の敗（卷四の三六五頁「悲陳陶」の題義、竝に卷五の四八六頁「北征」の題義を參照せよ。）によつて肅宗は琯を貶して邠州刺史となす、上元元年禮部尙書に改められ、ついで出されて晉州刺史とせられ、八月漢州刺史に改めらる、寶應二年四月特進・刑部尙書に拜せらる。路に在りて疾に遇ひ、廣德元年八月（寶應二年七月廣德と改元す。）閬州の僧舍に卒す。年六十七、太尉を贈らる。【二】他鄉　閬州をさす。【三】行役　成都にゆかんとするをいふ。【四】近淚　自己の淚のおつる附近の地面をいふ。【五】乾土　かわけるつち。【六】對碁陪謝傅　謝傅は晉の謝安、卒して太傅を贈られしゆゑ謝傅といふ、淝水の戰に謝玄等秦の苻堅が軍を破る、捷報至る。時に安は客と對して碁を圍みなりしが面に喜色をあらはさざりしといふ。謝安を以て房琯に比したり、作者琯と碁を圍みしことありしと認む。或は曰く、房琯は董庭蘭が琴をききしによりて物議を招きしを以て碁を借りてそれとなく琴のことを寓せしなり、と。嚴案ずるに作者豈に此の迂遠の言ひ方をなさんや、或說の如くんば「陪」の字を如何に解するか、これ分明に作者自己が陪するなり。【七】把劍覓徐君　吳の季札が故事。季札晉に聘せんとして徐の國を過ぐ、徐の君札が帶びたる劍を欲す、札之を知る、晉より還れば徐君已に歿せり、遂に劍を解きて徐君の冢樹に繫けて去る。自己を季札に、琯を徐君に比したり。【八】客　自己をさす、成都にゆかんとする旅客なればなり。

【題義】廣德二年春、作者閬州より成都に赴かんとして房琯が墓に別るる情をのべたる詩。作者文集中に廣德元年九月に作りし「祭故相國淸河房公文」あり。併せ看るべし。

【詩意】ここはすでに他鄉であるが、それに自分はここからふたたびたびにでかけるのである。因つて馬をとどめて房太尉のさびしき墳にお別れをする。自分の悲みはどんなであるか、苟も自分の淚のおつるところに近い場所には乾いた土といふものは無く、空ひくくぶらさがつてちぎれ雲がみえてゐるのである。自分は謝太傅ともいふべき房太尉の生前に陪席して碁のおあひ手をしたことがある。いま太尉を慕ふこころもちは吳の季札が徐國の君をもとめてその墓に自己の劍をとつてかけようとしてゐる時のそれの樣なものである。しかし太尉はゐない、太尉は語らない、ただただ林の花がはらはらと落ちちり、自分を送るために鶯が啼きごゑを聞かしてくれるのみである。

將赴成都草堂途中有作。先寄嚴鄭公（二）。五首

將に成都の草堂に赴かむとして途中作有り、先づ嚴鄭公に寄す　五首

得歸（三）茅屋赴成都。　茅屋に歸り成都に赴くことを得るは、

【字解】【一】成都草堂　浣花溪

直(四)爲文(五)翁再(六)剖符。　直ちに文翁の再び符を剖くが爲なり。

但使閭(七)閻還(八)揖讓。　但だ閭閻をして還た揖讓せしめば、

敢論松(九)竹久荒(一〇)蕪。　敢て論せむや松竹の久しく荒蕪するを。

魚知丙(一一)穴由來美(一二)。　魚は知る丙穴由來美なるを、

酒憶郫(一三)筒不(一四)用酤。　酒は憶ふ郫筒酤ふを用ひざるを。

五(一五)馬舊曾諳(一六)小徑。　五馬舊と曾て小徑を諳んず、

幾(一七)回書札待潛夫。　幾回か書札潛夫を待ちしぞ。

の草堂。【二】嚴鄭公　嚴武なり、武は寶應元年に成都より召還せられ京兆尹となり、二年に二聖山陵橋道使となり鄭國公に封ぜらる、それより黄門侍郎に遷り、廣德二年に成都尹・劍南節度使となる。【三】歸茅屋　赴成都　成都に赴きて茅屋に歸るをいふ。茅屋は卽ち草堂をいふ。【四】直爲　特爲におなじ。【五】文翁　漢の時蜀に敎育を施せし人、前の「寄別李劍州」詩をみよ。以て嚴武に比す。【六】再剖符　再とは嚴武は今度にて二回めの來任なるをいふ、剖符とは元來太守の任をいふ、今成都尹の職にあてていへり。漢の文帝の時、郡守に銅虎符・竹使符を與ふ、各〻第一より第五まであり、「符」は信なり、之を兩分し、左を京師に留め、右を郡守にわたす。銅虎符は中央にて兵を發せんとするとき使を郡に遣はし符を合はせ、符合へば郡は使の命をきく。竹使符の用亦おなじ。銅符の長さは六寸、竹符は五寸。二つに分つを以て「符を剖く」といふ、卽ち本邦の割符なり。【七】閭閻　閭は里の門なり、閻は里中の門なり、成都府の村里をさす。【八】還揖讓　揖は立ちて會釋する貌、讓はへりくだりてゆづりあふなり、村里の敎化に浴せるさまをいふ。【九】松竹　草堂に植ゑたるそれなり。【一〇】荒蕪　あれる。【一一】丙穴　丙穴なるものは諸處に之あり、魚の居る穴なり、これは邛州の丙穴をいふならん、邛州は成都の西南百五十里にあり。【一二】美　うまきこと。【一三】郫筒　郫は縣の名、成都の西五十里にあり、其地大竹を產し、竹筒を以て美酒を盛る、之を郫筒といふ。【一四】不用酤　酤は「買ふ」なり、買ふを用ひずとは嚴武之を供するが故なり。【一五】五馬　太守の稱、漢の制太守は駟馬を通例とすれども中央の朝臣が出でて太守たるときは一馬を增して五馬を用ひしむ、これは成都尹たる嚴武をさす。【一六】諳小徑　諳はそらでおぼえてゐること、小徑とは草堂にかよふこみちをいふ、卷十一に嚴武の草堂を訪ひしことをよめる詩あり。【一七】幾回書札待潛夫　書札は「てがみ」、嚴武の作者に贈りしもの。ただそれは何時のものをさすか。仇氏は武が今回入蜀するにつき豫め作者に寄せしものととけり。余は此句は第七句よりの連續にて武が前年在蜀中の事をさすものと考ふ。仇氏によれば上句は往時をいひ、而して此句「今回へ」のうつりゆき不明なるに非ずや。潛夫は作者自己を比す、後漢の王符、隱居して「潛夫論」を著はす。結句往時の待をいふも今次の待は言はずしておのづから明かなり。

【題意】成都の草堂へ赴かんとせしとき途中でこの詩ができたから豫め之を嚴鄭公に寄せた。此篇は成都に赴くに至りし次第をのべたり。廣德二年春の作。

【詩意】自分がこのたび成都に赴き茅屋にかへることのできるのは、漢の文翁に比すべきあなたがふたたびここへ來任せらるるがためにほかならぬ。あなたの來任のため此の地方に揖讓の美風が行はれるやうになるならば、吾が草堂の松や竹がながながあれはてゐたことなどはとりたてていふに及ばぬことで、どうでもよいのだ。自分は成都へかへれば丙穴の魚がもとからうまいものだといふことを知つてをるし、また郫筒の酒もわざわざ買はずとものめるなどとかんがへる。あなたはふるくから吾が草堂の小徑はよくごぞんじである。前年王符の樣なこのわたくしを待つてゐるとてなんべん手紙をくだされたであらうか。じつになつかしくおもはるるのである。

〔二〕

處處清江帶白蘋。
故園猶得見殘春。
雪山斥候無兵馬。
錦里逢迎有主人。
休怪兒童延俗客。
不教鵝鴨惱比鄰。
習池未覺風流盡。
況復荊州賞更新。

〔二〕

處處清江白蘋を帶ぶ、
故園猶ほ殘春を見ることを得。
雪山の斥候兵馬無く、
錦里の逢迎主人有り。
怪むを休めよ兒童の俗客を延くを、
鵝鴨をして比鄰を惱まさしめず。
習池未だ覺えず風流の盡くるを、
況んや復た荊州賞更に新なるをや。

【字解】【一】清江　錦江をさす。【二】帶　うねりながら有つてゐるをいふ。【三】白蘋　莽の大なるものにして、田字草又は四葉菜といふもの是なりと。【四】故園　草堂の所在地成都をさしてかくいへり。【五】殘春　末がれの春げしき。【六】雪山　大雪山、西山。【七】斥候　吐蕃の侵入に對する「ものみ」なり、斥は度なり、候は覘なり、或は曰く、斥は廣なりと。【八】無兵馬　寇亂なきをいふ、嚴武の力によるなり。【九】錦里　錦江の里、浣花村。【一〇】逢迎　作者が嚴武を迎へること、人を迎ふれば必ず之と逢ひ見る、逢は迎に屬したる字なり。【一一】主人　舊解多く主人を嚴武とみる、これ地主（地かたのあるじ役）の義としてみるなり。或は鄰里の人とみるもあり。余は草堂の主人卽ち作者自己をさすものとみる。他人のこととしては下との連絡あしし。【一二】休怪　武に對する語なり。【一三】兒童　自家のこどもら。【一四】鵝鴨　がてう、あひる、自家畜ふ所の水禽。【一五】比鄰　近所の人家をいふ、五家を比となす、又五家を鄰となす。【一六】習池　習家池なり、荊州にあり、晉の山簡、永嘉三年に襄陽に鎭す、常に習氏の池上に飮む、之を名けて高陽池と曰ふと。作者以て草堂に比したり。【一七】荊州　山簡を稱す、簡は征南將軍として荊・湘・交・廣・四州を都督す、因つて之を荊州と稱せり、ここは以て嚴武に比す。【一八】賞　習池のさまを賞美するをいふ。【一九】更新　今回は二度めのことゆゑに「あらた」といふ。

【題義】此篇は草堂の平和と嚴武の來遊を豫想することとをのべたり。

【詩意】淸らかな水をたたへた錦江は處處に白蘋をうかせてゐる。故鄕（成都）にもどればまだ春のなごりのけしきを見ることができる。あなたが來任さるれば雪山方面へ物見の兵はだしてはあつても兵馬のさわぎはなく、わたくしがかへれば錦江の村でお迎へをする主人があるといふものだ。時としてうちの子供らが俗惡なお客さんをひきいれることがあらうとも不思議におもうてはくださるな。鵝鳥や家鴨でこれまで近所迷惑をかけたことはたびたびだつたがこれからはそんなことはさせませぬ。あなたといふものが居らるれば習池ともいふべきわが草堂に於て風流の遊びが盡きたとはおもはれざるのみならず、あなたは吾が草堂に對して更にあたらしく賞美を試みられるとおもふから、風流が依然繼續することと信ずる。

〔三〕

竹寒沙碧浣花溪。
橘刺藤梢咫尺迷。

〔三〕

竹寒く沙碧なり浣花溪、
橘刺藤梢咫尺迷ふ。

【字解】【一】竹寒沙碧　竹の寒色水に映ずるがゆゑに沙の色みどりに見ゆ。【三】浣花溪　草堂の東に

(五)過客(六)徑須(七)愁出入、　過客徑ちに須らく出入を愁ふるなるべし、
(八)居人不自解東西。　居人も自ら東西を解せず。
(九)書籤(一〇)藥裹(一一)封蛛網、　書籤藥裹蛛網封す、
(一二)野店(一三)山橋(一四)送馬蹄。　野店山橋馬蹄を送る。
(一五)(一六)(一七)肯藉荒庭春草色、　肯て荒庭春草の色を藉きて、
先(一八)拚一飲(一九)醉如泥。　先づ一飲醉ひて泥の如くなるを拚せむや。

流る。【三】橘刺　みかんの木のとげ。【四】咫尺迷　八寸一尺の近き距離さへ暗くてまよふ。【五】過客　草堂をおとづるる人。【六】徑　直ちに。【七】愁出入　叢のなかに入るゆゑに出入につけて愁ふといふ。【八】居人　草堂に住居してゐるもの、自家をさす。【九】書籤　書物の名をしるした「ふだ」。【一〇】藥裹　くすりを包んだもの、蓋し藥袋ならん。【一一】封蛛網　くものあみが封じとざす。【一二】野店　野中のやすみ場所。【一三】山橋　山ぞひの橋。【一四】送馬蹄　過客の馬蹄を送り來たすこと、暗に嚴武の來訪の場合をいふ。【一五】肯　此字は二句を支配す。嚴武に對して問ひかくるなり。【一六】藉　草をしきものにしく。【一七】荒庭　草堂の「にはし」。【一八】拚　「拚」の俗字なり、或は「判」に作る、同義なり、楚の地方語にて物を揮ひ棄つることを拚といふ、唐時の俗語としては「萬事を放擲してその事をなすこと」を意味す。杜詩に屢〻之を用ふ。【一九】醉如泥　泥を蟲の名ととく說あり、曰く、南海に蟲あり、骨なし、名けて泥といふ、水中に在れば活き、水を失へば醉うて一塊の泥の如しと。或は曰く此說しかるべからず、泥とは人の醉後の狀、頽倒爛泥の如くなるをいふのみと。今後說に從ふ。

【題義】此篇は草堂の荒れたるさまをいひ、その荒れ宿に飲みにこらるる意はなきやとたづねたり。

【詩意】竹の林寒色をたたへて水際の沙まで碧にみゆる浣花溪。そのそばには橘の刺、藤つるのこずゑ、咫尺の近間さへ暗さにまよふ。こんなやどではくるお客さんも出入について心配さるることだらう、なかに住んでゐるものでさへじぶんで東西がわからぬくらゐなのである。ここでは書物にぶらさげた「ふだ」も藥をいれた袋も蜘蛛の巣が張つてをる、が、ここをおとづれるならば野店・山橋の自然の風景美が馬蹄を送つてくれるのである。どうです、あなたはこの荒れた庭の靑靑とした春のわか草を藉いて、何よりも萬事をうつちやつてよひどれになるまでお飲みにならうといふおぼしめしはありませぬか。

〔四〕

(一)常苦(二)沙崩(三)損藥欄、　常に苦む沙崩れて藥欄を損ずるに、
(四)也(五)從(六)江檻落風湍。　也た從す江檻に風湍の落つるに。
(七)新松恨不高千尺、　新松高きこと千尺ならざるを恨む、
惡竹應須斬萬(八)竿。　惡竹應に須らく萬竿を斬るべし。
(九)生理祇(一〇)憑黃(一一)閣老、　生理祇だ憑る黃閣の老、
衰顏欲付(一二)紫(一三)金丹。　衰顏付せむと欲す紫金丹。

【字解】【一】常苦　ふだんからこまつてゐる。【二】沙崩　沙岸がくづれる。【三】損藥欄　藥草をうゑた畠の欄干をそこねる、蓋し水邊に藥圃あるなり。【四】也　「亦」なり、「踵然亦」の義。【五】從　まかす、そのままにしておく。【六】江檻落風湍　江檻は江に沿うて設けた

(一四)三年奔(一五)走空(一六)皮骨。　三年奔走空しく皮骨のみ、

信有人間行(一七)路難。　信に人間行路の難有り。

「てすり」なり、或は之を水檻ともいへり、之を設けし目的はそこで釣を垂れるにある。新添水檻供垂釣(卷十の三七五頁「江上値水如海勢聊短述」詩の第五句)とみえてゐる。江檻落風湍とは風湍落江檻の義なり、「落」字の主語は「風湍」なり。江檻のあるところへ風をうけた急流が落ちかかつてくるをいふ、水勢が此の如くなるゆゑ沙岸がくづれ藥欄も損ずるなり。浦起龍氏が江檻落風湍とよみて江檻が風湍のうへに墜落したことと解きたるは余之を取らず。【七】新松　作者が往年うゑたわかまつ、卷九の二八五頁に覓松樹子栽詩あり。【八】萬竿　萬本。【九】生理　くらしむきのこと。「北征」(卷五の四七八頁)にもみゆ。【一〇】秖憑　ただよる、それのみによる。【一一】黃閣老　黃閣の元老の官、嚴武をさす、武は黃門侍郎として來り鎭せり、黃閣・閣老の語義については卷五の四五四頁「奉贈嚴八閣老」詩を見よ。【一二】付　付與する、まかせる。【一三】紫金丹　紫金及び神丹と稱する長生の仙藥なり。「雲笈七籤」の合丹法にいふ、火、七十日に至れば藥成り、五色、華を飛ばし紫雲亂れ映ず、名づけて紫金といふ、其の蓋の上の紫霜をば名けて神丹といふ、と。【一四】三年　寶應元年以來今年まで三年なり。【一五】奔走　綿・梓・閬・三州のあひだをかけめぐる。【一六】空皮骨　肉おちてむなしく皮と骨とを存するのみ。【一七】行路難　古の樂府に「行路難」の篇あり。

【詩意】自分はいつも河岸の沙がくづれて藥草畠のてすりをそこなふのに困つてゐるが、それでも風をうけた急流が水檻のところへ落ちかかつてくるのはそのままにしてある。自分の植ゑた若松は千尺ほどの高さになつてもらひたいのだが恨めしいことにさうはのびぬ。やたらにはびこるわるい竹むらは萬本ぐらゐは斬つてすてねばなるまい。自分は暮し向きのことは黃閣の元老たるあなたにすがるばかりであり、老衰した顏つきは紫金丹の仙藥にまかせてよみがへらせようとおもふ。今日まで三年といふものあちらこちら奔走したが餘す所のものは骨と皮だけだ。人間に行路難があると昔の人が言うたがそのとほりだ。

〔五〕

(一)錦官城西(二)生(三)事微(四)。　錦官城西生事微なり、

(五)烏皮几在(六)還(七)思歸。　烏皮几在り還た歸るを思ふ。

(八)昔去爲憂(九)亂兵入。　昔去りしは亂兵の入らむことを憂へしが爲なり、

今來已恐鄰人非(一〇)。　今來れば已に恐る鄰人の非ならむことを

(一一)側身天地更懷(一二)古。　身を天地に側てて更に懷古し、

回首風(一三)塵甘(一四)息(一五)機。　首を風塵に回らして息機を甘んず。

(一六)共說總(一七)戎雲(一八)鳥陣。　共に說かむ總戎雲鳥の陣、

(一九)不妨遊(二〇)子芰(二一)荷衣。　妨げず遊子芰荷の衣。

【字解】【一】錦官城　成都の城をいふ。【二】西　草堂のある浣花村は城の西にあたる。【三】生事　「生理」のごとし、生計の事をいふ。【四】微　かすか、振興せざること、貧乏なるをいふ。【五】烏皮几　烏羔の皮を張つた隱几(脇息)をいふ、平生の愛用品なり。【六】在　草堂に存在してゐる。【七】還　「亦」なり、此字は上句の「生事微」からかかる、「生事雖微亦」の義。【八】昔去　去とは成都をさりしこと。【九】亂兵入　徐知道が亂兵の侵入。【一〇】非　非とは昔日の狀にあらざるをいふ、或は逃亡、或は死去す。【一一】側身　からだをかたがはへよせること、身を容るる地なきさま。【一二】懷古　古昔の治まれる時代を思ふ。【一三】風塵　兵馬のちり、前年

の擾亂をいふ。【一四】甘　心にあましとする、滿足すること。【一五】息機　機心を息止すること。「莊子」天地篇に子貢が漢陰を過ぎしに一の丈人を見る、甕を抱きて田に水をそそぐ、子貢槹を用ひなば力を用ふること寡くして功を見ること多からんといふ、丈人の曰く、機械ある者は必ず機事あり、機事ある者は必ず機心あり、機心胸中に存すれば純白備はらず云云。ここでは心を器用にはたらかさぬ意に用ひたり。【一六】共說　諸家明解なし、浦氏の家人共說教勸といへるは余之を取らず、共說は蓋し草堂の主客相共に說くないふならん、作者此時未だ嚴武が參謀とはならず、（參謀となりしは六月に在り）草堂に於ては作者は主人、嚴武は客なり。【一七】總戎　軍をすぶるもの、節度使をいふ、嚴武をさす。【一八】雲鳥陣　「握奇經」に八陣をときて、天・地・風・雲を四正、飛龍・翼虎・鳥翔・蛇蟠を四奇とせり。種種の陣形なり、これ吐蕃を防禦するについて畫策するなり。【一九】不妨　妨げなし、さしつかへなし。【二〇】遊子　たびのもの、作者自己をさす。【二一】芰荷衣　屈原の「離騷」に製芰荷以爲衣兮とみゆ、ひし、はすの葉をとりつづりて衣をつくるなり、隱遁者の服なり。

【題意】此篇は草堂の前後の情事をいひ將來の畫策についてのべたり。

【詩意】錦官城の西なる吾が草堂へかへつたところで自分は貧乏でくらしむきは振はぬのだが、つかひならした黑皮の脇息がのこつてゐるのをおもひだすとやつぱり貧乏でも歸りたいとおもふ。昔は亂兵が侵入しはせぬかと氣づかうて立ち去つたのだが、さて今もどるとなるとまた近所の人たちが前とはうつてかはつたものになつてゐはせぬかと案せらるるのである。自分は天地の間に幅たかつてをれぬゆゑからだをかたへへとすぼめながら古代の平和に治まつた時のことをしたはしくおもひ、過去の騷亂へと追憶の首をふりむけながらこんどはじつとして心を小利巧にはたらかさずにゐようとおもふ。あなたにお逢ひすればいづれはごいつしよに陣形のおはなしもいたしませうが、わたくしは隱居の身だから芰荷の衣をつけて應對してもさしつかへはござるまい。（これくらゐの我儘はもとよりお許しのことと信ずる。）

春歸（一）

春に歸る

苔徑（二）臨江竹、茅簷（三）覆（四）地花。
苔徑江に臨める竹あり、茅簷地を覆ふの花あり。

別來頻（五）甲子、歸到忽春華（六）。
別來頻りに甲子、歸到すれば忽ち春華なり。

倚杖看孤石、傾壺就淺沙。
杖に倚りて孤石を看、壺を傾けて淺沙に就く。

遠鷗浮水靜、輕燕受風斜。
遠鷗水に浮びて靜に、輕燕風を受けて斜なり。

世路雖多梗（七）、吾（八）生亦有涯。
世路多梗なりと雖も、吾生亦た涯有り。

此身醒復醉、乘興卽爲家。
此身醒めて復た醉ふ、興に乘じて卽ち家と爲す。

【字解】【一】春歸　春時にあたりて自己が草堂に歸りしこと。【二】苔徑　こけむしたこみち。【三】茅簷　かやぶきののきば。【四】覆地花　地面におほひかぶさる花。【五】頻甲子　作者寶應元年夏に草堂を離れしより此の時まで十二甲子を經たり。【六】春華　春のはなやかさ。【七】多梗　梗は梗塞、障碍物ありてふさがること多し、長安洛陽にかへることも荊吳の地に遊ぶこともみな自由ならざるをいふ。【八】吾生亦有涯　「莊子」養生主篇に吾生也有涯。而知也無涯とみゆ。此句は吾が生には涯があるから飲

まればならぬの意をふくめり。

【題義】春、成都の草堂に歸りきたりしことをよめり。廣德二年季春の作。以下の諸篇はしばしばまた草堂にての作となる。

【詩意】苔むしたこみち、そこには江にさしかかつた竹むらがあり、茅ぶきののきば、そこには平地にかぶさるばかりに咲いてゐる花がある。この屋と別れてからしきりに月日がたつたが、もどつてきてみればおもひがけずにかかる春のはなやかさだ。自分は杖によりかかつてただひとつ横はつてゐる庭石をながめたり、水の淺い沙原のところまでいつて酒壺を傾けて飮む、遠方の鷗は靜に水に浮いてゐるし、身輕の燕は風を翼に受けてゆがみなりにとんでゆく。世間の路は障碍物が多いものだが、さりとて運命にばかりしばられてゐるわけにはゆかぬ、我我の一生にも際涯があるのだ、なんとか樂みもせねばならぬ。だから自分のこのからだは酒から醒めるときはまた醉うて、自己の興に乘するところ、そこを以て卽ち自己の安んずる家としてをるのである。

歸來(一)

客裏(二)有所適(三)　歸來知路難(四)。

歸來

客裏適く所有り、歸り來つて路難を知る。

開門野鼠走　散帙(五)壁魚(六)乾(七)。

門を開けば野鼠走り、帙を散ずれば壁魚乾く。

洗杓(八)斟新醞(九)　低頭(一〇)拭小盤(一一)。

杓を洗うて新醞を斟み、頭を低れて小盤を拭ふ。

憑誰給麴蘖(一二)　細酌(一三)老江干(一四)。

誰に憑りてか麴蘖を給せられ、細酌して江干に老いむ。

【字解】【一】歸來　梓・閬の方面より成都浣花村の草堂にかへりきたりしこと。【二】客裏　成都に居りしことはすでに客寓のうちなり。【三】適　ゆく、他方に往く、卽ち梓・閬のかたへゆきしことをいふ。【四】路難　人間の行路の難きをいふ。【五】散帙　帙は書物をつつむもの、散とは散亂させること。【六】壁魚　白魚・蟫・蛃魚におなじ。シミ蟲、紙をたべる害蟲。【七】乾　ひぼしになつてゐる。【八】洗杓　ひしやくをあらふ。【九】新醞　にひつくりのさけ。【一〇】低頭　かしらをさげ俯してほこりの有無を注視するさま。【一一】小盤　ちひさきさら。【一二】麴蘖　かうじ、もやし、是は酒をつくる材料。【一三】細酌　ちびちびとくむ。【一四】江干　錦江のほとり。

【題義】閬州より草堂へもどつたことをのぶ。廣德二年春の作。

【詩意】自分はすでに客寓の身でありながらさらに他鄕へでかけていつたが、いまもどつてきて人間の行路難といふことがよくわかつた。門をあけると野鼠が走りだすし、室にはいつて書帙をちらばせるとしみ蟲がひからびて死んでゐる。ひしやくを洗うて新つくりの酒をくみ、ごごみ加減になつて小皿のほこりをぬぐひとる。だれかのおかげで酒を造る材料をもらつて、それで酒をこしらへ、ちびちび酌んで飮みながらここの江べりで老いさきをすごしたくおもふが、だれがさうしてくれるだらう。

(一)草堂

(二)昔我去草堂。(三)蠻夷塞成都。
今我歸草堂。成都(四)適(五)無虞。』
請陳初亂時。反覆乃須臾。
(六)大將赴朝廷。(七)羣小起(八)異圖。
(九)中宵(一〇)斬白馬。(一一)盟歃(一二)氣已(一三)麤。
西取(一四)卭南兵。北斷(一五)劍閣隅。
(一六)布衣數十人。亦(一七)擁(一八)專城居。
其勢(一九)不兩大。始聞(二〇)蕃漢殊。
(二一)西卒(二二)卻倒戈。(二三)賊臣互相誅。
焉知(二四)肘腋禍。自及(二五)梟獍徒。』
(二六)義士皆痛憤。(二七)紀綱亂(二八)相踰。
(二九)一國實三公。萬人欲(三〇)爲魚。

草堂

昔我草堂を去りしとき、蠻夷成都に塞がる。
今我草堂に歸れば、成都適ゝ虞無し。』
請ふ初めて亂れし時を陳べむ、反覆せること乃ち須臾なり。
大將朝廷に赴く、羣小異圖を起す。
中宵白馬を斬る、盟歃氣已に麤なり。
西のかた卭南の兵を取り、北のかた劍閣の隅を斷つ。
布衣數十人、亦た專城の居を擁す。
其勢兩大ならず、始めより聞く蕃漢の殊なるを。
西卒卻つて戈を倒にす、賊臣互に相誅す。
焉んぞ知らむ肘腋の禍、自ら梟獍の徒に及ばむとは。』
義士皆痛憤す、紀綱亂れて相踰ゆ。
一國實に三公あり、萬人魚爲らむと欲す。

(三一)唱和作(三二)威福。孰肯辨(三三)無辜。
眼前列(三四)杻(三五)械。背後吹(三六)笙竽。
(三七)談笑行殺戮。(三八)濺血滿長衢。
到今用(三九)鉞地。風雨聞(四〇)號呼。
(四一)鬼妾與鬼馬。(四二)色悲充(四三)爾娛。
國家法令在。(四四)此又足(四五)驚吁。』
(四六)賤子(四七)且(四八)奔走。(四九)三年(五〇)望東吳。
(五一)弧矢(五二)暗江海。難爲遊(五三)五湖。
不忍(五四)竟舍此。(五五)復來(五六)薙(五七)榛蕪。
入門(五八)四松在。(五九)步屧萬竹疏。
舊犬喜我歸。(六〇)低徊入(六一)衣裾。
鄰里喜我歸。沽酒攜胡蘆。
(六二)大官喜我來。遣騎問(六三)所須。

唱和して威福を作す、孰か肯て無辜を辨せむ、
眼前杻械を列し、背後に笙竽を吹く。
談笑して殺戮を行ふ、濺血長衢に滿つ。
今に到るまで鉞を用ひし地、風雨に號呼するを聞く。
鬼妾と鬼馬と、色悲するに爾が娛みに充つ。
國家法令在り、此れ又驚吁するに足れり。』
賤子且つ奔走し、三年東吳を望む。
弧矢江海に暗く、五湖に遊ぶを爲し難し。
竟に此を舍つるに忍びず、復た來つて榛蕪を薙ぐ。
門に入れば四松在り、步屧萬竹疏なり。
舊犬我が歸るを喜び、低徊して衣裾に入る。
鄰里我が歸るを喜び、酒を沽ひて胡蘆を攜ふ。
大官我が來るを喜び、騎を遣はして須つ所を問ふ。

(六四)城郭喜我來。賓客(六五)隘村墟。』　城郭我が來るを喜び、賓客村墟を隘にす。』

天下尚未寧。(六六)健兒(六七)勝腐儒。　天下尚ほ未だ寧からず、健兒腐儒に勝れり。

(六八)飄(六九)颻風塵際。何地置(七〇)老夫。　飄颻たる風塵の際、何の地にか老夫を置かむ。

(七一)於時見(七二)疣贅。(七三)骨髓幸未枯。　時に於て疣贅とせらる、骨髓幸に未だ枯れず。

(七四)飲啄愧(七五)殘生。(七六)食薇不敢餘。』　飲啄殘生に愧づ、薇を食うて敢て餘さず。〔餘を願はず〕』

〔不願餘〕

【字解】【一】草堂　浣花村の草堂。【二】昔　寶應元年の夏をいふ、時に嚴武入朝するによりて作者は草堂より離れたり。【三】蠻夷　徐知道、蠻夷をあつめて亂をなす。【四】適　たまたま、ちやうど。【五】無虞　心配のことなし、平和なり、以上は全體についてのぶ。【六】大將　節度使嚴武をいふ。【七】羣小　多くの小人、徐知道等をいふ。【八】異圖　尋常ならざるくはだて、謀叛をいふ。【九】中宵　よなか。【一〇】斬白馬　支那戰國以來のならはしにて盟のために白馬をきりころして其の血を用ふ、下の「盟歃」をみよ。【一一】盟歃　盟は「ちかふ」歃は口旁に血をぬることなり。【一二】氣　意氣。【一三】麤　粗豪。【一四】邛南　邛は臨邛縣、成都の西南二百里にあり、その南に雅州あり、其地もと先に附きしが徐知道之を引きて亂をなせり。【一五】劍閣　卷九の二七一頁をみよ。【一六】布衣　庶民階級のもの、この「布衣數十人」の句下に「郎攝子琳柏正節之徒」といへる作者の自注あるよし、郭知達本の趙注に見えたり、しかし右の注は果して作者の原注なるや否は疑はし。【一七】擁　有すること。【一八】專城居　城を專有して住居すること。府の管内に屬する刺史輩をさす。古樂府「羅敷行」に四十專城居の句あり。【一九】不兩大　兩とは下の蕃と漢との二つをいふ。【二〇】蕃漢殊　蕃は羌兵をいひ漢は本土人の兵をいふ、此句と「其勢」の句とは前後置きかへてみるべし。

【二一】西卒　羌兵をさす。【二二】郤倒戈　徐知道は兵馬使にて漢兵の統領なり、しかるに羌夷をおびやかして叛亂に加はらしめたり。ところが叛軍の中にて内輪爭ひありて、羌兵は知道が下に附かなくなつたのに乘じて李忠厚なる者が羌兵をおだてて徐知道を殺させる樣にした。郤ちはじめ味方とせし羌夷が戈を倒にして刃向ふ樣になつたのである。「尚書」武成篇に前徒倒戈の語みゆ。【二三】賊臣　叛徒をさす。【二四】肘腋禍　てぢかに起つたわざはひ、李忠厚の裏切りをいふ、肘は「ひぢ」、腋は「わき」。【二五】梟獍徒　徐知道等叛徒の渠魁をいふ、梟は「ふくろふ」母を食ふといへり、獍は破鏡といふ獸にして父を食ふといへり、いづれもわるい鳥獸なり、以上は叛亂のことを敍す。【二六】義士　正義の士。【二七】紀綱　紀は絲の紊れを治むるくくりめ、綱は綱をひきしめる大づな、秩序をさしていふ。【二八】除　亂徒がこゆるをいふ。【二九】一國實三公　一つの國に三人の家老あり、「左傳」僖公五年にみゆ。李忠厚等の同類をさす。【三〇】爲魚　「史記」項羽紀に、今、人方爲刀俎、我爲魚肉とあるによれば俎上の魚肉のごとく屠らるるをいふ。「左傳」昭公五年に、劉定公が曰く、微禹吾其魚乎、とあり、「後漢書」光武紀に、決之灌之、百萬之衆、皆可使爲魚とあるによれば人の溺死して魚のごとくなるをいふ。【三一】唱和　叛賊らがおたがひに唱和するなり、甲之をとなへて乙之に贊成附和す。【三二】作威福　「尚書」洪範には人君のみが作威作福ことをとけり、ここは賊徒が權力を專らにし威をも福をもなすをいふ、威を弄するといふが主なり。【三三】辨無辜　つみあるものとつみなきものとを區別する。【三四】杻　「あしかせ」。【三五】械　「てかせ」。【三六】笙竽　樂器、卷五の四六七頁をみよ。【三七】談笑　わらひばなしをしながら。慘忍なるさまなり。【三八】濺血　そそぐ所の血。【三九】用鉞地　鉞は「まさかり」。用鉞とは人殺しの刑を行ひしをいふ。【四〇】號呼　被殺者のなきさけぶこゑ。【四一】鬼妾・鬼馬　鬼は殺されてしまつた者をいふ、鬼妾鬼馬とは被殺者の殘存せる妾・馬なり。【四二】色悲　口ではいへねど顏色にては悲痛のありさまをしてをるのに、の意。【四三】爾　「なんぢ」賊徒をさす。【四四】此　前述の慘虐なる舉動をさす。【四五】吁　うれふる、以上は亂兵の虐殺をのぶ。【四六】賤子　いやしきもの、自己をさす。【四七】且　しばらく、いささか。【四八】奔走　かけまはる、梓・閬の方面へゆきしこと。【四九】三年　寶應元年より廣德二年まで。【五〇】望東吳　吳門に遊ばんとてながめる。前の「遊子」詩の吳門興杳然の句をみよ。【五一】弧矢　ゆみ、や、兵亂を征定するために用ふるなり。「易」の繫辭にい

ふ弦レ木爲レ弧、剡レ木爲レ矢、弧矢之利、以威二天下一」と。【五二】江海　揚子江や海、江蘇の地方をいふ。【五三】五湖　菱湖・游湖・莫湖・貢湖・胥湖。みな太湖の東岸の五灣なり。【五四】舍此　草堂の地を捨て去ること。【五五】復來　またかへつてきて。【五六】芟　なぎ刈る。【五七】榛蕪　はりのやぶ、草むら。【五八】四松　前年植ゑし四本のまつ。【五九】歩屧　草履であるく、作者の他句、歩屧隨春風、歩屧深林晩によれば履もて歩する意に用ふるに似たり」【六〇】低徊　さまよふ。【六一】胡蘆　ふくべ、瓢箪。【六二】大官　嚴武等をさす。【六三】所須　いりようなもの。【六四】城郭　そこの人人。【六五】隘　せましと感ぜらるるほどたくさんに集り來る。古「木蘭辭」に爺孃聞二我來一出レ郭相扶將、阿姉聞二妹來一當レ戸理二紅粧一、小弟聞二姉來一磨レ刀霍霍向二猪羊一」とあり、本篇の「舊犬喜我歸」以下の八句は其句法を學ぶと昔人言へり、或は然らん。以上は草堂に歸りしことをのぶ。【六六】寧　安寧。【六七】健兒　武卒をいふ。【六八】飄颻　ただよふさま。【六九】風塵　かざほこり、兵馬のちりをいふ。【七〇】老夫　おやぢ、自己をさす。【七一】於時　時は時人をさす。【七二】疣贅　贅に「こぶ」のこと、邪魔物なるをいふ。【七三】骨髓一句　精力尚ほ在るをいふ。【七四】飲啄　鳥に關する語なり、水をのむ、ものをついばむ。人の飲食のこと。【七五】殘生　老いてのちの生活、飲啄愧殘生とは殘生にあたり飲啄するを愧づる義なり。【七六】食薇不敢餘　一本に敢を願に作る、食薇不願餘は古詩の成句なり、薇を食ふほどの粗食に甘んじて其他をねがはざるをいふ、以上は歸りてのちの身世の感をのぶ。

【題義】　作者三年ぶりに草堂にもどりきたりしことをのべたる詩。作者は寶應元年夏、嚴武が召されて入朝するにつき成都の草堂を離れ綿州にいたれり。同年七月に劍南西川兵馬使徐知道が叛き、八月に誅に伏した。當時作者は家族をたづさへて亂を避け梓州に往いた。其の後、梓・閬の間を往來して廣德二年の春嚴武が復び劍南節度使として來任するよしをきいて成都へもどつてきたのである。

【詩意】　むかし自分が草堂をたち去つたときに蠻夷の兵が成都の城いつぱいになつてゐたが、このたびかへつてみるに成都はちやうど平穩である。』自分はあの騷亂が初めておこつた時のことをのべよう。あのときは形勢がひつくりかへつたのはほんのしばしのまのことであつた。大將(嚴武)が朝廷の方へ赴いたのでつまらぬやつどもが非常な企てをしたのだ。彼等はよなかに白馬を斬り殺してその血を口旁にぬつて盟をなし意氣が粗大になつた。それから西の方は邛州以南の兵を取り、北の方は劍閣のすみを遮斷した。これまでただの庶民であつたものども數十人が今は急に一城の主になつた。原來番兵と漢兵とは別なものだと始めからきいてゐたが二つの者は其の勢が兩方とも大きくなるわけにはゆかぬのである。とうとう西卒卽ち番兵は叛徒に對してかへつて戈を倒に向ける樣になり、叛賊どものあひだで互に誅殺しあふことになり、意外にも膝下からおきた禍が賊徒の渠魁(徐知道)たちまでに及んでしまつた。』そのころの秩序といふものはまるで亂れ、秩序以外にふみこえるものが多く、正義の士はみな之をいたくいきどほつた。一國のうちで三人の家老があるといふ風で萬民は彼等のために俎上の魚肉として屠られようとした。(或は「溺らされて魚の糧にされんとした」。)彼等は唱和して威福の權を恣にする、だれが罪あるものと無きものとの區別をつけるものがあらうぞ、(罪なきものまで殺戮した。)本人(被刑者)の眼のまへにあしかせ、てかせをならべ、そのうしろでは笙や竽の樂器を奏し、わらひばなしをしながら殺戮をやる、そのそそぐ血はながいまちいつぱいになつた。あのとき刑罰の鉞を用ひた場所は今日になつてもまだ被刑者のさけびの聲がきこえるのだ。被刑者の妾や馬は

心で泣いて顔つきで悲んでゐるのに、彼等はそれを自己の娛樂の用に充ててゐた。國家には不正を罰する法令が存在してゐるのにこれはなんとしたことか、實に我我をして驚きなげかしむるに十分である。』　自分はしばしあちらこちらかけめぐつてをり、三年のあひだ東吳の方へいきたいとながめてゐた。ところが江海の地方は兵亂があつて征伐の弓矢がくらくとざし、五湖に遊ぶことはしにくくなつた。つまりは此の地(草堂の地)を捨てる氣にはなれず再びもどつてきて荒れ地をなぎはらうた。門にはいつてみると手植の四本松がちやんとしてゐる。草履ばきでぶらぶらしてみると萬竿の竹がまばらにはえてゐる。もとからかつてある犬は自分の歸つたことを喜んでわがころもの裾にまとひついてくる。近所の人たちは自分が歸つたことを喜んで酒をかうてふくべをもつてきてくれる。大官の人は自分の來たことを喜んで騎兵をよこして何かいりようのものはないかとたづねさせる。城郭の人人は自分が來たことを喜んで、賓客としてやつてきてこのかたゐなかがせまつこく感ぜられるほどである。』いま天下はまだやすらかにならぬ。腐儒であるより武卒である方がましなのだ。風塵のふはふはとただよひつつある際にこのおやぢの身はいつたいどこに置いたらよいのだ。自分のからだは幸に骨髓が枯れきつたのではないが時の人人からはこぶの樣な邪魔物あつかひにされてをる。老いていきながらへ飲食をしてをるのは自分の愧づる所である。自分は薇を食ふだけの貧乏に滿足してゐてそのほかのことはねがはぬのである。』

四松

(一)四松初移時。大抵三尺強。(二)
別來忽三(三)歳。離(四)立如(五)人長。
會(六)看根不拔。莫(七)計枝凋傷。
幽(八)色幸秀(九)發。疏(一〇)柯亦昂(一一)藏。』
所插小(一二)藩籬。本亦有隄(一三)防。
(一四)終然振(一五)撥損。得(一六)愜千葉黃。
(一七)敢爲故(一八)林主。黎(一九)庶猶未康。(二〇)
避賊今始歸。春草滿空堂。』
(二一)覽物嘆衰(二二)謝。及(二三)茲慰淒(二四)涼。
清風爲我起。灑面若(二五)微霜。
足爲送(二六)老資。聊待偃(二七)蓋張。』
我生無(二八)根帶。配(二九)爾亦茫(三〇)茫。

四松

四松初めて移せし時、大抵三尺強。
別來忽ち三歳、離立人の如く長せり。
會す看む根の拔けざるを、計ること莫し枝の凋傷するを。
幽色幸に秀發す、疏柯亦た昂藏たり。』
插む所は藩籬小なるも、本亦た隄防有り。
終然振撥して損せり、愜まざるを得むや千葉の黃なること。
敢て故林の主と爲る、黎庶猶ほ未だ康からず。
賊を避けて今始めて歸る、春草空堂に滿つ。』
物を覽て衰謝を嘆す、茲に及んで淒涼を慰す。
清風我が爲に起こる、面に灑ぐこと微霜の若し。
送老の資と爲すに足る、聊か偃蓋の張るを待つ。』
我が生根帶無し、爾に配するも亦た茫茫たり。

有情且賦詩、事跡可兩忘。(三二)(三三)　情有りて且つ詩を賦す、事跡兩ながら忘るべし。

勿矜(三三)千載後。慘澹(三四)蟠(三五)穹蒼(三六)。　矜る勿れ千載の後、慘澹穹蒼に蟠るを。

【字解】【一】四松　四本の松、卽ち前の「草堂」詩の入門四松在の四松なり。【二】强　あまり。【三】三歲　寶應元年より廣德二年まで三年。【四】離立　兩兩相麗くを離といふ、離立とは向ひあひに二つづつ立つをいふ。【五】如人長　人の如くとは五六尺なるをいふ、長は生長。【六】會看　會は俗用にて「必ず」の義、「必ず看ん」とは將來を豫想していふ。【七】莫計　計は計較、はかりくらべる。【八】幽色　おくふかき色、くろずんだ色をいふ。【九】秀發　外部にぬきんでてあらはれる。【一〇】疏柯　まばらなえだ。【一一】昂藏　あがれるさま、以上松の生長せることをのぶ。【一二】蕭蕭　まがき。【一三】隄防　かこひ土手。ここは藩籬卽ち隄防にして以て人を防止するものの義に用ひたり。【一四】終然　つひに【一五】振撥　謝惠連が祭古冢文にみゆ、李善注に「人は物を以て物に觸ることを振といふ」とみゆ。宋本「文選」によるに振を棖に作る、從ふべし。撥は除くなり。棖撥とは物に觸れられてはねのけられたるをいふ。【一六】得愧　愧は恪なり、吝なり、「をしむ」なり、得吝とは得レ不レ吝の義、をしまればならぬといふこと。一本に恠を愧に依る、得愧は得レ不レ愧なり。【一七】敢惢　むりになること。【一八】故林主　舊園林のあるじ。【一九】黎庶　人民。【二〇】康　やすらか、以上は林園荒れ松すこしく損じたるをのぶ。【二一】覽物　物とはひろく春時の景物をさす。仇氏曰く、物は堂舘をさす、楊倫曰く、水檻・破船の類をさす、浦氏曰く、秀發・昂藏をさす、と。余皆之を取らず。【二二】衰謝　自己の老衰せること。【二三】及茲　茲とは松を看ることをさす。【二四】凄涼　心のものがなしさ。【二五】若微霜　冷かなるをいふ。【二六】送老資　老年をすごすもとで。【二七】偃蓋　ふしたる車蓋、松の横にひろがりたる形容、以上松に向つて望みを屬す。【二八】無根帶　帶はつるのなりふしなり、根帶なしとは附着する所なきをいふ。陶淵明が詩に「人生無$_{二}$根帶$_{一}$、飄如$_{二}$陌上塵$_{一}$」とみゆ。【二九】配爾　爾は汝、配とはあひてになること。【三〇】茫茫　前途不明のさま。【三一】事跡　自己のした事のあと。松にとりては其の生長の形迹。【三二】兩　松と我とともに。【三三】矜　ほこる。【三四】慘澹　苦心のさま。【三五】蟠　わだかまる、龍のとぐろをまくすがた。【三六】穹蒼　蒼穹を顚倒して用ふ、あをい弓なりのそら、天をいふ。以上は松と我身と一つになりて感慨す。

【題義】草堂にある手植ゑの四本の松を見てよめる詩。廣德二年春、成都の作。

【詩意】我が草堂の四本の松は初めてここにうつしうゑたときには大抵三尺あまりであつたが、別れて以來忽ち三年たつてみると二本づつ向きあひに立つておとなのせたけほどにのびてゐる。自分はこの松は必ず拔けない根をしかとさしこんでいくものと信じ、枝がしぼみそこなはれることなどは考へなかつた。幸にこんもりとした色もでてゐるし、まばらな柯も上の方にあがつてゐる。』この松を插さんだところは小さいながらまがきがあつて人だの犬だのの防ぎになつてゐたのであるが、それは自分の不在のあひだに結局何かにはねのけられてこはされてしまひ、そのためか松の多くの葉が黃ばんでゐるのはをしまぬわけにはゆかぬ。いま多くの人民たちはまだ安寧を得ないといふのに、自分はもどつてきてもとの林園のあるじとなつてゐる。盜賊をよけてよそへいつたのがいま歸つてみるとだれも居なかつた座敷に春草がいつぱい生えてゐる。(譯者いふ、座敷に草がはえるは奇妙なるに似たるも、支那の家屋は瓦敷きの土間なれば怪むに足らず。)』自分は春の若若しい物を覽てはわが身の老衰したことをなげくが、又一方にはこの松をみるにつけてものがなしいさびしい心もちを慰めることができる。この松から淸らかな風が自分のために吹き起り、それが面上に灑がれるとこまかい霜を吹きつけられる樣につめたくてよいきもちがする。この松は自分の老い先きを送る資とするに足るものであつ

て、自分はこの松がやがて生長して横にねた車の蓋の樣にひろがるのを聊か期待するのである。』とはいへ自分の生涯は附着する場所をもたぬものであるから、松よ、汝とつれあひになつてゐようとしてもそれはあてどもないことである。ただ自分は感情をもつてゐるから情のうごくままここにしばらく汝に關した詩をつくるだけのことで、汝もわたしもめいめいのする事迹などは忘れてしまふべきである。汝は千年後に至らんとき、苦心慘澹して生長をとげ天の青空に向つて龍の蟠屈するが如くなることを今から自慢してはならぬぞよ。』（此の言によれば作者は暗にみづから千年の後に自己の價値の拔羣なるべきを默信せるがごとし。）

題㆓桃樹㆒（一）

桃樹に題す

小徑升㆑堂舊（二）不㆑斜。　小徑堂に升るに舊と斜ならず、
五株桃樹亦從（三）㆑遮。　五株の桃樹亦た遮るに從かす。
高秋（四）總饋（五）㆓貧人（六）實㆒。　高秋には總て貧人に實を饋る、
來歳還舒（七）滿（八）眼花。　來歳還た舒べむ滿眼の花。
簾戸每宜㆑通（九）㆓乳（一〇）燕㆒。　簾戸每に乳燕を通ずるに宜し、
兒童莫（一一）㆑信打（一二）㆓慈鴉㆒。　兒童慈鴉を打つに信かす莫し。
寡（一三）妻羣盜非（一四）㆓今日㆒。　寡妻羣盜今日に非ず、
天（一五）下車書已一（一六）家。　天下車書已に一家なり。

【字解】【一】桃樹　卷九に「著八明府實處覓桃栽」詩あり。當時の桃生長せしなり。【二】舊不斜　舊とは栽植のはじめに近き時をさす、不斜とは小徑が直通してゐること、「もと斜ならず」とは今日は斜についてゐるをいふ、次句はすなはち不斜の理由なり。【三】從遮　遮るにまかすとは直通せし徑にあたつて勝手に遮斷させておくをいふ。五本の桃あれば徑は斜につく。【四】高秋　天高くすむ秋。【五】饋　尊者に食物をおくるをいふ。ここは單に食物を供する意に用ふ。【六】貧人實　「貧人の實」と訓ずるも可なるに似たるも語法上「貧人に」と訓ぜり、實は果實。【七】舒　のぶる、開くこと。【八】滿眼花　眼前いつぱいに咲きさかる花。【九】通　往來すること。【一〇】乳燕　こもちのつばめ。【一一】莫信　信とは任の義、「任かすなし」とは勝手に自由にできぬをいふ、桃樹ありて邪魔するがゆゑなり。【一二】慈鴉　慈烏なり、この鳥は腹のところが白きものなりと。【一三】寡妻　やもめ、夫が戰死したりして獨りとなれる婦、これは羣盜の起りしために出來た社會現象なり。【一四】非今日　不備の句法といふべし、蓋しその過去の事に屬して今日の事に非ざるをいふ。【一五】天下車書　「中庸」に曰く、今天下、車同㆑軌、書同㆑文と。車輪の間隔が同じ長さに一定し、記載物に用ふる文字も同じく一定すとは天下の一統せるをいふ。【一六】一家　同一家族、羣雄割據の狀にあらず。

【題義】草堂の桃樹を見て感ずる所あり、それにかきつけた詩。廣德二年春晩の作ならん。

【詩意】これまではうちの座敷へあがらうとするには庭さきの小徑はまがつてついてはゐなかつた、それがいまみるとまがつてついてゐる。まがるも道理、五本の桃の樹をばみちに勝手にじやまさせてあるのだもの。この桃は秋になれば實をむすんで貧乏な人たちに食物を供給するし、ことしはだめだが來年になればまた眼にあふれるばかりの花をさかせてみせてくれるだらう。この樹があるために簾

や戸のあたりにこもちの燕が往來するに都合がいいし、子供らが勝手には烏を打つていぢめるわけにゆかぬから烏の愛護にもなるといふものだ。羣盜がはびこり、寡妻が多くなるといふ樣なことは過去のことになつてしまつた。今日はもはや天下は同軌同文の一大家族をなす平和の時になつたのだ。

水檻

蒼江多風颸。雲雨晝夜飛。
茅軒駕巨浪。焉得不低垂。
遊子久在外。門戶無人持。
高岸倘爲谷。何傷浮柱攲。
扶顚有勸誡。恐貽識者嗤。
既殊大厦傾。可以一木支。
臨川視萬里。何必欄檻爲。
人生感故物。慷慨有餘悲。

水檻

蒼江風颸多し、雲雨晝夜飛ぶ。
茅軒巨浪駕す、焉んぞ低垂せざるを得む。
遊子久しく外に在り、門戶人の持する無し。
高岸も倘ほ谷と爲る、何ぞ傷まむ浮柱の攲くを。』
扶顚勸誡有り、恐らくは識者の嗤を貽さむ。
既に大厦の傾くに殊なり、一木を以て支ふべし。
川に臨みて萬里を視る、何ぞ欄檻を必とするを爲む。
人生故物に感ず、慷慨餘悲有り。』

【字解】【一】水檻　江に面して設けたてすり、卷十の「江上値水如海勢聊短述」、「水檻遣心」をみよ。【二】蒼江　錦江、蒼は水の色。【三】颸　つむじかぜ。【四】茅軒　かやぶきののき、蓋し水檻の屋根。【五】駕　のりこえてくること。【六】低垂　水檻の低下するをいふ。【七】遊子　たびびと、自己をさす。【八】久在外　梓・閬の方へ出でなりしこと。【九】持　維持、支持、ささへる、もちこたへる、古樂府に曰く、健婦持門戶、亦勝一丈夫と。【一〇】高岸倘爲谷　詩「十月之交」に地震のことをのべて高岸爲谷、深谷爲陵といへり。【一一】何傷　何妨といふに同じ。【一二】浮柱　水中にたてた柱。【一三】攲　かたむく、以上は水檻の破損せるをのぶ。【一四】扶顚　「論語」季氏篇に、孔子曰、危而不持、顚而不扶、則將焉用彼相矣とみゆ。顚げかけたならば扶けて起せといふなり。【一五】勸誡　勸はかくせよとすすめること、誡はしかするなといましめること。【一六】貽識者嗤　識者は見識すぐれた人、貽は「のこす」、嗤は「わらひ」、「識者の嗤」と訓じたるも語法上は「識者に嗤を貽す」と訓ずるをよしとす。【一七】大厦　おほきな家。【一八】一木　一本の材木、「文中子」に大厦之傾、非一木所支とみゆ。【一九】臨川　川は錦江。【二〇】何必欄檻爲　「必とす」とはそれでなければならぬと限ること、欄は欄干なり。檻は板を用ひて作つたてすりなり、何爲は語法上は「何をか爲む」の義、しかするもむだなるをいふ。【二一】故物　ふるくからあるもの、水檻をさす、以上は水檻の修繕すべきことをのべたり。

【題意】かははたの釣殿のてすりがこはれたのを見てよんだ詩。廣德二年春の作。

【詩意】江に多く風が吹いて雲や雨が夜晝飛ぶ。茅ぶきののきばまでおほ浪がのしかかつてくるので水檻はどうしてひくくさがらずにゐられようぞ。自分はながらく外へでかけてをり留守居をして我が家の門戶をもちこたへてくれる人がなかつたのだ。高い岸でもおちこんで谷となるといふではないか、水檻の川中にたてた柱がかたむいたぐらゐは心をいためるにたらぬことだ。』しかし「顚げるものは扶けておこせ」といふ聖人の勸誡があるからはふつておけば有識者にわらはれることになるだらう。水檻は大きな家の傾いたのとはちがつて一本の材木で支へることのできるものだ。（修繕するのが

當然だ）。川にのぞんで萬里の遠きを注視するには必ずしもこんな水檻に限るわけのものではないが、人生といふものは妙にふるいものに對して一種の感じがおこるものである。自分は吾が水檻のこはれたのをみては慷慨にたへずそこに十分の悲みの念があるのである。』

破船

平生江海心。宿昔具扁舟。
豈惟清溪上。日傍柴門遊。
蒼皇避亂兵。緬邈懷舊丘。
鄰人亦已非。野竹獨脩脩。
船舷不重扣。埋沒已經秋。
仰看西飛翼。下愧東逝流。
故者或可掘。新者亦易求。
所悲數奔竄。白屋難久留。

破船

平生江海の心、宿昔扁舟を具ふ。
豈惟だ清溪の上、日に柴門に傍うて遊ぶのみならむや。』
蒼皇として亂兵を避く、緬邈舊丘を懷ふ。
鄰人亦た已に非なり、野竹獨り脩脩たり。
船舷重ねて扣かず、埋沒已に秋を經。
仰ぎて看る西飛の翼、下は愧づ東逝の流。』
故者或は掘る可く、新者亦た求め易し。
悲む所は數奔竄して、白屋久しく留まり難きこと。』

【字解】【一】破船　こはれたふね。【二】江海心　揚子江・及びそれにつゞいた海、吳（今の江蘇省の地方）地をいふ。【三】宿昔　むかし。【四】具　そなふ、用意しておく。以上は嘗て船をおきたる理由をのぶ。【五】清溪　浣花溪をさしていふ。【六】柴門　しばがきの門、草堂の門をいふ、【七】蒼皇　あわてふためく貌。【八】亂兵　徐知道等のさわぎ。【九】緬邈　はるか。【一〇】舊丘　住みなれたもとのをか、草堂の丘林をいふ。【一一】非　以前のありさまでなく變つてゐること。【一二】野竹　野生のたけ。【一三】脩脩　ながくのびた貌。【一四】舷　ふなばた、船旁の板にて竿さすとき人のふむところ。【一五】扣　たたく。【一六】埋沒　江中の水沙にうづまる。【一七】西飛翼　この西の字は下の東逝の東に對したるだけのことにて實際の方位には關せず。空にとぶ鳥をさす。【一八】東逝流　東にゆく流れ、これは長江をくだる能はざるが故にいふ、以上は草堂に歸りてみれば船破れて東遊する能はざるをいふ。【一九】故者　ふるい船、現にこはれてゐる船をさす。【二〇】掘　ほる、埋沒してゐるのをほりだすこと。【二一】新者　あたらしい別のふね。【二二】求　あがなひもとむ。【二三】數　しばしば。【二四】竄　かくれる。【二五】白屋　白き茅でふいたいへ。草堂をいふ、以上は船をそのままにしてあるわけをのぶ。

【題義】草堂にもどつてこはれぶねをみてよめる詩。廣德二年の作。

【詩意】自分はふだん江海の方面へ遊びたいといふ心をもつてゐるのでむかしここに一つのこぶねを用意しておいた。それはこの浣花溪のほとりで毎日うちの門によりそうて遊ぶためばかりではないのであつた。』ところで自分は前年あわてて兵亂をよけて出ていつたので、よその地方からはるかに草堂のもとの丘林のことをなつかしくおもうてゐた。いまもどつてみると近鄰の人人もむかしとはうつてかはり、野生の竹ばかりすらすらとせたかくのびてゐる。ふなばたをモ一度たたくことはせぬ。なぜといへば船は去年の秋からかけて水のなかにうづまつてをるのである。自分はうへをむいては西に

飛ぶ鳥をながめて吾が身の飛べぬのをうらみ、下をうつむいてはたえず東に流れ去る江流に對してまだそれをくだれずにゐることをはぢてゐる。』ふる船のうづまつたやつは掘りだすこともできよう。また新しいやつをかひもとめることもできよう。ただ自分の悲む所はあまりたびたびあちこちにげかくれてあるき、この茅ぶきのいへにいつまでも留まつてをれぬといふことだ。』

奉寄高常侍(一)

高常侍に寄せ奉る

(二)汶上相(三)逢年(四)頗多。　汶上相逢ふ年頗る多し、
(五)飛騰無(六)那故人何。　飛騰故人を那何ともする無し。
(七)總戎楚蜀(八)應全未。　戎を楚蜀に總ぶるは應に全く未だなるべし、
(九)方駕曹劉(一〇)不啻過。　駕を曹劉に方ぶるは啻に過ぐるのみならず。
今日朝廷須(一一)汲黯。　今日朝廷汲黯を須つ、
(一二)中原將帥(一三)憶(一四)廉頗。　中原の將帥廉頗を憶ふ。
(一五)天涯春色催(一六)遲暮。　天涯の春色遲暮催す、
(一七)別淚遙添錦(一八)水波。　別淚遙に添ふ錦水の波。

【字解】【一】高常侍　左散騎常侍高適なり。適は寶應元年夏、嚴武入朝の後成都尹となる。而して其の吐蕃に對して師を出すや功なく松・維・保・等の三州を失ふ。嚴武また適に代り、適は召し還へさる、これ廣德二年三月のことなり、適は京に還りて刑部侍郎となり左散騎常侍に轉じ、明年永泰元年正月卒せり。散騎常侍は過失を規諷し、侍從顧問にそなはる職なり。此の詩は送別の作なるに似たれば散騎常侍は將京を待たず任命されしなるべし。【二】汶上　汶水のほとり、汶水は山東省兗州府の西北にあり。【三】相逢　高適とあふ。【四】年頗多　年數を多く經たり。作者が高適・李白等を知れるは天寶三載頃にして今年廣德二年を距ること二十年前にあり。【五】飛騰　元氣潑剌たること、卷二「杜位宅守歲」詩に飛騰莽景斜、卷六「贈高式顏」詩に平生飛動意の句あり、飛動も飛騰も義は同じ。飛騰を陞任の意とする說あり、取らず。【六】那故人何　故人は舊知の友、適をさす、那何は奈何に同じ、「那」と「何」との間に「故人」をはさみて動詞形となしたり。「奈何ともするなし」とは自己がかなはぬをいふ。【七】總戎楚蜀　總戎は軍務をすぶるをいふ、楚は江淮の地方をさす、適、さきに揚州大都督・淮南節度使たりしことあり、蜀は四川省をさす、適、さきに西川節度使たり。【八】應全未　全未の未の字は未だ其才を盡くさざるをいふ。【九】方駕曹劉　曹劉は三國魏の曹植、劉楨、方駕とは竝び馳するをいふ。【一〇】不啻過　之に過ぐること遠きをいふ。【一一】汲黯　漢の武帝の臣、直諫を好む、常侍の職にあてていふ。【一二】中原　洛陽地方をいふ。【一三】憶　作者がおもふなり。諸家の解は一般人が憶ふこととす、今從はず。【一四】廉頗　戰國の時の趙の良將なり、のち漢の文帝は廉頗・李牧のごとき將を得れば匈奴を憂へずと歎美せり。【一五】天涯　天のはて、蜀地をさす。【一六】遲暮　人生の晚暮、老衰をいふ。【一七】別淚　送別のなみだ。【一八】錦水　錦江。

【題意】左散騎常侍高適が長安の都へかへるにつき別れの意をのべて寄せた詩。廣德二年三月成都の作。

【詩意】君とむかし汶水のほとりで逢うたが今からみると多くの年を經た。君の元氣潑剌たることは自分ごときものは之をどうすることもできぬ。君は楚や蜀に軍務の長官となつたがまだ君の才を十分盡したのではあるまい。また君の文才は曹植や劉楨とならんで走つても遠く彼等にすぎてゐるだらう。今日朝廷では汲黯の樣な直諫の臣がいりようなのである。また自分は中原の將帥としては廉頗の

樣な君のことをおもふのである。いまこの天涯蜀地の春景色はだんだんたけて一日一日と自分の晩暮もせまり來るの感がある。此時君と直接おあひしてお別れをすることができんので、遠く錦江の波にそへてなみだをおおくりするのである。

贈王二十四侍御契四十韻(一)

王二十四侍御契に贈る四十韻

往往雖相見。飄飄愧此身。
不關輕(二)紱冕。但是避風塵。
一別星(三)橋夜。三(四)移斗(五)柄春。
敗(六)亡非赤壁。(七)奔走爲黃(八)巾。』
子(九)去何瀟(一〇)灑。余藏異隱(一一)淪。
書(一二)成無過(一三)雁。衣(一四)故有懸(一五)鶉。
恐懼行(一六)裝數。伶(一七)俜臥疾頻。

往往相見ると雖も、飄飄此の身を愧づ。
關せず紱冕を輕んずるに、但だ是れ風塵を避く。
一別星橋の夜、三たび移る斗柄の春。
敗亡赤壁に非ず、奔走黃巾の爲なり。』
子去る何ぞ瀟灑たる、余藏する隱淪に異なり。
書成りて過雁無く、衣故りて懸鶉有り。
恐懼す行裝の數〻なるに、伶俜として臥疾頻なり。

曉鶯工(一八)迸淚。秋月解(一九)傷神。』
會(二〇)面嗟黧(二一)黑。含悽話苦辛。
接(二二)輿還入楚。王(二三)粲不歸秦。
錦(二四)里殘丹(二五)竈。花(二六)溪得釣(二七)綸。
消(二八)中祇自惜。晚(二九)起索(三〇)誰親。』
伏(三一)柱聞周史。乘(三二)槎有漢臣。
鵷(三三)鴻不易狎。龍(三四)虎未宜馴。
客(三五)則挂(三六)冠至。交非傾(三七)蓋新。
由來意氣合。直取(三八)性(三九)情眞。』
浪(四〇)迹同(四一)生死。無心恥賤貧。
偶然存(四二)蔗芋。幸各對松(四三)筠。
麤(四四)飯依(四五)他日。窮(四六)愁怪(四七)此辰。
女長裁(四八)褐穩。男大卷(四九)書勻。』

曉鶯工に淚を迸しらしめ、秋月神を傷ましむるを解す。』
會面嗟黧黑なり、悽を含みて苦辛を話す。
接輿還た楚に入る、王粲秦に歸らず。
錦里丹竈殘る、花溪釣綸を得。
消中祇だ自ら惜む、晚起誰を索めてか親まむ。』
伏柱周史を聞く、乘槎漢臣有り。
鵷鴻狎れ易からず、龍虎未だ馴るるに宜しからず。
客則ち冠を挂けて至る、交は蓋を傾くるの新なるに非ず。
由來意氣合す、直ちに性情の眞なるを取る。』
浪迹生死を同じくす、賤貧を恥づるに心無し。
偶然蔗芋存す、幸に各〻松筠に對す。
麤飯他日に依る、窮愁此の辰を怪む。
女長じて褐を裁すること穩かに、男大にして書を卷くこと勻し。』

(五〇)灝口江(五一)如練。(五二)蠶崖雪似銀。　灝口江練の如し、蠶崖雪銀に似たり。
(五三)名園當(五四)翠巘。(五五)野棹沒(五六)青蘋。　名園翠巘に當たる、野棹青蘋に沒す。
屢喜王(五七)侯宅。時(五八)邀(五九)江海人。　屢〻喜ぶ王侯の宅、時に江海の人を邀ふるを。
(六〇)追隨不覺晚。(六一)(六二)欵曲動彌旬。(六三)　追隨晚を覺えず、欵曲動もすれば旬を彌る。
但使(六四)芝蘭秀。何須(六五)棟宇鄰。　但だ芝蘭をして秀でしめむ、何ぞ須ひむ棟宇の鄰るを。
(六六)山陽無(六七)俗物。(六八)鄭驛正留賓。』　山陽俗物無く、鄭驛正に賓を留む。』
出入(六九)竝鞍馬。(七〇)光輝(七一)(七二)參席珍。　出入鞍馬を竝ぶ、光輝席珍に參はる。
重遊(七三)先主廟。更歷(七四)少城闉。(七五)　重ねて遊ぶ先主の廟、更に歷少城の闉。
(七六)石鏡通(七七)幽魄。(七八)琴臺隱(七九)絳脣。　石鏡幽魄を通ず、琴臺絳脣隱る。
(八〇)送終惟(八一)糞土。(八二)結愛獨(八三)荆榛。　終を送る惟だ糞土のみ、愛を結ぶ獨り荆榛のみ。
置酒高林下。(八四)觀碁積水濱。　酒を置く高林の下、碁を觀る積水の濱。
(八五)區區甘(八六)累趼。(八七)稍稍息勞筋。』　區區累趼を甘んず、稍稍勞筋を息はしむ。』
(八八)網聚(八九)粘圓鯽。(九〇)絲繁煮細蓴。(九一)　網聚りて圓鯽粘し、絲繁くして細蓴を煮る。

長歌敲(九二)柳癭。(九三)小睡(九四)(九五)凭藤輪。　長歌柳癭を敲き、小睡藤輪に凭る。
(九六)農月須(九七)知課。(九八)田家敢忘勤。　農月須らく課を知るべし、田家敢て勤むるを忘れむや。
(九九)浮生難去(一〇〇)食。(一〇一)良會惜(一〇二)淸晨。』　浮生食を去り難し、良會淸晨を惜む。』
(一〇三)列國兵戈暗。(一〇四)今王德敎淳。(一〇五)　列國兵戈暗し、今王德敎淳なり。
(一〇六)要聞除(一〇七)猰貐。休作(一〇八)畫麒麟。　猰貐を除くを聞かむと要す、麒麟に畫かるるを作すを休めよ。
(一〇九)洗眼看(一一〇)輕薄。(一一一)虛懷任(一一二)屈伸。　眼を洗うて輕薄を看る、虛懷屈伸に任かす。
莫令(一一三)膠漆地。萬古重(一一四)雷陳。　膠漆の地をして、萬古雷陳を重んせしむること莫れ。』

【字解】【一】王二十四侍御契　侍御史王契なり、注家、元結が集の別王佐卿序を引きて京兆の人王契、字佐卿となす、而して仇氏は黃鶴の說により蜀人王契とし元結の謂ふ所の佐卿と別人なりと爲せり。今仇氏に從ふ。【二】𩏂紱冕　𩏂は輕く視る、紱は赤き革の前垂、高官の禮服、冕は禮冠、以て官位をさす。【三】星橋　秦の李氷、蜀に守たりしとき七橋を造り上斗魁七星に應ず、意は成都をさす。【四】三移　三たびかはる。【五】斗柄春　天文に於て北斗七星の第一より第四に至る星を魁といひ、第五より第七に至る星を杓といふ、杓は卽ち柄なり、柄はひしやくのえをいふ、斗柄は時候により指す方向同じからず、昏にそれが東を指すときは春なり、それが三移するは三年たちしをいふ。【六】敗亡一句　徐知道の叛きて敗れ誅に伏せしをいふ、三國の時、魏の曹操、蜀の諸葛亮と吳の周瑜の謀計のため、赤壁（湖北省武昌府蒲圻縣西百二十里にあり）に於てうち破られたり。【七】奔走　綿・梓・閬の方へゆきしこと。【八】黃巾　後漢末、鉅鹿の張角が叛軍、以て蜀の叛賊に比す、以上王侍御との聚散をのぶ。【九】子去　子は王侍御をさす、去とは京師に赴きしをいふ。【一〇】瀟灑　さつぱりとした貌、往來の苦を意とせざるなり。【一一】隱淪　隱遁して世の下

層にしづむもの、單に隱士をいふ。【一二】書成　書は王の手紙。【一三】過雁　蘇武が故事。【一四】衣　自己の衣。【一五】懸鶉　鶉の羽は斑にして散亂す、貧士の衣は之に似たり、「荀子」に子夏家貧、衣若懸鶉とみゆ、懸鶉とはつゞるした「うづら」。【一六】行裝數　たびたび旅裝をとゝのへる、あちこち奔走するゆゑなり。【一七】伶俜　おちぶれたさま。【一八】工迸涙　巧みに我をして涙を迸らしむる。【一九】解傷神　我がこゝろを傷ましめることを知つてゐる、以上は別後の事をのぶ。【二〇】會面　面會なり、草堂に歸りて成都の人人と逢ひしことをいふ。【二一】黧　黃ばみてくろし、自己の面をいふ。【二二】接輿　楚の狂者の名、「論語」・「莊子」篇にみゆ、自己を比す。【二三】王粲一句　三國魏の王粲なり、謝靈運が擬鄴中詠詩の序に、王粲家本秦川貴公子孫、遭亂流寓とみゆ、粲の流寓を以て自ら比す。【二四】錦里　錦江の里。【二五】丹竈　丹藥を錬るかまど。【二六】花溪　浣花溪。【二七】釣綸　つりいと。【二八】消中　病の名、消渇ともいふ、多く食すれば數溲する病なりと。【二九】晩起　あさおそくおきいでる。【三〇】索諧親　索を求の義とみる、何人を求めて之と親しむべきか、索を索居（さびしく居る）ととく說あり、取らず。以上は再會をのべて、先づ自己を敍す。【三一】伏柱聞周史　「周史の伏柱をきく」の意、老子は周の柱下の史となつた、老子とは無關係のことなるも秦以後柱下御史の官あるにより文字だけ同じき所から老子をひき之を王侍御にあてて用ひたり。【三二】乘槎有漢臣　「漢臣の槎に乘するあり」の意、乘槎は漢の張騫が故事。王に比す。【三三】鵷鴻　ともに「おほとり」なり、鵷鶵發於南海飛於北海は「莊子」にみゆ、以て王に比す。【三四】龍虎　王に比す。【三五】客　王をさす。【三六】挂冠　辭職すること、後漢の逢萌、王莽が政を操するや冠を解き東都の門に掛けて去る。【三七】傾蓋　孔子と郯の程子との故事。二人はじめて途中であひ車をとどめ車蓋を傾けて語る、「漢書」鄒陽傳に白頭如新、傾蓋如故とみゆ。【三八】取　王がとる。【三九】性情眞　自己の眞、以上は主として王侍御のがはを敍す。【四〇】浪迹　流浪する。【四一】同生死　生も死も同樣に視なす。【四二】存蔗芋　草堂に野菜畠を有するをいふ。左思が蜀都賦に、瓜疇芋區、甘蔗辛薑とみゆ、蔗は砂糖キビ、芋はイモ。【四三】松筠　筠は竹色をいふも竹の義として用ふ。【四四】糲飯　粗末なめし。【四五】依他日　他日は往日なり、依るとは過去のとほりに依り從ふをいふ。【四六】窮愁　困窮愛愁なり、ゆきづまり、心配する。【四七】怪此辰　辰は時なり、次の二句が怪しむ理由なり。【四八】裁褐穩　おだやかに粗末な毛織物をたつ、裁縫ができること。【四九】卷書勻　でこぼこせぬ樣に卷物の書をまく、男兒女兒長大なるに至れば娶として婚嫁せしめざる可からず、これ愁を增す所以なり、以上は王侍御の草堂への來訪をいひ自己の胸中を訴へたり。【五〇】湍口　湍は塌に作るべし。蜀人は堰のことを塌と日ふと。導江縣（今の灌縣の一部）の都安縣にあり。【五一】江　岷江なり。【五二】靈巖　導江縣西北四十七里にあり。【五三】名園　有名の園林、王侍御が園。【五四】翠甑　甑は甑（おかま）に似たる山。【五五】野棹　野水にうかべる舟のさを。【五六】頑　うきぐさ。【五七】王侯宅　王や侯の樣な身分の高いひとの宅、嚴武や王侍御をひきくるめていふ。王は姓にて王侯とは玉君なりといへる仇注、時に侍御は故侯の廢宅を貸して住居とせしならんとの浦注は、余取らず。【五八】邀　むかへる。【五九】江海人　江海にさまよふ浪人なり、自己をさす。【六〇】追隨　あとにつきそふ。【六一】晩　日の暮るるをいふ。【六二】款曲　款は款の俗字、款曲は委曲の義、こまかに語らふこと。謝靈運が「酬從弟惠連」詩に款曲洲渚言とみゆ。【六三】旬　十日。【六四】芝蘭秀　「易」繋辭の同心之言、其臭如蘭とある意を用ひしならん、仇氏は「孔子家語」の與善人居、如入芝蘭之室を引きたり。【六五】棟宇　むなぎ、やれ。【六六】山陽　河内の山陽なり、魏末に嵆康向秀等竹林七賢の居りし處、今河南省懷慶府修武縣の北にあり。【六七】俗物　阮籍（七賢の一人）、王戎に謂つて曰く、俗物亦復來敗人意と。【六八】鄭驛　漢の鄭當時、字は莊、常に長安の諸郊に驛馬を置きて日夜賓客を送迎せり、山陽鄭驛竝に王侍御がことに比す。以上は作者が王侍御の導江縣の宅を訪問して歡待されしことを敍す。【六九】竝鞍馬　作者と王とならぶるなり。【七〇】光輝　光榮あること。【七一】參　まじはる。【七二】席珍　珪璋のごとき美玉をさす、坐中の美賓に比す、詳は卷三の二五四頁「席上珍」句解をみよ。【七三】先主廟　蜀の先主劉備が廟なり、成都府城南八里惠陵の東にあり。【七四】少城　卷十一「秋盡」詩の少城畔の解をみよ、張儀の築きし所、大城の西にあり。【七五】闍　「城内の重門」、城の「ますがた」の所の門をいふ。【七六】石鏡　卷十「石鏡」詩をみよ、蜀の古王開明の妃の塚なりと傳ふ。【七七】幽魄　開明王の妃のたましひ。【七八】琴臺　卷十「琴臺」詩をみよ、司馬相如が琴をひきて卓文君を挑みしといふ遺跡。【七九】絳脣　卓文君があかきくちびる。【八〇】送終　妃の最後を送りて葬りしこと、此句は上の石鏡の句を承く。【八一】惟糞土　ただ糞土をあますのみ。【八二】結愛　相如が文君と愛をむすびしこと、此句は上の琴臺の句を承く。【八三】獨荊榛　いばら・はり・のみをあます。【八四】高林・横水　これ

は一定の場所をいはざれども蓋し錦江附近についていへるものならん。【八五】區區　自己のこせこせとした心。【八六】累趼　趼は足に豆をでかすこと、作者時として「繭」の字をも用ふ、同義なり。「莊子」に重趼の語あり、累趼は重趼なり、豆をかされてでかすをいふ、奔走すれば豆ができる。【八七】稍稍　すこしづつ、しだいに、以上は王侍御との諸方への同遊をのぶ。【八八】綱案　一所にあみをあつめること。【八九】粘圓鯽　粘とはあみに附着すること、圓鯽は蓋し幅のわりあひに長の短きフナなるべし。【九〇】絲繁　絲はじゆんさいの線をいふ。【九一】蓴　じゆんさい。【九二】柳瘿　曹植が詩に我有柳瘿瓢とみゆ、柳のこぶの樣なひさご、以て酒をいるるなり。【九三】小睡　ゐねむり。【九四】凭　よる、もたれる。【九五】藤輪　或は曰く車なりと、或は曰く藤蔓にて作りし蒲團なりと、後說に從ふ、輪は圓形をいふならん。【九六】農月　農事をはげむべき月。【九七】知課　課は日課、日日わりつけてする仕事。【九八】田家　農家。【九九】浮生　人生。【一〇〇】去食　食物をとりさる。【一〇一】良會　親友との會合。【一〇二】淸晨　天氣のよいあした。以上はまた王侍御に就きて飲み、しかも農月なるの故を以て留まりがたく去らざる可からざるをいふ。郭注、仇注は浣花草堂に於ける宴をいふと解きたれども、客と飲みて農事がいそがしいなどいひだすはいかがのものにや、故に取らず。【一〇三】列國　諸國。【一〇四】今王　代宗。【一〇五】淳　まじりけなし、淸し。【一〇六】要閑　自己がきかんともとむるなり。」【一〇七】除猰貐　猰貐、また猰㺄に作る、「爾雅」に猰貐は貙に類し虎の爪あり人を食ふ、疾く走る、とみゆ、人を害する獸なり、これは盜賊をたとへていへり、除は「のぞく」。【一〇八】畫麒麟　此句舊解に形貌を麒麟閣上に畫かるること(解は卷三、二〇五頁をみよ)と說き、一句の意を「徒らに閣上に畫かるるを念とするなかれ」とみたり。仇氏之を駁して、これは麟閣圖形の事と關係なしといひ、「朝野僉載」を引き曰く、楊炯つねに朝官を目して麒麟楦となせり、云云。楦は型なり、芝居にて麒麟を演ずるときには驢馬にキリンの皮をかぶせる、皮をとれば依然たる驢馬なり、麒麟の名ありて麒麟の實なきを麒麟楦といふ、因つて畫麒麟を「畫けるキリン」の義とときて、尸位素餐を戒むるなりといへり。(休作畫麒麟は仇說によれば「畫ける麒麟と作ることを休めよ」と訓す。)仇說一應道理の樣にきこゆれども王侍御の現在の身分は如何、已に冠を掛け辭職退位の人なり、其人に向つて尸位を戒むるは事に切ならず、故にやはり舊解のごとく顯榮を念とするなかれと爲すを優れりと信ず。【一〇九】洗眼　崔安、長安中に豪家の輕薄子多きを見て曰く、吾當に眼を洗うて輕薄を見るべしと。【一一〇】輕薄　世間の交際のまじめならぬさま、此句自己についていふ。【一一一】虛懷　むねにわだかまりなし。【一一二】任屈伸　在官を伸といひ、退處を屈といへり、此句侍御についていふ。【一一三】膠漆地　交情の親密なる境地。【一一四】雷陳　後漢の雷義と陳重をいふ、二人の交り至つて親密なり、當時の人の語に曰く、膠漆自謂堅、不如雷與陳と。以上身世の感をいひ交情の密ならんことを希望して結とす。

【題義】侍御史王契に贈つた詩。廣德二年春の作。

【詩意】あなたとは時時面會するのであるがいつも自分の身はただよひつつあることはおはづかしいことである。そのただよひつつあるのは官位を輕蔑してゐるのなんのといふことには無關係なので、ただ亂世の風塵を避けてゐるために外ならない。星橋(成都)の夜にお別れしてから、はや春を指す北斗星の柄が三たびうつりました(三年たつた)。此の間自分は黃巾の賊(徐知道等の亂)のために他方に奔走し、賊徒はかの赤壁の敗軍ではないがともかく敗亡してしまつた。』あなたはまたさらりとして何の苦もなげに都の方へおいでになつたし、わたくしは隱遁者といふではないが藏れてをりました。あなたのお手紙はできてゐたでせうがそれをもつてきてくれる雁は無く、わたくしはふるびた衣を着けてまるで鶉をつるした樣の體裁でありました。わたくしはあまりたびたび旅行のしたくばかりするので心はおちけ、おちぶれながらしきりに病氣をしてをりました。春には曉のうぐひすが啼くがそれはただ巧みにわたくしをして悲みの涙をほとばしらせるだけのものであり、秋の月はさやかに照るがそれはただわたくしのこころをいたましめることをこころえてゐるに過ぎませんでした。』やがて成

都に歸つて人に面會すると自分の顏つきは黃黑色をしてをる、むねにかなしみをもちながら苦辛ばなしをしました。自分の歸つたのは狂者接輿が楚にもどつた樣なもの、また王粲が故鄕の秦へもどらぬ樣なものである。錦江の里には以前のごとく丹藥を鍊るかまどが殘つてをり、浣花溪には以前のごとく釣絲を手にすることができた。が消渇のやまひをわづらふ身にはひとりで吾が身を惜み、ゆつくり朝寢をしては誰をさがしだして親しいつきあひをしてよいかわかりませぬ。』そのときあなたは御史の職に在つて(老子のごとく)遠國へお使にゆかれた(張騫のごとく)のである。あなたはたとへば鵷鴻の狎れ易からざるがごとく、龍虎の馴らしにくいごときものである。そのあなたが辭職をしてわたくしの方へおいでになつた、もとより我我の交りは始めて車蓋を傾けて語りあふごとき昨今のものではなし、原來お互の意氣が投合してゐる上にあなたはわたくしの性情のかざらぬところをお取りになつてゐるのである。』わたくしは流浪のみの上で生も死も同じ樣に見なしてをるもので、貧賤を恥づる樣な心はすこしもありませぬ。偶然ではあるがわが草堂には砂糖きびや芋があるのでそんなものをおそなへし、しあはせとお互に松や竹にうちむかうて之と節操をくらべてみる。わたくしは今も過去の日の樣に粗末なご飯をたべて平氣でゐるが、けふこそはなんでかく困窮憂愁を去り難いのかと怪まるるのである。といふは女兒も生長して毛織の着物を工合よく裁てる樣になつたし、男の兒も大きくなつて卷物の書を不揃ひでなく卷ける樣になつたのでござりまする。』あなたのお住ひになつてゐる導江縣では堋口では岷江が練絹のごとくながれ、蠶崖では雪が銀の樣によこたはつてゐる。あなたの名園は青い山のうへに設けてあり、野水に船をうかべれば棹は青いうき草のなかに沒する。自分は王侯の樣なあなたがたのお宅が時としてわたくしの樣な江海の人物をむかへてくださることを喜ぶ。あなたに隨つて遊ぶときは毎日日の暮れるのもわすれてあそび、こまかに心おきなくものがたりしてややもすれば十日以上にわたることさへある。我我の間の交際にはただ芝蘭の樣なかんばしい花をさかせ得れば(「易」に言うてある樣に)よい、鄰あひに住んでゐなくてもよろしいのである。竹林七賢の住んだ山陽に比すべきここには俗物はゐないし、鄭當時が驛馬を置いて賓客をもてなした樣にあなたはお客をおひきとめになるのである。』それだけではない。わたくしは席上の珍たる珪璋に比すべき賓客にまじはるの光榮をになひ、出るにも入るにもあなたと鞍馬をならべ、或は再び成都の蜀先主廟にあそび、または少城の升形をとほり、「石鏡」をおとづれみれば、そこには古王妃のたましひがまだ往來するかとおもひ、「琴臺」をたづぬれば、そこには美人の絳き脣すでにかくれてみえず。いかに古代の王がその王妃を丁寧に葬つたところがのこつてゐるものはただ糞土ばかり、いかに生前に佳人と才子とが愛を結んだところで年へてみればただ荊や榛の木ばかりがのこるのである。またあるときは高い林のしたで酒宴を設けたり、あるときは多く水のある川べりで碁をうつのをながめたり、じつに種種さまざまの處に遊びをした。自分のこせついた心ではかく遊ぶためにはいくら足に豆ができようとか

まはぬと思ふが、さうばかりもならぬので勞らした筋にもすこしづつ休息をあたへる樣にした。』またお宅でおもてなしにあづかると、網うちをして肥つた鮒が附着するとそれを料理したり、絲すぢしげき細い蓴菜を煮てくださつたりする。自分は柳嬰のひさごをたたきながらふしながく歌をうたひ、あるひは藤蔓の坐蒲團によりかかつてゐねむりをする。愉快なことこのうへない。しかし今は農事の忙はしい月で我我は毎日の耕作日程をこころえておかねばならぬ。農家では勤めるといふことを忘れるわけにはゆかぬ。吾吾の生活に於ては食物といふものをとり去ることはできぬ、だからごいつしよに會合してゐるのは面白いがお別れをせねばならぬのでけふのあさげが惜まれるのである。』いま聖天子の德教はきよらかであるが、諸國では兵亂で暗くある。わたくしは麒麟閣に像を畫かれる樣なことを念としてはなたといふはなしをききたいとおもふ。あなたは徒らに麒麟閣に像を畫かれる樣なことを念としてはなりませぬ。ただ實功をあげることをつとめねばならぬ。自分は眼を洗つてよく今の世の人の交際の輕薄なことを看つつある、あなたは在朝と在野とをとはすむねのうちをひろくしてをられる。むかしから親密な友情のためしとして雷義と陳重とを重んじてゐるが、千年萬年たつても彼等ばかりを交りの厚い例とする樣にはさせてくださるな。(我我の交りは彼等以上となるべきである、の意。)

登樓(一)

樓に登る

花近高樓傷客心(二)。
萬方(三)多難(四)此(五)登臨(六)。
錦江(七)春色來(八)天地。
玉壘(九)浮雲(一〇)變古今(一一)。
北極(一二)朝廷終不改(一三)。
西山(一四)寇盜(一五)莫相侵(一六)。
可憐(一七)後主(一八)還祠廟(一九)。
日暮聊爲梁父(二〇)吟。

花高樓に近うして客心を傷ましむ、
萬方多難此に登臨す。
錦江の春色天地より來り、
玉壘の浮雲古今變ず。
北極の朝廷は終に改まらず、
西山の寇盜相侵すこと莫れ。
憐む可し後主還た祠廟、
日暮聊か梁父の吟を爲す。

【字解】【一】樓　成都の城樓ならん。【二】客心　旅ごころ。【三】萬方　諸方。【四】多難　難とは天下兵亂の難。【五】此　高樓をさす。【六】登臨　高きに登りて下に俯し臨む。【七】錦江　即ち岷江の支流にして流江としいふ。郫縣の西より分流し、府城の東南に至り、郫江に合し、折れて西南彭山縣界に入る。【八】來天地　來とは來り生ずる意ならん、此句の句法は春從天上來のごとき意を用ひしならん。和氣發生ないひて暗に下の「朝廷不改」を伏す。【九】玉壘　山の名、灌縣の西北にあり、唐の貞觀年中に關を其下に設けたり、乃ち吐蕃往來の衝に當るところなり。【一〇】浮雲　うかべるくも。【一一】變古今　古今ともに雲の變化あり、雲變は亂の象なり、景を敍して暗に下の「寇盜相侵」を伏す。【一二】北極　北辰なり、北辰は自己は其所に居て動かず、衆星之に向つて拱する所のものなり、故に朝廷の位を之に比す。【一三】不改　改易なきをいふ。【一四】西山　雪山。【一五】寇盜　吐蕃をさす。【一六】相侵　相の字相互の義にはかぎらず、こちらに關係あれば相といひてさしつかへなし、相侵といふとも吐蕃のみがこちらへ侵入し來るをいふ。事實は廣德元年十月、吐蕃長安を陷れ代宗出で奔り郭子儀の力により十二月長安に還る。而して是の月吐蕃は蜀の方面にては松・維・保の三州を陷れ、高適之を救ふ能はず。【一七】可憐　惆然同情の意を起すなり。【一八】後主　蜀の後主劉禪をいふ、蜀先主廟は中央室に

先主、西室に諸葛武侯、東室に後主を祀りしといふ。【一九】還祠廟　還は「亦」なり、後主の不肖と雖も亦た祠廟に祭祀なうくるないふ。說者或は代宗を後主の暗愚に比すといふは失體甚しきものに非ざるか。【二〇】梁父吟　卷一の三六頁「梁甫吟」句の解をみよ、仇氏、黃生の說を引き、梁父吟は卽ち登樓詠ずる所の作を指す、これ別に一說なりといへり。余は黃生の說に贊す、余は別に一證を擧げん、作者の「同李太守登歷下古城員外新亭」詩の終りに不阻蓬蓽興、得兼梁甫吟（卷一の三六頁）といへる梁甫吟は自作をさす、今此處も同意とみるべし。作者平生、諸葛亮のごとき人物を以て自任するが故に自作を梁甫吟を以て比するものなることは言ふまでもなし。本篇の尾二句、諸說紛紛たり、余は鄙見に由りてとく。

【題義】成都の城樓にのぼりて見る所と感ずる所とをのべたり。廣德二年春の作。

【詩意】たかどの近く花が咲きみだれてゐるがこれをみるとわが旅ごころが傷む。なぜなればいま諸方に艱難が多いをりにここにのぼつてながめるのであるから。天地から生じ來つた春げしきは錦江にみなぎつてゐるが、玉壘山に浮ぶ雲は古今となくつねに變動しつつある。いかになにものがさわいだとて北辰のごとき吾が朝廷はあくまで改易することのなきものである。西山の寇どもよ、決して吾が國內へ侵入してきてはならぬぞよ。ああ、蜀の後主の祠廟があれにみえる。後主の樣な人でさへ補佐其人を得ればかく廟食することができるのだ。いまはいかがであるか、之をおもへば感慨無量で遂に日暮れにあたつて聊かこの拙吟を詠ずる次第である。

寄邛州崔錄事

邛州の崔錄事に寄す

邛州崔錄事。聞在果園坊。　邛州の崔錄事、聞く果園坊に在りと。

久待無消息。終朝有底忙。　久しく待てども消息無し、終朝底の忙か有る。

應愁江樹遠。怯見野亭荒。　應に江樹の遠きを愁ふるなるべし、野亭の荒るるを見る ことを怯るるや。

浩蕩風塵際。誰知酒熟香。　浩蕩たる風塵の際、誰か知らむ酒熟して香しきを。

【字解】【一】邛州　四川省邛州臨邛縣、成都の西にあたる。【二】崔錄事　錄事崔某。【三】果園坊　成都にある坊の名、卷九「詣徐卿覓果栽」詩にもみゆ。【四】有底忙　底は俗用、「何」字の義に同じ。【五】愁　崔がうれふる。【六】江樹　錦江のほとりの樹。【七】怯見　崔が見るをおそるるなり。【八】野亭　草堂をいふ。【九】浩蕩　大にうごく。

【題義】邛州の錄事の官をしてゐる崔某にやつた詩。廣德二年春の作。

【詩意】邛州の錄事崔君よ。聞く所によると君は果園坊にゐるさうではないか。自分はながらく君をお待ちしてゐるがさらにお消息が無い、朝ぢうどんな忙しいことがお有りなのか。吾が住居してゐる錦江の樹木の遠すぎるのを心配されてゐるためでもあらう。またあるひは吾が草堂の荒れたのを見ることをおそれてをられるのでもあるか。今の亂世に風塵のうごきつつあるとき、酒の熟して香しくなつてをるのを何人がよく知らうぞ。（それを知るものは僕と君ぐらゐのものだ、一杯飮みにこぬか、の意。）

王(一)錄事許(二)修(三)草堂貲(四)不到(五)聊小詰(六)

王錄事草堂を修むる貲を許す、到らず、聊か小詰す

爲(七)嗔王錄事不寄草堂貲。　爲に嗔る王錄事が、草堂の貲を寄せざるを。

昨屬(八)愁(九)春雨。能忘(一〇)欲漏(一一)時。　昨春雨を愁ふるに屬す、能く忘れむや漏れむと欲する時を。

【字解】【一】王錄事　錄事王某。【二】許　許諾せしこと。【三】修　修繕する。【四】貲　たから、金錢をいふ。【五】到　こちらへとどくこと。【六】詰　なじる、せめとふ。【七】爲嗔　爲は「ために」、自己のためにの意。嗔の字もと瞋に作る、仇氏之を改む。嗔は盛氣なり、犀なり、瞋は目をみはりて怒るなり、杜詩には嗔を用ふべき處に多く瞋を用ひたり。【八】屬　そのときにあふこと。「たまたま」と副詞にみるも可なり。【九】愁　この字を仇注は王錄事へかけ、錄事が作者のためにうれふることと說けり。余は作者自己がうれふる義とみる。【一〇】能忘　能は豈字のごとし、反語によむ。忘は錄事が忘るるなり。【一一】漏　草堂のやれに雨もりするをいふ。

【題義】錄事王某君がわが草堂を修繕する金錢をよこしてくれることを承諾してくれたのに、それが自分のもとへとどかぬので、すこしなじつてやつた詩。廣德二年春の作。

【詩意】自分は王錄事が已に承知しながら草堂の修繕費をよこしてくれぬことを自分みづからの爲めにいかるものである。自分は昨日ちやうど春雨がふりそそぐことを心配したのである。君はまさかほうつておいたら僕の草堂が雨もりしさうなのを忘れはしまいね。

歸雁(一)

歸雁

東來(二)千里客。亂定幾年歸(三)。　東來千里の客、亂定まりて幾年にか歸らむ。

腸斷江城(四)雁。高高正北飛(五)。　腸は斷ゆ江城の雁、高高正に北に飛ぶに。

【字解】【一】歸雁　北へかへるかり。【二】東來　東方より來る、梓・閬の方向より來りしをいふ。【三】幾年歸　幾年は何年の意。亂定幾年歸は幾年亂定歸といはんがごとし。【四】江城　江ぞひの城、成都城をいふ。【五】北飛　北は長安の在る方位。

【題義】春さき北方へかへる雁をみてよめる詩。廣德二年春成都にての作。

【詩意】東の方からもどつて來た遠方のたびびと（自己）はいく年たつたら兵亂が平定して故鄉へ歸ることができるだらう。いま江城のうへをわたる雁をみると自分の腸はちぎるるばかりだ、なぜかといふと、その雁はちやうど高高と北、故鄉の方へむかつて飛んでゆくではないか。

絶句二首(一)

絶句　二首

遲(二)日江山麗。春風花草香。　遲日江山麗し、春風花草香ばし。

泥(三)融飛燕(四)子。沙暖睡鴛鴦。　泥融けて燕子飛び、沙暖かにして鴛鴦睡る。

【字解】【一】絶句　卷九の三四八頁、卷十の四六一頁、卷十一の四九二頁、四九五頁に絶句と題せる作あり。他にも別に題辭ありてその形式は絶句なるものありたり。絶句は七言も五言も歐謠より起りたり。今特に五言絶句について少しく說明すべし。絶句はふるくは斷句ともいふ、古詩は一章又は一解を積みて一篇となす。章、解の句數は一定せざれども、おほよそ四句より成るを通例とす、一篇の中より成る章（又は解）を斷取せるが斷句または絶句なり。絶句は大略かくして生じ來れるものにして律詩と稱するものよりも其の形式早く存するなり。「絶句は截句なり、律詩を中截して前後に分ちたるものなり」と說くは後代の俗說なりと知るべし。【二】遲日　いつまでも暮れぬ日、春の太陽をいふ。【三】泥融　融とはこまかにやはらかにとろけあふをいふ、寒凍のときは泥土もかたまりてあるべし、後に見えたる絶句四首の第一首に「塹北行椒」の語あるにより、この泥は草堂の北にあたる塹のどろなるを知る。【四】燕子　「子」はそへ字なり、「子」の字をつけても單に「つばめ」なり。初二句は大局についていひ、後の二句は細物をあげたり。

【題義】此篇は詩形の名たる「絶句」と題したるのみにて、題に義なし。譯者代りて之をいはば此の二首は第一首は春の景物を敍し、第二首は景物を敍すると共に懷鄕の情を添へてのべたり。廣德二年春、成都にての作。

【詩意】ゆつくりと度る日あしがさして江や山がうるはしくみえ、春の風が吹いて草花がかんばしくにほうてゐる。（北の塹では）泥がとろけたので巢をかまへんとてか燕が飛び、（東の江では）沙があたたかなので鴛鴦がここちよげに睡つてゐる。

〔二〕　　〔二〕

（一）江碧鳥逾白。（二）山青花欲燃。　江碧にして鳥逾白く、山青くして花燃えむと欲す。

今春看（三）又過。何日是歸年（四）。　今春看るみる又過ぐ、何の日か是れ歸年ぞ。

【字解】【一】江　錦江。【二】山青一句　鮑照が句に山櫻紅欲燃、庾信が句に山花焰欲燃などあり、杜句の妙は色彩の對照の鮮明なるに在り。【三】看　みるみるうちにの意。【四】歸年　故鄕へかへれる年。

【詩意】江の水が碧なのでそこにういてゐる鳥の色はいよいよまつ白にみえ、山の色が青いのでそれにうつろふ花の色は燃えんばかりに紅にみえる。まことにうつくしいけしきではあるが、ことしの春もみるみるうちにまた過ぎ去つてしまはうとしてゐる。自分が故鄕へかへれる年はいつのことなのか知ら。

寄司馬山人（一）十二韻　　司馬山人に寄す　十二韻

（二）關內昔分（三）袂。天邊今轉蓬（四）（五）。　關內昔袂を分ちき、天邊今轉蓬なり。

（六）驅馳不（七）可說。談（八）笑偶然同。』　驅馳說く可からず、談笑偶然同じ。』

（九）道術曾留（一〇）意。先（一一）生早擊（一二）蒙。　道術曾て意を留む、先生早く蒙を擊つ、

家家迎（一三）薊子。處處識壺（一四）公。　家家薊子を迎ふ、處處壺公を識る。

(一五)長嘯(一六)峨嵋北。(一七)潛行(一八)玉壘東。　長嘯す峨嵋の北、潛行す玉壘の東。
有時(一九)騎猛虎。(二〇)虛室使(二一)仙童。　時有つてか猛虎に騎る、虛室仙童を使ふ。
髮少(二二)何勞白。(二三)顏衰肯更紅。　髮少し何ぞ白なるを勞せむ、顏衰ふるも肯て更に紅なり。
(二四)望雲悲(二五)轗軻。(二六)畢景羨(二七)沖融。　雲を望みて轗軻を悲み、畢景に沖融なるを羨む。
(二八)喪亂(二九)形仍役。(三〇)淒涼信不通。　喪亂に形に仍ほ役せらる、淒涼信通せず。
(三一)懸旌(三二)要路口。(三三)倚劍(三四)短亭中。」　旌を懸く要路の口、劍に倚る短亭の中。」
永作殊方客。殘生一老翁。　永く殊方の客と作る、殘生一老翁。
相哀(三五)骨可換。亦遣(三六)馭清風。」　相哀まば骨換ふ可けむ、亦た清風に馭せしめむ。」

【字解】【一】司馬山人　山人は山中にかくるる人、この人仙道を知れるものとみえたり。【二】關內　關中におなじ、長安をいふ。【三】分袂　たもとをわかつ。別るること。【四】天涯　天涯の意、成都をいふ。【五】轉蓬　よもぎのころがるごとくさまよふ。【六】驅馳　亂を避けて奔走するなり。【七】不可說　一一にはいひつくせぬ。【八】談笑　相逢ひしをいふ、以上は二人の聚散をのぶ。【九】道術　僊道、卷一の六三頁、「奉寄河南韋尹丈人」詩にいふ、周流道術空、と。【一〇】留意　注意する。【一一】先生　司馬山人をさす。【一二】擊蒙　「易」の蒙卦の上爻に擊蒙の語みゆ、無智蒙昧をうち開きて智あらしむること。これは山人が作者に儒の外に仙道あるを知らしめしをいふ。【一三】迎薊子　薊子は後漢の薊子訓、仙人なり、彼、京師に入るや公卿以下數百人の訪問をうく。卷一の六四頁、「奉寄河南韋尹丈人」詩の謬懸知薊子の句解をみよ、ここも亦以て自己に比せり。【一四】竇公　賣藥の仙人なり、後漢の費長房、市の吏となりしに或る賣藥の老翁あり一壺を肆に懸け、市罷めば跳つて壺中に入る、長房之を異しみ往いて再拜し、同じく壺のうちに入る。」以て司馬に比す。【一五】長嘯　ながくうそむく。【一六】峨嵋　四川嘉定府峨眉縣西南にある名山なり、この句山人をいふ。【一七】潛行　人知れずあるく、「哀江頭」詩の春日潛行曲江曲の潛行と同じ。この句自己をいふ。【一八】玉壘　前の「登樓」詩をみよ、此句ば自己をいふ。【一九】騎猛虎　危險にであふをいふ。仙術をいふに非ず。此句ば山人をいふ。【二〇】虛室　だれもゐぬへや。【二一】仙童　こどもの仙人、此句は山人をいふ。【二二】何勞白　しろくなることを煩はすまでもなし、此句自己をいふ。【二三】顏衰一句　此句山人をいふ。【二四】望雲　青雲のたかきをながめる。【二五】轗軻　不遇の貌、此句自己をいふ。【二六】畢景　夕日のひかり、人生の晩暮をいふ。【二七】沖融　卷三「渼陂行」にもみえたり、水の虛空に似たるさま、ここは蓋し陽春の和氣の様子をいふものにして山人のわかわかしきをいふ。此句の形は羨畢景之沖融の義なり。畢景も山人へかかるなり。【二八】喪亂　人死し世みだる。【二九】形仍役　心を形體の奴隸となす、此句自己をいふ。【三〇】信　音信なり、山人の消息。【三一】懸旌　ぶらさがつてゐるはた。心のゆれるさま。「史記」蘇秦傳に、心搖搖如懸旌無所終薄。【三二】要路口　作者萬里橋のほとりに居る、故に之を要路の口といふ。此句自己をいふ。【三三】倚劍　國事を慨くさま。【三四】短亭　里程の短かい丁場のやすみ所、唐時の驛店、十里に一長亭、五里に一短亭をおく。これ山人旅宿の際をいへり、以上は自他を對敍す。道術曾留意より倚劍短亭中まで十六句、仇注は前八句を山人の行迹を敍し、後八句を自ら情事を敍すと判然二段に分ちしが故に詩意通じがたき憾あり。今愚見を以て之を疏通せんと試みたり。【三五】骨可換　「漢武內傳」に仙法をのべて、一年にして氣を易へ、二年にして血を易へ、三年精を易へ、四年脈を易へ、五年髓を易へ、六年骨を易へ、七年筋を易へ、八年髮を易へ、九年形を易ふ、といへり、骨を換ふるば凡人の骨をかへて仙人の骨とするなり。【三六】馭清風　「莊子」に、列子が風に御して冷然として善しといへることを記せり。以上は山人に仙術を授けられんことを望めり。

【題義】山人司馬某にやつた詩。廣德二年春、成都にての作。

【詩意】わたくしはむかし關中(長安)であなたと袂を分つたが今は天のはてなるこの成都で流浪してゐる。そのあひだあちこちかけめぐつたことは一一いふことはできぬ、それがまたあなたと一しよに談笑することのできたのは偶然のことである。』わたくしはかつて儒道に意を留めたが、先生は早くわたくしの蒙昧を打開してくれられた。あのころは都ではどの家でも薊子に比すべきわたくしを迎へてくれる、またいたる處で壺公に比すべきあなたをしらぬものはなかつたのである。ところがあなたは峨嵋山の北に長く嘯かれる、わたくしは玉壘の東に賊難をさけてあるく、わたくしは時としては猛虎に騎る樣な危險なめにあふ、あなたは人氣のない部屋で仙童を使役してをられる。わたくしは髮が拔けて少くなつて白髮になるまでの手間はいらぬが、あなたは顏つきが衰へてもどうしたものかむりにまた紅になつてをられる。わたくしは高く飛ぶ雲をながめては身の不遇を悲み、あなたが人生の晩暮になりながらも春の樣な陽和な氣をたたへてをられるのを羨ましくおもふ。わたくしは喪亂にあひつつ今に肉體のためにおひつかはれてゐてあなたの御樣子を知りたくはおもつてゐたのだが悲しくもおたよりが通じなかつたのである。わたくしはこの成都の要路のいりくちでふはふはしてゐる旌の樣なおちつきのないこころもちをしてをるが、あなたは短い丁場の驛路で劍に倚つて慷慨してをられる。』わたくしはながらく他鄉の客となつていまわづかに生きながらへてゐる一のおいぼれぢいさんである。このわたくしをきのどくだとおもうてくださるならばこの俗骨でもそれを仙骨にかへることができるでありませう。それのみならずまた昔の仙人の樣にわたくしをして清風に馭して天へのぼることができる樣にしていただきたいとねがふのである。』

黄河二首

黄河　二首

(一)黄河北岸(二)海西軍。　黄河北岸海西の軍、
(三)椎鼓鳴鐘天下聞。　鼓を椎し鐘を鳴らし天下に聞こゆ。
(四)鐵馬長鳴(五)不知數。　鐵馬長鳴數を知らず、
(六)胡人(七)高鼻(八)動成羣。　胡人高鼻動もすれば羣を成す。

【字解】【一】黄河北岸　是れ蓋し甘肅省西寧府に流るる黄河の北岸をいふ、其地は吐蕃の占領せし所なり。【二】海西軍　漢の時、金城允吾縣北に西海郡を置く、(允吾縣の故城は甘肅省蘭州蘭皐縣の西北にありて黄河の北・湟水の南に在りしもの。)唐の時其地に軍を置く、此詩に謂はゆる海西軍はそれなるべし。此地も亦吐蕃に陷る。【三】椎鼓　たいこをつちでうちならす、鼓は軍を進むるに用ひ、鐘は軍を收むるに用ふ、是は官軍が體面上なすなり。或は曰く椎鼓鳴鐘は飲食宴樂の華侈なるをいふ、と。亦一說なり。【四】鐵馬　よろほうたうま。【五】不知數　無數に多くある。【六】胡人　吐蕃のえびす。【七】高鼻　えびすの面相なり。【八】動　ややもすれば。

【題義】黄河と題したるは第一句の首の二字を切りとりて用ひしまでなり。詩の內容は吐蕃が黄河北岸から內地の方へ侵入せることをうれへたるなり。吐蕃の長安への侵入は廣德元年十月にあり。詩

は第二首と同時とすれば廣德二年の作か。

【詩意】黄河の北岸にゐる海西軍、彼等が太鼓をうち鐘を鳴らしつつあるそのおとは天下に聞こえてゐる。それなら兵備がゆきとどいてゐるかといふとその反對に、えびすの乘つてくるよろほうた馬はいないいて其の數はどれだけあるかわからず、えびすの高い鼻はややもすれば羣をなしてやつてくるのである。

〔二〕

黄河南岸是吾蜀。　黄河南岸是れ吾が蜀、
欲須供給家無粟。　供給を須たむと欲するも家に粟無し。
願驅衆庶戴君王。　願はくは衆庶を驅りて君王を戴き、
混一車書棄金玉。　車書を混一して金玉を棄てむ。

【字解】〔一〕南岸　これはすぐにくつついた岸といふにはあらず、南方といふほどの意なり、南の字もと西に作る、趙彥材南に改む、從ふべし。〔二〕是吾蜀　蜀は甘粛省西寧府境内の黄河に對すれば南方に位せり。ここは蜀地のことをいふも、實は蜀の官軍をいふものにて、卽ち嚴武の部下をさす。武が軍は吐蕃に備ふるものにして糧食を要す。〔三〕須　軍にて要用とするなり。〔四〕供給　糧食をそなへる。〔五〕家　民家。〔六〕粟　もみ。〔七〕混一車書　前の「題桃樹」詩の天下車書の句解をみよ。車は軌を同じくし、記載物は文字を同じくすること、天下統一のさまなり。〔八〕棄金玉　金玉の類を寶とせざるの意なり。奢侈をやめること。

【題義】此篇は蜀軍についてのべ、人民の軍の糧食を供給する力なきをあはれみ、天下の一統平和をねがふこころをいひあらはしたり。

【詩意】黄河の南岸は吾が蜀の地だ。蜀にも軍隊がゐる。彼等は糧食の供給を求めんとしてゐるが民家には粟がない。どうか多くの人民を驅つて吾が君を奉戴せしめ、天下の車書を同軌同文に一統して奢侈にわたる金玉の類を棄てて顧みぬ樣にしたいものである。

揚旗【原注】二年夏六月。成都尹嚴公。置酒公堂。觀騎士試新旗幟。

揚旗【原注】二年夏六月、成都の尹嚴公、酒を公堂に置き、騎士の新旗幟を試むるを觀る。

江風颯長夏。府中有餘淸。　江風長夏に颯たり、府中に餘淸有り。
我公會賓客。肅肅有異聲。　我が公賓客を會す、肅肅として異聲有り。
初筵閱軍裝。羅列照廣庭。　初筵軍裝を閱す、羅列廣庭を照らす。
庭空六馬入。駊騀揚旗旌。　庭空しくして六馬入る、駊騀として旗旌を揚ぐ。
迴迴偃飛蓋。熠熠迸流星。　迴迴飛蓋偃す、熠熠流星迸る。
來衝風飈急。去擘山嶽傾。　來り衝けば風飈急に、去つて擘てば山嶽傾く。

材歸俯身盡。妙取略地平。　材は歸す身を俯し盡すに、妙は取る地を略するの平かな（—るに）。

虹蜺就掌握。舒卷隨人輕。』　虹蜺掌握に就く、舒卷人に隨つて輕し。』

三州陷犬戎。但見西嶺青。　三州犬戎に陷る、但だ見る西嶺の青きを。

公來練猛士。欲奪天邊城。　公來つて猛士を練る、奪はむと欲す天邊の城。

此堂不易升。庸蜀日已寧。　此の堂升り易からざるに、庸蜀日に已に寧し。

吾徒且加餐。休適蠻與荊。』　吾が徒且つ餐を加へむ、蠻と荊とに適くことを休めよ。』

【字解】【一】揚旗　この揚は簸揚なり、旗をあふる樣にふりまはすをいふ。【二】旗幟　はた、のぼり。【三】江風　かはかぜ。【四】颯　さつとふく。【五】長夏　日ながのなつ。【六】府中　嚴武の幕府のうち。【七】餘清　十分ありあまるすずしさ。【八】我公　嚴武をさす。【九】肅肅　いかめしきさま。【一〇】異厚　特異な名聲、評判のよきこと。【一一】初筵　宴席のひらきはじめ。【一二】軍裝　軍隊のよそほひ。【一三】羅列　兵士がつらなりならぶ。【一四】照　衣服旗幟などの色彩がぱつとかがやく。【一五】皷鬣　馬の頭を搖かす貌。【一六】旗旌　はた。區別すれば旗は熊虎をゑがきたるはた、旌は竿頭に獸尾をさげ、尾の上部にふさふさとした羽をつけたるはたをいふ、以上は賓客をあつめ旗振りを觀ることをのぶ。【一七】迴迴　回轉するさま。【一八】偃　ふす、たれる。【一九】飛蓋　早くかける車のかさ、支那の車上は傘の如きものを立てて日光と雨をふせぐ、之を蓋といふ。【二〇】熠熠　熠はあざやかにひかる貌。【二一】迸流星　ながれ星がほとばしる樣に。【二二】擘　わかつ。【二三】材　材能。【二四】歸　歸宿する。【二五】俯身盡　馬上ながらすつかりと全身をかがめる。【二六】妙　技藝の妙。【二七】取　わざの取りどころ。【二八】略地平　はたで平らかに地面をはらふ。【二九】虹蜺　旗旌の色彩をいふ、仇注に羽獵賦の虹蜺爲ㇾ繯を引くは當らず。【三〇】就掌握　つかめること。【三一】舒卷　卷いたりほぐしたり。【三二】隨人　人とは之をとりあつかふ人、以上は揚旗の狀をのぶ。【三三】三州　松・維・保の三州。【三四】陷犬戎　犬戎は吐蕃をさす、三州の陷は廣德元年十二月にあり。【三五】西嶺　卽ち西山、雪山。西嶺青しとは嶺下の縣邑多く吐蕃に陷りたれば我よりはただ遠くその山色をのぞみうるをいふ。【三六】天邊城　高處にあるをいふ。【三七】不易升　舊解は多く嚴武の責任の重大なるをいふこととし、嚴武について言を立てしとなす。余は作者賓客として自己よりいふものとみる。堂宴に列するを得る如きは平和にして始めてなしうることなり、故にのぼり易からずといふ。【三八】庸蜀　蜀地のこと。王莽、益州を改めて庸部となす。又庸蜀の語は「尙書」牧誓にみゆ。【三九】加餐　御飯を多くたべて養生する。【四〇】適蠻與荊　魏の王粲亂にあひ、長安に居る能はず、南して荊州にいたり劉表に依る。粲が七哀詩にいふ。復棄中國去、遠身適荊蠻と。

【題義】兵士が旗を簸揚する藝を觀たことをのべた詩。廣德二年六月に、嚴武が府堂に賓客をあつめ、騎兵に新しい旗や幟を試用させたをり、作者も陪席してそれを見たのである。

【詩意】日ながの夏のをりから江風がさつとふいて府堂のなかも十分に涼しい。吾が嚴鄭公は嚴肅で政治に特別のよい評判ある人だがそれがけふは賓客を會合せしめられた。宴席の初に於て軍隊の裝束を檢閱された。彼等がずらりとならぶと新調の衣服や旗幟の色彩が廣い庭を照らさんばかりだ。やがてがらんどうのひろにはに六匹の馬がはいる。馬はくびをうごかす、騎手は旗をふりまはすのである。』いよいよ旗を回轉するとそれは早くはしる車蓋がうちふす樣にみえ、その色のあざやかなのがちらちらするさまは流星がほとばしる樣である。こちらへと衝いてくるときはつむじ風が急に吹きたてる樣であり、あちらへとはしつて旗をさばくときは山嶽が傾くかとあやしまれる。馬上ながら全身

をうつぶしにしてしまふところに騎手の材能の絶頂がうかがはれ、旗の尾で平かに地面をなではらふところに妙技の取りえがある。まつたく虹蜺をもろ手ににぎつてそれを人意のままに輕やかに卷いたりほぐしたりしてゐるのだ。』去年は松・維・保の三州が吐蕃のえびすに陷つてしまひ我我はただいたづらに遠く西嶺の靑きを見てゐたのだが、鄭公がこられて猛士をご訓練になり、天邊の高處にある吐蕃の城を奪ひ取らうとされるのである。治者其人を得なければ我我には容易に升ることのできぬ此の府堂なのであるがけふかかる宴會にあふのは公のおかげで蜀の地方が日日安寧になりつつあるからだ。吾吾は公の政治の才能に依賴して折角食事でも多く加へて養生し、彼の王粲の樣に荆蠻の地へゆく樣なことをやめたがよいとおもふ。』

絶句六首

日出籬東水、雲生舍北泥。
竹高鳴翡翠、沙僻舞鵾雞。

絶句　六首

日は出づ籬東の水、雲は生ず舍北の泥。
竹高くして翡翠鳴き、沙僻にして鵾雞舞ふ。

【字解】【一】籬東水　草堂の位置、浣花溪の西にあり、故に籬東に水を見る。【二】舍北泥　蓋し舍北に塹あるなり、泥は泥濘飛燕子の泥なり、旬宣、蒸濕の氣なほ散ぜざるをいふ。【三】翡翠　かはせみ。【四】沙僻　沙は江邊の岸沙、僻とはかたゐなかに存在するをいふ。【五】鵾雞　鳥の名、鶴に似て黃白色、頸長く嘴赤し、「おほにはとり」、「たうまる」。

【題義】この六首は草堂の景物を敍したり。此の第一篇は雨ばれのありさまをいへり。廣德二年草堂にての作。

【詩意】まがきの東の水面に太陽が出た。舍の北の塹の泥から雲氣がおこる。竹が高くのびてかはせみが鳴いてゐる。沙原はしづかで鵾雞が舞うてゐる。

〔二〕

藹藹花蘂亂、飛飛蜂蝶多。
幽棲身懶動、客至欲如何。

〔二〕

藹藹として花蘂亂れ、飛飛として蜂蝶多し。
幽棲身動くに懶し、客至らば如何せむとか欲する。

【字解】【一】藹藹　もじやもじやむらがる貌。【二】幽棲　ひつこんでくらす。【三】懶動　懶は「ものうし」、「じやまくさい」。【四】欲如何　仇注に「杜臆」を引き、客將何求於我乎ときたるは、欲如何を客に屬してみたるなり、余は此三字は自責の語とみる。

【題義】此篇は閒居疎懶の情をのべたり。

【詩意】もじやもじやと花蘂がみだれ咲き、蜂や蝶がたくさんひらひらしてゐる。ひつこんでくらしてゐる時分は身を動かすさへじやまくさい、こんなではお客がきたときにはどうしようとおもふか。

〔三〕

鑿井交椶葉。開渠斷竹根。
扁舟輕裊纜。小徑曲通村。

〔三〕

井を鑿てば椶葉交る、渠を開けば竹根斷ゆ。
扁舟輕くして纜裊に、小徑曲りて村に通ず。

【字解】【一】交椶葉　椶葉は「しゅろ」の葉なり。一に曰く「椶葉を交はらす」にて葉をくみあはせ、つるべ縄を作るなり、一に曰く、椶葉を交へて井をおほひ雨露の入るを防ぐなり、と。二説恐らくは然らず、これただ井ばたに數本のしゆろありて其の葉相交はるをいふのみ。【二】渠　みぞ。【三】斷竹根　竹林ちかきゆゑにその根斷絶せらるるなり。【四】裊纜　ともづなたをやか。

【題義】井渠を見て遂に遠景に及べり。

【詩意】井をほつたところがそこには棕櫚の葉がしげりあうてゐる。渠をきりひらいたところが自然竹の根をたちきることになつた。江をみると小舟が輕くういて纜がぶはぶはしてゐるし、陸をみると小徑が曲りながら村の方へ通じてゐる。

〔四〕

急雨捎溪足。斜暉轉樹腰。
隔巣黄鳥竝。翻藻白魚跳。

〔四〕

急雨溪足を捎ふ、斜暉樹腰に轉ず。
巣を隔てて黄鳥竝び、藻を翻して白魚跳る。

【字解】【一】急雨　にはかあめ。【二】捎　かすめる、はらふ。【三】溪足　溪のねもと。【四】斜暉　ゆふひのひかり。【五】轉　轉じ移る。【六】樹腰　たち木の中ほど。【七】隔巣　巣が二つはなれて向きあつてゐる。【八】黄鳥　てうせんうぐひす。【九】藻　「も」のくさ。【一〇】跳　をどる、はれる。

【題義】夕立のはれまを敍す。

【詩意】溪流のねもとをさつとにはか雨がかすめてとほつた。忽ち樹木の腰のあたりに夕日のひかりがさしてまはる。樹のうへにはあひ向きの巣に黄鳥が二つならんでをり、溪中では藻をひつくりかへして白魚がはねてゐる。

〔五〕

舍下筍穿壁。庭中藤刺簷。
地晴絲冉冉。江白草纖纖。

〔五〕

舍下筍壁を穿ち、庭中藤簷を刺す。
地晴れて絲冉冉たり、江白くして草纖纖たり。

【字解】【一】絲　游絲なり、いとゆふ、かげろふ。【二】冉冉　しだいにのぼるさま。【三】江白　白とは水の日にうつりてしらめるさま。【四】纖纖　ほそぼそと立つ、草は陸上にあり、その前景に江がみゆるなり。

【題義】よく晴れた日の春夏の交の景物を敍す。

【詩意】吾がやどりのところでは筍が壁に穴をあけてでだした。庭さきでは藤づるがのびて簷につきささつた。地面は晴れわたつていとゆふがしだいにたちのぼり、江面は白みわたつて手前にはほそぼ

そとした草が直立してゐる。

［六］

江動月移石。溪虛雲傍花。
鳥棲知故道。帆過宿誰家。

［六］

江動きて月石に移り、溪虛しくして雲花に傍ふ。
鳥棲みて故道を知る、帆過ぎて誰が家にか宿する。

【字解】【一】江動　江水がうごく。【二】月移石　石は江岸に横たはる石なり、月は江水に映じたる月なれども水波うごくにより岸邊の石の方へ移り來る。【三】溪虛　虛は空虛、物なきをいふ。【四】雲傍花　雲は溪上より起るもの、花は溪岸に生ずるもの。【五】鳥棲　棲はねぐらにとまること。【六】故道　鳥は晝はよそに飛び、日暮るればねぐらにかへる、一定往來の道あるべし、之を「もとのみち」といふ、此句は第二句を承く。【七】帆過　ほかけぶねがとほる、此句第一句をうく。

【題義】月ある春の夕ぐれのさまを敍す。

【詩意】江の水がうごくので月は水面から岸べの石へと移る。溪はからりとあいてをつてただ岸べの花にそうて雲がとざしてゐる。かく暮れかかつても鳥はかよひなれてゐる道を知つて巣にとまりにくるが、水面をとほりすぎる帆かけぶねは、あれはだれの家のところで宿るものやら。

絶句四首

絶句　四首

堂西長筍別開門。
塹北行椒卻背村。
梅熟許同朱老喫。
松高擬對阮生論。

堂西の長筍に別に門を開く、
塹北の行椒に卻つて村に背く。
梅熟して朱老と同じく喫するを許す、
松高くして阮生に對して論ぜむと擬す。

【字解】【一】別開門　門を別にあけ、みちをつけかへる、筍をふまぬ様にするなり。【二】塹北　ほりの北、これは草堂の北方をいふ。【三】行椒　行は行列を成してゐること、椒は「さんせう」の木。【四】背村　浣花村を背にして之にむかひ居らざるをいふ。【五】朱老　南鄰の朱山人なるべし。【六】阮生　郭知達本に作者の自注なりとて、「朱阮劍外相知」の六字を載す、之によれば阮生は仇氏の想像せる阮隱居に非ずして別に其人あるに似たり。

【題義】此四首は閬中夏時の景物について敍したり、此の第一首は植物についてのぶ。仇氏、朱本に依りて前詩（絶句六首）と共に之を廣德二年夏の作とし、舊永泰元年の作とせるを正したり。今之に從ふ。

【詩意】草堂の西には筍がのびてきたのでそれをふまぬため別に門をあけて通路をつけかへた。塹の北には山椒の木のなみきがあるので吾が屋はかへつて村に背をむけてゐる。梅の實が熟してきたから朱老人にいつしよに喫べることを承諾してやつたし、松の樹も脊が高くなつたから阮生とむきあうて談論をしてみたいとおもふ。

〔二〕

欲作(一)魚梁雲覆湍。
因驚四月雨聲寒。
(二)青溪(三)先有蛟龍窟。
(四)竹石(五)如山不敢(六)安。

〔二〕

魚梁を作らむと欲すれば雲湍を覆ふ、
因つて驚く四月雨聲の寒きに。
青溪先んじて蛟龍の窟有り、
竹石山の如きも敢て安んぜず。

【題義】此篇は魚梁について敍す。

【詩意】自分は魚梁をこしらへようとおもうたが湍に雲がおほひかぶさつた。それにつけて四月なのに寒さうに雨のおとがするのに驚くのである。わが浣花の青溪には以前から蛟龍のすむ窟があるのである。だからやなをこしらへる竹や石の材料は山ほど積んだが之をすゑつけることをさしひかへてゐるのである。

【字解】【一】魚梁　やな。【二】青溪　浣花溪をいふ。【三】先　さきんじて。【四】竹石　やなを作る材料として用ふ。【五】如山　多きをいふ。【六】安　安置すること。

〔三〕

兩箇(一)黃鸝鳴翠柳。
(二)一行白鷺上青天。
腮(三)含(四)西嶺(五)千秋雪。
門泊(六)東呉(七)萬里船。

〔三〕

兩箇の黃鸝翠柳に鳴き、
一行の白鷺青天に上る。
腮には含む西嶺千秋の雪、
門には泊す東呉萬里の船。

【字解】【一】黃鸝　うぐひす。【二】一行　ひとつら。【三】含　ふくむ、いれておく。【四】西嶺　雪山。【五】千秋雪　千年もとけぬゆき、雪の色をいふ。【六】東呉　東の方呉に向つてくだるべき。【七】萬里船　萬里をゆくふね、草堂は成都の萬里橋の西にあり、橋東に合江亭ありて呉にくだらんとするものは、みな亭の處より船に登る。即ち門前に船の泊する所以なり。

【題義】溪前の景を敍す。近く小なる景と遠く大なる景とをとりあはせて趣致をなしたり。

【詩意】みどりの柳に二つのうぐひすが鳴いてゐる。一行の白鷺が青天たかく飛びあがつてゆく。わが草堂の腮には千年消ゆることなき西嶺の雪色をいれてをるし、門前には萬里東呉に向つて下らうとする船がとまつてゐる。

〔四〕

(一)藥條(二)藥甲(三)潤青青。
(四)色過(五)棕亭入(六)草亭。
(七)苗滿(八)空山慚取譽。
(九)根居(一〇)隙地(一一)怯(一二)成形。

〔四〕

藥條藥甲潤ひて青青たり、
色棕亭を過ぎて草亭に入る。
苗空山に滿ちて譽を取るを慚ぢ、
根隙地に居て形を成さむことを怯る。

【字解】【一】藥條　藥木のこえだ。【二】藥甲　藥草の芽ぐみ。【三】潤　うるほふ、生氣みつるさま。【四】色　藥草藥木の色。【五】棕亭　しゆろの木のはたのちん。【六】草亭　くさぶきのちん。【七】苗　藥木のなへ。【八】空山　人の居らぬ山、山といふもこの草堂の圍をさしていふなり。【九】根　藥木のれ。【一〇】隙地　あ

きち、やはり草堂のはたけをさしていふ。【二】怯　おそろ、臆病なこと。【三】成形　一定の形をなすこと、たとへば人參が人の形をしたり、茯苓が禽獸の形をする等のたぐひをいふ。

【題義】此篇はくすりばたけのことを敍す。

【詩意】吾が藥圃では藥木の條も藥草の芽ぐみも青青としてうるほひをふくんでをり、そのあをあをとした色が棕櫚をうゑてある亭のところをとほりすぎて更に草葺きの亭のあたりまではいりこんでくる。しかし藥草の苗はこんなさびしい山にはびこりながらひとから譽を取ることをはぢとしてゐし、藥木の根はこんなあき地にそだつて不思議な形などになつて人にもてはやされることをおそれてゐる。

寄李(一)十四員外布。十二韻　【原注】新除司議郎(二)。萬州(三)別駕(四)。雖尚伏(五)枕。已聞理(六)裝。

李十四員外布に寄す　十二韻　【原注】新に司議郎に除せられ、萬州の別駕を兼ね、尚ほ枕に伏すと雖も、已に裝を理むと聞く。

名(七)參漢(八)望苑。職(九)述景(一〇)題輿。
名は參はる漢の望苑、職は述ぶ景が題輿。

巫峽(一一)將之郡。荊門(一二)好附書(一三)。
巫峽に將に郡に之かむとす、荊門好し書を附す。

遠行無自(一四)苦。內熱(一五)比(一六)何如。
遠行自ら苦むこと無かれ、內熱比何如。

正是炎天(一七)闊。那堪野(一八)館疎(一九)。
正に是れ炎天闊し、那ぞ堪へむ野館の疎なるに。

黃(二〇)牛平(二一)駕浪。畫鷁(二二)上淩(二三)虛。
黃牛駕浪平かに、畫鷁上りて虛を淩ぐ。

試待盤(二四)渦歇(二五)。方期解纜(二六)初。』
試みて盤渦の歇むを待ちて、方に期せよ解纜の初。』

悶(二七)能過小(二八)徑。自為(二九)摘嘉(三〇)蔬。
悶能く小徑に過らば、自ら爲に嘉蔬を摘まむ。

渚(三一)柳元幽(三二)僻。村花(三三)不掃(三四)除。
渚柳元と幽僻なり、村花掃除せず。

宿(三五)陰繁素柰(三六)。過雨亂紅蕖(三七)。
宿陰素柰繁く、過雨紅蕖亂る。

寂寂夏先晩。冷(三八)冷風有餘。
寂寂夏先づ晩る、冷冷風餘り有り。

江清心可瑩(三九)。竹冷髮堪梳。
江清くして心瑩くすべし、竹冷にして髮梳るに堪へたり。

直作移(四〇)巾几。秋(四一)帆發敝(四二)廬。』
直ちに巾几を移すを作し、秋帆敝廬を發せよ。』

【字解】【一】李十四員外布　某省の員外郎李布、原注によれば布は新に司議郎に除せられ、萬州別駕を兼ねたりといへり。【二】司議郎　東宮の官屬なり。「唐六典」に太子左春坊に司議郎四人の設けあり。【三】萬州　夔州府萬縣。【四】別駕　州の屬官なり。【五】伏枕　やまひの枕にふす。【六】理裝　旅裝をなさめ、出發の用意をせしこと。【七】名參　參は「まじはる」。【八】漢望苑　漢の武帝のとき戾太子冠す、帝爲めに博望苑を立て賓客を通ぜしむ、司議郎は東宮に屬する官ゆゑ博望苑の事を用ひたり。【九】職述「孟子」にみゆる述職とは義を異にす、仇注に「能く古人の職に倣ふを謂ふ」といふもの其義を得たり。【一〇】景題輿　景は後漢

の周景。景、豫州刺史となり陳蕃を辟して別駕となす、蕃就かず、景、別駕の輿に題して曰く「陳仲舉（仲舉は蕃が字）が座なり」と、更に他のものをめさず、蕃惶恐して起つて職を視る、周景が輿に題した職とは別駕の職なるをいふ。【一一】 巫峽將之郡 不僧の句なり、巫峽ある郡へゆかんとすの意、巫峽は夔州府にあり。【一二】 荊門 前の「奉待嚴大夫」詩の遠下荊門去鷁催をみよ。【一三】 附書 手紙を附托する。【一四】 自苦 じぶんで自身をくるしめる、苦の內容如何は次の句以下に見ゆ。【一五】 內熱 內部が熱する、病氣のため體溫たかきなり。【一六】 比 このごろ。【一七】 關 作者の用語に適きことを關といふ。【一八】 野館 田野のやど、布のやどる所なり。【一九】 疎 まばら、稀少なるをいふ。【二〇】 黃牛 峽の名、湖北省宜昌縣西にあり。南岸に巖あり、人の牛をひくが如し、人は黑く牛は黃なり。舟行者數日之を望む、故に朝宿黃牛、暮宿黃牛の語あり。【二一】 平聲浪 牛石のうへまで平に浪がのりこす。黃牛峽は萬州よりは下流にあれば此句は適切ならざるに似たるも險阻の場所なるゆゑ水路の難をいはんため代表的に擧げしものか。【二二】 晝鷁 船首をいふ。【二三】 上淩虛 水、虛空の如くなれば船、天にのぼるに似たり。【二四】 盤渦 うづまき。【二五】 歇 やむ。【二六】 解纜 ともづなをとく、船出する。以上は李布に向つて病中暑氣を冒し、險難の地を過ぎることなかれと戒しむ。【二七】 閒 布の病苦によりもだゆること。【二八】 小徑 草堂の庭のこみち。【二九】 自惱 惱とは布がためにの意。【三〇】 嘉蔬 よきやさい。【三一】 渚柳 なぎさのやなぎ。【三二】 幽僻 ひつこんだかたゐなかにある。【三三】 村花 むらさとに咲ける花。【三四】 不掃除 はらひのけることをせずそのままおく。【三五】 宿陰 いつまでもはれやらぬくもり。【三六】 素柰 白花のカラナシ。【三七】 蕖 はちすばな。【三八】 泠泠 風のすずしく吹くおと。宋玉の風賦に淸淸泠泠、愈病析酲とみゆ。【三九】 髮 潔くする。【四〇】 移巾几 づきん、ひぢかけをこちらへうつす。【四一】 秋帆 秋の船。【四二】 敝廬 わたくしのやぶれたいほり。

【題義】 員外郎李布にやつた詩。このとき李布は司議郎に任せられ萬州の別駕を兼ね、病中でまだ枕についてゐるのに出發の用意をしてゐるといふはなしだ。それでこの詩をやつて秋までのばせといひおくつたのである。廣德二年夏の作。

【詩意】 君は東宮づきであるから君の名は漢の博望苑の諸官にまじはつた樣なものであるし、君の職はむかし周景が陳蕃の輿に題した所のその同じ職を述べおこなふものである。君は巫峽のある地方の郡へゆかれようとするが荊州の方へ手紙を持つていつてもらうにちやうど都合がよいのである。しかし君は決して遠くへ旅行するにわざとおのれを苦しめることはいらぬことだ。病熱があるとのことだがこのごろではどうだ。ちやうどいま炎天で道がとほいのだ、旅宿もめつたに無い樣ではたまるものであるまい。黃牛峽のあたりでは高浪がのりこして牛石と平になり、峽中の水かさがまして船のゆくときは虛空をしのいでのぼる樣であらう。だから自分の考では江水の盤渦がやむころを待つてそこではじめて船出をすることにきめてはどんなものだらうか。』 君が病氣で氣がはればれせぬといふのなら僕の草堂のこみちへたづねてきたまへ、僕は喜んで君のためにいい野菜をつんで君にそなへよう。なぎさの柳は本來幽僻な場所に垂れてゐるし、村さとの花は散らしたまま掃除もせずにある。くもりのつづくをりから白花の柰が繁くなるし、とほりかかる雨には紅のはちすの花がみだれ立つてゐる。ひつそりとしづかにくらすうちに夏もまづ晩れるし、さらさらとすずしく吹く風は十分にある。河水はすみわたつて心まで潔くすることができ、竹は冷かでそのそばで髮をとかすにふさはしい。僕の住居はこんなところだから君はすぐに頭巾やひぢかけをひき移す樣にして秋の船をまつて僕の宅からで

かけることにしてはどうか。』

(一)軍中醉歌。寄(二)沈八劉叟
(三)酒渴愛江清。(四)餘酣(五)漱(六)晩汀。
(七)軟沙(八)欹坐穩。冷石醉眠醒。
(九)野膳隨(一〇)行帳。(一一)華音發(一二)從伶。
(一三)數盃君(一四)不見。(一五)都已(一六)遣(一七)沈冥。

軍中の醉歌、沈八劉叟に寄す
酒渴江の清きを愛し、餘酣晩汀に漱ぐ。
軟沙欹坐穩かに、冷石醉眠醒む。
野膳行帳に隨ひ、華音從伶より發す。
數盃君見ずや、都て已に沈冥ならしむ。

【字解】【一】軍中　嚴武の幕府の中をいふ。【二】沈八劉叟　其人並に未だ詳ならず。【三】酒渴　さかがわき。【四】餘酣　ゑひしあげく。【五】漱　口そそぐ。【六】晩汀　夕ぐれのみぎは。【七】軟沙　やはらかきすな。【八】欹坐　かたむいてすわる。【九】野膳　野外にもちだすお膳。【一〇】行帳　出張してきたまく、將軍の出張するをいふ。【一一】華音　みやこのふし、蜀のゐなかぶしに非ざるをいふ。【一二】從伶　隨從の音樂人。【一三】數盃二句　此十字は一氣によむべし。【一四】君不見　君不レ見乎の意。【一五】都　すべて。【一六】遣　せしむ。【一七】沈冥　「揚子法言」に蜀莊(嚴)沈冥の語あり、嚴は嚴遵字は君平をさす、沈冥は玄寂の如し、混然迹無きの貌なり、ここは醉ひて正氣を失ひしさまをいふ。

【通義】嚴武の幕中にありて醉ひて沈八・劉叟の二人にやつた歌。詩に行帳とあれば江邊に出張して宴したるなり。

【詩意】酒のかわきで江の水の清らかなのがうれしい。それで醉ひあげくに夕ぐれのみぎはに口をそそぐ。自分はやはらかな沙のうへに穩かにかたむいてすわり、つめたい石のそばで眠りがさめたところなのだ。いまは將軍の御出張の幕とともに野外用の御膳がはこばれ、隨從の音樂人の口から都のふしがうたひだされてゐる。諸君ごらんあれ、自分はたつた四五盃の酒ですつかりこんなに前後忘卻の態にさせられてしまつたのである。

【餘論】此詩「文苑英華」に暢當の作とす。而して宋代黃伯思も黃山谷も共に之を杜甫の作となしたりといへば眞僞遽に未だ定むべからず、結構其他に至つては妙篇といふべからず。

(一)丹青引【原注】贈(二)曹將軍霸。
(三)將軍(四)魏武之子孫。(五)於今爲庶爲(六)清門。
(七)英雄割據雖已矣。(八)文采風流今尚存。
(九)學書初學(一〇)衞夫人。

丹青引【原注】曹將軍霸に贈る。
將軍は魏武の子孫、今に於て庶たれども清門たり。
英雄割據已んぬと雖も、文采風流今尚ほ存す。
書を學びて初め衞夫人を學ぶ、

【字解】【一】丹青引　丹青は畫をいふ、引は歌の一種なり。【二】曹將軍霸　唐の左武衞將軍曹霸なり、霸は魏の曹髦が後裔なり、髦は畫を以て魏の代に稱せらる、霸は玄宗の開元中に已に名を得、天寶の末には詔により御馬及び功臣の像を寫す。

但恨無過(一一)王右軍。
丹青不知(一二)老將至。
(一三)富貴於我如浮雲。』
(一四)開元之中常引(一五)見(一六)。
(一七)承恩數上南(一八)薫殿。
(一九)淩煙功臣少(二〇)顏色。
將軍下筆開(二一)生面。
(二二)良相頭上進(二三)賢冠。
(二四)猛將腰間大(二五)羽箭。
(二六)褒公鄂(二七)公毛(二八)髮動。
(二九)英姿颯(三〇)爽來(三一)酣戰。』
(三二)先帝御(三三)馬玉(三四)花驄。
(三五)畫工如山貌(三六)不(三七)同。

但だ恨む王右軍に過ぐる無きを。
丹青知らず老の將に至らむとするを、
富貴我に於て浮雲の如し。』
開元の中常に引見す、
恩を承けて數〻上る南薫殿。
淩煙の功臣顏色少れなり、
將軍筆を下せば生面開く。
良相頭上の進賢冠、
猛將腰間の大羽箭。
褒公鄂公毛髮動き、
英姿颯爽酣戰より來る。』
先帝の御馬は玉花驄、
畫工山の如く貌すれども同じからず。

官は左武衞將軍に至れり。【三】將軍　曹覇をさす。【四】魏武　魏の武帝曹操をいふ、操の後ち髦となり、髦の後ち覇となるなり。【五】於今爲庶　「左傳」昭公三十二年に、晉の史墨が趙簡子に答へたる辭に、三后之姓、於今爲庶、主所知也とみゆ。三后は虞・夏・商の君なり、昔三王の姓なりしものも其の子孫となれば趙簡子の時代には庶人となれりといへるなり、庶人は普通の人民をいふ、仇注に玄宗の末年覇が罪を得て籍を削られ庶人とされしことを引きたるが、それまでを引くはいかがにや。作者の意は曹覇は昔時にありてならば國姓の家すぢなるべき人なるも唐の今では李姓なればただの人民なりといふにとどまるならん。【六】淸門　上品の家がら。【七】英雄割據

(三八)是日牽(三九)來赤(四〇)墀下。
(四一)迥立(四二)閶闔(四三)生長風。
詔謂將(四四)軍拂絹素。
(四五)意匠(四六)慘澹(四七)經營中。
(四八)須臾九(四九)重眞(五〇)龍出。
一洗(五一)萬古凡馬空。』
(五二)玉花(五三)卻在御榻上。
(五四)榻上庭(五五)前屹(五六)相(五七)向。
(五八)至尊含(五九)笑催賜金。
(六〇)圉人(六一)太僕皆(六二)惆悵。
(六三)弟子韓(六四)幹早入室。
亦能畫(六五)馬窮殊相。
幹惟畫(六六)肉不(六七)畫骨。

是の日牽き來る赤墀の下、
迥に閶闔に立てば長風を生ず。
詔して將軍に謂ふ絹素を拂へと、
意匠慘澹たり經營の中。
須臾九重眞龍出づ、
萬古の凡馬を一洗して空し。』
玉花卻つて御榻の上に在り、
榻上庭前屹として相向ふ。
至尊笑ひを含んで金を賜へと催す、
圉人太僕皆惆悵す。
弟子韓幹早く室に入る、
亦た能く馬を畫いて殊相を窮む。
幹は惟だ肉を畫いて骨を畫かず、

魏の曹操は蜀の劉備、吳の孫權と天下を三分して相爭ひたり、これ英雄各〻一方に割據せるなり。【八】文采風流　文藝風流の事がら、下にのぶる書畫などのことをさす。【九】學書　書は文字の書法。【一〇】衞夫人　晉の衞鑠、字は茂漪、廷尉展が女弟にして恒が從女、汝陰の太守李矩に嫁す、尤も隸書を善くし鍾の繇を規矩とす、王右軍少きとき嘗て之を師とす、永和五年(西紀三四九)に卒せり。【一一】王右軍　晉の右軍將軍・會稽內史王羲之をいふ。羲之、字は逸少、家より起つて秘書郎となり、のち右軍將軍に至る。古今の書聖として知らる。羲之の父は王曠といひ王導が從弟なり、曠は衞氏と親戚なる關係よりして衞鑠より蔡邕が書法を得て、之を子の羲之に授けたり。

忍(六八)使驊(六九)騮氣(七〇)凋喪。』　驊騮をして氣凋喪ならしむるに忍びむや。

將軍畫(七一)善蓋有(七二)神。　將軍畫善し蓋し神有り、

必逢佳(七三)士亦寫(七四)眞。　必ず佳士に逢はば亦た眞を寫さむ。

即(七五)今漂泊干戈際。　即今漂泊す干戈の際、

屢貌(七六)尋常行路人。　屢〻貌す尋常行路の人を。

途(七七)窮反遭俗眼白。　途窮して反つて俗眼に白まる、

世上未有如公貧。　世上未だ公が貧きが如くなるは有らず。

但看古來盛(七八)名下(七九)。　但だ看る古來盛名の下、

終日坎(八〇)壈纏其身。』　終日坎壈其の身を纏ふを。』

【一二】不如老將至 「論語」にみゆ。【一三】富貴於我如浮雲 亦「論語」に本づく、以上は曹覇が家世と書畫の能事とを敍す。【一四】開元 唐の玄宗の年號(西紀七一三、至七四一)。【一五】常 つねに、一に嘗に作る。常は嘗と通ずる字なるも嘗の本義による。【一六】引見 みちびかれてお目みえする。【一七】承恩 天子の御恩寵をうける。【一八】南薰殿 唐の長安の南内興慶宮内の正殿を興慶殿といふ、殿前に瀛洲門あり、門内に南薰殿あり、殿の北には龍池あり。【一九】凌煙功臣 凌煙は閣の名、唐の太宗の貞觀十七年二月長孫無忌等勳臣二十四人を凌煙閣に圖畫す。「五代會要」によるに凌煙閣は西内三淸殿の側にあり、閣内には隔あり、隔の内には北に面して功の高き宰輔を寫し、南に面して功の高き侯王を寫し、隔の外には次第に圖畫にされたる功臣の題賛を書す。【二〇】少顏色 丹靑剝落して舊跡消えうせんとするをいふ。【二一】開生面 生きたやうな面色があらはれでる。【二二】良相 賢良なる宰相、房玄齡・杜如晦の類。【二三】進賢冠 縑布にてつくりし冠。【二四】猛將 尉遲敬德・段志玄が類。【二五】大羽箭 四羽の太簳の長箭。【二六】褒公 輔國大將軍・揚州都督・褒國忠壯公段志玄。【二七】鄂公 開府儀同三司・鄂國公尉遲敬德。【二八】毛髮動 畫容の生動せるさま。【二九】英姿 ひいでたすがた。【三〇】颯爽 威風あたりをはらふさま。【三一】來酣戰 戰ひの闌なる處からここへ來てゐるやう。以上は功臣の人物を寫すに巧みなるをのぶ。【三二】先帝 玄宗。【三三】御馬 御の字一に天に作る、御馬・天馬ともに天子の御乘馬をいふ。【三四】玉花驄 玄宗乘る所の馬に玉花驄・照夜白ありしこと「明皇雜錄」にみえたり。【三五】畫工如山 如山とは多きをいふ。【三六】貌 「貌す」と動詞として用ひたり、かたちをゑがくこと。【三七】不同 畫く所、眞馬と異なるをいふ。【三八】是日 曹覇が筆を揮ひし當日。【三九】牽來 玉花驄をたづなにてひいてくる。【四〇】赤墀 丹砂をしいた階下の土臺。【四一】迥立 まだ遠くに立つ。【四二】閶闔 天の紫微宮の門をいふ、ここは宮門をさす。【四三】生長風 遠くから風が吹きおこる、馬の威風あるをいふ。【四四】拂絹素 絹素はしろきあやぎぬ、拂とは塵埃をはらうてのべ畫く用意をすること。【四五】意匠 陸機が文賦に意司契而爲匠とみゆ、匠は木工なり、意を巧みに運用するもの意匠なり、意匠はなほ工夫のごとし。【四六】慘澹 苦心するさま。【四七】經營 「靈臺」の「詩」にみゆ、孔穎達は「繩もて度り表を立つること」とときたり、建築をするときの辭なり、ここは畫圖を構造する義に用ひたり、畫の六法の一に經營位置といふことあり、構圖のことをさす。【四八】須臾 しばしのまに。【四九】九重 君門九重といふこと「楚辭」にみゆ、最も遠き外方より内方へかぞへて關門・遠郊門・近郊門・城門・皐門・雉門・應門・庫門・路門の九種あり、九重は九重の門の奥にある宮中をいふ。【五〇】眞龍 いま畫きだされて眞に迫まれる御馬をいへり。【五一】萬古凡馬 古來ゑがかれしつまらぬ馬。以上は曹覇が詔をうけて始めて眞の御馬を寫しいだせしことをのぶ。【五二】玉花 玉花驄をいふ。【五三】御榻 おんこしかけ、長く狹くして卑きものなり。【五四】榻上 畫馬なり。【五五】庭前 實物の御馬。【五六】屹 聳え立つ貌。【五七】相向 相對するをいふ。【五八】至尊 天子(玄宗)。【五九】催 うながす。【六〇】圉人 馬を養ひ牧場をつかさどる役人。【六一】太僕 天子の輿・馬を掌る官。【六二】惆悵 うらみいたむこと、ここはあまりに畫のよくできたことを驚歎するさまに用ひたり。【六三】弟子韓幹 幹は大梁の人、官は大府寺丞に至る、善く人物を寫貌し、尤も鞍馬に工なり、初め曹覇を師とし、のち獨り自ら擅にす。王維之を見て推奬す。玄宗大馬を好み、西域大宛、歲歲來り獻ずるものあれば幹に命じて悉く圖せしむ、其の駿には玉花驄・照夜白等あり、時に岐・薛・申・寧諸王の廐中にもみな善馬あり、幹並に之を圖

す、遂に古今獨歩となる。杜甫又幹が畫馬の讚あり。【六四】入室　「論語」先進篇に、由也升レ堂矣、未レ入二於室一也とみゆ、堂はおもて座敷、室はもひとつその奥のへやなり、入室は技倆の奥まで入りこみしをいふ。【六五】殊相　特絶のすがた。【六六】豐肉　肥大に失するをいふ。【六七】豐骨　內部の骨ぐみをかく。【六八】忍　反語によむ。【六九】驊騮　周の穆王八駿の一、ここは單に駿馬をいふ。【七〇】氣凋喪　意氣しぼみうせる。以上は曹馬の妙をいひ陪客として韓馬を說く。【七一】畫善　ゑがうまい。「畫善」を一に「善畫」に作る。【七二】有神　不思議な妙處。【七三】佳士　よき人物。【七四】寫眞　その眞相をうつす。【七五】卽今　いま。【七六】貌　ゑがく。【七七】途窮・眼白　竝に阮籍が故事、已に屢〻見ゆ。【七八】盛名　さかんなる名聲。【七九】下　名聲の下にあるもの、名聲を荷ふものの意。【八〇】坎壈　車行くこと平かならざる貌、人の不遇、逆境にあるさま、以上は曹霸が妙技を抱いて不遇なるに同情す。

【題義】左武衞將軍曹霸が畫技に妙を得て、しかも時世に遇はざる次第をのべし歌にして霸に贈つたものである。廣德二年成都にての作。

【詩意】曹將軍は魏の武帝の子孫であつて、今では普通人であるが上品な家がらの人である。だから英雄割據といふ樣なことはもはややんでしまうたが、お家がらの文采風流は今日までまだのこつてをるのである。實證をあげると、將軍は初め衞夫人の書を學ばれて書もなかなかお上手で、王右軍（羲之）以上にでられぬだけが恨めしいといふくらゐである。畫は最も好まれる所で畫のためには身に年の寄ることさへうち忘れ、富貴なんぞは自分にとつては浮雲の大空をすぐるがごとくなんでもないものとみてをられる。』開元年中にはいつも天子（玄宗）にお目みえをし、御恩寵をうけてたびたび南薰殿にのぼられた。太宗時代に畫かれた淩煙閣の功臣圖像がふるぼけておぼろになつたときは將軍が筆を下したので忽ち功臣等の生き生きした面色があらはれた。卽ち文臣では良い宰相たちの頭にいただいてゐる進賢冠や、武臣では猛き將軍の腰にたばさんでゐる羽つきの大箭、さやうなものがはつきりでてくる。なかにも褒國公段志玄・鄂國公尉遲敬德二人のごときはその毛髮が動いてをり、その颯爽たる英姿は戰ひのまつただなかからここへやつて來たかとおもはれるほどであつた。』先帝（玄宗）の御馬に玉花驄といふのがあつた。山ほどたくさんの畫工がそのすがたをかいたが實物とちがふ。當日になると御殿のきざはしのどえんのところまで玉花驄をひつぱつてきた。かの馬のすがたといつたらとほく宮門に立つたときからはや風が吹きおこるといふくらゐの逸物であつた。そのとき天子は將軍に「綸絹のほこりをはらうてこの馬のさまかかれよ」と仰せになつた。之をうけたまはつて將軍は慘澹と苦心の工夫をこらしながら構圖をした。その結果、やがて九重の奥にほんものの龍馬（實は畫馬）があらはれでた。これがためこれまでゑがかれた凡俗の馬はすつかり洗ひ去られてしまつた。』みるとおんこしかけの上にかへつてほんものの玉花驄が居る樣で、おんこしかけのうへ（畫馬）と御庭前（玉花驄の實物）とで二つのほんものが向きあひにつつたつてゐる。至尊にはにつこり御覽あつて御近侍をうながして黃金を御下賜になる。太僕・圉人の馬のかかりのものどももこの畫をみてはみな首をうなだれて感歎するばかり。なるほど韓幹も夙に將軍の傳授許しの弟子で、彼もよく馬をゑがいて特別なすがたを窮めてはゐるが、をしいことには肉をゑがいて骨をゑがかず、あたら駿馬を氣の

ぬけたものにしてしまうことは到底看るものの忍びうる所でない。』　將軍の畫はじつにうまく、これぞ不思議な妙をそなへたといふものだらう。このわざから推すと將軍はよい人物に逢うたときも亦必ずその眞相を寫すであらう。しかるにただいまは兵亂の際にさまよひあるき、つまらぬただの人間をたびたびかいてゐる。ゆきづまりの境遇にあつては俗人の眼には歡迎されず、將軍ほど貧乏なものは世間にないほどである。之によつて自分はむかしから盛名を荷うた人は始終不遇といふことが其の身につきまとうてゐるものだといふことをみるばかりである。』

(一)韋諷錄事宅(二)觀曹(三)將軍畫馬圖(四)歌

韋諷錄事が宅にて、曹將軍が畫ける馬の圖を觀る歌

(五)國初(六)已來畫鞍馬。　國初已來鞍馬を畫く、
神妙獨數江(七)都王。　神妙獨り數ふ江都王。
(八)將軍得(九)名三十載。　將軍名を得る三十載、
人間又見眞(一〇)乘黃。』　人間又た見る眞の乘黃。』
曾貌先(一一)(一二)帝照(一三)夜白。　曾て貌す先帝の照夜白、
(一四)龍池十(一五)日飛(一六)霹靂。　龍池十日霹靂飛ぶ。
(一七)內府殷(一八)紅瑪(一九)瑙盤。　內府殷紅の瑪瑙盤、
(二〇)婕妤傳詔才(二一)人索。(二二)　婕妤詔を傳へて才人索む。
(二三)盤賜將軍拜舞(二四)歸。　盤將軍に賜うて拜舞して歸る、
(二五)輕紈細綺相追飛。　輕紈細綺相追飛す。
(二六)貴戚權(二七)門得筆(二八)跡。　貴戚權門も筆跡を得て、
始覺屛(二九)障生(三〇)光輝。』　始めて覺ゆ屛障光輝生ずるを。』
昔日太宗拳(三一)毛騧。　昔日太宗の拳毛騧、
(三二)近時郭(三三)家獅(三四)子花。　近時郭家の獅子花。
(三五)今之新圖有(三六)二馬。　今の新圖二馬有り、
(三七)復令識(三八)者久嘆(三九)嗟。　復た識者をして久しく嘆嗟せしむ。
(四〇)此皆戰(四一)騎一(四二)敵萬。　此れ皆戰騎〔騎戰〕一萬に敵す、
(四三)縞素漠(四四)漠開(四五)風沙。　縞素漠漠風沙開く。

【字解】【一】韋諷錄事　錄事參軍韋諷。後に諷が閬州にゆくを送る詩あり。【二】宅　成都に於ける諷が宅。【三】曹將軍　前の「丹青引」に詳なり。【四】畫馬圖　これは九馬圖なり、後に宋に入り、この圖は蘇紹彭が家に傳はり、蘇東坡之が贊を作りたり。其の引に曰く、長安薛君紹彭家、藏曹將軍九馬圖、杜子美所爲作詩者也、拳毛獅子二駿在焉、作九馬贊と。贊に曰く、牧者萬歲、繪者惟霸、甫爲作師、偉哉九馬、姚宋廟堂、李郭治兵、帝下毛龍、以馭羣英、我思開元、今爲幾日、筋骨龍圖、至三萬疋、云何寂寥、駐歩山川、負俛勝、浸溺九泉、牝牡驪黃、自以爲至、駮其一毛、棄我千里、蹄齧是乘、脂韁其駿、道阻且長、嗣其永歎と。【五】國初　唐の開國の初。【六】已來　以來。【七】江都王　名を緒といひ、霍王元軌が子にして太宗の猶子なり、才藝多く書畫を善くす、鞍馬名を擅にす、官は金州刺史に至る。【八】將軍　曹霸。【九】得名　畫名を世間から得る。【一〇】眞乘黃　乘黃は神馬なり、「瑞

其餘(四六)七匹亦殊絕(四七)。　其の餘七匹亦た殊絕、
迥(四八)若寒空(四九)動煙雪。　迥として寒空に煙雪動くが若し。
霜(五〇)蹄蹴踏(五一)長楸(五二)間。　霜蹄蹴踏す長楸の間、
馬(五三)官廝養(五四)森成(五五)列。』　馬官廝養森として列を成す。』
可(五六)憐九馬爭(五七)神駿。　憐む可し九馬神駿を爭ふ、
顧(五八)視清高(五九)氣深穩(六〇)(六一)。　顧視清高氣深穩。
借(六二)問苦(六三)心愛(六四)者誰。　借問す苦心愛する者は誰ぞ、
後有韋諷前支遁(六五)。』　後には韋諷有り前には支遁。』
憶(六六)昔巡(六七)幸新(六八)豐宮。　憶ふ昔巡幸す新豐宮、
翠(六九)華拂(七〇)天來向東(七一)。　翠華天を拂うて來つて東に向ふ。
騰(七二)驤磊(七三)落三萬(七四)匹。　騰驤磊落三萬匹、
皆與此(七五)圖筋骨同。　皆此の圖と筋骨同じ。
自(七六)從獻(七七)寶朝河宗。　寶を獻じて河宗を朝せしめしより、
無復射(七八)蛟江水中。　復た蛟を江水の中に射る無し。
君不見金(七九)粟堆前　君見ずや金粟堆前松柏の裏、
松(八〇)柏裏。
龍(八一)媒去盡鳥(八二)呼風。』　龍媒去り盡して鳥風に呼ぶ。』

廐圖」・「竹書紀年」・「山海經」等にみゆ、又「穆天子傳」に渠黃之乘あり、この馬一に飛黃ともいひ、狐の如くして背上に兩角ありと。詩意はかかる怪獸をさすにあらず、眞の駿馬の黍をさすのみ、以上は江都王李緒を陪客として曹將軍の畫馬に妙なるをのぶ。【一一】驌　あがく。【一二】先帝　玄宗。【一三】照夜白　玄宗の愛乘の馬の名。【一四】龍池　南薰殿の北にある池なり。（丹青引の「南薰殿」句解をみよ。）玄宗のなほ王たりし時の故宅なりしが、井あふれて池となり、深さ數丈、或は其中より黃龍の出づるあり。玄宗卽位ののちここに興慶宮を建て池を龍池と呼べり。【一五】十日　畫の期間なり。【一六】飛霹靂　霹靂はいなづま、急疾の雷なり、此句は池中の龍が動きだせしことをいふ、動きだしたことをいふは將軍の畫馬が靈奇なるによってそれに感動せるをいふなり。【一七】內府　御寶物の藏。【一八】殷紅　殷とは赤黑色なり。【一九】瑪瑙盤　めなうの大皿。【二〇】婕妤　女官の階級の名、正三品官にして九人あり。【二一】才人　女官の階級の名、正四品にして七人あり。【二二】索　內府に就きて盤を索め取るをいふ。仇注に「杜臆」の「照夜白を貌せんことを索むるなり」との說を引きたるは從ひがたし。畫はすでにかき了りてここはそれに對する賞賜物をさがし出すことをのぶる所なり、又「索」を畫をもとむるとしては上の瑪瑙盤の句は置き去りにあふわけなればかたがた以て不都合なり。【二三】盤賜　盤は上の瑪瑙盤。【二四】拜舞　將軍が賜を拜して舞ふなり。【二五】輕紈細綺相追飛　此句も仇注は「杜臆」を引きて貴戚權門の畫を求むるものをさすとし、倒插法（あとにいふべきことをさきにのぶる法）なりとせり。これも其說從ひがたし、倒插法も一句飛びこえて係すごときはあるまじきことなり。此の「輕紈」一句は、明かに「盤賜將軍」の句を順當に受けたるものにして、趙彥材・蔡夢弼・等が已に逸く前に解釋せしごとく、將軍に對する從賜の物のことをのべたるものとみる可きものなり。余は讀者が「杜臆」の奇異なる說に惑はざらんがために之を辯ず。紈・綺・はうすぎぬ、あやぎぬ、相追飛とは將軍が御殿を退出したあとから盤だけではまだ足らぬとして追ひかけて至急に持たせておつかはしになるをいふ。【二六】貴戚　身分貴き皇室の御親戚。【二七】權門　權勢ある家。【二八】筆跡　將軍の揮毫。【二九】屛障　屛風、ついたて。【三〇】生光輝　かがやきわたる。以上は將軍が御馬をかきて賞品を賜はりしこととその畫の權貴の家にも重んぜらるることをのぶ。【三一】拳毛騧　太宗の六駿の一、劉黑闥を平げしとき乘りし馬なり、太宗の昭陵の北闕の六駿石刻第五に存せり、騧は黃馬黑喙の馬をいふ、拳毛はちぢれげなり。【三二】近時　代宗の朝をさす。【三三】郭家　郭子儀が家。【三四】獅子花　馬の名、九花虬のことなりといへり、代宗

陜州より還るや御馬九花虬・紫玉鞭・轡を郭子儀に賜ばりしと。九花虬は額高九寸、拳毛、鱗の如くなりしと。【三五】今之新圖　今日眼前觀る所の曹霸のこの圖。【三六】二馬　拳毛騧と獅子花。【三七】復　從前畫きし所のものにそへて「また」といふ。【三八】識者　眼識あるもの。【三九】嗟嘆　感歎する。【四〇】此　二馬をさす。【四一】戰騎　一に「騎戰」に作る、今之に從ふ、騎戰は騎りて戰ふをいふ。【四二】一敵萬　一人を以て萬人に相當する。【四三】縞素　白ききぬ、畫絹のこと。【四四】漠漠　ひろく散散する貌。【四五】開風沙　開とは眼前に展開しあらはれでること。「開生面」の開に同じ、風沙は沙漠の風沙をいふ。【四六】七匹　九馬の圖に於て上に二馬を擧げたればのこり七匹なり。【四七】殊絶　特別によいうまなるをいふ。【四八】迥　はるか、超遠のさま。【四九】寒空動煙雪　風沙の狀をたとふ。寒天のなり煙や雲のうごくが樣である、それは馬が驅けるからである。(仇氏は「雜煙雪」に從ひ馬の毛色をたとへしものとみたり)。【五〇】霜蹄　霜を踐むひづめ。【五一】蹴踏　ける、ふむ。【五二】長楸　「かや」の木の類、長とは遠くまで連るをいふ。【五三】馬官　馬のかかりの役人。【五四】厮養　兵卒にして薪を析くものを厮、炊烹をなすものを養といふ。【五五】森成列　森は木の多き貌、列は行列。以上は九馬圖の本題に入りて正寫す。【五六】可憐　愛すべきをいふ。【五七】爭神駿　爭は競ふ、神駿はふしぎにすぐれたること。【五八】顧視　畫し兩事なり、顧は横をふりむくこと、視は前面を直視すること、馬が首を昂げながら悠す態度なり。【五九】淸高　きよらかにたかし、眼つきすみてうへの方をみる。【六〇】氣　氣象、意氣。【六一】深穩　おちついておだやか、馬の馴良なるさま。【六二】借問　かりにとふ。【六三】苦心　心をくるしませるほど。【六四】愛　この馬の姿を愛するをいふ。【六五】支遁　晉の僧なり、「世說」に曰く、支道林（卽ち支遁）嘗て數匹の馬を養ふ、或ば言ふ、道人馬を畜ふは韻あらずと、支が曰く、貧道は其の神駿なるを重んずるのみ、と。以上は支遁を陪客として韋諷が馬を愛するをいふ。【六六】昔　開元の頃をさす。【六七】巡幸　天子がおでましになる。【六八】新豐宮　新豐は縣の名、長安の東にあり、のちには會昌縣、昭應縣などを分ちたるもはじめは新豐なり、その東南にあたり驪山の溫泉宮（後には華淸宮と名く）あり、新豐の宮とは溫泉宮をさす。【六九】翠華　天子の旗、翠羽を以て旗を飾るによりて名く。上林賦にみゆ。【七〇】拂天　高くなびかすをいふ。【七一】東　長安よりいへば新豐は東にあたる。【七二】騰驤　騰は超えること、驤は馳せること。【七三】磊落　衆多なる貌。【七四】三萬匹　楊校内外閑廐・使知監牧使・霍國公王毛仲が開元十三年玄宗の泰山の封に從ひしときには、牧馬數萬匹を取り、毛色によりて一色ごとに一隊とし、相間はること錦繡のごとくなりしといへば、新豐の巡幸にもおびただしき馬隊の隨從ありしとみゆるなり。【七五】此圖　九馬の圖をさす。【七六】自從　二字にて「より」の意。【七七】獻寶朝河宗　「穆天子傳」に天子西征、至二陽紆之山一、河伯馮夷之所レ都居、是惟河宗氏、天子沈二璧禮焉、河伯乃與二天子一披二圖視一典、用觀二天子之寶器一、曰、天子之寶、玉果・璿珠・燭銀・黃金之膏、とみゆ。獻寶とは河伯が玉果以下のたからものを天子に獻りしをいふ。朝河宗とは河宗(卽ち河伯)が天子に朝せしをいふ。周の穆王の西征の事を借りて玄宗の蜀に幸せしことに比す。【七八】射蛟江水中　漢の武帝・元封五年に潯陽より江（揚子江）に浮び親ら蛟(みづち)を江中に射て之を獲たり。玄宗も生存されしならば南に巡幸して武帝のごとくされしならんも、崩御ありてそのことなかりき。故に上に「無復」といへり。【七九】金粟堆　山の名、奉先縣の東北二十里にあり、玄宗の泰陵の在る所なり、玄宗嘗て睿宗の橋陵（奉先縣にあり）に至り金粟山岡の龍盤虎踞の勢あるを見、侍臣に謂って曰く、吾、千秋萬歲の後此に葬られんと、崩ずるに及びて羣臣先旨にしたがひてここに葬る。泰陵に葬られしは廣德元年三月にあり。【八〇】松柏　みささぎにうゑてあるまつ、「はく」の木。【八一】龍媒　天馬をいふ。卷三の二五八頁をみよ。【八二】鳥呼風　風の吹くのに鳥がなきさけぶとはさびしき樣子をいへるなり。以上は玄宗の盛時をのべ其の崩後に及び感慨を以て結べり。

【題義】　錄事韋諷が宅にて曹霸が九馬の圖を觀てよめる詩。」廣德二年成都にての作。

【詩意】　吾が唐の開國以來、鞍馬を畫くに神妙とかぞへらる人は江都王（李緒）だけである。ついで曹將軍が畫名を得ることおよそ三十年、人間界また眞の名馬をみることができたのである。』將軍はかつて先帝（玄宗）の御馬照夜白をかいたが、そのをりには十日にして畫成るや興慶宮内の龍池で龍精相感じて霹靂が飛ぶといふ樣なことがあつた。この畫に對して先帝は婕妤におほせあり、婕妤はさ

らに詔をつたへて才人に命じ、內府に就いて殷紅色の瑪瑙の大皿をさがしださせてそれを將軍に賜はつた。將軍は恩賜の品を拜受して舞踏の禮をもつて私第に歸つたところが、そのあとから追つかけて更に急の御使を以て輕い紈・細綺などくさぐさを御下賜になつた。宮中かくのごとくなれば、貴戚權門のやからも、將軍の筆跡を得てはじめて其の家の屛風やついたてにかゞやきが生ずる樣のここちがしたのである。』さていま觀る將軍の九馬の圖であるが、昔しでいふなら太宗の拳毛騧、近頃でいふなら郭氏の獅子花、この二つの馬は共に圖のなかにかかれてあつて、從來の馬圖とおなじく識者に感歎されてゐるのである。この二馬は之に騎つて戰へば一人で萬人にも敵することができるもので、之をみると、縞素のうへに漠漠と風沙の世界があらはしだされてゐる。其の餘の七匹も特別の姿をした馬であり、そのさまをながめるとずつとほくして冬の寒空に煙や雪が動いてゐる樣だ。すなはち楸樹のつづく並樹のあひだに馬は霜ざえの蹄を蹴たててをり、また馬のかかりの官員や小ものの兵卒が多く行列してゐるのである。』九匹の馬がいづれおとらず神駿なすがたをしてゐるのは愛すべきみものである。橫をむき前をみつめてゐる彼等の眼付きは澄んでうへの方を見てをり、氣象はおちついておだやかなのである。そも、この馬の姿を愛する者はたれぞと問はば、前には支道林、後では吾が韋諷其人である。』これについて我は憶ふ、昔先帝(玄宗)が新豐の離宮へ御巡幸あそばされたとき、翠華の御旗を天になびかせて東へとおでかけになつた。あのとき躍りつ馳せつした馬は三萬匹というふ大多數のものであつたが、その馬はいづれも今此の圖で見る馬と同じ樣なすぐれた筋骨をしてゐたのだ、實に盛なことであつたのだ。それが周の穆王が西征して河伯を朝せしめ寶物を獻らしめられしごとく、先帝も西方(蜀)に御巡遊になつて以來、復た漢の武帝の南巡の時のごとく江上に蛟を射るといふ樣なことをなされずに崩御あそばされてしまつた。それで、諸君御覽あれ、先帝の御陵金粟堆の前なる松柏のうちには、いまは龍媒の天馬はみなゐなくなつて、いたづらに鳥がかなしく風にさけんでゐるばかりである。』

送韋諷(一)上閬州錄事參軍

韋諷が閬州の錄事參軍に上るを送る

(二)國步猶艱難。兵(三)革未(四)衰息。
國步猶ほ艱難なり、兵革未だ衰息せず。

萬方哀(五)嗷嗷。十(六)載供(七)軍食。
萬方哀みて嗷嗷たり、十載軍食を供す。

(八)庶官務(九)割剝。不暇憂(一〇)反側。
庶官割剝を務む、反側を憂ふるに暇あらず。

(一一)誅求何多(一二)門。賢者貴(一三)爲德。』
誅求何ぞ多門なる、賢者德を爲すを貴ぶ。』

韋生富(一四)春秋。洞(一五)澈有(一六)淸識。
韋生春秋に富み、洞澈淸識有り。

(一七)操持(一八)綱紀地。喜見朱(一九)絲直。
操持す綱紀の地、見るを喜ぶ朱絲の直なるを。

當令豪（二〇）奪吏自此無顏（二一）色。　當に豪奪の吏をして、此より顏色無からしむべし。
必若救瘡（二二）痍先應去蟊（二三）賊（二四）。　必ず若し瘡痍を救はむとならば、先づ應に蟊賊を去る「べし。」
揮淚臨大（二五）江高（二六）天意悽惻。　淚を揮ひて大江に臨む、高天に意悽惻たり。
行（二七）行樹（二八）佳（二九）政慰我深相（三〇）憶。』　行行佳政を樹てて、我が深相憶を慰めよ。

【字解】【一】上　のぼる、上任（任地にゆく）をいふ。成都よりゆくなり。【二】國步艱難　「詩」に天步艱難の語あり、また國步斯頻の語あり、國運すすみがたきをいふ。【三】兵革　戰亂のこと。【四】衰息　おとろへやむ。【五】嗷嗷　なくこゑのさま。【六】割剝　人民の肉を割き皮を剝ぐ、ひどく租稅をとりたてるをいふ。【七】十載　天寶十四載より廣德二年まで。【八】軍食　軍隊の食糧。【九】庶官　もろもろの官員。【一〇】反側　「詩」に展轉反側の語あり、うれひの餘り、あちらこちらと寢がへりうつこと、人民のおちつかぬをいふ。【一一】誅求　「左傳」襄公三十一年にみゆ、稅金を人民にせめもとめる。【一二】多門　これも「左傳」に晉政多門とみゆ、門は家といふの類、政が多くの家臣の手から出るをいへり、ここは稅を取りたてる官員が多種なるをいふ。【一三】爲德　人に對して德を行ふこと、此の二字は「漢書」韓信傳にみゆ、以上時事よりして人民の稅賦の負擔に苦しむことをのぶ。【一四】富春秋　年わかきをいふ、前途にまだ多くの春秋を有する意なり、「史記」李斯傳にみゆ、春秋高といふは年老いたるをいふ、混ずべからず。【一五】洞澈　みとほす。【一六】淸識　はつきりした見識。【一七】操持　手にとりてもつ。【一八】綱紀地　「白氏六帖」に錄事參軍謂之綱紀掾とあり、錄事は綱紀を維持する屬官なりとの義なり。【一九】朱絲直　あかき琴絲のごとくまつすぐ、其人の正直なるをいふ。鮑照が白頭吟に、直如朱絲繩とみゆ。【二〇】豪奪吏　豪奪の語は「管子」にみゆ、强力を用ひて人民より財物を取り去るをいふ。【二一】無顏色　恐れて顏面の血色を失ふをいふ、俗にいふ「青くなる」こと。【二二】瘡痍　創に「きず」のこと、人民の戰亂に由る損害をいふ。【二三】去　除き去る。【二四】蟊賊　二字「詩」にみゆ、蟊は根を食ふ蟲、賊は節を食ふ蟲、誅求豪奪の官吏をさす、以上韋諷の人物能く貪官を彈壓しうべきをのぶ。【二五】大江　岷江。【二六】高天　秋時をいふ。【二七】行行　ゆくゆく、將來をいふ。【二八】樹　立つ。【二九】佳政　よき政治。【三〇】深相憶　深く相憶ふの念、以上は別れにのぞみて勸告の辭をなしたり。

【題義】韋諷が閬州の錄事參軍となりて任地にゆくのを送る詩。廣德二年秋、成都にての作。

【詩意】吾が國運はまだ艱難のときにありて兵亂はやまぬ。諸方の人民は嗷嗷とかなしみながら十年も軍隊の糧食を供給してゐる。もろもろの官吏は人民から剝ぎとることばかり務めて人民がどたばたして安寢できぬことを心配してくれるひまがない。どうして稅金を責め取る家臣ばかり多いのか、賢人ならば人に對して德を行ふことが貴いのではないか。』韋君は前途に歲月を多くもつてゐる人でなにごとも見とほす見識をそなへてゐる。この人が錄事となつて綱紀を立つる場所を手にもつのであるから、自分は琴絲のごとくまつすぐな君を見ることを喜ぶのである。人民から財物を强奪する樣な役人どもに今後は顏色を失はしむべきである。人民のこれまで被つてゐるきずを救はうとならば、先づ根くひ蟲、節くひ蟲の樣な役人を除き去らねばならぬ。』君とお別れするので大江にのぞんで淚を揮ふと、秋の天高くしてわが意はものがなしい。君はこれからさきだんだんよい政治をうちたててわたくしの深く君をおもうてゐるこころを慰めていただきたい。』

(一)太子張舍人遺(二)織(三)成褥(四)段

太子の張舍人織成の褥段を遺る

(五)客從(六)西北來。遺我翠(七)織成。
客西北より來る、我に翠織成を遺る。

開(八)緘(九)風濤湧。中有掉尾(一〇)鯨。
緘を開けば風濤湧く、中に掉尾の鯨有り。

(一一)逶迤(一二)羅(一三)水族。瑣(一四)細不足(一五)名。
逶迤水族羅る、瑣細名いふに足らず。

客云(一六)充君褥。(一七)承君終宴榮。
客は云ふ君が褥に充てて、君が終宴の榮を承けしめむ。

(一八)空堂(一九)魑魅走。高(二〇)枕形(二一)神清(二二)。
『空堂魑魅走る、枕を高くすれば形神清しと。』

(二三)領客(二四)珍重意。顧我非(二五)公卿。
客の珍重なる意を領す、顧ふに我は公卿に非ず。

(二六)留之(二七)懼不祥。(二八)施之(二九)混柴荊。
之を留むるは不祥ならむことを懼る、之を施せば柴荊に混す。

(三〇)服飾(三一)定尊卑。大哉(三二)萬古程。
服飾は尊卑を定む、大なる哉萬古の程。

今我一賤老。(三三)裋褐更(三四)無營。
今我一賤老なり、裋褐更に營むこと無し。

(三五)煌煌珠(三六)宮物。寢(三七)處禍所(三八)嬰。
『煌煌たり珠宮の物、寢處するは禍の嬰る所なり。』

嘆息當(三九)路子。干戈尙縱橫。
嘆息す當路の子、干戈尙ほ縱橫なり。

掌握有權柄。(四〇)衣馬自肥輕。
掌握權柄有り、衣馬自ら肥輕。

(四一)李鼎死岐陽。實以驕(四二)貴盈。
李鼎岐陽に死するは、實に驕貴盈つるを以てなり。

(四三)來瑱賜自(四四)盡。氣(四五)豪直阻(四六)兵。
來瑱自盡を賜ふは、氣豪にして直ちに兵もて阻めばなり。

(四七)皆聞黃(四八)金多。坐見悔(四九)吝生。
皆聞く黃金多しと、坐に見る悔吝の生ずるを。

奈何田(五〇)舍翁。受此厚(五一)貺情。
『奈何ぞ田舍翁、此の厚貺の情を受けむ。』

(五二)錦鯨卷(五三)還客。始覺心和平。
錦鯨卷きて客に還す、始めて覺ゆ心の和平なるを。

振我(五四)蟲席塵。媿客茹(五五)(五六)藜羹。
我が蟲席の塵を振ひ、客に藜羹を茹はしむるに媿づ。』

【字解】【一】太子張舍人　太子舍人張某。【二】遺　貽る。【三】織成　毛織りもの。【四】褥段　しとねにする緞段。【五】客　つかひの人。【六】西北　何れの地をさすかは不明。【七】翠　みどり。【八】緘　篋をからがくもの、封じ。【九】風濤　海の模樣なり。【一〇】掉尾鯨　尾をうごかすくぢら。【一一】逶迤　うねりつづく。【一二】羅　つらなる。【一三】水族　魚類。【一四】瑣細　こまかなもの。【一五】名　名ざしていふ。【一六】充君褥　以下「形神清」まで客の言なり。【一七】君終宴榮　榮を荷ふといふがごとし、謙遜のあいさつなり。終宴は宴が始まりて終りまで。【一八】空堂　人のゐぬ座敷。【一九】魑魅走　怪物が逃走する。【二〇】高枕　たかまくらでねる。【二一】形神　肉體も精神も。【二二】清　すがすがし。以上は客、褥段を持ちておくりその效能を述べしことを敍す。【二三】領　うけいれる。【二四】珍重意　珍重とは珍とし貴重すべきをいふ。【二五】公卿　三公九卿、高位の臣。【二六】留之　之とは褥段をさす、留とはもらつて自分の手もとにとめおくこと。【二七】不祥　不吉。【二八】施之　施とは用ふるをいふ、之は褥段。【二九】混柴荊　柴荊の門庭に於て他物と混雜するをいふ。【三〇】服飾　身につけかざるもの。【三一】定尊卑　人の身分のたふときといやしきとをきめる。【三二】萬古程　千年萬年にわたりてかはらぬ「のり」なり。【三三】裋褐

毛で織つた粗末なうはチョツキ、卷五の四八三頁をみよ。【三四】更無奢　他に求め侈すことなし、それで滿足してゐる。【三五】煌煌　かがやくさま、「物」へかかる。【三六】珠宮　「楚辭」にみゆ、龍宮のこと、蓋し禁中をさしていへり。【三七】寢處　「いれ、ねる」なり。【三八】嬰　かかる。以上は縟段の受くべからざるをいふ。【三九】當路子　要路に當つてゐる人、權勢の地位にある臣。【四〇】衣馬肥輕　「論語」に本く。【四一】李鼎死岐陽　肅宗の上元二年、羽林大將軍李鼎を以て鳳翔尹・興鳳隴等州節度使と爲す、二月、黨項羌、寶雞に寇し、大散關に入り、鳳州を陷る、鼎、之を邀へ擊つ。六月、鼎を以て鄯州刺史・隴右節度使と爲す、而して其死は史書に見えず、此詩に「死ニ岐陽ニ」といふは、蓋し未だ隴右に至らずして非命に死せるならん、【四二】驕貴盈　驕貴はおごりと、地位の貴きこと、盈は「みつる」、十分驕貴を極めしこと。【四三】來瑱　寶應元年、來瑱、山南東道節度使となる、裴茙、瑱、倔强にして制し難しと表す、肅宗潛かに茙をして之を圖らしむ、六月、瑱、茙を申口に擒にし入朝して罪を謝す、廣德元年正月、茙を播州の尉に貶し、翼日死を鄠縣に賜ふ。【四四】自盡　自殺すること。【四五】氣豪　氣のあらきこと。【四六】阻兵　兵を恃むこと、「左傳」にみゆ。【四七】皆聞　「聞皆」に同じ、皆とは李鼎・來瑱・兩者をさす。【四八】黃金多　かねをたくさんためこむ。かれはいづれも人民のものを奪取せしなり。【四九】侮吝　悔は後悔、吝は窮する（ゆきつまる）こと、「易」の占ひの用語。【五〇】田舍翁　ゐなかおやぢ、自己をいふ。【五一】厚味　あつきたまもの。以上は更に推しひろめて奢侈の例をひき、縟段のうく可らざるをいへり。【五二】錦鯨　にしきのくぢら、縟段の模樣。【五三】還　返へす、もどす。【五四】麤席　粗末なむしろ。【五五】茹　食ふ、くはせるをいふ。【五六】藜羹　あかざのお汁。以上は自己の貧賤を以て滿足するをいふ。

【題義】太子舍人張某がしとねにする毛織の絨段をくれたことをよめる詩。廣德二年、成都にての作。

【詩意】ひとりの客が西北の地方から來て自分に翠色の毛織物をくれた。はこの封じを開くと風濤が湧きおこり、なかに尾をうごかしてゐる鯨がみえる。また魚類がうねうねとつづいてゐるがそんな小さなものはとりたてていふほどのこともない。客が云ふには、「此の品はあなたのしとねにあててください、あなたが宴席のとき始終しいてくださるご光榮を頂きたいものでござる。これをおしきになればさびしいへやでも怪物がにげだし、このうへにたかまくらでおやすみになればからだもこころもすがすがしくなりまする。」と。』自分は之に答へていふ、「あなたのたふといおこころもちはうけいれます、しかしかへりみてみるにわたくしは公や卿の身分ではなし、かやうな物をもらつておいては不吉が來はせぬかときづかはれる。こんな物を用ひてはこのあばらやに於てほかのものとごちやごちやにしてしまふことになる。人の服飾といふものは之に由つて身分の尊卑をきめるもので大切な永久ののりといふべきものだ。今わたくしはいやしいおやぢで粗末な毛織のうはチョツキを着て滿足してをるものでほかに何かを得たいといふ樣なことをせぬのである。こんな煌煌とかがやいた龍宮のしな物はそのうへにねたり居たりしては禍にかかることであらう。』「なげかはしいことには今要路にをる人人、天下は兵亂がまだ縱橫にひろがつてゐる。彼等は手に權柄をにぎり、輕い衣をきて肥えた馬にのつてゐる。李鼎が岐陽で死んだのは實はあまりに驕貴をきはめたためのである。來瑱が自殺の罰を賜はつたのも氣があらくただ兵を恃んだためである。聞けば兩人ともみな金錢をたんとためてゐたといふがそんなことではやがて悔吝の運勢がでてくることは想像されることである。かやうなわけでありますから、どうしてこのゐなかおやぢがかやうな厚いたまものをくださるおこころをそのままおうけす

ることができませう。』かういうて錦の鯨を卷いて客におかへしした。それでやつと心が平和になつたきもちがした。さうしてバタバタ粗末な席の塵を振ひおとしてお客にあかざ汁をたべさせる、これはお客に對してはおはづかしいことぢや。』

憶昔二首

憶昔(一)先皇(二)巡朔方。
(三)千乘萬騎入(四)咸陽。
(五)陰山驕子(六)汗血馬。
(七)長驅(八)東胡(九)胡走藏。
(一〇)鄴城反覆不足怪。
(一一)關中小兒(一二)壞紀綱。
(一三)張后不樂(一四)上爲忙。(單句)
至令(一五)今上猶(一六)撥亂。
(一七)勞心焦思(一八)補四方。
我昔(一九)近侍叨奉引。
(二〇)出兵整肅不可當。
(二一)爲留猛士守未央。
(二二)致使(二三)岐雍防西羌。
(二四)犬戎直(二五)來坐(二六)御床。
百官(二七)跣足(二八)隨天王。
願見北地(二九)傳介子。
(三〇)老儒不用(三一)尚書郎。』

憶昔　二首

憶ふ昔先皇朔方を巡る、
千乘萬騎咸陽に入る。
陰山の驕子汗血の馬、
東胡を長驅して胡走り藏る。
鄴城反覆するは怪むに足らず、
關中の小兒紀綱を壞る。
張后樂ます上爲に忙がはし。
今上をして猶ほ撥亂し、
心を勞し思ひを焦し四方を補はしむる」に至る。
我昔近侍叨りに奉引す、
兵を出すこと整肅當る可からず。
爲に猛士を留めて未央を守らしめしに、
岐雍をして西羌を防がしむるを致しぬ。
犬戎直ちに來つて御床に坐す、
百官跣足天王に隨ふ。
願はくは見む北地の傅介子、
老儒用ひず尚書郎。』

【字解】【一】先皇　肅宗をいふ【二】巡朔方　朔方は靈武の地、巡は巡遊、實はそこにて即位せしなり。【三】千乘萬騎　多くの軍隊。【四】咸陽　陝西西安府咸陽縣、秦の都せし地、渭水を隔てて長安の北岸にあり、咸陽をあげたれども實は長安に入りしことをいふなり。【五】陰山驕子　陰山は山の名、山西省歸化城北三十五里にあり、驕子はもと匈奴をさす、匈奴は天の驕子なりと稱せらる、ここに陰山の驕子といふは回紇をさす、回紇は唐を助けたり。【六】汗血馬　血の汗をだす名馬。【七】長驅　遠くかりたてる。【八】東胡　安慶緒をさす。【九】胡走藏　慶緒は河北に走りて鄴城を保てり。【一〇】鄴城反覆　史思明既に降りて復た叛き安慶緒を鄴城に救ふ。九節度の師潰えたり、東京もついで陷る、鄴城は河南の彰德府、反覆は形勢のひつくりかへつたこと、初、官軍に有利にみえしものが賊に有利になる樣にかはりしなり。卷六の「洗兵行」卷七の「新安吏」をみよ。【一一】關中小兒　官者李輔國をいふ、輔國は閑廐馬家の小兒(小使ひ)なり、少くして閹(去勢者)となる、貌陋にしてほぼ書計を知る、僕となりて高力士に事ふ。のち張良娣と權を專らにす。【一二】壞紀綱　朝廷の秩序を破りしこと、張后とともに上皇(玄宗)を徙さんとし、太子(後の代宗)の地位を危くせんとせしことなど是なり。【一三】張后　肅宗の后張良娣。【一四】上爲忙　上は肅宗、爲は張良娣のために、忙とは御機嫌とりにいそがしきをいふ、此一句は單句なり。【一五】今上　代宗をさす。【一六】撥亂　亂をなさむること、撥亂反正とは「公羊傳」にみゆ。【一七】勞心焦思　心配すること。【一八】補四方　補とはやぶれ目をおぎなふ、政治上のつくろひをすること。以上は肅宗天下を平定する能はざりしことをのぶ。【一九】近侍叨奉引　近侍は天子のおそばちかくなること、

妄は「みだりに」、謙辭なり、奉引は御案内をすること、此一句は作者肅宗の朝に左拾遺たりしことをさす、拾遺の官は供奉を掌る。【二〇】出兵整肅　肅宗は至德元載七月靈武に卽位し、九月、廣平王俶(後の代宗)を以て天下兵馬元帥となす、整肅はととのひひきしまること。【二一】爲留猛士守未央　爲とは代宗のために、猛士とは郭子儀、未央は漢の宮名、かりて唐の宮殿をさす。郭子儀前朝以來の功臣ゆゑ肅宗は之をのこして唐の天下を安んぜんとされしに代宗は之を用ひ果さざりき。寶應元年八月（時に肅宗已に崩じ代宗在位）子儀河南より入朝す、程元振之を讒す、子儀請ひて副元帥・節度使・を辭き京師に留まる。翌年(廣德元年)十月に至り遂に吐蕃の大侵入となれり。【二二】致使「云云せしむるを致す」とは、代宗の仕方がしかせしむる樣の結果を生ぜしこと。【二三】岐雍防西羌　岐は岐山、鳳翔府岐山縣、雍は雍州、關中の地をさす、西羌は吐蕃をいふ。「舊唐書」吐蕃傳に、「乾元(肅宗の年號)の後數年、鳳翔の西、邠州の北は盡く蕃戎の境となる。」といはるるほど、長安近くまで吐蕃は入りこみ居たりしなり。【二四】犬戎　吐蕃を比していふ。【二五】直來　廣德元年十月の侵入をいふ。【二六】坐御床　天子のおんこしかけにすわる、宮殿内に亂入せしをいふ。【二七】跣足　はだし、狼狽のさま。【二八】陷天王　天王は代宗、代宗陝州に出で奔る。【二九】北地傅介子　北地は漢の時の郡の名、傅介子は北地の人、漢の昭帝の駿馬監となる、樓蘭國に使して其王の不信を責め首を斬りて歸りて之を北闕の下に懸けたり。【三〇】老儒　自己をいふ。【三一】尙書郎　尙書省の郎の官、工部員外郎をさす。廣德二年六月、作者は嚴武が薦めを以て節度參謀・檢校工部員外郎・となり、緋魚袋を賜ふ。以上は代宗亦蠻夷を制する能はざるをいひ、之を平定せんことを希望せり。

【題義】昔のことを憶うて作る「憶昔」といふは詩篇の首二字を切りとりて用ふ。この第一首は肅宗代宗二朝の政治に遺憾の點あることをいへり。」余は仇注に引ける「杜臆」の說に從ひて之を作者工部員外郎となりしのち往事を追憶してよめるものとす、然らば廣德二年嚴武が幕中の作なり。浦氏楊氏は廣德元年十月代宗の出奔當時の作とし、第一首の「尙書郎」第二首の「蒙祿秩」を京兆功曹に召されて赴かざりし時のことをいふものとみたるも今取らず。

【詩意】自分は憶ふ、むかし安祿山・史思明・の亂のとき吾が先皇(肅宗)は朔方を御巡遊になり、千乘萬騎をひきゐて咸陽へおはいりになつた。そのとき御味方として陰山地方に居て天の驕子とも目すべき回紇の兵が汗血の馬にのつて馳せ參じたので遠く東胡(安慶緖)を驅逐し、東胡は逃走して鄴城にかくれるにいたつた。しかし鄴城で官軍が成功しかけながらそれがひつくりかへつたことは不思議でもなんでもない、なぜといふに關中の小使ひ出身の男（李輔國）が朝廷の秩序をこはし、聖上におかせられては張皇后の歡心をお迎へになるために浮き身をやつしておいでになつてゐるといふ有樣なのであつたから。その結果はひいて今の主上(代宗)の世になつてなほ亂をさめんとして四方の破れ目をつづくりあはせることに御苦心をあそばさるることにならしめられたのである。』むかし(肅宗の時)自分は御近侍の臣でふつつかながら供奉の職にあづかつたが、その頃は御子さま（廣平王俶）を元帥に御任命になり兵をお出しになること整肅で之に當ることはできぬほどであつた。また御子さま（廣平王）の爲めに猛き士（郭子儀）を留めて宮殿を守らせてお置きになつたのに、繼いでお立ちになつた御子さま（廣平王、卽ち代宗）は之を用ひきることがおできにならず、都ちかくの岐・雍・の地方で西の羌（吐蕃）を防がねばならぬ樣な結果となり、えびすは直ちに都の宮殿まではいりこんで御床に坐りこみ、百官ははだしのままでお上のおともをして逃げ出す(陝州へ)ことになつたのだ。自分は昔樓蘭王を斬つたといふ北地の傅介子の如き人物をいま見たいとおもふ、この老いぼれ儒者に尙書の郎

官を賜はつたが、さやうなものは自分にはいらぬものである。』

〔二〕

憶昔開元(一)全盛(二)日、
小邑(三)猶藏萬家(四)室。
稻米(五)流脂(六)粟米(七)白、
公私倉廩(八)倶豐實(九)。
九州(一〇)道路無豺虎(一一)、
遠行不勞(一二)吉日出(一三)。
齊紈(一四)魯縞(一五)車班班(一六)、
男耕女桑(一七)不相失(一八)。
宮中(一九)聖人(二〇)奏雲門(二一)、
天下朋友皆膠漆(二二)。
百餘年間(二三)未災變(二四)。

〔二〕

憶ふ昔開元全盛の日、
小邑猶ほ藏す萬家の室。
稻米脂を流して粟米白く、
公私の倉廩倶に豐實。
九州の道路に豺虎無く、
遠行勞せず吉日に出づるを。
齊紈魯縞車班班、
男耕女桑相失はず。
宮中には聖人雲門を奏す、
天下の朋友は皆膠漆。
百餘年間未だ災變あらず、

【字解】【一】開元　玄宗の年號　【二】全盛　極盛のとき。【三】小邑　小縣。【四】萬家　萬戸。【五】稻米　いねになつてゐるこめ。【六】流脂　脂肪のあふれでること。【七】粟米　もみのこめ。【八】倉廩　穀を藏する所を倉、米を藏する所を廩といふ。【九】豐實　ゆたかに充實する。【一〇】九州　全天下をいふ。【一一】豺虎　盜賊をいふ。【一二】不勞　わづらはさず。【一三】吉日出　日がらのよき日をトひえらびて出かける。【一四】齊紈　齊(山東省臨淄の地方)でできるうすぎぬ。【一五】魯縞　魯(山東省曲阜の地方)でできる精白のうすぎぬ。【一六】

叔孫禮樂(二五)蕭何律(二六)。』
豈聞(二七)一絹直萬錢(二八)。
有田(二九)種穀今流血(三〇)。
洛陽宮殿(三一)燒焚盡、
宗廟(三二)新除狐兎穴。
傷心不忍問耆舊(三三)。
復恐初從亂離(三四)說。
小臣(三五)魯鈍(三六)無所能(三七)、
朝廷記識(三八)蒙(三九)祿秩(四〇)。
周宣(四一)中興望我皇(四二)。
灑淚江漢(四三)身衰疾(四四)。』

叔孫の禮樂蕭何が律。』
豈に聞かむや一絹直ひ萬錢なるを、
田有つて穀を種ゑしに今は血を流す。
洛陽の宮殿燒焚し盡す、
宗廟の新除にも狐兎穴す。
傷心忍びず耆舊に問ふに、
復た恐る初めて亂離より說かむことを。
小臣魯鈍能くする所無し、
朝廷記識して祿秩せらるることを蒙る。
周宣の中興我が皇に望む、
淚を江漢に灑いで身衰疾なり。』

班班　みちにつづくさま。【一七】男耕女桑　男は田をたがへし、女は桑をとる。【一八】相失　「失」はあやまつ義なり、各〻其の生業に從事してそれにたがふことなきをいふ。【一九】宮中　副詞としてみるべし。【二〇】聖人　天子。【二一】奏雲門　奏は樂官(大司樂)がかなでるなり、聖人がなすにあらず、聖人は奏せしむるものなり、雲門は樂の名、「周禮」の大司樂に、大司樂「歌二大呂一、舞二雲門一、以祀二天神一」とみゆ。【二二】膠漆　にかは、うるし、共によくひつつくもの、交りの親密なるをいふ。【二三】百餘年間　唐の武德の初より開元の末年まで百二十三年なり。【二四】災變　災は災に同じ、わざはひ、天火をいふ、變は變事。【二五】叔孫禮樂　漢の高祖天下を定むるや叔孫通をして禮儀を制せしむ、唐の開元二十年九月に「開元通禮」成れり、同廿九年八月には太常、所定の雅樂を奏す、詩句は其事をさす。【二六】蕭何律　漢の蕭何、秦代の法をひろ

ひ、其の時にかなへるものを取りて律九章を作る。唐には開元前格・後格・等の刑法を作る。詩句はそれをいふ。以上開元時代の平和を稱揚す。【二七】豈聞　聞きしことなし。【二八】一絹直萬錢　作詩時の物價騰貴をいふ、直は値なり、一絹は一匹のきぬ、柳芳の「唐曆」に、開元二十八年、天下雄富、京師米價、斛不レ盈二二百一（錢）、絹亦如レ之、東由二汴宋一、西歷二岐鳳一、夾レ路列レ店、陳二酒饌一待レ客、行人萬里、不レ持二寸刃一とみゆる、如何に開元時代の物價廉にして海內平和なりしかをみるべし。【二九】有田種穀　昔時をいふ。【三〇】流血　戰爭あるをいふ。【三一】洛陽一句　安・史・の亂をいふ。【三二】宗廟新除狐兎穴　除は增除の除なり、「どえん」をいふ、新は修繕したてなるをいふ、穴とは穴をうがつをいふ。【三三】耆舊　老人たちをいふ。耆は年六十の人。【三四】亂離　世みだれて人人ちりぢりになること。【三五】小臣　つまらないけらい、謙辭なり、自己をさす。【三六】魯鈍　おろか、にぶし。【三七】能　上手にできること。【三八】記識　識は「誌す」なり、姓名をかきとめておく。【三九】蒙　は敬語として用ひたり、ただちにうくるをいふにあらず、「蒙祿秩」を完全文章にかきあらはせば「蒙レ加二祿秩一」などあるべきなり。【四〇】祿秩　秩は官位、祿はそれに對する俸給をいふ。【四一】周宣　周の宣王、夷狄を攘ひ中興をなしたり。【四二】我皇　代宗。【四三】江漢　江は錦江、漢は閬州の江、一に西漢水といふもの、成都と閬州地方とに奔走せしゆゑ二水を擧ぐ。若しこの漢の字に重きを置けば本篇は浦氏の說のごとく廣德元年閬州にての作とすべきが如くなるも「尙書郞」といひ、「蒙祿秩」といふときは依然員外郞となりし時のものと見るべしと考ふ、郞は功曹に向つていふべからず、また辭して赴かざるに「蒙祿秩」といふは事に合はざるが故なり。【四四】衰疾　おとろへ、やむ。以上は天寶末以來の變亂をのべて復興をいのることをのぶ。

【題義】　この第二首は先づ開元の盛時をのべ、更に其後の變化をのべて復興を希望することをいへり。

【詩意】　自分は憶ふ、むかし開元時代の全盛のころには、小さな縣でも萬戶ほどのいへがあり、田地には稻がよくできて米は脂をながし、もみの米でも白くりつぱであり、官私の穀ぐら、米ぐらはたつぷりと食糧がつまつてゐた。天下どこの道路にも豺虎の様な盜賊は無く、遠方へ行くにも吉日をうらなつてからでかける世話はなかつた。齊魯の絹ものをつんだ車はひきりなくつづいて、男女とも耕桑の仕事をまちがひなくすることができた。宮中では天子のおんまへには雲門の雅樂が奏せらる、天下の朋友の交りは膠と漆の様な親密さであつた。百年あまりこのかた變災はあつたことがなく、叔孫通にも比すべき人がこしらへた禮樂、蕭何に比すべき人が作つた法律、ならび行はれて世は太平至極なものであつた。』そのころは今日の様に一匹の絹が萬錢もするといふ様なことは聞いたこともなかつた。またそのころ田地さへあればそこに穀物を種ゑたものなのに今はそこには戰爭のために血を流しつつある。洛陽の宮殿は亂賊のために燒かれつくし、宗廟の修繕したての土塀のところまで狐や兎が穴をほつてすんでゐる。どうしてこんなにかはつたものか、自分は心をいたましむるあげくそのいはれを老人たちにたづねるには忍びぬ、もしたづねたら彼等はまた初から騷亂の起つたそもそもから說きだすこととときづかはれるから。小臣は魯鈍なものでなにもこれひとつできるといふものはないのに朝廷ではわたくしの名をおかきになつてこのごろ官位俸祿を賜はるの恩命をになうた。わたくしは老衰疾病の身で江漢の地方に憂國の淚をそそぎつつ、我が皇に對して周の宣王のごとき中興の業をなしとげたまはんことを希望したてまつるものである。』

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部 二十二の上

309
65

始

吉田待郎氏寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第二十二册（第六帙の上ノ二）

杜少陵詩集 下の上ノ二

309
65

杜少陵詩集　巻十四

寄(一)董卿嘉榮十韻

聞道君(二)牙帳。防(三)秋近(四)赤霄。
下臨(五)千仞雪。卻(六)背五繩橋。』
海內久(七)戎服。京師今(八)晏朝。
(九)犬羊曾爛(一〇)漫。宮闕尚蕭條。
猛將宜嘗(一一)膽。龍(一二)泉必在腰。
(一三)黃圖遭(一四)汚辱。月(一五)窟可焚燒。
(一六)會取(一七)干戈利。無令(一八)斥候驕(一九)。
(二〇)居然雙(二一)捕虜。自是一(二二)嫖姚。』
落日思輕(二三)騎。高(二四)天憶射(二五)鵰。

董卿嘉榮に寄す十韻

聞道君が牙帳、防秋赤霄に近く、
下は千仞の雪に臨み、卻つて五繩橋に背くと。』
海內久しく戎服す、京師今晏朝なり。
犬羊曾て爛漫たり、宮闕尚ほ蕭條たり。
猛將宜しく膽を嘗むべし、龍泉必ず腰に在らむ。
黃圖汚辱に遭ふ、月窟焚燒す可し。
會ず干戈の利なるを取り、斥候をして驕らしむること無れ。
居然雙捕虜なり、自ら是れ一嫖姚なり。』
落日輕騎を思ひ、高天射鵰を憶ふ。

雲臺〔二七〕畫形像、皆爲掃氛妖〔二八〕。』　雲臺形像を畫かるるは、皆氛妖を掃ひしが爲なり。』

【字解】〔一〕董卿嘉榮　卿は敬稱、董嘉榮は姓名、武將とみゆ。〔二〕牙帳　本營をさす。牙は牙旗、帳は「まく」、牙旗を立てたるまくばりの場所の義にて本營を意味す、牙旗は軍前の大旗なり、軍中の號令はこの大旗の下にてくだす、軍前の大旗を牙旗と稱するわけについては、武將は王の爪牙となりて衞るものなるがゆゑともいひ、その旗竿の上頭を象牙にて飾るゆゑともいふ。〔三〕防秋　蠻夷の秋の侵入をふせぐこと。〔四〕近赤霄　地勢の高きをいふ、赤霄はあかきそら。〔五〕千仞雪　ふかき谿谷の雪、仞は八尺。〔六〕御背五繩橋　繩橋のこと卷十「入奏行」の邏檣繩橋の句解をみよ、御背とはこちらがその橋よりも敵地の方へふかく進むゆゑに橋を背にすることになるをいふ、以上は董卿が出征する地をいふ。〔七〕戎服　軍服をつける。〔八〕晏朝　天子の朝廷より退出せらるる時刻がおそくなること、軍國軍務の多忙なるためなり。〔九〕犬羊　吐蕃の蠻夷をさす。〔一〇〕猖獗　はびこれるさま。〔一一〕嘗膽　越王勾踐が故事、勾踐與の讎を忘れぬため膽を嘗め薪に臥したり。〔一二〕龍泉　名劍の名。〔一三〕黃圖　近畿の地圖をいふ。〔一四〕遭污辱　廣德元年十月長安の地吐蕃に侵され代宗陝州へ出奔せられしことをさす。〔一五〕月窟　西方の地、吐蕃の根據にあてていふ。〔一六〕會　俗語「必す」。〔一七〕干戈利　我が軍の干や戈を銳利にしてよくすること、勝を得べき方法をいふ。〔一八〕斥候　ものみの兵。〔一九〕肅　威嚴あること、いばらぬは號令嚴肅なるなり。〔二〇〕居然　そのまま、大雅「生民」の詩に出づ。〔二一〕雙捕虜　後漢の馬武、建武四年に劉永を討ちて捕虜將軍に任ぜらる。雙とは二人をいふ、雙捕虜とは今董嘉榮も戰功を立つれば昔の馬武とならびて捕虜將軍が二人となるべきをいふ。〔二二〕一嫖姚　嫖姚は漢の武帝の時の名將嫖姚校尉霍去病をいふ、以上は吐蕃の亂を彼し董嘉榮に勉勵すべきことをすすむ。〔二三〕輕騎　身がるに裝うた騎兵。〔二四〕高天　秋の空をいふ。〔二五〕射鵰　鵰はクマタカ、北齊の斛律光といふもの嘗て一大鳥を射とめたるに車輪のごとき形してぐるぐるまひして落ちたり、鵰なり、邢子高歎じてかれは「鵰を射るの手」なりといひしとぞ。〔二六〕雲臺　後漢の明帝雲臺に廿八將の像を畫かしむ。〔二七〕皆爲　皆とは董をはじめとしてその他の部下の將卒までもみなの意。〔二八〕氛妖　惡しき兵亂の氣、以上は寄懷の意をのべ重れて之を激勵す。

【題義】董嘉榮が秋、防禦のために吐蕃の國境へ出征してゐるのに寄せた詩。廣德二年成都にての作。

【詩意】聞けば君の本營は秋の防禦のために赤色の天に近いほどの高地にあるとのことだ、そこは下は千仞の谿谷の雪にさしかかり、五繩橋よりもずつと奧ふかく進出してゐる。』天下は軍服をぬがずにゐることが久しく、京師では今、朝廷の御退出がおそくまでかかつてをる。かつては犬羊のえびすがはびこり、かれらにあらされて宮闕はいまもつてさびしくある。猛將たるものは必ず腰に龍泉の名劍をおび、昔の越王勾踐の樣に苦い膽を嘗めるべきである。みやこの近地まで汚され辱しめられたのであるから、彼等の根據とする月窟の地をも燒きはらふべきである。きつと武器をよくととのへていくさの勝ちを取る樣にし、味方の物見の兵などを威張らせぬ樣嚴肅にせねばならぬ。さすれば君はおのづと一箇の霍嫖姚であり、またむかしの馬武とならんでそのまま二人の捕虜將軍ともみなさるべきものである。』君たちはさだめし、秋の夕ぐれに輕裝の騎兵をひきつれて鵰を弓で射たりするであらう。むかし雲臺の上に功臣として其のすがたを畫かれた人人は皆國家のために兵亂の氣を掃ひのけてくれたからである。君たちもどうかさやうにありたいものだ。』

立秋雨院中有作

山雲行絕塞。大火復西流。
飛雨動華屋。蕭蕭梁棟秋。
窮途愧知己。暮齒借前籌。
已費淸晨謁。那成長者謀。
解衣開北戶。高枕對南樓。
樹濕風涼進。江喧水氣浮。
禮寬心有適。節爽病微瘳。
主將歸調鼎。吾還訪舊丘。

立秋雨る、院中にて作有り

山雲絕塞に行き、大火復た西に流る。
飛雨華屋に動き、蕭蕭梁棟秋なり。
窮途知己の、暮齒前籌を借るに愧づ。
已に淸晨の謁を費す、那ぞ長者の謀を成さむ。
衣を解きて北戶を開き、高枕南樓に對す。
樹濕ひて風涼進み、江喧しくて水氣浮ぶ。
禮寬にして心適する有り、節爽にして病微しく瘳ゆ。
主將調鼎に歸せば、吾還りて舊丘を訪はむ。

【字解】【一】立秋 節の名。【二】院中 節度使の官邸の奥座敷をいふ。【三】行 運行すること。【四】絕塞 遠きはての地のとりで、蜀のとりでをさしていふ。【五】大火 大火心星といふ星なり。大火心星は六月の黄昏には正南に中す、七月となればそれより西方にうつりてひくくなる。【六】西流 流は「下る」なり。【七】飛雨動 動とはふりだすこと。【八】華屋 りつぱなやれ、節度使の居る家屋をいふ。【九】蕭蕭 さびしきさま。【一〇】梁棟 はり、むなぎ、「飛雨」二句は謝朓が觀朝雨詩の朔風吹飛雨、蕭條江上來に本く。【一一】愧 此字下句までへかかる。知己 我を知りてくれる人、嚴武をさす。【一二】暮齒 晩年をいふ。【一三】借前籌 漢の張良、高祖の前にて御膳の箸を借りて漢の運命を籌る、籌は箸にて數をよむことなり、ここは嚴武が作者の智慧を借りしことをいふ、廣德元年六月、嚴武、作者をすすめて節度の參謀となしたるはその智慧をかるなり。【一四】費 てかずをかくるをいふ。【一五】淸晨謁 あさの謁見、作者は參謀なれば屬僚なり、嚴武は節度使なれば長官なり、屬僚は長官に對する朝の謁見あるべきなり。【一六】那成長者謀 長者は目上の人、嚴武をさす、淸晨の謁などをなしては嚴武がためにその謀を成就させてやることはできぬ、作者武に對して不平の口氣あり。以上立秋に院中にて雨にあひしことと、其時の意中をのぶ。【一七】解衣 禮服の上衣をときすてる。【一八】高枕 枕をたかくして臥す。【一九】風涼進 進は進み入ること、此句「北戶」を承く。【二〇】水氣浮 此句「南樓」を承く。【二一】禮寬 嚴武が作者を待遇するに禮法寬大なること。【二二】心有適 適はこころにかなふをいふ、【二三】節爽 時候がさわやか。【二四】瘳 いゆる、なほる。【二五】主將 主人たる將軍、嚴武をいふ。【二六】歸調鼎 歸はそこにおちつくこと、調鼎は鼎のなかの物の味をととのへること、謂はゆる鹽梅をよくするなり、「尙書」の說命篇下に殷の高宗、賢臣傅說にむかひて若作和羹、爾惟鹽梅とみゆ、鹽梅調理は宰相の任なり。【二七】舊丘 浣花溪の林丘をいふ。以上はつづいて雨中の景と所感とをのぶ。

【題義】作者節度の參謀となりて立秋の日に節度使の官邸にて雨にあひ感ずる所をのべた詩。廣德二年七月の作。

【詩意】秋らしく大火心星が西へずつとひくくなり、ここの邊鄙なところのとりでに山の雲がうごきだし、うつくしい官宅に雨が飛んで來て、梁も棟もさびしく秋たちわたる。自分はゆきつまつたをりに知己である人（嚴武）から晩年に傾いてゐる自分に智慧をかりられることははづかしくおもふが、さりとてただの屬僚あつかひにされて毎朝おつとめの謁見の手數をする樣では、どうしても目上の人

（嚴武）の謀をたすけてそれを成就させてやることができよう。』（だから自分はすこしわがままではあるが、）禮服の上衣などは解きすてて北の戸を開けはなち、高枕で南の樓にむきあつてねころぶ。すると樹木はしめつてゐてすずしい風が室のなかまでやつて來、江の水おとはやかましくみづけむりを浮かせてゐる。こんなにしてもとがめぬほど長官は寛大にあつかつてくれるから自分の心に滿足があり、時候のさわやかなために病氣もすこしはなほつた樣に感ぜられる。主人公（嚴武）は結局みやこにのぼつて宰相にでもなるだらうが、そのときは自分はまたもどつて舊の林丘を訪ふだけのことだ。』

奉和嚴鄭公(一)軍城早秋(二)

嚴鄭公が軍城早秋を和し奉る

秋風嫋嫋(三)動(四)高旌(五)。　秋風嫋嫋高旌に動く、

玉帳(六)分弓(七)射虜營(八)。　玉帳弓を分ちて虜營を射る。

已收滴博(九)雲間戍(一〇)。　已に收む滴博雲間の戍、

欲奪蓬婆雪外城(一一)。　奪はむと欲す蓬婆雪外の城。

【字解】【一】嚴鄭公　鄭國公嚴武をさす。【二】軍城早秋　嚴武が作りし詩の題なり、辭は次に見えたり。【三】嫋嫋　なよなよと風の吹くさま。【四】動　吹きそむるをいふ。【五】高旌　旌は羽をふさふさにして竿につけたはた。【六】玉帳　將軍のりつぱな陣幕。【七】分弓　分とは部下の諸將に配分して授くるをいふ。【八】虜營　虜は吐蕃のえびすをさす。【九】收　こちらの手に入れること。【一〇】滴博雲間戍　雲間滴博戍といふを置きかへたる形なり。滴博は嶺の名、維州にあり、雲間とは高きをいふ。【一一】蓬婆雪外城　これも雪外蓬婆城といふを置きかへたる形なり、蓬婆は山の名、一に大雪山ともいふ、柘縣の西北百里にありと、そこに吐蕃の城あるなり、雪外とは地高く雪をいただける山山のそのまた外方にあるをいふ。

【題義】嚴武が「軍城早秋」と題する詩を作つたので、それに和してつくつた詩。廣德二年七月の作。

【詩意】秋風がなよなよと高い旌のうへに吹きそめた。このとき將軍は陣幕のなかで部將に弓を分ちさづけてそれでえびす（吐蕃）の軍營を射させるのである。雲間にそびゆる滴博嶺の戍ばしよはもはやこちらの手にいれたのであるが、これからは雪のみねのかなたに横はる蓬婆山の城を奪はうといふ了見なのである。

【餘論】嚴武の原作は左のごとし。

軍城早秋(一)

軍城の早秋

昨夜(二)秋風入漢關(三)。　朔雲(四)邊雪(五)滿西山(六)。

更催(七)飛將(八)追驕虜(九)。　莫遣(一〇)沙場(一一)匹馬還(一二)。

昨夜秋風漢關に入る、朔雲邊雪西山に滿つ。更に飛將を催して驕虜を追はしむ、沙場の匹馬をして還らしむること莫れ。

【字解】【一】軍城　軍務中の城、成都の城をいへり。【二】昨夜　ゆうべ、必ずしもただちに前日の夜をさすにはあらず。【三】漢關　漢地の關、唐の吐蕃境に接する關をいふ。【四】朔雲　北方よりのくも、雪雲のこと。【五】邊雪　邊境の雪、「雪」の字を或は「月」に作る、月は月光をいふ、雪の意は已に朔雲のうちにこもりあれば「月」の字妙に覺ゆ。【六】西山　雪山をさす、已にしばしばみゆ。【七】更催　更とはこれまでよりももつとといふこと、催は催促。【八】飛將　漢の武帝の時の名將李廣を稱して匈奴は之を飛將軍といへり、その兵をやることの神速なるをいふなり、ここは部下の將軍をさしていふ。【九】驕虜　いばつたえびす、吐蕃をさす。【一〇】遣　俗用、「して――せしむる」なり。【一一】沙場　沙漠をいふ、ここは單に戰場をいふ。【一二】匹馬　一匹の馬さへもの義、敵の馬についていふ。

【題義】軍務中の城の早秋のことをよめり。廣德二年七月の作。此の歲九月に嚴武が軍は吐蕃七萬餘の衆を當狗城に破り、遂に鹽川城を收めたり。詩はその二箇月前に成りたればこれより吐蕃を攻め破らんとの意氣込みにてよみたるなり。

【詩意】吾が唐の國境の關所にはゆうべあたり秋風が吹き入つて西山には雲も雪も（或は「月の光も」）一ぱいになつた。このとき味方は更に漢の李廣にも比すべき名將をうながして吐蕃の驕れる虜を追ひ擊ちさせる、戰場での敵の馬はたとひ一匹たりとも無事にかへしてはならぬぞよ。

院中晩晴懷西郭茅舍（一）

院中の晩晴に西郭の茅舍を懷ふ

（二）幕府秋風日夜清（三）。　幕府秋風日夜清し、
（四）澹雲疎（五）雨過高城。　澹雲疎雨高城を過ぐ。
（六）葉心朱實看（七）時落。　葉心の朱實は看時に落ち、
階面青苔老（八）更生。　階面の靑苔老いて更に生ず。
復有樓臺銜（九）暮景。　復た樓臺の暮景を銜む有り、
（一〇）不勞鐘（一一）鼓報新晴。　勞せず鐘鼓の新晴を報ずるを。
浣花溪裏花（一二）饒笑。　浣花溪裏花饒く笑ふ、
（一三）肯信吾兼吏（一四）隱名。　肯て信せむや吾吏隱の名を兼ぬるを。

【字解】【一】西郭茅舍　城西のくるわのかやぶきのこや、浣花溪の草堂をさす。【二】幕府　嚴武がやくしよ。【三】清　すずしきこと。【四】澹雲　あはきくも。【五】疎雨　ばらばらあめ。【六】葉心　心とは中央をいふ。【七】看時　みてゐるときに。【八】老　ふるぼけること。【九】銜暮景　ゆふぐれの日光をふくむ、晴れたさま。【一〇】不勞　わづらはすまでもなし。【一一】鐘鼓報新晴　太鼓の音で晴れか雨かわかる、音がさゆるは晴れをつげることになる。【一二】花饒笑　饒は多きこと。【一三】肯信　反語なり、不信とおなじ意。舊解に「信」字の主語を上句の「花」とせり、余はしか考へず、略されたる「我」の字なりとおもふ。我不レ信とは言ひ換ふれば我自疑といふことなり。【一四】吏隱名　役人と隱遁者と二つの名。

【題義】節度使官邸の奧座敷で夕晴れにおひ草堂のことをおもうてよめる詩。廣德二年秋の作。

【詩意】やくしよで秋風がよるひるすずしくなり、あはき雲やまばらな雨が高い城をとほりすぎる。木の葉のしげりのまんなかにぽつちりあかく見えた木の實がみてゐるまにぽつたり落ち、階の表面に

ついてゐる青苔がふるぼけながらまたあたらしく生える。近くの樓臺をみるとまた夕ぐれの日光をふくんでゐる、これでは鐘鼓の音のしらせをわづらはすまでもなく天氣の晴れてることがわかる。さて浣花溪のことをかんがへるとあそこにはさぞ多く秋の花が咲いてゐるだらう、それを見ずに自分はここにゐるのだから、自分は半分は官吏、半分は隱遁者、の名をともにもつてゐるといふのだが果してどうだか疑はしい。(隱遁者としての名は兼有してをらぬのではあるまいかの意。)

宿府（一）　府に宿す

清秋幕府井（二）梧寒。　清秋幕府井梧寒し、
獨（三）宿江（四）城蠟（五）炬殘。　獨宿すれば江城蠟炬殘る。
永夜角（六）聲悲（七）自語。　永夜の角聲悲みて自ら語る、
中天月色好（八）誰看。　中天の月色好し誰か看む。
風塵荏（九）苒音書絕。　風塵荏苒音書絕え、
關塞蕭條行路難。　關塞蕭條行路難し。
已忍伶（一〇）俜十（一一）年事。　已に忍ぶ伶俜十年の事、
強（一二）移棲（一三）息一（一四）枝安。　強ひて移りて棲息す一枝の安きに。

【字解】【一】府　嚴武が幕府。【二】井梧　ゐどばたのあをぎり。【三】獨宿　家族は草堂にゐるゆゑ、幕府では一人にて宿す、【四】江城　成都の城をいふ。【五】蠟炬　大らふそくをいふ。【六】角　樂器の名「つの」にて作る。【七】悲自語　かなしみつつひとりごとする。【八】好誰看　好は感投詞のごとく「まあ」のごとし、角聲悲・月色好・として悲・好な上語に屬せしめてみる說あるも、今從はず。【九】荏苒　しだいに時のたつさま。【一〇】伶俜　おちぶれるさま。【一一】十年　天寶十四歲安祿山反せしより今年まで十年なり。【一二】強移　むりにひきうつる。【一三】棲息　すみ、やすむ、自己を鳥にたとふ。【一四】一枝安　「莊子」逍遙遊篇に、鷦鷯巢於深林、不過一枝とみゆ、一枝の安とは一枝の安泰なる場所をいふ、節度の參謀なる微官を以て一枝の安息所となすをいふ。

【題義】嚴武が幕府にとまりしことをよめる詩。廣德二年秋の作。

【詩意】淸らかな秋にあたつて幕府では井戸端のあをぎりが寒さうに立つてをる。ただひとり江城でとまつてをると夜もふけて大らふそくがもえのこつてをる。夜永の角笛をききながら自分は悲みながらひとりごとする。空のもなかには月がすみわたつてゐるがだれがそれをめでてながめようぞ。兵亂の塵に時のたつままに故鄕のたよりはとだえてこず、かたよりのせきしよのとりでさびしくしてあひかはらず人世の行路はなんぎである。自分はこれまではや十年間のおちぶれ生活をがまんしてきたのだ、こんどここの參謀になつたのも滿足からでたのではなく鷦鷯が一枝のやすけきやすみばを求めるごとくむりにひきうつつてきたにとどまるのである。

到村　村に到る

碧（一）澗雖多雨。秋沙先（二）少泥。　碧澗雨多しと雖も、秋沙先づ泥少し。

蛟龍引子過。荷芰逐花低。』　蛟龍子を引きて過ぎ、荷芰花を逐うて低る。』

老去參戎幕。歸來散馬蹄。　老い去つて戎幕に參す、歸り來つて馬蹄を散ず。

稻粱須就列。榛草卽相迷。　稻粱には須らく列に就くべし、榛草卽ち相迷はしむ。

蓄積思江漢。疎頑惑町畦。　蓄積江漢を思ふ、疎頑町畦に惑ふ。

暫酬知己分。還入故林棲。』　暫く知己の分に酬い、還故林に入りて棲まむ。』

【字解】【一】碧澗　みどりの岩間、浣花溪をさす。【二】先少泥　沙岸なれば他處よりも早く泥が少くなる。【三】引子　こどもをひきつれる。【四】芰　オニビシ。【五】逐花低　泥少ければ根ぬけるを以て荷芰は花が低下するあとから低下する、以上は村に到りしさま。【六】參戎幕　幕府の參謀となる。【七】歸來　草堂へもどつてくる。【八】散馬蹄　あちらこちらと馬であるくこと。【九】稻粱　粱はよきこめ、稻粱とは稻粱の謀、卽ち生活上の計をいふ。【一〇】就列　官吏の列位に就くこと、卽ち節度の參謀となることをいふ、「論語」季氏篇に周任の言として、陳力就列、不能者止とみえたり、官位につくものは各自の才力を陳べ自己の任ふる所を度りて其位に就き、能はざれば止むべしといふなり、(仇氏は列を農列とし、百姓の仲間入りすることとみたり。)【一一】榛　はり、いばら。【一二】相迷　どこが路やらわからなくされてゐるをいふ。【一三】蓄積　思ひをたくはふるをいふ。【一四】思江漢　江水漢水の地方へゆきたしとおもふ、荊州に下らんとするをいふ。【一五】疎頑　世事にうとくかたくななり。【一六】惑町畦　町畦は田畔の界なり、語は「莊子」にみゆ、「莊子」にては理想的に用ひたるもここは單に徑路といふほどの意、徑路に惑ふとは進退にまどふをいふ。【一七】知己分　分は分誼、分限などの分、知己(嚴武)が自分に友人としてつくしてくれた情義をいふ。【一八】故林　故鄉(長安又は洛陽)の園林をいふ。以上は村にもどりての感慨をのぶ。

【題義】浣花里の村にもどつたことをのべた詩。廣德二年秋の作。

【詩意】吾が浣花溪の碧の岩間は雨が多くふつても沙がでて他處よりも早く泥が少くなる、それでそこには蛟龍が子どもを引きつれてとほつたり、荷だの芰だのが花のあとからおひかけてひくくあたまをたれる。』自分は老いぼれて幕府に參與はしたがまたかくもどつて來て馬で散步する。稻粱の謀のためには官吏の列にはつかねばならぬのだが、家をよそにでてゐては歸つてみると庭園には榛や草がはびこつてどこが路やらわからなくなつてをる。江漢の地方へでかけたいとはかねがね思うてゐるのだが疎頑の性質、どうすればよいのか進退のみちに惑うてをる。まあまあしばらくせつかくの知己たる人(嚴武)の情義にむくいて、それからまたもとのふる巢(故鄉)にはいつて棲むことにしよう。』

村雨

村雨

雨聲傳兩夜。寒事颯高秋。　雨聲傳はること兩夜、寒事高秋に颯たり。

攬帶看朱紱。開箱覩黑裘。　帶を攬りて朱紱を看、箱を開きて黑裘を覩る。

世情只益睡。盜賊敢忘憂。　世情に只益睡る、盜賊に敢て憂を忘れむや。

松菊新霑洗。茅齋慰遠遊。　松菊新に霑洗す、茅齋遠遊を慰む。

【字解】【一】村雨　浣花村の雨。【二】寒事飄高秋　此句はいかに杜甫の句とはいへ不完全なる句なり、寒事の二字は屬する所なき語格なり、不足を補ひて見ざるべからず、作者の意は蓋し「飄高秋」なるが故に「寒事起る」といふほどのことならん。寒事とは冬の禦寒の事にて衣服のことをいふ。飄とは風の吹くさま、高秋は天高く澄む秋をいふ。【三】攬帶　攬は手にとること。【四】朱紱　あかき革前垂れ、古の大夫の服なり、作者は工部員外郎として緋衣を賜はりたり、由つてしばしば朱紱といふことをいへり。【五】覩　みる。【六】黑裘　戰國の時、蘇秦業未だ成らずして敝れたる黑き貂の裘を着けてゐた話あり。【七】世情　世間の事情に關してはの意。【八】只益睡　如何ともしがたきによりていよいよ睡つてばかり居るといふなり。【九】忘憂　憂とは國事をうれふるをいふ。【一〇】松菊　庭園の植物なり、松は歲寒の色を改めず、菊は霜に傲るの色あり、故に古人之を愛す、陶淵明が歸去來辭に、三徑就荒、松菊猶存とみゆ、作者の意亦之に同じ。【一一】霑洗　うるほされ、あらはる、雨についていふ。【一二】茅齋　かやぶきの書齋。【一三】慰　此字の主語は上句の松菊。【一四】遠遊　蜀のごとき遠方に遊びつつある旅情をいふ。

【題義】浣花村の雨にあひて感をのぶ。廣德二年秋草堂にての作。

【詩意】雨のおとがふたばんつづいて傳はつた。これですつかり秋風が吹きおこつて冬仕度をせねばならなくなつた。自分は一方には帶を手にとつて朱紱を看ると官吏だなとかんがへ、他方には箱を開けて黑い裘をみると、役をやめて浪人すればこれだなとかんがへる。世間の事情をかんがへればかんがへるほどそれはどうにもならぬものゆゑただ自分をしてやたらに睡らせるだけであるが、世に盜賊のたえぬことをおもへば自分は決して國家を憂ふることを忘れはせぬのである。こんなことをかんがへるときに、わが書齋のそばで自分の遠遊の旅情を慰めてくれるものは新に雨にぬらされて色をました松と菊である。

獨坐（一）

悲秋迴白首。倚杖背孤城（二）。
江斂（三）洲渚出。天虛風物清。
滄溟（四）恨衰謝。朱紱負平生。
仰羨黃昏鳥。投林羽翮（五）輕。

獨坐

秋を悲みて白首を迴らし、杖に倚りて孤城に背く。
江斂りて洲渚出で、天虛しくして風物清し。
滄溟衰謝を恨む、朱紱平生に負く。
仰いで羨む黃昏の鳥、林に投じて羽翮輕きを。

【字解】【一】獨坐　一人ですわること、詩をみるに獨立せることをのべ獨坐せしことには非ず、字に誤あらん。【二】孤城　成都の城をさす。【三】江斂　錦江の水收斂して減じたるをいふ。【四】滄溟　江海といふの類、吳地より東海に浮ばんとするの意をいふならん、仇注にただ江村のこととなせるは從ひがたし。【五】翮　たちばね、翼の內部にあるつよきはね。

【題義】獨り立ちてながめしときの感をのぶ。廣德二年秋、草堂にての作。

【詩意】秋を悲しみながら白があたまをめぐらし、杖によりながら孤城を背かにしてながめやる。と江水は減つて洲や渚があらはれいで、空はからりとしてよろづのものが淸らかである。かねてから萬里の滄溟にうかびたくはおもうてゐるが恨めしくも今の老衰ではいかんともしがたく、平生の志にそむきながら仕官して朱紱を身につけてをる。仰ぎみれば自分の身にくらべて黃昏どきの鳥が羽も輕げに林の木に投じゆくさまが羨まれるのである。

倦夜(一)

倦夜

竹涼侵臥內。野月滿庭隅。　竹涼臥内を侵し、野月庭隅に滿つ。
重露成(二)涓滴。稀星乍(三)有無。　重露涓滴を成す、稀星乍ち有無。
(四)暗飛螢自照。(五)水宿鳥相呼。(六)　暗に飛びて螢自ら照らし、水に宿して鳥相呼ぶ。
萬事干戈裏。空悲清夜徂。(七)　萬事干戈の裏、空しく悲む清夜の徂くを。

【字解】【一】倦夜　だるいばん。【二】涓滴　しづく。【三】有無　明るくみえたり暗くなつたり。【四】暗飛　やみのなかにとぶ。【五】自照　自己みづからをてらす。【六】水宿　鳥は木にとまるを棲といひ、水にとまるを宿といふ。【七】徂　ゆく、すぎ去ること。

【題義】だるき夜のねむられぬをりの景情をのべた詩。廣德二年秋草堂にての作。

【詩意】竹林の涼しさが臥戸の内部まで侵入してくる。野の面の月はくまなく庭の隅までいつぱいにさしてゐる。露の凝りが重くなるとしづくとなつておちるし、まばらな星の光りはみえたり消えたりする。螢は暗のなかに飛んで自己みづからを照らし、鳥は水のほとりに宿つてたがひに友呼びかはしてゐる。萬事は兵亂のうちにあるので、自分はかかるありさまをながめつつこの淸らかな夜がすぎゆくことを悲しくおもふのである。

陪(一)鄭公秋晚北池(二)臨眺(三)

鄭公が秋晚北池に臨眺するに陪す

北池雲水濶。華館(四)闢(五)秋風。　北池雲水濶し、華館秋風に闢く。
(六)獨鶴元依渚。衰荷(七)且映(八)空。　獨鶴元渚に依る、衰荷且空に映ず。
(九)采菱(一〇)寒刺上。踏藕(一一)野泥中。　菱を采る寒刺の上、藕を踏む野泥の中。
(一二)素機分(一三)曹往。金盤(一四)小徑(一五)通。　素機曹を分ちて往く、金盤小徑通す。
(一六)萋萋露草(一七)碧。片片(一八)晚旗紅。　萋萋露草碧に、片片晚旗紅なり。
盃酒(一九)霑(二〇)津吏。衣裳與釣翁(二一)。　盃酒津吏に霑し、衣裳釣翁に與ふ。
(二二)異方初(二三)艷菊。故里(二四)亦高桐(二五)。　異方初めて艷菊、故里亦高桐。
(二六)搖落(二七)關山思。淹(二八)留戰伐功(二九)。　搖落關山の思ひ、淹留するは戰伐の功。
(三〇)嚴城殊未掩(三一)。淸宴已知終。　嚴城殊に未だ掩はず、淸宴已に終るを知る。
(三二)何補參軍(三三)乏。歡娛到薄躬(三四)。　何をか補はむ參軍の乏、歡娛薄躬に到る。

【字解】【一】鄭公　嚴武をいふ。【二】北池　官邸の北にあたる池。前の「立秋雨院中有作」の中に「絣衣開北戶」の句あり、北戶を開くは北にかかる池あるが故なり。【三】臨眺　その水面にさしかかりてながめる。【四】華館　うつくしきやかた、嚴武の官

邸をいふ。【五】闢　戸をひらくをいふ。以上は秋池のさまをのぶ。【六】獨鶴　ひとつのつる、暗に自ら比するなるべし。【七】衰荷　おとろへたはすの葉。【八】映空　ひろくあるさま。【九】采菱　ひしをとる。【一〇】寒刺　刺はひしの實のとげ、寒とは秋のくれなればいふ。【一一】藕「はすね」【一二】素楫　しろきかぢ、素とはしらきのまま何も飾らぬをいふ。【一三】分曹往　曹とは役所の課のこと、曹を分つとはくみをわけること。【一四】金盤　金をかざつた大皿、菱や藕を盛る器なり、【一五】小徑通　池の中に小舟のとほるみちがついてゐる。【一六】萋萋　草のしげれるさま。【一七】露草　つゆをおびた草、夕方のくさをいふ。【一八】片片　これは曹を分ちてゆく舟の各〻が旗を用ふるを以て一片一片といふなり。【一九】霑　恩惠を及ぼすこと。【二〇】津吏　わたしばの役人、これは舟のかかりの役をさす。【二一】釣翁　漁夫をいふ。ここは臨眺のことをのぶ。【二二】異方　他郷をいふ。【二三】初艷菊　初とあれば作者是歳はじめて草堂にて菊をみたるか。【二四】故里　長安をいふ。【二五】亦高桐　池邊にも高桐ありしゆゑ、それより故鄉の桐をおもひうかべて「亦」といへり。【二六】搖落　木の葉の秋風にゆりおとされること。【二七】關山　成都と故鄉との中間の關所や山山。【二八】淹留　久しく逗留する。【二九】戰伐功　嚴武の武功をいふ。【三〇】嚴城　守りの嚴重な城、城は朝夕の城門の戸じまりが嚴なり。【三一】掩　戸を手でおほひとざすこと。【三二】何補　事に補益する所なきをいふ。【三三】參軍乏　參軍は節度の參謀の官職をいふ、乏は缺乏なり、「左傳」に「攝官承乏」の語あり、官の地位缺乏せるによりて已その地位を承くるをいふ。ここは自己が參謀の缺乏を滿たしてゐるをいふ。【三四】薄躬　薄德のからだ、謙遜の辭なり。以上は陪宴の情景をのぶ。

【題義】鄭公嚴武が秋の晩に官邸の北池でながめることありし際に陪席してよんだ詩。廣德二年秋嚴武幕中の作。

【詩意】官邸の北池は雲水がひろびろとよこたはつてをる、それをながめるため秋風のをりにうつくしき館の戸がひらかれた。一匹の鶴がもとより渚に依りそうてゐる、衰へかかつた荷の葉は遠く空の色に映うてゐる。』このとき秋の刺のあるにかかはらず菱の實をとり、泥のなかで藕を踏んでほりとる。それには役所の人人が白木の檝で舟をこぎながらくみをわけて取りにゆく、かへりには小徑をわけて金盤に獲物を盛つてくるのである。かれこれするうちに夕の露をふくんだ草は萋萋と碧にみえ、それぞれの舟には日ぐれの旗が片片と紅になびいてゐる。酒杯は津ばの小役人にまでほどこされ、てつだひの年とつた漁夫まで褒美の衣裳を分ち與へられる。』自分は他鄉でことしはじめてつややかな菊の花をみた、ここに高い桐があるが故郷にもかやうな桐があるのである。いま秋風の吹くのにあうてはその木の葉のゆられ落つるのをみては關山の思ひをうごかすのであるが、遠方にかくながながと逗留するのは鄭公の戰伐の功によるのである。まだ城の戸じまりはされはせぬが、宴席はもはや終りになるのである。自分は參謀の缺位をみたしてゐるといふものの政治に何等の補ひをしてはゐないが、それにかかはらず薄德のこのからだにまで池宴のたのしみをおよぼしてもらふことはありがたいことである。』

遣(一)悶奉呈嚴公(二)二十韻　　悶を遣る嚴公に呈し奉る二十韻

(三)白水(四)魚竿客。清秋(五)鶴髮翁。　白水魚竿の客、清秋鶴髮の翁。
(六)胡爲來(七)幕下。祇合在(八)舟中。』　胡爲れぞ幕下に來れる、祇合に舟中に在るべきのみ。』

(九)黃卷眞(一〇)如律。(一一)靑袍也自公。　黃卷眞に律の如し、靑袍も也公よりす。

老妻憂(一二)坐痺。幼女問(一三)頭風。　老妻坐痺を憂へ、幼女頭風を問ふ。

(一四)平地專(一五)攲倒。(一六)分曹(一七)失異同。　平地專ら攲倒す、分曹異同に失す。

(一八)禮甘衰力就。(一九)義忝上官通。　禮は甘んず衰力就くを、義は忝うす上官の通ずるを。

(二〇)疇昔論詩早。(二一)光輝仗(二二)鉞雄。　疇昔詩を論ずること早かりき、光輝仗鉞雄なり。

(二三)寬容存(二四)性拙。(二五)剪拂念(二六)途窮。　寬容性拙を存す、剪拂途窮を念ふ。

(二七)露裛思(二八)藤架。(二九)煙霏想(三〇)桂叢。　露裛藤架を思ひ、煙霏桂叢を想ふ。

(三一)信然(三二)龜觸網。直作(三三)鳥窺籠。』　信然龜網に觸る、直に鳥の籠を窺ふを作す。』

(三四)西嶺(三五)紆郇北。(三六)南江繞舍東。　西嶺郇北に紆る、南江舍東を繞る。

竹皮寒舊翠。(三七)椒實雨新紅。　竹皮舊翠寒く、椒實雨に新に紅なり。

(三八)浪簸船應(三九)坼。杯乾(四〇)甕(四一)卽空。　浪に簸られて船應に坼くなるべし、杯乾きて甕卽ち空し。

藩籬生(四二)野徑。(四三)斤斧任(四四)樵童。　藩籬野徑生ず、斤斧樵童に任す。

(四五)東縛酬(四六)知己。(四七)蹉跎效(四八)小忠。　東縛知己に酬い、蹉跎小忠を效す。

(四九)周防期(五〇)稍稍。(五一)太簡遂(五二)忽忽。　周防稍稍を期す、太簡遂に忽忽たり。

(五三)曉入朱(五四)扉啓。(五五)昏歸(五六)畫角終。　曉入朱扉啓き、昏歸畫角終る。

不成(五七)尋別業。未敢(五八)息(五九)微躬。』　別業を尋ぬるを成さずんば、未だ敢て微躬を息せしめず。』

(六〇)烏鵲(六一)愁銀漢。(六二)駑駘(六三)怕錦(六四)幪。　烏鵲銀漢に愁へ、駑駘錦幪を怕る。

會希(六五)全物色。時放(六六)倚梧桐。』　會ず希ふ物色を全うして、時に放ちて梧桐に倚らしめむ「ことを。」

【字解】【一】遣悶　心のもだえをおひやること。【二】嚴公　嚴武。【三】白水　すめる水の色を白といへり。【四】魚竿　魚を漁に作れる本あり、つりざををいふ。魚竿の客とは自己をさす。【五】鶴髮翁　しらがの老人、自己をさす。【六】胡爲　胡は何なり、何爲とは「どうして」の意。【七】幕下　節度使嚴武が幕府をいふ。【八】舟中　漁舟のうち。以上は悶の生ぜし由來をのぶ。【九】黃卷　今日の官吏の勤怠簿のたぐひなり、役人の闕失をかきしるす卷きものなり。【一〇】如律　律令のごとく堅くしたがはねばならぬをいふ。【一一】靑袍也自公　靑袍は靑色のうはぎ、これは通常の禮服なり。此句は形はかくあれども意は自公也靑袍と殆ど相同じ、自公は「詩經」の自公退食の略なり、公の場所より退出して食事をとること、轉じて單に退出の義となる、「靑袍をつけてゐるもそれは退出のときである」といふは卽ち「退出してゐても靑袍をつけてゐる」といふとおなじ。【一二】坐痺　すわりてあしにしびれのきれること。【一三】頭風　頭痛のすること。【一四】平地　平らな地面。【一五】攲倒　かたむきたふれる。攲の字一に側に作る。側もかたむくなり、身體を正しくしてをれぬなり、上の坐痺、頭風の結果なり。【一六】分曹　幕府の諸課をいふ。【一七】失異同　失於有異同の義、我と諸曹とのあひだに意見のちがひが有るといふ缺點がある。【一八】禮甘衰力就　此句就禮の二字を分けて用ひたり、禮に就くとは「立秋雨院中有作」の已費淸晨謁などいふがそれなり。【一九】義忝上官通　此句通義の二字を分けて用ひたり、義を通ずるとは朋友としての情義を相通ずるをいふ、上官は嚴武をさす。【二〇】疇昔　疇は曩なり、疇昔は前

日といはんがごとし。【二一】光輝　こちらがひかりをうくるをいふ。【二二】仗鉞雄　鉞に仗るとは節度使の職をいふ、雄はをゝしきこと。【二三】寬容　嚴武のひろく物をいるるをいふ。【二四】存性拙　存とはそのままにしておくこと、性拙は作者の器用ならぬをいふ。【二五】剪拂　馬に關する語なり、剪は毛をはさみきること、拂は毛のほこりをはらふこと、二字「戰國策」に見えたるが、更に劉孝標の廣絶交論に剪拂使ニ其(馬をさす)長鳴一とあり。【二六】途窮　逆境にあるをいふ、阮籍が故事。【二七】露裛　裛はつつむなり。【二八】藤架　ふぢだな。【二九】煙霏　けむりのこまかにとぶこと。【三〇】桂叢　桂の木のむらがり、淮南小山の「招隱士」に、桂樹叢生兮山之幽とみゆ、藤、桂は草堂の植物についていへり。【三一】信然　まことに。【三二】龜觸網　「かめ」は靈力あるものなれども網にいれらるればただそのなかにてあちこちとふれるばかりそとへはでられぬ。【三三】鳥窺籠　籠のなかから外部のひろいところをのぞいて出たいとおもふばかり、以上は幕府に居る不自由をのぶ。【三四】紆　うねりて橫はるをいふ。【三五】西嶺　西山。【三六】南江　汶江とも流江ともいふ、成都の南七里にあり。【三七】椒實　山せうのみ。【三八】浪簸　浪にあふられる。【三九】拆　さけひらくこと。【四〇】乾　のみほすこと。【四一】甕即空　甕は多く酒を貯ふるもの、杯のかわくとともにそれが空になるとは酒の貯へのなきをいふ。【四二】生野徑　野徑生に同じ、野中のこみちがそこにできる、他人が侵入して往來するを以てなり、下句を見て知るべし。【四三】斤斧　斧に「をの」樹木をきるに用ふ。【四四】樵童　木を刈りとるこども。【四五】束縛　禮法に身をしばりつける。【四六】知己　嚴武をさす。【四七】蹉跎　つまづく貌。【四八】效小忠　小さな忠節をつくすこと。【四九】周防　ておちなく、身を防ぐ、他人に讒言などされぬ用心をすること。【五〇】稍稍　しだいしだい。【五一】太簡　あんまり簡略にすぎる。【五二】怱怱　草卒なるをいふ。【五三】曉入　あさ早く出勤するをいふ。【五四】朱扉　節度使の役所のあかきとびら。【五五】昏歸　夕ぐれに退出してかへる。【五六】畫角　えがいて飾つたつのぶえ。【五七】別業　別莊、草堂をさす。【五八】息　休息。【五九】微躬　ささいなからだ、以上は草堂のさまをのべて幕府の居にくきことをいふ。【六〇】烏鵲　かささぎ。【六一】愁銀漢　銀漢はあまのがはら、かささぎが河を塡め橋をなして牽牛・織女・の星をわたすとの話あり、愁とは河を塡め得ざるを愁ふるなり、意は事に補ひ無きを歎す。【六二】駑駘　どば。【六三】怕　おそる。【六四】錦幪　幪は鞍をおほふきれなり。【六五】全物色　物色は馬の毛色などをいふ、全とは害せざるをいふ。【六六】倚梧桐　きりの木によりかかる。これは鳥(鳳凰)の緣語を用ひ、自己を鳳凰に比す。

【題義】胸中のもだえを遣るためにつくりて嚴武にたてまつれる詩。廣德二年秋幕中にての作。

【詩意】すんだ水に釣り竿をたれてゐるをとこ、淸らかな秋に鶴の毛の樣な白髮をいただいてをるおやぢ、この自分はなんで節度使の幕府へなどやつてきたのか、身分相應にやつぱり舟のなかにゐるべきであつたのである。』役人としての功過を記さるる黃色の卷物は自分を束縛すること律令のごとく、役所から退出してからも靑袍を着けてゐるといふ風である。坐つてをると足にしびれがきれるので老妻はそれを心配する、時時頭痛がするので幼い女はけふはどうかとたづねてくれる。平地でも橫倒れにねてばかり居る始末であり、他課の人たちとは意見の衝突がありがちといふありさまだ。上官たる嚴公が今以て友情を通じてくれられるから、老衰の體力が禮法に就くのは覺悟はしてゐるのだ。嚴公とはずつと以前から詩を論じあうた仲で、今節度使として兵馬の雄權を握つてをられるその光榮を自分も荷うてをるのである。嚴公は寬大であつて自分の樣な不器用な性質のものをそつとそのままにしておかれる、自分が逆境に居ることを氣の毒におもはれて馬の毛並に手をいれる樣に自分を世話してくださるのである。(しかし自分は)草堂の藤架が露につつまれてゐる頃だらうと思うたり、桂の叢立には煙霧がこまかくとびつつあるのではないかとかんがへたりする。役所勤めをしてをるとは

んとうに鴿が網にひつかかつてをるごとく、鳥が籠のなかからそとをのぞいてゐる樣なものである。』（草堂のさまをかんがへると）村の北にあたつては西嶺がうねつてをり、舍の東には南江がめぐつてをる。竹の皮はむかしながらの翠色を寒くたたへ、山椒の實はちかごろの雨に紅に色づいたであらう。つないである船はあまり浪にゐふられるのでこはれたかも知れぬ。酒は例のとほり杯がほされるとともに甕まですぐ空になるだらう。籬は結うてはあるがそこにはひとりでにこみちができ、樵の童らが勝手に斧をもつてではいりしてゐるだらう。自分は知己（嚴武）に酬いるためにはわれとわが身を束縛し、蹉跎とつまづいてをる境界ながら心ばかりのまことをつくしてゐるのである。しだいしだいにひとからかれこれいはれぬ樣にとはつとめてをるのだが、もちまへの簡略すぎる性からついそそつかしいこともでてきたのである。あかつきには役所の朱の扉が啓かれるころから入つてゆき、昏には角笛の吹き終りのころにやつともどつてくる。こんなことでは草堂を尋ねでもしなければどうしてもからだをやすませることはできぬのである。』自分のこころは烏鵲の銀漢をうづめたいとおもひながらうづめることができずに心配してをる樣なものであり、また駑馬が力はないのにただ錦の鞍帊だけ着飾らせられることをおそれてゐる樣なものである。どうぞ馬ならばその毛並みを損はぬ樣にと！あつかはれ、鳥ならば時としては之を解放して梧桐の樹にでも倚りかかる樣にさせていただきたいものである。』

送舍弟穎赴齊州三首（一）（二）

舍弟穎が齊州に赴くを送る　三首

岷嶺（三）南蠻（四）北。徐關（五）東海（六）西。
岷嶺南蠻の北、徐關東海の西。

此行何日到。送汝萬行（七）啼。
此の行何の日か到らむ、汝を送りて萬行啼く。

絕域（八）惟高枕。清風獨杖（九）藜。
絕域惟高枕、清風獨り藜を杖く。

時危（一〇）暫相見（一一）。衰白（一二）意都迷（一三）。
時危くして暫く相見る、衰白意都て迷ふ。

【字解】【一】舍弟穎　作者の弟、名は穎。【二】齊州　今の山東省濟南府。【三】岷嶺　岷山なり、茂州汶山縣にあり、蜀の名山なあぐ。【四】南蠻　南部蠻をいふ、今の雲南地方、此句自己の所在地をいふ。【五】徐關　齊の古蹟、「左傳」鞍の戰に齊侯自ㇾ徐關ㇾ入との事あり。【六】東海　山東省の東の海をいふ、此句は穎の赴く所の地をいふ。【七】萬行　萬行の淚。【八】絕域　都よりかけはなれた地。【九】杖藜　藜は「あかざ」その莖を以て杖につくる。【一〇】時危　時世危險なり。【一一】暫相見　相見ること暫時のあひだのみ。【一二】衰白　老衰白髮。【一三】迷　昏亂するをいふ。

【題義】弟　穎が齊州へ赴くのを送つた詩、第一首は別れを惜む意をのべたり。廣德二年秋成都の作。

【詩意】自分の居る蜀は南蠻の北に岷山が橫はつてをる、おまへのゆく齊州は東海の西に徐關がある。このたびの旅行ではおまへはいつむかふへ到着するのか、自分はおまへを送るために萬行の淚をそそいで啼くのである。自分はこんな遠いはてでただ枕を高くして臥し、すず風にただひとりあかざ

の杖をついてくらすのである。危險な時世であるからおまへと面會することもただしばしの間にとどまるのにいままた別れねばならぬとあつては、老いのこの身にとつては意のなかがすべて昏亂してしまふばかりである。

〔二〕

風塵暗不開。汝去幾時來。
兄弟分離苦。形容老病催。
(一)江通(二)一柱觀。日落(三)望鄉臺。
(四)客意長(五)東北。齊州安在哉。

〔二〕

風塵暗うして開けず、汝去つて幾時か來らむ。
兄弟分離苦しむ、形容老病催す。
江は通ず一柱觀、日は落つ望鄉臺。
客意長に東北、齊州安に在り哉。

【字解】【一】江　揚子江をいふ。【二】一柱觀　湖北省荊州府松滋縣の東、邱家湖中にあり、六朝宋の臨川王劉義慶の建つる所の寺、弟の經過する地の名勝をあぐ、且つまた荊州は自己の赴きたくおもひ居る所なるによりて之をあぐ、一柱觀のことは巳にまへにもみえたり。【三】望鄉臺　成都縣の北九里にあり、自己の所在地をいへり。【四】客意　自己の意。【五】東北　齊州の在る方位。

【題義】第二首は主として別後の思ひをのぶ。

【詩意】兵馬の塵が暗く鎖してひらけない、おまへはここをたち去つていつになつたらもどつてくるのか、兄弟のわかれることのくるしさよ、吾が形容のやつれは病氣と年をとることとがさうさせるのである。おまへの舟をうかべてゆく長江は一柱觀の方までとほつてをる、ここの望鄉臺には日が落ちかかる。自分のこころはいついつまでも東北の方へと馳せる、いつたい齊州といふところはどこにあるのか、どこまでも自分のこころはおまへをおひかける。

〔三〕

(一)諸姑今海畔。(二)兩弟亦山東。
去傍干戈覓。來(三)看道路通。
(四)短衣(五)防戰地。西馬逐秋風。
莫作(六)俱流落。(七)長瞻(八)碣石鴻。

〔三〕

諸姑今海畔、兩弟亦山東。
去つて干戈に傍ひて覓む、來るには道路の通ずるを看む。
短衣戰地を防げ、西馬秋風を逐ふ。
俱に流落するを作すこと莫れ、長く瞻る碣石の鴻。

【字解】【一】諸姑　をばさまたち、作者の撰せる范陽盧氏墓誌によるに、杜審言の女にして先妻薛氏の產めるもの魏上瑜・裴榮期・盧正均に適きしものは早く卒したり、後妻盧氏の產めるものは一人は京兆の王佑に適き、一人は會稽の賀撝に適きたり、會稽は海に瀕す、他にも海にちかく居りしものありしならん。【二】兩弟　豐・觀これなり。【三】看　さやうになるといふのではなく、なりたいものだといふなり。【四】短衣　すそみじかの衣。【五】防戰地　防とは兵盜におそはれぬ防備をなすこと。【六】俱流落　俱とは兩弟等とともにの意、流落はおちぶれること。【七】長瞻　いつもながめる。【八】碣石鴻　碣石は今の渤海灣秦皇島の附近にありし海中の石門なり、山東近北の名所をあげ、以て北方の義に用ふ、鴻は「おほとり」、雁の類なれば音信の表象として用ひたり。

【題義】第三首は去りてもまた來らんことをねがふ意をのぶ。

【詩意】をばさんたちは今海の畔に居られ、ふたりの弟も山東に居る。おまへはゆくときはその人たちを干戈の物騷なあひだにさがしもとめるのだが、おまへがもどるときにはどうか無事に道路が通じるのを看たいものである。おまへは秋風をおうて一匹の馬を飛ばせ、戰亂の地を過ぐるときにはすそ短の衣を着て、賊難にかからぬ用意をしてとほるがよろしい。いつたままあちらでともどもおちぶれてゐる樣なことをしてはならぬぞよ、自分はいつもおまへの居る碣石の方から鴻雁の音信があるかとながめくらすのである。

嚴鄭公堦下新松　得二霑字一。　嚴鄭公が堦下の新松　霑の字を得たり。

弱質豈自負。移根方爾瞻。　弱質豈に自負せむや、移根方に爾を瞻る。
細聲侵玉帳。疏翠近珠簾。　細聲玉帳を侵し、疏翠珠簾に近し。
未見紫煙集。虛蒙淸露霑。　未だ見ず紫煙の集まるを、虛しく蒙る淸露の霑すを。
何當一百丈。攲蓋擁高簷。　何か當に一百丈、攲蓋高簷を擁すべき。

【字解】【一】得霑字　これは主客同座にて詩を賦するときに韻字を分ち作者は偶ま「霑」の字を得たるをいふ、本篇の第六句に霑霑として之を使用したれり、某の字を得といふこと他皆此に倣へ。一一には說明せず。【二】弱質　かよわき性質、新松なればかくいふ。【三】自負　自分で自分の力をたのむこと。【四】移根　他處からここへ根をうつしてうゑる。【五】爾　汝、松をさす、【六】細聲　風の吹く聲、新松ゆゑ細といふ。【七】玉帳　將軍の幕をいふ。【八】疏翠　松のみどり、新松ゆゑ疏といふ。【九】珠簾　珠をかざりしすだれ將軍の戶前のものをいふ。【一〇】紫煙集　松が生長すればそこに紫の靄も集りきたる。【一一】虛蒙　虛とは「徒らに」といふ類、なにも效能もなきにといふこころなり。【一二】何當　何とは何時の略。【一三】攲蓋　かたむきたるかさ、松が枝の横にひろがりたるさまを車蓋にたとへていふ。【一四】擁　だきかかへる。【一五】高簷　たかきのき、將軍府のそれをいふ。

【題義】鄭國公嚴武がすまひのきざはしのもとのわか松のことをよめる詩。それとなく松を以て自らたとへたり。廣德二年秋の作。

【詩意】この松はかよわい性質であるから決して自分で自分の力を恃みにすることは無いが、こんなところへ根を移し植ゑられたのではじめてこんな樹もあるのかとうちみらるる次第である。この松はやつとかぼそい風音が玉帳のあたりまではいりこみ、まばらな翠色が珠簾のほとりに近づくくらゐのものである。まだ紫の煙の集まつてくるのなどは見られはせぬのに、徒らに淸らかな露のうるほしを蒙つてをるのである。いつになつたら百丈ばかりにも生長して横に寢た車蓋の樣な枝ぶりが高いのきばをかかへるほどになることができるだらう。

嚴鄭公宅同詠竹　得二香字一。
嚴鄭公が宅にて同じく竹を詠ず　香の字を得たり。

綠竹半含籜。新梢纔出墻。　綠竹半ば籜を含む、新梢纔に墻を出づ。

色侵(四)書帙晩。陰過酒樽涼。　色は侵す書帙の晩、陰過ぎて酒樽涼し。
雨洗娟(五)娟淨。風吹細(六)細香。　雨に洗はれて娟娟として淨く、風に吹かれて細細として「香し。」
但令無剪(七)伐。會見拂雲長。　但剪伐無からしめば、會ず見む雲を拂うて長からむことを。

【字解】【一】綠竹　みどりの竹林をいふ。【二】半　竹林の半分は。【三】含籜　籜は竹の皮なり、含むとはまだそれをもつてをること。【四】書帙晩　讀書の夕ぐれをいふ。【五】娟娟　うつくしき貌。【六】細細　こまかに、かそけく。【七】剪伐　斬りとる。

【題義】鄭國公嚴武が宅にてともども竹をよめる詩。廣德二年秋の作

【詩意】まだ半分は竹の皮つきのままの綠の竹林、その新しい梢がやつと墻から頭をだしたところだ。讀書のゆふぐれにその色はこちらへはいりこんでくる、またそのかげがとほると酒席の樽のあたりも涼しく感ぜられる。この竹は雨がふればそれに洗はれて娟娟として淨らかであり、風が吹きわたるときはかそけくわかわかしい香りを送つてくる。これはただきらずにおきさへすればきつと雲を拂うてたかくのびるにちがひない。

晩秋陪嚴鄭公摩(一)訶池泛舟　得溪字。

晩秋嚴鄭公が摩訶池に舟を泛ぶるに陪す　溪の字を得たり。

湍(二)駛(三)風醒酒。船回霧起隄。　湍駛くして風酒を醒す、船回るとき霧隄に起る。
高城秋自(四)落。雜樹晩相(五)迷。　高城秋自ら落つ、雜樹晩に相迷ふ。
坐(六)觸鴛鴦起。巢(七)傾翡(八)翠低(九)。　坐觸れて鴛鴦起き、巢傾きて翡翠低る。
莫(一〇)須驚(一一)白鷺。爲(一二)伴宿青(一三)溪。　須ふる莫し白鷺を驚かすことを、伴を爲して青溪に宿せむ。

【字解】【一】摩訶池　隋の蜀王秀が城を築くため土をとりたるあとにして張儀の子城（杜甫の謂はゆる少城）の内にあり、ある胡僧が池には摩訶（大の義）宮毗羅（龍の義）ありといへるによりて摩訶池と名けたりといふ。【二】湍　急流、はやせ。【三】駛　迅疾なる貌。【四】秋自落　落字の主語は第一句の風なり、秋にあたりて風おのづから吹き下るをいふ。【五】晩相迷　迷字の主語は第二句の霧なり、晩にあたりて霧がたがひに立ち迷はす。【六】坐觸　坐は鴛鴦の坐をいふ、觸はこちらの船がふるるなり。【七】巢傾　巢は翡翠の巢。【八】翡翠　かはせみ。【九】低　下方に垂れさがる。【一〇】莫須　必要なし。【一一】驚白鷺　これは伴宿の結果をいふ。【一二】爲伴　つれだつこと。【一三】青溪　青字一に清に作る。浣花溪をさしていへり。

【題義】秋の末に嚴武が摩訶池に舟をうかべて遊んだときおともをしてよんだ詩。廣德二年秋の作。

【詩意】はやせがはやくながれて風が酒の醉ひをふきさます、船をもどすころは隄に霧がたちのぼる。もう秋で高い城におのづと秋らしい風が吹きくだる、さまざまの樹木には霧がたちこめて眺望をまよはしめる。我我の船のために自分のゐばしよをさはられて鴛鴦が起ちあがり（霧のためならん）、巢が傾いてすんでゐる翡翠まで樹から垂れさがつてゐる（風のためならん）、かかるところにとまつて白鷺

まで驚かす必要は無いから、つれだちてかへつて我が浣花溪でとまる方がよろしい。

奉觀嚴鄭公廳事(一)岷山(二)沱江(三)畫圖十韻　得忘字。

嚴鄭公が廳事の岷山沱江の畫圖を觀奉る十韻　忘の字を得たり。

沱水臨中座(四)、岷山到北堂(五)。
白波吹粉壁(六)、青嶂(七)插雕梁(八)。』
直訝(九)松杉冷、兼疑菱荇(一〇)香。
雪雲(一一)虛點綴(一二)、沙草(一三)得微茫(一四)。
嶺雁(一五)隨毫末(一六)、川蜺(一七)飲練光(一八)。
霏紅(一九)洲藥(二〇)亂、拂黛(二一)石蘿(二二)長。
谷暗非關雨(二三)、楓丹不爲霜(二四)。
秋城(二五)玄圃外(二六)、景物洞庭旁(二七)。』
絺事(二八)功(二九)殊絕(三〇)、幽襟(三一)興激昂(三二)。
從來謝太傅(三三)、丘壑(三四)道(三五)難忘。』

沱水、中座に臨む、岷山、北堂に到る。
白波、粉壁に吹く、青嶂、雕梁に插む。』
直ちに訝る松杉の冷かなるかと、兼て疑ふ菱荇の香しきかと。
雪雲虛しく點綴す、沙草、微茫を得たり。
嶺雁、毫末に隨ひ、川蜺、練光に飲む。
霏紅洲藥亂れ、拂黛石蘿長し。
谷暗くして雨に關するに非ず、楓丹きは霜の爲ならず。
秋城玄圃の外、景物洞庭の旁。』
絺事功殊絕、幽襟興激昂。
從來謝太傅、丘壑道忘れ難し。』

【字解】【一】廳事　客間をいふ。【二】岷山　茂州汶山縣にあり。【三】沱江　沱水なり、成都府新繁縣にあり。【四】中座　座席のなかほど。【五】北堂　北のざしき。【六】粉壁　しらかべ。【七】青嶂　嶂は屛風のごとく險しき山。【八】雕梁　雕刻なした「はり」。以上は廳事に於ける江山をのぶ。【九】直訝　以下十二句は江山畫圖をいひ江と山との景を對立してのべたり。【一〇】菱荇　ひし、あさざ。【一一】雪雲　雪意をおびたる雲。【一二】虛點綴　虛とは「いたづらに」、實際雪がふるわけにはあらざるゆゑにいふ。點綴はつづくりたること。【一三】沙草　沙邊に生えたくさ。【一四】得微茫　かすかにはるけき姿を得てゐること。【一五】嶺雁　みねの方にとびわたる「がり」。【一六】隨毫末　毫末はけすぢのさきほどの小なるものをいふ、隨毫末は毫末隨の意、その微小の形が相隨ふをいふ、（仇注には「畫筆のさきのまにまに」の義ときたるも、今取らず）。【一七】川蜺　川にたれたるにじ。【一八】飲練光　練光とは川の水の色をたとへていへり、飲とは水をのまんとするごとく垂れかかるをいふ、（仇氏は練光を畫絹のこととせり、今取らず）。【一九】霏紅　さぎりのふるごときくれなゐ。【二〇】洲藥　なかすに咲く花。【二一】拂黛　青墨をなすりつけた樣に青く。【二二】石蘿　いはに生えまつはれるひめかつら。【二三】非關雨　墨氣のためなるをいふ。【二四】不爲霜　朱の色のためなるをいふ、二句その畫圖なるをいふ。【二五】秋城　秋の成都の城をいふ。【二六】玄圃外　玄圃とは懸圃なり、崑崙山に在りとかんがへられたる屋上庭園をいふ、外とは眞の懸圃以外にまた他の一の懸圃をここに見るをいふ。是は山についていふ。【二七】洞庭旁　これは水についていふ、洞庭は湖南省にある湖の名、以上は江山を細目につきて敍す。【二八】絺事　ゑのこと。【二九】功　技術をいふ。【三〇】殊絕　特別に巧みなり。【三一】幽襟　しづかなるこころ。【三二】激昂　さかんにおこる。【三三】謝太傅　晉の謝安をいふ、太傅は官名、安は山水を愛せり。【三四】丘壑　すなはち山水のこと。【三五】道　その方面の事といふほどの意なり。以上は畫をみて嚴武をほめそやしたり。

【題義】鄭國公嚴武が客間にかけてある岷山沱江の畫圖を觀てよんだ詩。廣德二年秋の作。

【詩意】 沱水は座席の中ほどにさしかかつてゐる、岷山は北のざしきへやつてきてゐる。しら壁には白い波が吹きつけられ、靑いやまが雕刻したはり木にさしはさんである。』 そこには松や杉が冷かに立つてゐるかと訝られ、また菱や荇が香つてゐるのかと疑はれる。雪雲はつづくられてゐるがまさか雪もふらず、沙はらに生じた草はかすかにはるけき姿を得てをる。嶺にとぶ雁は微小な形相したがひ、川にかかれる蜺は練の光の樣な水面に飮まんとしてゐるかのごとくである。紅の色の小霧だつてゐるのは中洲の花藥がみだれ咲いてゐるのであり、靑壘をなすつたごとくみえるは石にはえたひめかづらの長くのびてゐるのである。谷が暗さうにみえるがそれは雨がふりだすためではなく、楓が丹くみえるがそれは霜がおいてさうなつたためではない(みな畫がかれてゐるせゐである)。この圖をみてゐると秋の成都の城も仙境である所の懸圃の外にまた一の懸圃であるかのごとく、又すべての景物は洞庭湖のそばにあるそれの樣であるかのごとくおもはれる。』 かほどにみられるこの繪といふものはその技術は特別非凡であり、幽邃なる吾が胸ではおのづと感興がさかんにおこる。謝太傅に比すべき吾が嚴公は今なほこれまでどほり山水の道は忘れがたく居られるとみえるのである。』

過故(一)斛斯校書莊(二)二首

【原注】 老儒(三)艱難(四)。病於庸蜀(五)。歎其歿後(六)。方授一官(七)。

故の斛斯校書が莊に過る　二首　【原注】 老儒艱難、庸蜀に病む。其の歿後、方に一官を授けられしを歎ず。

此(八)老已云歿。鄰人嗟(九)未休。　此の老已に云に歿す、鄰人嗟すること未だ休まず。
竟無宣室召(一〇)。徒有茂陵求(一一)。　竟に宣室の召無し、徒らに茂陵の求め有り。
妻子寄(一二)他食。園林非(一三)昔遊。　妻子他食に寄る、園林昔遊に非ず。
空餘繐(一四)帷在。淅淅(一五)野風秋。　空しく繐帷を餘して在り、淅淅として野風秋なり。

【字解】【一】 故斛斯校書　故は死して故人となりしをいふ、斛斯は斛斯六、名は融、卷十江畔獨步尋花七絕句の第一首の第三句に走覓南鄰愛酒伴とみえたる人なり、又同卷に聞斛斯六官未歸詩あり、校書は官名。【二】 莊　やしき、卽ち作者の南鄰にありしやしきならん。【三】 老儒　作者自ら稱す。【四】 艱難　世事のなんぎをいふ。【五】 庸蜀　「尙書」の牧誓篇に庸蜀羌髳の語あり、「左傳」文公十六年に、庸人帥群蠻以叛楚の文あり、梁の陸倕の石闕銘に庸岷負阻の語あり、「尙書」の庸は注に、在江漢之南との みありて所在明かならず、「左傳」の庸は杜預の注に今上庸縣とあれば湖北省鄖陽府竹山縣の東南にあたる地なり、庸岷に對する唐の呂延濟の注に、庸岷謂蜀といへり、因つて案ずるに庸とは大略今の三峽の入り口の地方をさし、それと竝べて庸蜀、庸岷などいへるものにて漢然蜀の地方をさしてしか稱へたるがごとし、作者の謂はゆる庸蜀も單に蜀のことをいふ。【六】 其　斛斯をさす。【七】 一官　卽ち校書の官をさすならん。【八】 此老　この老人、斛斯をさす。【九】 嗟　その死についてなげくこと。【一〇】 宣室召　漢の賈誼が故事、誼、文帝のために長沙に貶せられしがまた召しかへされ宣室に於て鬼神についての帝の問に答へたり、宣室は未央宮の前の正室なり。【一一】 茂陵求　漢の司馬相如が故事、相如晩年茂陵に住して病む、病むこと甚しきとき武帝、所忠なるものを

使者にやりて相如が著書を求めしむ、所忠至れば相如已に死せり、其の妻に問ひて封禪の事を言へる遺書を得てかへる、これは歿後官を授けられしことにあてていへり。【一二】寄他食　他處の食事にこちらの身を寄せる。【一三】非昔遊　昔遊びしときのさまにあらず。【一四】總帷　總は細き布糸を疎く織りたるものなり、それにて帷を造り死靈の室にかけ用ふ、謝朓が銅爵臺詩に總帷飄二井幹一とみゆ。【一五】淅淅　風のおとのさま。

【題義】今は無くなつた校書の官、斛斯融がやしきをおとづれてよんだ詩。自分（作者）は國事艱難のときに蜀で病んでをり、融がその歿後にはじめて一官を授けられたことをきのどくにおもふものである。第一首は廣德二年秋の作。

【詩意】この老人はもはや歿つたのであるが、近所の人人はいまだになげいてをる。きのどくなことには彼は賈誼の樣に宣室に召されることもなく、いたづらに司馬相如が死後に遺著を求められた樣なものである。妻子はよそへゐさうらふにいつてしまひ、園林のさまは昔いつしよに遊んだときの樣子とはちがつてゐる。ただ靈室に布の帷が垂れてゐるだけで、野らふく風がさびしく秋のおとを立ててゐる。

〔二〕

燕入非二傍舍一。鷗歸秪故池。
斷橋無二復板一。臥柳自生レ枝。

〔二〕

燕入るは傍舍に非ず、鷗歸るは秪故池なり。
斷橋復た板あること無し、臥柳自ら枝を生ず。

遂有二山陽作一。多慚鮑叔知。
素交零落盡。白首淚雙垂。

遂に山陽の作有り、多く慚づ鮑叔の知るに。
素交零落し盡す、白首淚雙垂す。

【字解】【一】傍舍　となりのいへ。【二】故池　もとのいけ。【三】斷橋　とだえたはし。【四】板　はしいた。【五】山陽作　嵆康が死後、向秀、山陽の舊居を經過して思舊賦を作る、山陽は河南懷慶府修武縣の北にあり、嵆康等竹林七賢の居りし處なり。【六】鮑叔知　齊の管仲、鮑叔牙と交りよし、曰く、我を生む者は父母、我を知る者は鮑子なりと、斛斯を以て鮑叔に比す。【七】素交　もとからの交りある人。

【題義】この第二首も莊の荒れしさまをのべ其人を懷ひ舊友の歿しつくすを歎せり。燕・柳等の語によれば此篇は廣德二年春夏の交の作ならんか。

【詩意】燕が飛びこんでくるがとなりのいへへははいらぬ。鷗が歸つてくるがこれまたもとの池へもどつてきてゐるのである。橋は斷絕して板は無い。柳は臥しながらひとりでに枝をだしてゐる。自分はとうとう向秀が山陽で嵆康を傷むための賦を作つた樣に君を傷む賦を作ることになつた。鮑叔が管仲を知つた樣に君が自分を知つてくれたことに對しては自分ははなはだはぢいつてゐるものである。おもへばふだんから交りのある人人は零落しつくすのであつて、この白髮あたまの自分は兩眼から淚が流れるばかりである。

懷(一)舊　【原注】公前名預。避御諱。改名源明。

舊を懷ふ　【原注】公前の名は預、御諱を避け、名を源明と改む。

地下蘇(二)司業。情(三)親獨有君。　地下の蘇司業、情親獨り君有り。
那因喪亂後。便有死生分。　那に因りて喪亂の後、便ち死生の分るる有るや。
老(四)罷知(五)明鏡。歸(六)〔悲〕來望(七)白雲。　老い罷むこと明鏡知る、〔悲み〕來つて白雲を望む。
自從失辭(八)伯。不復更論(九)文。　辭伯を失ひしより、復た更に文を論ぜず。

【字解】【一】懷舊　ふるきをおもふ、舊友をおもふこと。【二】蘇司業　國子司業の官たる蘇源明、作者の注によれば、源明は初の名は預といひしが天子の御諱（唐の代宗は名を豫といふ、豫と預と同じ音の字ゆゑさしあひあるなり）を避けて源明と名を改めたといふのである。源明は廣德二年に長安にて卒したり。次の哭台州鄭司戶蘇少監詩とあはせみよ。【三】情親　情誼のしたしいもの。【四】老罷　罷はやむこと、老罷は老了のごとく、老いはてしまいふ。【五】知明鏡　明鏡知と同じ、かがみがそれを知つてゐる。【六】歸來　諸本歸を悲に作れり、今「悲」字に從ふ。悲來とは悲みのつづいて生ずるをいふ。【七】望白雲　蘇は長安にて歿したり、作者は蜀にあり、相隔たること遠きゆゑ白雲をのぞむといへり。【八】辭伯　詞伯なり、伯は長をいふ、詞伯は文壇の長なり、蘇をさしていふ。【九】論文　文章のことについて論ずる。

【題義】舊友のことをおもうてよんだ詩。廣德二年の作か。或は以て永泰元年の作とす。

【詩意】今は地下の人となつた司業の蘇君。自分の親しいものは君があるくらゐのものだ。なんで天下喪亂のあとひきつづいて君と死に生きの區別がなければならぬのか。自分の全く老いはてたことは鏡がよく知つてをる。君が死んだときいては悲みがこみあげてきて遠く白雲のかなたをながめやるのである。君といふ文壇の長を失くしてからは自分はこれまでのごとく二度と文章のことを論ふことはやめてしまつた。

哭(一)台州鄭司戶蘇(二)少監

台州の鄭司戶と蘇少監とを哭す

故(三)舊誰憐我。平生鄭與蘇。　故舊誰か我を憐む、平生鄭と蘇となり。
存(四)亡不重見。喪(五)亂獨前途。』　存亡重ねて見ず、喪亂獨り前途。』
豪(六)俊何人在。文(七)章掃(八)地無。　豪俊何人か在る、文章地を掃うて無し。
羈(九)遊萬(一〇)里闊。凶(一一)問一(一二)年俱。　羈遊萬里闊なり、凶問一年俱にす。
白(一三)首〔日〕(一四)中原上。清秋大(一五)海隅。　白〔日〕中原の上、清秋大海の隅。
夜(一六)臺當(一七)北斗。泉(一八)路窅(一九)東(二〇)吳。　夜臺北斗に當る、泉路東吳窅なり。
得(二一)罪台州去。時危棄碩儒。　罪を得て台州に去る、時危くして碩儒を棄つ。

(二二)移官蓬閣後。(二三)穀貴歿(二四)潛夫。
(二五)流慟嗟何及。(二六)銜寃有(二七)是夫。』
(二八)道消詩發興。(二九)心息酒(三〇)爲徒。
(三一)許與(三二)才雖薄。(三三)追隨跡(三四)未拘。
(三五)班揚名甚盛。(三六)嵇阮逸(三七)相須。
(三八)會取(三九)君臣合。寧(四〇)詮(四一)品命殊。
(四二)賢良不必展。(四三)(四四)廊廟偶然趨。(四五)
(四六)勝決(四七)風塵際。(四八)功安(四九)造化爐。
(五〇)從容(五一)詢舊學。(五二)慘澹(五三)閟陰符。』
(五四)擺落(五五)嫌疑久。哀傷志力輸。(五六)
俗依(五七)綿谷異。客對(五八)雪山孤。
(五九)童稚思(六〇)諸子。交朋列(六一)友于。
(六二)情乖(六三)清酒送。(六四)望絕(六五)撫墳呼。

官を蓬閣に移してより後、穀貴くして潛夫歿す。
流慟するも嗟何ぞ及ばむ、銜寃是れ有る夫。』
道消して詩、興を發す、心息するは酒に徒と爲ればなり。
許與才薄しと雖も、追隨跡未だ拘らず。
班揚名甚だ盛なり、嵇阮逸相須つ。
會ず君臣の合するを取る、寧ぞ品命の殊なるを詮らむや。
賢良必ずしも展べず、廊廟偶然に趨けり。
勝は決す風塵の際、功は安んず造化の爐。
從容舊學に詢ふ、慘澹陰符閟づ』
嫌疑を擺落すること久し、哀傷志力輸す。
俗は依る綿谷の異なれるに、客は對す雪山の孤なるに。
童稚より諸子を思ひ、交朋友于に列す。
情は乖く清酒の送、望は絕ゆ撫墳の呼。

(六六)瘡病餐(六七)巴(六八)水。(六九)瘡痍老蜀都。(七〇)
飄零迷哭處。天地日榛蕪。(七一)』

瘡病巴水に餐し、瘡痍蜀都に老ゆ。
飄零哭處に迷ふ、天地日に榛蕪なり。』

【字解】【一】台州鄭司戶　台州は浙江省台州府、鄭司戶は司戶參軍鄭虔、虔については送鄭十八虔貶台州司戶（卷五の五一四頁）・題鄭十八著作丈故居（卷六の五六四頁）・有懷台州鄭十八司戶（卷七の五二二頁）所思（卷八の二〇二頁）・等の詩篇を併せみよ。【二】蘇少監　祕書少監蘇源明。【三】故舊　ふるなじみ。【四】存亡　我は生存し、彼等は死亡す。【五】喪亂獨前途　喪亂の際にあたりて前途ただ獨自を餘すといふ、以上は舊友中にて鄭蘇最も親愛のあひだがらなるをいふ。【六】豪俊　すぐれた人物。【七】文章　文章に長じた人。【八】掃地無　地面をはききよめたごとくさつぱりと無し。【九】羇遊　旅寢してあそぶ。【一〇】萬里闊　闊は「ひろし」、遠きをいふ、此句自身についていふ。【一一】凶問　不吉のたより。【一二】一年俱　鄭と蘇の死報が一年のうちに二つともどもに來た。【一三】白首　首の字に作れる本あり、之に從ふ、白日はかがやく太陽。【一四】中原　黃河の流域をさす、ここは長安洛陽を漠然といへり、卽ち蘇の所在なり。【一五】大海隅　台州をいふ、鄭の所在なり。【一六】夜臺　墓をいふ。【一七】當北斗　北斗は星、その方位に當るとは長安をさす、蘇をいふ。【一八】泉路　黃泉のみち、冥途。【一九】窅　はるか。【二〇】東吳　吳の東、台州をさす、鄭をいふ。【二一】得罪二句　鄭をいふ、碩儒は大儒、鄭をさす。【二二】移官二句　蘇をいふ、蓬閣は蓬萊山の閣なり、後漢の學者は東觀を稱して老氏の藏室、道家の蓬萊山となせり、東觀には多く書を藏す、因て唐の祕書省を東觀に比して蓬萊山の閣卽ち蓬閣といへり、移官蓬閣は源明が祕書少監に移りしをいふ。【二三】穀貴　米價のあがりしこと。【二四】潛夫　後漢の王符、幽棲して潛夫論を著はす、以て蘇に比す、この穀貴の句と「八哀」の長安米萬錢、凋喪盡餘喘とあるによれば源明は貧飢を以て死せしものか。【二五】流慟　流涕慟哭、この句は蘇をいたむ。【二六】銜寃　無實の罪をもつてゐる、この句は鄭をいたむ、鄭が台州へ貶せられしは安祿山の叛軍に降つたといふ罪名なりしなり。【二七】有是夫　歎息の語なり、そんなひどいこともあるものであるものかの意、以上は存亡不重見の句を承けて二人の死をいためり。【二八】道消　君子の道の減退すること、「易」否卦の語。【二九】心息　心の休息すること。【三〇】酒

爲徒　酒間に於て徒伴となる。【三二】許與　鄭蘇二人が作者に文才ありと許しあたへること、【三三】才　作者自身の文才。【三三】追隨　作者が二人の後にくつついて交遊すること。【三四】跡未拘　外形上のことに拘泥したことなし、精神的に交りしをいふ。【三五】班揚　班固、揚雄、以て鄭蘇の文名あるに比す。【三六】嵆阮　嵆康、阮籍、以て鄭蘇の脫俗の人物なるに比す。【三七】逸相須　逸は脫俗をいふ、相須とはお互に必要に必要とする關係にありしをいふ。【三八】會取四句　は天寶の際に鄭蘇倶に仕へ其の志を行ふにおよばざりしをいふ。【三九】君臣合　合は心の一致すること。【四〇】詮　はかる。【四一】品命殊　品は官位の階級をいふ、命は官を敍するに發する君命をいふ、一命二命とだんだん上の位にのぼす、故に品命は階級を意味す、殊とはちがひなり、鄭虔は廣文館博士にて位やや高く、蘇源明は國子司業にて位ややひくし、故に位の高下のちがひを殊といふ。【四二】賢良　かしこくよき才德ある人物、二人をさす。【四三】展　其の志をのばし行ふをいふ。【四四】廊廟　朝廷をさしていへり。【四五】趨　あるく容なり、朝廷に於てはすこしこばしりにあるく。【四六】勝決四句　は肅宗京師を恢復してのち蘇は祕書少監となり、鄭は台州へ貶謫されしことをいふ。【四七】風塵際　安祿山の騷動のとき。【四八】功　天下平定の軍功。【四九】造化鑪　天地をいふ、天地は造化が萬物を鎔鑄して出だすいろりのごとし。【五〇】從容　ゆつたり、肅宗の容子。【五一】詢舊學　舊學とはむかしその人についてまなんだ先生をいふ、「尚書」說命篇に、台小子、舊學ニ於甘盤一とみゆ、ここは蘇源明をさす。源明はもと太子諭德の官にありて肅宗の師たりしことあり、詢は「とふ」、ものをごさうだんになること、これは少監にひきあげたまひしをいふ、蒲氏曰く知制誥たらしめしをいふと。【五二】慘澹　ものがなしきさま。【五三】闕陰符　陰符は太公望の兵法の書なり、鄭虔は兵法に通じ嘗て天寶軍勃錄といふものを著はしたりといふ、闕は「とづる」、とづとはひつこめられて用ひらるるに至らざるをいふ、これは鄭の流されしことをいふ、以上は故舊難倚我の句をうけて鄭蘇二人との平生の交遊を敍したり。【五四】擺落　はらひおとす。【五五】嫌疑　作者の鄭蘇に對する嫌疑、それを擺落するとは先方を十分に信じてをるをいふ、(仇氏は朝廷が作者に對する嫌疑なりととけり)。【五六】輸　いたす。【五七】綿谷異　綿谷の異俗、綿谷は綿州の谷をいふ。【五八】雪山　西山。【五九】童稚　こどもの時より。【六〇】諸子　鄭・蘇等をさす。【六一】友于　孝乎惟孝、友ニ于兄弟一と「尚書」に見ゆ、友于の二字を切りとりて兄弟の義に用ふ。【六二】情乖　乖は「そむく」、その情を受くるを得ざるに至りしをいふ。【六三】沛酒盜　盜とは先方よりこちらへ盜りてよこしくるること。【六四】望絕　望は希望。【六五】撫墳呼　直接に朋友の墳を手になでて名をよぶこと。【六六】瘧癘　おこりやまひ。【六七】餐　食事すること。【六八】巴水　巴地の水、卽ち嘉陵江をさす、閬州のことをさすならん。【六九】瘡痍　「北征」の乾坤含ニ瘡痍一の瘡痍とおなじかるべし、兵亂のために人人がきずをおうてゐる。【七〇】蜀都　成都をいふ。【七一】榛蕪　雜木、雜草がしげりあひて荒れはつるをいふ。以上は蜀地に寄寓して朋友の死を親しく弔ふ能はざるの悲しみをのぶ。此の「擺落」以下十二句の一節は、句の排列宜しきを失すと考ふるも如何ともしがたし。

【題義】台州の司戶參軍鄭虔と祕書少監蘇源明との死をきいてそれを哭した詩。廣德二年秋の作。

【詩意】舊友もいろいろあるなかにだれが自分をきのどくがつてくれたかといへば、ふだんから鄭君と蘇君があるばかりだ。それが今や我は存して彼等は亡くなりふたたび見ることはできなくなり、これからの前途はただひとりで喪亂にあはねばならなくなつてしまつた。』彼等がなくなれば世間にどんな豪俊がをるのか、まるで文章は地を掃うて無くなつたというてもよい。自分は萬里の遠きに旅寢をしつつ一年の間に不吉の報知を二ついつしよにうけたのである。あの太陽のかがやいてゐる中原の地、(蘇)、また淸らかな秋の來てゐるであらう大海のかなた、(鄭)。北斗の方位には蘇君の墓がある。鄭君の眠つてゐる黃泉は東吳のかたはるかなるところにある。鄭君は罪を得て台州に去つた。それは危險な時世がこの大儒を棄てたのだ。蘇君は祕書省に官をうつされたかとおもふと米價騰貴のため歿つてしまつた。いくら蘇君のためになげいてもおつつかぬ。鄭君の寃罪は昔の夢ものがたりではなく

現世にも是あるかなと歎かざるを得ぬ。』（以前のことを考へてみるに）我我は世間で君子の道が滅退してゐたので詩に於て自己の興を出し、心を息ませるためには酒の場に於て仲間をなしてゐた。諸君から許されてゐた自分の文才はもとより薄弱なものであつたが、諸君にくつついて遊ぶにあたつては未だかつて形迹に拘はる樣なことは無くて精神的の交際であつた。諸君はむかしの班固・揚雄ほどの人だとの名聲が盛であり、諸君は竹林七賢の嵇康・阮籍がその脫俗ぶりに於てお互を必要としたごとく互に無くてはならぬものであつた。あの時は出でて仕へるにあたつて君臣の間がぴつたり合ひさへすればよいといふ點を取つて出たので官位の階級に高下のちがひがあるなどといふことは眼中に無かつたのである。仕へたから諸君のごとき賢良の志が必ず展べられるとはきまらぬのであるが偶然に朝廷へ出てゐたのであつたのである。（そのうちに安祿山の騷動がおこり）兵馬の塵の際にも朝廷の勝ちはきまり、戰功の結果天下は泰平となつた。そこで蘇君の方は以前の先生といふ關係で聖天子（肅宗）からゆつたりと物ごとをお相談になるといふことになつた（祕書少監にとりたてられることになつた）が、鄭君の方はみじめにもせつかくの兵略をいだきながらその事をかきしるした書物をそつとしまひこんでおかねばならぬ運命にたちいたつた。』自分は諸君を絕對に信じてをるので事のはじめから嫌疑の念などすこしももたぬもので、諸君の運命を見ては自分の心も氣力も哀傷に向つてそがれてゐる。自分はいま蜀に居るから綿谷の異風俗によりそひ、孤立せる雪山と相對してゐる。自分はこどもの時から諸君をしたうてゐたが、のち友だちとなつてからは兄弟のごとき關係に列せらるる樣になつた。それがいまは酒を送つてもらふ樣な厚情をになふことができなくなり、親しく墳をさすつて呼びかけてみたいとおもうてもその望みも絕えてをる。ただ瘧をやんで巴地の水に食し、人人兵亂のきずをおうてゐるあひだに蜀の都に老いつつある。かくおちぶれては諸君を哭するにもどこで哭して淚をそそいでよいか迷ふほどである。何となれば天地は日日に榛荊が生え雜草が生えるばかりであるから。』

別唐（一）十五誡。因寄禮（二）部賈侍郎

九載一相見。百年能幾何。　九載一び相見る、百年能く幾何ぞ。
復爲萬里別。送子山之阿（三）。　復た萬里の別を爲す、子を送る山の阿。
白（四）鶴久同林。潛魚本同河。　白鶴久しく林を同じくす、潛魚本河を同じくす。
未知棲（五）集期。衰老强高歌。　未だ知らず棲集の期、衰老强ひて高歌す。
歌罷兩（六）悽惻。六龍（七）忽蹉（八）跎。　歌罷みて兩ながら悽惻す、六龍忽ち蹉跎たり。
相視髮皓白。況難駐（九）義和。』　相視るに髮皓白なり、況んや義和を駐め難きをや。』

胡星墜燕地。漢將仍橫戈。
蕭條四海內。人少豺虎多。
少人愼莫投。多虎信所過。
飢有易子食。獸猶畏虞羅。
子負經濟才。天門鬱嵯峨。
飄飄適東周。來往若崩波。』
南宮吾故人。白馬金盤陀。
雄筆映千古。見賢心靡他。
念子善師事。歲寒守舊柯。
爲我謝賈公。病肺臥江沱。』

胡星燕地に墜ちしも、漢將仍ほ戈を橫ふ。
蕭條たり四海の內、人少くして豺虎多し。
少人には愼みて投ずること莫れ、多虎は信に過ぐる所なり。
飢ゑては子を易へて食する有り、獸すら猶ほ虞羅を畏る。
子經濟の才を負ふ、天門鬱として嵯峨たり。
飄飄東周に適く、來往崩波の若くならむ。』
南宮の吾が故人、白馬金盤陀。
雄筆千古に映ず、賢を見ては心他靡し。
念ふ子が善く師事して、歲寒まで舊柯を守らむことを。
我が爲に賈公に謝せよ、肺を病みて江沱に臥すといへ。』

【字解】【一】唐十五誠　唐誠は姓名、十五は排行、誠が事蹟詳ならず、此の時誠は東京（洛陽）に赴きて試驗をうくるものらし、作者因つて之を賈至に紹介せるなり。【二】禮部賈侍郎　禮部侍郎賈至をいふ。至は寶應二年に尙書左丞となり、廣德二年に禮部侍郎に轉じたり。同年九月、至は楊綰とともに兩京の選擧を分掌せり、兩都に擧人を試むることは至より始まる。作者と賈至との關係は密なるものあり、そは留別賈嚴二閣老兩院補闕（卷五の四五六頁）・奉和賈至舍人早朝大明宮（卷五の五一八頁）・送賈閣老出汝州（卷六の五二九頁）・寄岳州賈司馬巴州嚴使君兩閣老五十韻（卷八の一七二頁）等の詩篇あるによつて知るべし。【三】阿　曲隅（くま）をいふ。【四】白鶴・潛魚　比として用ふ。【五】棲集　すむ、あつまる、蓋し棲の字鶴についていひ、集の字魚についていふ。【六】兩　二人ともに。【七】六龍　太陽をいふ。日輪は六匹の龍がひくと考へらる。【八】蹉跎　つまづく貌、ここは夕日の傾くさまをいふ。【九】駐義和　義和は古傳說の日輪の車を御する御者の名、駐は馬をとどむること、駐義和は日脚をとどめ時を經過させぬこと、以上は別れを惜むことをのぶ。【一〇】胡星　旄頭ともいふ、兵亂の表象とせらる、賊徒史朝義をさす、朝義は廣德元年九月幽州の醫巫閭山の祠下に縊れ死し、その首を京師に傳へらる。【一一】燕地　むかしの燕國の地、燕は幽州近接の地なり。【一二】漢將　河北諸鎭の武將にして朝廷の命を奉ぜざるものをいふ。【一三】仍橫戈　戈を橫ふとは朝廷に反抗するをいふ。【一四】豺虎　盜賊をいふ。【一五】投　我が身をそちらへ投入すること。【一六】信所過　仇注に經過方信といへるは「そこをとほつてみてやつとそれがほんたうだとわかるであらう」といふなり、これは無理なるよませ方なり、信所過とよみて「ほんたうにそこはとほるのだ」と解すべきなり。一說に信所過とよませて反對のことを極言せるなりといひ、或は少人の地は危險多きも、多虎の地は虎を禦ぐものあるべければ危險却つてすきなきがゆゑにいふ、と爲せどもいづれも情理にそむく說なりといふべし。【一七】易子食　子どもをとりかへてその肉をたべる、吾が子はさすがに食ふに忍びざるなり、此事古くは「左傳」宣公十五年に見えたり、支那人の殘忍性の一證なり。【一八】虞羅　虞は山澤をつかさどるもの、羅は「あみ」。【一九】子　唐誠をさす。【二〇】經濟才　經國濟民の才、政治の才をいふ。【二一】天門　君のおいでになる宮城の門をみたてて天の門といふ。【二二】鬱　さかんなる貌。【二三】嵯峨　たかき貌。唐誠は試驗を受くるものなるによつて天門の高くよこたはることをいへり。【二四】東周　洛陽をいふ。【二五】來往　ゆききの人。【二六】若崩波　紛亂のさまをいふ。以上は道路並に前程に困難あるをいふ。【二七】南宮　漢代にはひろく尙書の府を南宮といひしが、後世は禮部省のことを南宮といふことになれり、賈至は禮部に官たるを以てここに南宮といふ。【二八】故人　舊識の人、賈至をさす。【二九】金盤陀　魏將軍歌（卷四の三〇〇頁）の句解をみよ、馬の鞍勒の飾りなり。【三〇】見賢　賢は賢人。【三一】心靡他　あだしこころなし、「詩」に之死矢靡它とみゆ、ここは信じてよくもてなしてくれるをいふ。【三二】師事　師としてつかへる。【三三】歲寒守舊柯　節操をかへぬこと、「論語」に歲

察知松柏之後凋とみゆ、舊柯はもとのえだ、守とは同じ色を保つてゐるをいふ。【四】謝　ことわりをいふ、あいさつする。

【三】江沱　江は揚子江、沱は沱江、並に蜀にあり。

【題義】唐誠が洛陽へゆくのに別れ、ついでに禮部侍郎賈至に寄せるためによんだ詩。廣德二年秋の作。

【詩意】我我の生涯は百年といふが百年というたところがどれだけのものか。それに自分は君とは九年めにやつと一見することができた。ところがまた萬里のお別れをせねばならなくなり、君を山のくまわに送るのである。自分と君とはながらく同じ林にすんだ白鶴のごとく、また同じ河にひそんでゐた魚のごときものなのだが、いまわかれてはいつまた同じく棲み同じく集まり得るかの時期はわからぬので、自分は衰老の身を以て强ひて高く歌うて別れのこころをのべる。歌がをはればともどもに悲み、夕日も落ちかからうとする。うちみればおたがひに白髮あたまなのだ、まして日脚をひきとめておくことができぬ以上はますます悲まざるを得ぬのである。』燕の地方では兵亂の象たる胡星が墜ちたとはいふものの、武將どもがまだ戈を橫へてがんばつてをる。四海の內はさびしく、人は少くて豺虎が多いのである。君は人の少いところへはいりこまぬ樣に用心したまへ、虎の多いところは是非なくそこはとほらねばならぬ。今人人は飢ゑて子どもをとりかへて食べるものがある。けだものも虞人の羅にひつかけられることを畏れてゐる。このとき君は經濟の才をもつて天子の門に進まんとする。天子の門はさかんに高くそびえてはいることがむづかしい。君がさまよひつつ東周（洛陽）へゆくならば、さだめし往くさ來るさの人人が崩れたつ波のごとくみだれてゐることだらう。』禮部にはいま自分のふるなじみ（賈至）が居る。彼は金の盤陀を飾つた白馬にのつてゐる。彼の雄筆は千古に映ずるものであるが、賢者を見てはよろこんでそれを迎へてくれる、あだしこころはもたぬ。だから君は善く彼に師としつかへ、歲が寒くなつてももとのまま綠の色の柯をたもつてかはらぬ操を維持するがよろしい。また自分のためには、自分はいま肺の病を抱いて江沱の流るる處に臥してゐるとことづてもらひたい。』

初冬

垂(一)老戎(二)衣窄(三)。歸(四)休寒(五)色深。
漁舟上急水。獵火著高林。
日有習(六)池醉。愁來梁(七)父吟。
干(八)戈未(九)偃息。出(一〇)處遂(一一)何心。

初冬

垂老戎衣窄し、歸休すれば寒色深し。
漁舟急水に上り、獵火高林に著く。
日に習池の醉有り、愁來れば梁父の吟をす。
干戈未だ偃息せず、出處遂に何の心ぞ。

【字解】【一】垂老　老ゆるになんなんとして。【二】戎衣　軍服。【三】窄　身はばのせまきこと。【四】歸休　家へかへつてやすむ。【五】寒色　ふゆげしき、次の漁舟獵火の事をさす。【六】習池醉　晉の山簡が故事、巳にしばしばみゆ、草堂の池に醉ふ

をいふ、卷十三、將赴成都草堂先寄嚴鄭公詩第二首の習池未覺風流盡をみよ。【七】梁父吟　諸葛亮が愛吟せる詩、已に見ゆ、自ら亮を以て比す。【八】干戈　吐蕃の兵亂をいふ。【九】未偃息　干戈がやまぬこと。是の歲十月嚴武、吐蕃の鹽川城を攻む。【一〇】出處　出でて仕ふると、退きて處るとの二つ。【一一】誰何心　どちらが本心ぞ、自ら態度の曖昧なるを詰りたる語なり、然れども「處」の方を重くとがめしなるべし。

【題義】初冬の感をのぶ、けだし嚴武が幕府より暫時草堂へかへりしときの詩。廣德二年冬の作。

【詩意】老いかかつた身には軍服はせまくて窮屈だ、草堂へかへつて休んでゐるともう冬景色がふかい。すなはち漁舟は急流をのぼつてゆくし、獸をかりするために燒く火は高い林に着けられてをる。自分は每日習池にも比すべき吾がやの池で醉うてをり、愁がおこるときは梁父の吟を吟じてなぐさめてゐる。いま兵亂がまだやまぬのに自分は一方に出仕し一方に歸臥したいとおもうてをるが、どちらが本心なのか、退處の念をうごかすこそこころえぬわざではないか。

觀李固(一)請(二)司馬弟山水圖(三)三首

李固が司馬弟に請へる山水の圖を觀る　三首

簡易(三)高人意(四)、匡床(五)竹火爐(六)。　簡易なり高人の意、匡床竹の火爐。

寒天留遠客(七)、碧海挂新圖(八)。　寒天遠客を留め、碧海新圖を挂く。

雖對連山好、貪看絕島(九)孤。　連山の好きに對すと雖も、貪り看る絕島の孤なるを。

羣仙不愁思(一〇)、冉冉(一一)下蓬壺(一二)。　羣仙は愁思あらず、冉冉として蓬壺に下る。

【字解】【一】李固　人名、蜀人ならんといふ。【二】請司馬弟山水圖　請とは請ひて新にかきてもらひしをいふ、司馬弟は李固が弟にて司馬の官たる人、この詩の題、以上は舊解によりてときたるも、恐らくは誤脫あるならん。或は李固請が姓名にて司馬が其人の官名、弟は年少者の義ならんも知るべからず。暫く疑を存す。詩意を見るに、この圖は海上仙山の圖なるに似たり。【三】簡易　簡略にしてかざらぬこと。【四】高人　高尙なる人物、李固をさす。【五】匡床　安らかなるこしかけ。【六】竹火爐　竹でつくつた手あぶり。【七】遠客　作者自らをいふ。【八】碧海挂新圖　挂碧海之新圖とあるべきを詩句とするために挂字を中間に置きたる句法なり。【九】絕島孤　人の居らぬ處のひとつ島、卽ち下文の蓬壺をいふ。【一〇】不愁思　不有愁思の意、しんぱいごとなし。【一一】冉冉　しだいに。【一二】蓬壺　蓬萊方壺の仙島をいふ。「列子」湯問篇に、渤海の東に大壑あり、その中に五山有りといひ、その第三に方壺第五に蓬萊を擧ぐ。方壺は卽ち「史記」の方丈なり。

【題義】李固がその弟の司馬某にたのんでかいてもらつた山水圖を觀しことをよめる詩。廣德二年の作。

【詩意】高尙な人物のこころは至極簡單なもので安樂椅子に竹製の手あぶり、冬ぞらの寒いをりにそれで遠方の客（自分）をひきとめて碧海の新圖を壁に掛けてみせてくれる。自分はその圖の連山の好い景色に對しただけでも氣に入つてゐるのだが、そのうへさらに海中に絕島が孤立してゐるのでそれをあくまでむさぼりながめるのである。なぜさうするか、仙人たちといふものは我我世俗の人の樣に

心配することなどは無いものとみえて、いかにものんきげにつぎつぎと蓬萊方丈の仙島に向つて天からおりてくる樣子がうらやましいから。

〔二〕

方（一）丈渾連水。天（二）台總映雲。　方丈渾て水に連る、天台總て雲に映す。
人間長見畫。老去恨空聞。　人間長く畫を見る、老い去つて空しく聞くことを恨む。
范（三）蠡舟偏小。王（四）喬鶴不（五）羣。　范蠡舟偏に小なり、王喬鶴羣ならず。
此（六）生隨（七）萬物。何處出塵（八）氛。　此の生萬物に隨ふ、何の處にか塵氛を出でむ。

【字解】【一】方丈　蓬萊・方丈・瀛洲の三神山がありといふこと「史記」封禪書にみゆ。【二】天台　山の名、浙江省台州府にあり。【三】范蠡　越王勾踐が臣、勾踐がために吳の讎を報じてのち美人西施を攜へて五湖に舶をうかべ去る、范蠡といひ次句の王喬といひ竝に畫中の人物なり。【四】王喬　仙人王子喬。【五】不羣　なみなみのものならず。【六】此生　自己の生涯をいふ。【七】隨萬物　世間の事物のあとについてゆく。【八】塵氛　氛は盛なる氣なり。

【題義】この第二首は畫中の山水人物をうつし所感をのぶ。

【詩意】方丈の山はすべて海水につらなり、天台の山はすべて雲に映ろうてたかくみえてをる。こんなありさまはいつも畫でばかりみてをるのであり、老後の今ではそんなことを耳で聞くだけで實際にであはぬことを恨めしくおもふ。范蠡が舟にのつてゐるがなんと小さな舟でないか。王喬が鶴にのつてゐるがこれはただの鶴ではなささうだ。自分は世間の事物に追はれてくらしてをるが、どこへいつたらこの塵の世界からぬけでることができるのだらう。

〔三〕

高浪垂翻屋。崩崖欲壓床。　高浪屋を翻すに垂んとし、崩崖床を壓せむと欲す。
野橋分（一）子細。沙岸繞微茫。　野橋分ること子細に、沙岸繞りて微茫たり。
紅浸珊瑚短。青懸薜（二）茘長。　紅浸されて珊瑚短く、青懸りて薜茘長し。
浮（三）查竝（四）坐得。仙（五）老暫相（六）將。　浮查竝坐し得、仙老と暫く相將ゆ。

【字解】【一】分子細　分は區別してかかれてゐること、子細はこまかにくはしきをいふ。【二】薜茘　巖石に緣りて蔓生する香草なり。【三】浮查　仙人の查なり、「拾遺記」に曰く、堯の時、巨查ありて西海に浮ぶ、其上に光あり星月のごとし、常に四海を繞り十二年にて一周す、貫月查または掛星查と名く、羽人そのうへに棲息す、と。【四】竝坐　ならんですわる。【五】仙老　即ち查上に棲んでゐる老いたる仙人。【六】相將　相攜ふといふがごとし。

【題義】此の第三首は畫中の仙とともに遊ぶことをいへり。

【詩意】高い浪は家屋をひつくりかへすかとおもはれ、崩れかかつた崖は床を壓せんとしてゐる。野らの橋はこまかい點まではつきり區別してかいてあり、沙の岸はうねうねとめぐつて有るか無きかにつづいてゐる。珊瑚は紅色をしほにひたされて短くはえてをり、薜茘は長くのびて青葉の色が高いと

ころにぶらさがつてゐる。自分は幸にもうはさにきく海上に浮いてゐるといふ仙人の査とならんですわることができるので、暫時とはいへ仙人たちと手をたづさへてあそぶことができる。

至後

冬至(一)至後(二)日初長。
遠在劍南(三)思洛陽。
青袍白馬(四)有何意(五)。
金谷銅駝(六)非故鄉(七)。
梅花欲開不自覺(八)。
棣蕚(九)一別永相望。
愁極本憑詩遣興。
詩成吟詠轉凄涼。

至後

冬至至後日初めて長し、
遠く劍南に在つて洛陽を思ふ。
青袍白馬何の意か有る、
金谷銅駝故鄉に非ず。
梅花開かむと欲すれども自ら覺えず、
棣蕚一別永く相望む。
愁極まれば本詩に憑りて興を遣る、
詩成りて吟詠すれば轉た凄涼なり。

【字解】【一】冬至　一年のうち太陽の最も地球に遠ざかる時なり。【二】至後　冬至のあと。【三】劍南　劍閣の南、蜀をいふ。【四】青袍白馬　遣悶奉呈嚴公詩の青袍也自公、到村詩の歸來散馬蹄と同意なり、節度の幕府に在りて便服たる青袍を着け、或は白馬に乘るをいふ。【五】有何意　それに對していかなる意をもつてゐるか、それで滿足してゐるか、の意。【六】金谷銅駝　金谷は河南縣界にある金谷澗をいふ、晉の石崇の別莊の在りし地なり、銅駝は銅駝陌といふ洛陽の街の名、漢の時銅にて高さ九尺の駱駝を鑄、之を二つ宮南の四辻に東西向ひあひに立てたり、そこを銅駝陌とよびたり。【七】非故鄉　もとの故鄉のすがたにあらざるをいふ。【八】不自覺　花のさくにもこころづかぬ。【九】棣蕚　「ざいふり」の花つば、兄弟のことをさす、「詩」の常棣篇に、常棣之華、鄂不韡韡とあり、鄭氏の箋に鄂を承くるもの（即ち蕚）、不を柎（鄂足、即ち蕚足）ととき、蕚のおかげで蕚足もひかるところから、之を兄弟の關係にたとへたりとせり。

【題義】冬至のあとまぢかくによんだ詩、題の「至後」は首句中の二字を切り取りて用ひしまでのこと、詩の內容は洛陽を思ふことをのべたり。廣德二年冬嚴武が幕中の作。

【詩意】冬至、その冬至のあとでやつと日がながくなるが、このとき自分は遠く劍南の地に在つて洛陽のことをおもふ、自分は節度の參謀になつて青袍をつけ白馬にのつたりしてゐるがどういふつもりなのか、それで滿足してゐるのか。金谷の園、銅駝の陌、それらの名所も騷亂以後はもとの故鄉のすがたではない。梅の花はさかうとしてゐるがそんなことには氣がつかぬ。棣の蕚ともいふべき弟とは一たび別れてからながくながめくらしてゐるばかりだ。心配のこうじたときには本來詩をつくつてそれで興をやるのだが、詩ができて吟じてみるとかへつていよいよものがなしさがまさるのである。

寄賀蘭銛(一)

朝野歡娛(二)後。乾坤震蕩(三)中。

賀蘭銛に寄す

朝野歡娛の後、乾坤震蕩の中。

（四）相隨萬里日。（五）總作白頭翁。　相隨ふ萬里の日、總て白頭翁と作る。

（六）歲晩仍分袂。江邊更（七）轉蓬。　歲晩仍ほ袂を分つ、江邊更に轉蓬。

勿云（八）倶異域。（九）飮啄幾回同。　云ふ勿れ倶に異域なりと、飮啄幾回か同じき。

【字解】【一】賀蘭銛　卷十二七四三頁に贈別賀蘭銛詩あり、併せ看よ。【二】歡娯　太平なりし時をいふ。【三】震蕩　ふるひうごく、騷亂の時をいふ。【四】相隨萬里日　萬里相隨日の意、日は時をいふ。【五】總　二人をくるめていふ。【六】歲晩　としのくれ、前の贈別の詩は春に在り、蓋し銛、事を以て年末まで出發せざりしならん。【七】轉蓬　よもぎの風にころがりあるくごとくさまよふ。【八】倶異域　異域は鄕土に對する他の地をいふ、蜀をさす、倶とは彼我二人をいふ。【九】飮啄　のみ、ついばむ、鳥の飮食するをいふことばなり、之を人に用ふるは貧窮の生活をあらはす。

【題義】賀蘭銛によせて別意をのべた詩。廣德二年冬末の作ならん。

【詩意】一時太平全盛で朝となく野となく歡娯をつくしたあと、にはかに兵亂がおこつて天地がうごきだしたまつさいちう。そのとき君と自分とは萬里の遠くまで相隨つてきたが、いまやふたりとも白髮のぢいさんとなつてしまつた。いま歲の晩だといふのにもやつぱり袂を分たねばならぬ。そのうへ此の蜀の江邊で蓬のごとくころがりあるくのである。ここはおたがひ他鄕の地だから悲しいなどとはいひたまうな、かうやつていつしよに飮食することのできることは生涯に幾度あるのだとおもはれるか、そこを樂しむべきではないか。

送（一）王侍御往（二）東川（三）放生池（四）祖席

王侍御が東川に往くを送る、放生池の祖席

東川詩友（五）合。此（六）贈怯（七）輕爲。　東川詩友合す、此の贈輕爲を怯る。

況復（八）傳（九）宗匠。（一〇）空然惜別離。　況んや復た宗匠より傳へらるるをや、空然別離を惜む。

梅花（一一）交（一二）近野。草色（一三）向平池。　梅花近野に交はり、草色平池に向ふ。

（一四）儻憶（一五）江邊臥。歸期願早知。　儻し江邊の臥を憶はば、歸期願くは早く知らしめんことを。

【字解】【一】王侍御　杜詩の王侍御に王掄あり王契あり、これ其の孰なるやを知らず。【二】東川　梓州をいふ。【三】放生池　成都近郊にあるなるべし。【四】祖席　送別の席をいふ、送行の祭を祖道といふ、祖は始なり、はじめて道にいづるゆゑ祖道といふ、むかしは羝（三歲の牡羊）又は狗を車輪にてひき殺して血を左輪にぬりたり。後世はただ行神を祭るを祖祭といふ。【五】合　會合する。【六】此贈　贈とは別るるときの贈りものたる詩篇をさす。【七】輕爲　かろがろしく詩をつくること。【八】傳　他人に向つて傳播する。【九】宗匠　匠の字もと近に作りたるを仇氏考證のうへに改めたるなり、匠の字正し。宗匠は詩に巧みにして衆人の貴ぶ所の人をいふ、ここは王侍御をさす。【一〇】空然　いたづらに、詩のできざるをいふ。【一一】交　枝相まじはりて開くをいふ。【一二】近野　城ちかくの田野、蓋し放生池の所在をさす。【一三】向　そちらへ進りて生ずるをいふ。【一四】儻　もしくは、ひよつと。【一五】江邊臥　錦江のほとりにねてゐるもの、自己をいふ。

【題義】侍御王某君が東川へゆかれるのを送つた詩。放生池の送別の席に於て。廣德二年の暮の作か。

【詩意】君がゆく東川では詩友が會合するさうだが、それではいま君に贈る詩を作るなどはおそろし

くて容易にできるものでない。ましで君の樣な宗匠の手で傳播されるとあつてはいよいよもつてできぬ、ただいたづらに詩なしで別れを惜むよりほかはない。いま近郊でかく梅が花影を交へてをるし、草の色も平池に向つて連りつつある。君があちらへいつても、ここの江邊にこのおやぢが臥てゐることを萬一おもはれたならば、どうか歸らるる時期をば早く知らせていただきたいものだ。

正月三日歸溪上有作。簡院內諸公

（一）正月三日（二）溪上に歸りて作有り、（三）院（四）內諸公に簡す

野外堂依竹。籬邊水向城。
（五）蟻浮仍（六）臘味。（七）鷗泛已（八）春聲。
藥許鄰人（九）斸。書從稚子（一〇）擎。
白頭趨幕府。深覺負平生。

野外堂竹に依り、籬邊水城に向ふ。
蟻浮仍は臘味、鷗泛已に春聲。
藥は鄰人の斸るを許す、書は稚子の擎ぐるに從す。
白頭幕府に趨す、深く平生に負くを覺ゆ。

【字解】【一】正月三日　永泰元年の正月三日なり。【二】溪上　浣花溪のほとり。【三】簡　てがみとしてやる。【四】院內諸公　節度使の府中の同僚。【五】蟻浮　酒をいふ、酒の表面に泡ありて蟻のうかべるごとし。【六】臘味　十二月の味、酒は年のくれにつくりこむ。【七】鷗泛　かもめの水にうかぶこと。【八】春聲　春らしきのどかなこゑ。【九】斸　きりとる、根をほるなり。【一〇】擎　兩手でささげる。

【題義】永泰元年の正月三日に幕府から浣花溪のほとりの草堂へもどつたときできた詩。それを手紙のかはりに府中の同僚諸君へやつた。是より以後作者はふたたび幕府へは出でざりしなり。

【詩意】野外に於て竹林によりそうて堂がある。籬のそばから水が流れて城の方へむかつてそそいでゐる。蟻の浮いてゐる樣な酒はやはり歲暮の生生しい味がしてゐるが、流れに泛んでゐる鷗ははやくも春らしいこゑをたててゐる。藥草は鄰りの人が來てきつていつてもとがめずにあるし、書物は子供がささげるにまかせてゐる。（かうやつてくらすことはのんきでいい。）しらがあたまになつて幕府へ出仕してゐるなどは平生の志に負いてをるものだといふことにふかくきがつくのである。

敝廬遣興。奉寄嚴公

（一）敝廬、興を遣る、嚴公に寄せ奉る

野水（二）平橋路。春沙映竹村。
風（三）輕粉蝶喜。花暖蜜蜂喧。
把酒宜深酌。題詩好細論。
（四）府中（五）瞻暇日。（六）江上憶（七）詞源。
跡忝（八）朝廷舊。情依（九）節制尊。

野水橋路に平かに、春沙竹村に映ず。
風輕くして粉蝶喜び、花暖かにして蜜蜂喧すし。
酒を把りては宜しく深酌すべし、詩を題しては好し細論せむ。
府中暇日を瞻る、江上詞源を憶ふ。
跡は忝くす朝廷の舊、情は依る節制の尊。

還思長者(一〇)轍。恐避席(一一)爲門。』　還た思ふ長者の轍、恐らくは席を門と爲すを避けんことを』

【字解】【一】畝廬　草堂をいふ、畝とは謙遜していふ。【二】平橋路　水滿ちて橋邊の路と平らになる。【三】紛紛　うつくしい紛錯をもつてゐるてふ。野水六句は畝廬遣興なり。【四】府中　節度使の役所のうち。【五】暇日　暇はみあぐること、先方を尊びていふ。【六】江上　錦江のほとり。【七】淵源　嚴武の文章淵源を有す。【八】朝廷舊　朝廷にての舊識、嘗て嚴武は給事中、作者は左拾遺として同じく朝廷にあり。【九】節制　節度使の權。【一〇】長者轍　長者は嚴武をさす、轍はその乘る車のわだち、漢の陳平、家貧しく席を以て門となす、然れども門外には長者の車轍多かりしといふ。【一一】席爲門　上に說けり。自己を陳平に比す。府中六句は嚴武を思ひその來訪を希望せり。

【題義】あばらやで興を遣り、その詩を作つて嚴武に寄せた。永泰元年春、草堂にての作。

【詩意】野外の水があふれて橋のそばの路とたひらになり、春の沙が竹のはえた村にうつろうてゐる。風は輕く吹いて胡蝶はよろこび、花は暖かにひらいて蜜蜂がぶんぶんうなつてゐる。このとき酒を手にしては十分たつぷりとついでのまねばならぬ、詩を題するならばよいなかまと仔細に論じあはねばならぬ。』あなたは役所でおひまはないかしらんとながめやり、この江べりであなたの文章の淵源あることをおもうてをる。あなたの私との交際の跡はかつて朝廷にゐたときからの舊識だとの關係をかたじけなうしてをるし、わたくしの情愛はあなたが節度使の尊い身分に居られるといふところによりそうてをるのである。しかしそれにつけても思ふのは、あなたがわたくしのところへたづねてやらうとおもはれても、わたくしの家が席を門としてゐる樣な貧乏さではそれをお避けになりはせぬかとい

ふことである。』

營屋(一)

我有陰江(二)竹。能令朱夏(三)寒。　我に陰江の竹有り、能く朱夏をして寒からしむ。
陰(四)通積水(五)內。高入浮雲端。』　陰は通ず積水の內、高は入る浮雲の端。』
甚疑鬼物(六)憑。不顧剪伐(七)殘。　甚だ疑ふ鬼物の憑るかと、顧みず剪伐して殘るを。
東偏(八)若面勢(九)。戸牖(一〇)永可安。　東偏面勢に若ふ、戸牖永く安んずべし。
愛惜(一一)已六載(一二)。茲晨去千竿(一三)。　愛惜すること已に六載、茲の晨千竿を去る。
蕭蕭(一四)見白日。洶洶(一五)開奔湍(一六)(一七)。』　蕭蕭として白日を見る、洶洶として奔湍開く。』
度(一八)堂匪華麗(一九)。養拙異考槃(二〇)。　堂を度る華麗に匪ず、拙を養ふ考槃に異なり。
草茅雖(二一)薙葺(二二)。衰疾方少寛(二三)。　草茅薙葺すと雖も、衰疾方に少しく寛なり。
洗然(二四)順所適(二五)。此足(二六)代加餐(二七)。　洗然適する所に順ふ、此れ加餐に代ふるに足れり。
寂無斤斧(二八)響。庶遂(二九)憩息歡(三〇)。』　寂として斤斧の響く無くんば、庶はくは憩息の歡を遂げむ』

【字解】【一】誅茅　家屋をつくりしこと。【二】陰江竹　陰は蔭ならん、おほふこと、江にかぶさるほどの竹。【三】朱夏　朱は夏の色なり。【四】陰　くもり、陰氣。【五】積水　多くの水、江水をいふ。起四句は竹の繁茂をいふ。但し殘の字、韻字の都合にてかくいへるにて、意は「不翦伐」に在るなり。【六】鬼物撼　怪物がたよりてすむ。【七】翦伐殘　殘は餘のごとし、竹をきればそれだけへりて他はのこるをいふ。【八】東偏　ひがしがは、卽ち江に面せる方面。【九】若面勢　若は「順ふ」なり、面勢の二字「周禮」考工記に出づ、方面形勢の義、ここは土地の形勢の意に用ひたり。【一〇】戶牖　牖は壁に穴をあけたまど。【一一】愛惜　竹ををしみしこと。【一二】六載　作者上元元年に草堂を營み始めて竹を植う、今永泰元年に至りて六年なり。【一三】─去　斬り去る。【一四】藹藹　しづかな貌。【一五】洶洶　波のわきたつさま。【一六】闖　あらはれ出る。【一七】奔湍　はしる所のはやせ。【一八】度堂　度は「はかる」、廣さのみつもりをすること。【一九】熒拙　不器用な性質をそのままそだてる。【二〇】異考槃　「詩」の衞風に「考槃」の篇あり、考槃とは「樂みを成す」をいふ、賢き人、山澗に退き處りてたのしむをいへり。異とは賢人が山澗に退處しをるにはあらざるをいふ、謙遜していへり。【二一】蔬蘿葺　舊注に「蘿」の字について說くものなし、余以爲へらく是れ作者自ら力を勞して草を薙ぎ茅を葺くによりて下したる字なり、揚倫の注に謂二室之陋一などいへるは最も無意義の解といふべし。【二二】衰疾　老衰と疾病。【二三】少寬　すこしくゆるやか、すこしくくつろぐ。【二四】洗然　さつぱりと。【二五】順所適　心のかなへる所にしたがふ。【二六】此　蘿葺の勞働をさす。【二七】代加餐　加餐は食物を多く食すること、それに代ふるとは勞働すれば腸胃のはたらきましく食物うまく從つて多く食することを得。【二八】斤斧響　「をの」のひびき、作事のおとなり。【二九】庶　ねがはくは。【三〇】憩息　いこひやすむ。以上は屋を自ら營むをいふ。斯篇は舊解にただ屋をかまへることとし、作者自らが勞働することをいはず、故に徹底せざる憾みあり。

【題義】自分で家屋をこしらへたことをよんだ詩。永泰元年正月の作。

【詩意】自分のところには江にかぶさつてしげつてゐる竹林があつて、夏さへ寒からしめることができる。この竹の陰りは堆積された江水の内にまで通じ、その高さは浮べる雲の端まではいつてをる。あまりしげつてをるので怪物でもすんではゐないかと疑はれるから、若干を斬りへらしてもかまはぬとおもふ。東の側はちやうど形勢につかはしく、そこに永く戶や牖を安置するによろしい。因つて六年このかた愛惜してきた竹林ではあるがけさこそは千本ばかり斬りはらうた。それで太陽の光はしづかにかがやき、いままでは見えなかつた奔りながれるはやせが洶洶とたぎつてあらはれでた。自分が堂をみつもつてたてるのは華麗なものをたてるのでなく、またそこでは自分のもちまへの不器用なところを養ふにあるので古の賢人が山澗に退いて樂みをした樣なのとはちがつてをる。自分で草をなぎ刈り、茅で屋根を葺き、骨を折るにはをつたけれども、老衰も病氣もこれでやつとすこしくつろいだ樣である。さつぱりとして心は自分の氣のむいたとほりになる。此の勞働は食慾增進法に代へることができる。だんだん作事がすすんでひつそり斧の響が無くなるにいたつたときこそは、どうぞゆつくり休息するたのしさを遂げたいものである。」

除レ草

【原注】去二蕪（一）草一也。

草を除く。【原注】蕪草を去るなり。

草有レ害二於人一。曾何生二阻（二）修一。

草、人に害有り、曾て何ぞ阻修に生ぜむ。

其毒甚蜂蠆。其多彌道周。　其の毒蜂蠆よりも甚し、其の多きこと道周に彌る。

清晨步前林。江色未散憂。　清晨前林に歩す、江色未だ憂を散せず。

芒刺在我眼。焉能待高秋。』　芒刺我が眼に在り、焉んぞ能く高秋を待たむ。』

霜露一霑凝。蕙葉亦難留。　霜露一たび霑凝せば、蕙葉も亦留まり難し。

荷鋤先童稚。日入仍討求。　鋤を荷ひて童稚に先ち、日入りて仍は討求す。

轉致水中央。豈無雙釣舟。　水の中央に轉致す、豈雙釣舟無からむや。

頑根易滋蔓。敢使依舊丘。』　頑根滋蔓し易し、敢て舊丘に依らしめむや。』

自茲藩籬曠。更覺松竹幽。　茲より藩籬曠しく、更に松竹の幽なるを覺ゆ。

芟夷不可闕。疾惡信如讎。』　芟夷闕く可からず、惡を疾むこと信に讎の如し。』

【字解】【一】蕁草　蕁は山韮なり、葉は苧麻のごとく毛刺ありて人をさすといへり。【二】阻脩　物にへだてられまたながし、道路の遠きところをいふ。「詩」に道阻且脩とみゆ。【三】蜂蠆　蠆は「さそり」。【四】彌　わたる、はびこる。【五】道周　周はみちのくま。【六】芒刺　毛さき、とげ。【七】在我眼　まぢかに見ゆるをいふ。【八】待高秋　秋になるを待ちて除く。以上は毒草をみとめしをいふ。【九】霑凝　うるほす、かたまる。【一〇】蕙　蘭の種類、花莖より枝を派生するものなり。【一一】難留　のこつてゐることがむつかしい、雜草とともに枯死すべきをいふ。【一二】討求　もとむ、蕁をさがすこと。【一三】轉致　うつしてそこへやる。【一四】水中央　川のまんなか。【一五】豈無　これあるをいふ。【一六】雙釣舟　二つのつりぶね、これで草をはこぶ。【一七】頑根　かたくなな草の根。【一八】滋蔓　しげりはびこる。【一九】舊丘　もとからあるをか。以上は毒草を除き去るをいふ。【二〇】自茲　除いたあとからは。【二一】曠　ひろびろとしたこと。【二二】芟夷　かりたひらげる。【二三】不可闕　必要なるをいふ。【二四】疾惡　わるいものをにくむ。【二五】如讎　あたかたきをにくむがごとし。以上は毒草を除く本意をいふ。

【題義】蕁といふ毒草を除き去つたことをよんだ詩。永泰元年草堂にての作。

【詩意】この草（蕁、やまにら）は人に害あるもので、それは必ずしも遠方に生ずるといふわけでなく、其の毒のあることは蜂や蠆よりもひどく、其の多いことは道ばたにまでひろがつてをる。自分は晴れたあさげ庭前の林に散歩して江の色をながめ、それがまた心のうさをはらしもせぬうちに急にこの毒草のとげが眼に映つた、どうして之をそのままにして秋まで待つてゐることができよう。』秋になつて露や霜がかたまり霑すときになれば香草である蕙の葉さへもこの毒草といつしよに枯れてわからなくなつてしまふ。（いそいで刈らねばならぬ。）それでこどもらの先になつて鋤を荷ひ、日がかくれてもまだこの草をさがし、幸と二つの釣舟が無いわけではないから、その舟で刈つた毒草を川のまんなかへ轉送してやる。ほつておいてはあのかたくなな根ははびこりやすいから、どうしてそんなものをもとの丘にたよらせておくことができようぞ。』草をすてたあとは藩籬のあたりもさつぱりひろびろとし、松や竹もその幽邃な趣をました樣におもはれる。この草をかつてたひらげてしまふことはぜひ必要なことだ。自分はわるいものをにくむことはほんとうにかたきをにくむ樣なのである。』

春日江村。五首

農務村村急。春流岸岸深。
乾坤萬里眼。時序百年心。
茅屋還堪賦。桃源自可尋。
艱難昧生理。飄泊到如今。

春日江村　五首

農務村村急に、春流岸岸深し。
乾坤萬里の眼、時序百年の心。
茅屋還た賦するに堪へたり、桃源自から尋ぬべし。
艱難生理に昧く、飄泊如今に到れり。

【字解】【一】江村　かはぞひの村。浣花里をいふ。【二】農務　農事のつとめ。【三】急　せはしきをいふ。【四】岸岸　岸ごとに。【五】萬里眼　吳楚にむかつて遠く眼を放つをいふ、東行萬里堪乘興などの萬里の意。【六】時序　四季のうつりかはり。【七】百年心　一生涯といふものをながめる心。【八】茅屋　草堂をさす。【九】賦　詩を賦するをいふ。【一〇】桃源　武陵桃源の實際の仙境、（浣花溪の住居を以て之に比すといふ說は今取らず。）【一一】艱難　國事のなんぎなとき。【一二】昧生理　くらしむきのことに通じない。

【題義】春の日、江ぞひのむらの生活についてよんだ詩。この第一首は村居を以て足れりとして而かも遠遊によりて自ら慰めんとするをいへり。永泰元年春草堂にての作。

【詩意】どの村村でも農事がせはしくなつてきた、春江の流れはどの岸岸でも水かさが深くなつてゐる。この時天地の間に萬里の眼をはなち、四時の變遷にあうて一生涯を通じてながめる自分の心はどんなであるか。まあまあつまらぬ茅ぶきの家ではあるがここで詩もつくることができる、またここを立ち去つて遠くへ出だすとすれば桃源の世界も尋ねることができるといふものだ。元來自分は國家多難のをりにあたつて一身上の活計にうとく、ながれただようて今日におよんでをるのである。

〔二〕

迢遞來三蜀。蹉跎又六年。
客身逢故舊。發興自林泉。
過懶從衣結。頻遊任履穿。
藩籬頗無限。恣意向江天。

〔二〕

迢遞三蜀に來る、蹉跎又六年なり。
客身故舊に逢ふ、發興自から林泉。
過懶衣の結ぶに從せ、頻遊履の穿つに任す。
藩籬頗る限り無し、恣意江天に向ふ。

【字解】【一】迢遞　高低ありて且つはるかなる貌。【二】三蜀　蜀郡・廣漢郡・犍爲郡の三郡をさす、蜀地をいふ。【三】蹉跎　つまづく貌、志を得ざるさまをいふ。【四】六年　乾元二年冬より今、永泰元年まで六年なり。【五】故舊　ふるくからのなじみの人、高適・嚴武などがそれ。【六】過懶　ものうさにすぎること。【七】衣結　つづれごろも。【八】頻遊　しきりに好風景をもとめてあそぶ。【九】履穿　くつに穴があく。【一〇】無限　限界を設けざるをいふ。【一一】恣意　きままに。【一二】江天　錦江の天。

【題義】この第二首は蜀に在りて自由にくらすをいふ。

【詩意】自分は都からはるばる蜀へ來て不得意ながらまた六箇年をへた。旅客の身ではあるが舊友に逢ふことができ、林泉をたのしんで興を發してゐる。無性すぎるもちまへだから衣はぼろをつづくり

あはせ、やたらに遊びまはるから履は穴のあきはうだいである。まがきも結うてはあるがよそのさかひ目がなくかつてきままに錦江の天をながめてくらしてゐる。

〔三〕

種竹交加翠。栽桃爛漫紅。
經心石鏡月。到面雪山風。
赤管隨王命。銀章付老翁。
豈知牙齒落。名玷薦賢中。

〔三〕

種竹交〻翠を加へ、栽桃爛漫として紅なり。
心を經、石鏡の月、面に到る雪山の風。
赤管王命に隨ふ、銀章老翁に付す。
豈に知らむや牙齒落ちて、名は薦賢の中に玷すことを。

【字解】【一】經心　かつてながめて心にとめたこと。【二】石鏡　巻十三七一頁石鏡詩をみよ。【三】雪山　西山。【四】赤管　あかぢくの大筆。漢の制に、尚書の丞・郎には月月赤管の大筆一雙を給す、楡に題して「北宮著作」といふ。作者工部員外郎なるにより筆を賜はる。【五】銀章　銀印なり、漢の制に二千石以上の吏は銀印青綬を賜ふ、唐にては銀印を賜はらず、作者は緋衣を賜はり隨身の魚袋を有す、魚袋に對して作者は銀章の語を用ふ。【六】老翁　自己をさす。【七】玷　點なり、點辱なり、けがす、謙遜していふ。【八】薦賢　天子に向つて賢者を推薦する書をいふ、これは嚴武が推薦書の中に自己の名ありしをいふ。

【題義】この第三首は蜀に寓して郎官を授けられしをいふ。

【詩意】自分が種ゑた竹はこもごも翠を加へてきたし、栽培した桃は爛漫とくれなゐの花をひらくに至つた。石鏡の月もながめたし、雪山の風にも面を吹かれた。そのうちに君命のまにまに赤管の筆を賜はり、この老人に銀印（實は魚袋）を給付さるるにいたつた。だが牙や齒がぬけおちる樣になつてから薦賢書のなかに賤名を錄せらるるをけがすとは實は意外なことなのである。

〔四〕

扶病垂朱紱。歸休步紫苔。
郊扉存晚計。幕府愧羣材。
燕外晴絲卷。鷗邊水葉開。
鄰家送魚鼈。問我數能來。

〔四〕

扶病朱紱を垂れ、歸休紫苔に步す。
郊扉晚計存す、幕府羣材に愧づ。
燕外晴絲卷き、鷗邊水葉開く。
鄰家魚鼈を送り、我を問うて數〻能く來る。

【字解】【一】扶病　病軀を人からたすけささへてもらふ。【二】朱紱　あか革のまへだれ、緋衣にあてていふ、已にしばしばみゆ。【三】歸休　草堂にかへりやすむ。【四】紫苔　青苔といふ類。【五】郊扉　野外にあるとびら、草堂をさしていふ。【六】存晚計　晚年をすごすはかりごと、「燕外」以下の四句は晚計の説明なり、天然の景と人情の質樸と共にそなはるをいふ。【七】晴絲　晴絲は游絲をいふなるべきか。作者の句に、地晴絲冉冉、江白草纖纖とみゆ。【八】水葉　ひし、あさざ、其他浮き草の葉をいふ。【九】鼈　すつぽん。【一〇】問我　こちらの安否をたづねる。

【題義】この第四首は幕府を辭して草堂にかへることのたのしさをいふ。

【詩意】自分は出仕してをれば人だすけに病軀をささへられ朱紱を垂れてゐるのだが、ここへもどつて休んでをれば庭の紫苔のうへにぶらぶらあるくのである。幕府にをれば多くの人物に對してはづか

しくおもふし、この郊外の扉に起臥すれば晩年の計もここに存在してをるといふものだ。看よ、燕の飛びゆくそとには晴天に游絲がもつれ、鷗のうかべるあたりには水上のうきくさの葉が左右におしひらかれてゐる。また鄰の家の人は魚や鼈を送つてくれ自分の安否をたづねてたびたびやつてきてくれるではないか。

〔五〕

羣盗哀(一)王粲。(二)中年召(三)賈生。
(四)登樓初有作。(五)前席竟爲榮。
(六)宅入先賢傳。(七)才高處士名。
(八)異時懷(九)二子。春日復含(一〇)情。

〔五〕

羣盗に王粲哀む、中年賈生を召す。
登樓初めて作有り、前席竟に榮なりと爲す。
宅は入る先賢傳、才は高し處士の名。
異時二子を懷ひき、春日復た情を含む。

【字解】【一】王粲　後漢末、王粲、亂にあひ長安を去り荊州にゆきて劉表に依り、故鄕を思ひて登樓賦を作る、作者粲を以て自ら比す。【二】中年　少老の中間の年ごろ。【三】賈生　漢の賈誼は洛陽の人、文帝の時召されて博士となる、年二十餘なり、洛陽才子の名あり、朝臣と合はず、長沙に貶せらる、歳餘にして文帝誼を思ひてまた之を徵し、宣室に坐して鬼神の事を問ふ、夜牛に至り文帝席より前みいでたり、作者賈生を以て自ら比す。【四】登樓一句　王粲が故事、上にみゆ、作者その懷鄕の詩篇を以て登樓賦に比す。【五】前席一句　賈誼が故事、上にみゆ、作者工部員外郎に任ぜられしことを以て賈誼の再召、文帝の前席に比す。【六】宅入先賢傳　王粲についていふ、古書に楚國先賢傳あり、「沔襄記」に王粲が宅は襄陽に在り井臺尙ほ存すといへり、かく粲が宅は先賢の傳にも入りたり、作者暗に浣花の草堂の後日土地の名勝誌に入るべきを期す。【七】才高處士名　賈誼についていふ、誼の仕官以前にまかのぼりていふ、處士は仕へずして家居する人をいふ、誼の洛陽才子としてうたはれしをいふ。是亦作者才名の仕官と否とにかかはらず常に存すべきを期するなり。【八】異時　往時をいふ。【九】二子　王粲、賈誼。【一〇】含情　ものおもひをいだく。

【題義】この第五首は古人を借りて自己の感懷をのべたり。

此篇の余が解は多く舊說と異なれり。

【詩意】盗賊がはびこつたのでむかし王粲はかなしみ、賈誼はひとたびは退けられて中年になつてまた呼びかへされた。王粲は荊州に流寓して樓に登つて故鄕を思ふ賦をつくつた。賈誼は話に興がのつて文帝に坐席から膝をのりださせたことは榮譽なこととしてよからう。彼等はその死後には、王粲はその宅の記事が先賢傳にはいり、賈誼は處士たりしときの才子の名が高くうたはれてゐる。(自分の境遇はなんだかこの二人に似てゐる樣におもはれる。)かつて自分はこの二人のことをなつかしくおもうたことがあるが、今日春にあたつてまた二人のことについてじつとかんがへこむのである。

(一)春遠

(二)肅肅花絮晩。(三)菲菲(四)紅素輕。
日長惟鳥雀。春遠獨(五)柴荆。

春遠

肅肅として花絮晩る、菲菲として紅素輕し。
日長くして惟鳥雀、春遠くして獨り柴荆。

數有關中(七)亂(八)。何曾劍(九)外淸(一〇)。　數〻關中の亂有り、何ぞ曾て劍外淸からむ。

故鄉(一一)歸不得。地入亞(一二)夫營。　故鄉歸り得ず、地は入る亞夫の營に。

【字解】【一】春遠　仇氏顧氏が注を引きて春遠は春深のごとしといへるは非なり、春遠は遠春、遠春は遠地の春なり、遠とは都をはなるゝとほきをいふ、此篇第四句に春遠といひ次に關中をいふこと以て證すべし。【二】肅肅　仇氏吳見思が「論文」を引きて肅肅は落つる貌なりといへるは亦非なり、肅肅はしづかにくれるさまをいふ、謝朓が直中書省詩に、紫殿肅陰陰とあるを以て證すべし。【三】花絮　桃花と柳絮。【四】霏霏　王逸の「離騷」の注に霏霏は物物のごとしといへり、香氣のおこるさまなり。【五】紅素　くれなゐとしろと、紅は桃花、素は柳絮。【六】獨柴荊　萬里の遠きにありてただ一の草堂あるのみ、柴荊は柴荊を縛して作りたる門。【七】關中　長安地方をいふ。【八】亂　廣德二年十月吐蕃入寇す、永泰元年二月黨項、富平に寇す。【九】劍外　劍門のそと、蜀をいふ。【一〇】淸　兵馬の塵なくして淸らかなるをいふ。【一一】故鄉　長安。【一二】亞夫營　亞夫は漢の周亞夫、文帝の時匈奴入寇す、亞夫細柳の營に屯す、細柳の營は長安昆明池の南にあり、時に(永泰元年正月)吐蕃盟を請ふ、郭子儀奉天に城かんと請ひ、又兵を涇原に屯す。亞夫を以て子儀に比す。

【題義】第四句の「春遠」の二字を切りとりて題とす、遠地の春のおもひをのべたり。永泰元年春草堂にての作。

【詩意】桃の花や柳の絮がしづかにくれかかり、あかいのやしろいのが輕らかににほひながらとぶ。日はながいがきこゆるものは鳥雀のこゑばかり、春は遠く都とへだたつて一つの柴の門の草堂あるのみだ。關中でさへたびたびの騷亂があるのだ、どうして劍門のそとまで淸らかであることができようぞ。故鄉へはかへれぬ。故鄉の地はいま周亞夫(郭子儀)の陣地のなかにくりこまれてゐる。

長吟(一)

江渚翻鷗戲(二)。官橋(三)帶柳陰。　江渚鷗を翻して戲る、官橋柳陰を帶ぶ。

花飛競渡(四)日。草見踏青心(五)。　花は飛ぶ競渡の日、草には見る踏青の心。

已撥(六)形骸(七)累。眞爲爛漫(八)深。　已に形骸の累を撥ふ、眞に爛漫の深きを爲す。

賦詩新句穩(九)。不覺自長吟。　賦詩新句穩なり、覺えず自ら長吟す。

【字解】【一】長吟　こゑをながくひきて詩を吟ずる。【二】官橋　官設のはし、萬里橋なるべし。【三】柳陰　やなぎのかげ。【四】競渡　舟の競漕なり、周末、楚の屈原、五月五日に汨羅の淵に沈みて死す、人舟を以て之を拯ふ、其の遺俗として競渡おこるといはる、唐の人は二月の中和節に競渡をなせしといふ。【五】草見踏青心　仇注には草見「踏青心」とよみ、青心は「青草の心」なりとせり、今取らず、見とはこちらがみるなり、踏青心とはその人人の青を踏むこころをいふ、踏青は若草をふむこと、蜀にては二月二日を踏青節となすといへり。【六】撥　はらひのける。【七】形骸累　肉體上のうるさきこと。【八】爛漫深　春色の深きことかとおもへどそれにては眞爲の二字と合はず、眞爲とすれば自己が爲すことならざる可からず、恐らくは爛醉深の意ならん、十分に醉ひどれになるをいふ。【九】穩　天成にして無理なところなきをいふ。

【題義】詩を賦してそれを長くふしつけて吟じたことをよめる詩。「已撥」の句によれば心中には固く辭職してしまつたものとみゆ。永泰元年春草堂にての作。

【詩意】江の渚ではひるがへるところの鷗がたはむれてをり、官設の橋は柳のかげをおびてゐる。ちやうど舟競があつて花が飛び散りつつある。また草も靑くのびてきて人がそれを踏みにとでてゐる心もげにもとうなづかれる。自分はもはや形骸上に屬したうるさい事はすつかりはらひおとしてしまひ、いまはほんたうに十分の醉ひどれをするのである。幸ひ詩をつくつたらおだやかな句ができたのでおもはずそれを口ずさんでみるのである。

絶句三首

聞道巴山裏。春船正好行。　聞道巴山の裏、春船正に行くに好しと。
都將百年興。一望九江城。　都て百年の興を將て、一望す九江城。

〔二〕　〔二〕

水檻溫江口。茅堂石筍西。　水檻溫江の口、茅堂石筍の西。
移船先主廟。洗藥浣花溪。　船を移す先主の廟、藥を洗ふ浣花溪。

〔三〕　〔三〕

謾道春來好。狂風太放顚。　謾に道ふ春來ること好しと、狂風太だ放顚なり。
吹花隨水去。翻却釣魚船。　花を吹いて水に隨つて去らしめ、翻却す釣魚の船。

宋の鮑文虎曰く、謝克家任伯云ふ「此の詩は愼文肅が家の故書中に得たり、猶ほ是れ吳越の錢氏の時の人の傳ふる所、格律高妙、其の少陵たること疑なし」と。譯者曰く、之によれば三首は愼文肅なるものの家に傳はれるものなり、謝克家なるものは其の格律高妙なるをいへど余は毫も高妙なる點を見いださず。仇氏は單復に從ひて之を永泰元年成都の詩內に編したるも、第一首巴山をいふときは成都を去りて巴山(閬州)に向はんとすとみるにや。第二首の水檻溫江口といへるは草堂の地理と合はず、第三首ややみるべきがごとくなるも亦「絶句漫興九首」(卷九)の妙味に乏し。余は其の他人の作に非ざるやを疑ふ、故に釋せず。

三韻三篇

　　三韻三篇

高馬勿捶面。長魚無損鱗。　高馬面を捶つこと勿れ、長魚鱗を損すること無かれ。
辱馬馬毛焦。困魚魚有神。　馬を辱しむれば馬毛焦す、魚を困せしむるも魚神有り。
君看磊落士。不肯易其身。　君看よ磊落の士、肯て其の身を易しくせず。

【字解】【一】高馬　背たけのたかきうま。【二】捶　むちうつ。【三】長魚　たけながきうを。【四】馬毛焦　魚はこげた樣な

黃色となるをいふ。(此句馬の雄壯なるさまをいふべきに非ざるかと考ふるに反對にかくやつれたことをいふはいかがにや。暫く疑を存す。)【五】魚有神　神は不思議な力をいふ、沙苑行卷三の二五七頁の末段の巨魚、龍に化する一段を思ひあはすべし、本篇も或は魚馬一體の思想ならんか。【六】磊落士　羣を抜いたひと。【七】易　輕易にすること。

【題義】三韻三篇とは題に非ず、三韻卽ち六句の詩篇三つといふことなり。この第一首は士たるものは外部の困辱には屈せしめらるるものに非ざるをのぶ。時事を引きてこの詩を解くは當らず、蓋し自己についていへるならん。永泰元年の作なるべし。

【詩意】せのたかい馬にはその面をむちうつな。長大な魚には其の鱗を損ふな。馬を辱しめると馬は毛色が黃ばんでやつれた樣になる。(しかし內部の力は衰へぬの意ならんか)。魚を苦めこまらせても魚には不思議な靈力がある。拔羣の士はちやうどこの馬この魚の樣なものだ。だから外部から困辱させられても決して自分の身をかろがろしくはとりあつかはぬ。(內力を維持して他日の神變を待つてをる)

〔二〕

蕩蕩萬斛船、影若揚白虹。
起檣必椎牛、挂席集衆功。
自非風動天、莫置大水中。

〔二〕

蕩蕩たる萬斛の船、影白虹の揚るが若し。
檣を起すには必ず牛を椎す、席を挂くるには衆功を集む。
風の天を動かすに非ざるよりは、大水の中に置くこと莫れ。

【字解】【一】蕩蕩　大なる貌。【二】萬斛船　萬斛をつむ大ぶね。【三】影　蓋し帆影をいふ、下の席帆のかげ。【四】揚白虹　白虹揚に同じ、白いにじのあがること。【五】起檣　ほばしらをおこす。【六】椎牛　牛をつちでうち殺して舟人たちに享應するなり。【七】挂席　むしろ帆をほばしらにかける。【八】衆功　おほぜいのちから。【九】風動天　大風をいふ。

【題義】この第二首大物をうごかすには大力を要するをいふ。

【詩意】大きな萬斛船、その帆影は白い虹の揚がつたかとおもはれる樣だ。この船の檣を起すときにはきつと牛を殺して皆のものを御馳走し、席帆をかけるには幾十人の力を集めてするのである。こんな大船は天を動かすほどの風があるでなければ之を水中に置いてはいけない。(さもなくば水中に置いても動くものではない)

〔三〕

烈士惡多門、小人自同調。
名利苟可取、殺身傍權要。
何當官曹清、爾輩堪一笑。

〔三〕

烈士は多門を惡む、小人は自ら調を同じくす。
名利苟くも取る可くんば、身を殺すも權要に傍ふ。
何か當に官曹清かるべき、爾が輩一笑に堪へたり。

【字解】【一】烈士　志氣のはげしい人。【二】多門　晉政多門とは「左傳」にみゆ、政のでばしよが一途に出でず、いろいろの權力の家があつてそこからでるをいふ。【三】同調　我が調子を彼とおなじくする、權力者に阿り附くをいふ。小人阿附の結果は權力者の考いろいろになりてつまり政令がまちまちになり、多門からでるとおなじ結果になる。【四】名利　名譽と利益と。【五】殺身　わが身を殺すをも顧みずに。【六】傍　そばへくつつく。【七】權要　權力をにぎり、樞要の地位にをる人。【八】何當　何は

何時なり。【九】官曹淸　官曹は官の課局をいふ、役人のむれをさす、淸とは小人どもを除き去つて塵埃をきよめさつぱりきれいにすること。【一〇】甯衆　小人の官曹をさす。

【題義】この第三首は權勢に阿附するものについて憤慨せるなり。

【詩意】烈士は政の一途からでるのを欲して多門より出るのをにくむものだ。ところが小人といふものは何でもかまはず權力者と調子を合はせるものだ。彼等は自分の名譽や利益さへ取ることができるならば身を殺すさへいとはず權要の地に居る者にくつつくのである。いつになつたらこんな役人どもを追ひ拂うて役所をさつぱりさせることができようか。爾等小人は誠に笑ふべきものどもである。

天邊行

天邊行

天邊老人歸未得。　天邊の老人歸ること未だ得ず、

日暮東臨大江哭。　日暮東大江に臨みて哭す。

隴右河源不種田。　隴右河源田を種ゑず、

胡騎羌兵入巴蜀。　胡騎羌兵巴蜀に入る。

洪濤滔天風拔木。　洪濤天に滔り風木を拔く、

前飛禿鷲後鴻鵠。　前に飛ぶは禿鷲後には鴻鵠。

九度附書向洛陽。　九度書を附して洛陽に向はしむ、

十年骨肉無消息。　十年骨肉消息なし。

【字解】【一】天邊老人　天のはてになる老人、自己をさす。【二】歸　故鄕にかへる。【三】大江　錦江。【四】隴右・河源　甘肅西北部、吐蕃に陷りし地方をいふ、廣德元年に吐蕃、隴右を陷る。【五】胡騎　吐蕃をさす。【六】羌兵　黨項羌、「渾奴剌」の類をさす。【七】巴蜀　蜀地をさす、廣德元年十二月、吐蕃松・維・保の三州を陷る。【八】滔天　天にみなぎる、二字「尙書」堯典にみゆ。【九】風拔木　永泰元年三月辛亥、大風、木を拔く。【一〇】禿鷲　「はげたか」。【一一】鴻鵠　鴻は「おほとり」、鵠は白鳥の類。【一二】九度　九回。たびたびの意ならん。【一三】附書　手紙をひとにあつらへる。【一四】洛陽　卽ち故鄕。【一五】十年　天寶十四載より永泰元年まで。【一六】骨肉　洛陽にありし弟をさす。【一七】消息　たより。

【題義】起句の二字を切りとりて題とす、故鄕の弟を思ふことをのぶ。永泰元年三月草堂にての作。

【詩意】天のはてにをるこのおやぢはいまだに故鄕にかへることができず、日ぐれに東のかた大江にのぞんでなげくのである。隴右・河源の地方は戰亂のために田地にうゑつけができず、胡騎や羌兵がこの蜀までいりこんできた。また川水が出ておほきな濤は天にはびこり、大風は木を拔き、前には禿鷲が吹きとばされ、うしろには鴻鵠がとばされてゐる。自分はここのたびも他人に手紙をあつらへて洛陽へやつたが、十年ばかり兄弟からのたよりが無いのである。

莫相疑行

莫相疑行

男兒生無所成頭　男兒生れて成す所なく頭皓白、

【字解】【一】無所成　事業に於

皓白。

牙齒欲落眞可惜。　牙齒落ちんと欲す眞に惜むべし。

憶獻(二)三賦(三)蓬萊宮。　憶ふ三賦を獻ず蓬萊宮、

自怪一日聲(四)烜赫(五)。』　自ら怪む一日聲烜赫たりしを。』

(六)集賢學士如(七)堵墻。　集賢の學士堵墻の如し、

觀我(八)落筆(九)中書堂。　觀る我が筆を落す中書堂。

(一〇)往時(一一)文采動人主。　往時文采人主を動かす、

(一二)此日飢寒趨路旁。』　此の日飢寒路旁に趨る。』

(一三)晚將(一四)末契託年少。　晚に末契を將て年少に託す、

(一五)當面輸心背面笑。　當面には心を輸し背面には笑ふ。

(一六)寄謝(一七)悠悠(一八)世上兒。　寄謝す悠悠世上の兒、

(一九)不爭好惡(二〇)莫相疑。』　好惡を爭はず相疑ふこと莫れ。』

て成就するところのものなし。【二】獻三賦　三賦は朝獻太淸宮賦・朝饗太廟賦・有事於南郊賦、謂はゆる三大禮賦なり、文集にみゆ、大禮の行はれしは天寶十載に在る。賦を獻じたるは九載にあるならん。【三】蓬萊宮　大明宮の舊名。【四】聲　名聲。【五】烜赫　烜はひかりあきらかなり、赫は火のあかくてるさま。【六】集賢學士　集賢殿書院の學士、學士は五品以上の官、奉留贈集賢院崔于二學士詩　卷二の一三二頁をみよ、作者三賦を獻ぜしため、玄宗は之を奇なりとして集賢院に制を待たしめ、宰相に命じて文章を試みしめたり。事實についても上詩を參看せよ。【七】如堵墻　堵墻は土塀なり、衆人あつまりて人がきをつくるをいふ。【八】落筆　文章をかきおろすをいふ。【九】中書堂　中書省の內にある政事堂、そこが試驗場にあてられしなり。【一〇】往時　試驗せられし當時をさす。【一一】文采動人主　文章の彩が天子(玄宗)の心を動かした。上の留贈崔于二學士詩に、氣衝星象表、詞感帝王尊とあるをおもひあはすべし。【一二】此日　作詩の現在をさす。【一三】晚　晚年。【一四】末契託年少　年少の人人に對して交際のはしくれを託す、年少者の友列のはしに居るをいふ。【一五】當面一句　年少者等の態度をいふ、當面は面とむかつては、輸心とはこちらに對してまごころをいたすかのごとくなるをいふ、背面は「うしろむきになつては」、笑とはこちらをあざけりわらふこと。【一六】寄謝　言をよせおことわりをする。【一七】悠悠　はるかなる貌、遠くにゐてこちらとは無關心のさまなるをいふ。【一八】世上兒　世間のわかものども。【一九】不爭好惡　すききらひの爭ひをせぬ。【二〇】莫相疑　こちらを疑ふな、彼等と名利のとりあひをするかと疑ふ樣なことをするな。

【題義】詩篇の最後の三字を切りとりて題とす。詩は輕薄なる年少輩に作者の心中を疑ふものあるによりてその誤解をのぞくために作れり。蓋し幕府の中に相合はざるものありしなるべし。この事は已に上來詩篇の處處に見えたり。永泰元年の作ならん。

【詩意】男兒たるものがうまれてなにもしでかすことがなくして頭が白くなり、牙齒が落ちかかつてゐるといふのはまことに惜しむべきことだ。おもひおこす、自分はかつて蓬萊宮に於て三大禮の賦をたてまつつたことがある、あのときは一日のうちに自分の名聲がひかりかがやいたことは自分でふしぎにおもはれるほどであつた。』あのとき集賢殿の學士たちが人墻をつくつてわしが中書堂で文章をかきおろすのを見物してをつた。さきには文章の光彩が帝王の心をさへ感動せしめた自分がどうだ、こんにちは飢寒のために路傍にはしりつつあるのである。』年寄になつてわかものどもにまじつて交

際はしてゐるが、彼等は面とむかつては誠心をつくしてゐる樣だがかげではこちらをあざわらうてゐるのである。薄情な世間のわかものどもにもの申す、自分は決しておまへたちとすききらひの競爭をするものではないからこちらの心を疑はずにゐてもらひたい。』

赤霄行(一)

赤霄行

孔雀未知牛有角。　孔雀未だ知らず牛に角有るを、

渴飲寒泉逢觝觸(二)。　渴して寒泉に飲みて觝觸に逢ふ。

赤霄玄圃(三)須往來。　赤霄玄圃須らく往來すべし、

翠尾(四)金花(五)不辭辱(六)。　翠尾金花辱を辭せず。

江中淘河(七)嚇(八)飛燕。　江中の淘河飛燕を嚇す、

銜泥(九)卻落羞華屋(一〇)。　泥を銜むも卻つて落して華屋に羞づ。

皇孫(一一)猶曾蓮勺困(一二)。　皇孫猶は曾て蓮勺に困しめらる、

衞莊(一三)見貶傷其足(一四)。』　衞莊貶せられて其の足を傷ふ。』

老翁(一五)愼莫怪少年。　老翁愼みて少年を怪むこと莫れ、

葛亮(一六)貴和(一七)書有篇。　葛亮の貴和書に篇有り。

丈夫垂名動萬年。　丈夫名を垂るる萬年を動かす、

記憶細故(一八)非高賢。』　細故を記憶するは高賢に非ず。』

【字解】【一】赤霄　あかきそら、仙山のうつくしき空色。【二】觝觸　觝も「ふるる」なり、角でさはらるること。【三】玄圃　卽ち縣圃、崑崙山上にありと稱せらる、已にみゆ。【四】翠尾　くじやくのみどり毛の尾。【五】金花　くじやくの尾端の金紋をいふ。【六】辱　牛の角でふれらるることをはづかしめ。【七】淘河　鵜鶘といふ水鳥なり、「がらんちやう」、水に入りて魚を食す。【八】嚇　カツといひてをおどかす聲なり、食物を奪はれぬ豫防にする、「莊子」に鴟が鵷鶵を嚇するとみゆ。【九】銜泥　どろを口にくはへる。【一〇】羞華屋　うつくしき家の巣にかへりてはぢてなる。【一一】皇孫　漢の宣帝をいふ、宣帝は衞太子と史良娣との間に生れし人にて武帝の曾孫にあたる、因つて史皇孫と稱せらる。【一二】蓮勺困　宣帝は昭帝の時、なほ民間に居り、游俠を好み、嘗て蓮勺の鹵中に困しめらる。蓮勺は縣の名、長安の東、下邽縣の東二十三里にあり、鹵は鹽池をいふ。【一三】衞莊　衞莊は鮑莊に作るべし。【一四】見貶傷其足　「左傳」成公十七年にいふ、齊の國武子、靈公に相として鄭を伐つに會す、高無咎・鮑牽留守す、國武子還りて國門に入らんとするや門を閉ぢて客を索む、聲孟子、武子に訴へて曰く高・鮑將に君を納れざらんとすと、秋七月武子、鮑牽を刖りて高無咎を逐ふ。仲尼曰く、鮑莊子(卽ち牽)の智は葵にしかず、葵は猶ほ能く其の足を衞ると。見貶とは國武子よりしりぞけられしをいひ、傷其足とは足をきられしをいふ。【一五】老翁　自己をいふ。【一六】葛亮　諸葛亮字は孔明。【一七】貴和　晉の陳壽、諸葛亮集二十四篇をたてまつる、その第十一篇に「貴和」あり。【一八】細故　つまらぬことがら。

【題義】詩の中間の「赤霄」二字を切りとりて題とす。偉材を抱きて小人に困辱せしめらるるをなげきたり。永泰元年の作。

【詩意】孔雀がそのときまで牛に角のあることを知らなかつたが、のどがかわいたのでつめたい泉で水を飲まうとしたところが牛の角でつツつかれた。そんなことをされたところでくじやくは天の赤霄でも懸圃の仙山でも自由に往來すべきであつて翠尾、金花の美をもつてゐる身としては辱しめられて

もかまはぬ。ただ泥をふくんで飛ぶ燕は江のなかで魚をとりにきたかとおもはれて「がらんちやう」におどかされ、せつかくふくんだ泥をもおとしてうつくしい家のふる巣へかへつて來てはぢらうてをる。昔をながめると史皇孫と稱せられた漢の宣帝でも時節の到來せぬころには蓮勺の鹽池でひとにくるしめられたことがあり、齊の鮑莊子は智ゑがいたらぬために上官におとしめられ足さへそこなふにたちいたつた。(自分ばかりくるしめられるわけではない)。』老人よ、決して少年がどんなことをしかけたからとて怪むにはあたらない。諸葛亮の著書中にも「貴レ和」といふ篇があるではないか。丈夫たるものはその名を後世に垂れのこすにあたつては萬年の後までを感動さすのである。さほどの大人物がちつぽけな事がらを一一おぼえてゐるなどは高尚賢明なるもののなすことではないのである。』

聞高常侍亡(一)

高常侍が亡するを聞く

歸朝不相見(二)。蜀使忽傳亡(三)(四)。
朝に歸りしとき相見ず、蜀使忽ち亡を傳ふ。

虚歷金華省(五)(六)。何殊地下郎(七)。
虚しく金華省を歷たり、何ぞ地下の郎に殊ならん。

致君丹檻折(八)(九)。哭友白雲長(一〇)(一一)。
君を致して丹檻折れむ、友を哭すれば白雲長し。

獨步詩名在。秖令故舊傷(一二)。
獨步詩名在り、秖だ故舊をして傷ましむ。

【字解】【一】高常侍　左散騎常侍高適なり、適は廣德元年に蜀より召還せられ、刑部侍郎となり、左散騎常侍に轉じ、永泰元年正月卒し、禮部尙書を贈らる。【二】歸朝不相見　適が蜀より朝廷へかへりしときに面會せず、卷十三奉寄高常侍詩に別淚遙添錦水波といひしもの是なり。【三】蜀使　都から蜀へきたつかひ。【四】傳亡　適の死亡せしことをつたへる。【五】虚歷　そこの地をふみしも效をなすに至らざりしをいふ。【六】金華省　漢の未央宮の白虎殿の右にありし省の名、祕府の圖書を藏す。「漢書」の班固が敍傳にいふ、成帝の時、王鳳、班伯を薦む、伯容貌美麗、帝召し見て宴暱す、誦說、法有り、拜して中常侍となす、時に帝まさに學に嚮ひ、鄭寬中・張禹、朝夕入りて尙書・論語を金華殿中に說く、伯に詔してこれを受けしむと。詩は金華省を門下省にあてて用ひしならん、左散騎常侍は門下省に屬し正三品下にして過失を諷規し、侍從顧問をつかさどる。【七】地下郎　王隱が晉書にいふ、蘇韶、中牟の令となり卒す、そのいとこ節といふもの夢に韶を見しに韶言ふ、顏回・卜商は今現に修文郎たりと。地下郎は地下の修文郎の義、修文郎は文章を作る郎官。【八】致君　君を堯舜の上に致すをいふ。【九】丹檻折　漢の朱雲が故事、成帝の時朱雲、尙方の斬馬の劍を請うて佞臣安昌侯張禹を斬らんといふ、帝怒る、御史、雲をひきゐて殿より下らしめんとす、雲、殿檻を攀ぢ、檻折る、雲呼ばつて曰く、臣、下、龍逢・比干に從つて地下に遊ぶことを得ば足れり、未だ聖朝の何如なるやを知らざるのみ、と。高適が君を直諫すること朱雲のごとくなるべきをいふ、適は地方官として江東の利害を陳し、西山三城の戍について上疏したり、故に中央に入りても直言せんことを豫期せしなり。【一〇】哭友　友とは適をさす。【一一】白雲長　彼我の間に雲の遠くよこたはるをいふ。【一二】故舊　舊友、主として自己をさす。

【題義】親友左散騎常侍高適が死をききてよめる詩。此篇は原注に「忠州作」とありて忠州にての作のごとく傳へらるるも正月の卒を六月に始めて聞くごときはありうべからざることにして且つ詩に蜀使忽傳レ亡(忠州作とする者は蜀使を蜀から忠州への使者としてとく)とあれば蜀にて亡をききたるにて、永泰元年成都を去らざる時の作なるべし、仇氏、黃鶴により永泰元年成都作とす、今之に從ふ。

【詩意】君が朝廷へ召されかへつたときには自分は面會をしなかつたが、中央から蜀への使者は忽ち君の亡くなつたことをつたへてきた。君は金華省にのぼつたといふだけでまだ何もしてはゐない、古人が地下の修文郎となつたといふが君はそれとおなじことだ。君がいきてゐたなら定めし吾が聖天子を堯舜の上に致し、そのためには朱雲のごとく御殿のあかいてすりまで折つたことであらうに、をしいことにはいまは君を哭すればいたづらに白雲が遠くよこたはるのみだ。さうして天下獨歩の君の詩名だけが存在して、ただ我等舊友をして哀傷せしめるのである。

去蜀【一】

蜀を去る

五載客蜀郡【二】。一年居梓州【三】。
五載蜀郡に客たり、一年梓州に居る。

如何關塞阻【四】。轉作瀟湘【五】遊。
如何ぞ關塞に阻せらるる、轉じて瀟湘の遊を作す。

萬事已黃髮。殘生隨白鷗。
萬事已に黃髮、殘生白鷗に隨はむ。

安危大臣在。不必淚長流。
安危には大臣あり、必ずしも淚長に流れしめず。

【字解】【一】去蜀　蜀は蜀の郡、即ち成都をいふ、成都よりたち去らんとするをいふ。【二】五載客蜀郡　蜀郡とは蜀郡の治所、成都をさす、五載とは上元元年二年、寶應元年、廣德二年、永泰元年なり、作者乾元二年の季冬に成都に到りしも其年は一年とかぞへざるなり。【三】一年居梓州　廣德元年の一箇年をさす。【四】阻　阻隔されてゐること。【五】瀟湘　湖南省の洞庭湖の南にある川、これは荊州を經てそこへゆかんとするをいふ。

【題義】ながなが住みし蜀の成都よりたち去らんとてよめる詩。永泰元年の夏、まさに戎州渝州に向はんとせし頃の作。

【詩意】自分は五箇年のあひだ蜀郡に旅客となり、一箇年のあひだ梓州でくらした。どうしていつまでもこんな處で關塞のなかにとぢこめられてゐるのか、これから方向をかへて南方瀟湘の地方へ遊ばうとおもふのだ。髮のけがかく黃色になつては萬事はおしまひだ、これからの老いさきは白い鷗にしたがうてすごすのだ。國家安危の重大事については當局者たる大臣がをらるることであるし、自分みた樣なものがしじう淚を流してゐるにもあたるまい。

喜雨【一】

雨を喜ぶ

南國旱【二】無雨。今朝江【三】出雲。
南國旱にして雨なし、今朝江雲を出す。

入空纔漠漠【四】。灑【五】迥已紛紛【六】。
空に入りて纔に漠漠たるに、迥なるに灑ぎて已に紛紛たり。

巢燕高飛盡。林花潤【七】色分。
巢燕高飛し盡くし、林花潤色分る。

晚來聲不絕。應得夜深聞。
晚來聲絕えず、應に夜深にも聞くことを得るなるべし。

【字解】【一】南國　蜀をさす。【二】旱無雨　永泰元年春より雨ふらず、四月己巳にはじめて雨ふると。【三】江　錦江。【四】漠漠　ひろくつらなる貌。【五】灑迥　はるかなる地にそそぐ。【六】紛紛　みだるるさま。【七】潤色分　潤色はうるほへる色、分とは濃淡のわかるるをいふ。

【題義】雨のふりたるをよろこびてよめる詩。永泰元年四月成都にての作なるべし。

【詩意】南方蜀地はひでりで雨がなかつたが、けさは江から雲がわきだした。その雲が空に入つてやつとひろがつたかとおもふとはやくも遠いところまで雨が紛紛とみだれそそぐ樣になつた。巢にゐた燕はみんな高くとんでいつてしまひ、林の花はうるほひをおびて濃淡の色がはつきりついた。夕方になつても雨のおとはたえないから、そのおとは夜深にもきけることだらう。

宿青溪驛(一)奉懷張員外十五兄之緒(二)
青溪驛に宿して張員外十五兄之緒を懷ひ奉る

漾舟千山內。日入泊枉渚(三)。　舟を漾はす千山の內、日入りて枉渚に泊す。
我生本飄飄。今復在何許(四)。　我が生本飄飄たり、今復た何の許にか在る。
石根青楓林。猿鳥聚儔侶。　石根の青楓林、猿鳥儔侶を聚む。
月明遊子靜。畏虎不得語。　月明かにして遊子靜なり、虎を畏れて語ることを得ず。』
中夜懷友朋。乾坤此深阻(五)。　中夜友朋を懷ふ、乾坤此に深く阻せらる。
浩(六)蕩前(七)後間。佳(八)期赴(九)荊楚。』　浩蕩たり前後の間、佳期荊楚に赴く。』

【字解】【一】青溪驛　嘉州犍爲縣にあり。【二】張員外十五兄之緒　張之緒は姓名、李輔國がために蜀へ流されたものの一人なり、員外とあれば某省の員外郎ならん、十五は排行。【三】枉渚　まがれるなぎさ。【四】何許　いかなるところ。首の八句は溪に宿せし情景をのぶ。【五】此深阻　此とは青溪驛の地をさす、深阻とは千山のうちにふかくとぢこめられてゐるをいふ。【六】浩蕩　志氣流放の貌、こころのひろく大きくうごくさま。【七】前後間　作者飄泊しつつあるゆゑ、前にも後にも張と相見ることを得ざるをいふ。【八】佳期　佳と期するなり、佳人と期會するをいふ、文字は「楚辭」九歌にみゆ、佳人は張をさす。【九】赴荊楚　仇注に張は時に荊楚に在り、作者も往きて之と會せんとするなりといへり。赴字一に付に作る、付ならば荊楚にての會合のときにするといふこと。

【題義】青溪驛といふところにとまつたとき、張之緒をおもうて之によせた詩。永泰元年夏、作者已に成都を離れて江を下り嘉州にありしときの作。

【詩意】千山のむらだつあひだに舟をただよはせ、日が沒してから曲つたなぎさにとまる。自分の生活はもとからふわふわただようてゐるのだが今はまたどんなところにゐるか。がけの石根に青楓の林があつて猿や鳥がなかまをあつめてゐる。月は照りわたつてたびびとたる自分の身はいと靜かにしてをる、なぜかといへば虎がでるのでこはいから話をすることもできぬのである。』夜なかごろになつてはともだちであるあなたのことをおもふ。自分は天地のあひだに於てこんなところに山ふかくとぢ

こめられてをるのだ。あなたとは前後ともおめにかからぬので自分のこころはとりとめもなくうごいてゐるが、いま荊楚の地に赴くのだからいづれはあなたと會合することになる。（或は「あなたとの會合は荊楚についたときにする」）』

(一)狂歌行贈四兄(二)　狂歌行、四兄に贈る

(三)與兄行(四)年校(五)一歲。　兄と行年校するに一歲、
賢者是兄愚者弟。　賢者は是れ兄愚者は弟。
兄將富貴等浮雲。　兄は富貴を將て浮雲に等しくす、
弟竊功名好權勢。』　弟は功名を竊んで權勢を好む。』
長安秋雨十日泥。　長安の秋雨十日泥あり、
(六)我曹鞴(七)馬聽晨雞。　我が曹馬を鞴ひて晨雞を聽く。
公卿朱門未開鎖。　公卿の朱門未だ鎖を開かず、
我曹已到肩相齊(八)。』　我が曹已に到りて肩相齊し。』
(九)吾兄睡穩方舒膝。　吾が兄睡り穩かにして方に膝を舒ぶ、
不襪(一〇)不巾(一一)踏(一二)曉日。　襪せず巾せず曉日を踏む。
男啼女哭莫(一三)我知。　男啼き女哭するも我を知る莫し、
(一四)身上須(一五)緖腹中實(一六)。』　身上には緖を須ち腹中には實。』
(一七)今年思我來嘉(一八)州。　今年我を思ひて嘉州に來る、
嘉州酒(一九)重花繞樓。　嘉州酒重く花樓を繞る。
樓頭喫(二〇)酒樓下臥。　樓頭酒を喫して樓下に臥す、
長歌短咏迭(二一)相酬。』　長歌短咏迭に相酬ゆ。』
(二二)四時八節(二三)還拘(二四)禮。　四時八節還た禮に拘はる、
(二五)女拜(二六)弟妻(二七)男拜弟(二八)。　女は弟が妻を拜し男は弟を拜す。
(二九)幅巾鞶(三〇)帶不掛身。　幅巾鞶帶身に掛けず、
頭脂(三一)足垢(三二)何曾洗。』　頭脂つき足垢つくも何ぞ曾て洗はむ。』
吾兄吾兄巢許(三三)倫。　吾が兄吾が兄巢許の倫、

【字解】【一】狂歌　古道を進取するを狂といふ、狂者の意をうたふを以て狂歌といふ、精神の錯亂せる情意をいふにはあらず。【二】四兄　四は排行、兄は從兄の列にある人をいふ。【三】與兄　兄は四兄をさす以下同じ。【四】行年　歷年なり。【五】校　較に同じ、くらぶること、首四句は二人性情のちがひをいふ。【六】我曹　我等。【七】鞴馬　鞴は馬を裝束することなり、或は曰く馬を車につけることなりと、前說による。【八】肩相齊　かたがそろうてならぶ。【九】吾兄　四兄。【一〇】襪　くつした。【一一】巾　頭巾。【一二】踏曉日　あさひの光をふんで散步する。【一三】莫我知　我は男女に就きていふ、男女のがはより「我」といふ、こちらからいへば「彼等」といふことなり。【一四】身上・腹中　男女らの身上・腹中「身上」の句は「啼哭」の句の說明なり。【一五】須緖　須は必要とすること、緖は「きぬ」。【一六】實　實は充實すること、腹中いつぱいに食物をとること、腹中實は腹中須レ實といふ語法なり。以上は長安時代のさまを追敍す。【一七】今年　永泰元年。【一八】嘉州　今の四川省嘉定府樂山縣治、唐の時は嘉州犍爲郡といふ、資州及び眉州を隔てて成都の正南にあたりて

一生喜怒長任(三四)眞。　一生喜怒長く眞に任す。
日斜枕(三五)肘寢已熟(三六)。　日斜に肘を枕して寢ぬること已に熟す、
啾(三七)啾喞喞爲(三八)何人。』　啾啾喞喞たるは何人とか爲す。』

位す、作者江を下り三峽に向はんとして此の州を經たるなり。【一九】酒重　重とは濃きことをいふか。作者に重碧拈春酒の句あれば重碧の色をいふか。一本に重を香に作る、疑ふらくは重は香字の訛ならん。【二〇】喫・臥　四兄が喫し臥するなり。【二一】迭相酬　歌詠のとりやりをする。【二二】四時　春夏秋冬。【二三】八節　冬至・夏至・春分・秋分・立春・立秋・立夏・立冬。【二四】拘禮　禮儀に拘束せらるる。【二五】女　四兄のむすめ、作者のめひ。【二六】弟妻　作者の妻。【二七】男　四兄の男兒。【二八】弟　作者。【二九】幅巾　頭を卷く一幅のきれ。【三〇】鞶帶　はばびろの革おび。【三一】膩　あぶら。【三二】垢　あか。以上は嘉州にての近事をのぶ。【三三】巢許倫　巢父・許由・のともがら、二人は古代の隱者なり。【三四】任眞　ありのままにする。【三五】枕肘　ひぢをまくらにしてねる。【三六】熟　よくねること。【三七】啾啾喞喞　いびきをかく音、ぐうぐうといふこと。【三八】爲何人　いかなる人とかなす、だれでもない吾が四兄だといふこと。以上は四兄の凡俗を超脱せることをのべて結びとす。

【題義】古狂者の意をうたうて第四從兄某に贈つた詩。永泰元年夏、嘉州にての作。

【詩意】吾が四兄と自分と經過した年齡をくらべると一歳違ひだが、賢いものが兄で愚なものが弟だ。兄は富貴を浮雲のごとく輕きものに見てゐるが、弟は功名をねらつて權勢をうることを好んでゐる。』長安の秋の雨のときには十日も泥がかわかぬ、そのとき我我はあさの雞のこゑをきいて馬をかざつてでかける用意をする。公卿の朱くぬつた門はまだ錠をあけないのに、我我のなかまはもはや到着して肩をそろへてゐる。』そのころ吾が兄はどうかといふとやつとおだやかに睡りが足つたとみえて膝をのべ、くつしたもはかず頭巾もかぶらず朝日をうけて散歩する、男の子や女の子が身にはきぬがいるし、腹のなかはいつぱい物をつめる必要があるので啼いたり哭したりするが、彼等がそんなにしてゐることなどはとんと御承知はない。』この四兄は今年は自分をしたうて嘉州へ來られた。嘉州は酒が香ばしく花が樓をめぐつてさいてゐる。兄は樓頭で酒をたべて樓下で臥る、さうして自分と長歌短詠のとりやりをするのである。』それでも四時八節のめでたい日には禮儀を守られ、むすめには自分(作者)の妻を拜せしめ、男の子には自分を拜せしめられるが、御本人は幅巾も鞶革も身につけず、頭には脂つき、足には垢がついてゐるが洗つたりするものではない。』ああ、吾が兄よ、吾が兄よ、あなたはむかしの許由・巢父のともがらで、一生涯のあひだ喜ぶも怒るもいつもありのままにされる人である。日がかたむけばはやひぢ枕をしてぐつすりと寢こみ、ぐうぐうすうすういうてゐる人はだれか、ほかならぬ吾が兄その人である。』

宴戎(一)州楊(二)使君東(三)樓

戎州の楊使君が東樓に宴す

勝(四)絕驚身老(五)。情忘發(六)興奇。　勝絕えて身の老ゆるに驚き、情忘れて興の奇なるを發す。
座從歌妓密(七)。樂(八)任主(九)人爲。　座は從す歌妓の密なるに、樂は任す主人の爲さしむるに。

重碧(一〇)拈(一一)春酒。輕紅(一二)擘(一三)荔枝(一四)。　重碧春酒を拈り、輕紅荔枝を擘つ。

樓高欲愁思。橫笛未休吹。　樓高くして愁思せむと欲するに、橫笛未だ吹くことを休めず。

【字解】【一】戎州　四川省敍州府宜賓縣なり、唐の戎州僰道縣、嘉州よりは下流にあたる。【二】楊使君　州の刺史楊某、使君は刺史の敬稱。【三】東樓　城の東樓。【四】勝絕　他に無きすぐれた風景。【五】情忘　苦樂の情をわすれる。【六】漫興奇　奇興を發すといふにおなじ、奇興は常ならぬ興味。【七】密　密接してすりよつてすわる。【八】樂　音樂をいふ。舊注に音洛とし、たのしむ義となせども、他詩の樂助長歌逸、杯饒旅思寬などあるをおもひあはすに音樂をいふなるべし。【九】主人　楊君。【一〇】重碧　こきみどり、酒の色をいふ。【一一】拈　とる、指にて物を取ること、杯をつまみとるをいふ。【一二】輕紅　うすくれなゐ、荔枝の色。【一三】擘　わかつ、皮をひきさくをいふ。【一四】荔枝　「らいちい」の實、龍眼肉と似た果物、酒の下物とするなり、この果物は六月頃熟す。

【題義】戎州の城の東の樓で刺史楊某君が宴にあづかつたときよめる詩。永泰元年六月頃下江のをりの作。

【詩意】とびぬけた風景なので老の身に驚かれ、すべての感情をうちわすれてただ平生におぼえぬ興味をおこす。年よりだで歌妓がすりよつてすわる、それもよからう。音樂も主人の命じて奏せしむるがままにまかせる。杯をつまんではこい碧の春酒をのみ、皮をひきさいてはうす紅の荔枝をさかなにする、(まことにおもしろい)、ただ樓が高いのでながめるうちに愁の思ひがおこらうとするが、橫笛はまだやまず吹きならされてをる。

渝州(一)候(二)嚴六侍御(三)不到(四)。先下峽(五)　渝州にて嚴六侍御を候するに到らず、先づ峽を下らむとす

聞道乘驄(六)發。沙邊待至今。　聞道驄に乘じて發すと、沙邊待ちて今に至る。

不知雲雨散(七)。虛費短長吟(八)。　知らず雲雨の散せしことを、虛しく費す短長の吟。

山帶烏蠻(九)闊(一〇)。江連白帝(一一)深。　山は烏蠻の闊なるを帶び、江は白帝に連りて深し。

船經一柱觀(一二)。留眼(一三)共登臨。　船一柱觀を經ば、留眼共に登臨せむ。

【字解】【一】渝州　今の四川省重慶府なり、戎州よりは更に下流にあたる。【二】候　まつこと。【三】嚴六侍御　侍御史嚴某、六は排行。【四】不到　嚴がこぬこと。【五】下峽　峽は三峽、下とは作者がくだるをいふ。【六】乘驄　驄は白馬、漢の桓典侍御史となりつれに驄馬に乘る、つひに故事として用ひらる、已に屢〻みゆ。【七】雲雨散　別離にたとへていふ。【八】短長吟　短吟、長吟すること。【九】烏蠻　巂州嶲山の地は諸蠻部に接す、蠻に烏蠻・白蠻あり、これは南詔(今の雲南地方)あたりをさしていふ。【一〇】闊　ひろし、作者の用語として「遠き」を意味す。【一一】白帝　城の名、後漢の公孫述の築く所、四川省夔州府にあり、渝州より下流にあたれり。【一二】一柱觀　荆州にあり、已に屢〻みゆ、「所思」詩卷十の三九二頁をみよ。【一三】留眼　眼は「看ること」をいふ、「看を留むる」とはみるべきものをみずにのこしておくをいふ、嚴が到るを待ちてはじめてみんとするなり。

【題義】渝州で侍御史嚴君がくるかこぬかとまつてゐたがこぬので、自分はひとあしさきに三峽から江をくだるつもりだ。永泰元年夏、下江の際の作。

【詩意】きけばあなたは驄馬に乘つて出發されたさうだが、自分は沙邊に船をとどめて今まであなたを待つてゐた。さうして自分はお互が雲雨の飛び散るごとく別れてしまつたことにきづかずに、徒らに短吟長吟をしてゐたのである。(前途をみると) 山は烏蠻の居る遠きところまでをおびてをり、江水は白帝城の方までつらなつて深くよこたはつてゐる。自分の船がもし一柱觀のところをとほつたならば、眺望をさしひかへてあなたが到着されるのを待つてごいつしよに觀に登臨しようと思つてゐる。

撥悶

悶を撥ふ

聞道雲安麴米春。　聞く道雲安の麴米春、
纔傾一盞卽醺人。　纔に一盞を傾くれば卽ち人を醺せしむと。
乘舟取醉非難事。　舟に乘じ醉を取るは難事に非ず、
下峽銷愁定幾巡。　峽を下り愁を銷するに定めて幾巡ぞ。
長年三老遙憐汝。　長年三老遙に汝を憐む、
捩柁開頭捷有神。　捩柁開頭捷神有り。
已辦青錢防雇直。　已に靑錢を辦じて雇直を防ぐ、
當令美味入吾脣。　當に美味をして吾が脣に入らしむべし。

【字解】【一】撥悶　もだえをはらふ。【二】雲安　今夔州府雲陽縣。【三】麴米春　酒の名、唐人多く酒名に春の字を用ふ、抛青春・土窟春・石凍春・松醪春・燒春の類是なり。【四】盞　さかづき。【五】醺　ゑふ、よはせること。【六】幾巡　數回、酒を酌む度數をいふ。【七】長年三老　峽中の土語にて篙師のことを長年、柁工のことを三老といふ、と。【八】遙憐汝　遙とは忠州は夔州よりずつと手前なればいふ、汝は麴米春をさす。【九】捩柁　「かぢ」をもぢる、かぢをあつかふことをいふ、これは柁工の爲す所なり。【一〇】開頭　船頭の進路をひらく、これは長年の爲す所なり。【一一】捷有神　不思議の力あるほどはやい。【一二】辦　具ふること。【一三】青錢　青銅でつくりし錢。【一四】防雇直　防とは準備するをいふ、彼が請求するにあたりて之を防ぐには準備せる錢を以てするなり、雇は舟賃、直は酒資をいふ。【一五】美味　うまいあぢのもの、麴米春をさす。

【題義】ゆくさきで飲めるうまい酒のことを豫想して胸中のもだえをはらうた詩。永泰元年六月、忠州にての作なりといへり、忠州は渝州より又更に下流に在り。

【詩意】雲安の麴米春といふ酒は一盃のめばすぐ人をよはせるといふことだが、舟に乘りながら醉をとることはむづかしいことではない、峽を下りながらうさばらしするためには定めし數回のまねばなるまい。長年も三老もうとほくから汝(酒)を愛してをり、早く飲まうとおもうて船頭を開くにも柁をあやつるにもすばやいこと非常なものだ。自分は舟賃、酒資を支拂ふためにちやんと青銅錢が用意してあるから、はやううまいやつをわしの脣へいれさせてくれ。

宴忠州使君姪宅

忠州の使君姪が宅に宴す

出守吾家姪。殊方此日歡。　出でて守たり吾が家姪、殊方此の日歡ぶ。

自須遊阮舍。不是怕湖灘。　自から須らく阮舍に遊ぶべし、是れ湖灘を怕るるならず。
樂助長歌逸。杯饒旅思寛。　樂は助く長歌の逸なるを、杯饒にして旅思寛なり。
昔曾如意舞。牽率強爲看。　昔曾て如意の舞をなす、牽率强ひて爲して看る。

【字解】【一】忠州使君姪　忠州は四川省忠州。重慶府の東北・夔州府の西南に位す。使君は刺史の敬稱、姪は作者の「かひ」にあたる人なるをいふ。【二】出守　守は太守、漢代の郡の長、唐の刺史にあたる、古官職の名を用ふ。【三】吾家姪　杜家の姪。【四】殊方　他の土地。【五】阮舍　竹林七賢の一人阮籍が姪を阮咸といふ、阮舍は阮咸がいへなり、以て刺州姪が宅をさす。【六】湖灘　夔州府萬縣の西六十里に在る危險の場所の名、忠州より東にありてゆくてにあたる。【七】樂　音樂。【八】長歌逸　長歌は作者がふしながくうたふなり、逸は歌の閒逸なるさま。【九】杯饒　饒は「ゆたか」、杯量の大なるをいふ。【一〇】寛　ゆるやか、くつろぐ。【一一】昔曾　作者壯年のころをいふ。【一二】如意舞　晉の王戎、如意の舞をなす、鐵如意をとりてまふまひなり、仇氏は王戎は王導が姪なれば舞は刺史姪が爲すなりといへるも余は從はず。【一三】牽率　牽引におなじ、ひつぱられての意、座興にひきずられるをいふ。【一四】强爲　むりに舞ひをする。

【題義】忠州の刺史である姪の宅で酒宴をしたことをよめる詩。永泰元年夏、下江の際の作。

【詩意】吾が杜家から筋をひいてゐる姪は中央より出でてこの忠州の長官になつてをるので、他郷ながらけふはここでたのしみをする。叔父の關係にあたる自分としては自然阮咸にも比すべきをひのうちで遊ぶべきである。あへて前途に湖灘の難場所があるためそれをこはがつてここにとどまるわけではない。自分がのどかに歌をうたへば音樂はそれを助けてくれるし、杯が大きく十分飮めるからたびごころがくつろぐ。たうとうそれにひきずられて自分はむかし如意の舞をしたといふところから、けふもまたむりにそれをしてみるのである。

禹廟

禹廟空山裏。秋風落日斜。　禹廟空山の裏、秋風落日斜なり。
荒庭垂橘柚。古屋畫龍蛇。　荒庭橘柚垂れ、古屋龍蛇を畫く。
雲氣生虛壁。江聲走白沙。　雲氣虛壁に生じ、江聲白沙に走る。
早知乘四載。疏鑿控三巴。　早く知る四載に乘じて、疏鑿三巴より控せしを。

【字解】【一】禹廟　夏の禹王を祀つた廟、忠州臨江縣の南、岷江を過ぐること二里、江の南岸屛風山に在り。【二】荒庭　あれたる廟のにわ。【三】垂橘柚　だいだい・ゆずの實が枝からたれてゐる。【四】古屋　屋といへど屋壁をいふなり。【五】虛壁　虛谷の崖壁。【六】江聲　揚子江の流るる水おと。【七】白沙　江岸の沙。【八】早知　禹の事蹟につきとつくに之を知つてゐた。【九】乘四載　「史記」の夏本紀によれば、禹は陸行には車に乘り、水行には船に乘り、泥行には橇(そり)に乘り、山行には檋(かんじき)に乘りたりといひ、「尙書」益稷篇の予乘四載の孔傳には、水には舟に乘り、陸には車に乘り、泥には輴(そり)に乘り、山には樏(かんじき)に乘る、といへり。【一〇】疏鑿　疏は通なり、江の水はきをつけること、鑿は山などがちて穴をあけるをいふ。晉の郭璞が江賦に、巴東之峽、夏后疏鑿とあるにもとづく。【一一】控　班固が西都賦に、控引淮湖、與海通波とみゆ。控は水を引くをいひ、蓋し「禹貢」の岷山導江の導の字の意に用ふ。【一二】三巴　後漢末蜀の劉璋、巴を分ち、永寧を以て巴

東郡と爲し、墊江を巴郡と爲し、閬中を巴西郡と爲す、是を三巴と爲す。

【題義】忠州の禹廟に謁してよめる詩。永泰元年秋、下江の際の作。

【詩意】人もなき山のなかに禹の廟があつて、いまは秋風のをりに夕日が斜にさしてゐる。荒れた庭には橘柚の實が垂れさがり、ふるぼけた屋壁には龍蛇が畫いてある。廟外では虛谷の崖壁に雲氣がわきおこり、白き沙岸には江流の聲がとどろきつつはしつてゐる。禹が洪水を治めるため四種ののりものに乘つて、江山の疏鑿をやり、三巴の方面から水をみちびいたといふことは自分はつとに知つてゐたのだが、ここに來てまのあたりその遺蹟を見るのである。

題忠州龍興寺所居院壁

忠州龍興寺の居る所の院壁に題す

忠州三峽(一)內。井邑(二)聚雲根(三)。　忠州は三峽の內、井邑雲根に聚る。
小市常爭(四)米。孤城早(五)閉門。　小市常に米を爭ふ、孤城早く門を閉づ。
空看過客(六)淚。莫覓主人(七)恩。　空しく看る過客の淚、覓むる莫れ主人の恩。
淹泊(八)仍愁虎。深居賴獨園(九)。　淹泊仍は虎を愁ふ、深居獨園に賴る。

【字解】【一】三峽內　三峽には諸說あり、上流よりかぞへて夔峽（瞿唐峽）・巫峽・西陵峽（宜昌の西にあるもの）の三つをいふと爲す說よろしきに似たり。內とは下流の方を峽外とし、上流ほど內とす、忠州は夔峽よりさらに上流なれば內なり。【二】井邑　井は田地九百畝を九等分せる經界を意味するもここは街衢の條理をいふなるべし、邑は縣をいふ。井邑にて縣城の人家をさす。【三】雲根　崖壁のもとをいふ、雲の生ずる所なればなり。【四】爭米　米を買はんとあらそふ。【五】早閉門　はやく城門をしめる、盜賊をふせぐなり。【六】過客　作者自己をいふ。【七】主人　刺史姪をいふ。【八】淹泊　ひさしくとまつてゐる。【九】獨園　給孤獨が園、寺をいふ、已にみゆ。ここは龍興寺をさす。

【題義】忠州の龍興寺の寓居のおくざしきの壁にかきつけた詩。永泰元年忠州にての作。

【詩意】忠州は三峽の奧にあつて縣城の人家が崖壁のもとに聚つてゐる。ちひさい市場でいつも人が米を買はんと爭うてゐるし、山のなかのひとつ城で夕方は早くから城門を閉ぢてしまふ。ここへきてもたびびとたる自分はいたづらに淚をながす、土地の主人（姪）の世話にならうなどとはしてはならぬよ。滯在してゐるまにも虎のおそれがあるので、ひつこんでお寺にたよつてゐるのである。

哭嚴(一)僕射歸櫬(二)

嚴僕射が歸櫬を哭す

素幔(三)隨流水。歸舟(四)返舊京(五)。　素幔流水に隨ふ、歸舟舊京に返る。
老親(六)如宿昔(七)。部曲(八)異平生。　老親宿昔の如し、部曲平生に異なり。
風送蛟龍匣(九)。天長驃騎(一〇)營(一一)。　風は送る蛟龍匣、天は長し驃騎の營。

一(一二)哀三(一三)峽暮。遺(一四)後見(一五)君情。　一哀三峽暮る、遺後君が情を見る。

【字解】【一】嚴僕射　嚴武なり、武は永泰元年四月卒す、年四十、尙書左僕射を贈らる。【二】歸櫬　成都の方から故郷へかへる棺、櫬。【三】素幔　しろきまんまく、棺を護送する舟なれば白きまくをはる。【四】歸舟　故郷へとかへるふね。【五】返舊京　舊京は長安、これは長安の方へとかへることをいふ。嚴武は華州華陰縣の人、華陰は長安より東にあり。【六】老親　武卒せしとき老母なほ生存せり。【七】宿昔　むかし。【八】部曲　軍の小隊。【九】蛟龍匣　匣とは死者にきせる衣にして鎧のごとくおどしてあみたるものなり、それに金の綫を以て蛟龍鸞鳳龜麟などの模様がつけてある。【一〇】天長　天は遠しといふこと。【一一】驃騎營　驃騎は漢の驃騎將軍霍去病、以て武に比す、驃騎營とは武が成都の節度使の陣營をいふ。【一二】一哀　ひとたびかなしむこと、「禮記」檀弓上篇・曾子問篇に一哀の文あり。【一三】三峽　前篇をみよ。【一四】遺後　舊解に身後なりといへり。案ずるに遺後とは靈櫬を哭送して一人あとにのこるをいふなり。「そこに遺されたあとになりては」の意、漠然と武の死後といふには非ざるなり。【一五】見君情　君は武をさす、情とは在世當時の平生の情愛をいふ。

【題義】長安近き故郷の華陰縣に歸葬するために左僕射嚴武の靈柩が忠州を舟でとほつたのを哭した詩。永泰元年忠州にての作。

【詩意】流水にそうて素い幔をはつた舟がゆく、それは長安の方へかへらうとする嚴僕射の靈柩をのせた舟である。おとしよりの母堂はむかしのままのすがたでござるが、部下の分隊はありし世のさまとはちがつてさびしくなつてゐる。金線の蛟龍の模様ある葬衣を風は吹き送る。節度府のあたりをみやればいたづらに天がとほくよこたはつてゐる。自分は一哀をつくしてゐるあひだに三峽のそらがくれかかる。かはべりにあとにとりのこされた自分は永久に君のすがたをみることはできず、ただただ君の世にありしときの情愛がありありとみらるるばかりである。

旅夜書懷

細草微風岸。危檣(一)獨夜(二)舟。(三)
星垂平野闊。月湧大江流。
名豈文章著。(四)官應老病休。(五)
飄飄何所似。天地一沙鷗。(六)

旅夜懷を書す

細草微風の岸、危檣獨夜の舟。
星垂れて平野闊く、月湧きて大江流る。
名豈に文章に著はれむや、官は應に老病に休すべし。
飄飄何の似たる所ぞ、天地一沙鷗。

【字解】【一】危檣　たかきほばしら。【二】獨夜　ただひとりのよる、家族其の他みなねしづまりしなり。【三】舟　自己ののれるふね。【四】文章著　著は名をあらはすこと、豈著とは謙遜の辭。【五】老病休　老病のときに於ては退休する。【六】沙鷗　沙邊のかもめ。

【題義】たびの夜舟がかりしておもひをかきしるす。永泰元年秋、忠州より下江せし際の作。

【詩意】ほそい草のはえたかは岸にかすかな風が吹く。たかいほばしらをたてた舟にただひとり寢ずにゐる。ずつとひろがつた野はらに星の光は垂れさがつてをり、大江の流るるうへに月の光が湧いてゐる。どうして自分ごときものが文章のうへで名があらはれようぞ。自分の樣な老いかつ病んだ身で

は官職から退いて休むのがあたりまへだ。自分のただようてゐる境遇はいかなるものに似てゐるかといへば、それは天地のあひだにおけるひとつの沙鷗だ。

放船

船を放つ

收帆下急水。卷幔逐回灘。
帆を收めて急水を下り、幔を卷きて回灘を逐ふ。

江市戎戎暗。山雲淰淰寒。
江市戎戎として暗く、山雲淰淰として寒し。

荒林無徑入。獨鳥怪人看。
荒林入るに徑なく、獨鳥人を怪みて看る。

已泊城樓底。何曾夜色闌。
已に泊す城樓の底、何ぞ曾て夜色闌ならむ。

【字解】【一】放船　江流にふれをだしたこと。【二】收帆　ほをとりかたづける、風なきなり。【三】卷幔　まくを卷く、日光にてらさるる心配なきなり。【四】逐　俗用にては追ひつつ進む義とす。【五】回灘　うねりまがつたはやせ。【六】江市　かはぞひの市街。【七】戎戎　「詩」の何彼襛矣篇の毛傳に襛猶戎戎のごとしとあり、盛なる貌とす、ここは市街の晩煙のさかんなるさまをいへり。【八】淰淰　「禮記」の禮運篇に、龍以爲畜、故魚鮪不淰とみゆ、鄭注に淰の言たる閃なりといへり、「閃く」とは驚散するをいふ、ここは雲の散じて去來定まらざるさまをいへり。【九】無徑入　害生して入らんとしても入るべきみちなし。【一〇】怪人看　山中の鳥なれば人の來るをあやしむ。【一一】城樓　雲安の城樓か。

【題意】江流に船をはなつてくだりしことをのぶ。永泰元年、雲安にむかつて下江の際の作。

【詩意】帆をかたづけて急なかはをくだり、幔を卷いてうねつた灘をつぎつぎ追うてすすむ。經過する江ぞひの市街には晩煙がさかんにおこつて暗く、山からおこる雲は去來定まらずに寒さうである。はいるべきこみちもない樣な荒林があつたり、なにをしにきたかといふ樣にこちらをあやしんでみてゐる一羽の鳥などもある。やがて城樓のもとにとまつてみるとまだ夜はふけてゐない。(はやくくだつたものだ)

雲安九日鄭十八攜酒陪諸公宴

雲安の九日に鄭十八酒を攜ふ、諸公の宴するに陪す

寒花開已盡。菊蘂獨盈枝。
寒花開くこと已に盡く、菊蘂獨り枝に盈つ。

舊摘人頻異。輕香酒暫隨。
舊摘人頻りに異なり、輕香に酒をば暫く隨ふ。

地偏初衣裌。山擁更登危。
地偏にして初めて裌を衣る、山に擁せられて更に危きに登る。

萬國皆戎馬。酣歌淚欲垂。
萬國皆戎馬、酣歌淚垂れむと欲す。

【字解】【一】雲安　四川省夔州府雲陽縣。【二】九日　陰暦九月九日、重陽菊花の節。【三】鄭十八　名は賁、雲安の人なりといふ。【四】攜酒　さけをもつてくる。【五】諸公　他の人人。【六】寒花　他の秋の草花をいふ。【七】舊摘人頻異　舊時この菊花をつんだ人がしきりにちがふ、重陽には菊花をつみて酒にうかべる、その人人が一一ちがふとは重陽に逢ふ場所がかはるをいふ、

前年梓州にあり、成都にあり、今また雲安にあり。【八】輕香　菊花のあさきかなり。【九】酒暫隨　暫時酒なしたがへる、したがへるとは自己のあとにともなふをいふ。【一〇】地偏　偏はかたよる、ゐなかなるをいふ。【一一】衣裌　裌は袷なり、「あはせ」、衣は着ること。【一二】山擁　擁はだきかかへる、山がこの地をとりかこんでゐること。【一三】登危　危とは高く危い場所をいふ、重陽には登高とて高いばしよにのぼりて不祥を拂ふ習俗なり。【一四】戎馬　永泰元年八月、僕固懷恩、吐蕃及び回紇等と入りて寇す。【一五】酣歌　よひてうたふ。

【題義】雲安にての菊節句の日に鄭賁が酒をもつてきた、それで他の諸公のあとについて高地へのぼつてさかもりをした。永泰元年雲安にての作。

【詩意】ほかの草ばなはみんなさいてしまつたが、菊の花だけが枝にみちてさいてゐる。これまで同じ人人とこの菊を摘みとつたことはなく頻頻とちがつてきてゐる（ことしの人もまたかはつてゐる）、（來年もまたどうなるやらわからぬが、ことしは）この花のあつさりした香につけてしばし酒をともなふのである。ここはかたよつた場所で暖かいのでいまやつとあはせをきる。山にかこまれた處でそれ自體に高い場所なのだが、例によつてそのうへまた高いところへと登る。いま諸方がみな兵亂のときだから醉うてうたつても涙がおちようとする。

答鄭(一)十七郎一絶　　鄭十七郎に答ふ一絶

雨後過畦(二)潤。花殘(三)步(四)屧遲。　　雨後過畦潤ふ、花殘りて步屧遲し。

把(五)文驚小(六)陸。好(七)客見當(八)時。　　文を把りて小陸に驚く、客を好むは當時を見る。

【字解】【一】鄭十七郎　鄭十七は鄭十八賁の兄なり、郎は「わかもの」の義。【二】過畦　自己のすぐる田間のみち。【三】花殘　花は野草の花、殘はすゑがれにのこるをいふ。【四】步屧　あるくげた。【五】把文　文は文章。【六】小陸　晉の陸機・陸雲兄弟にて文才あり、小陸は雲をいふ、ここは鄭十八をさす。【七】好客　賓客をこのみて歡迎する。【八】當時　漢の鄭當時、字は莊、賓客を好む、卷十三贈王侍御契詩の鄭驛正留賓の句解をみよ、これは鄭十七に比す。

【題義】鄭賁が兄鄭郎に答へた詩。前篇と同じ頃の作なるべし。

【詩意】雨がふつたあとでとほりすぎるこみちはうるほうてゐる。まだ野らの草花がのこつてゐてそれがおもしろさにあゆみもはかどらぬ。あなたがた御兄弟は感心なもので、文章を手にしては小陸ともいふべき弟さんにびつくりするし、お客すきといふ點にかけてはさしむき鄭當時といふべきあなたのごとき人を見いだすのである。

別常(一)徵君　　常徵君に別る

兒扶猶杖策。臥病一秋强。　　兒に扶けられて猶ほ策を杖く、病に臥す一秋强。

白髮少新洗。寒衣寬總長。　　白髮少なるも新に洗ふ、寒衣寬にして總て長し。

故(二)人憂(三)見及。此別涙(四)相望。　　故人憂及ばる、此の別涙相望む。

各逐萍流轉。來書細作行。　各〻萍を逐ひて流轉す、來書細かに行を作さむ。

【字解】【一】常徵君　常は姓、處士にして官にめされし人を徵士といふ、君は敬語なり。【二】故人　常某をさす。【三】憂見及　こちらの病をしんぱいしてくれた。【四】淚相望　淚をたれてながめること。【五】萍　うきくさ。【六】來書　先方からくるてがみ。【七】行　行列。

【題義】徵士である常某君と別れた詩。永泰元年秋冬の交、雲安にての作。

【詩意】自分は一秋あまり病氣でねたので兒に扶けられたうへに策を杖いてゐる。白髮はすくなくなつたが新に洗ひ、寒さにきる衣はからだにあまつてたけもみな長すぎる。ふるなじみのあなたはわたしの病氣のことをしんぱいしてくだされかたじけなくおもふ。こんどのお別れには淚ながらにながめるばかりである。おたがひ浮き草をおうてうつりあるく身のうへである。あとからよこしてくださるお手紙はどうぞこまごまと幾行もたくさんかいてよこしてください。

長江二首

衆水會涪萬。瞿塘爭一門。
朝宗人共挹。盜賊爾誰尊。
孤石隱如馬。高蘿垂飮猿。
歸心異波浪。何事卽飛翻。

長江　二首

衆水涪萬に會す、瞿塘一門を爭ふ。
朝宗人共に挹る、盜賊爾をば誰か尊ばむ。
孤石隱れて馬の如し、高蘿に飮猿垂る。
歸心は波浪に異なり、何事ぞ卽ち飛翻するや。

【字解】【一】長江　揚子江をいふ。【二】涪萬　涪州萬州なり、涪州は重慶府の東北部にあり、萬州は雲安（今雲陽）の西南にあり、雲安よりいへば涪・萬・は共に上流にあたる。【三】瞿塘爭一門　瞿塘は峽の名、夔州府奉節縣東十三里にあり。廣溪峽とも西陵峽ともいふ。一門とは瞿塘峽の兩岸絕壁をなして門の如くなるをいふ、爭とは爭ひ赴くをいふ、瞿塘爭一門とは爭赴瞿塘之一門ことにて、爭の字の主語は上句の「衆水」なり。【四】朝宗　「詩」の沔水篇に、「沔彼流水、朝宗于海」とあり、その鄭箋に、諸侯が春天子にまみゆるを朝といひ、夏まみゆるを宗といふ、とみゆ。ここは諸侯が天子に歸する如く衆水が海に歸するをいふ。【五】人共挹　挹はくみとるをいふ、「詩」の泂酌篇に、泂酌彼行潦、挹彼注茲とみゆ。ここは朝宗の義を取るをいふ。【六】盜賊　永泰元年四月嚴武成都に卒す、行軍司馬杜濟等共に郭英乂を節度使となさんと請ひ、漢州の刺史崔旰、大將王崇俊を節度使となさんと請ふ、たまたま朝廷已に英乂を除したり。英乂、崇俊を殺し、旰を召して成都に還らしむ。旰至らず、英乂兵をひきゐて之を攻め大敗して還り、簡州に奔る。普州の刺史韓澄、英乂を殺す。卭・瀘・劍・三州の牙將各〻兵を擧げて旰を討つ。蜀中大に亂る。盜賊は崔旰等諸將をいふ。【七】爾誰尊　爾なば誰か尊ばんや。爾とは盜賊をさす。仇氏は、爾は（天子を舍きて）誰をか尊ばんやとときたるも、それにては盜賊にも尊ぶもののある樣になりて不自然におもはるる故從はず。【八】孤石　峽の水中にある灧澦堆の石をいふ、この石、冬、水涸るるときは水面にあらはるること二十餘丈、夏、水漲るときは沒す、或は大きさ馬のごとし、古樂府に、淫豫（すなはち灧澦）大如馬、瞿唐不可下といふもの是なり。【九】隱如馬　上にみゆ。【一〇】高蘿　高い處に生えてゐるひめかつら。【一一】飮猿　川に水を飮まんとするさるをいふ。【一二】異波浪　心といふ無形物と波浪といふ有形物を比較していふ。【一三】飛翻　翻の字は波浪の緣語なり、飛の字にて心のはたらきをみせたり。

【題義】この第一首は長江のながれの東海に歸することを說き、盜賊の其の義を知らざるをいひ、自己の歸心の翻浪に似たるをのべて結びとせり。永泰元年雲安にての作。

【詩意】多くの水が涪州萬州に會合し、それ等の水が更に瞿塘峽の一門に向つて爭ひながれる。江水が諸侯の天子に朝宗するごとく東海に歸するの義は萬人の共に取る所である。此義を解せざる汝等盜賊どもをだれが尊敬するものがあらうぞ。瞿塘では灔澦のひとつ石がかくれてわづかに馬のごとく、高處の蘿から水をのまうとする猿が垂れさがつてゐる。(自分はそこをとほつて荊州の方へゆかうとするのだが)自分の歸鄕をおもふ心は波浪ならいざ知らず波浪でもないくせにいかなるせゐかひつくりかへりつつあるのである。

〔二〕

(一)浩浩終不息。乃知東(二)極臨。
衆流歸海意。萬國奉君心。
(三)色借(四)瀟湘闊。(五)聲驅(六)灔澦沈〔深〕。
(七)未辭(八)添霧雨。(九)接上過衣襟。

浩浩終に息まず、乃ち知る東極に臨むことを。
衆流海に歸するの意、萬國君を奉ずるの心。
色は瀟湘の闊なるに借し、聲は灔澦の沈〔深き〕を驅る。
未だ辭せず霧雨に添へ、接上して衣襟を過ぐることを。

【字解】【一】浩浩　大なる貌。【二】東極　ひがしのはて、海をいふ。【三】色借　色は水色、借は「かす」、「かる」に非ず。【四】瀟湘闊　瀟湘は水の名、闊は遠大なること。【五】聲　波浪のおと。【六】灔澦沈　灔澦は上にみゆ、沈は一に深に作る、深に從ふ。【七】未辭　辭は辭退すること。【八】添霧雨　添は加はる、霧雨があるうへに波浪が加はるをいふ。【九】接上　霧雨にくつついてのぼる。

【題義】この第二首は江勢の急奔をいひ、水流の歸海と自己の歸鄕心とをひきかけてむしろ江勢の急奔をよろこぶ意をのべたり。

【詩意】長江の水は浩浩と大きくながれてあくまでやまぬ。これは東のはてにまでゆくのであることがわかる。多くの流れがしまひに東海に歸してしまうところ、それは萬國が一君に歸してそれをいただく心とにてゐる。瀟湘の水は遠大であるが江の水が之に色をかすから遠大なのである。灔澦堆のところは水が深いが江浪の聲はそのふかいところまで驅りたててゐる。(こんなさかんな勢で流れる水を船でくだる自分にとつては)浪のしぶきが霧や雨に加はつていつしよになつて襟にのぼりかかつてきてもいとはぬのである。(水勢急なれば早く峽をくだれるからむしろそれをよろこぶ)

(一)承聞(二)故房相公靈櫬自閬州(三)啓殯。歸葬(四)東都有作。二首

故の房相公が靈櫬閬州より殯を啓き東都に歸葬すと承聞して作有り　二首

遠聞(五)房太尉。歸葬(六)陸渾山。
(七)一德(八)興王後。(九)孤魂久客(一〇)間。
(一一)孔明多(一二)故事。(一三)安石竟(一四)崇班。

遠く聞く房太尉、陸渾の山に歸葬すと。
一德興王の後、孤魂久客の間。
孔明故事多し、安石竟に崇班なり。

（一五）他日嘉（一六）陵淚。仍（一七）霑楚（一八）水還（一九）。　他日嘉陵の淚、仍ほ楚水を霑して還る。

【字解】【一】承聞　「聞くな永く」聞だけにてもよろしきも永を加へたるはさらに之を錞びてなり。【二】故房相公　沒故せし宰相房琯。【三】啓殯　殯は「かりうめ」、啓はひらく、かりうめの場所をあけてほりだす。卷十三に別房太尉墓詩あり。それはかりうめの墓なり。【四】東都　洛陽。【五】房太尉　房琯卒して太尉を贈らる。【六】陸渾山　河南府嵩縣の東北にある山なり、洛陽と遠からず。琯は河南の人、宰相房融が子なり、わかくして學を好み、東平の呂向と偕に陸渾山に隱るること十年なりし。今沒してその山に葬られんとするなり。【七】一德　「尙書」の咸有一德篇に伊尹が言に、惟尹躬、曁湯（殷の湯王）、咸有二一德一とあり、一德とは守りを易へず一すぢに德を保つをいふ、ここの意は房琯が德操ありしをいふ。【八】興王　中興の天子、肅宗をいふ。【九】孤魂　地方にさまよひ居りし琯が精神、魂は生者の魂をさす。【一〇】久客　地方に流寓してゐた他の人人。【一一】孔明　諸葛亮が字、以て琯に比す。【一二】故事　晉の陳壽、荀勗等と諸葛亮が故事廿四篇を定めてたてまつる。故事とは過去の行事をいふ。【一三】安石　晉の謝安が字、以て琯に比す。【一四】竟崇班　崇班はたかき位をいふ、琯卒して太尉を贈られしは崇班なり、謝安も卒して太傅を贈らる、故に相比す。【一五】他日　異日、往日の意。【一六】嘉陵淚　嘉陵は嘉陵江、閬州の西漢水をさす、實は閬州の墓にそそぎし淚をさしていへり。【一七】仍　なほ、やつぱりといふこと。【一八】楚水　楚地の水、夔州府より下流の揚子江は楚水といひて可なり、これより琯の櫬舟が經過すべき處なり。【一九】還　ゆくといふほどの意なり。洛陽は作者の故鄕でもあるゆゑに「かへる」といへり。

【題義】いまはなくなつた宰相房琯公の靈柩が閬州より假り埋めからだして洛陽の方へ歸葬されるといふことをきいてよんだ詩。この第一首は房琯を思ひ現在の地に於てふたたび淚をそそぐことをいふ。永泰元年雲安にての作。

【詩意】はるかに聞くところによると太尉房公は陸渾山へ歸葬されたまふさうだ。公は吾が君中興の後にあたつて不易の一德をいだきながら流寓諸客のあひだにさびしい魂を迷はせてをられた。公は諸葛孔明の樣にいろいろの故事をもつてをられる、をしいことに謝安石のごとくたうとう死後に位を高められるといふ樣におなりになつた。自分はいつぞやお墓におわかれをするとき嘉陵江に淚をそそいだことであつたが、いままたその淚が楚地の水をうるほしてゆくことになつた。

［二］

（一）丹旐飛飛日。初傳發（二）閬州。
（三）風塵終不解。江（四）漢忽同流。
（五）劍動親（六）身匣。書（七）歸故（八）國樓。
（九）盡哀知有（一〇）處。爲客恐長（一一）休。

［二］

丹旐飛飛たる日、初めて傳ふ閬州を發すと。
風塵終に解けず、江漢忽ち流れを同じくす。
劍は動く親身の匣、書は歸る故國の樓。
盡哀知る處有り、客と爲つて恐らくは長く休せむ。

【字解】【一】丹旐　銘旌即ち死者の姓名を記したる「はた」をいふ。【二】風塵　兵馬の塵。【三】江漢　江は揚子江、漢は西漢水即ち嘉陵江。【四】同流　房琯の櫬舟と自己の舟とが同じ流れにうかぶをいふ。【五】劍動　房公の靈、兵亂を平らげんと欲するかのごとくなるをいふ。【六】親身匣　匣は劍を入れた「はこ」、親身とは公の屍にちかにくつついてゐるをいふ。【七】書　書籍、公の愛讀せしもの。【八】故國　河南をいふ。【九】盡哀　一哀を盡くして哭すること。一哀は、「禮記」の檀弓上、曾子問にみゆ。【一〇】有處　處とは陸渾山の公の墓地をさす、而して作者の舊莊も亦陸渾にあれば陸渾は作者にとつて故鄕なり。【一一】長休　休は休止なり、哭せんと欲することがそのまま哭するを得ずしてやむをいふ。歸鄕するを得ざるがためなり。

【題義】この第二首は洛陽陸渾に歸りて哭せんと欲するをいふ。

【詩意】あなたの姓名を記したはたがひらひらとひるがへる時、そのはたがこのごろやつと閬州から出發したとつたへきく。兵馬の塵はあくまで解けずにゐるが、不思議な御緣であなたと江漢の流れを同じくして舟をうかべることになつた。お棺のなかのお肌つきの匣にはあなたの劍が動きださんとしてゐる。あなたの書物は故郷の樓にかへるのである。自分はどういふ場所でわたくしの哀哭をつくすべきかは知つてゐるが、旅客の身となつてゐるからその場所（陸渾）で哭することはできずに了るのではあるまいかと恐れてゐる。

將曉二首

將に曉けむとす　二首

石城除撃柝。鐵鎖欲開關。
石城撃柝除かる、鐵鎖關を開かむと欲す。

鼓角愁荒塞。星河落曉山。
鼓角荒塞に愁へ、星河曉山に落つ。

巴人常小梗。蜀使動無還。
巴人は常に小梗す、蜀使は動もすれば還ること無し。

垂老孤帆色。飄飄犯百蠻。
老ゆるに垂んとして孤帆の色、飄飄百蠻を犯す。

【字解】【一】石城　舊注に雲安に大・小石城山ありといひ山の名とときたるも、蓋し岩石多き地に建てし城をいふなるべし。作者夔州の詩にも最堵石城草萊翳の句あれば以て類推すべし。【二】除撃柝　撃柝は夜まはりのための拍子木をうつこと、除とは夜あけちかきゆゑそれをのぞきてやめるをいふ。【三】鐵鎖　鐵のくわんぬき。【四】開關　關もくわんぬきのことなるも、ここは門關にて城門のとじまりをいふ。【五】鼓角　戍の兵卒の鳴らすたいこ、つのぶえ。【六】荒塞　あれたるとりで、雲安の城をさす。【七】星河　ほし、あまのがは。【八】巴人　巴は閬州（保寧）、渝州（重慶）、夔州等の地皆是なり、後に三絶句にみゆるごとく渝州・閬州等にて刺史を殺すことあり、巴の地に於て實にそれに類する事ありしをいふならん。【九】小梗　梗は棒切れなり、梗塞といへば道路のふさがりて通ぜぬ義となる、小梗は小亂をおこすをいふ。【一〇】蜀使　使は節度使・兵馬使、これは蜀中（成都及其の近地）の節度使の騷亂をさす、上元の間に劍南東川節度兵馬使段子璋反して誅に伏す。寶應の初に劍南西川兵馬使徐知道反して誅に伏す。明年劍南西川兵馬使崔旰反して成都の節度使郭英乂を殺す。【一一】無還　任地で殺され、中央朝廷にかへらざるをいふ。【一二】垂老　老いかかる、作者自らいふ。【一三】孤帆色　扁舟をうかぶるをいふ。【一四】百蠻　雲安・夔州の南方の地はみな蠻の居るところなり。

【題義】夜のあけかかるときのことをよめり。この第一首は第二首によりて推量せらるるごとく他人との交際上、陸にのぼり居て、あけがたに出船のためもどり來りしときのことをのべたり。永泰元年冬、雲安にての作。

【詩意】岩石地帶の城で夜まはりの拍子木の音もなくなつた。城門に鐵のくわんぬきがさしてあつたが、それがあけられようとする。草ふかきとりでに鼓角の聲がかなしさうにきこえ。星、天の河はあけぼのの山に落ちかかる。巴地の人は時時小兵亂をおこすし、蜀の使者はともすると人手にかかつて中央へかへらなくなる。世のみだれにはこまる。このとき自分は老いかかつた身を以て一帆をかかげ

てただよひながら多くの蠻地を犯して旅するのである。

〔二〕

(一)軍吏迴(二)官燭。舟人自楚(三)歌。
寒沙蒙薄霧。落月去(四)清波。
(五)壯惜身(六)名晩。衰慚應(七)接多。
(八)歸朝日簪(九)笏。筋力定如何。

〔二〕

軍吏官燭を迴す、舟人自ら楚歌す。
寒沙薄霧に蒙はる、落月清波より去る。
壯には惜む身名の晩きことを、衰には慚づ應接の多きを。
歸朝日に簪笏せむ、筋力定めて如何。

【字解】【一】軍吏　軍隊の小役人、これは縣令など見送りのためよこしたるものとみゆ。【二】迴官燭　あさうす暗きゆゑ、蠟燭をつけて來りしがひきかへすなり。官とは官にて用ふるもの故にいふ。【三】楚歌　楚地の調子のうたをうたふ。【四】去清波　いままでは清波のうへに存在せしものがそこから立ち去つた。消えうせたことをながく言ひなせるなり。【五】壯惜　壯とは「壯年の時を回顧しては」の意。【六】身名晩　身名は一身の名、功名をいふ、工部員外郎となりしことをさす。【七】應接　他人と接し應對すること、作者の上陸は縣令か知人かに招待されたか、それらの人を訪問するためかのいづれかなるべし。【八】歸朝　朝廷へかへつたならば。想像していふ。【九】簪笏　冠にかんざしをさし、手に笏を執る。文官の禮裝をいふ。

【題意】この第二首は發船のときのことをのべ、老衰を歎ずる意をのべたり。

【詩意】見送りにきた軍吏は官燭をひきもどしてかへつた。舟人たちはしせん出發のけいきをつけるため楚歌をうたふ。つめたさうな沙岸には薄い霧がかかつてをり、落ちかかつてゐた殘月は波のうへから消えてしまつた。自分は壯年の時をかんがへていかにも功名を得たのがおそすぎると惜しみ、老衰してきたことをおもうては世間なみのつきあひの多いことをはぢる。もし自分が朝廷へかへつたとしたら毎日簪笏といふ禮服に身をかためねばならぬが、さて自分の筋力がそれにたへうるかどうかしらん。

懷錦(一)水居止二首

錦水の居止を懷ふ　二首

(二)軍旅西(三)征僻。風(四)塵戰伐多。
猶聞蜀父老。不忘舜(五)謳歌。
(六)天險終(七)難立。(八)柴門豈重過。
朝朝巫(九)峽水。遠(一〇)逗錦江波。

軍旅西征僻なり、風塵戰伐多し。
猶ほ聞く蜀の父老、忘れず舜の謳歌。
天險終に立ち難きも、柴門豈に重ねて過ぎらむや。
朝朝巫峽の水、遠く逗る錦江の波。

【字解】【一】錦水居止　錦水は錦江、居止はをりとどまるところ、成都の草堂の地をさす。【二】軍旅　官軍をいふ、旅は衆なり。【三】西征僻　西征は西方を征伐する、蜀は長安より西南にあたるを以て西といふ、僻はかたよる。【四】風塵　兵亂をいふ。永泰元年冬十月、劍南節度使郭英乂、兵馬使崔旰に殺され、邛州の牙將柏茂琳・瀘州の牙將楊子琳・劍州の牙將李昌夔等共に兵を起して之を討つ。【五】舜謳歌　舜の德をうたひたたへること、是は玄宗嘗て蜀に行幸せしによりその德をおもふをいふ。【六】天險　蜀は北に劍門のごとき險阻あり。【七】終難立　立とは蜀地に據りて叛く者が自立するをいふ。【八】柴門　草堂の柴門。【九】巫峽　夔州府巫山縣にあり、雲安よりは下流にあたる。【一〇】逗　透なり、通なり、とほる。

【題義】錦江のほとりの住居のことをおもうてよめる詩。この第一首は崔旰の亂につけて草堂をおもふ。永泰元年雲安にての作。

【詩意】官軍が西にでて征伐するにあたり、その地が僻地であるところから蜀にはいつも風塵があつて戰伐が多い。しかし蜀の父老たちはいまも舜の樣な聖天子（玄宗）の德をたたへることを忘れずに居ると聞く。いくら蜀の地が天險であらうとそこに據つて獨立することはむつかしからうが、自分はとてももういちど草堂の柴門をおとづれることはなからう。ただただ每朝巫峽に向つて流れる水にも遠く錦江の波が通つてをるとおもうてなつかしむばかりである。

〔二〕

萬里橋西宅。百花潭北莊。
層軒皆面水。老樹飽經霜。
雪嶺界天白。錦城曛日黃。
惜哉形勝地。回首一茫茫。

〔二〕

萬里橋西の宅、百花潭北の莊。
層軒皆水に面す、老樹飽くまで霜を經。
雪嶺天に界して白く、錦城曛日黃なり。
惜しい哉形勝の地、首を回らせば一に茫茫たり。

【字解】字句皆已にしばしばみゆる所なれば略せす。

【題義】この第二首は草堂のさまを想像し蜀地の亂を慨歎せり。

【詩意】萬里橋の西にある宅、百花潭の北によこたはるやしき。層をなした軒はみな水に面してをり、老樹はあくまで星霜を經てをる。雪嶺のいただきは天にくぎりをつけて白く立ち、錦官城は風塵のため夕日が黃ばんでゐる。あいいところではある。惜しいかなこの形勝の地よ。（兵亂のたえまがない）そちらの方へとふりむいてながむればただただ茫茫として何が何やらわからぬのである。

青絲

青絲白馬誰家子。
麄豪且逐風塵起。
不聞漢主放妃嬪。
近靜潼關掃蜂蟻。
殿前兵馬破汝時。
十月卽爲虀粉期。
不如面縛歸金闕。
萬一皇恩下玉墀。

青絲

青絲白馬誰が家の子ぞ、
麄豪且風塵を逐ひて起る。
聞かずや漢主の妃嬪を放ちて、
近ろ潼關を靜めて蜂蟻を掃ひしことを。
殿前の兵馬汝を破らむ時、
十月卽ち虀粉の期と爲さむ。
如かず面縛して金闕に歸せむには、
萬一皇恩玉墀より下らむ。

【字解】【一】青絲白馬　梁の叛臣侯景が故事。（卷六の六三六頁、青絲白馬の句解をみよ）青絲は青色の絲にてつくりし手綱、景の兵を擧ぐるや白馬にのり青たづなを用ふ。こゝでは以て叛將僕固懷恩に比す。【二】麄豪　氣のあらあらしきこと。【三】逐風塵起　風塵は吐蕃侵入の亂をいふ。廣德二年二月、懷恩、太原を取らんと謀る。其の子瑒、進みて楡次を圍む。十月懷恩、回紇・吐蕃と進みて奉天に逼る。代宗出でて陝州に奔る。

永泰元年九月、懐恩又回紇・吐蕃・吐谷渾・黨項等を誘ひて入寇す。このとき懐恩、吐蕃入犯の後を承け兵を阻み亂を犯す、故に「風塵を逐ひて起る」といふ。【五】不聞　汝不聞・豈不聞の意。【六】漢主放妃嬪　永泰元年二月、後宮より宮女千人を出だし品官六百人に洛陽宮を守らしむ。漢主は漢の天子、漢の文帝・成帝・哀帝・平帝みな宮女を出だせる事あり、ここは唐の天子にあてていふ。【七】近靜潼關　吐蕃の長安を陷るるや陝州の刺史高暉といふもの嚮導をなす、吐蕃逃るるや暉　騎三百をひきゐて東に走る、潼關の守將李日越、暉を擒にして之を殺す。【八】蜂蟻　はち、あり、賊徒に比す。【九】殿前兵馬　神策軍をいふ、この軍は近衞兵のごときものなり。廣德元年代宗陝州に幸せしとき魚朝恩、神策軍をこぞつて迎扈す、のち軍を以て禁中に歸し自ら之に將たり、永泰元年又神策軍を以て苑中に屯せしむ、これよりやうやく盛にして分ちて左右廂となす、しばしば出でて征伐して功あり。【一〇】汝　懷恩をさす。【一〇】齏粉期　齏は俗字、韲を正字とす、碎くなり、また辛物をこまかくつくをいふ。齏粉はくだいて粉とするをいふ。【一一】面縛　本人をうしろ手にしばり、面を前に向けしむること、降服の態度なり。

【題義】僕固懷恩の叛せるについて意見をのべたり。題は首の二字を切りとりて用ふ。永泰元年の作。

【詩意】白馬にのり青絲の手綱をとるやつはどこのなにものであるか、彼はその氣象は粗豪でまあまあ外夷騷亂のどさくさまぎれに乘じてたちあがつたやつなのである。汝は漢（唐）の天子がうちは宮女を解放せられ、ほかはちかごろ潼關方面のさわぎを靜められ蜂蟻の樣な惡賊どもをはらひのけられたことをきかぬのか、やがて殿前兵馬の禁軍が汝をうち破るだらうが、それは十月が汝等を微塵にうちくだく期なのだ。汝はそれよりも面縛の態度で金闕に歸參した方がよくないか。歸參したら萬が一にも天子のおなさけが玉の階のそばから下らうもしれぬことだ。

三絶句

前年渝（一）州殺刺史。今年開（二）州殺刺史。
羣盜相隨劇（三）虎狼。食人更肯（四）留妻子。

三絶句

前年渝州に刺史を殺す、
今年開州に刺史を殺す。
羣盜相隨ふ虎狼よりも劇し、
人を食ふに更に肯て妻子を留めむや。

【字解】【一】渝州　重慶府。【二】開州　夔州府開縣。【三】劇　はげし。【四】肯留妻子　反語、とどめざるをいふ。

【題義】巴蜀の騷亂について敍せり。この第一首は渝州開州の亂をのぶ。永泰元年の作ならん。

【詩意】前年には渝州で刺史を殺した。今年は開州でも刺史を殺した。盜賊どもがつぎつぎと起る害は虎狼よりもはげしい。虎狼が人を食べるにはなんで本人だけにとどめて妻子を殘しておくべきや、もちろん妻子までもたべつくしてしまふのである。

〔二〕

二十一家同入（一）蜀。惟殘一人出駱（二）谷。
自說（三）二女齧（四）臂時。

〔二〕

二十一家同じく蜀に入る、
惟一人を殘して駱谷を出づ。
自ら說く二女臂を齧みし時、

【字解】【一】入蜀　永泰元年九月僕固懷恩が回紇吐蕃等を誘ひ入寇せしとき、吐蕃を奉天に、黨項を同州に、吐谷渾奴刺を盩厔に赴かしめ、回紇さらに吐蕃のあとに繼ぎたり、

迴頭卻向秦雲哭。　頭を迴らして卻つて秦雲に向つて哭せしと。

この詩の人人は此時の亂を避けて蜀に走りしものとみゆ。【二】駱谷　陝西省西安府盩厔縣の西南百二十里に駱谷關あり、蜀に通ずる道にあたる。【三】自說　生きのこりの本人自身がいふ。【四】齧臂　ひぢをかむは盟のしるしなり。蓋し別るるものどうしがおたがひにかみあふものにて、ここは生存の男とその二女とがかみあふなり、親子共に逃ぐるは危險なりとて別れ別れになりてにぐるなり。【五】迴頭　蜀に向つて逃げるもの故に長安の方をむかんとするには頭をふりむけざる可からず。【六】秦雲　秦は長安　秦雲は長安の方の雲、卽ち二女の居る方なり。

【題義】この第二首は避難民中偶然生存せる一人の言ふ所を記して當時の慘狀を敍す。

【詩意】兵亂を避くるため二十一家族が同時に蜀へとにげこんだところ、不幸にもたつた一人をあまし、その男だけが無事に駱谷關をぬけだすことができた。その男自身がいふに、自分たちはいつしよに逃げてはみんながあぶないといふので親子別れ別れになつた。別れるとき二人の女と自分とが記念に臂をかみあうて別れたが、にげるときにはつらうて走りながら頭を女のゐる方へとふりむけて秦の雲とおぼしき方に向つて聲をはりあげてないた。

〔三〕

殿前兵馬雖驍雄。　殿前の兵馬驍雄なりと雖も、

縱暴略與羌渾同。　暴を縱にするは略ぼ羌渾と同じ。

聞道殺人漢水上。　聞道人を殺す漢水の上、

婦女多在官軍中。　婦女多くは官軍の中に在りと。

【字解】【一】殿前兵馬　禁軍をいふ、前にみゆ。【二】驍雄　驍はたけきこと。【三】羌渾　羌は吐蕃、渾は吐谷渾、みな夷種にして長安地方へ侵入せしものども。【四】殺人　禁軍が良民を殺すをいふ。【五】漢水　西漢水、卽ち嘉陵江の流域、蜀の東境をいふ。【六】婦女　掠奪せる女子。【七】官軍　卽ち上の殿前兵馬。

【題義】この第三首は官軍の暴虐も夷種と同じきことを敍して慨歎を寓したり。

【詩意】殿前兵馬と呼ばるる軍隊はたけく雄雄しいといふことだが、かつてに暴虐なことをすることはほぼ羌兵・渾兵とおんなじだ。きけば彼等は漢水のほとりで人民を殺し、その軍隊のなかに掠奪した婦女が多くゐるといふではないか。

遺憤　　憤を遣る

聞道花門將。論功未盡歸。　聞道花門の將、功を論じて未だ盡く歸らずと。

自從收帝里。誰復總戎機。　帝里を收めしより、誰か復た戎機を總ぶる。

蜂蠆終懷毒。雷霆可震威。　蜂蠆終に毒を懷くも、雷霆威を震ふ可し。

莫令鞭血地。再濕漢臣衣。　鞭血の地をして、再び漢臣の衣を濕さしむること莫れ。

【字解】【一】花門　回紇をいふ、卷四の三六二頁花門の句解及び卷七留花門詩をみよ。【二】論功未盡歸　永泰元年十月、郭子儀、白光元をして精騎をひきゐて回紇の將藥葛羅と吐蕃を靈臺の西原に追ひ大に之を破る、又之を涇州の東に破る、是に於て回紇の

郝緑首等二百餘人入りて見ゆ、前後繒帛十萬匹を贈賚す、府藏空竭す、論功とは吐蕃を破りし功を論ずるなり、未歸とは長安に在りて本國へ歸らぬをいふ。【三】敗帝里　肅宗・代宗の朝にわたりて各〻一たび長安を賊の手に失ひ、また之をとりもどせしをいふ。【四】總戎樞　戎樞は兵樞、兵權を總ぶるとは兵權を總轄するをいふ、時に魚朝恩をさす。朝恩が觀軍權を掌り郭子儀がごとき却つて專任せられざるをいふ。【五】蜂蠆　はち、さそり、以て回紇に比す。【六】雷霆　朝廷の權威をたとへいふ。【七】釁血地二句　釁血の語は「左傳」に本づく。人を殺ちてその血が地にそそぐをいふ。事實は次のごとし。「舊唐書」回紇傳によるに、寶應元年九月雍王适（代宗の子）を兵馬元帥となす、适、諸臣をひきゐて回紇の登里可汗を陝州の黄河北岸の營に見る。可汗、雍王が帳前に舞蹈せざるを責む、（舞蹈は可汗に對する敬禮なり）回紇の車鼻將軍つひに雍王が從者たりし藥子昂・李進・韋少華・魏琚を引きて各〻一捶つこと一百、少華と琚とは一宿にして死せり。釁血とは之を指す。漢臣とは唐臣をいふ、藥子昂等をさす。再濺とは再び血で衣をうるほすことにて再び回紇の侮辱をうくるをいふ。

【題意】憤慨の情をやるためによめる詩。回紇の暴についていへり。永泰元年の作。

【詩意】きけば回紇の大將どもは都に居て自己に對する功賞についてぐづぐづいうてゐてみんなは歸つてしまはぬさうだ。前朝以來賊の手から都をとりかへしたのち、だれが軍權を總べてゐるのか、蜂蠆の樣な回紇はあくまで毒をもつてゐるとしても吾が朝廷も雷霆の樣な威を震ふべきでないか。往年吾が唐の臣が回紇に鞭たれて血を流したことがあるが、再びそんなことができて吾が朝臣の衣を血でうるほさせる樣なことが有つてはならぬのである。

十二月一日三首

十二月一日　三首

今朝(一)臘月(二)春意動。　今朝臘月春意動く、
雲安縣前江可憐。　雲安縣前江憐む可し。
一聲何處(三)送書雁。　一聲何の處ぞ送書の雁、
(四)百丈誰家上瀨船。　百丈誰が家の上瀨の船。
未將(五)梅蘂驚(六)愁眼。　未だ梅蘂を將て愁眼を驚かさしめず、
要取(七)椒花(八)媚遠天。　椒花を取つて遠天に媚びむと要す。
(九)明光起草人所羨。　明光起草は人の羨む所、
肺病幾時(一〇)朝日邊。　肺病幾時か日邊に朝せむ。

【字解】【一】臘月　十二月をいふ。【二】春意動　動とははたらきはじむるをいふ。【三】送書雁　蘇武が故事、已にみゆ。【四】百丈　竹索のこと、長江の船は纜繩の代りに之を用ふ。【五】梅蘂　梅の花蘂。【六】愁眼　自己の寄愁をおびたまなこ。【七】椒花　元日の故事なり、元日には椒花を酒にいれてのむ。晉の劉臻が妻陳氏元旦に椒花頌を獻ぜしといふ。【八】媚遠天　媚字は人に屬す、蓋し強ひて笑顔でもつくりて樂むといふほどの意なるべし。仇氏は媚字を花に屬せしめ、媚とは其の愛す可きをいふととけり、之によれば此一句は「椒花の遠天に媚ぶるを取らんと要す」とよますなり。今取らず。遠天とは蜀地の天をいふ。【九】明光起草　明光は漢時の殿名、起草は詔敕の文章の草稿をかきはじめること。漢の王商、明光殿を借りて制詔を起草せしといふ話あり、漢の制度にては尚書の郎官が文章を起草す、作者は工部員外郎にて唐にては詔敕起草の職には非ざれども郎官なるところからかくいへり。【一〇】朝日邊　朝は參朝すること、日邊は太陽の在るところをいひ長安を意味す。晉の明帝が幼時、日と長安といづれが近きと問はれて他人に答へし語に、「人の長安より來るといふを聞くも、人の日邊より來るといふを聞かざるゆゑ長安近し」とあり、一轉して長安のことを日邊といふに至れり。

【題意】十二月一日によめる詩。この第一首は歲末すでに春のきざしあるに感じて長安をおもふこと

をのぶ。永泰元年冬、雲安にての作。

【詩意】けさは十二月のはじめであるのにはや春の氣もちが動きだして、ここの雲安縣の前の江のさま愛すべきものがある。どこぞで雁のなきごゑがするが、どこから手紙をもつてきた雁だらう。百丈の竹索で船をひつぱつてゆくが、あれはだれの家の「瀬をのぼるふね」だらう。梅の花はまださかぬからそれで自分の愁眼を驚かすことはできぬけれども、はやお正月の氣分で旅の天で椒花を取つてたのしまうとおもふ。郎官になつてゐるから明光殿で詔勅を起草するのかと他人には羨まれるが、肺を病んでゐるこのからだではいつになつたら都へ參朝することができるのであるやら。

〔二〕

寒輕市上山煙碧。日滿樓前江霧黃。
負鹽出井此溪女。打鼓發船何郡郎。
新亭擧目風景切。茂陵著書消渴長。

寒輕くして市上山煙碧に、日滿ちて樓前江霧黃なり。
鹽を負ひ井を出づ此の溪女、鼓を打ち船を發す何の郡郎ぞ。
新亭目を擧ぐれば風景切なり、茂陵書を著はして消渴長し。

春花不愁不爛漫。楚客惟聽棹相將。

春花は爛漫たらざるを愁へず、楚客惟聽く棹を相將ゐるを。

【字解】〔一〕負鹽　雲安は鹽井のある地なり、故に女子がしほを背にせおふなり。〔二〕打鼓　流れ急にして衝突のおそれあるゆゑ船を發するときに鼓をうち　前船の鼓聲遠くきこゆるにいたりてはじめてつぎの船をいだす。〔三〕新亭擧目　晉の周顗が故事。晉、五胡の亂により都を江南にうつす、北方の人士亂を江南に避くるもの十に六七なり。王導等暇日に新亭に出でて飲宴す、周顗、中坐にして歎じて曰く、風景は殊ならず、目を擧ぐれば江山の異ありと。皆相視て涕を流す。ただ導愀然として色を變じて曰く、當に共に力を戮はせて神州を剋復すべし、何ぞ相對して楚囚の泣を作すに至らんやと。衆、涙を收めて謝す。新亭は江蘇省江寧縣西十五里にあり、唐の時、勞勞亭の在りし所即ちその遺蹟なりといふ。ここは雲安にて風景をながむることを昔の新亭に比せしのみ。〔四〕風景切　切とは悽切なり、ものがなしさがひしひしとせまるをいふ。〔五〕茂陵一句　漢の司馬相如が故事。已にしばしばみゆ。相如を以て自ら比す。〔六〕不愁不爛漫　花の爛漫は翫ぶべきことなり、爛漫ならざるは愁ふべきことなり、いま「愁へず」といふは心、花に在らざればなり。〔七〕楚客　楚地のたびびと、自己をさす。〔八〕惟聽　それのみをきくといふは早く峽をくだりて出でんとおもふなり。〔九〕相將　彼此相扶助するをいふ、舟夫が心をあはせて棹をはたらかすをいふ。

【題義】この第二首は異郷のさまをみて早く峽を出でたしとおもひをることをのぶ。

【詩意】寒さが輕くて市街のうへには山の煙が碧にみえる。太陽の光は十分樓前に照つて江の霧が黃ばんでみえる。鹽を背にせおうて井から出てくるのはここの溪女だ。太鼓をたたいては船を出發させてゐるのはどこのわかものだらう。周顗が新亭で目をあげてながめた樣にながめると異郷の風景のものがなしさはひしひしと胸にせまる。茂陵にひつこんで書を著はした司馬相如の樣な自分はながらく消渇の病をわづらうてをる。ここで春の花が爛漫とさかうとさくまいとそんなことはしんぱいすることはない。自分はただここの旅人として舟人が扶けあうて船をこぎくだるおとだけを心にとめて聽い

てゐるのである。

〔三〕

卽看燕子入山扉。
豈有黃鸝歷翠微。
短短桃花臨水岸。
輕輕柳絮點人衣。
春來準擬開懷久。
老去親知見面稀。
他日一盃難強進。
重嗟筋力故山違。

〔三〕

卽ち燕子の山扉に入るを看るも、
豈に黃鸝の翠微を歷、
短短たる桃花の水岸に臨み、
輕輕たる柳絮の人衣に點する有らむや。
春來らば懷を開かむと準擬すると久し、
老い去つて親知面を見る稀なり。
他日一盃强ひて進め難からむ、
重ねて嗟せむ筋力故山に違ふことを。

【字解】【一】卽看　もし之を看るとしても意。【二】燕子　つばめ。【三】山扉　山樓の扉、寓居の場所なるべし。【四】豈有　豈有は豈不ㇾ有なりとの說あるも余は從はず、通常の反語にて「有らざる」をいふなり、「有らず」といふはもとより之あるを希望する底意あるをあらはす。此の二字は黃鸝五字のみならず、短短・輕輕の二句をも管す。よほど變體の句法とみるべし。【五】黃鸝　うぐひす。【六】翠微　山の半腹、翠氣の青みたるところをいふ。【七】短短　せのひくきさま。【八】輕輕　ふわりふわりと、かろくとぶさま。【九】柳絮　やなぎの花。上來の黃鸝・桃花・柳絮はみな作者故鄕の春の景物にして雲安には之なきなり。【一〇】點　ぽつちりとおちる。【一一】準擬　準備のごとし、まちかまへる。【一二】開懷　むねのおもひをひらきはらす。【一三】親知　したしき人、相知の人。【一四】他日　後日をいふ、今十二月より來年の春のことをさしていふ。【一五】難強進　強進はむりに前へもちだすこと、難強進は「飮まうとしてむりに盃をもちだしても飮むことがむつかしいだらう」の意。その理由は春になりても春の景物なければなり。【一六】重嗟　重はかさなる。かさねてとは已に春景色のさびしいためになげき、そのうへにまた嗟くをいふ。【一七】筋力　筋力の衰ふるをいふ、不備の句法。【一八】故山違　故鄕の山とたがひはなれてをる。此篇諸家の解區區たり、愚見を用ひて解く。

【題義】現在見るところより明春の景事を豫想してのべたる詩なり。

【詩意】來年の春になつたら若し燕が山樓の扉にとびこんでくるのを看るとしても、どうして黃鸝が山の半腹をわたつたり、水ぎはにせのひくい桃の花が咲いてゐたり、柳の絮がはらはらと人の衣のうへに散りかかる樣な景色があらうぞ。年がよつては親友知友とはかほをあはすこともめつたにない、春になつたらおもひをはらしたいものだと今からまちかまへてゐるのだ。だがおそれるのは來年の春になつても春景色が無いのでは一盃の酒を前へもちだしてみたところで飮めはせぬだらう。そのうへに筋力は衰へ故鄕の山とはさからつてをることをなげくことになりはしないか。

又雪

南雪不到地。青崖霑未消。
微微向日薄。脈脈去人遙。
冬熱鴛鴦病。峽深豺虎驕。

又雪ふる

南雪地に到らず、靑崖霑ひて未だ消せず。
微微日に向つて薄らぐ、脈脈人を去ること遙なり。
冬熱くして鴛鴦病み、峽深くして豺虎驕る。

愁邊有江水。焉得北之朝。　愁邊に江水有り、焉んぞ之を北せしめて朝せしむること（を得む。

【字解】【一】南雪　南土の雪。【二】脈脈　蓋し陣陣のごとくひとしきりひとしきりなるいふならん。【三】北之朝　東流する江水を北に向けかへて朝宗せしめること。

【題義】「又雪」と題したるはこの篇の前に「雪」の題の詩ありしにより「又」といへるならん、而してその「雪」の詩は脱漏せしものならん。永泰元年冬雲安にての作。

【詩意】南方の雪は地面に到着せずすぐ消えるものだが、青い崖のところは高いから霑うてまだそれが消えうせずにゐる。その雪のふりかたはかすかに太陽に向つて薄くふり、一しきり一しきり人を去るはるかかなたにちらばるのである。冬があついから鴛鴦は病むが、峡が深いので豺や虎は威張つてゐる。吾が愁をおびてゐるそばには長江の水が流れてゐる、どうしたならこの水を北にむけかへて朝宗させ、それに乗じて都へもどることができようか。

雨

雨

冥冥甲子雨。已度立春時。　冥冥甲子の雨、已に度る立春の時。

輕箑煩相向。纖絺恐自疑。　輕箑相向ふを煩はす、纖絺恐らくは自らも疑はむ。

煙添纔有色。風引更如絲。　煙添ひて纔に色有り、風引きて更に絲の如し。

直覺巫山暮。兼催宋玉悲。　直ちに覺ゆ巫山の暮るるかと、兼ねて催す宋玉が悲み。

【字解】【一】甲子雨　甲子は大暦元年正月八日甲子の日をさす。【二】已度　度とは經ること、此語によれば八日より前に立春あり、立春から八日へかけて雨ふりしなるべし。【三】立春　節の名。【四】輕箑　箑はうちは。【五】相向　うちはに刈對すること。【六】纖絺　絺は細き葛にてつくりし衣、かたびらなり。【七】恐自疑　正月葛の帷子を着るゆゑ、それでよいのかと自分でさへ疑ふ。【八】巫山暮　宋玉が高唐賦の意を用ふ、巫山の神女、朝に行雲となり暮に行雨となるといひしに本づく。日の晦きないふ。【九】宋玉悲　宋玉が秋について悲みし如き悲みないふ、玉は秋の悲みを旅の寂しさにたとへて、憭慄兮若在遠行といへり。

【題義】雨についてのぶ。大暦元年正月八日、雲安にての作。

【詩意】立春の節からかけてふつてゐるくろつぽい甲子（正月八日）の日のあめ。それにあつくて輕いうちはに向きあつてゐねばならぬし、いまごろから葛かたびらをきるのではこれでよいのかと自分ながら疑はれる。この雨はこまかで煙がつけ加はつてやつとその色がみえるし、雨脚は風に引つばられて更に絲のごとくほそくみえる。之がために晝も巫山の夕暮れであるかの樣な感じがあり、兼ねて宋玉が秋の悲さをたとへた旅心の樣なさびしさをさそふのである。

南楚

南楚

南楚青春異。暄寒早早分。　南楚青春異なり、暄寒早早に分る。

無名江上草。隨意嶺頭雲。　無名江上の草、隨意なり嶺頭の雲。
正月蜂相見。非時鳥共聞。　正月蜂相見る、非時鳥共に聞く。
杖藜妨躍馬。不是故離羣。　杖藜躍馬を妨げむ、是れ故に羣を離るるならず。

【字解】【一】南楚　雲安は古の楚の西南にあり、故に南楚といふ。【二】異　他地とことなる。【三】喧寒　あたたかさ、さむさ。【四】蜂相見　相見はこちらが蜂と相見るをいふ。【五】非時　時候はづれ。【六】鳥共聞　共聞は衆人と共にきく義ならん。【七】杖藜　あかざのつゑをつく、自己をいふ。【八】躍馬　少年馬をおどらして遊ぶものをいふ。【九】離羣　衆人のむれからはなれて孤獨でゐること。

【題義】南楚卽ち雲安の春の景情をのべた詩。尾二句によるに他より出遊のさそひをうけしときよめるものなるべし。大曆元年正月雲安にての作。

【詩意】楚の南方は春の樣子が他のところとちがひ、あつさむさが早くはつきりわかれる。正月だのにいまはや名も知らぬ江上の草が萌えだし、嶺のうへの雲はおもひおもひにただようてゐる。蜂にもおめにかかるし、時候はづれの鳥のなきごゑもだれもがともにきく。このとき自分は藜の杖をつく樣な老人が馬を躍らしてとびまはる少年のじやまになつてはならぬとおもうてひつこんでゐるのである。ことさら人の羣から離れてゐるのではないのである。

水閣朝霽奉簡雲安嚴明府　　水閣の朝霽に雲安の嚴明府に簡し奉る

東城抱春岑。江閣鄰石面。　東城春岑を抱く、江閣石面に鄰る。
崔嵬晨雲白。朝旭射芳甸。　崔嵬晨雲白く、朝旭芳甸を射る。
雨檻臥花叢。風床展書卷。　雨檻花叢に臥し、風床書卷を展ぶ。
鉤簾宿鷺起。丸藥流鶯囀。　簾を鉤すれば宿鷺起り、藥を丸にすれば流鶯囀る。
呼婢取酒壺。續兒誦文選。　婢を呼びて酒壺を取らしめ、兒に續しめて文選を誦せしむ。
晩交嚴明府。矧此數相見。　晩に嚴明府に交はる、矧んや此に數〻相見るをや。

【字解】【一】水閣・江閣　いづれも江邊の閣なり、日滿樓前江霧黄の江樓もおなじ。【二】石面　山の岩石の表面。【三】芳甸　甸は郊外、芳は草花のにほひあるをいふ。【四】鉤簾　すだれを卷きてかぎに上すこと。【五】丸藥　くすりをまろめて丸藥をつくること。【六】續兒誦文選　「文選」は梁の昭明太子撰する所、詩賦文章を集めし書の名。兒童に日日之を諷讀せしめ、前日のあとをつづけしむるなり。仇氏は「兒が文選を誦するを續ぐ」とよみて、こどもが忘れたあとをおやぢたる作者がついで暗誦すと釋せるは恐らくは是に非す。

【題義】雲安の寓居の水邊の閣のあさばれに雲安の縣令嚴某に手紙としてやつた詩。大曆元年春、雲安にての作。

【詩意】ここの東城は春の岑を抱いてゐる、自分の居る江閣はその山の巖石の面にとなりあうてゐる。岩のつみかさなつたところに晨の雲が白くよこたはり、あさひの光は草花のさきにほうた郊外までを射てゐる。自分は雨のをりの檻には花のくさむらによりそうて臥し、風のそよふく床には書卷をひろげて讀む、簾を鉤にまきあげると江にとまつてゐる鷺がたちあがつて飛んだり、丸藥をまるめてゐると枝うつりする鶯がないたりする。また婢を呼んで酒壺をもつてこさせたり、こどもらに前日のあとをつづけて「文選」をよませたりする。(これが自分の近狀だ)。自分は晩年になつて嚴明府に交際することになり、まして昨今の樣にたびたび面會できるのではいよいよ之をよろこばしくおもうてゐる。

杜鵑

西川有杜鵑。東川無杜鵑。
涪萬無杜鵑。雲安有杜鵑。
我昔遊錦城。結廬錦水邊。
有竹一頃餘。喬木上參天。
杜鵑暮春至。哀哀叫其間。

杜鵑

西川に杜鵑有り、東川に杜鵑無し。
涪萬に杜鵑無し、雲安に杜鵑有り。』
我昔錦城に遊び、廬を結ぶ錦水の邊。
竹有り一頃餘、喬木上天に參はる。
杜鵑暮春に至る、哀哀其の間に叫ぶ。

我見常再拜。重是古帝魂。
生子百鳥巢。百鳥不敢嗔。
仍爲餧其子。禮若奉至尊。』
鴻雁及羔羊。（一）有禮太古前。（二）
行飛（三）與跪乳。（四）識序如知恩。（五）
聖賢古法則。（六）付與後世傳。
君看禽鳥情。猶解事杜鵑。』
今忽暮春間。値我病經年。
身病不能拜。涙下如迸泉。』

我見て常に再拜す、是れ古帝の魂なるを重んず。
子を生む百鳥の巢、百鳥敢て嗔らず。
仍ほ爲に其の子に餧はしむ、禮至尊に奉ずるが若し。』
鴻雁及び羔羊、禮有り太古の前。
行飛と跪乳と、序を識り如恩を知る。
聖賢古法則、後世に付與して傳へしむ。
君看よ禽鳥の情、猶ほ杜鵑に事ふるを解す。』
今忽ち暮春の間、値ふ我が病みて年を經るに。
身病みて拜する能はず、涙下りて迸泉の如し。』

【字解】本篇中、杜鵑に關することは多く已に杜鵑行巻十の四一三頁に見えたれば、ここに解かず。用語も已に屢〻見えしものは解を略す。【一】鴻雁及羔羊　雁と羔とについていふなり。古代雁と羔とは交際の進物として用ひられたり。「周禮」大宗伯職に「卿は羔を執り、大夫は雁を執る、」とみゆ。【二】有禮　董仲舒の「春秋繁露」に、雁には行列あり、羔は其の母に飲むときは必ず跪く、禮を知る者に類す、故に以て贄となす、とみえたり。【三】行飛　行列をなして飛ぶ、雁についていふ。【四】跪乳　ひざまづいて母の乳をのむ、羔についていふ。【五】識序如知恩　如の字、是陽如爾のごとく而の字の義に見て可なり。識序而知恩の意、識序とは順序をしること、即ち上の行列をなしてとぶこと。知恩とは母親の恩を知ること、即ち上の跪乳のこと。【六】古法則　「周禮」に見ゆ

るごとき古代の禮儀の規則。

【題義】杜鵑について感じたことをのべたうた。大暦元年春、雲安にての作。

【詩意】蜀の西部西川には杜鵑が有るが、その東部東川にはゐない。涪州・萬州には杜鵑がゐないが、雲安にはゐる。』自分はむかし成都の錦官城にあそんで廬を錦江のほとりに結んだ。そこには百畝ばかりの竹林があり喬木はたかく天にまじはるほどであつて、春の暮になるとほとゝぎすがやつて來てかなしげにその間になきさけんだ。自分はそれをみつけるといつも再拜した、それはほとゝぎすがむかしの蜀の帝王の魂だといふからそれを尊重したのである。ほとゝぎすはその子を他のいろいろの鳥の巣にうみつけるが、他の鳥はそれをおこらない、さうしてそのまゝほとゝぎすの子に餌をあたへて飼うてやり、之に奉仕する禮のうやうやしさはまるで天子にでもつかへる樣である。』雁や羔も太古には禮を知つてゐた。すなはち雁は行列を爲して飛ぶから兄弟長幼の順序を識り、羔は母親の乳をのむに跪いて飲んで親の恩を知つてゐた。聖人賢人はそこを取つて古の禮法を定め進物には卿は羔、大夫は雁の贄を用ふることとして後世にそれを傳へさせた。諸君看よ、禽獸でさへ杜鵑に事へることをこころえてゐるではないか。』ところが忽ち今春の暮にあたつてわたしのながく病んでゐるときにであうてここのほとゝぎすが鳴く。それをきゝつけても自分は病氣だから成都の時とちがつて拜することができなくて、やるせない涙がほとばしる所の泉のごとくくだるのである。』

子規

峽裏雲安縣。江樓(二)翼瓦齊(三)。
兩邊(四)山木合(五)。終日子規啼。
眇眇(六)春風見(七)。蕭蕭(八)夜色淒(九)。
客愁那(十)聽此(十一)。故(十二)作傍人低(十三)。

子規(一)

峽裏の雲安縣、江樓翼瓦齊し。
兩邊山木合し、終日子規啼く。
眇眇として春風に見え、蕭蕭として夜色淒たり。
客愁那でか此を聽かむ、故に人に傍ひて低るるを作す。

【字解】【一】子規　ほとゝぎす。子規と杜鵑と兩種なりとの說あれど恐らくは同じものなるべし。【二】江樓　この樓は江邊の樓、自己の寓居をいふなるべし。【三】翼瓦齊　翼瓦は屋簷の瓦が鳥の翼のごとくはれあがつてゐるをいふ、齊とは列をなす多くの瓦がそろつてみえるをいふ。【四】兩邊　人家の兩側。【五】合　しげりてとざす。【六】眇眇　小さくみゆるさま。【七】見　子規がみゆる。【八】蕭蕭　しづかなさま。【九】夜色淒　晝もくらくて夜の色つめたきがごとくおぼゆ。【十】那　なんぞ、いかでか。【十一】此　子規の聲。【十二】故　故意。【十三】傍人低　ひくく人につきそひてとぶ。

【題義】子規をきゝてよめる詩。大暦元年春、雲安にての作。

【詩意】峽の雲安縣。ここは江樓の簷の瓦が鳥の翼の樣にみえつつそろうてならんでゐる。兩側には山木が鎖し、ひねもす子規がなく。その姿は春風に遠く小さく見え、そのなくときは木立ちしづかに夜の景色の樣おぼえてつめたく感ずる。たびの愁をもつ自分にはどうしてこのこゑをきくにたへられようぞ。しかるに彼の鳥はわざと人につきそうてひくくとんでなく。

客居

(一)客居所居堂、前江後山根。
(二)下塹萬(三)尋岸、蒼濤鬱飛翻。
(四)葱青衆木梢、邪(五)豎雜(六)石痕。
子規晝夜啼、壯士斂(七)精魂。
峽開四(八)千里、水合數百源。
人虎相半居、相傷終兩(九)存。』
(一〇)蜀麻久不來、呉(一一)鹽擁(一二)荊(一三)門。
(一四)西南失(一五)大將、商(一六)旅自星(一七)奔。
(一八)今又降(一九)元戎、已聞動(二〇)行軒。
(二一)舟子候(二二)利涉、亦憑(二三)節(二四)制尊。』
我在(二五)路中央、生(二六)理不得論。
臥愁病(二七)脚廢、徐歩視小(二八)園。
(二九)短畦帶碧草、悵望思(三〇)王孫。
(三一)鳳隨其凰去、籬(三二)雀暮喧繁。
(三三)覽物想故(三四)國、十(三五)年別荒(三六)村。
日暮歸幾(三七)翼、北(三八)林空自昏。』
(三九)安得覆(四〇)八溟、爲君洗乾坤。
(四一)稷契易爲力、犬(四二)戎何足(四三)呑。
(四四)儒生老無成、臣子(四五)憂四(四六)藩。
(四七)篋中有(四八)舊筆、(四九)情至時復援(五〇)。』

客居

客居居る所の堂、前には江後には山根。
下塹は萬尋の岸、蒼濤鬱として飛翻す。
葱青なり衆木梢、邪豎石痕雜はる。
子規晝夜啼く、壯士精魂を斂む。
峽は開く四千里、水は合す數百の源。
人虎相半して居る、相傷ふも終に兩存す。』
蜀麻久しく來らず、呉鹽荊門に擁せらる。
西南大將を失ふ、商旅自ら星奔す。
今又元戎を降す、已に聞く行軒を動かすと。
舟子利涉を候ふ、亦憑る節制の尊。』
我路の中央に在り、生理論ずるを得ず。
臥して愁ふ病脚の廢するを、徐歩して小園を視る。
短畦碧草を帶ぶ、悵望王孫を思ふ。
鳳其の凰を隨へ去る、籬雀暮に喧繁なり。
物を覽て故國を想ふ、十年荒村に別る。
日暮幾翼か歸る、北林空しく自ら昏し。』
安んぞ得む八溟を覆へし、君が爲に乾坤を洗ふことを。
稷契 力を爲し易し、犬戎何ぞ呑むに足らむ。
儒生老いて成る無し、臣子四藩を憂ふ。
篋中舊筆有り、情至りて時に復た援く。』

【字解】【一】客居　雲安にての寓居をいふ、卽ち上來みえたる江樓・水閣と稱するものと同じものをさす、詩中にのべたる位置・景物によりて知りうべし。【二】下塹　したの「ほり」、「ほり」とは絕壁にはさまれたる江流を「ほり」と見なしていへり。【三】萬尋岸　尋は八尺。【四】葱青　しげりてあをし。【五】邪豎　ななめ、たて、石の狀をいふ。【六】雜石痕　石痕とは石の痕迹、石の形狀をさす。【七】斂精魂　斂とは收縮さすこと、精魂はたましひ。【八】四千里　海口までたざつといふ。【九】兩存　兩とは人と虎とをいふ。以上は居堂の樣子をのぶ。【一〇】蜀麻　蜀地に產する「あさ」。【一一】呉鹽　江蘇省地方に產する「しほ」。【一二】擁　だきかかへる。擁せらるとはそこに積んでもつてこられるをいふ。【一三】荊門　山の名、荊州にあり。【一四】西南　成都をさす。【一五】失大將　大將は節度使郭英乂をいふ。永泰元年閏十月、郭英乂、崔旰に殺され蜀中大に亂る。【一六】商旅　商人、

旅客。【一七】星奔　星の散るごとくみだればしる。【一八】今又　今は作詩の時をさす。【一九】降元戎　元戎は副元帥杜鴻漸をさす、蜀中亂れたるにつき、朝廷は大曆元年二月、杜鴻漸を以て山南西道劍南東西川副元帥となす。【二〇】動行軒　動はうごかして出發すること、行軒とは旅行にでる馬車をいふ。【二一】舟子　舟人。【二二】候利涉　候はうかがふ、まつ、利涉は都合よく江の往來をすること、「易」に利レ涉ニ大川一の文みゆ。【二三】憑　おかげ。【二四】節制尊　節制は元帥の軍事をきりもりする權をいふ。以上は蜀中の出來事をのぶ。【二五】路中央　成都と荊州とのなかほど。【二六】生理　くらしむきのこと。【二七】病脚廢　びやうきのあしがきかなくなる。【二八】小園　寓居の宅のには。【二九】短畦　畦はこみち。【三〇】思王孫　「楚辭」の招隱士篇に、王孫游兮不レ歸、春草生兮萋萋とみゆ、王孫は貴公子、貴公子が旅にでてなるた留守居のものが思ふ、春のわか草はしげり生じたが王孫はまだかへつてこぬと。此句、余は作者が旅客としての自分自身を客觀していふものとみる。（仇氏は祿山の亂に賊が宗室を屠戮せしによりそれを思ふなりといへり、其說は「哀王孫」の詩の王孫などとおなじとみるなり。又或は屈原をさすの說あり。今皆取らず。）【三一】鳳隨其凰去　此句も司馬相如のことをかりて作者自己のことをいふものとみる。相如、卓文君に對して歸鳳求凰の曲を詠ず、句意は自己が妻をしたがへつつ故鄕にはなれゐることをいふならん。【三二】籬雀　これは裏面に他のつまらぬ人人をそれとなくたとへしならん。【三三】覽物　物は景物。【三四】故國　長安洛陽をさす。【三五】十年　至德二載より大曆元年までをいふ。【三六】荒村　上の南京の村をさす。【三七】幾翼　いくつかの鳥。【三八】北林　小園の北のはやし。以上は小園を觀て故國を思ふ。【三九】安得　希望をいふ。【四〇】覆八溟　覆は水をひつくりかへすこと、八溟は八方のひろうみ。【四一】易爲力　德業を立つるにいとたやすし。【四二】犬戎　吐蕃・黨項等外寇をさす。【四三】何足吞　併合するまでもなし、たやすく併呑し得。【四四】儒生　自己をさす。【四五】臣子　臣たり子たる身分のもの、自己をさす。【四六】四藩　藩とはまがき、藩屏の藩、四方の邊境をいふ。【四七】篋　はこ。【四八】舊筆　これまでからあるふで。【四九】情至　感情の生じたとき。【五〇】援　ひく、とる、筆をもつこと。老身の感慨をのべて結ぶ。

【題義】雲安の寓居にて感ずるところをのべた詩。詩中の事實により大曆元年三月頃の作と推す。

【詩意】自分の寓居してすんでゐる堂は前には長江がありうしろには山の根もとがある。下方の壍には一萬尋ほどの高い岸がつつたち、あをい濤がさかんにひるがへつてをる。それからおほくの木のこずゑがあをみてしげりよこたて縱橫の石痕とまじはつてをり、よるもひるも子規がなき、之をきくときはあたら壯士もたましひをちぢめるほどかなしさうだ。峽は前程四千里の遠きをひらき、水は數百川の源からくるものをよせあつめてゐる。人と虎とが半分半分にすまつてゐるがたがひに傷害せしめながらも兩方ともいつしよに生存してゐる。』ちかごろ上流からは蜀の麻が久しくこず、下流では吳の鹽が荊門のあたりでとめられてゐる。西南、蜀では大將（郭英乂）を失くしたので商人旅客はしせんみだれてにげはしる、こんどこのたびは元帥（杜鴻漸）がさしくだされ、もはや馬車が出發したと聞く、それで舟人らは都合よく江の往來ができるかとまつてゐるがこれといふも軍權の尊いおかげといふべきだ。』自分はちやうど荊・蜀の途中にゐるが、くらしむきのことはあひかはらず方法はたたぬ。臥て脚が役にたたなくなつたことをしんぱいしながら、そろそろあるいて小さい園をながめてみる。そこには短いこみちが碧の草をおびて生えてゐるのでむかしの人が旅にゐる王孫を思うた樣に自分もうらめしさうにそんなひとを思うてみる。我我夫婦は鳳が凰をしたがへてゐる樣に故鄕からはなれて飛んでゐるが、そのそばにはまがきの雀がやかましくたくさんさへづつてゐる。物をみるにつけて自分は故國のことを想ふ、もはや十年もあれた村に別れてゐるのだ。日が暮れるのに幾羽の鳥がね

ぐらに歸るのか、北の林は空しくくらくなりつつある。』どうしたならば八方の大海の水をぶちまけて吾が君のために天地を洗ひきよめることができよう。若し稷・契のごとき臣さへあれば仕事をするになんでもないのであつて犬戎（外夷）のごときはたやすく併呑しうるのである。儒生は年がおいてなにごともしでかすことなく、臣子としてただ四方の國境のことをしんぱいしてゐる。だから感情のわいたときは篋のなかのつかひふるしの筆をとつてかくのべてみるのである。』

石硯　【原注】(一)平侍御者。

石硯　【原注】平侍御なる者なり。

(二)平公今(三)詩伯、(四)秀發吾所ㇾ羨。
(五)奉ㇾ使(六)三峽中、(七)長嘯得₂石硯₁。』
(八)巨璞(九)禹鑿餘、異狀君獨見。
其滑乃波濤、其光或雷電。
(一〇)聯坳各(一一)盡ㇾ墨、(一二)多水遞隱見。
(一三)揮灑(一四)容₂數人₁、(一五)十手可ㇾ(一六)對ㇾ面。』

平公は今の詩伯、秀發吾が羨む所。使を奉ず三峽の中、長嘯石硯を得たり。』巨璞禹の鑿餘、異狀君獨り見る。其の滑は乃ち波濤、其の光は或は雷電。聯坳各〻墨を盡す、多水遞に隱見す。揮灑數人を容る、十手面に對す可し。』

(一七)比₂公頭上冠₁、(一八)貞質未ㇾ爲ㇾ賤。
當₂公(一九)賦₁佳句₁、(二〇)況得ㇾ(二一)終₂清宴₁。
公含₂(二二)起草姿₁、(二三)不ㇾ遠(二四)明光殿。
(二五)致₂于丹青地₁、知汝(二七)隨₂(二八)顧眄₁。』

公が頭上の冠に比するに、貞質未だ賤しと爲さず。公が佳句を賦するに當りて、況んや清宴を終ふるを得るをや。公起草の姿を含む、遠からず明光殿。丹青の地に致されむ、知る汝が顧眄に隨ふことを。

【字解】【一】平侍御者　これは詩の首句の平公を說明せる語にして題下の注にはあらざるべし。【二】平公　作者の注によれば侍御史平某といふものなり。【三】詩伯　詩壇の長。【四】秀發　ひいであらはれる。【五】奉使　天子の使命をうけ侍御史として來りしこと。【六】三峽　已にみゆ。【七】長嘯　ながくうそぶく、閑適のさまなり。以上硯を得るをいふ。【八】巨璞　大なるあらたま。【九】禹鑿餘　禹王が江をほりわりしときのあまりもの。【一〇】聯坳　くぼんだところがつらなつてゐる。【一一】盡墨　墨をすつたとき墨色を十分だしきるをいふ。【一二】多水　石にうるほひありてじめじめしてゐるさま。【一三】揮灑　筆をふるひ墨汁をそそぐ。文字を書くをいふ。【一四】容　いる、さしつかえなきをいふ。【一五】十手　五人。【一六】對面　石の面にむかふ、墨をするためなり。以上硯の良きをいふ。【一七】頭上冠　舊注に御史は獬豸冠をかぶる、獬豸は一角獸にて邪なるものに觸る、以て石質の剛正に比すといへり。余おもふにここの冠は鐵冠の鐵のかたさと硯石のかたさとを比べしなるべし、故に次句に貞質とあるなり、杜氏通典に、侍御史、一に柱後史と名づく。冠、鐵を以て柱と爲すを謂ふ、審固撓まざるを言ふなり、とみゆ。【一八】貞質　かたき實質。【一九】賦佳句　よき句をつくる。【二〇】況得　此の二字は當公の句の上に在るものとみるべきものなるべし。【二一】終清宴　宴は燕なり、安なり、酒宴、閑居、みなふくむ。仇注に賦佳句と終清宴と二事なりとし、清宴をひまのとき臨書することとけるはいかがにや。【二二】起草姿　明光殿に詔敕を起草する姿、本卷「十二月一日」三首の第一首をみよ。【二三】不遠　近きに在るをいふ。【二四】明光殿　上の「十二月一日」詩をみよ、不遠明光殿とは明光殿不ㇾ遠の意。【二五】致　そこへもつてゆかるるをいふ。

ふ。【二六】丹青地　仇注は「丹墀青瑣の間」ととき、宮殿の土檨や門のそばの意とせり。しかし是は「鹽鐵論」の公卿者神化之丹青を用ひ、丹青地は公卿の地の義をとれるならん。【二七】汝　硯をさす。【二八】顧眄　平侍御がふりかへりてみること、致予丹青地、知汝隨顧眄は知汝隨顧眄、致予丹青地、のごとくおきかへてみるべし。以上は硯よりして平侍御の榮達を期するをいふ。

【題義】侍御史平某の得たる石の硯についてよめる詩。大曆元年雲安にての作。

【詩意】侍御史平公は今の詩伯であり、其の才華のすぐれてあらはれてゐることは自分の羨む所である。公は三峽の中に使命を奉じてこられ、ひまなときに石の硯を得られた。』その大なる璞は禹が江をうがつたときのあまりものの樣であり、そのふしぎな形狀は公がひとり之をみとめた。其の滑かなことは波濤のごとく、光りは雷電の樣である。石のくぼみがいくつもつらなつてをるがそれはいづれも磨る墨の色をよくださせる、また多くの水けがたがひにみえがくれしてうるほうてをる。この硯で墨をするには五人のものがそれにむかつてよいし、その墨汁で二三人が筆をふるうてもさしつかへがない。』公のいただく鐵冠とくらべても硯のかたさはまけはせぬ。まして公がよい句でもつくるときには十分にそのひまな機會を終へしめることができる。公は明光殿で詔敕を起草すべき姿をもつてをられるから、明光殿は公の咫尺の近くに在る。汝硯もきつと公の愛顧にともなつて公卿の坐する地位にもちゆかれるであらう。』

贈鄭十八賁（一）

鄭十八賁に贈る

（二）溫溫士君子、令我懷抱盡。（三）　溫溫たる士君子、我をして懷抱を盡くさしむ。
（四）靈芝冠衆芳、安得闕親近。（五）』　靈芝衆芳に冠たり、安んぞ親近を闕くことを得む。』
（六）遭亂意不歸、（七）竄身跡非隱。（八）　亂に遭ふ意ふに歸らざらむ、身を竄す跡隱に非ず。
（九）細人尙姑息、（一〇）吾子色愈謹。（一一）（一二）　細人は姑息を尙ぶ、吾子色愈〻謹めり。
（一三）高懷見物理、（一四）識者安肯哂。（一五）（一六）　高懷物理を見る、識者安んぞ肯て哂はむ。
（一七）卑飛欲何待、捷徑應未忍。（一八）　卑飛何をか待たむと欲する、捷徑應に未だ忍びざるなるべし。
示我百篇文、詩家一標準。（一九）』　我に示す百篇の文、詩家の一標準なり。』
（二〇）羇離交屈宋、牢落値顏閔。（二一）（二二）（二三）　羇離屈宋に交はる、牢落顏閔に値ふ。
水陸迷畏途、藥餌駐修軫。（二四）（二五）（二六）　水陸畏途に迷ひ、藥餌修軫を駐む。
古人日已遠、靑史字不泯。（二七）（二八）　古人日に已に遠し、靑史字泯びず。
（二九）步趾咏唐虞、追隨飯葵菫。（三〇）（三一）（三二）（三三）　步趾唐虞を咏じ、追隨葵菫を飯す。
數杯資好事、異味煩縣尹。（三四）（三五）（三六）（三七）』　數杯好事に資る、異味縣尹を煩はす。』
心雖在朝謁、力與願矛盾。（三八）（三九）　心朝謁に在りと雖も、力願と矛盾す。

抱ㇾ病排（四〇）二金門（四一）一、衰容（四二）豈爲ㇾ敏（四三）。』　病を抱きて金門を排す、衰容豈に敏を爲さむや。』

【字解】【一】鄭十八賁　本卷、前に雲安九日鄭十八攜酒詩あり。【二】温温　おとなしき樣子。【三】懷抱盡　おもふ所をすつかり語らせる。【四】靈芝　仙草なり、賁に比す。【五】親近　ちかづきしたしむこと。以上は全篇の大意をのぶ。【六】遭亂二句　仇氏は鄭をいふとなせども余は舊說のごとく作者自身をいふとみる。此生那老ㇾ蜀、不ㇾ死會歸ㇾ秦、（奉送嚴公入朝十韻）などの句よりすれば不歸といふは矛盾に似たるも然らず、ここは歸るを得ざらんかと恐るるをいふものにて歸らずといふには非ざるなり。【七】意不歸　意は意中にて度るなり、おもふに歸る能はざらんの意。【八】跡非隱　卽ち行歡非隱淪の意、隱は隱遁者。【九】細人　小人。【一〇】尙姑息　「禮記」檀弓上に細人之愛ㇾ人也以二姑息一とみゆ、鄭注に息猶ㇾ安也、言三苟容取ㇾ安也、とあり、姑息は當座の安心をなさせること、案するに鄭さきに酒を攜ふることあり、姑息は必ず愛するに飲食の物を以てするをさすならん。【一一】吾子　賁をさす。【一二】色　こちらに敬事する顏色。前の答鄭十七郎一絕に於て作者は賁を鄭當時の客を好むに比し賁が弟を陳雲の文才あるに比したり。之によれば鄭の兄弟必ず文章に於て作者を尊敬して之に誠心を以て事へしものならん。故に色薦の語あり。【一三】高懷　高尙なむねのうち。【一四】物理　事物の道理。【一五】識者　識見すぐれた人。【一六】哂　笑ふ。【一七】卑飛　ひくくとぶ、鳥にたとふ、立身せずにゐるをいふ。【一八】捷徑　ちかみち、官途へでるに不正なる手段によりてすすむをいふ。【一九】標準　めじるし、てほん。以上は鄭の才德をいふ。【二〇】羇離　たびにて親故とはなればなれのみのうへ。【二一】屈宋　屈原・宋玉、以て鄭に比す。【二二】牢落　さびしきさま。【二三】顏閔　顏回・閔損、孔子の德ありし弟子、以て鄭に比す。【二四】長途　おそろしき道路。【二五】藥餌　くすり、滋養食。【二六】駐修軫　軫は車のよこぎ、修はながし、駐は止む、車を動かさずにゐること。【二七】青史　青竹で編んだかきもの。【二八】字不泯　文字はほろびぬ、記錄の永存すること。【二九】步趾　あしをもつてあゆむ。【三〇】咏唐虞　堯舜の時代のことを口ずさむ。【三一】追隨　つきしたがふ。【三二】飯　食するをいふ。【三三】葵莧　葵はわさびの類、莧は「のぜり」。【三四】賽　よる、とる。【三五】好事　ものずきの人、揚雄傳にみゆ。【三六】異味　かはつた滋味。【三七】縣尹　縣令をいふ。雲安の縣令嚴某をさすならん。以上は鄭との交際をのぶ。【三八】朝謁　參朝謁見する。【三九】矛盾　衝突してくひあはぬこと。「韓非子」にみゆ。【四〇】排　門をおしひらく。【四一】金門　金馬門、宮門をいふ。【四二】衰容　老衰のすがた。【四三】豈爲敏　敏なるを得ざるなり、敏は「とし」、すばやくすること、敏の字は排の字へかかる。以上は歸朝し能はざるを歎ず。

【題義】　鄭賁に贈つた詩。大曆元年雲安にての作。

【詩意】　君は溫厚の君子であつて自分をして十分かくす所なく思ひをのべつくさせることのできる人である。たとへば君は多くの芳ばしい草木のうへに位する靈芝のごときものである、どうして君と親しくすることをかくことができよう。』　自分は騷亂にであうてあるひは故鄕へかへれぬかもしれぬ。こんな山の中に身をかくしてはをるが隱遁者の行迹をまねてをるのではない。かかるをりに、世の小人ならばいたづらに姑息の愛を以て人と交るのに、君はさうでなく交れば交るほど敬謹な顏色で自分につきあはれる。君の胸中は凡俗を拔いてよく事物の道理を見てをるのである、君の自分に對するありさまを見て識見ある人人はどうしてそれをわらふことがあらう。(笑ふものは衆愚ばかりだ)。君はまだひくい空を飛んでをるがこれからはどうするつもりか、まさか捷徑をして逆な手段をとることは忍びぬところであらう。このごろ見せられた君の文章百篇を見るに、詩家の一の標準といふべきものである。』　自分は旅の身で屈原・宋玉ともいふべき君に交り、さびしいうちに顏回・閔損にも比すべき君にであうた。自分は水も陸もおそろしい途なのでどこをとほるべきかに迷ひ、病氣のため藥餌の必要

で此地に車をとどめてをるのだ。古人は日日我我とはとほくへだたるが、青史のうへに於ける彼等に關する文字は決してほろびない。我我はその古人をしたうて、あるきながら堯舜のことをくちずさんだり、ともにあひ隨つて葵菫の野菜をたべ、あるひは好事者から供せられる數杯の酒により、或は縣令を煩はしてかはつた味のごちそうをもらひうけたりしてをる。』自分の本心は都へかへつて朝謁するに在るのだが心の願と體力とは矛盾してをる。病氣をもちながら金門をおしひらいて進まうとしたところが、このやつれすがたではどうして敏速にやることができようぞ。』

別蔡(一)十四著作

賈(二)生慟哭後。寥落無其人。
安知蔡夫子。高義邁(三)等倫。
獻(四)書謁皇帝。志已清風塵。
流涕灑丹(五)極。萬(六)乘爲酸辛(七)。
天地則瘡(八)痍。朝廷多正臣。
異(九)才復間(一〇)出。周(一一)道日惟新。』
使(一二)蜀見知己(一三)。別顏始一伸(一四)。
主(一五)人薨城府(一六)。扶(一七)櫬歸咸秦(一八)。
巴(一九)道此相逢。會我病江濱。
憶念鳳翔(二〇)都。聚散俄十春(二一)。』
我衰不足道。但願子意(二二)陳。
稍令社稷安。自契(二三)魚水親。
我雖消渴(二四)甚。敢忘帝力勤。
尚思未朽骨(二五)。復覩耕桑(二六)民。』
積水駕(二七)三峽。浮龍倚長津(二八)。
揚(二九)舲洪濤間。仗子(三〇)濟物(三一)身。
鞍馬下(三二)秦塞。王城(三三)通北辰。
玄(三四)甲聚不散。兵久食恐貧。
窮(三五)谷無粟帛。使者(三六)來相因(三七)。

蔡十四著作に別る

賈生慟哭の後、寥落其の人無し。
安んぞ知らむ蔡夫子、高義等倫に邁ぐ。
書を獻じて皇帝に謁す、志已に風塵を清めむとす。
流涕丹極に灑ぐ、萬乘爲に酸辛なり。
天地は則ち瘡痍なるも、朝廷正臣多し。
異才復た間出す、周道日に惟れ新なり。』
蜀に使して知己を見る、別顏始めて一たび伸ぶ。
主人城府に薨す、櫬を扶けて咸秦に歸る。
巴道此に相逢ふ、會〻我江濱に病む。
憶念す鳳翔の都、聚散俄に十春なり。』
我が衰ふるは道ふに足らず、但願ふ子が意の陳べられむ「ことを。」
稍く社稷をして安からしめ、自ら魚水の親を契らむことを。
我消渴甚しと雖も、敢て忘れむや帝力の勤むるを。
尚ほ思ふ未朽の骨、復た覩む耕桑の民。』
積水三峽に駕す、浮龍長津に倚る。
舲を揚ぐ洪濤の間、仗る子が濟物の身。
鞍馬秦塞に下る、王城北辰に通せむ。
玄甲聚りて散せず、兵久しくして食恐らくは貧しからむ。
窮谷粟帛無し、使者來りて相因る。

若馮（三八）南轅（三九）吏。書札（四〇）到天垠（四一）』　若し南轅の吏に馮らば、書札天垠に到らむ。』

【字解】【一】蔡十四著作　著作は著作郎、官名、著作郎たる蔡某。【二】賈生　漢の賈誼、文帝のとき、時事につき流涕長大息す。【三】遇等倫　なかまよりもすぎる。【四】獻書謁皇帝　これ鳳翔の時の事をいふ、皇帝は肅宗なり。【五】丹極　極は棟（むなぎ）なり、丹ぬりのむなぎとは、うつくしきごてんをいふ。【六】萬乘　天子。【七】酸辛　悲しき思ひをいだくこと。【八】瘡痍　きず、人民の疲敝をいふ。【九】異才　非凡の人才。【一〇】間出　間は雜（まじはる）なり、雜出とは他の凡人のなかにまじりて出ること。【一一】周道　周代の王道、周は卽ち唐をいふ。以上は蔡の往年の忠義をいふ。【一二】使蜀　蜀へ使ひする。【一三】知己　成都の節度使郭英乂をいふ。【一四】伸　しわをのばす。【一五】主人　郭英乂をいふ。【一六】薨城府　成都でみまかりしこと。英乂は簡州に奔りしに、普州の刺史韓澄といふもの其首を斬りて崔旰に送りたり。英乂、必ず成都に殞せしならん、ここに城府に薨すといへるは事實を忌み、とりなしていへるなり。【一七】扶櫬　櫬は棺櫬。【一八】咸秦　咸陽、長安。【一九】巴道　夔州の道、雲安をさす。【二〇】鳳翔都　肅宗の時には今の陝西省鳳翔府扶風縣に臨時に鳳翔の都をおきたり。【二一】十春　十年なり、至德二載より今年まで正に十年なり。以上は雲安にて再會せることをのぶ。【二二】子意陳　陳は天子の前に鋪き陳ぶるをいふ。【二三】契魚水親　君臣の心の契合すること魚水の相親しむがごとし、蜀漢の劉備、諸葛亮のことをのべて、孤の孔明あるは猶ほ魚の水あるがごとしといへり。【二四】消渇　糖尿の病。【二五】未朽骨　血氣尙ほ存するをいふ。【二六】耕桑民　平和なる農民をいふ。蔡の平和につとむべきをいふ。【二七】駕　のりこえる。【二八】倚　よる、たのみにしてゐばる。【二九】揚舲　舲は窗ある舟。【三〇】杖　よる、あてにする。【三一】濟物　事物を成す。【三二】下秦塞　隴中（長安）地方のとりでに向つてくだる。【三三】王城通北辰　通北辰之王城の義。長安の城は帝位の在る所、北辰の座のごとし。（仇氏、王城を洛陽の城とし、洛陽より長安にゆくこととせり、順路は絡るも王城は長安城をさすならん。）【三四】玄甲二句　舊注多く成都の崔旰の亂をさすと爲す。浦氏ひとり京師の禁兵を指すと爲す。浦氏は此二句を下の使者來相因を敍せしものとみたるなり、なるほど作者が成都に居りての作ならばともかく雲安に在りて上に長安のことをのべ、急にここに成都のことを插むは前後を斷絕せしむるものなり、因つて浦氏に從ふ。玄甲はくろがねのよろひ。【三五】窮谷　峽中をさす。【三六】使者　中央より財物を徵求にくる使ひ。【三七】相因　ひきつづく。【三八】馮　憑なり、よる。【三九】南轅吏　車の轅棒を南にむける吏、南行する吏をいふ。【四〇】書札　てがみ。【四一】天垠　垠は岸なり、天垠は天のはて、峽中の地をさす、主としては雲安をいふ。以上送別の意をのぶ。

【題義】　著作郎蔡某が長安へかへるとき之に別れる意をのべた詩。大暦元年春、雲安にての作。

【詩意】　むかし漢の賈誼が時事についてしんぱいして慟哭した以後にはひつそりとしてその樣な國家を憂ふる人は無いのであるが、意外にも吾が蔡先生はその節義の高いことは同輩にとほくすぎてをる。まへかた皇帝（肅宗）に上書したときから已に天下の風塵を淸める志があつた。さうして涕をながしてごてんにそそいだので萬乘の天子もそれがためにものがなしい思ひをなされた。天地の間には人民がきずを負うてをるが朝廷には正直の臣が多く、非凡の人才がまたときにはまじつて出るので、周の王道は日日新になつてゆくのである。』君はこのたび蜀に使ひにきて知己の人（郭英乂）を見、久しぶりにその顏のしわをのばしたのだが、不幸にもあてにした主人（英乂）が城府でなくなられたので、その柩をたすけて長安の方へ歸らうとするのである。その途中ここの巴國の道で自分とであうたが、ちやうど自分は江のほとりで病氣をしてゐたのである。あの鳳翔の都のときのことをかんがへるとおたがひの聚散ははやくも十年をへだててゐるのである。』わたしは自分のからだが衰へたことはいはなくてもよい。ただあなたが天子の前で十分その意見をのべられんことを願ふ。さうして君臣の

あひだは魚と水となかのよい樣に契りあひだんだん社稷を安らかにさせてもらひたい。自分は消渴の病がひどいけれども吾が君が政事におつとめになつてゐることは忘れはしない。わたしの骨も老いたりともまだ朽ちぬし、ふたたび平和な耕桑に從事する人民をみたいものとかんがへてゐる。』つみかさなつた水は三峽の岸をのりこえる。うかべる龍は長い津をたのんでゐばつてゐる。そのあひだを君は艑を揚げて大きな濤をわけてゆく。萬事は事をしでかす力のある君のからだをあてにしてゐるのである。君は水路を了れば鞍馬にまたがつて秦塞へとくだり、北辰のある王城の方へと通過するのである。都では鎧武者が聚つて散じない、ながくいくさがつづいては兵卒の食糧が乏しいことであらう。そのためか、ここの峽中のやうなゆきつまつた谷になんにも粟帛もないのに朝廷から物をあさりにくる使者がひききりなしである。若し君は南にくる小吏でもあるときそのものにたのまれたならば、天のはてのここへでも君のおてがみは到着するのである。どうかてがみをよこしていただきたい。』

寄二常(一)徴君一

常徴君に寄す

白水青山空復春。　白水青山空しく復た春なり、

徴君晩(二)節傍(三)二風塵一。　徴君の晩節風塵に傍ふ。

楚(四)妃堂上色殊(五)レ衆。　楚妃堂上色衆に殊なり、

海(六)鶴堦前鳴(七)向レ人。　海鶴堦前鳴いて人に向ふ。

萬事糺(八)紛猶絶(九)レ粒。　萬事糺紛猶ほ粒を絶つ、

一官羈(一〇)絆實藏(一一)レ身。　一官羈絆實に身を藏す。

開(一二)州入レ夏知涼冷。　開州夏に入りて知る涼冷なるを、

不レ似雲安毒(一三)熱新。　似ず雲安毒熱の新なるに。

【字解】【一】常徴君　前に別二常徴君一詩あり。同じ人なり。黃鶴の說に、去年の秋、常徴君は作者を雲安に訪ひ、今開州に在るによりて作者この詩を寄せしなり、といへり。徴君とは隱士にして官に徴しいだされし者の稱なり。【二】晩節　晩年の節操。【三】傍風塵　世間のかざほこりにとなりて居る、役人をしてをるをいふ。【四】楚妃　燕姬趙女の類、楚の美人の意、徴君の才德をいふ。【五】色殊衆　衆女とちがつた美しい顏色を有す。【六】海鶴　海上にすむつる、鶴は自由なる生活を爲すもの、徴君の本來の性をたとふ。【七】鳴向人　人に向ふとは人にむかひて憐みを求むるさまなり。【八】糺紛　糺は糾に同じ、糾紛はもつれること、縣の事務多端にしてごたごたするをいふ。【九】絶粒　貧にして食糧なきをいふ、粒は米のつぶ。【一〇】羈絆　きづなに身をつながれる。【一一】藏身　微官に身をかくしおく。【一二】開州　夔州府開縣なり。【一三】毒熱　猛烈なる暑熱。

【題義】開州の小役人をしてゐる徴君常某に寄せた詩。大曆元年春、雲安にての作。

【詩意】さて水は白く山は靑くまた春になつた。このとき吾が徴君はその晩年世間のほこりにちかづいてをられる。あなたはなみなみならぬ美しい顏色をもつた堂上の楚妃の樣な人なのだがいまはきざはしの前で人に向うて悲鳴してゐる海上の鶴の樣なものになつてゐる。いろいろの事務がたくさんあつてせはしくはたらきながら食糧も無いほど貧乏であるが、一方からみればゐなかの小役人に身を

つながれてゐるのは實はそこに身を藏してゐるわけなのである。自分の知る所では夏にはいつたら開州の方はすずしく冷かで、ここの雲安に猛烈な暑熱が新に生ずるのとは似てもつかぬことであらう。（そちらがうらやましい）。

寄（一）岑嘉州　【原注】州據（二）蜀江外。

岑嘉州に寄す　【原注】州は蜀江の外に據る。

不見（三）故人（四）十年餘。　故人を見ざること十年餘、
不道故人無（五）素書。　道はず故人素書無しと。
願逢顏色關塞遠。　顏色に逢はむことを願へども關塞遠し、
豈意（六）出守（七）江城居。　豈に意はむや出守江城に居らむとは。
（八）外江（九）三峽且相接。　外江三峽且つ相接す、
（一〇）斗酒新詩終自疎。　斗酒新詩終に自ら疎なり。
（一一）謝朓每篇堪諷誦。　謝朓每篇諷誦するに堪へたり、
（一二）馮唐已老（一三）聽（一四）吹噓。　馮唐已に老ゆ吹噓するに聽す。
泊船（一五）秋夜經春草。　船を泊して秋夜より春草を經、
（一六）伏枕（一七）青楓限玉除。　枕に伏して青楓玉除を限る。
眼前所寄選何物。　眼前寄する所何物をか選ぶ、
贈子雲安（一八）雙鯉魚。　子に贈る雲安の雙鯉魚。

【字解】【一】岑嘉州　嘉州刺史岑參なり、參庫部郎より出されて嘉州刺史となる、杜鴻漸表して職方郎中兼侍御史となして幕府に列せしむ。刺史となりしこと今年にあるべきか。嘉州は眉州をへだてて成都府の南方に位す。今四川省嘉定府樂山縣治。【二】蜀江外　蜀の江外ならん、長江は成都の西南より眉州の中央を直南下して嘉州に至る、因つて嘉州を江の外といふ。【三】故人　岑參をさす、參は作者の親友にして彼に關する作は已に屢ゝ見ゆ。【四】十年餘　乾元元年、作者「奉答岑參補闕見贈」詩（卷六の五四一頁）あり。同二年に「寄彭州高使君適虢州岑長史參」詩あり。元年より今年大曆元年まで九年のみ、十年餘といふは作者の記憶の誤なり。【五】素書　素はしろ地のきぬ、素書は尺素書にて一尺の絹地にかいたてがみをいふ。【六】出守　中央より出でて太守となる。【七】江城　江にそうた城、嘉州の城をいふ。以上は別後のことをのぶ。【八】外江　即ち前の江外の意、嘉州の長江をさして外江といへるなり、成都の外江・中江・內江をさすには當らず。これは岑參の居處の水をあぐ。【九】三峽　これは作者の居處に近き峽をあぐ。【一〇】斗酒新詩　詩酒は兩人の用ふるものなるも、主として酒は自己に、詩は參についていふならん。【一一】謝朓　齊の文學者、詩句清麗を以て名あり、以て參に比す。【一二】馮唐　漢の文帝の時、唐、白首にしてなほ郎となる。以て自ら比す。【一三】聽　まかす。【一四】吹噓　世話して推薦すること、詳は卷三の二二二頁をみよ。以上は自他をのぶ。【一五】秋夜經春草　去年の秋、この雲安の地に來り、今年の春、草の生ずるにいたるをいふ。【一六】伏枕　病のまくらにふす。【一七】青楓限玉除　青楓は峽中にあるそれをいひ、玉除はうつくしき土椽なり、都の宮殿の玉除をいひ、還京する能はざるをいふ。上句の吹噓をうく。限とはかぎりさへぎらるるをいふ。【一八】雙鯉魚　一對のこひ、こひは手紙のしるしなり。

【題義】嘉州の刺史であり親友である岑參に寄せた詩。大曆元年春、雲安にての作。

【詩意】あなたから手紙が無いとはいはぬがしたしく御面會をせぬことが十年あまり（實は九年）になる。お目にかかりたくはおもふが關塞とほくへだたつてをるので、しかたがないとおもうてゐたの

309
65

に、意外にもこのたび地方へ太守としてでられ江ぞひの城に居らるるとのことである。』あなたのゐる外江と自分のちかくの三峽とはまあつづいてゐるのであるが、おのづと酒をくみ詩を示しあふことがまどほになつてをる。謝朓に比すべきあなたの詩は毎篇諷誦のねうちがある。馮唐のごとく老いてしまつた自分はもし推薦してくださるならおこころにまかすのみのことである。』自分はこの地に船を泊めて去年の秋の夜からことしの春の草の生ずるのをみるまでになつた。病の枕に伏しながら靑楓のためにみやこの宮殿の玉除のところから遮斷されてをる。てぢかにあるものでどんな物をえらんであなたに寄せ贈らうか、それは雲安でとれた一對の鯉である。』

終

續國譯漢文大成

文學部 二十三の上

309
65

帙 天

始

續國譯漢文大成

文學部 第二十三册（第六帙の上ノ三）

杜少陵詩集 下の上ノ三

吉田待郎氏 寄贈本

309
365

杜少陵詩集　卷十五

(一)移居(二)夔州作

居を夔州に移さんとして作る

伏枕雲安縣。遷居(三)白帝城。
春知(四)催柳別。江(五)與(六)放船清。
(七)農事聞人說。山光見(八)鳥情。
(九)禹功(十)饒斷石。且(十一)就(十二)土微平。

枕に伏す雲安縣、居を遷す白帝城。
春は知る柳を催して別れしむるを、江は放船の與に淸し。
農事人の說くを聞く、山光鳥情を見る。
禹功斷石饒し、且く就かむ土の微平なるに。

【字解】【一】移居　ゐばしよをうつす。【二】夔州　今四川省夔州府奉節縣治、雲安の下流二百四十三支那里にあり。【三】白帝城　奉節縣の東にあり、前漢の末、公孫述の築きし所の城なり。【四】催柳別　柳色をうながして人をして別るべからしむ。人と別るるときは柳條を折りそれを綰ねて記念とする習俗あり。【五】與　「爲めに」の意。【六】放船　ふねを江流にはなち出す。【七】農事二句　夔州の事を豫想していふ。【八】鳥情　鳥の喜ぶこころ。【九】禹功　禹の疏鑿のてがら。【十】饒　多し。【十一】就　こちらからそこへよりつく。【十二】土微平　すこしたひらな地面、夔州の地形をいふ。

【題義】雲安からひきうつつて夔州の方へゆかうとしたときの詩。大曆元年春晚、雲安にての作。

【詩意】自分は雲安縣で病の枕に伏してゐたがこんど夔州の白帝城の方へ住居をうつさうとおもふ。

春げしきは柳の芽をださせて別れの記念物をつくらせるやうにしてゐることがわかるし、江の水も自分の船出のために清んでくれてゐる樣だ。あちらでは農事ができると人のはなしにきくし、山の樣子はさだめしよろこんでゐる鳥のこころをもうかがひうるものがあるであらう。峽中では禹の疏鑿のおかげできれぎれの石が多いのでこまるが、これからまづすこし平な地面のあるところへよりつかうとおもふのである。

船下夔州郭宿（一）雨濕不得上岸（二）別王十二判官（三）

船夔州に下るとき郭宿す、雨に濕ひて岸に上ることを得ず、王十二判官に別る

依沙宿（四）舸船（五）石瀨月娟娟。　沙に依りて舸船宿す、石瀨月娟娟たり。
風起（六）春燈亂江鳴夜雨懸（七）。　風起りて春燈亂れ、江鳴りて夜雨懸る。
（八）晨鐘（九）雲岸濕（一〇）勝地（一一）石堂（一二）煙。　晨鐘　雲岸濕ふ、勝地石堂煙る。
（一三）柔艣（一四）輕鷗外。（一五）含悽覺（一六）汝賢。　柔艣輕鷗の外、含悽汝が賢なるを覺ゆ。

【字解】【一】郭宿　雲安縣の城のそとくるわで船でとまる。【二】上岸　上陸すること。【三】王十二判官　判官たる王某。【四】舸船　舸は大船なり、依沙宿舸船は舸船依沙宿と同義。【五】石瀨　石多きあさせ。【六】春燈　船につるしてあるともしび。【七】懸　遠方に高くかかる。【八】晨鐘　あしたの鐘のおと。【九】雲岸　雲の橫はつてゐる江岸。【一〇】勝地　風景のよきばしよ。【一一】石堂　石造の堂をいふ。舊注に夔州の勝處なりといへるも夔州とのみにては此詩と無關係なり、これは雲安に於ける王判官の居處を言ふに非ざれば文理通ぜざるなり、すこしく想像を逞しくすれば雲安の東二里に石城山ありといふ、王判官或は其地に堂を構へをりしに非ざるか。【一二】煙　雨ふりたればけぶるなり。【一三】柔艣　艣は櫓、船をこぎてやる木なり、柔とはふわりとやはらかにこぐをいふ。【一四】輕鷗外　かろく水にういてゐるかもめのそばに。【一五】含悽　ものがなしさを胸のうちにもつ。【一六】汝賢　汝は王判官をさす。鷗をさすといふ說あれどもそれにては王判官と別るる意がなくなるがゆゑに從ふ能はず。

【題義】自分の船が夔州へむけて下らうとしたとき、雲安の城のそとくるわでふながかりしてとまつた。そのをり雨がふつて地面がぬれたので上陸することができなかつた。それでこの詩をつくつて王判官に別れを告げた。大曆元年春晩、雲安を出發せんとするときの作。

【詩意】自分たちの乘る大船は沙はらのそばでとまつてゐる。石の多い淺瀨には月の光がきらきらうつくしくうごいてゐる。やがて風が吹きおこつて船につるしてある春の燈がみだれうごき、江の水音がどうつと鳴つて夜の雨が高く懸つてきた。そのうちに晨の鐘がなりわたつてきたが雲のゐる岸べはしめつてゐる。あなたの居らるるけしきのよい場所、石堂のあたりは煙つて目もとどかぬ。わたしはこのまま泛べる鷗をとほりぬけて柔かに櫓の音をさせて夔州へいつてしまう。別るるにあたつてものがなしさが胸にこもり、ただただ日ごろのあなたの賢かりしことがしみじみと感ぜられるのである。

漫成（一）一首

漫成　一首

江月去（二）人只數尺。　江月人を去ること只數尺、

風燈照夜欲（三）三更。　風燈夜を照らして三更ならむと欲す。

沙頭宿鷺聯（四）拳靜。　沙頭の宿鷺は聯拳靜に、

船尾跳魚撥（五）剌鳴。　船尾の跳魚は撥剌として鳴る。

【字解】【一】偶成　ふとできたこと。【二】去人　去は離るるをいふ。【三】三更　夜を五分して一分が一更なり、三更は夜半なり。【四】聯拳　仇注に羣聚の貌とせり、ただ集まるに非ずして鷺の一本脚が多くつらなるさまをいふならん。【五】撥剌　跳躍の聲なり、ぴちぴちといふおと。

【題義】雲安より夔州に向つて江をくだる際にどこかで船がかりせしをりふとよんだ詩。大曆元年春晚の作。

【詩意】江にのぞんだ月が我我からたつた二三尺はなれてみえる。風にあふられる燈は夜のくらがりを照らして夜半になりかけてゐる。沙べりに宿つてゐる鷺どもは靜にこぶしをならべて立つてゐるし、船尾の方ではぴちぴち魚のはねるおとがする。

客（一）堂

客堂

憶昨離少（二）城而今異（三）楚蜀。　憶ふ昨少城を離れしことを、而今楚蜀異り。

捨舟復深山。窅（四）窕一林麓。　舟を捨つれば復た深山、窅窕たり一林麓。

棲泊雲安縣。消（五）中內相毒。　棲泊す雲安縣、消中內相毒す。

舊疾甘（六）載來。衰年得（七）無〔弱〕足。　舊疾甘んじて載せ來る、衰年、〔弱〕足を得。

死爲殊（八）方鬼。頭白免（九）短促。　死して殊方の鬼と爲るも、頭白短促を免る。

老（一〇）馬終望（一一）雲。南（一二）雁意在北。　老馬終に雲を望む、南雁意北に在り。

別（一三）家長兒女。欲起慚筋（一四）力。　家に別れしより兒女長ず、起きむと欲するも筋力に慚づ。

客堂序（一五）節改。具（一六）物對羈（一七）束。　客堂序節改まる、具物羈束に對す。

石暄蕨（一八）芽紫。渚秀蘆（一九）笋綠。　石暄にして蕨芽紫に、渚に秀でて蘆笋綠なり。

巴（二〇）鶯紛未稀。徼（二一）麥早向熟。　巴鶯紛として未だ稀ならず、徼麥早く熟するに向ふ。

悠（二二）悠日動江。漠（二三）漠春辭（二四）木。　悠悠日江に動き、漠漠春木を辭す。

臺（二五）郎選才俊。自顧亦已（二六）極。　臺郎才俊を選ぶ、自ら顧るに亦已に極まれり。

前輩聲（二七）名人。埋（二八）沒何所得。　前輩聲名の人、埋沒何の得る所ぞ。

居（二九）然縮（三〇）章紱。受性本幽（三一）獨。　居然章紱を縮ぬ、受性本幽獨なり。

平生憩息地。必種數竿竹。　平生憩息の地、必ず數竿の竹を種う。

事業只濁醪、營葺但草屋。』
（三二）上公有記（三三）者、累（三四）奏（三五）資（三六）薄祿。
（三七）主憂豈濟時、（三八）身遠彌（三九）曠職。
（四〇）修文（四一）廟算正、（四二）獻可（四三）天衢直。
尚想（四四）趨朝廷、（四五）毫髮（四六）裨社稷。
形骸今（四七）若是、進退（四八）委行色。』

事業只濁醪、營葺但草屋。』
上公記する者有り、累奏せられて薄祿に資る。
主憂ふるも豈に時を濟はむや、身遠くして彌〻職を曠うす。
修文廟算正しく、獻可天衢直し。
尚想ふ朝廷に趨して、毫髮社稷を裨せむことを。
形骸今是の若し、進退行色に委す。』

【字解】【一】客堂　客寓してゐるざしき、夔州にての寓居をいふ。【二】少城　成都大城の西の城、張儀が築きしといはるるもの、卷十一、九日寄嚴大夫詩をみよ。【三】異楚蜀　楚は夔州をいひ、蜀は成都をいふ。【四】窅窕　おくふかき貌。以上ここに來りしことの大體をのぶ。【五】消中　病の名、消渇におなじ、已に屢〻みゆ。【六】甘載來　甘はあまんじて、平氣で。載來とは疾をのせてここに來りしこと。一本に甘を廿に作る、廿載來ならば二十年以來の義、今廿字に從へり。【七】得無足　無の字蹁に作れる本ありと、蹁の字まされるに似たり。蹁足は脚力のよわりしをいふ、卷十四「客居」詩の臥愁病脚廢の病脚におなじ。【八】殊方鬼　異鄉の死者。【九】短　壽命のみじかくつまること。【一〇】老馬　自ら死す。【一一】望雲　北方の雲をしたうてながめる。胡馬嘶北風の意、古詩に代馬思朝雲とあり。【一二】南雁　自ら比す。【一三】別家　家は故鄉の家をいふ。【一四】筋力　筋力の衰へしをいふ。以上は客堂のたびごころをのぶ。【一五】序節　四季の順序、節候。【一六】具物　すべてのもの。【一七】羈束　旅の束縛。【一八】蕨　ぜんまい。【一九】蘆筍　あしの芽。【二〇】巴鶯　巴地のうぐひす、巴は夔州をさす。【二一】徼麥　邊地のむぎ。【二二】悠悠　はるかなる貌。【二三】漠漠　ひろき貌。【二四】春餘木　春色が樹木から去る。以上は客堂の時候のさまをのぶ。【二五】臺郎　尚書省の郎官なり、龍朔二年に尚書省を改めて中臺となす、後復た尚書省となす、亦之を省臺といふ、ここに臺郎といふは自己が工部員外郎となりしをいふ。【二六】已綰　其の榮祿まるをいふ。【二七】聲名人　名聲の高かりし人人。【二八】埋沒　官位を得ずうづもれてしまふ。【二九】居然　そのまま、これは次の幽獨へかかる。【三〇】綰章紱　綰はつがぬる。章紱は禮服をいふ、緋衣をさす。【三一】幽獨　幽靜孤獨。以上草屋まで成都の時の事をいふ。【三二】上公　上官にして公位にあるもの、鄭國公嚴武をいふ。【三三】記　舊交を記憶する。【三四】累奏　しきりに朝廷へ奏聞する。【三五】資　よる、とる、もとでとなる。【三六】薄祿　すこしの俸祿。上公二句は卽ち卷十三「懷昔」詩の朝廷記識蒙祿秩の意。【三七】主憂　君主たる人がしんぱいすること。「史記」范雎傳に、雎が曰く、主憂臣辱、主辱臣死と。【三八】身遠　遠とは都よりとほくはなれてゐること。【三九】曠職　職務をむなしくして仕事をせぬ。【四〇】修文　平和の德をなさむること、君をいふ。【四一】廟算　朝廷のはかりごと、語は「孫子」に出づ、【四二】獻可　「左傳」昭公二十年に、晏子曰、君所謂可、而有否焉、臣獻其否、以成其可、君所謂否、而有可焉、臣獻其可、以成其否、とみゆ。獻可とは君の否と謂ふ所にても可なる所あれば可なる所を獻ずるをいふ。【四三】天衢　天上の路、有形の路と無形の道とかけて用ふ。語は「易」大畜卦にみゆ。卷一、贈韋左丞濟詩の亨衢の句解（卷一の六八頁）を見よ。【四四】趨　足をふんばりてあるく。朝廷にてのあるきつきなり。【四五】毫髮　すこしばかり。【四六】裨　益す。【四七】若是　衰へたるをいふ。【四八】委行色　委はまかす、行色は旅行の樣子、もと形體的の樣子をさす語なるもここは無形の情態のことに用ひたり。

【題義】夔州の寓居に於て感ずる所をのべた詩。大曆元年春晩、夔州にての作。

【詩意】おもふに自分は前に成都の少城から離れて今では蜀と楚と居場所がかはつた。さて舟をすててあがつてみるとまた深山であり、おくふかき一の林麓の地に住むことになつた。』雲安縣にとまつてゐたときには消渇の病が內部で自分をひどくくるしめたが、そのふるい疾を平氣で船にのせてやつてきたが、老衰になつてまた足がきかなくなつた。ここで死んで他鄉の鬼となつたとしても白髮あた

まになつたのだからわかじには免れたのだ。ただ北の馬は老いてもやつぱり北方の雲をながめる、雁は南に飛んでもこころは北にあるので故郷は忘れがたい。故郷の家に別れてからこどもやむすめは生長したが、自分ははづかしながら起きあがるにも筋力が衰へてしまつた。』　この寓居でも季候がかはり、旅の身のめのまへにさまざまの物がでてきた。ひなたの石があたたかでそこにはせんまいの芽が紫に生え、渚には蘆の芽が緑に秀でてきた。鶯はまだなかなかたくさん鳴いてゐるし、さすが南境で麥は早く熟しかかつてゐる。日の光は遙に江上に動き、一體にわたつて春の色は樹木から去らうとしてゐる。』　尚書省の郎官は本來才俊のものを選ぶのだ、それに自分が選ばれたことは自分としては榮譽の極みである。前輩で名聲のあつた人人で何の官にもならずそのまま埋もれた人は何を得たか、それに本性幽獨を好む自分ごときものがあつかましくもそのまま官の禮服を身につけてをる。自分は幽獨な性質ゆゑふだん休息する土地にはきつと幾本かの竹をうゑる、自分の仕事はにごりさけを飲むことであり、屋根をふいてかまへる家はただかやぶきときまつてゐる。』　さ樣な自分を顯要の地位に居る人でおぼえてゐてくれた人があつて自分のことについてしきりに天子に奏上して官を授けてくれたので自分はそのいささかの俸祿にたよつてをるのである。今天子は國事について心配をなされてをるが自分は時世を濟ふこともできぬ。かく遠方に居る身ではいよいよ職務を曠廢してゐるのである。今や君は文德をお修めになつて廟堂のはかりごと正しく、臣下は君に可なる所のものを獻じて天上の道もまつすぐにとほつてゐる。それでもまだ自分は朝廷に趨進してたとひ髮すぢほどでもよいから天下社稷のために裨益したいとおもうてゐる。しかし自分のからだは今や見る所のごとくであるから、自分の進退はこれからの旅行の情態如何にまかせるよりほかにない。』

引水(一)　　水を引く

月峽(二)瞿唐(三)雲作頂。　月峽瞿唐雲を頂と作す、
亂石崢嶸(四)俗無井。　亂石崢嶸、俗井無し。
雲安沽(五)水奴僕悲。　雲安水を沽うて奴僕悲む、
魚復(六)移居心力省。』　魚復居を移して心力省く。』
白帝城西萬竹蟠。　白帝城西萬竹蟠る、
接(七)筒引水喉不乾。　筒を接し水を引きて喉乾かず。
人生留滯(八)生理(九)難。　人生留滯生理難し、
斗水何直(一〇)百憂寬(一一)。』　斗水何ぞ直らむ百憂の寬なるに。』

【字解】【一】引水　竹筒にて水をひく。【二】月峽　舊注に重慶府巴縣の明月峽を引くも詩にいふ所とは遠きにすぎて當らず。これは雲安附近にある峽の名なるべし。【三】瞿唐　峽の名、夔州奉節縣東十三里にあり。【四】崢嶸　たかき貌。【五】沽水　井水なきゆゑ、水をかうてのむ。【六】魚復　浦の名、奉節縣東南二里江岸にあり。【七】接筒　竹のつつを甲乙丙丁とつなぐ。【八】留滯　一地に滯在してゐること。【九】生理　生計、活計。【一〇】直　あたる、匹敵する。【一一】百憂寬　寬はゆたか、量の多きをいふ、無形の憂と有形の水との

量をくらべていへり。

【題義】竹筒にて水を引きしことをよんだ詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】月峽も瞿唐峽も雲がその頂をなしてをり、巖石がかたく亂れ立ちて一般に井といふものがない。だから月峽のある雲安では水を沽つてのまねばならぬので奴僕たちが悲しんだが、瞿唐のあるこの夔州の魚復浦へひきこししてからは水にかけての心配も力わざも省ける樣になつた。(奴僕が水をかひにゆく厄介が無くなつた。)』それは白帝城の西に幾萬本の竹がはえてるから、それを斬つて竹筒をつなぎあはせて水を遠くから引いてくるので喉が乾くことがなくなつた。ただ人生他鄕に滯在してゐてはくらしむきがなんぎであつて、自分の心のなかのさまざまの憂の分量からみると一斗の水の量もくらべものにはならぬほどわづかのものである。』

示獠(一)奴阿段(二)　　獠奴阿段に示す

山木蒼蒼落日曛。　山木蒼蒼落日曛す、
竹竿裊(三)裊細(四)泉分。　竹竿裊裊細泉分る。
郡人入夜爭餘(五)瀝。　郡人夜に入りて餘瀝を爭ふ、
豎(六)子尋源獨不(七)聞。　豎子源を尋ねて獨り聞かしめず。
病(八)渴三更迴(九)白首。　渴を病みて三更白首を迴らす、
傳(一〇)聲一注濕(一一)青雲。　聲を傳へて一注青雲を濕す。
曾驚陶(一二)侃胡奴異(一三)。　曾て驚く陶侃が胡奴の異なるに、
怪爾(一四)常穿(一五)虎豹羣。　怪む爾が常に穿つ虎豹の羣。

【字解】【一】獠奴　獠は蠻種の名、奴はしもべなり。【二】阿段　蠻人の長幼の次第を表はす語なりと、たとへば男子には阿謩、阿段といひ、婦人には阿夷、阿等といふの類、是なりと。【三】裊裊　たをやか。【四】細泉分　ほそぼそとした泉がいくつかに分れてながれる。【五】餘瀝　かけひのあまりのしただり。【六】豎子　やつこ、即ち阿段をさす。【七】不聞　主人の耳にはそのことをきかしめず、だまつてゆくこと。【八】病渴　のどのかわきにこまる。【九】迴白首　水のある方をながめるさま。【一〇】傳聲　聲は泉聲。【一一】濕青雲　雲をうるほして高いところからそそがるるをいふ。【一二】陶侃胡奴　陶侃は晉の宰相にて陶淵明が祖なり、侃は胡奴を多く養ひしといふも何事をなせしや詳ならず。或は陶峴の誤かといふ、峴は淵明が孫にて作者同時の人、嘗て劍を西塞の江水に投じ、崑崙奴摩訶をして之を取らしむ、奴肢體磔裂されて水上に浮ぶ、蛟龍に害せられしなり、侃を峴と改むるもいかがにや。恐らくは侃が奴について別に本事あるなるべし、疑はしきを闕きて可なり。【一三】異　尋常とちがふこと。【一四】爾　阿段をさす。【一五】穿　うがつ、わけいる。

【題義】獠種の奴である阿段といふものに示した詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】山の樹木の色がかぐろくなり夕日がくらくなりかけた。このときなよなよとした竹竿からはほそぼそとした泉水がいくつかに分れてながれる。郡の人たちは夜になるとそのあまりのしづくを我がちと爭うて汲みあふ。だが自分のしもべはだまつてわしには聞かせずにずつと山奥の源をたづねていつた。夜なかに自分はのどがかわいてこまり水もがなと白髮くびをまはしてながめた、あだかもよし自分のところへさつと一聲水おとがしてそれが青雲をうるほしてそそぎくだつてきた。自分はむか

し陶侃の胡奴が人のできぬかはつた事をしたといふはなしに驚いてゐるのだが、おまへがいつも虎豹の羣のなかを分け入つてあるくのもふしぎにたへず感心してをるのである。

上白帝城

城峻隨天壁。樓高望女墻。
江流思夏后。風至憶襄王。
老去聞悲角。人扶報夕陽。
公孫初恃險。躍馬意何長。

白帝城に上る

城峻しくして天壁に隨ふ、樓高くして女墻を望む。
江流夏后を思ひ、風至襄王を憶ふ。
老い去つて悲角を聞く、人に扶けられて夕陽を報せらる。
公孫初め險を恃む、躍馬意何ぞ長かりし。

【字解】【一】白帝城　奉節縣の東に在り、前漢の末、公孫述の築く所、或は曰く、述、漢の土運を承くるを以て故に白帝といふと。或は曰く、殿前の井より白龍出でしを以て山を白帝山、城を白帝城といふと。「荊州圖經」にいふ、白帝城は西、大江に臨み、東南高さ二百丈、西北高さ一千丈なりと。「水經注」にいふ、白帝山城は周回二百八十歩、北は馬嶺に緣り、赤岬山に接す、其間の平處、南北相去ること八十五丈、東西七十丈、又東、瀼溪に傍うて以て隍となす、西南、大江に臨む、之を闞すれば目を眩せしむ。唯だ馬嶺はすこしくやや差邃たるも猶山を斬りて路と爲し、羊腸しばしば轉じて然るのちのぼることを得、と。【二】天壁　天にそびゆる崖壁。【三】女墻　ひめがき、城壁の上の小墻なり。【四】夏后　禹王をいふ。【五】風至憶襄王　宋玉の風賦に、「楚の襄王、蘭臺の宮に遊ぶ、風あり颯然として至る、王乃ち襟を披きて之に當りて曰く、快なるかな此の風と。」とあり。【六】悲角　かなしきつのぶえ、戍兵のならすもの。【七】人扶　高處にのぼるゆゑ他人にたすけてもらふ。【八】夕陽　ゆふひ。【九】公孫　公孫述、述、字は子陽、更始のとき兵を起し宗成王岑が亂を討ちて之を破り、遂に蜀土を有し、僭立して帝となり成都に都す、色は白を尚ぶ、成都の郭外の舊倉を改めて白帝倉となす、のち魚復に城を築くや諱して白帝城といふ、述立ちて十二年にして後漢の光武帝に滅ぼさる。【一〇】躍馬　蜀都賦に公孫躍馬而稱帝の語あり。【一一】意何長　帝と稱するの意、之を萬世無窮に傳ふるにありしをいふ。それが僅に十二年で亡びた。舊注に遠のことは成都の崔旰にあてていへるものとなせり。

【題義】夔州城の東にある白帝城にのぼりしことをよんだ詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】城が峻しくて天に聳ゆる崖壁にそうてたててある。樓が高いのでそこから女墻をながめる。大江の流るるを見ては之をきりひらいた夏の禹王を思ひ、風が吹いてくればその風に襟もとを吹かせた楚の襄王のことをおもふ。としよりの身ながら角聲が悲しさうに鳴るのをきき、人に扶けられながらもう日がくれかかるとのしらせをきく。こんな場所に城を築いた公孫述は初は險阻要害を恃みにして安心だとおもひ、馬を躍らせて帝王と稱したその意氣込みはよもや十二年で亡びようとはおもはなかつたらう、もつと永年に傳へるつもりだつたらう。(それが今はどうだ、との意。)

上白帝城二首

江城含變態。一上一回新。
天欲今朝雨。山歸萬古春。

白帝城に上る　二首

江城變態を含む、一たび上れば一回新なり。
天は今朝に雨らむと欲す、山は歸す萬古の春。

英雄餘事業。衰邁久風塵。　英雄事業を餘す、衰邁久しく風塵にす。
取醉他鄉客。相逢故國人。　醉を取る他鄉の客、相逢ふ故國の人。
兵戈猶擁蜀。賦斂强輸秦。　兵戈猶蜀を擁す、賦斂强ひて秦に輸す。
不是煩形勝。深愁畏損神。　是れ形勝を煩はしとするならず、深愁神を損せむことを畏る。

【字解】【一】含變態　かはつたさまをもつてゐる。【二】山歸萬古春　春歸の歸を回來の義とせば「山には歸る」とよむべし、ただ余は春歸の歸は歸去の義とみるものなるが故にこの歸字も「歸す」とよみ、歸着の義とす、すなはち「山は萬古の春に歸す」と調す、山の様子が萬古不易の春げしきにおちついてゐるの意。【三】英雄　公孫述。【四】餘事業　城址をとどむるをいふ。【五】衰邁　老衰し年のゆきすぎるをいふ。【六】他鄉客　自己をいふ。【七】故國人　蓋し同じく城にのぼりし人をいふ。【八】擁蜀　成都の地をわがものとする、進肝をいふ。【九】賦斂　課稅のとりたて。【一〇】輸秦　長安へもつてゆく、長安地方は吐蕃の亂によつて兵を養ふを以てなり。【一一】煩　わづらはしとしていとふをいふ。【一二】深愁　時事についてふかく心配する。【一三】損神　精神を害する。

【題義】　これまた白帝城にのぼりてよめる詩なり。この第一首は時事に感せしことをのぶ。大曆元年春の作。

【詩意】　この江ぞひの城はさまざまのかはつたすがたをもつてをり一ぺんのぼるごとに一ぺん新しいけしきにあふ。けふは空が雨ふりさうであるが山は萬古の春げしきにおちついてゐる。むかしの英雄は後世までこんな事業をのこしてゐるが、自分は老衰してながらく世間の塵にうろついてをり、けふはふるさとの人にあうて旅人ながら城のうへで一醉を取る。おもへばまだ亂徒が兵戈を以て蜀の地を擁し、租稅をとりたててむりにそれを長安の都へやつてゐる。わたしはあへてこの城の景色をながめるのがうるさいといふのではないが、あまりながめてゐると心配のあまり精神をそこなひはせぬかとおそれるものである。

〔二〕

白帝空祠廟。孤雲自往來。　白帝空しく祠廟、孤雲自ら往來す。
江山城宛轉。棟宇客徘徊。　江山城宛轉たり、棟宇客徘徊す。
勇略今何在。當年亦壯哉。　勇略今何に在る、當年亦壯なる哉。
後人將酒肉。虛殿日塵埃。　後人酒肉を將ふ、虛殿日に塵埃なり。
谷鳥鳴還過。林花落又開。　谷鳥鳴いて還た過ぐ、林花落ちて又開く。
多慙病無力。騎馬入青苔。　多く慙づ病みて力無きを、馬に騎りて青苔に入る。

【字解】【一】白帝　公孫述をいふ、述は自ら白帝と稱す。【二】祠廟　白帝城の東南に在りしといへり。次の篇の解をみよ。【三】宛轉　うねりまがる。【四】棟宇　むな木、やね。【五】客　廟を訪ふ人人をいふ。【六】勇略　公孫述のいさましいはかり

ごと。【七】肸「詩」鹿鳴の承ν筐是肸の肸なるべし。

【題義】この第二首は城邊にありし白帝廟卽ち公孫述の廟にあそびしことをのぶ。

【詩意】白帝と稱した公孫述も今はただ祠廟をあますのみで、そこには一片の雲がひとりでに往來してゐるばかりだ。ここでみると江山にしたがうて城がうねうねとみえるし、廟のむなぎ、やねのしたに客がぶらぶらしてむかしをしのぶ。公孫述はそのかみは壯なものであつたが今は彼の勇略はどこにあるのだ。我我の樣な後世の人が酒肉をささげるが、だれもをらぬごてんは日日にほこりがつもる、谷まの鳥は鳴いては過ぎ、林の花は落ちてはまたさいてゐる。はづかしながら自分は病氣で體力がないから馬に騎つて靑苔のみちにいりこむのである。（廟神もゆるしてもらひたいとの意ならん。）

陪諸公上白帝城頭宴越公堂之作〔一〕

【原注】越公楊素也。有堂。在城上。畫像尙存。

諸公に陪して白帝城頭に上り、越公堂に宴するの作　【原注】越公は楊素なり、堂有り、城上に在り、畫像尙ほ存す。

此堂存古制。城上俯江郊。　此の堂古制存す、城上江郊に俯す。

〔二〕落構垂雲雨。荒堦蔓草茅。　落構雲雨垂れ、荒堦草茅蔓る。

杜穿蜂溜蜜。棧缺燕添巢。　杜穿たれて蜂、蜜を溜らし、棧缺けて燕巢を添ふ。

〔三〕坐接〔四〕春盃氣。心傷〔五〕豔蘂梢。　坐には接す春盃の氣、心は傷む豔蘂の梢。

〔六〕英靈〔七〕如過隙。〔八〕宴衎〔九〕願投膠。　英靈過隙の如し、宴衎投膠を願ふ。

莫問〔一〇〕東流水。生涯未〔一一〕卽拋。　問ふ莫れ東流の水、生涯未だ卽ち拋たず。

【字解】【一】越公堂　越公は隋の楊素なり、素初め北周に事へ、のち隋の高祖に隨ひ天下を定む、功により越國公に封ぜらる。唐の李貽孫の夔州都督府記に曰く、白帝城東南斗上二百七十步、得白帝廟、又有越公堂、在廟南而少西、隋越公素所建、と。前篇第二首の白帝廟と本篇越公堂との位置を併せ觀るに足る。【二】落構　おちかかれる構造。「此堂」以下六句は越公堂の荒れたるさまをいふ。【三】坐接　接はちかづくをいふ。【四】春盃氣　酒の氣をいふ。【五】豔蘂　うつくしき花。【六】英靈　楊の精靈をいふ、畫像についていふなり。【七】如過隙　またたくまに無くなるをいふ。「莊子」に人生天地間、若白駒之過隙とみゆ。【八】宴衎　衎は樂しむなり。【九】投膠　親密になるをいふ。古樂府に以膠投漆中、誰能別離此、とみゆ。【一〇】東流水　歲月の流れ去るをいふ。【一一】卽拋　すぐさまなげうちすてる。「坐接」以下は宴のことをいふ。

【題義】多くの人人のあとについて白帝城頭にのぼり、越公堂に宴したときの詩。大暦元年春の作。

【詩意】此の堂にはむかしの造りざまがのこつてをり、城の上からましたに江ぞひの郊外がみえる。落ちかかつた構へに雲や雨が垂れかかり、荒れたきざはしに草やちがやがはびこつてゐる。また柱には孔があいて蜂が蜜をしたたらし、さしわたした棧の木が缺けて燕が巢をつけくはへてゐる。』ここに坐して春の酒盃の氣にちかづくが自分の心はうつくしい花のこずゑを見て傷ましくおもふ。楊素は

どの人でも其の英靈はまたたくまに消えてなくなる、どうかこのさかもりにたのしく酒をのんで膠を漆になげこんだほどの親密さがねがはしい。歲月が東流の水の樣に去つてかへらぬことなどは問題にしなくてもよい、我我の生涯はまだすぐにはは（ふ）りだして棄てるわけではないから。』

白帝城最高樓

城尖徑仄旌旆(一)愁。
獨立縹緲(二)之飛樓(三)。
峽坼(四)雲霾(五)龍虎臥(六)。
江清日抱(七)黿鼉遊(八)。
扶桑(九)西枝對斷石。
弱水東影隨長流。
杖藜嘆世者誰子(一〇)。
泣血(一一)迸空(一二)回白頭。

白帝城の最高樓

城尖り徑仄きて旌旆愁ふ、
獨立す縹緲たる飛樓に。
峽坼け雲霾りて龍虎臥し、
江清く日抱きて黿鼉遊ぶ。
扶桑の西枝斷石に對す、
弱水の東影長流に隨ふ。
藜を杖き世を嘆ずる者は誰が子ぞ、
泣血空に迸しらしめて白頭を回らす。

【字解】【一】旌旆　旌は旗の先にふさふさとした羽をつけたもの、旆は旆、[illegible]ながいた旗にさげた帛のひらなり、要するに城上にたてた「はた」をいふ。【二】縹緲　氣のたなびくさま。【三】飛樓　飛とは樓の勢をいふ。【四】峽坼　坼は地形の裂けしごとくなるをいふ。【五】雲霾　霾は土ふるなり、ここは雲がこまかくふるをいふ。【六】龍虎臥　峽嶺の形容なり。【七】日抱　日は日の光。【八】黿鼉遊　これは實物。

【九】扶桑・弱水二句　曹植が詩にいふ、東觀扶桑曜、西臨弱水流、と。詩句之に基く、扶桑は東海の仙境、其處には兩兩扶けあうた大桑があるとかんがへられた。西枝はその桑の西の方の枝なり、斷石は峽中の岡の切斷した石なり、弱水は甘肅の西北の沙漠に在りて中途に地下をもぐりてきえてながるる水、東影はその弱水の東方のすがた、長流は長江の流れなり。此の二句の作者の意は恍惚としてとりとめもなきがごとくなれども峽の實景を仙境のものにて比較せしまでなり。解は「詩意」をみよ、ここには重複を避く。【一〇】誰子　だれの子か、自己のことをかく客觀的にいへるなり。【一一】泣血　血の涙。【一二】迸空　そらへとほとばしらす。最高樓なれば涙も空に向つて飛ぶ。

【題義】白帝城のいちばん高い樓にのぼつて感ずる所をのべた詩。大曆元年の作。

【詩意】城はするどく尖りそこへのぼる徑はかたむいて傾斜しひるがへつてゐる旌さへあまりけはしいので愁はしげに見える。かかる空中に縹緲としてゐる樓のうへにただひとり立つてながめる。峽は坼けそこには雲が沙の樣にこまかくふつて龍だの虎だの臥てゐるかの樣に見えるし、江の水はすんで黿鼉の遊んでゐるところを日光がだきかかへてゐる。斷石に樹の枝がむきあつてゐるが、その枝はさだめし扶桑の西向きの枝であらう。長江の流れとともに水流の影が見えるが、それは多分弱水の東影がそこにうかんでゐるのだらう。ここに藜のつゑをついて時世をなげいてゐるをとこがをるがいつたいそれはどこのものだ。そのをとこは白髮あたまをめぐらして虛空に向つて血の涙をほとばしらせてをるのである。世のことについてよほどの慨嘆をしてをるをとこなのである。

武侯廟

武侯の廟

遺廟丹青落。空山草木長。
猶聞辭後主。不復臥南陽。

遺廟丹青落ち、空山草木長し。
猶ほ聞くがごとし後主を辭するを、復た南陽に臥せず。

【字解】【一】武侯廟　武侯は蜀漢の諸葛亮、字は孔明なり、後主の建興元年武鄕侯に封ぜらる。廟は夔州府魚復縣の永安宮の傍に在りしもの、赤岬山によりし處にありしなり。詩中に「空山」の語あるによりて此詩の成都の武侯廟をさすものに非ざることを知るべし。【二】丹青　棟梁壁などにぬりありし繪の具をいふ。【三】空山　人なき山。【四】猶聞　武侯の已に沒せし今日もまだその生時の聲をきくがごとし。【五】辭後主　後主は蜀漢の先主劉備玄德の子劉禪なり、先主の後を繼ぎ後主と稱せらる。後主の建興五年、諸葛亮、魏を伐たんがため諸軍を率ゐて北のかた漢中に駐まらんとす、出發にのぞみて表をたてまつる、即ち有名なる出師表なり。辭はこの表をたてまつりて暇乞ひの御挨拶をなするをいふ。【六】臥南陽　亮は初め南陽の鄧縣に家居せり、其地は襄陽の城西二十里にあり隆中と號せらる、徐庶、劉備に謂つて曰く、諸葛孔明は臥龍なり、將軍之を見んと欲せば宜しく就いて見るべきなりと、備、遂に三たび亮が廬を訪ひはじめて之を見ることを得たり。謂はゆる草廬三顧なり。

【題義】夔州の諸葛亮の廟をたづねてよめる詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】いまのこつてゐる廟はふるぼけて繪の具が落ちてしまひ、さびしい山にただ草や木がたけたかくのびてゐる。ここへおまゐりすると孔明の英靈がなほ存在して彼が後主に出陣の暇乞ひをしたときの聲音をそのまま聞く樣である。彼はあのときは畢生の決心をかためて立ちあがつたので、あれ以來は決してふたたび南陽に臥てゐるようなどのかんがへはもたなかつたのである。

八陣圖

八陣の圖

功蓋三分國。名成八陣圖。
江流石不轉。遺恨失吞吳。

功は蓋ふ三分の國、名は成る八陣の圖。
江流るるも石轉せず、遺恨吞吳を失す。

【字解】【一】八陣圖　諸葛孔明が石を積みかされて作りたる陣形なり。八陣とは天地風雲龍虎鳥蛇の八種の陣形をいふ。これが魚復浦の平沙の上に在り、大水のときには破壞さるれども水減ずるときはまた舊觀に復し、ふしぎなものとせられてゐる。【二】功蓋　蓋はおほふ、ふたをする、壓倒するをいふ。【三】三分國　蜀漢の時、天下は魏・吳・蜀の三つに分れてゐた。【四】失吞吳　この句の解は諸說紛紛たり、列擧するも詮なければ異說一をあげん。其說は失吞吳とよませて「吞吳といふ失策をした」ととく、それは先主の末年に孔明は吳を征伐することには不贊成でありしに拘はらず、先主を諫止する能はずして遂に先主をして敗死せしめた、これ吳を吞まんとするといふ政策に於て失敗したのである、といふに在る。しかし三分の天下を一統するには吳をも併せざる可からず、然らば吳を併吞するがあしとはいはれず、もし吳を併吞し得ば其力により魏を容易に平げうるやも知れざるなり、故に作者としては併吞不併吞の政策の可否を論ずべきに非ず、且つ上說の如くしては「江流」の句が死んでしまうやうに思はれる。故に余は普通の說を取りて「吞吳を失す」とみる。「吞吳を失す」とは吳を併吞するといふことを失つた、卽ち「吳を吞むことを得ざりし」の義なり。

【題義】諸葛孔明の造りしと稱せらるる八陣圖について感をのぶ。大曆元年の作。

【詩意】諸葛孔明の功は三分の國を壓倒するほどであり、其のいかに軍略に通じてゐたかの名聲はこの八陣圖を作つたことに於てりつばにできあがつてをる。さすがに孔明の作でこの陣形はいかに長江の水が流れても石だけは變轉せずにゐる。これほどの軍略をもつた人が先主の生前に吳を併吞するこ

とを得なかつたことはまことに殘念なことである。

晩望白帝城鹽山(一)

晩に白帝城と鹽山とを望む

徐步攜斑杖(二)、看山仰白頭。　徐歩して斑杖を攜へ、看山白頭を仰がしむ。
翠(三)深開斷壁、紅(四)遠結(五)飛樓(六)。　翠深くして斷壁開け、紅遠くして飛樓結ぶ。
日出清江望(七)、暄和(八)散旅愁。　日出でて江望清し、暄和にして旅愁散ず。
春城(九)見松雪(一〇)、始擬進(一一)歸舟(一二)。　春城松雪を見る、始めて歸舟に進まむと擬す。

【字解】【一】鹽山　白鹽山なり。奉節縣東十七里にありといふ。【二】斑杖　斑竹のつゑ。【三】翠　斷壁の色、山についていふ。【四】紅　樓の色、城についていふ。【五】結　結び構へられてゐる。【六】飛樓　暈翬鳥の翼をはりてとばんとするがごとき城樓。【七】江望　江上のながめ、作者が城と山とを望みしときの位置をいへり。【八】暄和　日光のあたたかさが柔和である。【九】春城　この城は夔州城にてひろくいふ、題中の白帝城をいふにあらず。【一〇】松雪　雪は白鹽山の白色を形容せしものならんとの說あり、或は然らん。【一一】進　我、進みて之に入るをいふ、風景をながむるためなり。【一二】歸舟　歸舟は故鄕にかへるを目的とした舟なり、作者當に舟を準備しありといへり、實際に所有してゐようがゐまいがかくいふなり、ここは歸の字はつけたりにて單に自家の舟をいふ。

【題義】曉に江のほとりで白帝城ならびに白鹽山を眺望した詩。大曆元年の作。

【詩意】斑竹の杖をたづさへてそろそろとあるき、白頭をあふむけて山を看る。すると斷壁が開けて翠の色が奥ふかく見え、鳥の飛ぶ樣な簷をした城樓が構へられてあつてその紅の色が遠くにみえる。太陽が出て江邊のながめはすつきりとしてをり、あたたかさが柔和で旅の愁も散りうせる。ここ（夔州）の春城で松にかかつた雪をながめたので、やつとひとつ舟にでものつてながめてやらうかとおもふのである。

灔澦堆(一)

灔澦堆

巨石水中央、江寒出水長。　巨石水の中央、江寒くして水を出づること長し。
沈牛(二)答雲雨(三)、如馬(四)戒舟航。　沈牛雲雨に答へ、如馬舟航を戒む。
天意存傾覆(五)、神功(六)接混茫(七)。　天意傾覆に存す、神功混茫に接す。
干戈(八)連解纜(九)、行止(一〇)憶垂堂(一一)。　干戈連りに纜を解く、行止垂堂を憶ふ。

【字解】【一】灔澦堆　江中の石の名、奉節縣の西南、瞿唐峽口にあり、巳に見ゆ。卷十四、長江詩をみよ。【二】沈牛　牛を水中にしづめて水神に感謝するなり。【三】答雲雨　答とは報謝するをいふ、雲雨とは雲雨を與へてくれたことをいふ、蓋し土俗水神に雨を祈ることあるならん。【四】如馬　灔澦(灩澦)大如馬、瞿唐不可下のうたをさす。【五】存傾覆　傾覆を戒むるに存するをいふ。【六】神功　水神の功、雨乞ひのとき雨をふらすこと。【七】接混茫　混茫は水のさまなるも蓋し以て元氣の至大なるに比す、接とは近きをいふ。【八】干戈　兵亂の際をいふ。【九】連解纜　作者成都よりして雲安、雲安よりして夔州にくだる、これ「連り」

なり。【一〇】行止　ゆくにも止まるにも。【一一】垂堂　危きに近寄らすの戒をいふ、「漢書」袁盎傳に、千金之子、坐不垂堂、とあり、垂とは堂のはしによるをいふ、堂のはしによれば堂より墜つる恐れあり、故に金持ちの子はえんがはのはしなどにはすわらぬ。

【題義】灔澦堆の石のことをよんだ詩。大曆元年の作。

【詩意】巨な石が水の中央にあつて、江のまだ寒いをりにたかく水からあらはれてゐる。この石のところでは雨乞ひにしるしがあれば牛を沈めて御恩報謝をする。この石が馬の樣に小さくなればそれはそのころは舟航をしてはあぶないといふ戒めなのである。天の御意は舟が傾覆するから氣をつけよとのおなさけに在るのであるし、自在に雨をふらしてくださる神のおてがらは宇宙元氣の大にちかくつぐものである。自分は兵亂の際にやたらに纜を解いて舟旅をするものであるが、こんな場所をとほるにあたつては行くにつけ止まるにつけむかしの「千金の子は堂に垂せず」との戒めをおもうて用心するのである。

老病

老病巫山(一)裏、稽(二)留楚(三)客中。
藥殘他日(四)裹(五)、花發去年叢。
夜足霑(六)沙雨、春多逆(七)水風。
合(八)分雙(九)賜筆、猶作一飄蓬。

老病

老いて病む巫山の裏、稽留す楚客の中。
藥は殘る他日の裹、花は發く去年の叢。
夜には足る沙を霑す雨、春には多し逆水の風。
合に雙賜筆を分たるべきに、猶ほ一飄蓬と作る。

【字解】【一】巫山　巫山縣の東にあり、夔州よりは下流にあたる。【二】稽留　ぐづついてとどまる。【三】楚客　楚地の人人、夔州はむかしの楚なり。【四】他日　往日なり。【五】裹　ふくろ。【六】霑沙雨　こまかき雨をいふ。【七】逆水風　下流から上流へむけて吹きつける風。【八】合分　分與さるべきはずだ。【九】雙賜筆　一對の御賜の筆、尙書の郎官は天子より赤管の筆を二本たまはる、卷十四「春日江村」詩第三首をみよ。

【題義】夔州にて老い且つ病めることをよめる詩。大曆元年春晩の作。

【詩意】自分は巫山のうちがはで老い且つ病み、楚地の人人のなかにぐづぐづして逗留してゐる。前日からのふくろに藥はのこつてゐるし、去年さいたであらう所の叢にことしも花がさきだした。夜は沙をうるほす雨が十分にふり、春は江水を下流から吹きつける風が多くふく。自分は一對の恩賜の筆をわけていただける身分であるのに、いまだに風にふきただよはされてゐる蓬のごときものとなつてをる。

近聞

近(一)聞犬(二)戎遠遁逃、牧(三)馬不敢侵臨(四)洮。

近聞

近ろ聞く犬戎遠く遁逃して、
牧馬敢て臨洮を侵さずと。

【字解】【一】近聞　ちかごろ聞きこんだこと。永泰元年十月、郭子儀、回紇と約を定めて共に吐蕃を擊

（五）渭水（六）逶迤白日靜。　渭水逶迤白日靜に、
（七）隴山蕭瑟秋雲高。』　隴山蕭瑟秋雲高し。』
（八）崆峒（九）五原亦無事。　崆峒五原亦た無事、
（一〇）北庭數有（一一）關中使。　北庭數〻關中の使有り。
似聞（一二）贊普更（一三）求親。　聞くが似くんば贊普更に親を求むと、
（一四）舅甥和好應難棄。』　舅甥和好應に棄て難かるべし。』

逃す、時に僕固名臣及び黨項の師皆來り降る。大曆元年二月、楊濟に命じて好みを吐蕃に修めしむ、吐蕃、首領論泣陵を遣はして來朝せしむ。詩は此時の唐と吐蕃との和親のことをのぶ。【二】犬戎　吐蕃をさす。【三】牧馬　馬をまきばでかふ。【四】臨洮　甘粛省鞏昌府岷州。【五】渭水　甘粛の方より長安の方へ流るる川。【六】逶迤　うれうれ。【七】隴山　陝西省鳳翔府隴州の西北にある山の名、吐蕃の通路にあたる。【八】崆峒　諸處に同名の山あり、朱注に五原と並擧しあれば平涼に在る者をさしていふならんといへり。然らば「洗兵行」の常思仙仗過崆峒の崆峒と同じく甘粛省平涼府固原州の西百里にある山をいふ。【九】五原　唐の鹽州五原郡、今甘粛省靈州の東南花馬池の北に在り。【一〇】北庭　北庭都護府、今新疆省迪化府、當時吐蕃に陷りし地。【一一】關中使　長安よりの使者。【一二】贊普　吐蕃語にてその君長を稱す、贊は强雄の義、普は丈夫の義、强雄なる丈夫の義にて君長を贊普といふとぞ。【一三】求親　親睦を求む。【一四】舅甥　をぢをひ、漢と匈奴以來、支那本國とえびすとはをぢをひの關係にて交際す、開元二年に贊普が和親を乞ふために上書せる文中に、「通聘を許與せられなば即日より舅甥初めの如くならん」とあり。

【題義】吐蕃の和親を求め來りしことをきゝこんでよんだ詩。題は詩の首の二字を切りとりて用ふ。大曆元年春の作。

【詩意】ちかごろ聞くに犬戎（吐蕃）は遠くにげて臨洮地方にまで侵入して馬をかはぬさうだ。それでうねうねと流れてゐる渭水のうへにも太陽はしづかに照り、隴山のあたりもさびしく秋の雲が高くうかんでゐる。崆峒・五原のあたりも無事平穩であり、北庭の方へはたびたび都から使者がいつてゐるとのこと。聞けば吐蕃の贊普はそのうへまだ和親を求めてゐるさうだが、舅と甥との仲好といふことはどうしても棄てがたいことなのであらう。

（一）負薪行　　負薪行

夔州處（二）女髮半華（三）。　夔州の處女髮半ば華し、
四十五十無夫家（四）。　四十五十夫家無し。
更遭喪（五）亂嫁（六）不售。　更に喪亂に遭うて嫁售れず、
一生抱恨長咨（七）嗟。』　一生恨を抱きて長に咨嗟す。』
（八）土風坐（九）男使女立。　土風男を坐せしめ女をして立たしむ、
男當（一〇）門戸女出入。　男は門戸に當り女は出入す。
（一一）十有八九負薪歸。　十に八九有り薪を負ひて歸る、

【字解】【一】負薪　たきぎをせおふ。【二】處女　未だ他に嫁せずして室に處るをんな。【三】華　はなさく、白きをいふ。【四】夫家　をつとをいふ。【五】喪亂　死亡離亂。【六】嫁不售　嫁はよめにゆくこと、售は品物がうれること、售れずはうれぬこと、商ひの語を用ひてよめ入り口のなきをいふ。【七】咨嗟　なげく。以上は女の年寄りても

賣ㇾ薪得ㇾ錢應二供給一。(一二)　薪を賣り錢を得て供給に應ず。

至ㇾ老雙鬟(一三)只垂ㇾ頸。(一四)　老に至るも雙鬟只頸に垂る、

野花山葉銀釵竝。(一五)　野花山葉銀釵に竝ぶ。

筋力(一六)登ㇾ危(一七)集二市門一。(一八)　筋力危きに登りて市門に集る、

死生(一九)射ㇾ利(二〇)兼二鹽井一。(二一)」　死生利を射て鹽井を兼ぬ。」

面粧(二二)首飾(二三)雜二啼痕一。(二四)　面粧首飾啼痕を雜ゆ、

地褊(二五)衣寒困二石根一。(二六)　地褊に衣寒くして石根に困す。

若道二巫山女麤醜一、(二七)　若し巫山の女麤醜なりと道はば、

何得三北有二昭君村一。(二八)」　何ぞ北に昭君村有ることを得む。」

嫁する能はざるをいふ。【八】土風　土地の風習。【九】坐立　坐はぢつとしてはたらかぬこと、立はたちあがりてはたらくこと。【一〇】當門戸　ゐす番をしてゐる。【一一】十有八九　十人中の八九人。【一二】應供給　供給とは生活の必要品をそなへること、應とはそれにまにあふ樣にすること。【一三】雙鬟　鬟はまげのことなれども、雙鬟といふは謂はゆるふりわけがみの如く、頭髪を長きまま二分してさげておくをいふ。【一四】垂頸　頸はえりすぢ、首のつけね、垂とは雙鬟がたれさがつてゐること。【一五】銀釵竝　銀のかんざしとならんでさしてある。竝を比字のごとくみて、銀釵の樣にみなしてさす、と解くものあれども、宋の陸游の「入蜀記」に此地の俗を記して、峽中負ㇾ物賣、率多二婦人一、未ㇾ嫁者、爲二同心髻一、高二尺、插二銀釵一至二六隻一、後插二大象牙梳一如二手大一とあるをみれば銀釵象梳などを實際にさすことを見るべし。【一六】筋力　筋力を用ふるをいふ。【一七】登危　あぶなげな山路をのぼつて薪を采るなり。【一八】集市門　いちばにあつまる、薪を賣らんがためなり。【一九】死生　いのちがけで。【二〇】射利　利益をねらひ取る。【二一】兼鹽井　卷十四「十二月一日」詩に負鹽出井此溪女とある如く鹽井から出る鹽水をかつぐ勞働をも兼ねて爲すをいふ。以上は女のはたらくことをのぶ。【二二】面粧　かほのけしやう。【二三】首飾　くびのかざりもの。【二四】雜啼痕　なみだのあとが加はつてゐる。【二五】地褊　褊は狹く小さきこと。地小なれば嫁すべき範圍も亦小なり。【二六】困石根　石根は岩のねもと、石地なればいふ、困はくるしむ。【二七】麤醜　あらあらしくみにくし。【二八】昭君村　湖北省歸州府興山縣の南、歸州の東北四十里にありといふ。漢の元帝の宮人王嬙字は昭君の生れし所なりと。昭君美人なりしも畫家に賄せざりしため貌をみにくく畫かれ遂に天子の寵愛をうくる能はずして匈奴に嫁せしめらる。以上此地の女の必ずしも醜きに非ざるをいふ。

【題義】夔州の薪をせおひて賣る女の風俗をよめるうた。大暦元年の作。

【詩意】夔州の處女は髪が半分しろくなり、四十五十になるのに夫をもたぬ。そのうへ兵亂にあうて嫁入り口がなく一生涯恨をいだいていつもなげいてくらす。』土地の風習として男はぢつとしてすわつてをり女が立つてはたらく、男はるすばんをして女が出たりはいつたりする。女のうち十中八九は薪をせおうてかへり、それを賣つて錢を得て家事の供給にまにあはせてをる。年老いても振分髪をだらりとえりすぢに垂らし、野らで摘んだ草花、山でとつた木の葉などを無造作に銀の釵子とならべて插してゐる。あぶない山みちにのぼつて薪をとつては市場へ集つてきてそれを賣り、いのちがけで利益をねらふためには鹽井のしほかつぎの兼業までをもする。』（が、心の底にはうれひがあるとみえて）かほのおけしやう、首の飾りにも涙のあとがまざつてをる。土地はせまいし、着てゐる衣は寒さうな樣子で岩が根にやつれてゐる。若し巫山地方の女がみにくいといふなら北にあたつて昭君村がある筈が無いではないか。（昭君村がある以上は昭君のごとき美人も此の土地から生れるのであるが、

それが售れ口のないのは氣の毒なものだ。」』

最能行(一)

峽中丈夫絶輕死。
少在公門(二)多在水(三)。
富豪有錢駕大舸(四)。
貧(五)窮取(六)給行(七)艓子。』
小兒學問止論語(八)。
大兒結束(九)隨商旅(一〇)。
攲(一一)帆側柁入波濤。
撇(一二)漩梢(一三)濆無險阻(一四)。
朝(一五)發白帝暮江陵。
頃(一六)來目擊(一七)信有徵(一八)。

最能行

峽中の丈夫絶だ死を輕んず、
公門に在るもの少く水に在るもの多し。
富豪は錢あり大舸に駕す、
貧窮なるは給を取るに艓子を行る。』
小兒の學問は止だ論語、
大兒は結束して商旅に隨ふ。
帆を攲け柁を側け波濤に入る、
漩を撇ひ濆を梢〔捎〕うて險阻を無みす。
朝に白帝を發して暮には江陵、
頃來目擊するに信に徵有り。

【字解】【一】最能　劉須溪の說に最能とは水手の稱なりといへり、然れども詩中に行最能とあれば普通辭にして人の稱呼には非ざるなり。【二】公門　職事の門、しかるべき官吏・紳士の家をいふ。【三】在水　水上にて働らく。【四】駕大舸　駕はのること、舸は大船なり。【五】貧窮　びんばふもの。【六】取給　この給の字の本義は前詩の應供給の給とおなじく生活に必要なものを供給せらることをいふ。しかし直接には供給の媒介物たる金錢のことになる、故に手間賃をとることなり。【七】行艓子　行は運用すること、艓子とは木の葉のごとく平べつたきこぶね。以上貧富二者の生活をいふ。【八】論語　書の名、孔子の言行、門人との問答などを記す。【九】結束　旅仕度をする。【一〇】隨商旅　舟乘になつて商人旅客とともにゆく。【一一】攲帆側柁　攲も側もかたむけること、風濤に對して之をあやつるさまなり。

瞿唐漫(一九)天虎鬚(二〇)怒。
歸州(二一)長年(二二)行最能(二三)。』
此鄕(二四)之人器量窄(二五)。
悞(二六)競南風(二七)疎北客(二八)。
若道土無英俊才(二九)。
何得山有屈原宅(三〇)。』

瞿唐天に漫り虎鬚怒る、
歸州の長年行ること最も能くす。』
此の鄕の人器量窄し、
悞つて南風を競なりとし北客を疎んず。
若し土に英俊の才無しと道はば、
何ぞ山に屈原の宅有ることを得む。』

【一二】撇漩　撇は「拂ふ」なり、漩は螺旋狀を爲して水底に向つてしづむうづまきなり。【一三】梢濆　梢は或は手扁に從ひ捎に作る、捎もまた「はらふ」なり、濆は漩とは反對に、その內部を空虛にして水底より水面に向つてつきあぐる螺旋狀のうづまきなり。蜀の諺に「濆起如屋、漩下如井」といへり、漩よりも濆の方が避け難しといふ。【一四】無險阻　無は無視すること。【一五】朝發白帝暮江陵　江陵は今の湖北省荊州府江陵縣。盛弘之の「荊州記」に、江流の速かなることをのべて、朝發白帝、暮到江陵、其間千二百里、雖乘奔御風、不以疾也とあり。【一六】頃來　このごろ。【一七】目擊　めでぢかにみる。【一八】徵　しるし、證據。【一九】漫天　水勢天にはびこる。【二〇】虎鬚　灘の名、奉節縣東三十里にありと。【二一】歸州　湖北省の西部にあり、夔州府巫山縣の下流。【二二】長年　篙手、巳に見ゆ。【二三】行最能　行は「やる」、船のあつかひをいふ、最能はいちばん上手なこと。峽中にて歸州の篙手が最も船をあやつるに巧なるをいふ。【二四】此鄕　夔州及びその附近の地をさしていふ。【二五】器量窄　度量がせまい。【二六】悞　誤と同じ、あやまる。【二七】競南風　「左傳」襄公十八年に、晉と楚との戰について晉の音樂師、師曠が律を吹いて南北の風のつよさを比較せしことをのべし言に、吾(師曠)驟歌北風、又歌南風、南風不競、多死聲、楚必無功とみ

ゆ。律管を以て南風に向つて歌ひたるも南風は弱くして律管の音と競爭ができぬといへるなり。南風不ㇾ競の競は自動詞なるが、此の詩句にては競南風としてそれを他動詞に用ひたり、因つて余は已むなく「競なりとす」と訓す、「律と競爭しうるほどの强さあるものとなす」の義なり、字義は上述のごとくなるが作者の意は「この土地では南方の船人の様な習俗を他のことよりまさつたものとみてゐる」といふことをいひあらはすに在るなり。【二八】疎北客　北地のたびびと（自己をふくめて其中にあり）を疎略にあつかふ。【二九】英俊　すぐれた人物。【三〇】屈原宅　「元和郡縣志」によれば宅は今の湖北省歸州府興山縣北三十里にありといふ。土俗舟人の外に人物なきに非ざるをいふ。

【題義】峽中の船をあやつるに最も巧みなるもののことをよめるうた。大曆元年の作。

【詩意】峽中の丈夫は死ぬことなどを非常に輕くみてをり、しかるべき家にやとはれてはたらくものはごくすくなく、水のうへではたらくものが多い。かねもちは錢をもつてをるので大船にのつてそれをうごかすし、貧乏ものは艭子をあやつつて手間賃を取る。』小兒は學問をするが「論語」をならふだけである。生長したこどもは身仕度をして船乗りとなつて商人旅客についてゆく。さうして或は帆をかたむけ柁をかたむけて波濤のなかに漕ぎ入り、「漩」といふうづや「濆」といふうづを巧みにはらひのけていかなる險阻をも險阻とおもはぬ。むかしから朝白帝城から出發して日暮れには江陵につくといふ話があるが、自分はこのごろまのあたり之をみるにほんたうに證據がある。瞿唐峽の水は天にはびこり、虎鬚灘の水は怒つてあれくるふが、歸州出の長年ときてはそんな難場所で船をあやつることはいちばんじやうずである。』遺憾なことはこの地方の人は度量がせますぎて、まちがつた考で南方の習俗ばかりをまさつたものの樣におもひ北方の人人を疎略にすることである。しかし若しそんならこの土地にすぐれた人物は無いといふならばどうして山に屈原の宅が有り得るか。（屈原の宅があれば屈原の樣な人物がここから生れうるわけなのだ。惜しいことだ。）』

寄韋有夏郎中（一）

韋有夏郎中に寄す

省郎憂病士（二）（三）、書信有柴胡（四）。
省郎病士を憂ふ、書信柴胡有り。

飲子（五）頻通汗、懷君（六）想報珠（七）。
飲子頻りに汗を通ず、懷君珠を報せんことを想ふ。

親知（八）天畔少、藥餌峽中無。
親知天畔に少し、藥餌峽中に無し。

歸楫（九）生衣臥、春鷗洗翅（一〇）呼。
歸楫生衣に臥す、春鷗洗翅呼ぶ。

猶聞上急水（一一）、早作取平塗（一二）。
猶ほ聞く急水を上ると、早く平塗を取るを作せ。

萬里皇華使（一三）、爲僚（一四）記腐儒（一五）。
萬里皇華の使、僚と爲る腐儒を記す。

【字解】【一】韋有夏郎中　郎中の官韋有夏なり、顏眞卿が東方朔碑陰に朝城主簿韋有夏といふ人あり、同人なるべきかといふ。詩によるに有夏は長江の下流より夔州に向つてのぼるものとみゆ。【二】省郎　尚書省の郎官、韋をさす。【三】病士　自己をさす。【四】柴胡　藥草の名、義汗劑なりと。【五】飲子　煎じて飲む藥をいふ。【六】懷君　君をおもふ、君は韋をさす。【七】報珠　眞珠をお禮にやる、張衡の四愁詩に、何以報ㇾ之明月珠とあり。【八】親知　親戚知己。【九】歸楫生衣臥　歸楫はかへるかぢ、歸舟

の意。生衣は熟衣に對する語、ねらぬきぢのままの衣、生衣臥とはそれを着て臥てゐること、病身なるをいふ。(「杜臆」の説に生衣を水衣の生ずることとし、臥を楫が水上にねかしてあることと解きたり、今取らず。)【一〇】洗翅　はねを水であらふ。【一一】上急水　峽の急流をのぼつてくる。【一二】取平途　平坦なみちをとれ、といふは夔州は峽中での平地なればそこへ來れといふなり。【一三】皇華使　詩經に「皇皇者華」といふ詩篇あり、君が使者を送りだすときうたふ詩なり、これは韋をさす。【一四】僚　同官、どちらも郎官なり。【一五】腐儒　自己をさす。

【題義】郎中韋有夏といふものにやつた詩。大曆元年の作。

【詩意】省郎は病士のことをしんぱいしてくれて手紙とともに柴胡といふくすりを送つてくれた。あの煎じぐすりはよく汗を通じる効がある、あなたのことをおもうて御返禮に眞珠でもあげたいとおもふ。天のはてでは知り人はすくないし、藥品や滋養物は峽中には無い。春のかもめがつばさを洗ひながらさけんでゐるが、自分は歸舟をつないだまま生衣をきてねてゐる。あなたはいまなほ急流をさかのぼつてゐるとのことだが早くここの平地へくるやうにされたらどうか。萬里の遠くへ使者としてこられたあなたはよくも同僚としてこの腐儒のゐることを記憶してくださつた。ごしんせつはありがたくおもふ。

峽中覽物(一)

峽中物を覽る

曾爲掾(二)吏趨三輔(三)。　曾て掾吏と爲つて三輔に趨く、

憶在潼關(四)詩興多。　憶ふ潼關に在りて詩興多かりしことを。

巫峽(五)忽如瞻華嶽(六)。　巫峽は忽ち華嶽を瞻るが如く、

蜀江(七)猶似見黃河。　蜀江は猶ほ黃河を見るに似たり。

舟中得病移衾枕(八)。　舟中病を得て衾枕を移す、

洞口(九)經春長薜蘿(一〇)。　洞口春を經て薜蘿長ず。

形勝(一一)有餘風土(一二)惡。　形勝餘り有り風土は惡しし、

幾時(一三)回首(一四)一高歌(一五)。　幾時か首を回して一たび高歌せむ。

【字解】【一】覽物　物とは山水をさす。【二】掾吏　屬官、華州の司功參軍たりしことをさす。【三】三輔　京兆・扶風・馮翊を三輔といふ、都の附屬の行政區劃なり、華州は扶風に屬せり。【四】潼關　華州にあり。【五】巫峽　巫山縣にあり。【六】華嶽　華州にあり。【七】蜀江　卽ち長江。【八】移衾枕　衾はかいまき、移とは舟中より陸上へうつすをいふ。【九】洞口　五溪盤洞の口をいふ。【一〇】薜蘿　まさきのかづら、ひめかづら。【一一】形勝　景色のよいこと。【一二】風土　風とは夷俗を雜ふるをいひ、土とは瘴氣多きをいふ。【一三】幾時　何の時か。【一四】回首　北にかへりて華嶽黃河の方へかうべをむけかへる。【一五】高歌　卽ち第二句の詩興といへるもの是れなり。

【題義】峽中の山水を見て北歸の情をうごかしたことをのべた詩。大曆元年の作。

【詩意】自分はかつて屬官となつて長安の郡部へいつた。さうして潼關のあたりで詩興の多かつたことをいまだにおぼえてゐる。いまここで巫峽をみると忽ち華嶽をみる樣だし、蜀江をみると黃河をみるやうなきもちがする。自分は舟中で病氣になつたため陸へ衾枕を移した。さうして洞口で春を經て

蘚蘿がのびたのを見る。ここは景色のいいことは十分だが風土がわるい、いつになつたら北方へいつてむかしの河嶽に首をふりむけてひとたびこゐたかくうたふことができるだらうか。

憶鄭南

鄭南伏毒寺。瀟灑到江心。
石影銜珠閣。泉聲帶玉琴。
風杉曾曙倚。雲嶠憶春臨。
萬里蒼茫外。龍蛇只自深。

鄭南を憶ふ

鄭南の伏毒寺、瀟灑江心に到る。
石影珠閣を銜み、泉聲玉琴を帶ぶ。
風杉曾て曙に倚る、雲嶠春臨を憶ふ。
萬里蒼茫たる外、龍蛇只自ら深くす。

【字解】【一】憶鄭南　一本に南字の下に玼字あり、何の義とも知れず、草堂本は之を削り去れり、今無きものに從ふ。鄭南とは華州鄭縣の南をいふ。【二】伏毒寺　鄭縣にある寺の名。【三】瀟灑　風景氣象のさらりとした貌。【四】江心　寺の在る江の中央。【五】石影　江中の石のかげ。【六】珠閣　珠をかざつた小にかい、寺のたてものなり。【七】玉琴　玉をかざつた琴のだすおと。これはたとへなり。【八】蒼茫　風煙とざしてはつきりせぬ貌。【九】外　外とは現居の夔州をさしていふ。【一〇】龍蛇　けだし暗に自ら比す。【一一】深　淵のふかきところにひそみ居るをいふ。

【題義】この詩も北をおもふなり、鄭縣の寺のことをいへり。大暦元年の作。

【詩意】鄭縣の南に伏毒寺といふ寺があつて、自分はかつてあのさつぱりとした江の中央へいつてみた。すると石の影はうつくしい珠閣をふくみ、泉の聲は玉の琴をならす樣なおとをおびてゐる。風のわたる杉の木に自分はかつてあけぼののときに倚りかかつたことがある。雲のゐる山に春のをりにのぼつてみたこともおぼえてゐる。ところが今ここは鄭縣からみると蒼茫たる萬里の外に在つて、峽中の淵で龍蛇がただ深くひそんでをるばかりである。

贈崔十三評事公輔

飄颻西極馬。來自渥洼池。
颯飁寒山桂。低徊風雨枝。
我聞龍正直。道屈爾何爲。
且有元戎命。悲歌識者知。
官聯辭冗長。行路徙欹危。
脫劍主人贈。去帆春色隨。
陰沈鐵鳳闕。敎練羽林兒。
天子朝侵早。雲臺仗數移。

崔十三評事公輔に贈る

飄颻たり西極の馬、渥洼の池より來る。
颯飁たり寒山の桂、低徊す風雨の枝。
我聞く龍は正直なりと、道屈する爾何爲れぞ。
且つ元戎の命有り、悲歌識者知る。
官聯冗長なるを辭し、行路欹危なるに徙る。
劍を脫して主人贈る、去帆春色隨ふ。
陰沈たり鐵鳳の闕、敎練す羽林の兒。
天子朝早を侵す、雲臺仗數〻移る。

（二七）分軍應供給（二八）百姓日支離（二九）。　軍を分ちて供給に應ず、百姓日に支離す。

（三〇）黠吏因（三一）封己（三二）。公才（三三）或守雌（三四）。　黠吏因つて己を封ず、公才或は雌を守る。」

（三五）燕王買駿骨。渭老（三六）得熊羆。　燕王駿骨を買ふ、渭老熊羆を得。

（三七）活國名公（三八）在。拜壇（三九）羣寇（四〇）疑。　活國名公在り、拜壇羣寇疑ふ。

（四一）冰壺動瑤碧。野水（四二）失蛟螭。」　冰壺に瑤碧動く、野水蛟螭を失す。」

（四三）入幕諸（四四）彥集。渴（四五）賢高（四六）選宜。　入幕諸彥集る、渴賢高選宜し。

（四七）騫騰坐（四八）可致。九（四九）萬起於斯。　騫騰坐ながら致す可し、九萬斯れより起る。

（五〇）復進出（五一）矛戟。昭（五二）然開（五三）鼎彝。」　復た進みて矛戟を出す、昭然鼎彝を開かむ。」

（五四）會看之（五五）子貴。歎及老（五六）夫衰。　會ず看む之の子の貴きを、歎じて及ぶ老夫の衰。

豈但江（五七）曾決。還思霧（五八）一披。　豈に但江曾て決せしのみならむや、還た思ふ霧一たび披かむことを。

（五九）暗塵生古鏡。拂匣照西施。　暗塵古鏡に生ず、匣を拂うて西施を照さむ。

（六〇）舅氏多人物。無（六一）慚困（六二）翮垂。」　舅氏人物多し、慚づる無かれ困翮の垂るることを。」

【字解】【一】崔十三評事公輔　評事は官名、大理寺に屬す、出使して推案することを掌るものにして出張裁判官の類なり。崔公輔は姓名、詩中に羽林・入幕の語あれば公輔はじめに評事となり、次に幕僚となり、次に元戎の薦を以て羽林軍の職につきしものとみゆ。裴迪が注に公輔は作者の母方のいとこなれば題の公輔の下に「弟」の字を脱せしならんといへり。【二】西極馬　西域の天馬をいふ。【三】渥洼池　卷三「沙苑行」の龍媒・渥洼の句解をみよ。【四】飄颻　大風のふくさまなりといへり。【五】寒山桂　冬の山のかつら。衛靈運が詩句に桂木凌寒山とあり。馬は公輔の才俊なるに比し、桂はその困厄にあるに比す。【六】風雨枝　一の幕僚に居るに比す。【七】龍　浦氏曰く龍は天子をさす、「易」に謂はゆる龍德あつて正中なる者なりと。【八】遒屈　行はんとする道の屈して伸びざるをいふ、地位卑くしては道も行へぬなり。【九】爾　公輔をさす。【一〇】何傷　どういふわけぞ。【一一】元戎　羽林軍の主帥にしてこのたび公輔を薦めてくれた人をいふ、其の何人なるやは知る能はず、浦氏はこの時禁軍を掌るものは魚朝恩なるべきに之を元戎・活國などいふは作者其の勢燄を畏れて寃詞以て之に媚ぶるか、抑も別に軍を主る重臣ありしか、或は作詩の時是のときに非ざるか、攷ふべからず、といへり。【一二】悲歌　公輔が逆境に居て悲歌せしこと。【一三】識者　識見すぐれし人、即ち上の元戎のごとき人をいふ。以上崔公輔の人物境遇より說き起す。【一四】官聯　聯は聯事とて官職に在れば他の諸官と聯合して仕事をすることあるをいふ。【一五】冗長　むだにのびること。聯事の冗長なるをいふ。評事の官は冗官に非ざるも幕僚の職が冗なるなり。【一六】徙　うつる、轉ず。【一七】鞋危　路のかたむきあやふきこと。【一八】主人　即ち外州の武官にして公輔の現幕主をさす。【一九】去帆　崔は船にて江を下るゆゑにかくいふ。【二〇】陰沈　おもくるしきさま。【二一】鐵鳳闕　都の宮門をいふ、闕は中央をはさむ左右の小門にしてその門頂に鐵製の鳳凰を置く、鳳の姿勢は兩翼を張り頭を擧げ尾を敷く。【二二】教練　なしへれる。【二三】羽林兒　禁軍をいふ。漢の宣帝の時、從軍して事に死せし者の子を取り羽林に養ひ、官、之に五兵（戈・殳・戟・酋矛・夷矛）のあつかひかたを教へたり、之を羽林孤兒と號す。羽林といふは天の羽林星より取る、羽は猛鳥の羽翼を以て鷙擊する意味をとり、林は林木の盛なるごとく多き意に取り、之を武人の稱とすといへり。以上崔が禁軍の教官となりて朝廷へかへるをいふ。【二四】朝從早　非常に早くから朝廷へ出御になる、政務に勉めらるるなり。【二五】雲臺　宮中の高臺。【二六】仗數移　仗は儀仗。數移とはたびたび諸所へ移動すること、これは騷亂のため事多くて一所におちついてゐるひまなきをいふ。【二七】分軍　浦氏は魚朝恩が神策軍を分ちて左

右翩となし、北軍の右に居らしめしことを引けり。分軍とは之によれば軍隊の組織をわけたことをいふ。【二八】供給　衣食の供給、兵士に給するなり。【二九】支離　手足がばらばらになる、からだが滿足にたちゆかぬをいふ。【三〇】黠吏　わるがしこきこやくにん。【三一】因　そのことにつけて。どさくさまぎれに。【三二】封己　封は土をもりあげることにてその樣に自己の方の收入を厚く多くすること。「國語」に出づ。【三三】公才　晉の王導、孔愉を評して公才有りて公望無しといへり。公才とは三公たるべき才をいふ。【三四】守雌　消極的な態度をとるをいふ、「老子」に知ニ其雄一、守ニ其雌一とみゆ。要路の顯官が沈默を守つてをることをいふならん。以上は時事の憂ふべきものあるをのぶ。【三五】燕王買駿骨　燕の古王千里の馬を求めんとて涓人（掃除を掌る役人）を遣はせしに涓人、死馬の骨を五百金にて買ひて返る。王怒る、涓人が曰く死馬すら之を買ふ、況んや生者をやと、一年ならずして千里の馬至るもの三つ、「戰國策」燕の郭隗が昭王に說ける話のうちにみゆ。燕王を元戎に、駿骨を崔に比す。【三六】渭老得熊羆　呂望非熊の故事卷三の二〇七頁非熊の句解をみよ、渭老は渭水の濱に釣りしてゐた老人呂望（太公望）をいふ、非熊の故事は周の文王が渭濱に獵せば獲ものは熊にも羆にも非ずして霸王の輔（呂望）ならんとトひが出たといふ話なるも、ここはそれを改造して用ひたるなり、卽ち渭老が獵して熊羆を得たといふなり、渭老を元戎に、熊羆を崔に比す。【三七】活國　國をいかす。【三八】名公　名高き高位の人、元戎をさす。【三九】拜壇　漢の高祖、韓信を大將に任ぜしとき壇を築きて之を任命す、以て元戎の厚遇を受くるに比す。【四〇】羣寇疑　名將權を委ねらるる故盜賊ども不安の念をいだきおそれる。【四一】冰壺動瑤碧　瑤は玉につぐ美石、碧は碧玉、瑤碧は蓋し壺中の氷の色をたとへていふ。これ崔の心の高潔にして他の清涼劑となるをいふ、鮑照の句に淸如ニ玉壺氷一、此句倣れて又崔が宮中に置かるるをいふ。卷十「入奏行」の炯如一段清氷出萬壑、置在迎風寒露之玉壺、蔗漿歸廚金盌凍、洗滌煩熱足以寧君軀、といへると同意、仇注に待合肅淸なるをいふといへるは適切を缺くに似たり。或は元戎の卽墨を指すといふ說も當らず。【四二】野水失蛟螭　央の周瓊、劉備等を許して蛟龍得ニ雲雨一、終非ニ池中物一也といへる語意を用ふ。崔を蛟螭に比し、それが野水をはなるるをいふ、野水よりいへばいままで棲みたる蛟螭を失ふわけなり、尊前失ニ詩流一など類せる句法なり、此句を仇注に幕僚の省除するをいふとときたるは從ひがたし。余本篇に於て仇注と異說を持するものあり、以下一一には辨ぜず。以上崔が元戎に知られて中央に出づるをいふ。【四三】入幕　元戎の幕中に入るをいふ。【四四】諸彥　彥はすぐれたる人。【四五】渴賢　「孔叢子」に、子思が魯の穆公に對へたる言に、君若ニ饑渴一待レ賢、納ニ用其謀一」といへり。元戎が賢者を得るために渴してをるをいふ。【四六】高選宜　崔は高き地位に選ばるるにふさはし。【四七】鶱騰　鳥馬のあがるごとくあがる、立身するをいふ。【四八】坐可致　ゐながら招き致すことができる。【四九】九萬　九萬里もたかく空へあがること、「莊子」に大鵬といふ鳥のあがることをのべて、「搏ニ扶搖一（飇、つむぢかぜ）而上者九萬里」といへり。【五〇】復進　ふたたび前進する、地位がすすむこと。【五一】出矛戟　矛や戟をたてる身分となる、節度使などになるをいふ。【五二】昭然　あきらかに、だれにもはつきりわかる樣に。【五三】開鼎彝　鼎も彝も「かなへ」なり、昔は人の勳功を銘文に作りてかなへに鑄る、崔がそれほどの功を立つべきをいふ。以上は崔が將來益ゝ立身出世して功業を顯はすべきを豫期することをのぶ。【五四】會　必ず。【五五】之子　崔をさす。【五六】老夫　自己をいふ。【五七】江皆決　諸家の注に、さきにかつて公輔が議論をきくに江河の決するがごとく施歸なりし、ととく。江決・霧披の二句暫く舊說に從ふ。【五八】霧一披　「世說」にいふ、衞瓘、樂廣を見て曰く、雲霧を披きて青天を覩るが如しと、公輔が風采を見んと欲するをいふ。【五九】晴應二句　自己亦公輔が榮達の餘光をうくべきをいふ。匳は鏡をいれてある「はこ」、西施は吳王の美人、以て自己に比す。【六〇】舅氏　作者の母方のをぢをいふ、卽ち公輔が父にあたる人をさす。【六一】無靦　靦づることなかるべし、舅氏に向つていふなり。【六二】困翮垂　作者自己の不遇困窮に居ることをいふ、卽ち卷一、奉贈韋左丞濟詩の靑冥卻垂翅とあると意似たり。以上公輔と自己とを對比して舅氏に向つて慰問を述べたり。

【題意】 母方のいとこの崔公輔が都へ任官するを送り、別れにのぞんで之に贈つた詩。大曆元年の作。

【詩意】 ここに飄颻とただようてゐる西域のはての天馬がをる、これは渥洼の池から來た駿足である。また寒山をしのいで立つ桂の樹が大風に吹かれてゐる。その雨風をうけた枝は力なく吹きのめされてゐる。（たとへば君は此の馬や桂の樹の樣なものだ）。自分は聞くに龍（人君）は正直なものであるといふのにおまへは道を伸ばすことができぬといふはどういふのであるか、そんな筈はないのである。その

うへこんどは元戎からの命が有つた、おまへはこれまでは逆境に悲歌してゐたが識者はちやんとおまへが如何なる人物であるかは知つてゐるのである。』おまへはいよいよ冗長な官の仕事（幕職）を辭して山路のかたむきあやふいところをうつりゆく、いままでの主人（幕主）からは佩劍を脫してみやげものとして贈られ、ゆく船の帆に春げしきをしたがへながらでかける。おもくるしい鐵の鳳凰がのつてゐる都の宮門につけば、そこでは禁中の軍隊を敎練することになるのだ。』いま天子はあさまだき早すぎるくらゐに朝廷へ出御になり、おいそがしくて禁中の臺からたびたび他へ儀仗をおうつしになる。禁軍は隊を分けられてそれに一一衣食を供給せねばならず、人民は日日身の立つせがなくなつてゐる。そのどさくさまぎれにつけこんでずるい役人どもは自分のふところばかりふくらますし、要路の顯官は言ふべきことがあつてもだまつてゐるといふ風だ。』この時に當つて元戎がおまへを得たのはたとへばむかし燕の王さまが駿馬を買つたごとく、また渭水の老人太公望がかりをして熊や羆を獲た様なものだ、いま國家を活かすに元戎の様な名公がをられ、その人が將壇に拜命されてるので多くの盜賊どもも疑ひ懼れてゐる。そこへおまへが用ひられるのはたとへば玉壺のなかにいれた淸氷が瑤碧の光をたたへてゐる様であり、いよいよ蛟螭のごときえらものが野中の池から離れて天上の風雨を卷き起さうとするのだ。』元戎の幕中にはもろもろのすぐれた人が集つたが、元戎は賢人を求めるのに渇してゐるからおまへはもつと高い地位に選ばれるにふさはしい。これからはゐながら高く飛びあがれる、九萬里のうへの空にのぼるのもこれからはじまるのである。こんどさらに地位が進むならば門前に矛戟をいだす様な節度使にもなるであらう、さうしてあきらかに鼎に銘せらるる様な大勳功を開きおこすであらう。』自分はおまへが必ず貴い身分になることとおもふ、之に反して自分の老衰をかんがへると歎かぬわけにゆかぬ。いままでおまへの雄辯はすでにきいて知つてゐるが、今後また都に於て霧を披いて靑天をみる様におまへを見たいとおもふ。古鏡には塵がくらくたまつた、その匣の塵をうち拂うて美人西施（自己をいふ）の姿を鏡に照らしてみたいものだ。をぢさんはよい子をもたれた、よい人物がたくさんゐる。だからわしの様なつかれたつばさを垂れてゐる様な者がゐてもそれを愧づるにはあたらぬことだ。』

奉寄李(一)十五秘書文嶷二首

李十五秘書文嶷に寄せ奉る　二首

避暑雲(二)安縣。秋風早下來。
暫留魚(三)復浦。同(四)過楚(五)王臺。
猿鳥千崖窄(六)。江(七)湖萬里開。
竹(八)枝歌(九)未好。畫(一〇)舸莫遲(一一)回。

暑を避く雲安縣、秋風早く下り來る。
暫く留まる魚復浦、同じく過る楚王の臺。
猿鳥千崖窄く、江湖萬里開く。
竹枝歌未だ好からず、畫舸遲回する莫かれ。

【字解】【一】李十五秘書文嶷　秘書李文嶷、秘書省に屬する官なるをいふ、何の官なるやは詳ならず、或は郎官などか、文嶷は宗室の一人なり。【二】雲安　夔州の上流、今雲陽縣、已に見ゆ。【三】魚復浦　夔州府奉節縣東南にあり。【四】同過　李とともによぎり訪ふ。【五】楚王臺　陽雲臺をいふ、巫山縣の西北にあり、高さ百二十丈ありといふ。宋玉の賦に、楚王（襄王）游於雲夢之臺、望高唐之觀、又曰く巫山の神女去らんとして辭して曰く、妾在巫山之陽、高丘之岨、且爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下と。【六】窄　せまし、崖谷間の餘地すくなきをいふ。【七】江湖　長江、洞庭湖など荊州の方面をさしていふ。【八】竹枝　巴渝（重慶府方面）地方の土謠なり。唐の劉禹錫の記する所によれば、里中兒、聯歌竹枝、吹短笛、擊鼓以赴節、歌者揚袂睢舞、以曲多爲賢、晉中黃鐘之羽、其卒章激訐、如呉聲といへり、以て大略を想見すべし、ここは峽中の土謠を代表せしめて用ひたり。【九】歌未好　土謠もよろしいがほんたうにはまだよくない。（峽を出ればまだもつとおもしろい歌がきけるの意。）【一〇】畫舸　文綵ののる船をいふ、宗室の人の乘るものなれば色彩を施してうつくしきふねなり。【一一】遲回　ぐづついてゐる。

【題義】秘書省の官たる宗室李文嶷といふ人に寄せたてまつつた詩。永泰元年秋雲安より夔州に暫遊せし際の作なるべし。此詩仇氏は黃鶴に從ひ大曆元年夏夔州にての作とせり、それにては本篇は決して解釋する能はずと信ず、余はすこしく獨斷に失するかとおもはるれど、これは前年永泰元年秋雲安滯留中に一時的に夔州にあそびしものとみて、其時の作ならんと考ふ。かく見るとき始めて本篇は意義が通ずるなり。作者が雲安滯留中に一時夔州に遊びしといふことは傳記諸家の言はざる所なるも本篇ある以上はしかく見ざる可からず。因にいふ、本篇を以て果して雲安滯在中に一時夔州に遊びし時の作とすれば卷十四の「長江」二首も當時夔州にて作りしものにして雲安に於て豫想して作りしものに非ざる者となるわけなり。彼の二首も實は豫想としては隔靴搔痒の感ある詩篇なり。實景を見て所感を寓せしとする方が適切なり。鄙見若し正當ならば作者の傳記に一の新事實を添ふ。

【詩意】自分は雲安縣で暑さを避けてゐたが早くも秋風が吹きおろして來た。それで夔州に遊んでしばらく魚復浦に逗留してあなたとごいつしよに楚の襄王と神女の話で名高い陽雲臺をもたづねた。ここは猿だの鳥だのが鳴きさけんで多くの崖があつまつて土地のせまいところだ、前途江湖の地方へ出ればはてしなき萬里の天が開いてゐる。ここできく竹枝の土謠もよいにはよくともまだまだ好いといふわけではない、さきにはもつとよいものがある。あなたのお船もこんなところにぐづぐづなさらずにわたくしといつしよに江をくだつて峽中を出てしまはうではありませぬか。

［二］

行李千金贈。衣冠八尺身。
飛騰知有策。意度不無神。
班秩兼通貴。公侯出異人。
玄成負文彩。世業豈沈淪。

［二］

行李千金の贈、衣冠八尺の身。
飛騰知る策有るを、意度神無くんばあらず。
班秩通貴を兼ぬ、公侯異人を出だす。
玄成文彩を負ふ、世業豈に沈淪せむや。

【字解】【一】行李　李の字は理の字の普通にて古は行理または單に理といへり、理とは彼我兩者の間にたちて道理をのべて、事をなさむる人をさす、媒介人、使者、みな之を理といふ。（俗用には轉じて其人の攜帶する荷物を意味するにいたる。）ここは使者の

義、文嶷は何かの公用によりて此地に來れるものとみゆ。【二】千金贈　交際に厚く物を贈るをいふ、作者も或は厚贈をうけしならん。【三】飛騰　要路にのぼりあがる。【四】意度　意思度量。【五】神　人間以上のもの。【六】班秩　くらゐ。【七】通貴　舊注に唐制、祕書郎は從六品上なる故に、通貴といふといへるも、從六品上にては貴とはいひがたかるべし、又通字の義明かならず、余案ずるに、通貴とは宗室の貴をいふ、通とは「遺章」の遺のごとく、天下にゆきわたりてをるをいふ、宗室の貴きは萬人の知る所なり。【八】公侯　文嶷の父祖必ず公または侯に封ぜられし人あるなり。【九】異人　非凡の人物、文嶷をさす。【一〇】玄成　漢の韋賢が少子なり、賢は儒者にして宣帝の時丞相となる、玄成父の業をつぎ元帝の時丞相となる、建昭三年卒す、「漢書」本傳にいふ、玄成相となること七年、正を守り重きを持するは父賢に及ばざるも文采は之に過ぎたりと。自劾詩・戒子孫詩等の四言詩あり。【一一】負文彩　文學に秀でたりとの名譽をになふ。事は上にみゆ、以て文嶷に比す。【一二】世業　代代うけつぐわざ、儒術文章の事をいふ。【一三】沈淪　水のそこにふかくしづむ。

【題義】この第二首は文嶷をほめてよめり。

【詩意】あなたは使者として往來の途上でも交友に千金の贈りものをされる、形貌はといふと衣冠をつけた堂堂八尺の大男である。あなたが要路にのぼつて活躍されるにはどうすればよいか已に策をもつてをられるとおもふ、あなたのおこころもち度量には人間以上のものがある樣である。あなたは官位をもつてをらるるうへに宗室といふ貴い身分を兼ねてをられる、公侯の後じつに非凡の人をだしたものだ。漢の韋玄成ともいふべきあなたは已に文彩ありとの名譽をになうてをられる、お家世襲の業がどうしてしづんで振はぬといふことがありませうぞ。きつとふるふにきまつてゐる。

雷

(一)大旱山嶽焦。密雲復無雨。
南方(二)瘴癘地。罹此農事苦。
(三)封内必(四)舞雩。峽中喧(五)擊鼓。
(六)眞龍竟寂寞。(七)土梗空(八)傴僂。
吁嗟(九)公私病。(一〇)税斂缺不補。
故老仰面啼。(一一)瘡痍向誰(一二)數。
(一三)暴尫或前聞。(一四)鞭石非(一五)稽古。
請先(一六)偃甲兵。(一七)處分聽(一八)人主。
萬邦但(一九)各業。一物休(二〇)盡取。
水旱(二一)其數然。(二二)堯湯(二三)免親覩。
上天(二四)鑠金石。羣盜亂豺虎。
(二五)二者存一端。(二六)愆陽(二七)不猶愈。

雷

大旱山嶽焦げたり、密雲復た雨無し。
南方瘴癘の地、此の農事の苦しめるに罹る。
封内は必ず舞雩す、峽中は擊鼓喧し。
眞龍竟に寂寞たり、土梗空しく傴僂す。
吁嗟公私病めり、税斂缺けて補はず。
故老面を仰いで啼く、瘡痍誰に向つてか數へむ。
尫を暴すは或は前聞す、石を鞭つは稽古に非ず。
請ふ先づ甲兵を偃せ、處分人主に聽せむ。
萬邦但各業をし、一物も盡く取ることを休めむ。
水旱は其の數然り、堯湯も親ら覩ることを免れむや。
上天金石を鑠かす、羣盜豺虎亂る。
二者一端を存せば、愆陽は猶は愈らずや。

昨宵殷其雷(二八)、風過齊萬弩(二九)。　昨宵殷たる其の雷あり、風過ぎて萬弩齊し。
復吹霾翳(三〇)散、虛覺神靈(三一)聚。　復た霾翳を吹いて散せしむ、虛しく神靈の聚まるを覺ゆ。
氣暍(三二)腸胃融(三三)、汗濕衣裳汚。　氣暍して腸胃融る、汗濕して衣裳汚る。
吾衰尤計拙(三四)、失望築場圃(三五)。』　吾衰へて尤も計拙なり、望を失ふ場圃を築くことに。』

【字解】【一】大旱　大曆元年春より旱し六月庚子に至りて始めて雨ふるといへり。【二】瘴癘　わるい水蒸氣。【三】封內　王領のうち。【四】舞雩　雩は雨乞ひのまつり、舞ふとはその祭りのとき巫がまふこと、「周禮」の司巫職に、司巫は國大旱なれば巫を率ゐて雩に舞はす、とあり。【五】擊鼓　「神農祈雨書」に、雨を祈りて雨ふらざれば巫を暴す、巫を暴して雨ふらざれば薪を積み鼓を擊ちて山を焚く、とみゆ。【六】眞龍　龍は雨をふらす力あるものと考へらる。【七】土梗　どろ人形、雨乞ひに用ふるもの。「戰國策」にみゆ、もとは木梗とて桃の木でつくりし人形なるを土にてつくりても土梗とよびしとみゆるなり。雨乞ひには又土の龍などをも用ふ。【八】僂俯　背をかがめるさま、神に祈るかたちなり。【九】公私病　官も民もやむ、貧しきをいふ。【一〇】稅斂　稅金のとりいれ。【一一】瘡痍　きず。【一二】數　かぞへてのべる。以上は大旱のため農事の憂あるをいふ。【一三】暴尪　暴は之を日にさらすをいふ、尪は「せむし」病の人、「左傳」僖公二十一年に魯の僖公が旱のために巫・尪を焚かんとせしとの話あり。又「禮記」檀弓下に魯の穆公が尪・巫を暴さんとせし話あり。「禮記」の鄭玄の注によれば尪をさらせば天が之を哀みて雨をふらすといへり。しかるに「左傳」の杜預の注によれば鄭玄と異れり、其說によれば、「せむし」の面は上に向ふ、俗に天が其の病をあはれみ雨がその鼻に入らんことを恐るるが故に旱をなさしむといふといへり。作者は蓋し杜預の說を用ひしならん。【一四】鞭石　石の字もと巫に作る、張遠之を石と改む、張遠「初學雜記」を引きて、宜都郡に二大石あり、陽石を鞭てば晴れ、陰石を鞭てば雨ふるといへり、庾信が詩に鞭石未成雨の句ありと。【一五】稽古　古をかんがふ。【一六】偃甲兵　武器をふせて用ひぬ、兵亂をやめること。【一七】處分　政事上の處置。【一八】人主　天子。【一九】各業　各其の業を業としてつとむる。【二〇】盡取　とりつくす。【二一】其數　數とは道理をいふ。【二二】堯湯　堯のとき九年の水ありしこと、湯の時七年の旱ありしこと「史記」にみえ、「說苑」に見ゆ。【二三】免親覩　免親覩　覩の意、自ら之を見るをいふ。【二四】鑠　とかす、熱氣のために。【二五】二者　大熱と盜賊。【二六】愆陽　あやまれる陽氣、「左傳」に春無愆陽、夏無伏陰の語あり。【二七】不猶愈　不猶愈乎なり、まさつてゐるではないか。以上は時事をいたむ。【二八】殷其雷　「詩」に殷其雷、在南山之陽とあり、殷は殷殷然としてさかんに雷の鳴る貌。【二九】齊萬弩　萬弩齊とは萬個の弩機が一齊に石をはじきだす樣なるをいふ。【三〇】霾翳　土ふり、くらし、雨ふり模樣をいふ。【三一】神靈　雨をふらす神をいふ。【三二】氣暍　暍はあつさあたりすること。【三三】腸胃融　融はとほる、下痢をすること。【三四】計拙　やりかたがまづい。【三五】築場圃　「詩」の七月篇に見ゆ。同じ地面を春夏は耕してはたけとす、これ圃なり、秋冬物の成熟する時になればその地面を築きかためて仕事場とす、これ場なり。これは秋なれば圃が主でなく場を築きかたむるが主なり。以上は雨ふらんとしてからがみなりに了りしことをのぶ。

【題義】大旱にあうて空雷をききしことをのべた詩。大曆元年夏夔州にての作。

【詩意】大旱のため山嶽も焦げ、こきくもがおこるがすこしも雨がない。南方はわるい水蒸氣のあるところでかやうな農事の苦しいめにであうた。王領の內ならばどこでもきつと雨乞ひのために舞をまはすが、峽中ではやかましく太鼓をうちならす。だが土梗ばかりせなかをかがめて神さまにおじぎをしてゐるが、雨をふらす龍神はひつそりとしておともない。ああ今は朝野官民とも疲れ病んでをり稅金の取りたても缺けて補はれずにゐる。老人たちは面をあふむけて啼きながらこのいたでを誰に向つてうつたへようかといふてゐる。』雨乞ひに尪を暴しものにするといふことは前に聞いたことがあ

るが、石を鞭つて雨をふらすといふことは古典には無いことだ。そんなことをするより何よりも先きに兵亂をやめてしまふことだ、さうして政事の處分は天子におまかせをして、諸國めいめい自分の業をつとめ、一物の微と雖もそれを取りつくすといふことはせずに餘力を存するがよろしい。大水大旱は數理のうへでさ樣にあるべきことであつて、堯や湯の樣な聖人でもそれをまのあたりみることを免れるわけにはゆかぬものである。上天が金石をとかすほどのあつさをくだすのと、盜賊どもがはびこつて豺や虎の樣なやつががやがやしてゐるのと、二つのうち一つをのこすとしたならば、陽氣がまちがつてあつすぎるといふ方がまだましではないか。』ゆうべはごろごろと大雷が鳴り、風は萬弩をそろへた樣につよく吹きすぎた。ところがそれがまたくもりけをみな吹きはらしてせつかく雨の神が聚つたのがむだになつた樣なきがする。自分は暑氣にはあてられる腸胃は下痢をする、汗はしとしとで衣裳はきたなくなつた。そのうちで老衰の自分がいちばんまづいことをしたとおもふのは、せつかく秋の仕事場を築かうとおもつてゐたことがみこみのなくなつたことである。』

火

【原注】楚俗。大旱則焚レ山擊レ鼓。有レ合二神農書一(一)。

火【原注】楚の俗、大旱には則ち山を焚き鼓を擊つ、神農の書に合する有り。

(二)楚山(三)經月火。大旱則斯(四)擧。　楚山經月の火、大旱には則ち斯に擧ぐ。

(五)舊俗燒二蛟龍一。(六)驚惶(七)致二雷雨一』　舊俗蛟龍を燒けば、驚惶して雷雨を致すといふ。』

(八)爆レ嵌(九)魑魅泣。(一〇)崩レ凍(一一)嵐陰(一二)昈。　嵌を爆すれば魑魅泣く、凍を崩して嵐陰昈なり。

(一三)羅落沸二(一四)百泓一。(一五)根源皆太古。　羅落せられて百泓沸く、根源皆太古よりす。

(一六)靑林一灰燼。(一七)雲氣無二(一八)處所一』　靑林一に灰燼となる、雲氣處所無し。』

入レ夜殊赫然。新秋照二(一九)牛女一。　夜に入りて殊に赫然たり、新秋牛女を照す。

風吹巨焰作。(二〇)河漢騰二煙柱一。　風吹いて巨焰作る、河漢まで煙柱騰がる。

〔河掉騰煙拄〕　〔河掉ひて騰煙拄ふ。〕—

勢欲レ焚二(二一)崑崙一。光彌(二二)焮二洲渚(二三)一』　勢ひ崑崙を焚かむと欲す、光彌〻洲渚を焮る。』

(二四)腥至焦二長蛇一。聲(二五)吼纏二猛虎一。　腥至りて長蛇焦げたり、聲吼えて猛虎に纏ふ。

(二六)神物已高飛。不(二七)〔只〕見石與レ土。　神物已に高く飛ぶ、只だ見る〔見ずや〕石と土と。

(二八)爾寧要二(二九)謗讟一。(三〇)憑レ此近二(三一)焚侮一。　爾寧ぞ謗讟せむと要する、此に憑るは焚侮に近し。

(三二)薄關二長吏(三三)憂一。(三四)甚昧二至(三五)精主一』　薄か長吏の憂に關す、甚だ至精の主に昧し。』

(三六)遠遷誰撲(三七)滅。將(三八)恐及二環(三九)堵一。　遠く遷らば誰か撲滅せむ、將た恐る環堵に及ばむことを。

流汗臥江亭。更深氣如縷。』　汗を流して江亭に臥す、更深くして氣縷の如し。』

【字解】【二】神農書　前の「雷」詩の解に引きし「神農求雨書」の類をさす。【三】楚山　夔州地方の山。【四】絕月　一月にもわたる火。【五】斯舉　火をあぐるをいふ。【六】舊俗　古來の俗說にては。【七】驚惶　蛟龍がおどろきおそれる。【八】致雷雨　致は招きいたす。以上は山を焚く理由をのぶ。【八】燥㷧　燥ははちばちもやすこと、㷧は山穴をいふ。【九】魑魅　こだま、やまのかみ、山中の怪なり。【一〇】崩凍　凍は低地の氷雪などありてこほれるところをいふ、崩とは火にてやくゆゑそれがとけてくづれるをいふ。【一一】嵐陰　嵐は山の氣、陰はくもり。【一二】明　赤文ありて明かなるをいふ。【一三】羅落　文字のままに「あみ」「まがき」とみるを得れどもその場合にも動詞として用ひしなり、動詞としてみるならば落を絡の音通とみて羅絡は「つらなりからめる」義とすべし、火勢が周圍をとりまくをいふ。【一四】百泓　泓は水のたまれるところ、「ふち」をいふ。【一五】根源　水の出るもと、淵底をいふ。【一六】青林　周圍の立ち木をいふ。【一七】雲氣　煙氣をさす、火煙が雲のごとくみゆるなり。【一八】無處所　一定の處なし、すべてが煙氣ばかり。以上は日中の火をいふ。【一九】牛女　牽牛・織女の星。【二〇】河漢騰煙柱　火煙の柱が河漢まであがる。(漢を掉に柱を拄に作れる本あり、河掉騰煙拄とよむ。天の河もふるひうごき、あがれる煙が之をささへてゐるかの樣であるの意。風吹巨焰作の對句としてはこれもおもしろし。)【二一】焚崑崙　「尚書」胤征に火炎崑岡、玉石俱焚とみゆ、崑崙は山の名。【二二】燎　火氣にあぶらるるをいふ。【二三】洲渚　洲のすやなぎさをいふ。【二四】腥至焦長蛇　長蛇焦而腥至の意。結果の方をさきにいふ。【二五】虓吼　虓は虎のこゑ。【二六】神物　龍をさす。【二七】不見　このままならば不見とよむ。一本に不を只に作るといふ、只見ならば簡明なり。以上は夜の火をいふ。【二八】爾汝　一般土人をさす。【二九】謗讟　そしり、うらむ。龍のわるくちをいうてうらむをいふ。【三〇】憑此　憑はよる、あてにする、たのむ。此とは山を焚きたてる事がらをさす。【三一】熒侮　熒は惑はす、侮はあなどる、焚き立てて龍に雨をふらさせんとするは龍を惑はし且つあなどるものなり。【三二】薄關　薄は「いささか」なり。輕く用ひし語。關は關係すること。【三三】長吏　地方の長官。【三四】甚昧　昧は「くらし」、土人等の之を知らざるをいふ。【三五】至精主　龍をさす。龍は至極の精靈のもちぬしなり。「爾寧要謗讟」以下四句は諸家的解なし、余は鄙見を用ひたり。以上夜の火を承けて更に龍の飛び去りしことをいふ。【三六】迤邐　火がとほくまでうつりのびること。【三七】撲滅　草原の火をうちけすこと、語は「左傳」にみゆ。【三八】將恐　將は「はた」或は。【三九】環堵　ぐるりとかこんだ土塀。【四〇】江亭　江に臨んだ亭。【四一】更深　よふけ。【四二】氣如縷　あへぐいきが糸すぢのごとくほそい。以上自家に延燒せんことを恐る。

【題義】雨乞ひのための山火事についてのべた詩。「水經注」によるに廣溪峽（即ち瞿唐峽のこと）の北岸山上に神淵あり、淵北に白鹽崖あり、高さ千餘丈ばかり、俯して神淵に臨む。天旱すれば火を岸上に燃し、其の灰燼を推して下神淵を穢すときは則ち雨を降らすといへり。蓋し神淵の周圍の山を焚くなり。大曆元年秋の初、夔州にての作。

【詩意】この地方で一月以上にもわたつて山に火をつけることがあるが、それは非常な日でりの場合にはじめて行はれることである。これまでの俗說によると蛟龍を燒くとそれが驚きおそれて雷雨をまねきよせることができるといふのである。』山の穴のある處に火をおこすから魑魅の類が泣く。いままでは凍つたところもやきくづされて嵐も陰つたところもあかあかとあかるくなる。火がぐるりととりまくから太古から底に水をたたへてゐるさまざまの水たまりも沸きあがる。靑い立ち木はすつかり灰燼となりそこもここも煙雲の氣ばかりである。』夜になれば一層ぱつとあかるくなる、新秋のときにあたつて其の光は天の牽牛・織女の星をば照らす。風が吹くとおほきなほのほがおこる。煙の柱がたつて河漢までのぼる。(或は「あまの河もふるひおとされさうだが煙のつかへ棒がそれをささへてを

る」)。その勢は崑崙の山を焚かうとしてゐるが、その光りはいよいよ洲や渚をあぶりたてるのである。』長い大蛇が焦がされて腥いかをりがやつてくる。わうわう吼えたてる聲は猛虎につきまとうてゐる。そのうちに淵にすんでゐた神物(龍)ははや高く飛び去つてしまひあとにはやけた石と土とが見られるだけである。人民等よ、汝等は龍が雨をふらさぬからとてなんで龍をわるくいひ怨まうとするのか、龍を燒きたてることは龍を惑はし之をあなどるに近いものではないか。汝等が龍は眞にいかなるものであるかといふことをよく心得ぬといふことは長官たるものの憂ふべきことに關はつてをるとおもふ。(長官はふだんからかかる蒙昧を敎へ啓いておくべきだ)。』だんだん山焚きが盛んになつて遠方までうつつていつたらだれがそれをたたきけすか。あるひは自分らの住居の土塀にまで來はせぬかときづかはれる。自分はこんなことをおもうて汗をながしながら江邊の亭に臥して、夜ふけに絲すぢの様な息をしてせいせいあへぎつつある。』

熱三首

熱　三首

(一)雷霆空(二)霹靂。雲雨竟虛無。
雷霆空しく霹靂、雲雨竟に虛無なり。

(三)炎赫衣流汗。(四)低垂(五)氣不蘇。
炎赫衣汗を流す、低垂氣蘇せず。

乞爲(六)寒水玉。願作(七)冷秋菰。
乞ふ寒水玉と爲らむ、願はくは冷秋菰と作らむ。

(八)何似兒童歲。風涼出(九)舞雩。
何似兒童の歲、風涼舞雩に出でしに。

【字解】〔一〕雷霆　霆はいなづま。〔二〕霹靂　ヒリヒリといふおと。〔三〕炎赫　炎熱と日の赤色と。〔四〕低垂　頭のぐたりとたれること。〔五〕氣不蘇　氣は呼吸する氣、蘇はよみがへる。〔六〕寒水玉　水玉は水晶。〔七〕冷秋菰　菰はまこも。一說に寒水玉を寒水の玉(寒水にしづめた玉)、冷秋菰を冷秋の菰と解くも今取らず。〔八〕何似　いかん、比較の辭なり。〔九〕出舞雩　舞雩は前の「雷」詩に見ゆ。ここは舞雩の場所に出かけしことをいふ。一說に魏志の賈逵が兒童たりしとき舞雩のまねをせしことを引きみづから舞ふごとく解くも今取らず。「論語」に風乎舞雩とあるごとくただその場所へゆくことなり。

【題義】炎熱のくるしきことをよめり。大曆元年夔州にての作。

【詩意】雷やいなづまがむだにぴりぴりなりひびくが結局雲も雨もでてこぬ。炎熱で日はあかあかとてりかがやいて衣に汗がながれる、あたまはぐたりと垂れて呼吸する氣も活氣がない。どうかつめたい水晶になりたい、どうかひややかな「秋のまこも」になりたい。こどものをりすず風をおうて雨乞ひの舞のところへ出かけていつたときと今はどうだ。(あのころのすずしさがうらやましい。)

〔二〕

〔二〕

(一)瘴雲終不滅。(二)瀘水復西(三)來。
瘴雲終に滅せず、瀘水復た西より來る。

閉戶人高臥。歸林鳥(四)却回。
閉戶人高臥す、歸林鳥却回す。

峽中都是火。江上只空雷。
峽中都べて是れ火、江上只だ空雷。

想見陰宮（五）雪。風門（六）颯（颯）（七）沓開。　想見る陰宮の雪、風門颯（颯）沓として開くを。

【字解】【一】瘴雲　惡氣をおびた雲。【二】瀘水　今の四川敍州府の馬湖江なり、この部分は金沙江と一なるも、上流は若水なり、「水經注」に若水東北至朱提縣西爲瀘江水」といふもの是れなり、朱提は今の敍州府の宜賓縣なり。【三】西來　西南の上流より來る、夔州と瀘水は甚だしく遠隔なれどもあつきことをいはんとてかくいへり。【四】迴　たちもどる、巢へ歸りてゐるもあつきゆゑに飛びてかへるなり　【五】陰宮　宮殿の北面をいふ、宮殿には暑月北面に雪を積みて涼しさを取る。【六】風門　風をうけいれる戸口。【七】颯沓　颯は颯の誤なるべし、諸本みな颯沓に作る、颯沓は風聲をいふなるべし。

【題義】この第二首また涼しさを想ふことをのぶ。

【詩意】惡氣をおびた雲はあくまでなくならぬ、おまけにあつい瀘水までが西の方からながれてくる。人は戸を閉ぢてたかまくらでねてゐる、鳥は一旦林にかへつてまたあともどりしてゆく。峽のなかはすべてが火だ。江のうへではただからがみなりが鳴るばかり。このとき宮殿の北むきの雪山のあたりではさぞつめたい風をばさばさと吹き入らせる門戸が開かれてゐるであらうと想像してみる。

〔三〕

朱（一）李沈不冷。彫（二）胡炊（三）屢新。　朱李沈むれども冷かならず、彫胡炊ぐ屢新なり。
將衰骨盡病。被暍味（四）空頻。　將に衰へむとして骨盡く病む、暍を被りて味空しく頻「なり。
歘（五）翕炎蒸景。飄颻征戍人。　歘翕たり炎蒸の景、飄颻たり征戍の人。

十年（六）可解（七）甲。爲爾（八）一霑巾。　十年甲を解く可し、爾が爲に一に巾を霑す。

【字解】【一】朱李沈　魏の文帝の與呉質書に、「浮甘瓜於淸泉、沈朱李於寒水」とあり、朱李はあかきすもも。【二】彫胡　まこもにみのる米。【三】炊屢新　一回ごとにあたらしくごはんをたく。【四】味　ものをあぢはうてみることをいふ。【五】歘翕　字義詳ならず。杜詩に歘吸あり、秋風歘吸吹南國」是れなり、歘吸は疾貌なり、歘翕と歘吸と同音なれば炎氣の吹きつけるさまをいへるか。更に考ふるに下に炎蒸景とあれば光りの形容語ならば更に適切なり、歘吸は翕忽と同義、翕忽と近き音の語に歘艶あり、歘艶は赤色盛なる貌なり、歘翕が歘艶の意に用ひらるれば最も適切なるべし。ただあまり臆測にわたる故に疾貌としてときおく。【六】十年　天寶十四載より本年まで十年。【七】解甲　よろひをほどきぬぐ。【八】爾　征戍人をさす。

【題義】熱氣より征戍の人に思ひを馳せたり。

【詩意】朱い李を水に沈めてもつめたくはならぬ。ごはんはくさらぬためたびたびあたらしくたく。自分は衰へかかつて骨までがすつかりやむ。暑氣あたりで物の味がなくやたらにたべてみてはさしおく。むしあついさまが風の吹く樣にふきつけてくる。（或は「あかあかとむしあつい光景がしてゐる」。）このとき征戍にでてをる人たちはまださまようてゐる。もはや兵亂も十年もつづくことだからよろひを解きすててもよかりさうなものだのに、（さうではないとは、）おまへたちのことをかんがへると自分は泣かれてもつぱらはんけちをうるほすのである。

夔州歌十絶句　夔州の歌　十絶句

〔一〕

中巴之東巴東山。　中巴の東巴東の山、
江水開闢流其間。　江水開闢よりして其の間に流る。
白帝高爲三峽鎭。　白帝は高く三峽の鎭と爲る、
瞿唐險過百牢關。　瞿唐の險は過ぐ百牢關。

【字解】【一】中巴・巴東　後漢の劉璋、巴(四川省東部)を三分す、中巴・西巴・東巴これなり、夔州は巴東郡に屬す。中巴の東に位す。【二】開闢　天地のひらけはじめをいふ。楊炯が詩に、自古天地闢、流爲峽中水、とみゆ。【三】白帝　白帝城をいふ。【四】三峽　瞿唐峽、巫峽、歸州の西陵峽。【五】鎭　しづめの山。【六】百牢關　陝西省漢中府褒城縣の西にあり、孔明の建つる所、兩壁、山相對して六十里斷えず、漢江の水其間に流るると。

【題義】夔州の風土についてのべたり。內容は各篇を見て知るべし、以下一一には說かず。大曆元年夏の作か。

【詩意】中巴より東に橫はつてゐる巴東の山。その間には天地開闢以來江水がながれてゐる。さうして瞿唐峽の險阻なことは百牢關よりもまさり、白帝城は三峽の鎭めの山となつてをる。

〔二〕

白帝夔州各異城。　白帝夔州各城を異にす、
蜀江楚峽混殊名。　蜀江楚峽殊名を混ず。
英雄割據非天意。　英雄割據は天意に非ず、
霸王幷吞在物情。　霸王の幷吞するは物情に在り。

【字解】【一】異城　白帝城は東にあり、夔州城はその西にあり、故に城を異にすといふ。【二】蜀江楚峽混殊名　舊注に瞿唐峽一名西陵峽といふ、而して歸州にも西陵峽あり、これ殊名を混ずるなりと、是れ其意を得ざるの解といふべし、何となれば西陵と西陵とが混ずるとならば同名が混ずるものにて殊名に非ず、また瞿唐と西陵と混ずるといふならば殊名を混ずとはいひうるも同一の楚峽なれば蜀江楚峽混殊名とはいひがたし。又第一句の「各異城」とは「白帝と夔州とが城を異にする」ことなれば第二句にては「蜀江と楚峽とが殊名を混ず」といふことになるべきなり。余案ずるに作者の意にては江と峽とは字こそ別の字を用ひしも其實は互に江でも峽でも問題ではなきなり、問題は蜀と楚との殊異に存するなり、卽ち同一の江峽に對して或は之を蜀江と稱し或は之を楚峽と稱するは殊なれる名を混用してをる、できるならば蜀なり楚なりまた他の名なり、なにか一つの名でありたしとの趣旨ならん。蓋し作者は名の分れるは英雄割據のためなりとの前提よりしてかくいへるなり。【三】英雄割據　公孫述・劉焉が類をさす。【四】霸王幷吞　霸王とは漢の高祖のごときものをさす、幷吞とは蜀より起りて北方中原の地をあはせたるをいふ。【五】物情　時の事情をいふ、時の事情とは德ありて民心を得れば成功し、然らざれば失敗に了るをいふ、時の蜀地に獨立を企つる武臣に對してあてこすりていへり。

【詩意】ここの城は白帝城だの夔州城だのと別別に城がわかれてゐる。また江峽の名も蜀江だの楚峽だのというて同じ江峽に對しちがつた名を混用してゐる。(にがにがしいことだ。)英雄が險地に割據することは天のおぼしめしではない。霸王から起つて天下を幷合するものがあるがそれはその時時の事情によるものだ。(德があるものにしてはじめて幷吞を爲し得てゐるのである、然らざるものはだめだ。)

〔三〕

羣[一]雄競起問前朝。王[二]者無外見今[三]朝。比訏漁陽結[四]怨恨。元聽舜[五]日舊簫[六]韶。

〔三〕

羣雄競ひ起つて前朝を問ふ、
王者無外今朝に見る。
比訏る漁陽の怨恨を結ぶを、
元聽く舜日の舊簫韶。

【字解】【一】羣雄競起問前朝　即ち「行次昭陵」詩（卷五の四九二頁）の羣雄問獨夫の意。羣雄は多くの英雄、李密・竇建德の徒。前朝は隋をさす。問は罪をとふなり。【二】王者無外　「公羊傳」の語、天下に王たるものには内外の別なし、無外とは天下を一統するをいふ。【三】今朝　唐の時代をさす。【四】漁陽結怨恨　安祿山が謀叛したるをいふ。【五】舜日　舜は聖帝、玄宗をいふ。【六】簫韶　舜の用ひし音樂の名、以て玄宗朝の太平和樂の音に比す。

【詩意】隋末天下亂れて多くの英雄がきそひ起つて問罪の師をおこした、がわが唐の今になつてはじめて王者無外といふ一統のありさまが見られる様になつたのだ。しかるにこのごろふしぎにたへぬことは安祿山が漁陽からおこつて朝廷と怨恨をむすんだことだ。元來聖天子の治世のときにあたつて舊來の簫韶のごとき洋洋たる音樂をきいてをつたのにさりとはわからぬことである。

〔四〕

赤[一]甲白[二]鹽俱刺[三]天。閭[四]閻繚[五]繞接[六]山巓。楓林橘[七]樹丹[八]青合。複[九]道重樓錦[一〇]繡懸[一一]。

〔四〕

赤甲白鹽俱に天を刺す、
閭閻繚繞山巓に接す。
楓林橘樹丹青合し、
複道重樓錦繡懸る。

【字解】【一】赤甲　夔州府奉節縣東十五里にある山の名。【二】白鹽　山の名、奉節縣東十七里にあり、已に見ゆ。【三】刺天　するどくそびゆるをいふ。【四】閭閻　閭は里の門、閻は里中の門、ここは門ばかりをいふにあらずそのむらざとをすべていふ。【五】繚繞　めぐる貌。【六】接　つづく。【七】橘　だいだい、みかん。【八】丹青合　丹青とは楓葉橘實の色をいふ、合とはいつしよに存在するをいふ。【九】複道　高低二重のみち。【一〇】錦繡　樓閣にぬりたる色のうつくしさをいふ。【一一】懸　かかる、ぶらさがる、高處にみゆるをいふ。

【詩意】赤甲山も白鹽山もともにそびえて天をつきさしてゐる。村里の家家がうねうねと山のいただきまでつづいてゐる。それをながめると楓の林、橘の樹がまじつて丹青の色がいつしよになり、複道や重樓は錦繡がつるしてあるかの様にうつくしくみえる。

〔五〕

瀼[一]東瀼西一萬家。江[二]北江南春冬花。背[三]飛鶴子遺[四]瓊蘂。相[五]趁鳧雛入蔣[六]牙。

〔五〕

瀼東瀼西一萬家、
江北江南春冬花あり。
背飛する鶴子は瓊蘂を遺し、
相趁ふの鳧雛は蔣牙に入る。

【字解】【一】瀼東瀼西　夔州の人は山澗の江に通ずるものを瀼といふ。奉節縣の東に大瀼水あり、北より南に流れて殆ど直角にそそぐ。瀼東瀼西とはこの水の東西をいふ。大瀼水の發源地は達州の萬頃池なり。

【三】江北江南　長江は大瀼水とはちがひ西より東へ流れる、由つて北岸、南岸をいへり。【四】背飛　相そむきてとぶ。【五】遺瓊蘂　瓊蘂は或は玉英なりといひ或は白花なりといふ、恐らくはそのいづれにもあらず白米をたとへていへるならん、遺は「のこす」。【六】相趁　趁はあとからくつついてゆくこと。【七】蒲芽　まこものつのぐみ、蘆芽の類なり。

【詩意】瀼水の東と西とにまたがつて一萬戶ほどの人家があり、長江の南北にわたつて春も冬も花がたえたことがない。いまふとみるとたべあきたものか鶴の子らは白米をのこしてせなかちがひに飛んでゆくし、鳧のひなどもはあとから前なるものをおうてまこもの芽ぐんだなかへはいつてゆく。

〔六〕

東屯稻畦一百頃。北有澗水通青苗。晴浴狎鷗分處處。雨隨神女下朝朝。

〔六〕

東屯の稻畦一百頃、北に澗水の青苗に通ずる有り。晴れて浴する狎鷗は分るること處處なり　雨を隨へたる神女は下ること朝朝なり。

【字解】【一】東屯　白帝城の東に東瀼水あり、奉節縣東十里にあり、水源は長松嶺より出で流れて白帝山を經て大江に入る。公孫述、東瀼水のほとりに稻田を墾す、其地を東屯といふ。【二】稻畦　いねのうね。【三】一百頃　頃は百畝の面積。【四】青苗　舊注に陂の名とすれども陂名に非ず、上の稻畦の苗をいふのみ。【五】晴浴　晴れに乘じて東瀼水に浴するなるべし。【六】狎鷗　人になれたかもめ。【七】雨隨神女　宋玉が高唐賦に巫山の神女が曰く、妾巫山之女也、且爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下と。神女來れば雨之に隨ふ。【八】下朝朝　下は雨がくだるごとくにもみゆれど、上句狎鷗を主とするよりいへば其の對句として此句も神女を主とすべし、朝朝の二字は則ち賦中の語を用ふ。

【詩意】東屯には稻のうねが百頃ばかりもある。その北には澗水があつて苗のあるところに通うてゐる。ここには人なれたかもめは晴れに乘じて處處にわかれて浴してゐるし、雨を隨へた神女は朝ごとに天からおりてくる。

〔七〕

蜀麻吳鹽自古通。萬斛之舟行若風。長年三老長歌裏。白晝攤錢高浪中。

〔七〕

蜀麻吳鹽　古より通ず、萬斛の舟行くこと風の若し。長年三老長歌の裏、白晝錢を攤す高浪の中。

【字解】【一】攤錢　攤は手にて敷くこと、ただしそろりとおくに非ずほうりだすなり、これは賭博の戲なり、錢を投げだしてその表裏を言ひあつるなり、吾邦の「なめかた」なり。これは賈客が爲すなり。【二】高浪中　これも浪のなかへ錢をなげるをいふに非ず、船が高浪中にあるをいふ、船は高浪中にあり、賈客は船上にて錢を攤するなり。

【詩意】蜀（成都）からの麻、吳（江蘇）からの鹽、これはむかしから交通してをり、二者を通ずる萬斛船は風の樣にはやくゆく。さてこの船をやる長年・三老は鼻歌をうたうてゐるかたはら、お客の商人どもは高浪のたつなかで船のうへでまひるなか「なめかた」のばくちをしてあそんでゐる。

〔八〕

憶昔咸陽都市合〔虎案、疑當作舍。〕
山水之圖張賣時。
巫峽曾經寶屏見。
楚宮猶對碧峰疑。

〔八〕

憶ふ昔咸陽都市の合〔舍〕、山水の圖張賣の時。巫峽は曾て經たり寶屏に見しことを、楚宮は猶ほ碧峰に對して疑ふ。

【字解】【一】咸陽　渭水をへだてて長安の北にあり、作者「今夕行」に咸陽客舎無一事（卷一の五一頁）の句あり。【二】都市合　諸本かくのごとし、而して合にては解する能はず、合は舎の誤ならん。舎は古物をひさぐいへをいふ。【三】張賣　張りだして賣るなり。【四】寶屏　りつぱな屏風。【五】楚宮　楚王の宮、「寰宇記」によれば、楚宮は巫山縣西二百歩陽臺古城の内にありと。【六】碧峰　巫山の峯をいふ。

【詩意】むかし咸陽の都市のふる道具屋のみせで山水の圖を張つて賣つてゐたのを見たことをおもひだす。眼前に在る巫峽はあのときりつぱな屏風のうへで見たことのある姿のままだ。けれども巫山の碧峰の實物に對しながら楚王の宮といふものはどこにあるのやらいまなほ疑はしくてはつきりわからぬ。

〔九〕

武侯祠堂不可忘。
中有松柏參天長。
干戈滿地客愁破。
雲日如火炎天涼。

〔九〕

武侯の祠堂忘る可からず、中に松柏の天に參して長き有り。干戈滿地客愁破れ、雲日火の如き炎天にも涼し。

【字解】【一】武侯祠堂　前の「武侯廟」の廟と同一なるもの、唐の時白帝城の西郊に在りしなり。【二】參天　參はまじはる、わりこんでゆくこと。【三】干戈滿地　どこもいくさだらけ。【四】客愁破　破れるとは散するをいふ。

【詩意】諸葛武侯の祠堂こそは忘れかねる、廟庭には天に參はらんばかりにのびた松柏がしげつてゐる。そこへくると世界はいくさだらけでも自分の旅愁は散じてしまひ、雲日、火の如きやけこげの炎天にも涼しく感ぜられるのである、ここは忘れられぬ。

〔十〕

閬風玄圃與蓬壺。
中有高唐天下無。
借問夔州壓何處。
峽門江腹擁城隅。

〔十〕

閬風と玄圃と蓬壺と、中に高唐有り天下に無し。借問す夔州壓するは何處ぞ、峽門江腹城隅を擁す。

【字解】【一】閬風・玄圃　崑崙の仙境なり、西方に在り。【二】蓬壺　東海にある五山のうちの蓬萊と方壺。方壺は卽ち方丈なり。【三】高唐　楚の襄王が望みしといふ高唐觀、巫山縣西北、來鶴峰上にありと。【四】夔州　夔州に於てなり。【五】壓　他處を壓倒するをいふ。【六】峽門江腹擁城隅　これ上句の「何處」を說明する句なり。峽門にあたり、江腹にあたり、かつ城隅をかかへたところ。案ずるに此句は作者の寓居の在る地勢をいへるならん。書解に此詩を高唐觀を記すといひ、夔州をほこるといふは、恐らくは皆切ならず。

【詩意】人のよくいふ仙境に西では閬風玄圃があり、東には蓬萊方壺があるといふが、その中間に吾が夔州の高唐觀がある、これは天下に無き所のものである。さてこの形勝をひかへた夔州に於てまた他處を壓倒してゐる場所はどこであるか。(それは吾が寓居の地であつて、)卽ち峽門江腹にあたつてか つ城隅をだきかかへてゐるところである。

毒熱寄簡崔評事十六弟

毒熱、崔評事十六弟に寄簡す

大火運金氣。荊揚不知秋。　大火金氣を運らす、荊揚秋を知らず。
林下有塌翼。水中無行舟。　林下塌翼有り、水中行舟無し。
千室但掃地。閉關人事休。　千室但地を掃ふ、關を閉ぢて人事休す。
老夫轉不樂。旅次兼百憂。　老夫轉た樂まず、旅次百憂を兼ぬ。
蝮蛇暮偃蹇。空床難暗投。　蝮蛇暮に偃蹇たり、空床暗に投じ難し。
炎宵惡明燭。況乃懷舊丘。　炎宵明燭を惡む、況んや乃ち舊丘を懷ふをや。
開襟仰內弟。執熱露白頭。　開襟內弟を仰ぐ、執熱白頭を露はす。
東帶負芒刺。接居成阻修。　東帶芒刺を負ふ、接居阻修を成す。
何當清霜飛。會子臨江樓。　何か當に清霜飛びて、子に臨江の樓に會すべき。
載聞大易義。諷詠詩家流。　載ち大易の義を聞き、諷詠せむ詩家の流。
蘊藉異時輩。檢身非苟求。　蘊藉時輩に異なり、檢身苟くも求むるに非ず。
皇皇使臣體。信是德業優。　皇皇たり使臣の體、信に是れ德業優なり。
楚材擇杞梓。漢苑歸驊騮。　楚材杞梓擇ばれ、漢苑驊騮歸る。
短章達我心。理爲識者籌。　短章我が心を達す、理識者の籌と爲らむ。

【字解】【一】毒熱　たまらぬあつさ。【二】崔評事十六弟　前に贈崔十三評事公輔詩あり。これ排行十六にして詩中に內弟の語あれば作者の母方のいとこにて公輔より年少なるものなり。【三】大火　大火心星、七月位地くだる星なり。【四】金氣　秋の氣をいふ、五行の思想にて秋は金が支配す、「月令」に孟秋之月盛德在金とみゆ。【五】荊揚　荊州卽ち大略湖北省の地と、揚州卽ち大略江蘇省の地とをいふ、しかしここはひろく楚地をこめていへり。浦氏は南方の義としてみるべしといへり。【六】塌翼　くづれたつばさ、つばさ垂れて飛べぬ鳥をいふ。【七】千室　千家。【八】掃地　仇氏は地面に臥して涼を求めんがために之を掃ふといへり。【九】閉關　くわんぬきをとざす。【一〇】人事休　仕事をやすむ。以上暑地の熱をいふ。【一一】老夫　自己をいふ。【一二】旅次　たびのやどり。【一三】蝮蛇　まむし、へび。【一四】舊丘　故鄕のをか、洛陽長安のそれをさす。以上暑熱の際の自己をいふ。【一五】開襟　自己の胸のむすぼれを開く、又宋玉の風賦の有風颯然而至、王乃披襟當之の披襟の意、むれをくつろげ涼風をいれんとするなり。崔を涼風に比す。【一六】仰內弟　仰とは仰ぎ望む、內弟とは母方のいとこの年少者、崔十六をさす。【一七】執熱　あつきものを手にもつこと、「詩經」に出づ。ここはそれほどあつきをいふなり。【一八】東帶　衣冠をつけ帶をしめること、他人を訪問す

ゐため腰服なきるをいふ。【一九】負芒刺　背なかにとげをせおうてなる様だ。苦しきをいふ。語は「漢書」霍光傳にいづ。【二〇】接居　住居がつながつてゐる。【二一】阻修　へだたり且つながし、道路の遙隔なるをいふ。【二二】何當　何は何時。【二三】清霜飛　秋になること。【二四】會子　おまへにであふ、子は崔十六をさす。【二五】臨江樓　江邊の樓。自他いづれの樓か不明なれども、蓋し崔十六の寓居せる江邊の樓をさすならん。文字は謝靈運が詩句を借る、靈運が臨海嶠に登りて初めて疆中を發し從弟惠連に與へたる詩に、日落當棲薄、繫纜臨江樓、とあり。【二六】大易義　「易」經の道理、大とは尊びていふ。【二七】詩家流　古今の詩人の作物をいふ。以上崔を念ふをいふ。【二八】磊落　圭角のとれた人がら。【二九】時輩　同時の人人。【三〇】檢身　わが身を禮法の内にとりしまること。【三一】苟求　かりにも何ものかを求むる。【三二】皇皇使臣體　「詩」小雅に皇皇者華篇あり、君、使臣をつかはすときうたふ詩なり、皇皇は煌煌にてひかりかがやく貌、忠臣、君の命を奉じて使ひするときは地の遠近高下をとはず、みな其の地をてらしかがやかしむ。使臣體とは崔が使臣たるすがたをそなへたるをいふ。【三三】德業優　德も事業もすぐれたり。【三四】楚材　楚國に產する木材、「左傳」に楚材晉用の語あり、楚の人物を晉が用ふるをいふ。木材を以て人物をたとへいふ。【三五】杞梓　かはやなぎ、あづさ、これ亦「左傳」に出づ、二木は器物を作る材なり、ここは崔を比す。【三六】漢苑　長安の御苑をいふ。【三七】驊騮　千里の馬、崔を比す。【三八】短章　みじかき詩篇、本官をさす。【三九】理爲識者籌　理は本官にのぶる情理をいふ、識者は崔をさす、爲籌は爲所籌をいふ、工夫してくれるをいふ、けだし、それとなく崔に向つて朝廷へのとりなしを請ふなり。以上は贈詩の意をいふ。

【題義】ひどいあつさのとき、年したのいとこで評事の官たる崔十六にてがみとしてやつた詩。大暦元年初秋、夔州にての作。

【詩意】大火心星がくだりかけ秋の金氣がうごきだしたが、荊揚のごとき南方ではあつくて秋といふことを知らぬ。林のしたにはつばさをたらして飛べぬ鳥があり、水のなかにはかよふ舟もない。千の家もただ地面をはききよめて臥し、關木をとおて仕事をやすんでをる。」老夫はいよいよおもしろくなく、また旅の身とてさまざまの心配をもつてをる。すなはち日ぐれにはまむしや蛇がによろによろしてゐるからあけてある床にはくらがりにとびこむわけにゆかぬ。あついばんはあかるいともしびなどはきらふのである。これだけでもいやだのにまして故鄉をおもふ念さへあるのである。」自分は襟を開いて内弟がゐたならばとおもひ、あついものを握つてゐる様なくるしさでしらがあたまをまるだしでゐる。衣冠をつけて他人を訪ふなどはとげをせおふやうなつらさであるのでしせんちかまに居ながら遠隔の地にでもゐるかの樣になつてゐる。いつになつたら霜がふつて子に江べりの樓であふことができるだらうか。さうして大易の道理をきいたり、また古今の詩人の作物をともに諷詠したりすることができるだらうか。」おまへはおつとりとしていまどきの世の人人とはがらがちがつてゐる。自ら禮法で身をしばつてゐるがそれで何かを求めようとするのではない。君命をひかりかがやかす使者の體をおまへはそなへてをる、じつにすぐれた德業をもつてをる。おまへは杞梓のごとき楚材としてえらばれ、驊騮の能力をもちながら都の御苑へかへりゆくのである。よつて自分はこの短い詩をつくつて自己のこころもちをいひやるのだが、その内にふくんでゐる情理についてはおまへの樣な識者が十分おしはかつてくれることとおもうてゐる。」

信行遠修水筒　【原注】引泉筒。

信行遠く水筒を修む　【原注】泉を引く筒なり。

汝性不茹葷。清淨僕夫內。　汝が性葷を茹はず、清淨なり僕夫の內。

秉心識本源。於事少凝滯。　心を秉るに本源を識る、事に於て凝滯少し。

雲端水筒坼。林表山石碎。　雲端水筒坼く、林表山石碎く。

觸熱藉子修。通流與廚會。　觸熱子に藉りて修む、流を通じて廚と會せしむ。

往來四十里。荒險崖谷大。　往來四十里、荒險崖谷大なり。

日曛驚未餐。貌赤愧相對。　日曛して未だ餐せざるに驚く、貌赤く相對するを愧づ。

浮瓜供老病。裂餅嘗所愛。　瓜を浮べて老病に供す、餅を裂きて愛する所に嘗めしむ。

於斯答恭謹。足以殊殿最。　斯に於て恭謹なるに答ふ、以て殿最を殊にするに足れり。

詎要方士符。何假將軍佩。　詎ぞ要せん方士の符、何ぞ假らん將軍の佩。

行諸直如筆。用意崎嶇外。　行や直なること筆の如し、意を用ふ崎嶇の外。

【字解】【一】信行　僕の名。【二】茹葷　茹は食ふ、葷は辛き菜、くさき菜を稱す。【三】秉心　心のもちかた。【四】凝滯

居すわつてゐること、以上信行の人がらをのぶ。【五】坼　口があいたこと。【六】山石碎　水筒のこはれし原因なり。【七】觸熱　あつさにふれながら。【八】子　信行をさす。【九】崖谷大　此句まで修筒の事をのぶ。【一〇】驚未餐　驚は作者がおどろくなり。未餐は信行が食事をせぬことなり。【一一】貌赤　作者がはづる樣子。【一二】浮瓜　信行が瓜を泉水にうかす。【一三】老病　作者のさま。【一四】裂餅　作者がなすなり。【一五】所愛　吾が愛する人、信行をさす、「杜臆」は餅をさすとせり、今取らず。【一六】於斯　かく餅を分與することによりて。【一七】恭謹　信行のさま。【一八】殊殿最　殊は他と區別して特別上級とするをいふ、殿最は官吏の成績につきいふ語にして、上功を最、下功を殿といふ、以上は信行の功勞をいふ。【一九】詎　何ぞ。【二〇】方士符　方士は術をつかふ人。符はまじなひのふだ。「汝南先賢傳」にいふ、葛玄、吳の大帝（孫權）と樓上に坐して土人の雨ごひをなすを見て曰く、雨得易きのみと、卽ち符を書して廟社の中に著く、須臾にして大雨淹注し、平地に水尺餘なりき、と。【二一】將軍佩　漢の貳師將軍李廣利、佩刀を拔きて山を刺して泉飛出せりとの話「東觀漢紀」にみゆ。【二二】行諸　行は信行、諸は之乎なれどもただ「乎」字として用ふ、行諸は行乎なり。【二三】崎嶇　山路のでこぼこのさま、ここは人の心術に曲折あるさまをいへり。以上、水を得るは信行の實直なるによるを贊す。

【題義】信行といふ僕が山ふかくはいつて水を引く竹筒を修繕したことをよめる詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】おまへの性質はくさい野菜をたべず、しもべの內では淸淨なものである。心のもちかたはその根本の何であるかをしりわけてゐて、諸事につけて敏活にとりはこびゐすわりといふことがない。このたび林のうへで山の石がくだけて、雲まにある水筒がこはれて口をあけた。それであつさのなかをおまへの手をかりて修繕して流れを通して臺所のところまでもつてこようとしたのだ。この往來に

は四十里のみちのりがあり、大きな崖谷がやぶやぶとしてまたけはしい。』たそがれにもどつてきてまだご飯もたべずにゐるとは驚きいる、じぶんはかほつきが赤くなつてむかひあふさへはづかしい。それぱかりかさらに瓜をつめたい水に浮かして老病のじぶんにそなへてくれる。じぶんは之に對して餅を裂いて吾が愛する所の彼にたべさせてやる。それでやつと恭謹なる彼に報答する。彼の功績はじつに他のものと上下の區別をつけるに十分なるものである。』彼のはたらき有れば、方士の符のいりようも無いし、將軍の佩刀をかりて山をつきさすまでもなく水がでてくる。吾が信行は正直なること筆のごとくであつて、世のひねくれた道以外にそのこころをはたらかせてゐる男なのである。』

催宗(一)文樹雞(二)柵　宗文を催して雞柵を樹てしむ

吾衰怯行(三)邁。旅次(四)展(五)崩迫。　吾衰へて行邁を怯る、旅次崩迫を展ぶ。
愈(六)風傳(七)烏(八)雞。秋卵方漫(九)喫。　愈風烏雞を傳ふ、秋卵方に漫喫す。
自春生(一〇)成者。隨母向(一一)(一二)百翮。　春より生成せる者、母に隨ふ百翮に向んとす。
驅(一三)趁制不禁。喧呼山(一四)腰宅。」　驅趁制すれども禁せず、喧呼す山腰の宅。」
踏藉盤案翻。「課(一五)奴殺(一六)青竹。」　奴に課して青竹を殺さしむ。

終日憎赤(一七)幘。　終日赤幘の、
課奴殺青竹。「踏(一八)藉盤(一九)案翻。」　踏藉して盤案を翻へすを憎む。
塞(二〇)蹊使之隔。　蹊を塞ぎて之をして隔てしむ。
墻東有隙(二一)地。可以樹高柵。　墻東に隙地有り、以て高柵を樹つ可し。
織籠曹其內。「避(二二)熱時來歸。」　熱を避けて時に來り歸り、
令入不得擲。「問兒所(二三)爲跡。」』　兒に問ふ爲せし所の跡。』
稀間苦突過。「織(二四)籠曹(二五)其內。」　籠を織りて其內に曹せしめよ、
觜距還汚席。「令(二六)入不得擲(二七)。」　入らしめよ擲つことを得ず。
避熱時來歸。「稀(二八)間可突過(二九)。」　稀間ならば突過す可し、
問兒所爲跡。「觜(三〇)爪還汚(三一)席。」　觜爪還た席を汚さん。
我寛(三二)螻蟻遺。彼(三三)免狐貉(三四)厄。　我は螻蟻の遺を寛にし、彼は狐貉の厄を免れむ。
應宜各(三五)長幼。自此均(三六)勍敵。　應に宜しく長幼を各〻すべし、此より勍敵を均しくせよ。
籠柵念有修。近(三七)身見損(三八)益。　籠柵修むる有らんことを念へ、身に近づけて損益を見よ。

明明領(三九)處分。一一當剖析(四〇)。　明明處分を領せば、一一當に剖析すべし。
(四一)不昧風雨晨。亂離減憂感。　昧からず風雨の晨、亂離憂慼を減ず。
其流則凡鳥。其氣(四二)心匪(四三)石。　其の流は則ち凡鳥なり、其の氣は心石に匪ず。
(四四)倚頼窮(四五)歳晏。撥(四六)煩及冰釋。　倚頼して窮歳晏し、煩を撥ひて冰釋に及ばむ。
(四七)未似尸(四八)鄉翁。拘留(四九)蓋(五〇)阡陌。　未だ似ず尸鄉翁の、拘留して阡陌に蓋ひしに。

【字解】【一】宗文　作者の長子なり。【二】樹雞柵　にはとりなかこひおくませかき。【三】行邁　たびぢをゆく。【四】旅次　たびのやどり。【五】展崩迫　崩迫は迫促の情、いきづまる樣な窮屈なおもひ、展はのぶ、ひろげる。【六】愈風　中風の病をなほす。【七】傳　傳へきく。【八】烏雞　黑き羽のにはとり。【九】漫喫　やたらにたべる。【一〇】生成者　うませてそだてあげたもの。【一一】向　なんなんとする。【一二】百翮　五十羽。【一三】驅趁　かりおふ、あとからおひたてる。【一四】山腹　山の中腹、以上雞を多く仕立てしことをのぶ。【一五】課奴　しもべに仕事をわりつける。【一六】殺靑竹　殺とは火もてあぶり油氣を去り靑みを取るをいふ。【一七】赤幘　あかきかんむり、とさかをいふ。【一八】踏藉　ふんだりしいたり。【一九】盤案　大皿、お膳。【二〇】塞蹊　こみちをふさぐ。「課奴」より「塞蹊」の句まではひといきによむべし。踏藉の句は赤幘の句を承け、塞蹊の句は靑竹の句を承くる文法なり。【二一】隙地　あきち。【二二】避熱　どこぞ山奥のすずしき處へあつさをよけてゐる。【二三】見　宗文をさす、以上柵を設けて雞をかこふべきことを宗文に値すをのぶ。【二四】籠籬　雞をいれるかごを竹をくみてこしらへる。【二五】群居せしむること。【二六】合入　籠中に入らしむる。【二七】彼　其の仕事をなげすつるをいふならん。【二八】稀間　柵の柿杙の間隔のまばらなこと。【二九】突過　とりがとほりぬける。【三〇】觜爪　くちばし、つめ。【三一】汚廓　むしろをけがす。【三二】宜蜂蟻遭　【三三】蜂蟻は「けら」「あり」、遭は遭遇、とりにたべられるといふ運命をいふ、宜はその運命にしばしばであはぬ樣にしてやるをいふ。【三四】彼　雞をさす。【三五】狐貉厄　貉は「むじな」、厄とはたべられるといふ災難をいふ。【三六】各長幼　各處其長幼をいふ。【三七】均勍敵　勍敵は强敵、均とはそのつよさを平均ならしむるをいふ、雞は强弱の差甚だしきものを一處におけば鬪爭す。【三八】近身「易」に近取諸身とみゆ。自己みづからするをいふ。【三九】損益　雞柵の善否をいふ。【四〇】領處分　前述の處置を受けてのみこむこと。●【四〇】剖析　事實にあてて當否を分析してしらべること、以上は宗文をして雞柵の事を監督するにつけての命令なり。【四一】不昧風雨晨「詩」に風雨如晦、雞鳴不已とみゆ。風雨ありてくらき樣にても雞は鳴きてやまず。以て君子亂世にあひても其の常度を失はざるにたとふ。不昧はくらきをおぼえざるをいふ、雞の鳴くを以てなり。【四二】其氣　雞の元氣。【四三】心匪石　石は轉するものなり、匪石とは轉ぜざるをいふ、雞のいかなるときにも晨を司り信あるをいふ。【四四】倚頼　雞にたよる。【四五】窮歳晏　歳晩もやすらか。【四六】撥煩　煩悶をはらひのける、煩悶とは喧呼踏藉等の事をさす。【四七】未似　二字、次句までへかかる。【四八】尸鄉翁　卷一の六二頁「奉寄河南韋尹丈人」詩の尸鄉・祝雞翁の句解をみよ。「列仙傳」にいふ、祝雞翁、尸鄉の北山の下に居り雞を養ふこと百年餘、雞千頭に至る。皆名字あり、取らんと欲すれば名を呼べば種別して至る、と。【四九】拘留　雞を單にひきとめておくこと。【五〇】蓋阡陌　蓋は「おほふ」、千匹の雞ゆゑにおほふといふ、阡陌は田間の南北の路、東西の路、以上は柵の成りし結果を豫想し、且自己の尸鄉翁に如かざるをいふ。

【題義】長男の宗文をうながして雞のませかきをゆはせたことをよめる詩。大暦元年夔州にての作。

【詩意】自分は衰へてたびぢをゆくことに臆病になり、ここでたびのやどりをしてすこし切迫したおもひをくつろげてゐる。きくところでは黑い雞は中風の病をなほすによいとのことなのでいまちやうど秋の卵をむやみとたべてゐる。春からかけて產ませてそだてあげた雛が母雞についてゐるもの五十羽ばかりにならうとしてゐる。これらはおひたててこさせまいと制止してもとめきれず、山の半腹の

自宅にがやがやと鳴きたててゐる。』自分はあさから晩まで赤いとさかをしたやつが皿だのお膳だのをふんだりしいたりしてひつくりかへすことを憎くおもふので、しもべにいひつけて青竹を火でからさせ、みちをふさいで雞のこぬ樣に隔てさせようとする。墻の東にあき地があるからあそこへ高い柵をゆへばよろしいのである。暑さを避けにいつた場所からもどつてきて兒（宗文）にどんなことをしたかを問うてみる。』（自分は彼に申しわたす）「おまへは籠をつくつて雞を組分けにしてそのなかへいれよ、よくいれるやうにしてほうつておいてはいかぬぞよ。また柵の目があらいと雞がとほりぬけることができるからまた觜や爪で席をよごすことになる。だから柵と籠とを嚴重にすればこちらは蟻や螻が雞にくはれる運命をゆるやかにしてやれるし、彼等雞どもも狐や貉の厄難を免れることができる。これからそれぞれ長幼を正し、强弱の力の平均をはかるべきである。籠柵についてはよく修理をすることを考へよ、自己の身にひきつけて仕事の加減をよくみよ。わしのいひつけがはつきりわかつたならばよくそれを事實にあたつて一一當否を分析してみるがよろしい。』（かく雞の處分がついてみると）たとひ風雨の晨でも雞がときをつくるから暗くないとおんなじであり、亂世の際ではあるが自分のしんばいは大に減じる。雞は鳥の社會でいへば凡鳥だが其の心は石の樣には轉らぬしつかりした守りをもつてをる。このもののおかげで自分は歲晚もやすらかにすごし、いままでのうるささはさらりと氷のとける樣にはらひのけられる。惜しいことに自分は籠だの柵だのの力をかりてやつとかくなり得るのであつて、彼の仙人戸鄕翁が畠の路いつぱいにおほひかぶさつた雞を呼び聲一つでひきとめておいたのとは似てもつかぬことである。』

貽（一）華陽柳（二）少府

繋馬喬木間。問人野寺（三）門。
（四）柳侯披衣笑。見我顏色溫。
竝坐石堂（五）下。俛視大江奔。
火雲（六）洗月露。絕壁上朝暾（七）。
自非曉相訪。觸熱生病根。
南方六七月。出入異中原（八）。
老少多暍（九）死。汗踰水漿（一〇）翻。
俊才得之子（一一）。筋力不辭煩（一二）。
（一三）指揮當世事。語及戎馬存。

華陽の柳少府に貽る

馬を繋ぐ喬木の間、人に問ふ野寺の門。
柳侯衣を披いて笑ふ、我を見て顏色溫なり。
竝び坐す石堂の下、俛して視る大江の奔るを。
火雲月露に洗はれ、絕壁に朝暾上る。』
曉に相訪ふに非ざるよりは、熱に觸れて病根生せむ。
南方六七月、出入中原に異なり。
老少多く暍死す、汗は踰ゆ水漿の翻へるに。
俊才之子を得たり、筋力煩を辭せず。』
指揮す當世の事、語は及ぶ戎馬の存するに。

涕淚濺衣裳。悲風排帝閽。
鬱陶抱長策。義仗知者論。
吾衰臥江漢。但媿識璵璠。
文章一小技。於道未爲尊。
起予幸斑白。因是託子孫。』
俱客古信州。結廬依毀垣。
相去四五里。徑微山葉繁。
時危挹佳士。況免軍旅喧。
醉從趙女舞。歌鼓秦人盆。
子壯顧我傷。我驩兼淚痕。
餘生如過鳥。故里今空邨。』

涕淚衣裳に濺ぐ、悲風に帝閽を排せむとす。
鬱陶長策を抱く、義は知者に仗りて論す。
吾衰へて江漢に臥す、但だ媿づ璵璠を識らるるを。
文章は一小技、道に於て未だ尊しと爲さず。
起予 幸に斑白、是に因りて子孫を託せむとおもふ。』
俱に客たり古信州、廬を結びて毀垣に依る。
相去ること四五里、徑微にして山葉繁し。
時危くして佳士に挹す、況んや軍旅の喧しきを免るるをや。
醉うては從ふ趙女の舞、歌ひては鼓す秦人の盆。
子壯にして我を顧みて傷む、我驩びて淚痕を兼ぬ。
餘生過鳥の如し、故里今空邨なり。』

【字解】【一】華陽 縣の名、成都府に屬す。【二】柳少府 柳は姓、名は詳ならず、少府は縣の尉をさす敬稱。【三】野寺 蓋し柳の寓所なり。蓋し夔州に來り寓せるなり。【四】柳侯 侯は君のごとし。【五】石堂 石造の堂なるべし。【六】洗月歸 月光をおびた時歸にあらはれる。【七】朝暾 あさひ、以上柳を朝早く訪ふことをのぶ。【八】中原 北方黄河の流域、河南省方面をさす。【九】暍 日射病、暑氣あたりの病。【一〇】滯 流滯をいふ。【一一】之子 柳をさす。【一二】煩 煩勞をいふ、以上は訪問せしわけをいふ。【一三】指揮 さしづする、處置の方をとくをいふ。【一四】悲風排帝閽 悲風はかなしむべき風色にあたりての意。帝閽は天子の宮門。【一五】鬱陶 おもひふさがる貌。【一六】長策 良計なり。【一七】義 忠義をいふ。【一八】知者 知己の人、作者自ら比す。【一九】江漢 夔州の地をさしていふ。【二〇】識璵璠 識は柳が知るをいふ、璵璠はともに美玉なり、作者の文章の美をたとへていふ。「孔子家語」に美哉璵璠、遠而望之、奐若也とみゆ。【二一】小技 ちひさなわざ。【二二】道 聖人の大道。【二三】起予幸斑白 斑白幸起予の意なり、斑白は老いて頭髮のごましほなること、起予とは彼の言ふ所が我をして啓發せしむるものあるをいふ。「論語」に起予者商也とみゆ。【二四】因是 柳が上述の如き人物なるによりて。【二五】託子孫 作者自己の死後に子孫の世話を柳に委託する。以上は柳の識論人物をのぶ。【二六】古信州 夔州をさす、夔州は梁の時の信州なり、隋の時巴東郡となし、唐の武德元年に信州とし、二年に又夔州とす。【二七】依 よりそふ。【二八】毀垣 こはれたかき。【二九】挹佳士 挹は揖なり、手を胸にあて敬禮すること、佳士はよき人物、柳をさす。【三〇】軍旅喧 夔州以外の地方には兵亂ありてやかまし。【三一】趙女 美人をいふ。【三二】歌鼓 鼓は鼓盆をいふ、盆は鉢皿の類、鼓はたたくをいふ、缶を叩き甕を撃ちて歌ふは秦人の習俗なり。【三三】子 おまへ、柳をさす。【三四】驩 歡と同じ。【三五】過鳥 鳥の目前をとほりすぐるは甚だはやし。【三六】故里 ふるさと、河南の鄕をさす。以上は自己の情況をのぶ。

【題義】華陽縣の尉官柳某をたづねてそれにおくつた詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】自分は喬木の間に馬をつないで、あたりの人に野寺の門はどこかとたづねる。(たづねあてて門からはひると)柳君はにこにこと着物をひつかけながらでて來ておだやかな顏つきで自分をみる。それから石造の座敷の下でふたりで竝んですわり、うつむいて大江の水の流れ奔るのをじつとみつめる。そのとき赤燒の雲が月の光をおびたあさつゆに洗はれて、絕壁にはあさ日がのぼりだす。』 この

土地に於てはこんな曉に訪問するでなければ熱氣に侵されて病氣のもとをつくることになるであらう。南方の六七月は人が家から出入するぐあひはどうしても北方中原地方とは違ふ。（氣をつけぬと）老人や年少のものは多く日射病で死ぬ、流るる汗は水かお汁をぶちまけた以上にでるのである。』だが柳君の如き俊才を得たのだから、自分はいくらあつくても筋力を煩はすことをいとはぬのである。』君は話が今尙天下に兵馬のやまぬ事に及ぶと、之に就ていかに處置すべきやを論じ、感激して淚を衣裳にそそぎ、座上爲めに悲風の起るに乘じて直ちに宮門をおしひらいて其の意見を天子に奏聞したいそぶりである。ただせつかく良計をもつてゐてもそれを施すことができず胸をふさぐのみで忠義の節はわづかに知己によつて之を論じてをるのである。自分は老衰してここの江漢の地方に臥してゐるのであるがはづかしくも君は自分の文章を瑛瑤なりとして知つてくれた。文章は道德に比べると一の小さな技藝であつて尊いものではないが、頭のごましほになつた自分にとつては幸にも君の樣な自分を啓發してくれるものがあるので、自分は死後には自分の子孫をも君に委託したいとおもうてゐる。』我我は共にむかしの信州（夔州）に客寓してくづれた垣に依りそうて廬を結んでゐる。おたがひ離れてゐることはただの四五里で、其間のこみちはかすかに、山の樹の葉はしげくかさなつてゐる。自分は危險な時世に君の樣な佳い人物に交はり敬禮することができた、ましてここにゐたために兵亂のやかましさから免れることができたのである。だから醉うては趙女のあとについて舞ひ、歌うては秦人がうちならす樣に盆をたたいてうたふ。君は壯年ながら自分を顧みて同情してかなしんでくれる、自分は君を見て歡ばしくはあるがおのづと淚がながれるのである。自分の生きのこる年月はたぶん鳥が目のさきをとほる樣にはやくすぎ去るだらうし、故里はいまだれも人のすまぬ村になりはててゐるのである。（自分はどうしても君の如き人にたよらねばならぬのである。）』

七月三日。(一)亭午(二)已後校(三)熱退。晩加小涼。穩睡。有詩。因論壯年樂事。戲呈元(四)二十一曹長

七月三日、亭午已後校や熱退く、晩に小涼加はる、穩かに睡る、詩有り、因つて壯年の樂事を論じて、戲れに元二十一曹長に呈す

(五)今茲商(六)用事。餘熱亦已末(七)。　今茲に商事を用ふ、餘熱亦已に末なり。

衰年旅(八)炎方(九)。生意從此活。　衰年炎方に旅す、生意此れより活きむ。

亭午減汗流。比鄰耐人聒(一〇)。　亭午汗流減す、比鄰人の聒しきに耐ゆ。

晩風爽烏匼(一一)(匼匝)筋力蘇摧折(一二)。』　晩風爽かにして烏匼（匼匝）たり、「筋力摧折せる」に蘇す。』

閉目踰十旬。大江不止渴。　閉目十旬に踰ゆ、大江渴を止めず。

(一三)退藏恨(一四)雨師、(一五)健步聞(一六)旱魃。　退藏雨師を恨む、健步旱魃を聞く。
(一七)園蔬抱(一八)金玉、無以供(一九)採擷。　園蔬金玉を抱くも、以て採擷に供する無し。
(二〇)密雲雖聚散、(二一)徂暑終(二二)衰歇。　密雲聚散すと雖も、徂暑終に衰歇す。」
(二三)前聖(二四)眘焚巫、(二五)武王親救暍。　前聖焚巫を眘む、武王親ら暍を救ふ。
陰陽相主(二六)客、時(二七)序遞回(二八)斡。　陰陽相主客たり、時序遞に回斡す。
(二九)灑落惟清秋、(三〇)昏靄一(三一)空闊。　灑落なるは惟だ清秋なり、昏靄一に空闊なり。
蕭蕭紫(三二)塞雁、南向欲(三三)行列。」　蕭蕭たり紫塞の雁、南向行列せむと欲す。」
歘思紅(三四)顏日、霜露凍(三五)堦闥。　歘ち思ふ紅顏の日、霜露堦闥に凍る。
(三六)胡馬挾(三七)雕弓、鳴弦不(三八)虛發。　胡馬雕弓を挾む、鳴弦虛發せず。
(三九)長鈚逐(四〇)狡兔、突(四一)羽當(四二)滿月。　長鈚狡兔を逐ふ、突羽滿月に當つ。
惆悵白(四三)頭吟、蕭條遊(四四)俠窟。」　惆悵す白頭の吟、蕭條たり遊俠の窟。」
臨軒望(四五)山閣、(四六)縹緲安可越。　軒に臨みて山閣を望む、縹緲安んぞ越ゆべけむ。
(四七)高人鍊(四八)丹砂、(四九)未念將朽骨。　高人丹砂を鍊る、未だ念はず朽ちむとする骨。
少壯跡(五〇)頗疏、歡樂曾(五一)倏忽。　少壯跡頗る疏なり、歡樂曾て倏忽たり。
杖藜風塵際、老醜難(五二)剪拂。　藜を杖く風塵の際、老醜剪拂し難し。
(五三)吾子得神仙、本是池(五四)中物。　吾子神仙を得るも、本是れ池中の物なり。
(五五)賤夫美(五六)一睡、煩(五七)促(五八)嬰詞筆。」　賤夫は一睡を美とし、煩促詞筆に嬰る。」

【字解】【一】七月三日　大暦元年の同月日なり、この日立秋にあたるといへり。作者の詩に日を記するは皆節候を指す。【二】亭午　卓午ともいふ、正午をさす、劉良「天台山賦」に注して亭午を「午に至る」と訓じたるもいかがにや。【三】校　較なり、「やや」。【四】元二十一曹長　曹は功曹・倉曹の類ならん、長とは敬稱にして必ずしも實際の長には非ざらん。【五】今茲　いまここに。【六】商用事　商の音調が支配する時七月をいふ、「禮記」月令に、孟秋之月、其音商、律中夷則とみゆ。【七】末　終末に近し。【八】旅炎方　炎熱の地方に旅寓す。【九】生意　生氣のごとし。【一〇】聒　かまびすし。【一一】烏匠　字訛なり、當に匼匝に作るべし。蓋し匼が匠となり、匝の草體が烏となりしものにて匼匝はまた匝匼の轉倒せしものなり。匼匝はとりかこむ貌。【一二】蘇摧折　くだけくじけたるなりによみがへる。以上涼氣の起りしをいふ。【一三】退藏　字は「易」繫辭に本づく、雨師がひきこんでゐること。【一四】雨師　雨をふらす神。【一五】健步　ひでりの神がたつしやにあるく。【一六】旱魃　ひでりの神なり、「神異經」にいふ、南方に人あり、長二三尺、袒身にして目は頂上にあり、走り行くこと風のごとし、名づけて魃と曰ふ、俗に旱魃と曰ふ、見ゆる所の國には大旱あり、赤地千里なり、と。【一七】園蔬　はたけのやさい。【一八】抱金玉　下句へつづく語なり、金玉は黃金珠玉の實物をさす。【一九】採擷　野菜をとりとること。【二〇】密雲雖聚散　夏時の氣象の狀なり。【二一】徂暑　去る所の暑さ。【二二】衰歇　おとろへやむ。以上はさかのぼりて暑熱をいふ。【二三】前聖　前代の聖德ある人、臧文仲の類をさす。【二四】武王救暍　周の武王孟津
【二五】眘焚巫　眘は慎の古字、眘巫の事は「左傳」僖公二十一年にみゆ、本卷「雷」詩の暴尪の句併をみよ。

よりかへりて周に及ばんとして鳴人をみる、王、左より攜して右より之を扇ぐ、と「帝王世紀」にみゆ。【二六】主客　主となり客となるとは消長するをいふ。【二七】時序　四時の順序。【二八】回斡　斡はめぐらすなり。【二九】灑落　さつぱりとした貌。【三〇】昏霾　くらさ、つちふる。【三一】一空闊　一は「全く」、空闊はからりとはれること。【三二】紫塞　長城をいふ、長城の碑は紫色土を用ひしによりて之を紫塞といふ。【三三】行列　行も亦列なり。以上また秋涼をいふ。【三四】紅顏日　少壯の年時をいふ。【三五】階闥　きざはし、內部の小門。【三六】胡馬　北產の馬。【三七】雕弓　雕刻を施した弓。【三八】虛發　むだにはなつ。【三九】長鈚　鈚は鉾と同じ、「方言」に箭鏃廣長にして薄鎌なるを鉾といふとあり、「通俗文」に鏃の鑿葉なるを鈚といふとみゆ、長鈚とは長くて薄きやじりなり。【四〇】狡兔　するいうさぎ。【四一】突羽　奔突せんとする箭羽。【四二】當滿月　弓を十分にひきしぼりたるさま。【四三】白頭吟　白頭を以て詩を吟ずること、現今の老境をいふ。【四四】游俠窟　俠客の世界、過去のさまをいふ。以上は壯年の樂事を追論す。作者の「壯遊」詩に、放蕩齊趙間、裘馬頗淸狂、呼ㇾ鷹皂櫪林、逐ㇾ獸雲雪岡、などいへると同事なり。【四五】山閣　元曹長の居る閣。【四六】縹緲　氣のはるかにたなびくさま。【四七】高人　高尚な人物、元をさす。【四八】鍊丹砂　仙藥をねる。【四九】未念將朽骨　念は元が念ふこと、將朽骨は作者の骨をいふ。(浦氏は自己が過去に於て今日を念はざりしとときたり、今取らず)。【五〇】跡頗疏　疏は疏放、やりつぱなし、無頓着。【五一】曾倏忽　かつてせしものが忽ち消滅す。【五二】翦拂　馬の毛をきり、ほこりをはらふこと、卷十四、「遺悶奉呈嚴公」詩をみよ。【五三】吾子　おまへ、元をさす。【五四】池中物　周瑜が劉備を評せる語、これは蛟龍なれども池中を脫せざる物なるをいふ、ここに先方をけなしつけし處に戲意あるなり。【五五】賤夫　自己をさす。【五六】美一睡　美は甘美なりとするなり。【五七】煩促　わづらはしくこせつく。【五八】嬰詞筆　嬰は「かかる」、つながるをいふ、詞筆は文章をいふ、此亦戲意なり。以上元に斯篇を呈するをいふ。

【題義】七月三日の正午すぎに炎熱がすこしひき、夕方にはいくぶんの涼しささへ加はつておだやかに睡ることができたので詩ができた。それでついでに自分の壯年時代のおもしろかりしことどもを論じて戲れに元曹長へやつた詩。大曆元年七月夔州にての作。

【詩意】今は商調の音が支配する秋の季節となつてほとぼりのあつさももはや末になつた。自分は老衰の年であつい地方に旅をしてゐるがこれからやつと活氣づくことであらう。正午になつても汗の流れかたはいままでよりへつたし、あたり近所で人がやかましくしてもそれにたへられる樣になつた。夕方の風もさわやかにまはりを吹くし、筋力もくじけかかつた所でよみがへることができる樣になつた。』大江の水は流れてゐてものどの渴きをとめてはくれず、自分はあつさをがまんして百日以上もじつと目を閉ぢてゐた。なんで雨の神はひつこんで出てはこぬかと恨み、旱魃の怪物がやたらにあいてゐるとだけきいてゐた。いくら黃金珠玉を抱きかかへてゐてもそれを供へて野菜を採つてもらふことはできなかつた。それだのにまだなるほど密集した雲がかたまつたりちらばつたりはしてゐるものの、すぎ去る暑さはなんというてももはや衰へてしまふのだ。』むかしの聖人はひでりがあるからとてやたらに巫を焚いたりはしなかつた。周の武王のごときは自分みづから日射病患者をいたはり救うたほどである。(これは氣候の事をむやみに人間に責任を負はさぬのである。)天地間に於て陰陽の二氣は互に主となり客となるもので一方ばかりがはびこるものではなく、四時の順序は互ひにめぐりめぐらされてゐるものである。そのなかでさつぱりとした時候といへばただ淸らかな秋であり、秋にはくらつぽく土ふる樣なことは全く無くなつてしまふ。さうして長城の紫色の城壁の方からさびし

くとんでくる雁は南に向うて行列して來ようとするのである。』それにつけふと思ひだすのは自分がまだ少壯紅顏のころの事だ。あの頃は露霜がおいて庭の小門や堦が凍りかけると、胡馬にのつて雕弓を小わきにかかへ弦おとさへさせればきつと獲物を仕止めた、それから滿月にもたぐへて弓をひきしぼつて羽箭をほとばしらせ、長い薄葉の鏃でするい兎を逐ひまはつた。それがどうだらう、いまやうらめしくも白髮あたまをして詩をうなつてゐる樣になり、むかし飛びまはつた俠客の世界はさびしくもゆかりの無いものになつてしまつた。』自分はいまのきばにさしかかつてあなたの居る山閣の方をながめるが、彼我の間には空氣が縹緲とたなびいてゐてどうしてそれをこえてゆくことができよう。あなたは仙術をまなんで丹砂を錬つてゐるがこのわたくしの朽ちようとしてゐる骨のことは念うてくださらぬ。自分はわかいときはやりつばなしな行迹をしてきたが、かつて耽つた歡樂はいまは忽然ときえうせた。いまは兵馬の塵のあひだにあかざの杖をついてをり、面貌は老醜なものとかはりはて、往年の名馬もとても手をかけて毛なみをうつくしくしてやることはむつかしい。だがあなたも仙術を得てゐるとはいへこんな處にゐるのでは池中の蛟龍にすぎぬものだ。自分も居睡りするぐらゐが最上の快樂であつて、うるさくもまた文筆にわづらはされてこんな役にもたたぬ詩などつくつてゐるのである。』

(一)牽牛織女

牽牛出河(二)西。織女處其東。
萬古永相望。(三)七夕誰見同。
(四)神光竟難候。(五)此(六)事終矇(七)朧。
(八)颯然精(九)靈合。何必秋(一〇)遂逢。』
(一一)亭亭新(一二)粧立。龍(一三)駕具層空。
世人亦爲(一四)爾。祈(一五)請走兒童。
(一六)稱家隨豐(一七)儉。白(一八)屋達公(一九)宮。
(二〇)膳夫翊(二一)堂殿。鳴(二二)玉凄房(二三)櫳。
(二四)曝衣遍天下。曳(二五)月揚(二六)微風。
(二七)蛛絲小人態。曲綴瓜果中。
(二八)初筵裛(二九)重露。日(三〇)出甘(三一)所終。』
(三二)嗟汝未嫁女。秉(三三)心鬱(三四)忡忡。

牽牛織女

牽牛河西に出づ、織女其の東に處る。
萬古永く相望む、七夕誰か同じくするを見む。
神光竟に候ひ難し、此の事終に矇朧たり。
颯然精靈合す、何ぞ必ずしも秋遂に逢はむや。』
亭亭新粧立つ、龍駕層空に具ふ。
世人亦爾が爲めに、祈請して兒童走る。
家に稱ひて豐儉に隨ふ、白屋より公宮に達す。
膳夫堂殿に翊む、鳴玉房櫳に凄たり。
曝衣は天下に遍し、月に曳きて微風に揚る。
蛛絲は小人の態、曲綴す瓜果の中。
初筵重露に裛まる、日出終る所に甘んず。』
嗟汝未嫁の女、秉心鬱として忡忡たり。

(三五)防身動(三六)如律、竭(三七)力機杼(三八)中。　防身動くこと律の如く、力を竭す機杼の中。

雖無(三九)舅姑事、敢昧(四〇)織作(四一)功。　舅姑の事無しと雖も、敢て昧からむや織作の功。

明明君臣(四二)契、咫尺(四三)或未容。　明明君臣の契、咫尺或は未だ容れず。

(四四)義無棄(四五)禮法、恩始(四六)夫婦恭。　義禮法を棄つる無し、恩は夫婦の恭なるより始まる。

(四七)小大有佳(四八)期、戒之在至公(四九)。　小大佳期有り、之を戒むること至公なるに在り。

(五〇)方圓苟齟齬、丈(五一)夫多英雄。』　方圓苟くも齟齬するも、丈夫には英雄多し。』

【字解】【一】牽牛織女　牽牛はひこぼし、織女はたなばたぼし。「晉書」天文志にいふ、織女三星は天紀の東端にあり、天女なり、果蓏絲帛珍寶を主る、と。【二】河西　河は銀河、「あまのがは」なり。【三】七夕誰見同　七夕同とは七月七日の夕に二星が會同するをいふ。吳均の「齊諧記」にいふ、桂陽の成武丁、仙道あり、忽ち弟に謂つて曰く、七月七日に織女まさに河を渡るべし、吾さきに已に召さると。弟曰く、何事ありてか織女河を渡るや、武丁曰く、暫く牽牛に詣るなり、と。【四】神光　不思議なる星の光。周處が「風土記」にいふ、「七月七日の夜、庭を灑掃し、几筵を鋪施し、酒脯時果を設け、香粉を筵上に散じて以て河鼓（卽ち牽牛星）織女を祀る。言ふ、此の二星辰まさに會すべしと。少年夜を守る者或は私願を懷く。或は云ふ、天漢中の奕奕たる正白の氣の光耀五色あるを見ば、此時を以て徴となして便ち拜して乞願すと。神光とは白氣の光耀あるものの類をさす。【五】候　うかがふ。【六】此事　牛女星會合のこと。【七】蒙朧　おぼろげ。【八】颯然　風のわたるさま。【九】精靈合　二星のたましひが合體する。【一〇】秋期逢　秋時をまつて遂にであふ。以上は牛女二星會合のことの俗說にとどまるをいふ。【一一】亭亭　高き貌。【一二】新粧立　織女星がよそほひて立つこと。【一三】龍駕　龍にひかせるくるま、是は牽牛星のかたにいたらんとて用意するなり。【一四】儲偶

汝がために、汝とは牛女をさす。【一五】祈請　いのりたのむ、男女の私願、裁縫の巧、みないのりごとなり。【一六】稱家　家家の財力にかなひて。【一七】豐儉　財力の多少。【一八】白屋　茅ぶきの家、貧家をさす。【一九】公宮　身分ある者の家。【二〇】膳夫　料理方。【二一】明堂殿　明は敬ふ貌なり、蓋しつつしみて饌具を陳設するをいふ。【二二】鳴玉　婦女室より出でんとして佩玉を鳴らすこと。【二三】凄房櫳　凄は晉のつめたきうなるをいふ、房は「へや」櫳は格子窓。【二四】曝衣　七夕には經書及び衣裳をさらす風習あり。【二五】曳月　婦女が月前にもすそをひくをいふ。【二六】揚徽風　衣のすそがそよふく風にあがる。【二七】蛛絲二句「荊楚歲時記」にいふ、七夕に、人家の婦女、綵縷を結び七孔の針を穿ち瓜果を庭中に陳べて巧を乞ふ、蟢子（くも）瓜上に網するものあれば以て巧を得たりとなす、と。蛛絲はくものいと、小人とは世間なみの人人をいふ、曲綴は人手でからがくこと、瓜果は「うり」などのくだもの。【二八】初筵　祭筵のはじめ。【二九】襄重露　おもきつゆにつつまれる、宵のさまをいふ。【三〇】日出　翌日の朝太陽のでること。【三一】廿所終　得心して祭りの終りとする。以上世俗の祭事をのぶ。【三二】嬉汝　汝は未嫁女をさす。【三三】秉心　心のもちかた。【三四】鬱沖沖　沖沖は憂ふる貌、鬱は胸のふさがるさま、未嫁の女婚前にありてはいろいろ内心に思ふところあるべし。【三五】防身　節操を失はぬ樣に身をふせぐ。【三六】動如律　律令の如く嚴格に擧動する。【三七】竭力　勉勵すること。【三八】機杼中　機は織機、杼は「ひ」なり、機杼中とは織事の中をいふ。【三九】舅姑事　しうと、しうとめに仕ふる事がら。【四〇】味　不知案內。【四一】織作功　はたなりのわざ。【四二】君臣契　君と臣とのちぎり。【四三】咫尺或未容　咫尺はわづかの距離、そばちかくをいふ、未容とは君臣相容れざるなり、あひだがぴつたりあはぬをいふ。【四四】義　君臣の義。【四五】棄禮法　主として臣下たる者が臣としての禮法をすつるをいふ。【四六】恩始夫婦恭　上に義をいひここに恩をいふも、恩義二者は互にかれていへり、上の義にも恩をふくみ、この恩にも義をふくむ。恭とは夫婦の間に恭敬の禮を存するをいふ、これは已に夫婦となれるものについて言ふに非ず、未婚の男女、將に夫婦たらんとするものについていふ。夫婦恭は男女恭なりと知るべし。【四七】小大　小は男女夫婦間をさす、大は君臣間をさす。【四八】佳期　男女君臣兩者相會するを佳期といふ。【四九】至公　公平の極、私邪なきをいふ。【五〇】方圓苟齟齬「楚辭」九辯に、圜鑿而方枘兮、吾固知其齟齬而難入、とあり、鑿は「のみ」で孔をあけること、方枘は四角形にした材

木のさしこみの頭なり、四角のさしこみを圓いあなにはめようとしてもくひちがうてはまらぬ。句の意は、上文の咫尺未容とおなじく君臣のあひだくひちがひて合はぬをいふ。【註二】丈夫多英雄　英雄多しといふは英雄なれば禮法を棄ててまで君に近づかんとするものは無しとの意なり。以上は男女夫婦の事より君臣の關係に及び、男女の苟合すべからざるごとく君臣も苟合すべからざるをいへり。蓋し作者自身に感ずる所あるなり。

【題義】牽牛星と織女星との事に感じてよめる詩。大曆元年七月夔州にての作。

【詩意】牽牛星は天の河の西に出で、織女星はその東にをる。二つの星は萬年たつてもかくして永久に望みあうてゐるのだ、だれが七夕のひに二つの星が會合するのを見たものがあらうぞ。彼等は年に一回會合するといはれてはゐるがその不思議な光は結局うかがふことがむつかしいのであつて會合するといふことはつまりぼんやりとしてはつきりせぬことだ。星の神のすることとならさつと風の吹きわたる樣に二つのたましひがよりあうてもよいのである、なんで秋になるのを待つてはじめてであふ必要があるものか。』ともかく夕方になると天上では織女星がせいたかく新しいお化粧をして立ち、高き空に龍駕が用意される。之を見て世人もまた彼等のために祭りをしていろいろのご祈願をなし兒童らまで奔走する。お祭りのしかたは家家の貧富に應じて茅ぶきのあばらやから上は公の身分ある家にまで達する。料理方はつつしんで堂殿に御馳走をならべる、婦女子等は佩玉を鳴らしてつめたさうにねやのまどから出かける。衣裳のむしぼしをするのは天下一般のことであり、婦女子等は月前にもすそをひいてそよ吹く風にそれをひるがへす。またつまらぬ人たちのすることではあるが裁縫が上手になりたいために、瓜などにわざわざ蜘蛛の絲をからがいたりする。祭筵の初は露がおもくおく頃からであつて、夜があけて太陽がでる頃になるとはじめて祭りの終ることに得心する。』ああ未婚の處女らよ。汝等はふだんは物思ひに胸をふさいで心配してをり、擧動嚴格に身を守りて機織りの事に勉強して、たとひ舅姑には仕へずとも機織りの業にくらからぬ樣にするのである。自分は考ふるにかの明明白白たる君臣の契りも咫尺の近くに居りながら相容れず合はぬことがある、合はぬからとて君臣の義に於ては臣たるもの決して禮法を棄てることはない、ちやうどそれは男女が夫婦たらんとするにあたりてその恩義に於ては兩者の間に恭敬の禮が存するところから始まると似た關係にある。夫婦の小、君臣の大、二者それぞれに佳期といふものがあるが、之を爲すには無私至公を以てせねばならぬ、だから君臣の間にはかりに方圓相合はぬ場合がありとしても、臣たるもの丈夫ならば丈夫には英雄が多きもの故彼は決して苟進苟合をするものではない。(あだかも女が非禮を以て男子に合を求めざると同樣である。)』

雨

峽雲行(一)清曉。煙霧相徘徊。　峽雲清曉に行く、煙霧相徘徊す。

風吹蒼(二)江樹。雨灑石壁來。　風は吹く蒼江の樹、雨石壁に灑ぎ來る。』
淒涼生餘寒。殷殷兼出雷。　淒涼餘寒生ず、殷殷兼ねて雷を出す。
白(三)谷變氣候。朱(四)炎安在哉。　白谷氣候變ず、朱炎安くに在り哉。
高鳥濕不下。居人門(五)未開。』　高鳥濕ひて下らず、居人門未だ開かず。』
楚(六)宮久已滅。幽(七)珮爲(八)誰哀。　楚宮久しく已に滅す、幽珮誰が爲にか哀しむ。
侍(九)臣書王夢。賦(一〇)有冠(一一)古才。　侍臣王夢を書す、賦冠古の才有り。
冥冥翠(一二)龍駕。多自巫(一三)山臺。』　冥冥翠龍の駕、多くは巫山の臺よりす。』

【字解】【一】行　うごくをいふ。【二】蒼江樹　樹の字朱子之を去の誤とし、董斯張之を樹(注)に作りたれども、今樹に從ふ。以上起四句雨の至るをのぶ。【三】白谷　谷名とみゆ、「杜臆」は白帝城の谷をいふとなせり。【四】朱炎　夏のあつさ。【五】門未開　雨をおそるるなり、「淒涼」以下六句は雨中の景をのぶ。【六】楚宮　楚王の宮、「奉寄李祕書文嶷詩」・「夔州歌」をみよ。【七】幽珮　神女の佩ぶるたま、宋玉が神女賦に搖珮飾、鳴玉鸞、とあり。【八】爲誰哀　かなしむも詮なきをいふ。【九】侍臣書王夢　侍臣は宋玉をいふ、王夢は楚の懷王の神女を夢みしこと、書とは高唐賦を作りて王の夢を書きしこと。宋玉が高唐賦序に曰く、昔者楚襄王、與宋玉、遊於雲夢之臺、望高唐之觀、其上獨有雲氣、王問玉曰、此何氣也、玉對曰、所謂朝雲者也。王曰、何謂朝雲、玉曰、昔者先王（懷王をさす）嘗遊高唐、怠而晝寢、夢見一婦人、曰、妾巫山之女也云云。【一〇】賦　高唐賦をさす。【一一】冠古才　古人の上にもすわるほどの文才。【一二】翠龍駕　顏師古、「河東賦」の注に翠龍は穆天子の乘る所の馬なりといへり、ここは神女の用ふる馬をいふ。【一三】巫山臺　巫山にある陽臺、「奉寄李文嶷」詩をみよ、以上「楚宮」六句は今の降雨も亦神の力なるをのぶ。

【題義】雨ふりしについてよめる詩。大曆元年夔州にての作。
【詩意】清かな曉に峽の雲がうごきだし、煙や霧がぶらつきだした。そのうちに風が江邊の樹木に吹きつけ、雨が石壁にふりそそいで來た。』つめたく十分の寒氣がおこり、さかんにごろごろと雷まで鳴りだした。白谷ではこれまでとまるで氣候がかはり、あつさなどはどこへいつたかとおもふ。高く飛んだ鳥はうるほひながらしたへはおりてこぬし、住民たちも閉めた門をばまだあけぬ。』むかし楚の懷王襄王の侍臣であつた宋玉は古今に冠たる作賦の才があつて高唐賦を以て懷王が巫山の神女を夢みたことをかきしるしたが、楚王の宮殿はとつくに消滅してしまつて、神女が幽珮を鳴らしてとほるのも誰がために哀しむのかとおもはれるが、神女がその往來に雲雨を起すことは楚王の昔ばかりではなく、今日でもくらがりに翠龍を驅る車駕のとほるのは多くは巫山の臺から來るのである。（けふの雨も恐らくは神女のしわざであらう、の意。）』

雨

行雲遞(一)崇高。飛雨靄(二)而至。　行雲遞に崇高なり、飛雨靄として至る。
潺(三)潺石間溜。汩(四)汩(五)松上駛。　潺潺たり石間の溜、汩汩として松上に駛し。
亢(七)陽乘秋熱。百穀皆已棄。　亢陽秋熱に乘ず、百穀皆已に棄つ。

皇天德澤降，焦卷有生意。　『皇天德澤降る、焦卷も生意有り。』

前雨傷卒暴，今雨喜容易。　前雨は卒暴なりしを傷む、今雨は容易なるを喜ぶ。

不可無雷霆，間作鼓增氣。　雷霆の、間作して鼓して氣を增す無かる可からず。

佳聲達中宵，所望時一致。　佳聲中宵に達す、望む所時に一致なり。

清霜九月天，髣髴見滯穗。　『清霜九月の天、髣髴滯穗を見る。』

郊扉及我私，我圃日蒼翠。　郊扉に我が私に及ぶ、我が圃日日に蒼翠なり。

恨無抱甕力，庶減臨江費。　『恨むらくは抱甕の力無きことを、庶くは減せむ臨江の費。』

【字解】【一】遞崇高　たがひに積みかさなりて高くなるをいふ。【二】靄　もや〳〵とした貌。【三】潺潺　さらさらとなるおと。【四】溜　たまり水。【五】汩汩　疾く流るる貌。【六】松上駛　松上とは石溜が山上にかかるゆゑ視覺上よりして松のうへをはしるごとくみゆるをいふ、駛ははやくはしること。【七】亢陽　さかんなる陽氣。【八】德澤　めぐみのうるほひ。【九】焦卷　業蜜のやけこげて卷きたる草木。【一〇】生意　活氣、以上は雨ふりて草木活氣あるをのぶ。【一一】前雨　前回の雨、上の「雨」詩にうたへる雨をさす。【一二】卒暴　卒は猝、にはか、暴はあらし、大雨急に來りて急に止みしをいふ。【一三】今雨　いまふつた雨。【一四】容易　前回は雨を待ちても容易にふらなかつたのに今度はその反對なるをいふ。【一五】間作　雜はりておこる、雨のあひまあひまに雷がはいるなり。【一六】鼓增氣　鼓動して元氣をます。【一七】佳聲　よきおと、雷霆の聲をさす。【一八】一致　希望と雷鳴の事實が合する。【一九】九月天　將來をいふ、現に九月なりといふに非ず。【二〇】髣髴　さも似たり、此二字は上句の「清霜」の上に置かれしつもりにてみるべし。【二一】滯穗　ひろはれずにのこつてゐる稻の穗、「詩」大田に、「彼有遺秉、此有滯穗」とみゆ。以上雷鳴加はりて秋穫期すべきをいふ。【二二】郊扉　城の近郊の家、自家をさす。【二三】我私　自己の私有の田、「詩」大田に、「雨我公田、遂及我私」とみゆ。【二四】我圃　圃は「はたけ」。【二五】蒼翠　蔬菜の色のあをきをいふ。【二六】抱甕力　子貢、漢陰に至りて一丈人が圃畦を爲むるを見るに隧をうがちて井に入り、甕を抱きて出でて灌ぐ、と。「莊子」にみゆ。甕にて水をくみて圃にそそぐなり。【二七】臨江費　他人をやとひて江にのぞみて水をくませる費用。以上は、圃菜活氣づきたれば汲水の費のはぶき得べきをいふ。

【題義】また雨ふりしことをよめる詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】行く雲がたがひに積みかさなり、飛び來る雨がもやくやとやつてきた。石間の溜水がさらさらと音たてて高處から落ちて來て松の梢のあたりをはやく走りゆくかに見える。秋の殘熱に乘じて陽氣がたかぶり、もろもろの穀物は皆棄てたも同然であつたのに、天からめぐみの露が降つて焦げて卷きかけた草木までもいきいきとしたこころもちが有る樣になつてきた。』この前の雨はあんまり急激すぎたが、こんどの雨はうれしくも苦もなくふつてきた。ここへ雷霆がはさまつて元氣を鼓舞してくれなくてはならぬとおもつてゐると、幸にもいい音がしだして夜半までそれがつづいた。事實は希望と一致した。清き霜置く九月には豐作となつてあちこちに落穗がこぼれてゐるであらうことを今からもはや見る樣である。』この雨は我が郊居の扉をもみまひ自分の私有の田圃にも及び、はたけの野菜は日日あをあをと色をよくしつつある。自分には恨めしくも漢陰の丈人の樣な甕を抱いて水を汲む力は無い、(だから水を汲むには人を雇はねばならぬ、ところがかく雨がふつた以上は)がこんどは江

から水を汲みあげる經費はへらすことができるであらう。』

雨二首

青山澹無姿。白露誰能數。
片片水上雲。蕭蕭沙中雨。
殊俗狀巣居。層臺俯風渚。
佳客適萬里。沈思情延佇。
掛帆遠色外。驚浪滿吳楚。
久陰蛟螭出。寇盜復幾許。

雨　二首

青山澹として姿無し、白露誰か能く數へむ。
片片たり水上の雲、蕭蕭たり沙中の雨。』
殊俗巣居に狀たり、層臺風渚に俯す。
佳客萬里に適く、沈思して情延佇す。
帆を掛く遠色の外、驚浪吳楚に滿つ。
久しく陰れば蛟螭出づるも、寇盜復た幾許ぞ。』

【字解】【一】澹　淡に同じ、あはき貌、うすぼんやりとしてゐるをいふ。【二】白露　細き雨滴をいふ。【三】蕭蕭　しづかにふる貌。起四句は雨景をいふ。【四】殊俗　ちがつた習俗。【五】狀巣居　狀は似るをいふ、巣居は木上に巣をかまへて生活すること。即ち次句の層臺にて自己の居宅をいふ。【六】層臺　たかき臺、崖上にあるを以ていふ。【七】風渚　風のふくなぎさ。【八】佳客　よきたび人。此人誰なるや詳ならず、作者が送り出せし人なり。【九】延佇　ひさしく立ちまつ。語は「離騷」に出づ。【一〇】遠色　遠き行色。【一一】吳楚　吳は江蘇省地方、楚は湖北湖南地方。【一二】蛟螭　人を害する水蟲なり、蛟は龍のたぐひにて角なく蛇に似て細頸、頸上に白き嬰（遠き鱗）あり、四脚ありと。螭は蛟に似て角なく、龍のごとくにして黃なりといへり。盜賊にたとふ。次句の「寇盜」とおなじ。【一三】復幾許　幾許は「いくばく」、通常距離にていふもここは時間の上にていへり、「いくばくぞ」とはいくばくの時間もつづくまじの意。强ひて自ら慰むるの言をなすなり。

【題義】雨のことをよむ、ただし此の第一首は雨中に旅客を送りだして、それを思ふこころをのべたり。大曆元年夔州にての作。

【詩意】青山もうすくぼんやりとして姿がみえぬ、無數にしたたる雨のしづくはだれもかぞへきるものはあるまい。水の上にはひとひらひとひら雲がとび、沙のなかにはしとしとと雨がしづかにふつてゐる。』この土地のかはつた風俗とて住居は巣居狀態に似てゐるので自分は宅の高臺のところから風の吹いてゐる渚をみおろす。するとよきたび人がいまや萬里の遠くへゆくところだ。そのことをふかくかんがへこんで自分は別れの情にたへずじつと立ちとまつてながめる。客は帆をかけて遠遠にすがたをけす。そのそとにはただゆくての吳楚の方向に向つて驚き立つ浪が溢れるばかりである。くもりがながくつづくと蛟螭のごとき人を害するものが水からあらはれでる。盜賊また然りであるが、しかし盜賊の樣なものがどれほど存續しうるものか、たいして永いわけのものではあるまい。』

〔二〕

空山中宵陰。微冷先枕席。
回風起清曙。萬象萋已碧。

〔二〕

空山中宵に陰る、微冷なるは先づ枕席なり。
回風淸曙に起る、萬象萋として已に碧なり。

(二)落落出岫(三)雲、渾(四)渾倚天石。　落落たり出岫の雲、渾渾たり倚天の石。
日假何道行、雨含長江白。』　日何の道を假りて行くや、雨長江を含みて白し。』
連檣(五)荊州船、有士荷戈戟。　連檣荊州の船、士有り戈戟を荷ふ。
(六)南防(七)草鎭慘、霑濕赴(八)遠役。　南のかた草鎭の慘なるを防ぐ、霑濕して遠役に赴く。
羣盜下(九)辟山、(一〇)總戎備(一一)强敵。　羣盜辟山より下る、總戎强敵に備ふ。
水深(一二)雲光廓、(一三)鳴艣各有(一四)適。』　水深くして雲光廓なり、鳴艣各〻適くこと有り。』
漁艇息(自)悠悠、(一五)夷歌(一六)負樵客。　漁艇〔自から〕悠悠たり、夷歌す負樵の客。
(一七)留滯一老(一八)翁、書(一九)時記朝(二〇)夕。』　留滯す一老翁、時を書して朝夕を記す。』

【字解】【一】凄已碧　凄は草のしげるさま、句意は雨のためにくらかりしに風おこりしゆゑ物にあをみが見えだしたといふなり。【二】落落　不築のさま。【三】岫　穴ある山。【四】渾渾　諸本解なし、案ずるに「孫子」に、渾渾沌沌、形圓而不レ可レ敗也、とあり、陣形の圓きをいふ、詩句の渾渾も渾沌として圓きをいふならん、以上起八句は、峽中の秋雨のさまをいふ。【五】荊州船　荊州へくだる船。【六】南防　南は荊州をさす。【七】草鎭慘　草鎭は荊州の地名ならんといふ、所在明ならず、慘とは蓋し盜賊の害甚しきものありしをいふならん。【八】遠役　遠方の防寇のしごと。【九】辟山　仇氏いふ、縣の名にして唐の渝州の壁山縣がそれならんと、渝州は今の重慶府なり、これは夔州よりは上流方面についてのぶ。【一〇】總戎　蓋し夔州の都督をさすならん。【一一】强敵　辟山の賊をさす。【一二】雲光廓　廓は大きく開くこと、すこしの霽れまをいふ。【一三】鳴艣　艣は櫓なり、船旁の「かぢ」。【一四】有適　適は「ゆく」、以上連檣八句は雨中の征戍をのぶ。【一五】夷歌　蠻夷のうたをうたふ。【一六】負樵客　たきぎをになふひと。【一七】留滯　ながとうりうする。【一八】老翁　自己をさす。【一九】書時　時事をかきしるす。【二〇】朝夕　朝とは「回風」以下をいふ、夕は漁艇樵客等のこと是れなり、末四句は自己の留滯を歎ず。

【題義】此の第二首は雨中に征伐をあはれみ留滯をなげくこころをのべたり。

【詩意】さびしい山が夜なかにはくもつて、吾が枕席が先づすこしの冷さを感じた。あかつきにはつむじ風が吹きおこつて萬の物象が碧の色を見せるに至つた。が岫からでる雲は高く羣をぬいて湧き、天に倚つてそびえてゐる石はごろごろと大きく頭上を壓してゐる。太陽はどこの道をあるいて姿をあらはさぬのか、雨氣は長江をつつんで白くよこたはつてゐる。』このとき檣をつらねて荊州の方へ船がゆく、それには戈戟を荷うた士卒がのつてゐる、彼等は南の方、草鎭の慘事のあつたのを防ぐために雨にぬれながら遠方のしごとにでむくのである。また他方には辟山の方から羣盜がおりてくるといふので、總戎の官がこの强敵に備へんとしてをる、それで深き水に雲の光りが開くといふと、上流に向つても下流に向つてもそれぞれ櫓音をさせてでかける場所があるのである。』いま漁舟をみるとのんきさうにういてゐる、又たき木をとるをとこたちは蠻夷の歌をうたひながらかへりくる。これに對してこの長逗留の老人である自分は時事の傷ましさにたへずそのことを書きとめて朝から夕方にいたるありさまを記すのである。』

江上

江上日多雨。蕭蕭荊楚秋。（一）　江上日に雨多し、蕭蕭たり荊楚の秋。
高風下木葉。永夜攬貂裘。（二）　高風木葉下る、永夜貂裘を攬る。
勳業頻看鏡。（三）（四）行藏獨倚樓。（五）　勳業頻に鏡を看る、行藏獨り樓に倚る。
時危思報主。（六）衰謝不能休。（七）（八）　時危くして報主を思ふ、衰謝にも休する能はず。

【字解】【一】荊楚　荊楚は一木にして二名、故に國號となすにも亦二名あり、「春秋」に於ては魯の莊公の世までは皆「荊」と書す、僖公元年に至りて楚人伐鄭と書す、此頃よりして楚と改めたるなり。ここの荊楚は夔州地方をさしていへり。【二】攬貂裘　攬は「とる」、貂裘はてんの皮ごろも。裘をとるは寒を防ぐためなり。【三】勳業　老いたれば勳業立てうるや否を氣づかふをいふ。【四】看鏡　老顏をてらしみるなり。【五】行藏　行くべきか藏るべきかにつきかんがふるなり。【六】報主　天子の恩にむくゆる。【七】衰謝　氣力の衰へ減じたること。【八】休　思ひをやむるなり。

【題義】江上の宅にての感をのぶ、江上は起句の二字を切りとりて用ふ。大曆元年夔州西閣にての作。

【詩意】江上には每日雨ばかりで、楚地の秋はさびしい。風は高く吹いて木の葉はおちる、夜ながにあたりては貂裘をひつぱりだしてきる。勳業のことが氣になるからたびたび鏡で容顏を照らしてみるし、行藏に迷うてただひとり樓によりかかつてかんがへる。時世が安泰でないからどうにかして君の御恩にむくいたいとおもうて、老衰の身ながら、その思ひをやめることができぬわい。

雨晴

雨時山不改。晴罷峽如新。　雨時山改まらず、晴れ罷めば峽新なるが如し。
天路看殊俗。（一）秋江思殺人。　天路殊俗を看る、秋江人を思殺す。
有猿揮淚盡。（二）無犬附書頻。（三）　猿有り淚を揮ひ盡くす、犬の書を附する頻りなる無し。
故國愁眉外。（四）長歌欲損神。（五）　故國愁眉の外、長歌神を損せむと欲す。

【字解】【一】天路　天邊、天涯などの意。【二】有猿　峽中は猿の多き地にて土謠に啼猿三聲淚霑裳の語あり。【三】無犬　晉の陸機黃耳と稱する犬を用ひて洛陽より故鄕の吳へ手紙をもたせやりしといふ話あり。【四】愁眉外　愁をおびてながむる眼の外の意。【五】損神　こころを害する。

【題義】雨ばれのときの感をのぶ　大曆元年夔州にての作。

【詩意】雨がふりつつあるときは山の色はかはらぬが、晴れ了つてからみると峽は全く新しいものの樣だ。自分は天のはてでちがつた土俗をみてゐる、秋の江のながめは人をして非常に物思ひになやましめる。ここは猿が多いからそのなきごゑのために淚をすつかりふるひつくしたが、故鄕へしきりと手紙をもたせてやるべき犬は無い。故鄕は自分のながめやる愁眉の外によこたはつてをる、か樣に長く節つけた歌をうたふと自分の精神はそこなはれさうでならぬ。

雨不絶

鳴雨既過漸細微．映空搖颺如絲飛。
堦前短草泥不亂。院裏長條風乍稀．
(一)舞石旋應將乳子。(二)行雲莫自濕仙衣。
眼邊(三)江舸何(四)匆促。未待安流逆浪歸。

雨絶えず

鳴雨既に過ぎて漸く細微なり、空に映じて搖颺絲の如く飛ぶ。
堦前の短草泥にも亂れず、院裏の長條風乍ち稀なり。
舞石旋た應に乳子を將ゐるなるべし、行雲自ら仙衣を濕す莫からむや。
眼邊江舸何ぞ匆促なる。未だ安流を待たず浪に逆ひて歸る。

【字解】【一】舞石一句　羅含が「湘中記」にいふ、石燕は零陵縣にあり、風雨にあへば飛び舞ふこと燕のごとく、風雨やめば石となる、と。又「水經注」にいふ、燕山に石あり、紺色にして燕に似たり、其の石或は大或は小、雷風相薄るに及べば小者は大者に隨つて飛ぶこと乳子を相將ゐるの狀のごとし、と。是れ風雨のつよかりし時のさまをいへり。【二】行雲・仙衣　巫山神女の事を用ふ。【三】江舸　舸は大船。【四】匆促　せはし。

【題義】暴風雨のあとにつゞいて細雨となりしことをのべたる詩。大暦元年の作か。朱瀚は贋作となせり。

【詩意】ひどい音をたててふつた雨がとほりすぎてしだいに微細なものとなり、ゆらゆら空にうつろうて絲すぢの樣にほそく飛ぶ。堦の前の短い草は泥のためにもみだされずにあるし、奥庭の樹の長くたれた條をみると急に風がすくなくなつてゐる。風がまだ強かつたときには石燕の話にある樣に、舞ひ飛ぶ石さへ乳子をつれてゐるかと疑はれたが、小雨になつて雲がうつりゆくのをみると巫山の仙女もじぶんみづから衣をぬらしはせぬかときづかはれる。眼前にみゆる江の舸はなぜあんなにせはしないのか、もすこし待つたらよささうであるのに、まだ水流もおちつかぬのに、浪にさからうて歸つてゆくのである。

晩晴

(一)返照(二)斜初徹。浮雲薄(三)未歸。
江虹明(四)遠飲。峽雨落(五)餘飛。
鳧雁終高(六)去。熊羆覺(七)自肥。
(八)秋分客(九)尙在。竹露夕微微。

晩晴

返照斜に初めて徹す、浮雲薄くして未だ歸らず。
江虹明かに遠く飲む、峽雨落餘に飛ぶ。
鳧雁終に高く去る、熊羆自から肥ゆるを覺ゆ。
秋分客尙ほ在り、竹露夕に微微たり。

【字解】【一】返照　夕日のてりかへし。【二】斜初徹　徹とはどこまでも光線が射とほすをいふ。【三】未歸　歸とは其の湧き起りし山にかへるをいふ。【四】遠飲　飲とは虹の水面に垂れさがりしさま水を飲まんとするに似たるをいふ。【五】落餘飛　落ちちる餘勢にさらに飛ぶ。【六】高去　晴れしゆゑなり。【七】自肥　これ亦自得のさまをいふ。【八】秋分　節の名、秋の晝夜平分の日。【九】客尙在　自己のなほ滯在すること。

【題義】夕方あまばれせしことをのべた詩。大曆元年秋分、夔州にての作。

【詩意】夕日のてりかへしが斜にどこまでも射しこむ、雲はうすく浮んでまだ山へかへらぬ。江にかかつた虹ははつきりとして遠く水を飲まうとしてゐる樣であり、峽の雨はばらばら落ちながらまだ飛ぶ。さすがに晴れまはうれしいか鳧や雁は高く飛び去つてしまつたし、熊も羆もひとりでに肥えたかの感がある。いま秋分の節であるが自分はまだここに滯在をしてゐる。夕かたまけて竹が枝の露がちくちくとしたたりつつある。

雨

萬木雲深隱。連山雨未開。
風扉掩不定。水鳥過仍迴。
鮫館(一)如鳴(二)杼。樵舟豈伐(三)枚。
清涼破炎毒。衰意欲登臺。

雨

萬木雲に深く隱る、連山雨未だ開けず。
風扉掩へども定まらず、水鳥過ぎて仍は迴る。
鮫館杼を鳴らすが如し、樵舟豈に枚を伐らむや。
清涼炎毒を破る、衰意臺に登らむと欲す。

【字解】【一】鮫館　鮫人の館、水底に住む不思議なる人物のやかたなり。俗傳ふ、鮫人水中より出で人家に寄寓し綃を賣る。去るに臨みて主人より器をもとめ、泣いて珠を出だし盤に滿たしめ以て主人に與ふと。江賦に鮫人構館于懸流の語あり。【二】如鳴杼　杼は「ひ」なり「ひ」を鳴らすは機織るときの音をいふ。【三】伐枚　枚は幹よりでる小枝、伐はきるなり。

【題義】雨についてよめる詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】多くの立ち木が雲のなかにふかく隱れ、連れる山山には雨がまだとざしてゐる。風にあふられる扉はばたばたとして手でおさへとざしても動かされるし、いちどとほりすぎた水鳥もふたたび飛びもどつてくる。鮫人のすむ水底の館も機織りの樣に雨音をさせられるし、樵舟もよもや小枝をきりにはゆかれまい。この雨ですずしさがすつかりひどいあつさをうち破つたから、老衰のこころもちながら高い臺にでものぼつてあたりをながめようかとおもふ。

奉(一)漢(二)中王手札(三)

國(四)有乾坤大。王今叔父(五)尊。
剖(六)符來蜀道。歸蓋(七)取荊(八)門。
峽險通舟峻。江長注海奔。
主(九)人留上客(一〇)。避暑得名園(一一)。
前後緘(一二)書報。分明饌(一三)玉恩。
天(一四)雲浮絕壁。風竹(一五)在華軒。

漢中王の手札を奉ず

國乾坤の大なる有り、王は今叔父の尊なり。
剖符蜀道に來り、歸蓋荊門に取る。
峽險にして舟を通ずる峻しく、江長くして海に注ぎて奔る。
主人上客を留む、避暑名園を得たり。』
前後緘書報す、分明なり饌玉の恩。
天雲絕壁に浮ぶ、風竹華軒に在り。

已覺良宵永、何看駭浪翻。　已に覺ゆ良宵の永きを、何ぞ看む駭浪の翻へるを。

入期朱邸雪、朝傍紫微垣。』　入は期す朱邸の雪、朝は傍はむ紫微の垣。』

枚乘文章老、河間禮樂存。　枚乘 文章 老ゆ、河間禮樂存す。

悲秋宋玉宅、失路武陵源。　悲秋宋玉の宅、失路武陵の源。

淹泊俱崖口、東西異石根。　淹泊倶に崖口、東西石根を異にす。

夷音迷咫尺、鬼物倚朝昏。』　夷音咫尺迷ふ、鬼物朝昏倚る。』

犬馬誠爲戀、狐狸不足論。　犬馬誠に戀を爲す、狐狸論するに足らず。

從容草奏罷、宿昔奉清罇。』　從容奏を草し罷まば、宿 昔清罇を奉せしとおもへ。』

【字解】【一】奉　拜受せしこと。【二】漢中王　名は瑀、蓬州の刺史たり、今峽を出でて京師に歸らんとして歸州にあり、作者に手紙を與へしなり、漢中王の事は卷十一に「戲題上漢中王三首」、「翫月呈漢中王」等の詩篇ありて已に出だせり。【三】手札　てがみ。【四】國　唐の天下をいふ。【五】叔父尊　瑀は讓皇帝の子にして代宗の叔父にあたる。【六】剖符　刺史となりしをいふ、已に見ゆ。【七】歸蓋　京師へかへる車蓋。【八】取荊門　路を荊門に取るをいふ。【九】主人　歸州の刺史をいふ、地元の役人ゆゑ主人といふ。【一〇】上客　上等の賓客、漢中王をさす。【一一】名園　主人の園をいふ、起八句は王の近況を敍す。【一二】緘書報　王より作者へ封じて手紙の返事をくれたこと。【一三】饌玉恩　饌玉は美食をいふ、蓋し王より作者に手紙と共に食糧の料として金錢を惠與せしなるべし。【一四】天雲一句　王の方をながめしさまをいふ。【一五】風竹一句　上の名園の狀、且つ夏候をいふ。【一六】良宵　永夜長し、秋候をいふ。【一七】何看　反語、みざるをいふ。【一八】入　王が朱邸に入るなり。【一九】朱邸雪　郡國の朝宿の舍の京師にあるものを邸といふ、諸侯は戶を朱にするを以て朱邸といふ、王の京師の宅をいふ、雪とは冬候をいふ。【二〇】朝　參朝する。【二一】紫微垣　天文、大帝の座、皇居をさす。「前後」以下八句は手紙の事より王の歸京の事をいふ。【二二】枚乘　漢の枚乘、文才あり、梁の孝王の賓客となる、自ら比す。【二三】河間　地名、漢の景帝の子河間の獻王、名は德、學を好み、儒者を敬す、以て瑀に比す。【二四】悲秋宋玉宅　宋玉は秋を悲しむ、瑀亦歸州にありて秋を悲しむべきをいふ。玉が宅歸州にあり。【二五】失路武陵源　自己をいふ、武陵の桃源は仙境なり、而して己路を失ひてそこに到るを得ず。【二六】淹泊　ひさしくとまる。【二七】俱　王も自己も共に。【二八】崖口　三峽の出口と入口と。【二九】異石根　石根は絕壁の足をいふ。【三〇】夷音　楚語をさす。【三一】迷咫尺　すこしにても門外へでればわからなくなる。【三二】鬼物　魑魅の類。【三三】倚　接近するをいふ。枚乘八句は峽中彼我の況をのぶ。【三四】犬馬　自ら比す。【三五】戀　主人をこふ、王をしたふをいふ。【三六】狐狸　嘗て漢中王を讒せし小人をさす、漢の張綱が曰く、豺狼當路、安問狐狸と。【三七】草奏罷　王の到京後の事、奏は天子への奏文なり。【三八】宿昔奉清罇　上句と此句との間に「勿忘」の二字をいれて見るべし、奉とは共酌せしことをいふ。

【題義】歸州滯在中の漢中王のお手紙を頂戴したことについてのべた詩。大曆元年秋、夔州にての作。

【詩意】我が唐の天下は乾坤の大さの地域を領有してゐるが、王はその大唐の天子の叔父たる尊位にをらるるお方である。王は蓬州の刺史として蜀道にこられ、おかへりの路は荊門の路すぢをお取りになる。峽は險しくて舟の通ふに峻しくあり、江水は長く奔つて海にそそいでゐる。途中地元の主人役たる歸州の刺史がこの上客をおひきとめ申したので名園を得てそこに暑をお避けになつたのである。』これらの樣子は前後の御手紙でおしらせくだされた、同時に美しき食料まで贈與くだされたことはま

ことにありがたいことである。そちらをながめやると絶壁に天雲が浮んでゐる、さだめし華麗なる軒端にそよ吹く風が竹むらをわたつてゐることであらう。もはや夜もだんだん永くなつてゐるから風浪の起るおそれもなく、舟旅も御安全でありませう。京師の朱邸へのお入りはさだめし冬の雪のころで、そのころ紫微垣にそうて御參朝になることでござりませう。』河間王に比すべきあなたのところには禮樂なほ存在してをりまするが、この枚乘は文章の才も老衰いたしました。王は宋玉の宅で秋を悲しんでをられませうが、わたくしは武陵の仙境にゆくに路を失つてをりまする。おたがひに崖壁の口もとで逗留して東西石根を異にしてをりまする。一歩ふみだせば蠻夷の言語でなにがなにやらわからず、朝となく昏となく倚りそうてをるものはただ鬼物である。』わたくしはあなたに對しては犬馬が主人をこふる樣なしたはしさをもつてをりまする。あなたをむかし迫害した狐狸の輩はいまはかれこれ申すことはござりませぬ。あなたが御歸朝になつてゆつたりと天子への上奏の文でもおしたため了りになりました際には、このわたくしがかつてごいつしよに酒樽のおあひてをしたことをお忘れくださらぬ樣におねがひいたします。』

返照

(一)楚王宮北正黃昏。　楚王の宮北正に黃昏なり、
白帝城西過雨痕。　白帝城西過雨の痕あり。
返照入江(二)翻石壁。　返照江に入りて石壁を翻へし、
歸雲擁樹(三)失山邨。　歸雲樹を擁して山邨を失す。
衰年病肺惟高枕。　衰年肺を病へて惟だ枕を高うす、
絕塞愁時(四)早閉門。　絕塞時を愁へて早く門を閉づ。
不可(五)久留(六)豺虎亂。　久しく豺虎の亂に留まる可からず、
(七)南方實有(八)未招魂。　南方實に未招の魂有り。

【字解】【一】楚王宮　巫山縣西北にあり、已にしばしば見ゆ。此句は大局よりしてのぶ、宮がまぢかに在るにはあらず。【二】翻石壁　江波動くによりて倒映せる石壁の飜翻せらるるをいふ。【三】失　見えなくなるをいふ。【四】早閉門　盜賊の侵入に備ふるなり。【五】久留　久留は滯留。【六】豺虎　盜賊をいふ。【七】南方　夔州をさす。【八】未招魂　宋玉に「招魂賦」あり、酒饌を設けて屈原が魂を招きて楚都にかへらしめんとせり。未招の魂とは都へ招き回へされざる魂の意にて、自己の旅魂をいふ。

【題義】夕日のてりかへしのをりに感ぜしことをのぶ。大曆元年夔州西閣にての作。

【詩意】楚王の宮北がちやうど黃昏になり、白帝城の西にとほり雨の痕がのこつてゐる。夕日のてりかへしが江波に入りこんでこれがため岸べの石壁の影があふりたてられる、歸りゆく雲が樹木をつつんで山べの村が見えなくなつた。自分は老衰の年になつて肺の病氣あるためただ枕を高くして臥し、僻地の塞にあつて時世の危險をおもうてなるたけ早く門をしめてしまふ。南方にまだ京師へよびかへされぬ我が魂が有るがどうしていつまでこんな盜賊のさわぎのあるところに逗留してをることができ

ようぞ、はやくかへりたいものだ。

晴二首

（一）久雨（二）巫山暗。新晴錦繡文。
碧知（三）湖外草。紅見（四）海東雲。
（五）竟日鶯相和。（六）摩霄鶴數羣。（七）
野花乾更落。（八）風處（九）急紛紛。

晴　二首

久雨巫山暗し、新晴錦繡の文あり。
碧は知る湖外の草、紅は見る海東の雲。
竟日鶯相和す、摩霄鶴數羣す。
野花乾いて更に落つ、風處急にして紛紛たり。

【字解】〔一〕久雨二句　卽ち「雨晴」詩の雨時山不改、晴罷峽如新と同意。〔二〕巫山　卽ち巫峽、巫山縣東三十里にあり。〔三〕湖　洞庭湖をいふ。〔四〕海　東吳の海をいふ。〔五〕竟日　盡日。〔六〕和　和して鳴く。〔七〕羣　むれを成すをいふ。〔八〕風處　風の吹くところ。〔九〕急　花の落つることの急なるなり。

【題義】あまばれのさまをのべた詩。大曆元年春、夔州にての作。

【詩意】ながく雨がふつてゐると巫山は暗つぽいが、あらたに晴れると山には錦繡の様なうつくしい文があらはれる。碧草の色をみては湖南の草の色亦かくのごとくなるべきを知り、紅雲の色を見ては海東の雲の色亦かくのごとくなるべきを見る、（東遊を思ふによりてかく想を馳するなり、）日いつぱい鶯は啼きかはし、霄を摩らんばかりに高く舞ひあがりて鶴はしばしば羣をなす。野草の花は乾き枯れては落ち、風の吹くあたりには紛紛としてその落つることが急である。

〔二〕

啼鳥爭引子。鳴鶴不歸林。
下食（一）遭泥去。高飛（二）恨久陰。
雨聲（三）銜塞盡。日氣射江深。
回首（四）周南客。（五）驅馳（六）魏闕心。

〔二〕

啼鳥爭ひて子を引く、鳴鶴林に歸らず。
下食泥に遭ひて去る、高飛久陰を恨む。
雨聲塞を銜くこと盡き、日氣江を射ること深し。
首を回らす周南の客、驅馳にも魏闕の心あり。

【字解】〔一〕下食　うへよりくだりて食す、此句は「啼烏」の句を承く。〔二〕高飛　此句は「鳴鶴」の句を承く。〔三〕銜塞盡　雨ふれば雨聲塞をつくも晴れし故につくこと無くなる。〔四〕周南客　「史記」太史公自序に、太史公留滯周南の語あり、太史公は司馬遷が父談をさす、周南は洛陽をさす、これ單に字面をかりて、作者自ら周南の客と稱せり。〔五〕驅馳　驅馳に同じ、諸處を奔走するをいふ。〔六〕魏闕心　中山の公子牟が曰く、身は江湖の上に在り、心は魏闕の下に居ると。「莊子」、「呂氏春秋」等にみゆ。魏闕は宮門の左右兩闕、闕はわきの小門、魏闕の心とは心が宮門より離れざるをいふ。

【題義】この第二首は晴時の感慨をのぶ。

【詩意】啼く烏が爭うて子を引きつれ、鳴く鶴は林にかへらぬ。烏はおりてきて食を求めようとするが泥にさまたげられて去つてしまふ、鶴はあまりいつまでもくもつてゐるのを恨んでどこへか高く飛んでいつてしまふ。（それが晴れたので）塞を銜かんばかりの雨のおとはなくなつたし、太陽のひかり

は深く江のなかまで射こんでゐる。このとき洛陽の人にして他郷に客となつてゐる自分ははるかにかうべを北方にめぐらし、いかに奔走の身のうへにあつても宮門を戀ふる心をうしなはずにゐる。

雨

雨

始賀天休雨。還嗟地出雷。　始めて賀す天雨を休むるを、還た嗟く地雷を出すを。

驟看浮峽過。密作渡江來。　驟なるは看る峽に浮びて過ぐるを、密なるは江を渡りて來るを作す。

牛馬行無色。蛟龍鬬不開。　牛馬行くも色無し、蛟龍鬬ひて開けず。

干戈盛陰氣。未必自陽臺。　干戈には陰氣盛なり、未だ必ずしも陽臺よりせず。

【題義】雨についてのぶ。大曆元年夔州にての作。

【詩意】やつと天が雨をふらすことをやめたといはうてゐたところ、また地から雷がでてくるとはなさけないことだ。いかにこの雨がにはかにきたかはそれが峽に浮んですぎゆくをみればわかるし、又いかにそれが密集して江を渡つて來ようといふ樣子をしてをるか。この雨がかきくもらしてをると牛や馬があるいてゐても色がわからぬ。蛟龍のたぐひはたたかひをしてほどけようとはしない。人が干戈を動かして兵亂のあるときは陰氣が盛でおのづと雨がふるものだ、必ずしも雨は陽臺からばかりおこるものとはかぎらぬ。

殿(一)中楊監見示張(二)旭草(三)書圖

殿中楊監　張旭が草書圖を示さる

(四)斯人已云亡。草(五)聖祕難得。　斯人已に云に亡し、草聖祕得難し。

(六)及茲煩(七)見示。滿目一悽惻。　茲に示さるるを煩はすに及びて、滿目一に悽惻す。

悲風生微(八)綃。萬(九)里起古色。　悲風微綃に生ず、萬里古色起る。

鏘鏘鳴(一〇)玉動。落落羣(一一)松直。　鏘鏘鳴玉動く、落落羣松直し。

(一二)連山蟠其間。溟(一三)漲與筆力。　連山其の間に蟠まる、溟漲筆力を與ふ。

(一四)有練實先書。臨池眞盡墨。　練有れば實に先づ書す、池に臨みて眞に盡く墨にす。

(一五)俊拔爲(一六)之主。暮年思(一七)轉極。　俊拔を之が主と爲す、暮年思轉た極まる。

未知張(一八)王後。誰竝(一九)百代則。　未だ知らず張王の後、誰か百代の則を竝ぶる。

嗚呼東(二〇)吳精。逸(二一)氣感清(二二)識。　嗚呼東吳の精、逸氣清識を感せしむ。

楊公拂篋笥。舒卷忘寢食。　楊公篋笥を拂ふ、舒卷寢食を忘る。

念昔揮毫端（二三）。不獨觀酒德（二四）。』　念ふ昔毫端を揮ひしを、獨り酒德を觀るのみならず。』

【字解】【一】殿中楊監　殿中楊某、殿中監は天子の服御の事を掌る官。【二】張旭　作者同時の草書の名人。卷二の七八頁飲中八仙歌をみよ。【三】草書圖　草書に圖といふは王羲之の筆陣圖のごときものかと「杜臆」にはいへり。【四】斯人　旭をさす。【五】草聖　後漢の張芝、字は伯英、韋仲將之を草聖といへり。【六】及茲　茲はいまここにの意。【七】煩見示　てかずをかけてみせてもらふ。以上起四句は書を見て感じたるをいふ。【八】微茫　剝蝕なる縁りかたのきゑ。【九】萬里　遠地よりといふほどの意。【一〇】鳴玉動　仇注にいふ、書の疾徐のさまをいふと。【一一】落松直　仇注にいふ、書の蒼勁なるをいふと。【一二】連山　仇注、書の起伏のさまをいふと。【一三】側塞　仇注、書の浩瀚なるさまをいふと。以上「悲風」以下六句は書法の神妙なるをのぶ。【一四】有練・臨池二句　張伯英はその家の衣帛は必ず先づ書してのち之を染練す、又池に臨みて書を學ぶに、池水ことごとく黑しといはる。【一五】俊拔　筆力のひいでて羣をぬくをいふ。【一六】羲之主　書法の主眼となす。【一七】思轉極　書に對するかんがへが極致にいたる。【一八】張王　後漢の張芝（伯英）と晉の王羲之と。【一九】百代則　則は法則、標準。以上「有練」六句は、旭が書法造詣の深きをいふ。【二〇】東吳精　張旭は吳郡の人なり、（當時「太湖の精」の名ありしと、精とは精靈なり。【二一】逸氣　旭が書のすぐれた氣。【二二】清識　楊監の鑒識。【二三】念昔　旭の生存時をいふ。【二四】酒德　酒量といふほどの意。旭が酒を好みしこと八仙歌をみて知るべし、末六句は楊監の賞鑒と自己の感慨をのぶ。

【通義】殿中監楊某が張旭の草書圖をみせてくれたことをよんだ詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】張旭が死んでしまつてからは草聖とよばれた張伯英の祕傳は得がたいのだ。いま幸に楊君のおかげで旭が筆蹟をみせてもらつたので、みるなり、胸中全く悽惻の情にたへぬのである。』書をひろげると、悲しさうな風が絹の面に生じ、はるかな遠方から古色が起つてくる。書風をみると、その進退疾徐のさまは鏘鏘として人のあるくときの鳴玉のおとがうごくがごとく、その蒼勁なるところは落落不羣に多くの松がまつすぐに立てるがごとく、その起伏せる勢は連山がその間にわだかまれるがごとく、その浩大なるところはひろ海のうしほが其の力を與へたるかのごとくにおもはれるのである。』旭は（昔の張芝の樣に）練がありさへすれば先づ之に書きつけ、池に臨みては池水ことごとく墨に化してしまつた。彼の書は俊拔といふことを主眼とし、その晩年にはかんがへがいよいよその極致に達した。張芝と王羲之とが死してのちは旭に非ずしてだれが彼等と百代の標準を竝べうるものがあるかわからぬ。』ああ、旭は東吳の精靈で、その高逸の氣が楊君の鑒識をうごかした。それで楊君はこのほこりをうち拂うて旭が書をくりひろげたり卷いたりして寢食を忘れてをられる。自分もそれにつけてむかし旭が毫さきを揮つたことをおもひうかべる、ただに彼に於て酒量を觀たにはとどまらぬのである。』

楊監又出畫鷹十二扇（一）

楊監又畫鷹十二扇を出だす

近時馮紹正（二）。能畫鷙鳥（三）樣。　近時馮紹正、能く鷙鳥の樣を畫く。

明公（四）出此圖。無乃傳（五）其狀。　明公此の圖を出だす、乃ち其の狀を傳ふるなる無からむや。

(六)殊姿各獨立、清(七)絕心(八)有向、
殊姿各〻獨立す、清絕心向ふこと有り。

(九)疾禁千里馬、氣敵萬人將。』
疾きことは千里の馬に禁らむ、氣は萬人の將にも敵す。』

憶昔驪(一〇)山宮、冬(一一)移含(一二)元仗。
憶ふ昔驪山宮、冬含元の仗を移す。

天寒大羽(一三)獵、此(一四)物神(一五)俱王。
天寒くして大に羽獵す、此の物神俱に王なり。

當時無凡(一六)材、百(一七)中皆用(一八)壯。
當時凡材無し、百中皆壯なるを用ふ。

粉(一九)墨形(二〇)似間、識(二一)者一惆悵。』
粉墨形似の間、識者一に惆悵す。』

干戈少暇日、眞(二二)骨老崖(二三)嶂。
干戈暇日少し、眞骨崖嶂に老ゆ。

(二四)爲君除(二五)狡兎、會(二六)是翻(二七)韝(二八)上。』
君が爲に狡兎を除く、會ず是れ韝上に翻へらむ。』

【字解】【一】十二扇　浦氏曰く、扇とは屏障の類ならんと。【二】馮紹正　「歷代名畫記」に曰く、馮紹正、開元八年に戸部侍郎となる。善く鷹鶻雞雉を畫き其の形態を盡くす、觜眼脚爪毛彩俱に妙なり、嘗て禁中に於て五龍を畫く、堂に降雲蓄雨の感ありしと。【三】鷙鳥　猛鳥。【四】明公　楊監をさす。【五】傳其狀　馮紹正が畫のさまを傳へる、馮畫の模寫なるをいふ。【六】殊姿　ちがつたすがた。【七】清絕　畫鷹の神氣のすみきつてゐるをいふ。【八】心有向　鷹の心が或る目的に向つてゐるをいふ。【九】疾禁　疾は「はやき」こと、禁は禁當なり、あたる、たへる。起八句は畫鷹の神儁なるをいふ。【一〇】驪山宮　華清の溫泉宮をいふ。【一一】冬移　玄宗が冬十月になるとこの宮へひきうつる。【一二】含元仗　含元は殿の名、唐の東内を大明宮と總稱す、その正殿が含元殿なり、仗は儀仗。【一三】羽獵　士、羽箭を負ひてかりするをいふ。【一四】此物　鷹をさしていふ。【一五】神俱王　王は旺盛なり、神は鷹の神氣、俱とはすべての鷹みな共にの意。【一六】凡材　つまらぬ能力のたか。【一七】百中　弓射の語、百發して矢が百ながらあたること、ここは鷹が獲物をねらつてとりそこなふことなきをいふ。【一八】用壯　鷹の壯なるものを用ひたり。「津陽門」詩の注にいふ、時に申王は高麗の赤鷹あり、岐王は北山の黃鶻あり、逸氣奇姿、特に他等に異なり、上（玄宗）校獵することに必ず駕前に置き、目して決勝兒となせし、と。【一九】粉墨　胡粉、墨色。【二〇】形似　形貌のよく似ること。【二一】識者　識見ある人、「憶昔」以下八句は往事を懷す。【二二】眞骨　眞に生きた鷹をいふ。時に自己をさす。【二三】崖嶂　がけ、やま。【二四】爲君　君は一般人をさす。【二五】狡兎　するいうさぎ、世間の亂賊をさす。【二六】會是　會は「必ず」是とは畫鷹をさす。【二七】翻　畫中の鷹のごときものが飛びだすをいふ。【二八】韝　ゆがけ、革にて作りたる臂衣、鷹師の用ふるもの。末四句は眞鷹の老ゆるを以て活動を畫鷹にのぞむ意をのぶ。

【題義】　殿中監楊君が又十二枚のついたての鷹の畫をだしてみせた。その事をよんだ詩。前詩と同時の作。

【詩意】　ちかごろ馮紹正といふ者が能く猛鳥のさまをゑがいた。いま君がもちだした圖は馮が畫のさまを傳寫したのではあるまいか。非凡な姿が十二枚それぞれ獨立してをり、鷹のすみきつたこころはなにか目的物をねらつてゐる樣だ。この鷹のはやいことは千里の馬にも相當するであらう、鷹の意氣は萬人の大將にも匹敵するであらう。』これにつけておもひだすは冬になると玄宗皇帝は含元殿から儀仗を驪山の華清宮へおうつしになり、天の寒いとき大に獵をあそばされ、すべての鷹が神氣旺盛であつた。その頃は一疋でも凡材が無く、どれも百發百中の能力あるもので勇壯なものばかり用ひられ

た。今粉墨形貌の間に同じ鷹のさまを見ると識者たるもの全くうらめしさの情にたへられぬ。』この頃は兵亂のためにいそがはしい時であり、眞ものの鷹は崖嶂のうちに老いつゝある。だから諸君のために狡兎を除くためには必ずこの畫にある樣な鷹が壯士の韝のうへから躍りだすのであらう。しからんことをのぞむのである。（末四句の解は浦氏による。仇氏はすべて眞鷹のこととし其の老いてなほ用ふべきをいふとして曰く、「眞鷹は崖嶂に老いたが、しかし諸君のために狡兎をのぞくためにはそれがきつと韝上にひるがへつてめざましいはたらきを見せるであらう、」と。）』

送殿中楊監赴蜀見相公　（一）（二）（三）

殿中楊監が蜀に赴き相公に見ゆるを送る

（四）去水絕還（五）波。（六）洩雲無定（七）姿。　去水還波絕ゆ、洩雲定姿無し。
人生在世間。聚散亦暫時。　人生きて世間に在る、聚散亦暫時なり。
（八）離別重相逢。偶然豈足期。　離別重ねて相逢ふ、偶然なり豈に期するに足らむや。
（九）送子清秋暮。（一〇）風物長（一一）年悲。』　子を送る清秋の暮、風物長年悲しむ。』
豪俊貴勳業。邦家頻出師。　豪俊勳業を貴ぶ、邦家頻りに師を出だす。
相公鎭（一二）梁益。軍事無孑（一三）遺。　相公梁益を鎭す、軍事孑遺無し。
（一四）解榻再見今。用才復擇（一五）誰。』　解榻再び今に見ゆ、用才復た誰をか擇ばむ。』
況子已高位。（一六）爲郡（一七）得固（一八）辭。　況んや子已に高位なり、爲郡固辭するを得むや。
難拒供（一九）給費。愼哀漁（二〇）奪私。　供給の費を拒み難きも、愼みて漁奪の私を哀れめ。
干戈未甚息。綱（二一）紀正所持（二二）。』　干戈未だ甚だ息まず、綱紀正に持する所なり。』
（二三）汎舟巨石橫。登陸（二四）草露滋。　舟を汎ぶれば巨石橫はる、陸に登れば草露滋し。
（二五）山門日易夕。當念（二六）居（二七）者思。』　山門日夕なり易し、當に念ふべし居者の思ふことを。』

【字解】【一】殿中楊監　前詩にみゆ。【二】蜀　成都。【三】相公　杜鴻漸をいふ、史を按ずるに、大暦元年二月壬子、黄門侍郎・同平章事・杜鴻漸に命じて成都尹を兼ね、節を持して山南西道・劍南東川等の道の副元帥に充て、仍つて劍南西川節度使に充つ、郭英乂の亂を平げしを以てなり。黄門侍郎・同平章事は宰相なれば之を相公と稱せり。【四】去水　流れ去る水。【五】還波　かへる波。【六】洩雲　もるる雲。飄散する雲をいふ。【七】定姿　一定不易のすがた。「去水」二句は下文の聚散を興す。【八】離別二句　これは「聚」を承く。【九】送子一句　これは「散」を承く、子は楊をさす。【一〇】風物　景色をいふ。【一一】長年　年老のもの、自己をさす。起八句送別をいふ。【一二】鎭梁益　鎭は副元帥・節度使として駐在するをいふ。梁益は蜀地をさす、唐の劍南道は漢代の梁州の域たり、又劍閣より西南地方は漢代の益州の地なり。【一三】孑遺　「詩」雲漢篇に周餘黎民、靡有孑遺とみえ、朱子は之に注して孑は右臂なき貌、遺は餘なり、大亂の後、周の餘民、半身の遺あるもの無しとときたり。此詩句の孑遺は朱注の義にては通ぜず、作者は孑遺を闕遺、遺漏の義として用ひたり。【一四】解榻　後漢の徐穉、高行あり、太守陳蕃之を敬し、穉來れば特に一榻を設く、去れば之を懸く。榻は椅子のこと、解榻とは懸けてある榻の繋繩をほどくをいふ。つまり榻を設け供すること、士を禮遇する

をいふ。【二五】擇誰　誰と疑問にていへども豪俊に外ならぬをいふ。「豪俊」六句は楊が杜に知らるべき期至れるをいふ。【二六】高位　殿中監は從三品の官なれば其位已に高し。【二七】爲郡　郡政をおさむること、唐には郡なくして州あり、これは州の長官たる刺史となることをさす。【二八】得開辟　得の字反語によむ、「いづくんぞ得んや」の意。【二九】供給費　州から節度使の方へ供給する軍費。【三〇】漁奪私　漁奪とは網にて魚をあさりとるごとく民の利をとるをいふ、私とは私利、公費に名をかりて自己の私の利益を計るをいふ。【三一】綱紀　秩序を立てること。【三二】持　維持する。「況子」六句は楊の民を愛し職を盡くすべきをいふ。【三三】汎舟　行者たる楊についていふ。【三四】登陸　送者居者たる自己についていふ。【三五】山門　自己の家の門をいふ。【三六】念　楊がおもふ。【三七】居者思　居者はとどまりて居るもの、自己をさす、思は楊を思ふこと。末四句は別情をいふ。

【題義】殿中監楊某が成都に赴いて杜相公(鴻漸)に面會しようとするのを送つた詩。大曆元年秋、夔州にての作。

【詩意】ゆく水にはかへる波がない、洩れだす雲には一定の姿がない。たとへばその樣に人がこの世に生存してゐるときにはその聚つてゐるのも散らばるのもただしばしのものである。わかれてから重ねてであふこともあることはあるがそれは偶然のことであてにはならぬことだ。いま自分は淸秋の暮にあたつておまへの旅立ちを送る、あたりの景色をみると老年の自分はどうも悲しくてならぬ。』いま國家はしきりに軍隊を出してゐる、豪傑たるものはこの時に勳業を立つるを貴ぶ。杜相公は梁益地方を鎭撫せられて軍事に手ぬかりなく、榻を設けて士を禮遇さるることが今日再び見らるる樣になつたのだ。この人が人才を用ひらるるにあたつてはおまへの樣な豪傑をおいてだれをえらぶものか。』ましておまへはすでに高位にのぼつた人だ。州の刺史となつて郡ををさめよといはれてそれを辭退することはできまい。官につけば長官から軍費を供給せよといはるればそれを拒むことはむづかしからうが、きをつけて哀憐の情をもつて上司が私利の目的で人民から利益を奪ひとることをふせがねばならぬ。まだ兵亂がやまぬのであるから今が綱紀の維持し時なのである。』おまへは舟をうかべてゆくと前途に巨きな石が橫はつてゐる。自分は見送りからかへつて陸にのぼると草の露がしげくおいてゐる。山家の門の日はゆふぐれになりやすい、おまへも亦旅先きからここにゐのこつてゐる自分が如何におまへを思うてゐるかを念うてくれてゐるはずだ。』

贈李十五丈別(一)

李十五丈に贈りて別る

峽人鳥獸居(二)、其室附層巓。
峽人は鳥獸のごとく居る、其の室層巓に附く。

下臨不測江(三)、中有萬里船。
下は不測の江に臨む、中に萬里の船有り。

多病紛倚薄(四)、少留改歲年(五)。
多病紛として倚薄す、少留すれば歲年改まらむとす。

絕域誰慰懷(六)、開顏喜名賢(七)』
絕域誰か懷を慰めむ、開顏名賢を喜ぶ。』

孤陋(八)忝末親(九)、等級(一〇)敢比肩。
孤陋末親を忝くす、等級敢て肩を比せむや。

人生意氣合。相與襟(一一)袂連。　人生意氣合す、相與に襟袂連る。
一日兩遣(一二)僕。三日一共筵。　一日兩び僕を遣はす、三日に一たび筵を共にす。
(一三)揚論展(一四)寸心。壯(一五)筆過(一六)飛泉。　揚論寸心を展ぶ、壯筆飛泉に過ぎたり。
(一七)玄成美價存。子(一八)山舊(一九)業傳。　玄成美價存す、子山舊業傳ふ。
(二〇)不聞八(二一)尺軀。常受衆(二二)目憐。　聞かずや八尺の軀、常に衆目の憐みを受くるを。
且爲辛苦行。蓋被生(二三)事牽。　且つ辛苦の行を爲す、蓋し生事に牽かる。
(二四)北迴白帝棹。南(二五)入黔陽天。　北白帝の棹を迴らし、南黔陽の天に入る。
(二六)汧公制(二七)方隅。【原注】汧公李勉也。宗室鄭恵王孫。　汧公方隅を制す、
迴出諸侯先。　迴に諸侯の先に出づ。
(二八)封內如(二九)太古。時危獨蕭然。　封內太古の如く、時危けれども獨り蕭然たり。
(三〇)清高金(三一)掌露。正直朱(三二)絲絃。　清高なることは金掌の露、正直なることは朱絲の絃。
(三三)昔在堯(三四)四岳。今之黃(三五)潁川。　昔在堯の四岳にして、今の黃潁川なり。
(三六)于邁恨不同。所(三七)思無由宣(三八)。　于邁同じからざるを恨む、所思宣ぶるに由なし。

(三九)山深水增波。解(四〇)榻秋(四一)露懸。　山深くして水波を增す、解榻秋露懸る。
(四二)客遊雖云久。主(四三)要月(四四)再圓。　客遊久しと云ふと雖も、主は要む月の再圓なるを。
晨集風(四五)渚亭。醉(四六)操雲(四七)嶠篇。　晨に集まる風渚の亭、醉うて操る雲嶠の篇。
丈夫貴知(四八)己。歡罷念歸(四九)旋。　丈夫知己を貴ぶ、歡罷みて歸旋せむことを念ふ。』

【字解】【一】李十五丈　丈は年長者に對する敬稱、李十五は卽ち祕書文嶷なり、前に「奉寄李十五祕書文嶷」二首の詩あり。【二】鳥獸居　鳥獸のごとくに棲居す、卽ち「雨」詩の殊俗狀巢居の意。【三】不測江　はかられぬほど深き江。【四】倚薄　よりせまる。【五】改歲年　改とは改易、但しかはつたといふに非ず、かはらんとするをいふなり、春來りて秋となり暮に近づく故に、かくいへり。【六】開顏　破顏の類、已の愁顏のしわをのばすこと。【七】名賢　李をさす。起八句は夔州にありて李と逢ふを喜ぶをいふ。【八】孤陋　たすけなくみすぼらし、自己の不才をいふ。【九】忝末親　親戚のはしくれをけがす。作者の外祖父崔某の妻も母も竝に宗室の出身なれば、文嶷と遠姻なるべし。【一〇】等級　身分の階級。【一一】襟袂連　同席するをいふ。【一二】遣僕　李が僕をよこす。【一三】揚論　議論を聲高くいふ。【一四】展寸心　作者自己の心を自由にひろげていふ。【一五】壯筆　李の壯な文筆。【一六】過飛泉　敏捷なるをいふ。【一七】玄成　漢の韋玄成、前の奉寄二首の後篇にも玄成負文彩の句ありたり、李に比す。【一八】子山　北周の庾信、字は子山、初め父肩吾と共に梁に仕へ抄撰學士となる、これ亦李に比す。【一九】舊業　昔の業、業とは文筆の事をさす。【二〇】不聞　豈不聞なり。【二一】八尺軀　奉寄二首の後篇にも衣冠八尺身とあり、李は偉軀の人なりしならん、又「北史」庾信傳に信を記して、身長八尺、腰帶十圍といへり。【二二】衆目　衆人の目、以上「孤陋」十二句は李との交誼と李の才學をのぶ。【二三】生事　生計上の事情。【二四】北迴白帝棹　迴とは南へふりむけるをいふ、白帝は夔州の白帝城をいふ。【二五】南入黔陽天　「明一統志」を按ずるに曰く、重慶府彭水縣（縣は清朝にては酉陽州に入る）もと漢の武陵郡の酉陽縣の地たり、孫吳より

隴にいたるまで並に黔陽縣の地たり」と。之によれば李は西陽州を經て沅水の流域に出で湘南より江西に入るものとみゆ。彭水は夔州よりいへば西南にあたるを以て「南」といへり。【二六】汧公　原注に見ゆる如く汧國公李勉をいふ、錢氏の箋に曰く、勉は肅宗の初、隴州都督となり、後河南尹を經て江西觀察使に徙り、大暦二年に入朝す、と。又史によれば勉は大暦四年に嶺南節度使となり七年歸りて工部尚書となり汧國公に封ぜらるといへり、七年は作者死後の事なり、而して此詩旣に汧公とあれば封は公の生前にありしなり。【二七】制方隅　一方の邊隅を制馭する、黄鶴曰く、時に勉、江西觀察使たりと、江西の治所は洪州(今の江西省南昌府)なり。【二八】封内　領分の内、江西の地。【二九】如太古　無事にして治まるをいふ。【三〇】清高　李勉の人品をいふ。【三一】金掌　金莖の仙人掌の露なり、漢の武帝、銅柱・承露仙人掌の局を作る。高き銅柱（即ち金莖）の上に盤を戴き仙人像ありて掌に天の露を承く。この露を以て玉屑に和して飲めば長生しうべしと考へたるなり。此詩句はただ露の清らかさを以て人物の清高に比せしなり。【三二】朱絲柱　鮑照が「白頭吟」に直如朱絲繩、淸如玉壺氷」とみゆ。【三三】昔在　在昔と同じ。【三四】嵩四岳　嵩の時、四方の諸侯に牧(諸侯のとりしまり)を設く。【三五】黄潁川　漢の黄覇、潁川の太守となりて治績あり。以上「且喜」十二句は李文嶷が行役するわけをいひ、兼れて李勉の治行をほめたり。【三六】予遷　ゆき、ゆく、行役すること。【三七】所思　胸中のおもひをいふ。【三八】宜　のぶる、外部にいだすをいふ。【三九】山・水　文嶷經過する地のそれをいふ。【四〇】解攜　前詩に說明しおけり。ここは李勉が文嶷のために觴を設けて餞するをいふ。江西の地なれば特に故事の用法適切なり。【四一】秋露懸　懸は垂れかかるをいふ。此語は節候をいひしなり、此一句は文嶷の江西への到着後をいへり。【四二】客遊　文嶷の客として遊歷すること。【四三】主要　主は主人、李勉をさす。要は要求、(「主要」或は「赤思」に作る、赤思ならば作者が之を想像するをいふ。)【四四】月再圓　二箇月の期間、これは文嶷が夔州より黔陽を經て江西に往來する大凡の時日をいふ。必ずしも其の久しきに非ざるをいふ。【四五】風渚亭　風渚は前の「雨」二首の詩の前篇の「殊俗状巣居、層臺俯風渚」の風渚とおなじく夔州の發船の沙岸のなぎさをいふ。亭は休息所をいふ、此に別宴を設く。【四六】醉操　操は「とる」、とりて吟詠するをいふ。【四七】雲嶠篇　蓋し文嶷留別の詩ありて詩中に雲嶠の文字あるにより、其の作篇をさして雲嶠篇といへり。【四八】知己　彼我二者の關係をいふ。【四九】歸旋　文嶷が夔州へかへりくるをいふ、以上「予遷」十句の末段は別意をのぶ。

【題義】李文嶷が江西觀察使李勉のところへ事を以て赴くのでそれに贈りて別意をのべた詩。大暦元年秋、夔州にての作。

【詩意】峽中の人たちは鳥か獸の樣な住居をする、すなはち其の家の室はたかい山巓に附着してゐるのだ。したの方はいくら深いかはかられぬほどの江にさしかかつてをり、その江中には萬里に赴く船がうかんでをる。自分は多病であつて諸事が雜然と身にせまつてくる、すこしこの地に逗留してゐるうちに歲もかはりかけてきた。この都とはかけはなれた土地でだれが自分のむねのうちをなぐさめてくれるものがあらう、ただあなたの樣な名賢がじぶんの顏のしわをのばしてくれるのをうれしくおもふばかりである。』じぶんはふつつかながらあなたとは親戚のはしくれをかたじけなうしてゐるが身分のちがひはとても肩をならべられるわけのものでないが、人生に於て意氣が投合したとはいへ同席してごいつしよに襟袂をつらねてをる。あなたは一日に二度も僕をわたくしのところへおつかはしくださる、また三日めぐらゐには一ど酒筵を共にいたし、わたくしは高ごゑで議論をして十分じぶんの心をのばし、あなたはわきだす泉にもまさつた雄壯な文筆をおふるひになる。まことあなたは漢の韋玄成のごとくりつぱな價値が存してをられ、また北周の庾子山のごとくその文章の業をつたへられておいでになる。それに諸君きかれよ、そのあなたが堂堂たる八尺のからだをもつて多くの人にきのど

くがられる樣な境遇に居られるのである。』それでこんどしばしなんぎな旅行をなさらうといふのだが、おほかた御生計上の御都合にわづらはされたまうてのことでござらう。あなたはこれから北のかたここの白帝城から棹をむけかへられて、南の方黔陽の天においりになる。今黔國公（李勉）は一方面（江西）の長官となつてはるか他の諸侯より進みでてをられる。公の領内は太古の如く靜かで時世が危險であるにかかはらずそこだけはひつそりとしづかである。公の人物の淸高なことは金莖の露にも比すべく、公の正直なことは朱絲の繩にも比すべきである。昔ならば堯の時の四岳のごとく、今にあつては漢の潁川太守黃霸ともいふべきである。』あなたがそこへおいでになるのに自分はごいつしよにゆけぬのがうらめしい、じぶんのおもひは之を宣べるてだてがない。あなたの前途には山は深く水は波を增してゐる。あなたが江西へおつきになつて黔公の禮遇をうけられるのは秋露の垂れてをるときである。旅にをられることが久しいというたところで主人役（先方、李勉）も二箇月ほどとめてゐるだけなのである。あなたとお別れするため自分はあさ風渚の亭に集ひ、醉後にはあなたのおつくりになつた「雲嶠」の詩篇をとつて吟じてみる。丈夫たるものは互に知己であることを貴ぶのである、酒席の歡びやみてののちはただわたくしの知己であるあなたがはやくここへおかへりにならんことをおもふばかりである。』

種萵苣（一） 幷序　　萵苣を種う 幷に序

既雨已秋。堂下理（二）小畦。隔種（三）一兩席許萵苣。向（四）二旬矣。而苣不甲拆（五）。獨野莧青青。傷時（六）君子。或晩得（七）徵祿（八）。轗軻（九）不進。因作此詩。

既に雨ふり已に秋なり。堂の下に小畦を理め、一兩席許りの萵苣を隔種し、二旬に向ふ。而して苣甲拆せず、獨り野莧青青たり。傷む時の君子、或は晩に徵祿を得て、轗軻進まざること を。因つて此の詩を作る。

陰陽一錯亂（一〇）。驕蹇（一一）不復理（一二）。
陰陽一たび錯亂して、驕蹇復た理あらず。

枯旱于其中（一三）。炎方慘如燬（一四）。
枯旱其の中に于てす、炎方慘燬くが如し。

植物半蹉跎（一五）。嘉生將已矣。』
植物半蹉跎たり、嘉生將に已まむとす。』

雲雷欻奔（一六）命。師伯（一七）集所使（一八）。
雲雷欻ち命に奔る、師伯所使を集む。

指揮（一九）赤白日（二〇）。澒洞（二一）靑光起（二二）。
赤白の日を指揮し、澒洞靑光起る。

雨聲先以風。散足（二三）盡西靡（二四）。
雨聲先つに風を以てす、散足盡く西に靡く。

山泉落（二五）滄江。霹靂（二六）猶在耳。
山泉滄江に落つ、霹靂猶ほ耳に在り。

(二七)終朝紆(二八)颯沓。信宿(二九)罷瀟灑(三〇)。
終朝紆りて颯沓たり、信宿罷みて瀟灑たり。

堂下可以畦。呼童對(三一)經始。』
堂下以て畦すべし、童を呼びて對して經始す。』

苣兮蔬之常。隨(三二)事蓺(三三)其子。
苣兮は蔬の常なり、事に隨つて其の子を蓺う。

(三四)破塊數席間。荷鋤功(三五)易止。
塊を破る數席の間、荷鋤功止み易し。

兩旬不甲拆。空惜埋泥滓(三六)。
兩旬甲拆せず、空しく惜む泥滓に埋めらるるを。

(三七)野莧迷汝來。宗生實於此。
野莧、汝來りて、宗生すること實に此に於てするに迷ふ。

(三八)此輩豈無秋。亦(三九)蒙寒露委(四〇)。
此の輩豈に秋無からむや、亦寒露に委せらる。

(四一)翻然出地速。滋(四二)蔓戸庭毀。』
翻然地を出づること速かに、滋蔓戸庭を毀つ。』

因知邪(四三)干正。掩抑(四四)至沒齒(四五)。
因つて知る邪、正を干す、掩抑沒齒に至る。

(四六)賢良雖得祿。守道不封己(四七)。
賢良は祿を得と雖も、道を守りて己を封せず。

(四八)擁塞敗芝蘭(四九)。衆多盛荊杞(五〇)。
擁塞芝蘭を敗るは、衆多荊杞盛なればなり。

(五一)中園陷蕭艾(五二)。老圃(五三)永爲恥。』
中園蕭艾に陷るは、老圃永く恥と爲す。』

(五四)登於白玉(五五)盤。藉(五六)以如霞綺(五七)。
白玉の盤に登され、藉くに如霞の綺を以てするとき、

莧也無(五八)所施。胡顏(五九)入筐篚(六〇)。』
莧也施す所無きに、胡の顏あつてか筐篚に入る。』

【字解】【一】萵苣　チサ、ニガナ、の類。【二】理小畦　小さなはたけのうねを手入れする。【三】隔種　あひだを多くすかしてうゑる。【四】一兩席許　席一二枚ばかりの面積。【五】甲拆　芽生えがはじける。【六】野莧　野生のヒユ。【七】時君子　現時の德ある人、他人の身のうへの樣に書きなしたれども作者自己のことをいふ。【八】晩得微祿　晩年にすこしの俸祿をうる。【九】轗軻　もと車のなめらかにゆかぬ貌をいふ、因つて人の志を得ざるさまに用ふ。【一〇】錯亂　あやまりみだる。【一一】驕蹇　驕は陽氣のたかぶるをいふ、蹇は陰氣の屈してのびざるをいふ。【一二】不復理　理は當理にしたがふをいふ。【一三】炎方　南方をいふ。【一四】燄　やく。【一五】嘉生　嘉き穀類をいふ、起六句陰陽のみだれによりて旱生するをいふ。【一六】奔命　師伯の命令のために奔走する。【一七】師伯　雨師、風伯。【一八】集所使　所使とは卽ち雲・雷をさす、雲雷は雨師風伯に使役さるるものなり。【一九】指揮　さしづする。これはさしづしてひつこませしをいふ。【二〇】赤白日　赤白は日光の色。【二一】滃洞　雲氣のもやくやとした貌。【二二】青光　電光の色。【二三】散足　ちらばりし雨脚、謝朓が詩に森森散雨足の句あり。【二四】西靡　西へとなびく、東風とみゆ。【二五】落滄江　滄江の如く落つるをいふ、滄江はひろき江。【二六】霹靂　いなづまの音。【二七】終朝　あさぢう。これは初めの降雨の翌朝をいふならん。【二八】紆颯沓　颯沓は風の吹くさま、紆とはめぐるなり、ゆるく吹くをいふ。【二九】信宿　宿は一宿、信は再宿なり、信宿にて二た晩をいふ。【三〇】罷瀟灑　雨やみてさつぱりとした。これは第三日めのあさ雨やみしをいふならん。【三一】對經始　對とは我と我とむきあふこと、經始は度りはじむるなり、語は「詩」靈臺に出づ。ここは卽ち序の畦を理むることをさす、以上「雲雷」十二句は雨降りて畦を治むるをいふ。【三二】隨事　事のついでに。【三三】蓺其子　蓺は「うゑる」、子は「み」「たね」。【三四】破塊　つちくれをこはす、つちを動きかへすをいふ。【三五】功易止　易止とは畢りやすしの意。【三六】泥滓　滓は「かす」。【三七】野莧迷汝來、宗生實於此　迷とは吾之にまよふをいふ、迷の字下句までへかかり、餘意更に戸庭毀までに及ぶ、汝は莧をさす、宗生は本家のあるじがほして生えてゐること、文字は吳都賦にみゆ、此とは苣畦をさす。【三八】此輩　野莧をさす。【三九】亦　苣とともにこれもまたの意。【四〇】委　まかす、ゆだね。【四一】翻然　「かへつて」の意。【四二】滋蔓　しげりはびこ

る。以上「苣兮」十二句は苣そだたず莧のはびこれるをのぶ。【四三】邪干正　干は「をかす」。【四四】掩抑　おさへつける。【四五】沒齒　齒は年齒、沒齒は沒世のごとし、一生涯をいふ。【四六】賢良　よき人、序にいふ君子。【四七】封己　「國語」に出づ、封は厚くするなり、自分だけに利益をもりあげるをいふ。【四八】擁塞　ゆくてをかかへ、路をふさぐ。【四九】芝蘭　香草なり。【五〇】荊杞　いばら、くこ、雜木なり。【五一】中園　園中におなじ。【五二】蕭艾　よもぎの類、雜草なり。【五三】老圃　はたけつくりに老練な人。以上「因知」八句は邪、正をなかし、雜草雜木の美草美木を害するをいふ。【五四】登於　苣をのぼすとみるか、莧をのぼすと見るかは說の分るる所なり、下をみよ。【五五】白玉盤　盤は大皿。【五六】藉　しく。【五七】如霞綺　かすみの様なあやぎぬ。【五八】無所施　用ふべき所なし。【五九】胡顏　曹植が上ニ責躬應詔詩一表に、恐レ垢ニ苟全一、則犯ニ詩人胡顏之譏一また殷仲文が解ニ尙書一表に臣亦胡顏之厚、可ニ以顯居一榮次一とみゆ。李善、之に注して「詩」相鼠篇の人而無レ禮、胡不ニ遄死一を引き、胡は何なり、毛詩は謂ニ何顏而不ニ速死一也といひ、之を胡顏の出典とせり。胡顏とは爾來厚顏、恥知らず、の義に用ひらる。【六〇】筐篚　かご。筐篚と盤との關係は先づ筐篚にしられ、つぎに盤へとらるるなり。登於白玉盤以下四句、仇氏は邪つひに正に勝つ能はざる義とせり、浦氏は之に反して莧の厚顏無恥なる正類一空せらるる義とせり。余は浦說に從ふ。各〻の解は詩意にいだす。

【題義】　チサ菜をうゑた詩。すでに雨がふつて秋にもなつたので、堂下に小さな畠のうねを手入れして席一二枚がほどのチサを間を隔ててうゑ、かれこれ二十日ばかりになるが、チサは芽がはじけず、野生のヒユだけが靑靑としげつてゐる。之をみて自分は今時の君子が晩年になつてすこしの俸祿を得て不遇の境に居て榮進しないのと似てゐることを傷ましくおもうて此の詩をつくつた。大曆元年秋、夔州にての作。

【詩意】　陰陽の二氣がひとたび錯亂して二氣ののびかたとちぢみかたとの工合が理路にあはなくなつた。かかるあひだから旱や物の枯れ死することがおこつて南方はそのあつさのひどいこと火でやきつける様だ。植物はなかばはだめになり、他の穀物もまさになくならうとしてゐる。』そこへ雨師・風伯がじぶんの使役するもの卽ち雲や雷をかり集めたので雲雷は忽ちその命令に從つて奔走しだした。赤く白くかがやいてゐた太陽はさしづして之をひきこませてしまひ、もやくやとした雲氣のなかに靑い光（電の）がおこりだした。先づ風が吹きだす、つづいて雨の聲がする、ちらばる雨足は吹きつけられてすつかり西の方へとなびく。山からあふれだす泉は大きな江が落ちてくるかとあやしまれる、それでもいなづまのひびきはまだやまず耳にはいる。つぎの日の朝は朝いつぱい風がゆるく吹きめぐつた。二晩たつと雨はやんでさつぱりとしてしまつた。この時こそは堂下に畦をこしらへるべき時だから童を呼んでそれと向きあひになつてうねつくりをした。』苣は野菜の平凡なもので別段の工夫のいるわけもなく事のついでに子をまくだけのことだ。それから二三枚の席ぐらゐのひろさの土地で鋤でもつてつちくれをこまかにくだく、鋤を荷うてはたらく仕事もぢきに了りやすいのだ。それがどうしたのか、二十日たつてもチサの芽がはじけず、惜しくもいたづらにそれが泥かすに埋められてをる。野生の莧よ、なんで貴様がよそからここへ來てチサの場所で本家がほして生えてゐるのかに自分は迷ふ。莧の奴等でも秋の節が無いわけではない、秋になりさへすれば寒露に身をまかせて枯れるのであるが、それがかへつてこんなに早く地面からとびだしてきてしげりはびこつて戶庭までを毀すにいた

つてはあきれてしまふ。』この草のことから自分はかく知る、邪なるものが正を干すときは正なるものは掩抑へつけられて生涯うかぶせがない、賢良なものは祿を得ても道を守つて自分だけに利益を增す樣なことはせぬ、（だから邪人に壓せられてゐる）。芝蘭の香草がでるべき路をつつみふさいでそれをそこなふのは荊や杞が多く蔓つて盛になるからである。園のなかが蕭艾に占領されてしまふことは老練な畠師の恥とする所である。』（わるい草はかくにくむべきものだのに）君の前にもちだすときに何がすすめられるか、にくむべき莧だ、彼莧は白玉の盤に登され、藉きものとしては霞の樣にうつくしい綺をもちひられる。そんなものにいれられても莧といふものはなにもつかひみちのないものであるのに、なんのためか彼は無恥にも筐筥にはいつて知らぬ顏をしてをるのである。慨歎にたへぬ。』（仇注の意は下の如し、「わるい草は一時はよい草を屈せしめてもながくはつづかぬ、だから）苣こそは霞の樣な綺をしたじきとして白玉の盤に登されるが、そのときには莧の如き惡草は何も施用さる所がないから、筐筥に入るべき面目さへもたぬのである。」

白帝

白帝城中雲出門。　白帝城中雲門を出づ、

白帝城下雨翻（一）盆。　白帝城下雨盆を翻へす。

高江（二）急峽雷霆（三）鬭。　高江急峽雷霆鬭ひ、

翠（古）木蒼藤日月昏。　古木蒼藤日月昏し。

戎馬不如歸馬（四）逸。　戎馬は如かず歸馬の逸するに、

千家今有百家（五）存。　千家今百家の存する有り。

哀哀寡婦誅（六）求盡。　哀哀寡婦誅求され盡くす、

慟哭秋原何處邨。　慟哭す秋原何處の邨に。

【字解】【一】翻盆　盆は「たらひ」、翻盆とは盆中の水をぶちまけるなり。【二】高江　地形の高處にある江。【三】雷霆鬭　仇氏水聲の譬喩となせども實景とみるべし。【四】歸馬逸　歸馬は耕地にかへりてある馬をいふ、周の武王は放牛於桃林之野、歸馬於華山之陽。逸は氣樂なるさまをいふ。【五】百家存　家數減じたるをいふ、死亡流移のためなり。【六】誅求　税金をはたられること。

【題義】夔州の人民の困窮に同情してよんだ詩。題の白帝二字は詩句の首二字を切りとりて用ふ。大曆元年秋の作。

【詩意】白帝城の城門のなかから雲がわきだす、城の下では雨がたらひの水をぶちまけた樣にふる。高處の江、急峻の峽には雷霆がたたかうてをり、古木や蒼藤のしげみに日月もくらくなつてゐる。まだ戎馬がさわいでゐるがそれよりも歸耕してゐる馬の方がのんきでよいではないか。もと千戸もあつた家は今は百戸だけのこつてをる。きのどくにもやもめをんなが税金をはたられつくして、秋の野にあるどこかの村で慟哭してゐるのがきこえてゐる。

黄草

（一）黄草峡西（二）船不歸。
（三）赤甲山下人行稀。
（四）秦中驛使無消息。
（五）蜀道兵戈（六）有是非。
萬里秋風吹（七）錦水。
（八）誰家別涙（九）濕羅衣。
（一〇）莫愁（一一）劍閣終（一二）堪據。
聞道（一三）松州已（一四）被圍。

黄草

黄草峡西船歸らず、
赤甲山下人行稀なり。
秦中の驛使消息無く、
蜀道の兵戈是非有り。
萬里秋風錦水を吹く、
誰が家か別涙羅衣を濕す。
愁ふる莫れ劍閣終に據るに堪へたるを、
聞道く松州已に圍まると。

【字解】【一】黄草峡　涪州の上流四十里にありといふ。【二】船不歸　水路阻せらるるためなり。【三】赤甲山　夔州府奉節縣東十五里にあり、已に見ゆ。【四】秦中驛使　長安から朝廷の命令を持ち來る使者。【五】蜀道兵戈　成都の郭英乂・崔旰等の兵亂をさす。【六】有是非　各々曲直あり、崔旰が主將たる郭英乂を殺したるは非なるも、事は郭が崔の姿睢に通じたるより起りしものゆゑ崔のみがあしとはいふべからず、又副元帥杜鴻漸成都に來任して崔が罪を正さず、崔旰に楊子琳・柏茂林に各々刺史防禦の官を授く、是れ皆其事是非あるなり。【七】錦水　錦江、成都にあり、其地を想像してのべたり。【八】誰家別涙　戍卒の留守宅の妻の夫と別離してゐる涙。【九】羅衣　うすぎぬのころも、妻の身につくるもの。【一〇】莫愁　愁ふるなといふにあらず、下の松州の更に愁ふべきに比すれば愁ふるに及ばぬといふなり。【一一】劍閣　劍門、蜀の險要をいふ。【一二】堪據　割據するに十分なり、土地が險なるがために叛者が蜀地に據るなり。【一三】松州　吐蕃に接する地、已に見ゆ。【一四】被圍　吐蕃のためにかこまる。

【題義】成都の亂と松州の圍まれしこととをきてよめる詩。題は詩句の首二字を切り取りて用ふ。大曆元年秋の作。

【詩意】黄草峡の西へでかけた船はかへつてこぬ、赤甲山の下でも人どほりは稀である。都からの使者はさつぱりたよりがなく、成都の兵亂には一曲一直がある樣だ。秋風が遠く彼の地の錦江の水を吹いてゐるだらうか、どこの家で留守居の妻が軍にでてゐる夫をおもうて羅の衣をぬらす涙をそそいでゐるだらうか。ひとは劍閣の險があるため蜀地は割據することができて亂がたえぬのだと心配するがそんなことはむしろ心配するにあたらぬことだ、それ以上に愁ふべきことは松州がもはや吐蕃に圍まれたといふうはさだ。

白鹽山

卓立羣峰外。蟠根積水邊。
（二）他皆任（三）厚地。（四）爾獨近高天。
（五）白牓（六）千家邑。清秋萬（七）估船。
詞人取佳句。（八）刻畫竟誰（九）傳。

白鹽山

卓立す羣峰の外、根を蟠らす積水の邊。
他は皆厚地に任す、爾獨り高天に近づく。
白牓千家の邑、清秋萬の估船。
詞人佳句を取る、刻畫するも竟に誰か傳へむ。

【字解】【一】白鹽山　奉節縣東十七里にあり、已に見ゆ。【二】他　他の山山。【三】任厚地　大地の厚さがまゝにそれに從つてゐる、それより以上に格別に高くならうとせぬをいふ。【四】爾　汝、白鹽山をさす。【五】白牓　牓はふだ、かんばん、崖の白くそびえたるところは白いかんばんと似たり。【六】千家邑　縣の戸數をいふ。【七】估船　あきんどのふね、商船。【八】刻畫　苦心して巧な句をつくる。【九】傳　世間へ傳播させる。

【題義】白鹽山をみてよめる詩。大曆元年秋の作。

【詩意】この山は羣峰のほかにたかく立ち、積水のほとりに根をふんばつてゐる。他の山山は厚地の勢にしたがつてそれとめだたぬが汝（山をさす）ばかりは高い天にもちかづかうとしてゐる。清秋にあたつて水邊には萬艘の商船がういてゐるが、汝はそのそばでここの縣の白看板のごとくにつつたつてゐる。詞人といふものは佳い句を取るものである。自分もよい句をつくらうと苦心して刻畫するがさてできた句は結局だれがそれを知つて世間へつたへてくれようか。

謁先主廟（一）

先主の廟に謁す

慘澹（二）風雲會（三）、乘時（四）各有人。
慘澹たり風雲の會、時に乘ずる各々人有り。

力侔（五）分社稷（六）、志屈（七）偃經綸（八）。
力侔しくして社稷を分つ、志屈して經綸偃す。

復漢（九）留長策（一〇）、中原（一一）仗老臣（一二）。
復漢長策を留め、中原老臣に仗る。

雜耕（一三）心未已、歐血（一四）事酸辛。
雜耕心未だ已まず、歐血事酸辛なり。

霸氣西南（一五）歇、雄圖（一六）曆數（一七）屯。』
霸氣西南に歇む、雄圖曆數屯す。』

錦江（一八）元過楚、劍閣復通秦。
錦江元楚に過ぐ、劍閣復た秦に通ず。

舊俗存祠廟（一九）、空山立鬼神（二〇）。
舊俗祠廟存す、空山鬼神立つ。

虛簷（二一）交鳥道（二二）、枯木半龍鱗。
虛簷鳥道に交る、枯木半ば龍鱗。

竹送清溪月（二三）、苔移玉座（二四）春。
竹は送る清溪の月、苔は移る玉座の春。

閭閻（二五）兒女（二六）換、歌舞歲時（二七）新（二八）。』
閭閻兒女換はる、歌舞歲時に新なり。』

絕域（二九）歸舟（三〇）遠、荒城（三一）繫馬（三二）頻。
絕域歸舟遠く、荒城馬を繫ぐこと頻なり。

如何對搖落（三三）、況乃久風塵。
如何ぞ搖落に對せむ、況んや乃ち風塵に久しきをや。

孰與（三四）關張（三五）竝、功臨耿鄧（三六）親。
孰か關張と竝び、功は耿鄧の親しきに臨む。

應天才（三七）不小、得士（三八）契無鄰。
應天才小ならず、得士契り鄰りなし。

遲暮（三九）堪帷（四〇）幄（四一）、飄零且釣緡（四二）。
遲暮帷幄に堪へたり、飄零且つ釣緡。

向來（四三）憂國淚、寂寞灑衣巾。』
向來憂國の淚、寂寞衣巾に灑ぐ。』

【字解】【一】先主廟　蜀漢の先主劉備字は玄德が廟なり。奉節縣東六里にあり。白帝城の西郊にあたる地なり。【二】慘澹　ものがなしきさま。【三】風雲會　天下に騷亂の起りしをいふ。【四】乘時　時勢をしほにうごきだす。【五】力侔　侔は「ひとし」。魏・吳・蜀、鼎の足のごとく對峙す。【六】分社稷　天下を分つ。【七】志屈　先主晚年吳を征伐せんとして軍敗れて死せり、故に志伸ぶるを得ず。【八】傾經綸　經綸の策がたふれた。【九】復漢　漢の天下を回復せんとせしこと。【一〇】留長策　よきはかりごとを身後にのこす。【一一】中原　黃河地方（魏の地）を奪取せんとすること。【一二】仗老臣　仗は「よる」、老臣は諸葛亮をさす。【一三】雜耕　屯田の兵卒が農民とまじりて耕すこと。諸葛亮北伐して魏の將司馬懿と渭水の南に對陣す、糧食の繼がざらんことをうれへて兵を分ちて屯田し久駐の基となす、耕者渭濱の居民の間に雜はりしも百姓堵に安んじ軍に私なかりしといふ。【一四】歐血　歐は嘔とおなじ「はく」、亮は糧盡き勢窮まり憂憤のあまり血をはき背を燒き逃れ走りて谷に入り、道に病を發して卒したりといふ。【一五】西南　蜀地の方位なり。【一六】遙圖　中原を經略せんとのいさましきくはだて。【一七】曆數屯　曆數は命數といはんがごとし、屯はゆきなやむをいふ。以上起十句は先主の業、諸葛亮の死によりて頓挫せるをいふ。【一八】錦江元過楚、劍閣復通秦　此二句舊注に蜀地の久しからずして司馬晉に合せられしをいふとなし、仇氏亦之に依りたれども首肯しがたし。余は二句は成都にも先主廟あると作者が歸秦の念あるとによりて下の祠廟云云と歸舟云云とをいふ總敍として置きたるものと考ふ。其の結構は古柏行に雲來氣接巫峽長、月出寒通雪山白、の二句を用ひしと相似たり。錦江は成都にあり、成都にも先主廟あり。楚とは夔州の地をさす、劍閣は成都の北にあり、秦は長安、作者の舊鄉なり。【一九】祠廟　即ち題の先主廟。【二〇】鬼神　蓋し先主の神像。【二一】虛簷　さびしきのき。【二二】交鳥道　山崖の高處に在るをいふ。【二三】淸溪　淸は或は靑に作る、登溪と稱する溪にして廟側に流るといへり。【二四】苔移玉座春　苔移とは苔が地面よりして玉座の方へとうつり生ずるをいふ。玉座春は玉座の春にあたりての意。玉座は神床、神像を安置してある臺をいふ。竹送・苔移の二句は、虛描にして現狀の實寫にはあらず。【二五】閭閻　里門、里中の門、附近の村里をいふ。【二六】兒女換　換とは廟置かれし以來つぎつぎと兒女が生れしをいふ、兒女は歌舞を爲す者なり。【二七】歲時　一歲、四時。【二八】新　歌舞が新なるなり。以上「錦江」十句は祠廟の景事をいふ。【二九】絕域　かけはなれた土地、夔州をさす。【三〇】歸舟　長安へかへる舟。【三一】荒城　夔州の城をいふ。【三二】繫馬　廟前に馬をつなぐをいふ。【三三】搖落　秋、木の葉が風にゆられて落つること。【三四】孰與二句　諸葛亮をいひて暗に自ら比す。【三五】關張　關羽・張飛、先主と兄弟の約をなし、のちその臣となりし人。【三六】臨耿鄧親　耿は耿弇、鄧は鄧禹、並に後漢の光武帝の功臣、臨親とはちかきをいふ。【三七】應天才不小　天命に應じて起るほどの大才あるものをいふ。【三八】得士契無鄰　士は傑士、諸葛亮のごときもの。無鄰とは比鄰するもののなきをいふ。先主は亮を得て、孤之有孔明、猶魚之有水といへり、これ近似を許さざる君臣の契りなり。【三九】遲暮　人生の晚暮。【四〇】堪　たふるなり。一說に曰く、登堪にてたへざるをいふなり、と。【四一】幃幄　軍謀に參與すること。【四二】釣緡　つりいとを弄ぶ、漁父のごとき生活をする。【四三】向來　壯年以來の。「遲暮」以下は直接に自己を敍す、以上「絕域」十二句は謁廟の感をのぶ。

【題義】夔州の先主廟に謁したことをよんだ詩。大曆元年秋の作。

【詩意】後漢の末にものがなしくも風雲が集り天下亂れたとき、時勢に乘じてうごきだしたものにそれぞれ其人があつた。蜀の先主は魏・吳と對等の力を以て天下を三分して有つてゐたが晩年に志をのばすことができずにせつかくの經綸をねかしておくことになつた。さうして漢の天下を回復するよいはかりごとを死後にのこしおきて中原の地を謀ることは老臣（諸葛亮）にたよることにした。亮は魏と對陣して農民にまじつて屯田する心はやまなかつたのだが、血をはいて死ぬことになつた、その事たるや悲慘きはまるものである。之がため霸者の氣は西南の地ではやまつてしまひ天下一統の雄圖もその命數ゆきなやみになつてしまつた。』おもふに他にも一つの先主廟のある成都に流るる錦江はもとよりここの楚地（夔州）まで水がとほつてゐるのである。また同じく劍閣は我が故鄉たる秦（長

安）まで路が通じてゐる。ここにも在來から先主の祠廟が存在してをつて、さびしい山に神像が立つてゐる。その廟のさびしいのきばは高く鳥のかよふ道に交はつてをり、庭前の枯木はなかばは龍のごとき鱗をつけてゐる。夏には竹の梢から清溪の月を送りこし、春には神像の臺座まで侵して青苔がうつりのぼる。村里には兒女が次第にあとをついで四季一年のをりをりに新に歌舞をそなへてゐる。』自分はかくかけはなれた地にゐて故鄉へ歸る舟は遠いので、この荒れた城に住み、このやしろへはたびたび馬をつなぎとめる。いま秋の搖落の景に對してどうしてかなしくてみてゐられようか、まして風塵のあひだにながく奔走してゐる身に於てをやだ。そもそも臣下としてはだれが關羽・張飛とならび、その功は耿弇・鄧禹とほどちかくあることができよう。また君としては天命に應じて起るほどの大才あるもの（先主のごとく）にしてはじめて傑士を得れば之と他の接近をゆるさぬ契りを結ぶことができるのである。自分は人生の晩暮にあるがまだ用ひてくれるものがあれば帷幄の謀にあづかることができるつもりだのにおちぶれて釣絲を友としてくらしてゐる。それで以前からの憂國の涙がいたづらにさびしく衣巾にそそぐばかりである。』

古柏行

古柏行

(一)孔明廟前有(二)老柏。　孔明が廟前に老柏有り、

(三)柯如(四)青銅根如石。　柯は青銅の如く根は石の如し。

霜皮(五)溜雨(六)四十圍。　霜皮雨を溜らす四十圍、

(七)黛色參天二千尺。　黛色天に參す二千尺。

(八)君臣已(九)與時際會。　君臣已に時の與めに際會す、

(一〇)樹木猶爲人愛惜。　樹木猶ほ人に愛惜せらる。

(一一)雲來(一二)氣接巫峽長。　雲來つて氣は巫峽の長きに接し、

月出(一三)寒通(一四)雪山白。』　月出でて寒は雪山の白きに通ず。』

憶昨路繞(一五)錦亭東。　憶ふ昨路繞る錦亭の東、

(一六)先主武侯同閟宮。　先主武侯同じく閟宮。

(一七)崔嵬枝(一八)幹郊(一九)原古。　崔嵬として枝幹に郊原古りたり、

(二〇)窈窕(二一)丹青戶(二二)牖空。　窈窕として丹青に戶牖空し。

(二三)落落(二四)盤踞雖(二五)得地。　落落盤踞するは地を得たりと雖も、

(二六)冥冥(二七)孤高多烈風。　冥冥孤高なるは烈風多し。

【字解】【一】孔明廟　夔州白帝城の西郊にあり先主廟の更に西にありしものなり、前に已に「武侯廟」詩ありたり。又「夔州歌」十絶の第九にも武侯祠堂不可忘、中有松柏參天長とありたり。【二】老柏　柏は側柏なり。【三】柯　えだ。【四】青銅　からかね。【五】溜雨　溜は「したたる」。【六】四十圍　圍はひとかかへ。【七】黛色　黛の青黑き色、【八】君臣　劉備と諸葛亮。【九】與時際會　與時とは時世を濟はんがためにの意、際會はなりよくであひしこと。【一〇】樹木　老柏をさす。【一一】雲來二句　此句仇氏は劉須溪が說に本づきて之を「君臣」の前、「二千尺」の後に移し置きたれども原位置を適當と信ずるを以て原形に復せしめたり。【一二】氣接　氣は柏旁の雲氣、接は連接するなり。【一三】

扶持自是神明力、　扶持自から是れ神明の力、
正直元因造化功。』　正直元因る造化の功。』
大厦如傾要梁棟、　大厦如し傾いて梁棟を要せば、
萬牛迴首丘山重。　萬牛首を迴して丘山重からむ。
不露文章世已驚、　文章を露さざれども世已に驚く、
未辭剪伐誰能送。　未だ剪伐を辭せざるも誰か能く送らむ。
苦心豈免容螻蟻、　苦心豈に免れむや螻蟻を容るるを、
香葉曾經宿鸞鳳。　香葉曾て經たり鸞鳳を宿せしめしを。
志士幽人莫怨嗟、　志士幽人怨嗟する莫れ、
古來材大難爲用。』　古來材大なれば用を爲し難し。』

寒翠　寒は柏の翠の寒げな色。【一四】雪山　即ち雪嶺、西山、成都にて吐蕃の境ちかく見ゆる山。此句次段の錦亭を喚び起す、以上起八句は夔州の廟柏をいふ。【一五】錦亭東　錦亭とは成都浣花渓の草亭をいふ。嚴武に寄題杜二錦江野亭詩あり、よりて錦亭といふ。【一六】先主武侯同閟宮　成都の先主廟は成都府西八里、惠陵の東七十歩にあり、廟の西に武侯祠あり、閟宮とは廟をいふ、閟は閉づるなり、廟は平生とざしてあるゆゑに之を閟宮といふ、文字は詩經に出づ。【一七】崔嵬　「爾雅」の釋山によれば石、土を戴くを崔嵬といふ。此二字は下の郊原の形容語なり。【一八】枝幹　柏のえだ、みき。二字副詞にみるべし。【一九】郊原古　郊野の高原、老柏あるがため古めかしくみゆるなり。【二〇】窈窕　幽深にして閑靜なる貌。二字戸牖の形容語なり。【二一】丹青　まどに彩色を施せるなり。【二二】戸牖　牖は壁に穴をあけたまど。【二三】落落　高く草を抜いたさま。【二四】蟠踞　わだかまり、うづくまる、根幹のさま。【二五】得地　平地に生じその場處を得たるをいふ。此一句は成都廟郊原の柏をいふ。【二六】冥冥　くらし、雲氣の中にあるを以てなり。【二七】孤高　孤立して高くそびゆ。此一句は夔州廟の柏をいふ。落落・冥冥の二句、前者にて「憶昨」以下四句の成都柏をすべ、後者にて前段八句の夔州柏をすべて本題に接續する文法なるを舊注之を區別せず、共に成都柏とみなすが故に兩地の柏截然二段に分たれて相接せざるの不自然を致せり。【二八】扶持　たすけささへる。以下二句はひきつづき夔州の古柏をいふ。【二九】神明　かみ。【三〇】正直　柏幹のまつすぐなるをいふ。【三一】造化　天地の創造者。以上「憶昨」八句は陪客として成都柏を添へて又夔州柏をのべたり。【三二】大厦　おほやれの家屋。【三三】梁棟　はり、むなぎ。【三四】萬牛迴首丘山重　棟梁に充つべき柏の甚だ重かるべきをいふ。丘山重とは丘山のごとくに重きをいふ、かく重きゆゑ之を牛にひかせんとするときは萬匹の牛力を用ふるも牛はなほ首を左右にして前進になやむべしといふなり。【三五】不露文章　露はあらはす、文章は「あや」なり、柏のことなれば外部には何等のうつくしきあや有ることなし。【三六】剪伐　幹をきりとること、之を棟梁として用ふるために。【三七】誰能送　送とはそのいりような場所へ之を送りとどけるをいふ。【三八】苦心　樹のにがき中心と、苦しめる人心と、二樣にひきかけて用ひし語なり。【三九】容螻蟻　「けら」や「あり」をいれておく、裏面にはつまらぬ小人に害せらるるの意をともなふ。【四〇】香葉　柏のかんばしき葉。【四一】曾經　かつてさ樣なめにもあうた。【四二】宿鸞鳳　かかる靈禽をとまらせた。【四三】志士幽人　志氣ある人、幽靜に世から退きてなる人。【四四】材大　材は木材、同時に人の技能の意をふくむ。以上「大厦」八句は柏樹と自己と、二物一體となりて感慨をのべたり。

【題義】夔州の諸葛武侯の廟にある古柏についてよめるうた。大曆元年の作。

【詩意】（夔州の）孔明が廟の前に老いたる柏の樹がある、その柯は青銅のごとく根は石のごとく霜をへた皮に雨をしたたらせてをる幹は四十かかへもあり、天までわりこんで立つてゐる黛の色は高さ二千尺もある。先主孔明の二人は已に當時を救はんがためにうまくであつたので、之に對する同情から彼等の廟にある樹でさへも人に愛惜されてゐる。この樹のそばに雲が來るとその氣は遠く巫峽の長く

309
65

よこたはつてゐるあたりまでつゞき、月でも出たときにはこの樹の寒色ははるかに雪山の白くそびえてゐるあたりまでも通ずるのである。』おもひおこす、自分は前年成都の錦江の草亭から東の方にうねつた路をとほつて成都の彼等の廟へいつたことがあることを。あそこでは先主も武侯も同じ廟域にあつた。そこは郊原たかくして柏樹の枝幹あるために土地も古めかしくみえ、彩色をした戸や牖はおくふかくみえてゐるがだれもおとなふものもなかつた。彼の地の廟の柏は落落として平地に盤踞して誠に適當な場所を得てゐたが、この地の柏はくらがりに孤立して生えてゐるから烈風をうけることが多いのだ。しかるにかくみるごとくにあるといふは之を扶けさゝへてくれたのは神明の力によるものだらう、もとよりまつすぐにそだつといふのは天然造化のしわざにちがひないのである。』かやうな老柏はもしどこかの大屋が傾きかけて棟梁の材がいるといふときには無くてはならぬもので、これを運搬する際にはその重きこと丘山のごとくで萬匹の牛にひかせても彼等が首をひねるであらう。この柏は外部に文章などはみせびらかさぬが世人は巳に驚いてゐるのだ。この柏はいりようとあらば伐られることはさらさら厭はぬのだが誰がそれをいりようの場所へ送りとどけてくれようぞ。この柏の蟲ばまれた心は螻や蟻をいれぬわけにはゆかんで害せられてはをるが、その香ばしい葉にはこれでも曾て鸞鳳の様な麗禽をとまらせたこともあるのだ。(愚癡はやめよう)志士たり幽人たるものよ決してうらんだり歎いたりするには及ばぬ、昔から材木は大き過ぎれば役にはたたぬものときまつたものだ。』

終

續國譯漢文大成

文學部 二十四の上

309
65

始

吉田律郎氏 寄贈本

續國譯漢文大成

文學部 第二十四册（第六帙の上ノ四）

杜少陵詩集 下の上ノ四

309
65

杜少陵詩集　卷十六

(一)諸將五首　　諸將　五首

(二)漢朝(三)陵墓對(四)南山。　漢朝の陵墓は南山に對す、
(五)胡虜(六)千秋尙(七)入關。　胡虜千秋尙ほ關に入る。
昨日(八)玉魚(九)蒙葬地。　昨日玉魚葬地に蒙はる、
早時(一〇)金盌(一一)出人間。　早時金盌人間に出づ。
(一二)見愁(一三)汗馬西戎逼。　見に愁ふ汗馬西戎の逼るを、
(一四)曾閃(一五)朱旗北斗殷。(一六)　曾て朱旗を閃かして北斗も殷なり。
(一七)多少(一八)材官守(一九)涇渭。　多少の材官涇渭を守る、
(二〇)將軍(二一)且莫(二二)破愁顏。　將軍且つ愁顏を破ること莫れ。

【字解】【一】諸將　將軍等をいふ。詩中に或は其人を明言し或は明言せず。【二】漢朝　漢を借りて唐をいふ。【三】陵墓　帝王のみささぎ、公卿のはか。【四】南山　終南山。【五】胡虜　北方のえびす。前には安祿山の軍、後には吐蕃の軍。【六】千秋　多くの歳月を經たる今に於て。【七】入關　主として關中の地の東西に在るものをさせるならん。東は函谷關、西は玉門・陽關の類。【八】玉魚　玉にて造りし魚形の佩びもの、貴人の身につけるものにて埋葬のとき之を陵墓中に入れてやる。【九】蒙　土をかぶせられてあるをいふ。【一〇】金

盌　黄金で造りしおわん、是亦貴人の用ふる品にて陵墓中に埋めらる。【一一】出人間　陵墓があばかれて世間へあらはれでる。玉魚・金盌の故事に就ては舊注に諸書を引けどもどの一書も精密にはあてはまらず、作者は書中より借用せしものにて拘泥して故事を用ひしものに非ずと考ふるを以て典據の文を引用することを省く。【一二】見愁　現在眼のまへにて愁ふべきことにはの意。【一三】汗馬西戎　西戎は吐蕃をさす、吐蕃は廣德元年十月に入寇して長安に入り、同二年秋にも入寇し、翌永泰元年九月にも大擧入寇せり、詩句蓋し最近の入寇についていふ、汗馬は吐蕃長驅してあせしたる馬にのるをいふ。【一四】曾閃　曾てとは往年をさす。【一五】朱旗北斗　朱旗はあかき色のはた、官軍の旗をいふ、北斗は天上の北斗星をいふ、長安城は北斗にかたどりたりといふ、上句の汗馬と西戎とが同物なるにより北斗をも朱旗と同物なるべしとし、北斗は旗上に畫きたる模樣なりと說くものあれども今取らず。【一六】殷　あかぐろし、旗色の盛なるをいふ。（殷字或は閑に作る、閑ならば閑暇の義、旗がしづかにひるがへるをいふ。）【一七】多少　おほくの。【一八】材官　武技の臣、或る武藝にすぐれた武官。【一九】守涇渭　官軍が涇水渭水の地を守るをいふ、二水の流域は長安に近し。永泰元年九月に回紇・吐蕃、兵を合して涇陽を圍む、暮に及びて二軍退いて北原に屯す。又、同月郭子儀諸道の節度使を遣はし各〻兵を出して要害に屯せしめんと請ふ、しかるに諸將猶ほ鍾を擊ちて樂みを爲す。此によりて末尾の二句あるなり。【二〇】將軍　材官等を統ぶる長官をさす。【二一】且　しばらく。【二二】破愁顏　愁はしきかほつきを破りて笑顏となること、娛樂に意を傾くるをいふ。

【題義】　將軍等の事につき感をのぶ。事は詩中に見ゆ。この第一首は長安の近西、吐蕃の侵入の路を守る將軍に對してのべたり。永泰元年の作か。五首は一時の作にあらず。各首のもとにのぶべし。

【詩意】　漢朝の陵墓は終南山と對して京師の附近にある。それだのに千年後の今日に於てなほえびすが關内へ侵入してくる。（彼等が陵墓の發掘をやるので）やつときのふ埋葬の場所で玉魚に土をかぶせたかとおもふのに、早くもけふは金のお椀が世間へ出てくるといふありさまだ。現在また愁はしくも西戎（吐蕃）が汗馬を驅つてせまつてきてをる。そのむかしは我が官軍は朱旗をひらめかして天の北斗星まであかくみせた時さへあつたのではないか。いま多くの武官どもが涇渭の流域卽ちごく京師の近地で守禦をしてをるのである。將軍たるものしばらくはにつこりともせず油斷なく防禦に力をつくすべきである。

〔二〕

(一)韓公本意築(二)三城(三)。　韓公の本意三城を築く、
(四)擬絕天驕(五)拔漢旌(六)。　絕たむと擬す天驕の漢旌を拔くを。
(七)豈謂盡煩(八)回紇馬。　豈に謂はんや盡く回紇の馬を煩はして、
(九)翻然遠救(一〇)朔方兵。　翻然遠く朔方の兵を救はむとは。
(一一)胡來不覺潼關險。　胡來つて潼關の險なるを覺えず、
(一二)龍起猶聞晉水淸。　龍起りて猶ほ聞く晉水の淸きを。
獨使至(一三)尊憂社稷。　獨り至尊をして社稷を憂へしむ、
(一四)諸君何以答升平。　諸君何を以てか升平に答へむ。

【字解】【一】韓公　張仁愿なり、仁愿中宗の景龍二年左衞大將軍・同中書門下三品に拜し、韓國公に封ぜらる。彼は神龍三年に河北（長城を出でたる黃河の北）に於て三の受降城を築く、東城は楡林の直北にあたり、中城は拂雲祠にして朔方軍の直北にあたり、西城は靈武の直北にあたれり。【二】本意　築城の本意。【三】築三城　三の受降城を塞外河北にきづきしこと、上に見ゆ。【四】擬絕　之を絕無にせんとの準備。

【五】天驕　匈奴自ら稱して天之驕子といふ、回紇も匈奴の種族なるゆゑ之を天驕といふ。【六】拔漢旌　漢のはたをぬきとる、漢と戰ひて勝ちそのはたを取る、漢は借りて唐をいふ。【七】豈謂　意外にも。【八】煩回紇馬　安祿山の亂の時も、吐蕃の亂の時も、唐は回紇より援助を受けたり、これ回紇の馬を煩はすなり。【九】翻然　かへつて。【一〇】救朔方兵　朔方軍の兵とは朔方節度使郭子儀が兵をいふ、子儀は前後ともに回紇の兵を借り用ひて功を立てたり。【一一】胡來不覺潼關隘　胡は吐蕃をさす、潼關は華州の東に在り、隘はせまきこと、險扼をいふ。これ廣德元年に吐蕃の西より來侵せしときには代宗陝州に出奔し、吐蕃はまさに潼關の險を無視して東に突破せんとするの勢ありしをいふ。【一二】龍起猶聞晉水清　此句は「北征」に煌煌太宗業、樹立甚宏達といへるごとく國初の祥瑞をあげて國運の衰ふべからざるをいふ。曾一行が幷州起義堂頌に、我高祖、龍躍晉水、鳳翔太原、とあり、唐の高祖は山西の太原より起りたり、晉水は晉陽縣（今の太原縣）西に出で東して汾水に入る。龍起とは龍のごとくたちあがりしをいふ、猶とは「今にいたるもなほ」なり。【一三】至尊　時の天子、代宗をさす。【一四】諸君　郭子儀以下諸將をさす。

【題義】この第二首は吐蕃の亂につき諸將を責む。廣德元年又は其後の作。

【詩意】韓國公張仁愿が中宗の時に河北に三城をきづいた本意は匈奴（吐蕃をさす）があばれて漢（唐をさす）の旌を拔き取つてならぬから拔かせることをすつかり根だやししようといふに在つたのだ。それが意外にも騷亂がおこると飜つて一一匈奴の種族たる回紇の兵をわづらはしてその手を借りて遠く朔方軍の方をたすけてもらはねばならぬ始末になつた。おまけに吐蕃のえびすは潼關の險隘を無視してそれを突破せんとまでした。だがさすがに吾が唐は祖皇の龍のごとく起られた太原の地に於て今でも晉水の水清くながれてをると聞く、決して悲觀するにはあたらぬ。ただ至尊の天子ばかりに社稷のことをごしんぱいさせ申してゐるのではすまぬことでないか、諸君はこの升平の恩澤に對し何事を以て之にお答へしようとするのであるか。

【餘論】「胡來」の句につき一說に胡を安祿山の軍とし、軍が當時の潼關の守將哥舒翰を破りしことをいふとなす、之によれば東より西へ潼關を突破せしこととなる。又之によれば此句は過去を追敍せしものとみるなり。此說を取るもの多くあり。又「龍起」の句、仇注には祖宗の兵を晉陽に起せしことを以て廣平王（名は俶、後に代宗）の京師を興復せしに比す、となせり。亦一說なり。

〔三〕

洛陽宮殿化爲烽。　洛陽の宮殿化して烽と爲る、

休道秦關百二重。　道ふを休めよ秦關百二の重と。

滄海未全歸禹貢。　滄海未だ全く禹貢に歸せず、

薊門何處盡堯封。　薊門何の處か盡く堯封なる。

朝廷袞職雖多預。　朝廷の袞職多く預ると雖も、

天下軍儲不自供。　天下の軍儲は自ら供せず。

【字解】【一】化爲烽　のろし火にかはる、兵亂ここに及びしをいふ。天寶十四載十二月、祿山東京（洛陽）を陷れ、十五載六月潼關を破る。【二】秦關　函谷關をさす、函谷關・潼關をこえてはじめて長安に入る。【三】百二重　「漢紀」に秦形勝之國也、帶山阻河、持戟百萬、秦得百二焉とあり、注に秦地は險固にして二萬人を以て諸侯の百萬人に當るに足れ

稍喜臨邊(一二)王相國(一三)。　稍や喜ぶ邊に臨む王相國、

肯(一四)銷(一五)金甲事(一六)春農。　肯て金甲を銷して春農を事とせむや。

りといへり。百二とは百分の二だけの防禦力にて足るをいふ。重とはかさなる、要害のかさなりていくへにもあるをいふ、百二重とは即ち己を防ぐには敵の百分の二の力で足る要害といふの意。【四】滄海　ひろきうみ。禹貢の青州の域、今の山東省の東及北の海面をさす。【五】禹貢　「尚書」に禹貢篇あり、夏の禹王の時の支那全土の行政區分と、各地よりたてまつるべき貢獻の事とを記載せり、因つて「禹貢に歸す」とは「天子の領域」に歸するの義となる。【六】薊門　薊州、今の順天府地方、安祿山の根據地たりしところ。【七】堯封　周の時、堯の子孫を薊に封す、故に堯封といふ、これも天子の領地の義なり。【八】袞職　「詩」烝民篇に袞職有闕、維仲山甫補之とある、袞職は天子の職をさす、後漢に至りては袞職を三公の職の事として用ふ、法眞傳に臣願聖朝、就加袞職といふこれなり。此詩句も後世の義に依り三公の職として用ふ。袞は卷龍の模様ある衣、三公はそれを着るによりて其職を袞職といふ。【九】誰爭補〔雖多預〕「誰爭補」を用ふれば袞職を天子職として「詩經」の原意によるべし。今は「雖多預」を取るものにして從つて上の袞職は後世の義によれり。多預とは多く官職を兼ね領してその事務に干預するをいふ。當時の諸鎭の節度使は本官の外に多くは中書令・平章事を加へられ、兼ねて内衞（宮内省關係官職の肩書き）を領したり。【一〇】軍儲　軍需品。【一一】不自供　地方より自發的に供納せず、上より求索するを待つて供せらるるをいふ。强奪といふことを婉曲にいへるなり。【一二】臨邊　邊境にのぞむ。邊境といふは京畿以外の地をさしていへり、必ずしも眞に邊遠の地をささず、眞に邊地とするならば本篇を大曆三年以後の作とせざる可からず。次にのぶる王縉が傳をみよ。【一三】王相國　王縉をいふ、縉は王維が弟なり、廣德二年に同平章事（即ち宰相）に拜し、其年八月李光弼に代りて河南・淮西・山南東道の諸節度行營の事を都統し、兼ねて東京留守を領す、幾儉にして（永泰元年末か）河南副元帥に遷る。大曆三年には幽州盧龍節度を領し、又太原尹・北京留守を兼ね河東軍節度使に充てらる。【一四】肯　此の肯の字「客至」七律の肯與鄰翁相對飮（卷九の三五六頁）の肯とおなじく、こちらからもちかけて相談する意にとるべし。【一五】銷金甲　金屬にて造りしよろひをとかす、兵器をとかして農具となすなり。【一六】春農　春の農作。此語は、大曆元年春の事を豫想せしものならん。此語によれば、本篇は永泰元年末頃の作ならんか。

【題義】　この第三首は亂後の民困をいひ、諸將屯田を行はざるを責む。永泰元年末頃の作か。

【詩意】　洛陽の宮殿ものろし火にかはつた。秦中の關塞は外敵の百分二の防禦力あれば足るほどの要害だなどいうてもむだなことだ。今日東海地方はまだ天子の職貢の地となり了らぬし、薊門のあたりもどこがすつかり王領になつたといふのか。朝廷の三公の職に居る人人はやたらに官職ばかり多く帶びてゐるが、天下の軍需品は强制的に取るのでなければ供給されぬありさまではないか。このときすこしばかり喜ぶべきことは王相國（縉）が邊境にのぞまれたといふことだ。相國は兵器をとかして農具をこしらへ春をまつて農作を專務とさるるかんがへがおありになるかどうか。

〔四〕

迴(一)首扶桑(二)銅柱(三)標。　首を迴らす扶桑銅柱の標、

冥冥(四)氛祲未全銷。　冥冥たる氛祲未だ全く銷せず。

越裳(五)翡翠(六)無消息。　越裳の翡翠消息無く、

南海(七)明珠(八)久寂寥。　南海の明珠久しく寂寥。

殊錫(九)曾爲大司馬(一〇)。　殊錫曾て大司馬と爲る、

【字解】【一】迴首　内地の事からはなれて遠方のことをいはんとてかくいへり。【二】扶桑　元來東海にある國のことなるも借りて南海をさす。【三】銅柱標　「南史」に林邑國南界、馬援所植兩銅柱、表漢界處也とあり、銅標は國界を表するめ

總(一一)戎皆插(一二)侍中貂。　總戎皆插む侍中の貂。

炎(一三)風朔(一四)雪天(一五)王地、　炎風も朔雪も天王の地、

只(一六)在忠(一七)臣〔良〕翊(一八)聖朝。　只忠良の聖朝を翊くるに在り。

じろし、後漢の馬援がたてしもの、借りて越裳をさす。【三】氛祲　不吉の惡氣。【四】越裳　古代の國名、今の交趾地方、此句は起句の「銅柱」を承く。【五】翡翠　かはせみ。【六】珠璣　天子の特別の寵愛によりてたまはる。【七】南海　廣東地方をさす。此句「扶桑」を承く。【八】明珠　明月珠、眞珠のこと。【九】大司馬　漢の武帝の置きし武官の最上の官の名。唐にていはば副元帥・都統・節度使・都督府・都護府の長官など征伐の權を專らにするもの之に相當すべし、事實何人をさすや明ならず。【一一】總戎　これも軍務の長なり。杜詩にては節度使に對してしばしば總戎の語を用ひたり。【一二】插侍中貂　貂はてんのしつぽ、插は冠にそれをさしはさむなり。侍中は天子の命令を出納し、禮儀を相くるを掌る官なり、唐にて侍中・左右常侍・中書令は冠に金蟬をつけ貂をはさむ。此句は節度使にして宰相の銜を帶ぶるものをさすに似たり。【一三】炎風　熱風の吹く地、即ち南海の地方をいふ。【一四】朔雪　北方の雪のふる地、即ち支那北部をいふ、前篇の滄海・薊門等は朔雪の地なり。【一五】天王地　天子の領地。【一六】只在　在の字の主語なし、「最も肝要の務は」といふ樣の語をおきてみるべし。【一七】忠臣　或は忠良に作る、良に從ふ。忠良は忠誠善良の臣。【一八】翊　たすく。

【題義】南方の遠地も亦朝貢を缺くをいひ、武臣の忠誠を盡さんことをのぞめり。製作年時は明かならず。

【詩意】首をふりむけて南方の扶桑、銅柱のめじるしのある方面をながめるに、そちらも惡氣がくらくとざして全くはきえうせぬ。越裳國からの翡翠のみつぎものはとんと消息がなく、南海の眞珠の貢ものもながらくおとさたなしである。ところで武人はとみると、特別のおぼしめしで大司馬になつたものもあるし、總大將で侍中の樣な貂のかざりを冠にはさんでゐるものは全部がそれだ。朔雪の地はもとよりのことだが炎風の地もやはり同じく吾が天子の領土なのだ。どうぞそれをほうつておかず、その地をして朝貢させる樣にすべきだ。しかする要務はどこにあるといへばただ忠良の臣たるものが聖明の朝廷をおたすけしてゆくに在るのである。

〔五〕

錦(一)江春色逐(二)人來。

巫(三)峽清秋萬壑哀。

正憶往時嚴(四)僕射。

共迎(五)中使(六)望鄉臺。

主(七)恩前後三(八)持節。

軍(九)令分明數擧杯。

西(一〇)蜀地形天下險。

安危須仗出(一一)羣(一二)材。

〔五〕

錦江の春色人を逐うて來る、

巫峽の清秋萬壑哀し。

正に憶ふ往時の嚴僕射、

共に中使を迎ふ望鄉臺。

主恩前後三たび節を持す、

軍令分明數杯を擧げき。

西蜀の地形は天下の險なり、

安危須らく仗るべし出羣の材。

【字解】【一】錦江　成都の錦江、浣花溪のある江なり。【二】逐人來　人とは自己をさす。【三】巫峽　夔州のことをいふものなれども、巫峽は近くにあるを以て之をあげていへり。【四】嚴僕射　嚴武をいふ。【五】中使　宮中よりのおつかひ。【六】望鄉臺　成都の北にあり。【七】主恩　天子の御恩により。【八】三持節　嚴武は一たび綿州・劍南節度使として蜀に來任せり、節は天子より武權をおゆ

帝圖

だれになるしるしとして賜はる「はた」。【九】軍令 軍の命令。【一〇】西蜀 西方蜀地の意。【一一】仗 よる。【一二】出羣材 凡庸の羣衆からぬけでた人物、暗に武をさす。

【題義】此第五首は嚴武を憶ひてのぶ。「巫峽淸秋」の語により大曆元年秋の作なるを知るべし。

【詩意】いま巫峽は淸らかな秋で萬の壑も哀しげであるが、錦江の春げしきがここまで自分を逐ひかけてくる樣なきがする。じぶんはいまちやうどおもひだす、さきに嚴武と望鄕臺で宮中からのお使をお迎へしたことを。嚴武は君恩のあつきによつて前後三回も節を持して蜀へやつてき、彼が在任中は軍令も分明で部下がよくをさまり、たびたびじぶんと杯をあげて酒を飲んだのである。(ところが彼去つての蜀はどうだ。騷亂のたえまが無いではないか。)西方蜀地の地形は天下の險要なところだ。この地の安危を保つには彼の樣な拔羣の人物によらねばならぬ。

八哀詩

傷時盜賊未息。興起王公李公。嘆舊懷賢。終於張相國。八公前後存歿。遂不銓次焉。

八哀詩

時の盜賊未だ息まざるを傷み、王公李公より興起し、舊を嘆じ賢を懷ひ、張相國に終る。八公前後存歿す、遂に銓次せず。

【字解】【一】八哀 八人に對する哀情をのべしを以て八哀と題す。魏の曹植・王粲、晉の張載に七哀詩あり。唐の呂向が曰く、痛而哀、義而哀、感而哀、怨而哀、耳目聞見而哀、口歎而哀、鼻酸而哀なりと。因つて一哀にして七者具はるを以て七哀といふと解くものあり。案ずるに此解は古說ならんも、かく抽象的に說かれては七者の區別明かならず、當時恐らく此の七種に該當する事實ありてそれに各〻一詩をかけて之を七哀と名づけしならん。現存するものに就て見るに曹植の七哀は獨棲せる思婦をいひ、王粲は子を棄つる飢婦と、南方に避難する遊子の憤をいひ、張載は洛陽の園陵の荒廢をいたむことと、遊子故鄕を思ふこころとをいへり。詩人ただ數篇をとどめて之に七哀の名をつけし故に、一詩に七哀をそなはるの說生じたれども、本來七首あるべきものなるべし。果して然らば、八哀は必ずしも杜の創格にあらず、前代の七を增して八となせしのみ。ただ八哀を以て八人の傳を韻語を以て敍したるは杜の創格なりと謂ふべし。【二】興起 感興おこりしによりて作りはじむるをいふ。【三】王公李公 王思禮、李邕。【四】嘆舊 舊知についてなげく、嚴武・李璡・蘇源明・鄭虔等をさして舊といふ。【五】懷賢 賢者をおもふ、張九齡がごときは賢なり。【六】張相國 張九齡。【七】前後存歿 或は存し或は歿すること相前後す。【八】不銓次 前後をはかりて順序をさだめぬ、詩の順序は存歿の順序に由らぬをいふ。

〔一〕 贈司空王公思禮

〔一〕 贈司空王公思禮

司空出東夷。童稚剛勁翮。
司空東夷より出づ、童稚勁翮を刷ふ。

追隨幽薊兒。穎銳物不隔。
『追隨す幽薊の兒、穎銳物隔てず。』

服事哥舒翰。意無流沙磧。
服事す哥舒翰、意流沙磧を無みす。

未甚拔行間。犬戎大充斥。
未だ甚だ行間より拔かれず、犬戎大に充斥す。

(一四)短小精(一五)悍姿。屹(一六)然強寇敵。　短小精悍の姿、屹然強寇に敵す。
(一七)貫穿百萬衆。出入由(一八)咫尺。　貫穿す百萬の衆、出入すること咫尺の由し。
馬鞍懸將(一九)首。甲外(二〇)控(二一)鳴鏑。　馬鞍に將首を懸け、甲外鳴鏑を控く。
洗劍(二二)青海水。刻(二三)銘天山石。　劍を洗ふ青海の水、銘を刻す天山の石。
(二四)九曲非外(二五)蕃。其王轉(二六)深壁。　九曲外蕃に非ず、其王轉た深壁。
(二七)飛兔不(二八)近駕。(二九)鷙鳥貢(三〇)遠(三一)擊。』　飛兔近駕せず、鷙鳥遠擊に貢る。』
(三二)曉達兵(三三)家流。(三四)飽聞春(三五)秋癖。　曉達す兵家の流、飽聞す春秋の癖。
(三六)胸襟日沈(三七)靜。(三八)肅肅自(三九)有適。』　胸襟日に沈靜、肅肅自ら適する有り。』
(四〇)潼關初潰散。(四一)萬乘猶(四二)辟易。　潼關初め潰散す、萬乘猶ほ辟易す。
(四三)偏裨無所施。(四四)元帥見(四五)手格。　偏裨施す所無く、元帥手格せ見る。
(四六)太子入朔(四七)方。(四八)至尊狩(四九)(五〇)梁益。　太子朔方に入る、至尊梁益に狩す。
(五一)胡馬纏(五二)伊洛。(五三)中原氣(五四)甚逆。　胡馬伊洛に纏ふ、中原氣甚だ逆なり。
肅宗登寶(五五)位。塞(五六)望勢(五七)敦迫。　肅宗寶位に登る、塞望勢敦迫なり。

(五八)公時徒(五九)步至。請(六〇)罪將厚(六一)責。　公時に徒步して至る、罪を請ひ將に厚く責められむとす。
(六二)際會清河公。間道傳玉册。　際會す清河公の、間道より玉册を傳ふるに。
(六三)天王拜(六四)跪畢。讜(六五)論果冰(六六)釋。』　天王拜跪し畢る、讜論に果して冰釋す。』
(六七)翠華卷(六八)飛雪。熊(六九)虎亙阡(七〇)陌。　翠華飛雪に卷く、熊虎阡陌に亙る。
屯兵鳳(七一)凰山。帳(七二)殿涇(七三)渭闢。　兵を屯す鳳凰山、帳殿に涇渭闢く。
(七四)金城賊咽喉。詔(七五)鎭雄(七六)所搤。　金城は賊の咽喉、詔せられ鎭して所搤に雄なり。
(七七)禁暴靖(七八)(七九)無雙。爽(八〇)氣春(八一)淅瀝。　暴を禁じて靖んずること無雙なり、爽氣春淅瀝たり。
巷有從(八二)公歌。野多青(八三)青麥。』　巷に從公の歌有り、野に青青たる麥多し。』
及夫哭(八四)廟後。復領(八五)太原役。　夫の哭廟の後に及びて、復た太原の役を領す。
恐懼祿位高。悵望王土窄。　恐懼す祿位の高きを、悵望す王土の窄きを。
不得見清(八六)時。嗚呼就(八七)窀穸。　清時を見るを得ざるに、嗚呼窀穸に就きぬ。
永(八八)繫五湖舟。悲甚(八九)田橫客。　永く繫ぐ五湖の舟、悲は田橫の客よりも甚し。
千秋汾(九〇)晉間。事與(九一)雲水白。』　千秋汾晉の間、事雲水と白し。』

昔觀文苑傳(九二)、豈述廉頗(藺)(九三)績。嗟嗟鄧大夫(九四)、士卒終倒(九五)戟。』

昔文苑傳を觀しに、豈に廉藺が績を述べんや。嗟嗟鄧大夫、士卒終に戟を倒にせり。』

【字解】【一】贈司空　贈とは其人の死後に官を贈られしをいふ、王思禮は生前に司空となり、死後は太尉を贈らると「舊唐書」に記せり。贈司空にはあらず。全文は贈太尉司空王公思禮とあるべきなり。或は作者の原本に贈官を書きいれんとて餘白を存せしものが編者のために誤まり冠せられしものか。【二】東夷　高麗をいふ、思禮は高麗の人なり。【三】刷勁翮　刷は「はらふ」。鳥が嘴もて羽に油をくれること、勁翮はつよきたちばね、猛鳥を以て其の勇力に比す。【四】幽薊兒　幽州薊州の少年、此地方は勇壯なるもの多し。【五】穎銳　錐の穂先のごとくするどし、毛遂が故事。戰國の時、趙の平原君が食客に毛遂あり、「遂をして囊中に處らしめば錐の末穎脫して出でん」といふ。平原君之を從へて楚に至り約を定むることを得たり。銳の字一に脫に作る。【六】物不隔　何物をもつてするも錐の穎をへだてることかなはぬ、起四句少年より敍起せるをいふ。【七】服事　服從しつかへる。【八】哥舒翰　唐の河西の將なり、已にしばしば見ゆ。王思禮ははじめ王忠嗣に從つて河西に至り哥舒翰と同じく忠嗣が麾下に籍をおく。翰、隴右節度使となるに及び思禮は中郎將周泌とともに翰が押衙となる。【九】無　無視する。【一〇】流沙磧　西土の沙漠地をいふ。【一一】拔行間　拔は拔擢、行間は卒伍の列のあひだ。【一二】犬戎　吐蕃をさす。【一三】充斥　充は滿つる、斥は大なり、多なり、充斥は多きをいふ。「左傳」襄公三十一年に寇盜充斥の語あり。【一四】短小　こがらでせがひくい。【一五】精悍　精力あつてたけし。【一六】屹然　山のそばだつ貌。【一七】貫穿　一直線にとほりぬけること。【一八】由咫尺　由は猶と通ず、咫尺はわづかの距離をいふ、ひとまたぎといふ類。【一九】將首　敵の大將のくび。【二〇】甲外　甲は「よろひ」。一說に甲外は軍陣の外にて什伍を離れて軍を掠むる遊騎をさすといへるも、今取らず。【二一】控鳴鏑　かぶら矢をひく。控は引なり。【二二】青海水　青海は隴右の西にあり。【二三】刻銘天山石　天山は新疆省哈密城北百三十里にあり東西に走れる山、山石に銘を刻すといふは後漢の竇憲匈奴を征して燕然山に銘を勒せしの意を用ひたり。【二四】九曲非外蕃　九曲は黃河九曲をいふ、外蕃は外藩、蕃は「まがき」、防禦物となるをいふ。

虜の景龍四年に贊普(吐蕃の王)婚を請ふ、唐、左衞大將軍楊矩をして金城公主を送りて吐蕃に使せしむ。吐蕃因つて河西九曲の地を請うて公主の湯沐の邑(お化粧料の地)となさんといふ。矩、奏して之を與ふ、吐蕃既に九曲を得るやこれより復た叛く。天寶十二載、哥舒翰九曲を征す、思禮期に後る、翰之を斬らんと欲す、思禮曰く、斬らば則ち之を斬れと、諸將之を壯とす。翰、涼國公に追封し、河西節度使を加へられ、攻めて吐蕃の洪濟・大漠門等の城を破り悉く九曲を收め、其地を以て洮陽郡を置き、神策・宛秀の二軍を築く。土地、彼の手にあればそは我が外藩なり、今我が手に歸したれば「外藩に非ず」といへり。【二五】其王　吐蕃の王。【二六】深壁　逃れて奥へひつこんで壘壁をきづく。【二七】飛兔　日に三萬里を行くといふ神馬。【二八】不近駕　遠く駕するをいふ。【二九】鷙鳥　つよきとり。【三〇】資　資とは我之に依るをいふ、「とつて」ともよむ、「易」に萬物資始とみゆ。【三一】遠擊　遠くまでとんで他禽をうつ。「飛兔」二句は思禮の材幹、長驅遠馭にたふるをいふ。「服事」以下十六句は思禮が隴右に功を立てしをいふ。【三二】曉達　さとりゆきわたる。【三三】兵家流　諸の兵法。【三四】飽聞　他人十分にそのことを耳にするをいふならん。【三五】春秋癖　晉の杜預、征南將軍となる、「春秋左氏傳」を愛好する癖あり、思禮も亦かくのごとし、思禮果して「左傳」を好むや否不明なるもこれ其の讀書を好み單なる武人に非ざるをいふなり。【三六】胸襟　心中。【三七】沈靜　おちつきしづか。【三八】肅肅　つつしむ貌。【三九】自有適　適は適意、心に滿足する所あるをいふ。以上「曉達」四句は思禮の儒將たるをいひ、下文を起す。【四〇】潼關初潰散　天寶十五載六月、哥舒翰の敗軍をいふ。卷五四七七頁「北征」詩の潼關百萬師の句解を參看せよ。【四一】萬乘　天子、玄宗をいふ。【四二】偏裨　部將をいふ、ここは思禮をさす。【四三】詐易　「詐開して其處を移易」するなり、あとへのくこと、是は玄宗の蜀へ出奔せしをいふ。【四四】元帥　總大將、哥舒翰をさす。【四五】見手格　手にてうたれる、とりこにされしをいふ。哥舒翰の潼關を守るや思禮は元帥府の馬軍都將に充てらる、翰が軍敗るるや潼關に至り散卒を收めて復た關を守る、賊將崔乾祐進みて之を攻む。是に於て火拔歸仁等、翰をあざむきて關を出でしめ執へて以て賊に降る。【四六】太子　名は亨、後の肅宗。【四七】朔方　軍の名、靈州にあり、郭子儀の掌る所。【四八】至尊　玄宗。【四九】狩　出奔をいふ。【五〇】梁益　蜀をいふ、已に見ゆ。【五一】胡馬　安祿山の軍隊の馬。【五二】纏伊洛　纏とはまとふ、はなれぬこと、伊水洛水は洛陽にあり。【五三】中原　河南。【五四】氣甚逆　順調

ならざる氣の盛なるをいふ。これ賊軍の盛なるをいふなり。【五五】寶位　天子の位、「易」にいふ、聖人之大寶、曰ㇾ位ト。【五六】塞望　天下人民の望をふさぐ、みたす。【五七】勢敦迫　形勢、他からあつくせまられる。【五八】公　思禮。【五九】徒步至　あるいて肅宗の御位された靈武の地へくる。【六〇】請罪　敗軍の罰をうけんとねがひでる。【六一】厚貴　ひどくせめる。【六二】際會二句　際會はなりよくであふ、淸河公とは房琯をいふ、倫敗るるや思禮行在に走る、肅宗其の堅く守らざりしを責めて之を斬らんとす、たまたま房琯蜀より上皇（玄宗）の册命を奉じて至り、諫めて以て後の效を收むべしとなす、つひに赦さる。間道はぬけみち、玉册とは玉版にかいた讓位のかきつけ。以後は玄宗みづから隱退して天子の位を太子亨（肅宗）に傳へらる。【六三】天王　肅宗。【六四】拜跪　ひざまづき禮拜する。【六五】讜論　正直の論。房琯の言をいふ。【六六】冰釋　思禮に對する嫌疑がこほりのとけるごとくにほどける。以上「復國」十六句は復國事變における思禮をのぶ。【六七】翠華　天子の旗。【六八】卷飛雪　時に二月なり、故に雪あり。【六九】熊虎　旗の模様なり、將士の旗をいふ。【七〇】阡陌　南北の路、東西の路。【七一】鳳凰山　岐山をいふ、この山は周の文王の時に鳳皇が鳴いたといふ、因つて鳳皇堆ともいふ、鳳翔府にあり、肅宗は至德二載の二月に靈武より鳳翔（當時扶風縣を改めて臨時に鳳翔郡としたり）に至れり。【七二】帳殿　まくばりのごてん、行在所をさす。【七三】涇渭開　これまでとざされた涇水渭水の陝城がひらかれる。【七四】金城　西安府興平縣。河西の金城にあらず。【七五】節鎭　節をうけて其地を鎭守する、至德二載思禮を以て關內節度使となし興平に鎭せしむ。【七六】雄所搤　雄は雄威を示すをいふ、搤は「うつ」、馬援傳に搤ニ其咽喉ヲとあり、所ㇾ搤とは咽喉要害の地をいふ。【七七】禁暴　敵の暴行をさしとめる、思禮關內節度使となり、武功（扶風の東にあり）を守るや賊將安守忠來り戰ふ、思禮退き扶風を守る、肅宗郭子儀に命じ擊つて之を退かしむ。【七八】靖　やすんずる。【七九】無雙　他に二つとなし。【八〇】爽氣　さわやかなる天地の氣。【八一】春澌灑　謝莊が雪賦に從衡澌而先集、劉良が注に澌灑は細下貌といへり。ここは雪霰のさらさらふる時のごとく淸涼なるをいふならん。【八二】從公歌　「詩」魯頌泮水に曰く、無ㇾ小無ㇾ大、從ㇾ公于邁と。公は魯の君をさしたり。ここは從公の字面を借りたるものにて公は思禮をさす。【八三】胥胥麥　敵の軍隊耕地をあらさぬゆゑ野に麥多し。以上「翠華」十句は關內節度使としての思禮の功をのぶ。【八四】哭廟後　肅宗の入京をいふ。至德二載冬十月癸亥肅宗鳳翔より還京、丁卯長安に入る、九廟賊に焚かれしを以て肅宗素服して廟に哭すること三日、入りて大明宮に居る。【八五】領太原役　太原は山西省太原府、長安平ぐや思禮先づ入りて宮闕を淸む、兵部尙書に遷り、霍國公に封ぜらる。李光弼河陽に徙りしを以て之に代りて太原尹・北京留守・河東節度使となり、ついで守司空を加へらる。領役とは兵事をあづかることにて河東節度使の職をとりしをいふ。【八六】淸晏　天下太平のとき。【八七】就窀穸　窀は厚なり、穸は夜なり、厚夜は長夜なり、墓穴はくらくして長夜のごとし、思禮の卒せしをいふ。文字「左傳」に出づ。「舊唐書」によれば思禮は上元二年四月以ㇾ疾薨、輟ㇾ朝一日、贈ニ太尉一、謚ニ武烈ㇳとあり。【八八】繫五湖舟　五湖舟は范蠡が故事、ここは作者が南方の水に舟をつなぐをいふ。【八九】田橫客　漢の高祖の初、田橫自殺す、その門人之を傷みて悲歌をつくる、客とは門人をいふ。【九〇】汾晉間　汾晉は太原をさす。汾水は太原の晉陽山上より出づ。【九一】與雲水白　白の字は押韻せしのみ深き義なし、單に雲水のごとく消滅せるをいふ。以上「及夫」十句は思禮太原に在りて歿せしを惜む。【九二】文苑傳　「後漢書」以下歷史に多く文苑傳の設けあり、文學者の事を記す。【九三】廉頗績　廉頗は戰國時の趙の名將、或は頗を藺に作る、藺は藺相如、亦趙の將なり、ここは名將をいはんとするものにて廉頗に限るものに非ざれば廉藺とあるかたよろしきかとおもはる。廉頗は以て思禮に比す、績は功績、いさをし。【九四】鄧大夫　鄧景山なり、思禮卒するや管崇嗣代りて太原尹となる、數月にして又鄧景山を以て之に代ゆ、景山は文吏を以て稱せられしが太原に至るや軍吏の隱事をあばく、軍衆憤怨して遂に之を殺す。【九五】倒戟　味方たりしものが敵に戟をむけず、さかさまにこちらへむける、叛くことをいふ。以上「昔觀」四句は思禮沒後、よくその後を繼ぐ人なきを歎ず。

【題義】　作者のいふ所によると、「自分は盜賊がまだやまぬのを傷んで、感興のわくまま王・李の二公からはじめて舊友のことを歎じたり賢相のことをおもうたり相國張九齡までで終つた。その八人の諸公はたがひにあとさきになくなつた。それでこの作はその生存の順序をかんがへてそのとほりに順序だてることはしなかつたのである」といふのである。この「八哀」の第一首は司空であり死後太尉

を贈られた王思禮をおもうて作つた詩である。大暦の初の作であらう。

【詩意】王司空は高麗の東夷から出て、こどものときから猛鳥が勁い翮を刷ふごとく奮飛せんとする勢があつた。それが幽州薊州の壯年に隨つて交り、錐の穗先が嚢から脫けだすごとく何物も之をさへぎることができなかつた。』司空は哥舒翰につきしたがうた頃からその意氣は沙漠地方眼中に無きのありさまであつたが、まだたいして卒伍のなかまから拔擢さるるでもなかつた、ところへ犬戎（吐蕃）が非常に多くおしよせてきた。そのとき司空は小がらでせはひくいが精悍な姿で屹然として强寇に敵し、敵の百萬の衆を突破して、其の間に出はいりすることは咫尺の間を往來するがごとく、馬の鞍には敵將の首を懸け、鎧の袖のそとには鏑箭を鳴りひびかせた。かくして靑海の水で劍の血を洗ひ、天山の石に戰功の銘文を刻みつけ、吐蕃の王は遁れて奧へ奧へとはいつて壘壁を設け、黃河九曲の地方はもはや外蕃でなく我が內地のものとなつた。まことに飛兔の神馬は馳すれば必ず萬里の遠きに於てする、鷙鳥に貴しとする所はそれが遠く飛んで獲物を擊つからである。』司空は諸家の兵法に通達してをり、杜征南のごとく「春秋左傳」癖あつて學問もされることは世の十分聞き知つてをるとほりである。司空の胸中はいつも沈靜であり、しづかに自己の意に滿足してをらるるところがある。』かの祿山の亂に潼關の官軍が總崩れになつたときは萬乘の天子（玄宗）もなほ辟易あそばされ、總大將（哥舒翰）は捕虜にされる、その部將としての司空は手のほどこし樣がなかつた。そのうちに太子（後の肅宗）は朔方へお入りになる、天子は梁益（蜀）へ出狩あそばされる、伊洛二水の地は賊軍の馬がまとひつく、河南地方は朝廷に不順の氣がさかんであつた。このとき肅宗が寶位にお登りになつたが、それは天下の人望を塞ぐためであつくせまられた勢に已むを得ず天子となられたのである。司空はそのときかちあるきして御卽位の地（靈武）へ來て敗軍の責任を負うて處罰を願ひ出で、厚く責められようとした。をりよくも淸河公（房琯）が蜀の方から間道をとほつて來て玄宗からの御讓位の玉冊を傳へた、肅宗は拜跪してそれをおうけになり、一方に房公の正論をおききいれになつて司空に關する嫌疑は渙然氷釋する樣になつた。』それから肅宗の翠華の御旗は吹雪のうちにひるがへり、將士熊虎の旗は田野の道路をおほうてたちならぶ、天子は鳳凰山に兵を屯せしめられ、帳殿を設けてやつと涇渭二水の流域を暗塞のなかからおひらきあそばされた。そのとき京師とほどとほからぬ金城の地（今の興平）は賊の咽喉にあたるといふので司空は詔をうけて其地を鎭して要害の場所に雄威を示され、敵の暴行を禁じたので地方の安泰なること他に雙ぶものなく、春にかかはらず一種淸爽の氣が淅瀝として動き、閭巷のものは司空の德をしたうて「從公」の歌をうたひ、野の面には耕作物があらさるることなく靑靑としげつた麥が多くあつた。』肅宗がいよいよ先づ宗廟に哭禮を行はれて京師へおかへりになつてから、司空はまた河東節度使として太原の軍務をおあづかりすることになつた。司空は一方に祿位の高いことを恐懼し、一方にはまだまだ天子の御權力の及ぶ土地がせまいことをな

げいてをられたのに、太平の時節を見ることを得ざるうちになげかはしくも長き夜の眠りに就いてしまはれた。自分は范蠡が五湖にうかんだごとくながく南方の水に舟をつないでをり、司空に對しては田横の門人がいだいた以上の悲みをもつてをる。ああ汾水地方の事は永久に雲水の消え去るごとくうせてしまつたのである。』じぶんは昔歴史をよんで文苑傳をよんだがそのなかには廉頗や藺相如の様なりつぱな武將の事は記述してなかつた。(武將と文臣とはおのづから遣り口がちがうのだ)廉藺に比すべき司空がなくなられてから之に代つたものは文苑傳にのつてしかるべき様な鄭景山であつた。この任命がまちがつたために太原の士卒はつひに戟を倒にとつて叛亂をするに至つたことはかへすがへすも残念なことである。』

〔二〕 故司徒李公光弼(一)

〔二〕 故の司徒李公光弼

司徒天寶末、北收(二)晉陽甲。　司徒天寶の末、北のかた晉陽の甲を收む。
(三)胡騎攻(四)吾城、愁寂(五)意不愜。　胡騎吾が城を攻む、愁寂意愜はず。
人安若(六)泰山、(七)薊北斷(八)右脅。　人安きこと泰山の若し、薊北右脅を斷つ。
(九)朔方氣乃蘇、黎(一〇)首見(一一)帝業。』　朔方氣乃ち蘇す、黎首帝業を見る。』
(一二)二宮泣西(一三)郊、九(一四)廟起(一五)頽壓。　二宮西郊に泣く、九廟頽壓せらるるを起す。
未散河陽卒(一七)、思明僞臣妾。　未だ散せず河陽の卒、思明僞りて臣妾たり。
(一八)復自碣石來、火(一九)焚乾(二〇)坤獵。　復た碣石より來る、火焚乾坤に獵す。
(二一)高視笑祿山、公(二二)又大獻(二三)捷。』　高視祿山を笑ふ、公又大に捷を獻ず。』
(二四)異王冊(二五)崇勳、小(二六)敵信所怯。　異王崇勳を冊せらる、小敵信に怯るる所なり。
擁兵鎭(二七)汴河、千里初妥(二八)貼。　兵を擁して汴河を鎭す、千里初めて妥貼なり。
(二九)青蠅紛營營、風雨秋(三〇)一葉。　青蠅紛として營營たり、風雨秋一葉。
(三一)內省未(三二)入朝、死(三三)淚終映睫。』　內省未だ入朝せず、死淚終に睫に映ず。』
(三四)大屋去高棟、長城掃(三五)遺堞。　大屋高棟を去り、長城遺堞を掃ふ。
平生白(三六)羽扇、零落蛟(三七)龍匣。　平生白羽扇、零落す蛟龍の匣。
(三八)雅望與英(三九)姿、悽愴槐(四〇)里接。　雅望と英姿と、悽愴槐里に接す。
三軍晦(四一)光彩、烈(四二)士痛稠(四三)疊。』　三軍光彩晦し、烈士痛み稠疊たり。』
直筆在史(四四)臣、將來洗(四五)筐篋。　直筆史臣に在り、將來筐篋を洗はむ。
吾思哭孤(四六)冢、南(四七)紀阻歸(四八)楫。　吾孤冢に哭せむことを思ふも、南紀歸楫阻せらる。

扶顚永蕭條、(四九)未濟失(五〇)利涉。　扶顚永く蕭條たり、未濟利涉を失す。

(五一)疲苶竟何人、(五二)灑涙巴東峽。(五三)』　疲苶竟に何人ぞ、涙を灑ぐ巴東の峽。』

【字解】【一】故司徒李公光弼　故は已死者を稱す、司徒は官名、光弼をさす。【二】收晉陽甲　晉陽は山西省太原府、太原は唐に北都と稱し都督府を置く、甲は武裝せる兵をさす。晉陽の甲を收むとは太原尹・北京留守たりしをいふ。收晉陽甲の字面は「公羊傳」の晉趙鞅取₌晉陽之甲₋、以逐₌荀寅₋に本づく。傳によるに郭子儀朔方節度たりしとき李光弼を薦めて雲中太守となし河東節度副使に充つ。潼關守を失ふや戸部尚書を授けられ、太原尹・北京留守を兼ね、至德二年、史思明等の四僞帥（祿山が將をいふ）衆十餘萬を率ゐて太原を攻む。光弼拒守すること五十餘日、賊の怠るを伺ひ出で擊つて大に之を破り、首を斬ること七萬餘級、檢校司徒を加へられ、ついで司空に遷さる。【三】胡騎　賊の騎兵。【四】晉城　太原城。【五】意不愜　守城の人不安の念をいだくをいふ。【六】若泰山　動搖せざる貌をいふ。【七】薊北　薊州の北部、祿山の根據地。【八】斷右骨　「西域傳」に、斷₌匈奴之右臂₋の語あり、此その意を取りて臂を骨とせり、右とは西をいふ、太原は薊の西にあたるを以て之を右骨といへり。【九】朔方　北方。【一〇】黎首　黑頭、人民をいふ。【一一】見帝業　當時安祿山・史思明亂を稱へ、祿山は河北より潼關に向ひ、思明は山右より秦隴を窺ふ、光弼西のかた賊衝を扼せしによりての故に朔方虞なくして肅宗業を靈武に起すことを得たり、これ至德元年の事なり。起八句は太原を守りし功をいふ。【一二】二宮　玄宗肅宗。【一三】西郊　長安の西郊、入京の途筋なり。【一四】九廟　天子の廟をいふ。周制に、后稷を太祖廟とし百世遷さず、その左に文王の世室、右に武王の世室（世室も亦廟なり）を設き其外に昭（左）穆（右）の位によりて三昭三穆の廟を設く、合して九廟なり。【一五】起顚壓　くづれ壓倒されたるを起す。【一六】未散河陽卒　河陽卒とは郭子儀の部下をいふ。時に子儀等東京（洛陽）を收め、戍兵未だ撤せず。河陽については卷七の「河陽役」句解をみよ。一〇頁【一七】思明僞臣妾　至德二載十二月、史思明所部十三州を以て來り降る。のち復た叛く、故に僞といふ。臣妾とは越王句踐が吳王夫差に降りしとき身は臣と稱し妻は妾と稱せんといひしに本づく。【一八】復自碣石來　碣石は渤海灣の今の秦皇島附近にありし石門の名、古燕地に屬す。賊の根據地に近し、乾元元年に史思明復た反し、二年には軍を四道に分ち河を濟りて汴に會し西のかた鄭州を攻む。【一九】火焚　火をたく、獵のとき獸をかりだすに行ふ。【二〇】乾坤激　天地の間に激する、賊軍の民家を燒き掠奪を恣にするをたとへていふ。【二一】高視　めをあげて高く視る、矜傲のさま、思明が態度。【二二】公　光弼。【二三】獻捷　乾元二年七月光弼、郭子儀に代り朔方節度使・兵馬元帥となる。十月思明河陽を攻む。光弼之と中潬の西に戰つて大に之を破る、又懷州を收めて安太淸を擒にし、俘を太廟に獻ず。以上「二宮」八句は史思明を破りし功をのぶ。【二四】異王　異姓王なり、唐の皇族の出にあらずして王爵を賜はりしをいふ。光弼懷州を平ぐる功を以て寶應元年五月臨淮郡王に進封せらる。【二五】册崇勳　册とは記錄にかくこと、崇勳はたかきいさをし。【二六】小敵信所怯　光弼北邙の敗を忌みてかくいへり。上元二年二月、光弼、史思明と邙山の下に戰ひて敗績す。時に光弼は魚朝恩・僕固懷恩がためにうながされて已むを得ず兵を進め遂に敗を取れり。小敵云云は後漢の光武が故事。光武、王尋等と戰ふ、自ら步騎千餘に將として前去す、諸部喜びて曰く、劉將軍平生小敵を見れば怯、今大敵を見て勇なり、甚だ怪む可きなり、と。詩句は光弼は敗軍せりといはずして光武のごとく小敵の前には怯なるなりと取りなしていへるなり。異王・小敵二句、事實は敗軍が封王の前なれども、押韻のために置きかへていへり。【二七】鎭汴河　汴河は汴水と黃河、河南及び江蘇北部をさす。上元二年五月に光弼は河南副元帥となり八道行營節度を統べ、出でて臨淮に鎭す。【二八】妥貼　おだやかにおちつく。【二九】青蠅營營　「詩」小雅に青蠅篇あり、青蠅が白を汚して黑ならしむることを以て讒人が善惡を變亂することにたとへたり。此句は光弼が讒言を被りしをいふ。營營とは蠅の往來して飛ぶときの聲なり。讒人は魚朝恩・程元振等を指す。北邙の敗るるや魚朝恩其策の誤れるを慙ぢて深く光弼を忌む。程元振尤も之を嫉む。來瑱（宰相なり）元振がために讒死するに及び光弼いよいよ恐る。廣德元年十月、吐蕃の長安に入寇するや代宗光弼に詔して入援せしむ、光弼禍を畏れ遷延敢て行かず。【三〇】秋一葉　形勢の危きをいふ、「淮南子」に一葉落而知₌秋₋とみゆ。【三一】內省　光弼がみづから自己に過失あるや否やをかへりみるをいふ。【三二】未入朝　代宗より召されながら朝廷へでかけぬ。上をみよ。【三三】死淚終映睫　死せしをいふ。睫は「まつ毛」。光弼は廣德二年七月徐州に薨ず、年五十七。太保を贈り、武穆と諡す。以上「異王」八句は封王ののち久しからず讒を憂へて卒せしをいふ。【三四】大屋二句　朝廷、倚賴者を失ひしをたとふ。【三五】掃遺塵　掃ははき去りてなくするをい

ふ。遺堞はのこれるひめがき。【三六】白羽扇　白き羽のうちは、軍配、諸葛孔明之を持ちて軍を指揮せり、借用していふ。【三七】蛟龍匣　金の縷を以て蛟龍の像をかがりだした縅緘の簑衣、貴人の用具なり。哭二嚴僕射歸櫬一詩（巻十四の二五一頁）にも鳳益蛟龍匣の句あり。【三八】雅望　上品なすがた。【三九】英姿　武に秀でた姿。【四〇】槐里接　槐里は地名、興平縣東南十里にあり、漢の武帝は槐里の茂陵に葬る、衞青・霍去病の墓は茂陵を去る三里ならず。光弼が墓は三原にあり、唐の高祖の獻陵も三原にあり、詩句は光弼の墓の獻陵に接すること衞霍の墓の茂陵に接するごとくなるをいふ。【四一】晦光彩　乾元二年七月光弼、郭子儀に代り朔方節度使・兵馬元帥となり、東都（洛陽）の軍を領するや號令一施、士卒壁壘、旌旗の精彩皆變ず、といはる。今死せり、故に光彩くらし。【四二】烈士　壯士をいふ。【四三】稠疊　おほくかさなりつもる。以上「大屋」八句は光弼沒して人に悼まるるをいふ。【四四】史臣　歴史官。【四五】洗箱篋　箱篋は讒言の書を收めしはこをいふ、洗とはそのけがれを洗ひ去るなり。戰國の時、魏の文侯、樂羊をして將として中山を攻めしめ三年にして之を拔く。樂羊返りて功を論ず、文侯之に謗書一篋を示す、樂羊再拜稽首して曰く、此れ臣が功に非ず、主君の力なりと。「史記」甘茂傳にみゆ。詩句之を用ふ。【四六】孤冢　光弼がつかをいふ。【四七】南紀　江水漢水をさしていへり。「詩」小雅四月篇に滔滔江漢、南國之紀、とみゆ。江漢二水は南方衆川の紀綱となるをいふ。【四八】阻歸楫　故郷へかへる楫をじやまされてゐる。【四九】扶顚　顚覆せんとするをたすけささへる。光弼の材能をいふ。文字は「論語」季氏篇にみゆ。【五〇】未濟失利涉　「易」の未濟卦の六三に、未濟、征凶、利ㇾ涉ㇾ大川ㇳ、とみゆ。水を濟らぬうちに之を涉る利を失へりといふなり。又「尙書」說命上に、若濟ㇾ巨川ㇳ用ㇾ汝作ㇾ舟楫ㇳ、とみゆ。利涉とは舟楫をいへり。光弼を以て川を濟るときの舟楫に比す。【五一】疲苶　苶は「つかる」。【五二】竟何人　何人とは暗に自己をさす。【五三】巴東峽　夔州をさす。以上「直筆」八句は司徒の心事を明かにし哀惜の情を敍せり。

【題義】李公弼をかなしみてよめる詩。

【詩意】司徒李公（光弼）は天寶の末年に河東節度副使となつて北のかた晉陽（太原）の兵を手下とされた。そのとき逆胡史思明等が吾が太原の城を攻めてきたので守城のものはしんぱいして不安の念をいだいたが、公は賊軍をうち破つて薊北の右脅を斷ちきつたので、人民の安らかなること泰山のごとく、朔方の地は元氣よみがへり、人人ふたたび帝業を仰ぎ見るに至つた。』玄宗肅宗二宮はみやこの西郊に泣哭せられ、賊のために焚毀せられた九廟をやつと頽壓から起したとき。時に官軍はまだ河陽を守つてゐたが、賊史思明はいつはつて降參をし、ふたたび碣石の方からやつて來て、諸處を火で焚きはらひ天地のあひだで狩獵でもやる樣なさまを爲し、彼の傲慢な態度は安祿山をも嘲笑してゐるかのごとくであつたが、公はそれをもうち破つて宗廟に大捷を獻せられた。』公は邙山では敗軍されたが、それは敗軍といふよりは、後漢の光武が小敵を見ては臆病であつたといふ樣なものにすぎぬ。つひに公は大功によつてたかき勳を記錄せられて異姓の郡王に封せられた。それから公は黃河汴水の地方を鎭せられて千里の地ははじめておだやかにおちついた。ところがまた青蠅のごとき讒言者にうなりたてられて公の地位の危いことは風雨に散らされんとせる秋の一葉の樣になり、公自らその行ひの是非を反省するために謹愼してまだ朝廷のお召しに應じて入朝もしなかつたうちに睫に死の淚をやどすことになつてしまつた。』公なきのちの朝廷はたとへば大きな屋から高い棟をとり去つたごとく、長城から遺つてゐた堞をはらひのけたごときものである。平生白羽扇を手にして軍を指揮してをられたのが、いまや蛟龍のよろひかたびらを身につけるまでにおちぶれてしまはれた。品のよいすがた

もいさましかつたすがたも、いまはみえず、ものがなしくも衞・霍の墓が槐里の茂陵に接するごとく公の墓は獻陵に接する樣になつた。公沒しては三軍も光彩がくらくなつた。烈士たるもののむねのうちは痛ましきおもひのみつみかさなる。』公は一時讒言によつてうたがひを受けたが公の公明なことをまつすぐに書きしるすことは歷史官の手に在ることで、將來必ず生前の誹謗を洗ひ去るであらう。自分はみやこへかへつて公のさびしい塚に哭したいとおもうてゐるが、いま南方江漢の流るるところで歸棹をじやまされてをる。公の生時大廈の顚せんとするを扶けられたことは永久にさびしいものになつた。公のなくなられたために我我は大川を濟らざるうちに舟楫の利便を失うた樣なものである。いかなるものなればか自分はつかれはてた身を以て巴東の峽で淚をそそぎつつあるのである。』

〔三〕 贈左僕射鄭國公嚴公武

〔三〕 贈左僕射鄭國公嚴公武

鄭公瑚璉器、華岳金天晶。　鄭公は瑚璉の器、華岳金天に晶たり。
昔在童子日、已聞老成名。　昔童子の日に在り、巳に聞く老成の名。
嶷然大賢後、復見秀骨淸。　嶷然たる大賢の後、復た見る秀骨の淸きを。
開口取將相、小心事友生。　口を開けば將相を取らむといふ、小心友生に事ふ。
閲書百氏盡、落筆四座驚。　書を閲して百氏盡く、筆を落せば四座驚く。
歷職匪父任、嫉邪嘗力爭。』　職を歷るは父の任に匪ず、邪を嫉みて嘗に力爭す。』
漢儀尙整肅、胡騎忽縱橫。　漢儀尙ほ整肅、胡騎忽ち縱橫なり。
飛傳自河隴、逢人問公卿。　飛傳河隴よりす、人に逢へば公卿を問ふ。
不知萬乘出、雪涕風悲鳴。　知らず萬乘の出でしを、雪涕風悲鳴す。
受辭劍閣道、謁帝蕭關城。　辭を受く劍閣の道、帝に謁す蕭關城。
寂寞雲臺仗、飄颻沙塞旌。　寂寞たり雲臺の仗、飄颻たり沙塞の旌。
江山少使者、笳鼓凝皇情。』　江山使者少し、笳鼓に皇情凝る。』
壯士血相視、忠臣氣不平。　壯士血相視る、忠臣氣平かならず。
密論貞觀體、揮發岐陽征。　密に論ず貞觀の體、揮發す岐陽の征。
感激動四極、聯翩收二京。　感激四極を動かす、聯翩二京を收む。
西郊牛酒再、原廟丹靑明。』　西郊牛酒再びす、原廟丹靑明かなり。』
匡汲俄寵辱、衞霍竟哀榮。　匡汲俄に寵辱、衞霍竟に哀榮。

(五〇)四登會府地。(五一)三掌華陽兵。　四たび登る會府の地、三たび掌る華陽の兵。
(五二)京兆空柳色。(五三)尙書無履聲。　京兆空しく柳色あり、尙書履聲無し。
(五四)羣鳥自朝夕。(五五)白馬休橫行。』　羣鳥自ら朝夕、白馬橫行することを休む。』
(五六)諸葛蜀人愛。(五七)文翁儒(五八)化成。　諸葛蜀人愛す、文翁儒化成る。
(五九)公來雪(六〇)山重。公去雪山輕。　公來れば雪山重く、公去れば雪山輕し。
(六一)記室得(六二)何遜。(六三)韜鈐延(六四)子荊。　記室何遜を得、韜鈐子荊を延く。
(六五)四郊失壁壘。(六六)虛館開(六七)逢迎。　四郊壁壘を失す、虛館逢迎に開く。
(六八)堂上指圖畫。軍中吹(六九)玉笙。　堂上圖畫を指し、軍中に玉笙を吹く。
豈無成都酒。憂國只細(七〇)傾。　豈に成都の酒無からむや、國を憂へて只だ細傾す。
時觀錦(七一)水釣。(七二)問俗終(七三)相并。』　時に觀る錦水の釣、問俗終に相并す。』
(七四)意待犬戎(七五)滅。人(七六)藏紅(七七)粟盈。　意は待つ犬戎の滅するを、人は藏す紅粟の盈てるを。
(七八)以茲報(七九)主願。庶獲裨(八〇)世程。　玆の報主の願を以て、庶はくは世程を裨くるを獲む。
(八一)炯炯一心在。沈沈(八二)二豎(八三)嬰。　炯炯一心在り、沈沈二豎に嬰る。

(八四)顏回竟短(八五)折。賈誼(八六)徒忠貞。　顏回竟に短折す、賈誼徒に忠貞なり。
(八七)飛旐出(八八)江漢。孤舟(八九)轉荊衡。　飛旐江漢に出づ、孤舟荊衡に轉せむとす。
(九〇)虛橫馬融笛。悵望龍(九一)驤塋。　虛しく橫ふ馬融が笛、悵望す龍驤の塋。
空餘老(九二)賓客。身上愧(九三)簪纓。』　空しく餘す老賓客、身上簪纓に愧づ。』

【字解】【一】贈左僕射鄭國公嚴公武　嚴武字は季鷹、華州華陰の人、嚴挺之が子なり。卒して左僕射を贈らる。【二】鄭公　鄭國公、武をさす。【三】瑚璉器　「論語」公冶長篇に孔子、子貢を許して瑚璉の器なりといへり。包咸が注に云ふ、瑚璉は黍稷の器、夏に瑚といひ、殷に璉といひ、周に簠簋といふ、宗廟の器の貴き者なりと。包咸が注は鄭玄が說に本づけり。「禮記」明堂位篇に、夏后氏之四璉、殷之六瑚、周の八簋の本文あり、璉を夏の器、瑚を殷の器とし、「論語」注の「夏に瑚といひ、殷に璉といふ」といふものと合はず。「禮記」の孔穎達疏に「論語」の鄭注の誤なるよしたいへり。しからば瑚も璉も黍稷を盛りて供ふる宗廟の貴き器にして瑚は殷器の名、璉は夏器の名なることを知るべし。嚴武の材能を之に比するなり。【四】華岳金天晶　華岳は華山、五岳の內の西岳なり。華州に在り。嚴武は華州華陰縣の人なるによりて其地の名山をあぐ。金天は西天をいふ、晶は精光なり、金天晶とは西天に精光を放つごとくなるをいふ。【五】老成　おとなびたるをいふ。【六】嶷然　才德高き貌。【七】大賢後　大賢とは嚴武が父挺之をいふ、挺之は中書侍郎たり。後とはその子たるをいふ。【八】開口　談論をいふ。【九】取將相　取とは取らんとするをいふ。武は黃門侍郎に遷りしとき元載と厚く結びて宰相を求めんとせり。壯時已にかかる志望ありしをいふ。【一〇】小心　謹愼のさまをいふ。【一一】友生　友人、生とはわかものをいふ。【一二】百氏　百家といふがごとし。【一三】落筆　文章をかきおろす。【一四】歷職　いろいろの官職をへのぼること。【一五】父任　任とは或は廕ともいふ、父が或る階級以上の官なれば其の子または孫は試驗を要せずして或る種類の官に就くことを得、之を任又は廕と稱す。武もはじめは廕によりて哥舒翰が判官となり、後に殿中侍御史に遷る。【一六】

靺鞨　よこしまなるをにくむ。【一七】書力爭　書は常におなじ。力爭はつとめて爭ふ、蓋し侍御史として爭ひしならん。以上起十二句は武が生ひたちと人品をいふ。【一八】漢儀　漢官の威儀、唐の朝廷の官吏の儀容をいふ。【一九】整齒　ととのひいかめし、武御史たるによりてしかるをいふ。【二〇】胡騎　安祿山の叛軍の騎。【二一】飛傳　傳は驛傳、しゆくつぎの早打ちの馬。【二二】河隴　河西・隴右、肅宗（時に尙太子）平涼の方に赴かれしを以て其の途筋をいふ。【二三】問公卿　公卿の安否をたづねる。【二四】高乘出　玄宗が蜀へ出奔せしをいふ。【二五】雪涕　涕を雪ぐとは涕を拭ひきよむるをいふ。【二六】受辭　玄宗の命をうく。【二七】劍閣　已に朦〻みゆ。【二八】關帝　帝は肅宗。【二九】蕭關城　甘肅省平涼府固原州東南にありと。【三〇】寂寞雲臺仗　雲臺は宮苑の高き臺、雲臺仗は宮中の儀仗をいふ、此句は玄宗の蜀の行在所をいへり。【三一】沙塞旄　沙塞は沙漠地方のとりで、靈武あたりをさす、此句は肅宗についていへり。【三二】江山　玄宗の居らるる蜀地の江山。【三三】少使者　玄宗よりの使者すくなし。【三四】凝宸情　凝は凝定、宸情は肅宗の心情。肅宗即位の決心きまりしをいふ。以上「漢儀」十二句は、武が祿山事變の時、玄宗の後を逐ひ、また肅宗の行在に謁せしをいふ。史にいふ、天寶十五載秋七月、太子（後の肅宗）平涼に至る、杜鴻漸・魏少游等、迎へて靈武に至り、河隴の勁騎を發し、南向以て中原を定めんと謀る、と。又武が傳にいふ、武、玄宗に從つて蜀に入り諫議大夫に擢でらる、至德の初（天寶十五載とおなじ）肅宗の行在に赴く、房琯薦めて給事中と爲す、と。【三五】血相視　おたがひ血の涙をだしてみあふ。此字面は江淹が別賦の抆血相視より借り、意は義憤のために血涙をそそぎあふをいへり。【三六】密論　人知れず論奏する。【三七】貞觀體　貞觀年中の太宗の能く治まれる政治のすがた。【三八】揮發　發揮に同じ、其の德旨のかくれたるをふるひだしてあらはすをいふ。【三九】岐陽征　岐陽は鳳翔をさしていふ、肅宗鳳翔（すなはち扶風）に行在所をおく、征は征行、軍務の際ゆゑ征といふ、其地にでてならるる事をさす。【四〇】聯翩　官軍のつづくさまをいふならん。【四一】收二京　長安洛陽を賊の手からとりかへす。【四二】西郊　長安の西の野外。【四三】牛酒再　牛肉と酒とは將士をねぎらふもの、再とは玄宗と肅宗と二回なるをいふ、至德二載九月癸卯に長安を復し、十月丁卯肅宗の車駕長安に入る。十二月丙午に上皇（玄宗）蜀より至る。これにて二回牛酒の事あり。【四四】原廟　原は重なる義、原廟とは已に一つ廟あるにまたそのうへに廟を設くるをいふ。ここは同時に二京の廟あるには非ずして、長安の宗廟さきに賊軍に焚かれしを以て、こんどまた新にそれを修むるをさして原廟といへり。【四五】丹青　廟の飾りとして木材に色をぬる。以上「壯士」八句は武が二京の收復に贊襄の功ありしをいふ。【四六】匡汲　漢の匡衡、汲黯、並に切諫を以て斥けられし人。【四七】寵辱　初め官に用ひられしは寵なり、斥けられしは辱なり。これは諫議大夫・給事中・御史中丞等としての嚴武をいふ。武は京兆少尹たりしとき房琯が事に坐せられ巴州刺史に貶せられ、久しうして東川節度使に遷さる。【四八】衞霍　漢の衞青、霍去病、並に武將なり。これは節度使としての嚴武をいへり。【四九】哀榮　生前顯要の官職に居りしは榮なり、死に至りしは哀なり。【五〇】四登會府地　會府とは省會をいふ、長安、成都、是なり、武は初め京兆少尹となりまた京兆尹となり、ふたたび劍南を領するや皆成都尹を兼ねたり、これ四たび會府の地に登るなり。【五一】三掌華陽兵　華陽は縣名、卽ち成都、武は初め御史中丞を以て蜀の東川節度使となり、又ふたたび劍南節度使となる、これ三たび華陽の兵をつかさどるなり。【五二】京兆空柳色　漢の張敞が故事。敞、京兆尹となり朝會罷めば馬を章臺街に走らす。唐の時章臺は花柳の巷にして楊柳あり、武、京兆尹をやめしときには徒らに柳色をあますのみ。【五三】尙書無履聲　漢の鄭崇が故事。哀帝のとき崇、尙書たり、常に革の履を曳き諫諍す、帝曰く我、鄭尙書が履聲を識れりと。武、地方に出で官せるときには朝廷鄭尙書の履聲をきかざるなり。【五四】羣烏自朝夕　御史の故事。「漢書」朱博傳にいふ、御史府中に柏樹列る。常に野烏數千ありて其上に棲集し晨に去り暮に來る、號して朝夕烏といふ。武が御史中丞たりし時、又御史大夫たりし時、其府此のごとくなりしをいふ。【五五】白馬休橫行　梁の侯景叛して白馬に乘る、これ盜賊をいふ。橫行はかつてにあるくをいふ。句は武が力により盜賊橫行せざるに至りしをいふ。（此句後漢の張堪が故事を用ふととくものあり、堪は光祿大夫にして常に白馬に乘る、光武異議をなす每に白馬生復た諫むるならんといひしとぞ。此說を爲す者は以て嚴武が諫に比せんとするなり、ただ直諫の士の事について設するに「橫行」とは言ふべきに非ず、故に今取らず。）以上「匡汲」八句は武の歷任の終始と存歿の槪をいへり。【五六】諸葛　孔明、武に比す。【五七】文翁　漢代蜀に敎化を開きし人、已に見ゆ、武に比す。【五八】儒化　儒道の敎化。【五九】公　武をさす。【六〇】雪山　西山、吐蕃境に橫はる、よりて蜀地西境をさす。【六一】記室　書記官。【六二】何遜　梁の文學者にして建安王の記室となる。【六三】韜鈐　太公望の兵法といふものに六韜及び玉鈐篇あり。それ等の兵書に通曉するものをいふ。【六四】延子荊　延はまねきひくこと、

子荊は晉の孫楚が字、楚は石苞が驃騎の軍事に參せり。【六五】 四郊失壁壘 「禮記」に四郊多壘、此卿大夫之辱、とみゆ。國に戰亂あるを以て四方の郊に壘を多く設くるにいたるなり、故に多壘は大臣たる者の恥辱なり、いま「失す」といふは平和に治まるをいふ。【六六】 虛館 大きくてがらんどうのやかた。【六七】 開逢迎 逢迎のために開く。逢迎とは賢士を迎へるをいふ。【六八】 堂上指圖畫 圖畫は地圖をさす、作者前に奉觀嚴鄭公廳事岷山沱江畫圖十韻の詩あり、それらをさす。【六九】 吹玉笙 りつぱな笙を吹くとは軍政に餘裕あるをいふ。【七〇】 細傾 ちびりちびりと傾けてのむ。酣醉に耽らざるをいふ。【七一】 錦水釣 錦江浣花溪の草堂に於ける作者の釣魚。【七二】 間俗 風俗を視察する。【七三】 參和井 井とは觀釣ともに之を爲すをいふ。以上「諸葛」十四句は成都に於ける武が生前を追憶す。【七四】 宣 嚴武がこころ。【七五】 犬戎 吐蕃。【七六】 人藏 人ごとに藏蓄する。【七七】 紅粟 紅は古米のくさりかけた色、多くの粟を久しく藏しおく結果なり。【七八】 以茲 茲とは下の願をさす。【七九】 報主願 「報主の願」とは天子の御恩に報いんとのねがひなり。【八〇】 裨世程 裨は補益するなり、世程は萬世の法程、「漢書」賈誼傳にみゆ。【八一】 炯炯 かがやく貌。【八二】 沈沈 病のふかまりゆく貌。【八三】 二豎嬰 病にかかること。「左傳」に云ふ、晉侯疾病み醫を秦に求む、秦伯醫緩をして之を爲めしむ。晉侯夢に疾二豎子となる、其一が日く肓の上・膏の下に居らば我を若何にせむと。豎子は「やつこ」なり。【八四】 顔回 孔子の門人、三十二歲にて卒す。【八五】 短折 わが死にをいふ。「尙書」洪範の孔傳に云、未だ六十ならざるを短とし、未だ三十ならざるを折とす。【八六】 賈誼 三十三歲にて卒す。【八七】 飛旐 旐は喪車の旐、これは柩舟のはたをいふ。【八八】 江漢 江水漢水。【八九】 孤舟轉荊衡 此句仇氏は武が柩舟のことと說きたるも、それにては衡の字落着なし、故に浦氏に從ひ作者自己の豫定をいふものとみるべし。孤舟は作者の下峽の舟なり、荊衡は荊州と衡山となり、作者峽を出でてのちはその方へ赴かんと期するなり。衡山は衡南の衡陽縣にあり。【九〇】 馬融笛 後漢の馬融笛を吹くを好み長笛賦を著はす。此句馬融其人の吹く笛と說くものあり。馬融を痛むがために吹く笛と說くものあり。今後說に從ふ。馬融を引くはその音律を愛する點のみを取りて武と比するなり。【九一】 龍驤塋 晉の武帝、王濬を以て龍驤將軍となし吳を伐たしむ。功あり。濬は太康六年卒し柏谷山に葬る。大に塋域を營み葬垣周四十五里なりきと。龍驤塋は王濬が墓をいふ、以て武が墓に比す。【九二】 老賓客 作者自らをいふ、作者は嘗て武が幕府の客たり。【九三】 簪冠纓 簪はかんざし、纓は冠のひも、文官の禮裝をいふ、作者工部員外郎の官位をさしてかくいへり。以上「寶符」十四句は武が逸墮をしづめんとして未だ了らずして卒せしことを痛みたり。

【題義】 死後に左僕射を贈られた鄭國公嚴武をいたんだ詩。

【詩意】 鄭國公嚴武は宗廟の寶器たる瑚璉のごとき人で、華岳が西天に精光を放つてゐる樣なさまがある。むかしこどもであつた頃から已に老成だといふ評判を耳にしてゐた。公の父（挺之）は巍然たる大賢人であつたが、公は其の子として生れいでてまたすつきりとした秀骨をもつてゐた。公は口を開けば將相の地位を取るといふてゐたが一方には謹愼して友人に事へたものだ。書籍を閱するときは百家を讀みつくし、文筆を落せば四座の人人を驚かした。いろいろの官職を歷のぼつたが父が官吏だつた特典によるものではなく、邪惡をにくんではいつもつとめて其の事について論爭してをつた。」朝廷は平和で官吏の儀容もまだ整肅であつたとおもうてゐると急に叛亂（安祿山の）がおこつて胡騎が縱橫にはびこる樣になつた。この時河隴の方面から早打ちの傳騎がくると公は逢ふ人ごとに公卿の樣子はどうかとたづねられた。公は萬乘の天子（玄宗）が逃げ出されたことを知らずにをられたのでそれを知つて悲風の鳴りひびくところに涙をおしぬぐはれた。それから蜀の行幸におともをして劍閣の道で君の仰せごとをうけ、方向を轉じてあたらしき帝（肅宗）に蕭關城で謁見をされた。時に蜀の行在では雲臺の儀仗さびしく、靈武の方面では沙漠地にたてられた旌が飄颻とただよはされつつあ

つた。靈武へは蜀の江山からの使者のくることもいとまれで、肅宗皇帝には笳鼓の音のうちに遂に皇位に即かうとの決心をされた。』されば壯士は義憤のために血涙をながしてみあひ、忠臣はその意氣に於て平かならざるものがあつた。で、公は（給事中として）密かに先祖太宗皇帝の貞觀の政治の體をひいて論じたりして、こんどの肅宗皇帝の岐陽（鳳翔）におでましになつてござる御趣旨を發揮する樣にした。公の言は感激をあたへて四方のはてをばうごかし、官軍は聯翩とつづいて進んで二京（長安・洛陽）を回收することになり、長安の西郊では二度まで牛酒を以て軍隊を歡迎し、賊手に焚かれた宗廟も二度めに修復されて畫の具の色飾りあざやかにかがやくに至つた。』（ただ公の官途には種種の變があつた。）諫臣として匡衡・汲黯に比すべき公は寵辱の運命倏にかはり、武將として衞靑・霍去病に比すべき公も生には榮えて死には哀まれる結果となつた。公は生涯のうちで四たび尹として省會の地の長官にのぼり、三たびまで節度使として華陽（蜀）の兵を掌られた。京兆の尹をやめたときはみやこには徒に柳色がのこり、諫官をやめたときは尙書の履聲をきくことができなくなつた。御史たりしときには府に朝夕の烏があつまり、白馬の盜賊も横行することができなくなつた。』（公が蜀へ赴任してからは）公は諸葛孔明の如く蜀人に愛せられ、また漢の文翁の如くその儒道の敎化は成就した。公が蜀に來れば雪山の地方も重きを爲し、公が蜀を去れば雪山の地は之がために重きを失ふが如く公の去來は蜀境の安危にかかるほどである。公の幕府の人材はといはば、文學者としては記室として何遜の如きものを得、兵法に通じたものとしては孫楚の如きものをまねきひく。騷亂がおこらぬから四方の郊には壘壁がなくなり、宏大な館を開いては賓客を逢迎する。正廳の上では治安を計るために地圖を指して形勢を按じ、他方には餘裕あつて軍中にも玉笙を吹きすさぶ。成都にはうまい酒が無いわけではないが、公は國を憂ふるの餘りただちびちびと傾けて大酒にはふけらぬ。時としては自分の草堂へ尋ねてきて錦江の魚釣りを眺められるが、それとて兼ねて風俗を視察されるのであつて單に遊びのためではない。』公の意では人人ごとに腐るほど澤山の穀物を藏せしめて犬戎（吐蕃）の滅絶するを期待された。かくして天子の御恩にむくいたいとかんがへ、それでどうか後世の法則となる樣な利益をはかりたいとおもうてをられた。この心は炯炯と輝いて存在してゐたのに重く病氣にかかることになつた。さうして賈誼は徒に忠貞の志のみをとどめて顏回は終にわか死にをしてしまつた。わたしの孤舟が峽をくだつて南のかた荊州衡山の方へでかけんとしてをるとき公の柩舟は喪の旌をひらめかして江漢の水流へと出かけてきた。自分はむなしく馬融をいたむの笛をよこたへ、うらめしく龍驤將軍ともいふべき公の墓地をばながめやる。公なき今はただ徒にこの老賓客の身を餘し、公のおかげで官位を授けられたことを思うて身に簪纓をつけることについてはづかしと考へるばかりである。』

〔四〕贈太子太師汝陽郡王璡

汝陽讓帝子、眉宇眞天人。
虬髯似太宗、色映塞外春。
往者開元中、主恩視遇頻。
出入獨非時、禮異見羣臣。
愛其謹潔極、倍此骨肉親。』
從容聽朝後、或在風雪晨。
忽思格猛獸、苑囿騰清塵。
羽旗動若一、萬馬肅駪駪。
詔王來射雁、拜命已挺身。』
箭出飛鞚內、上又回翠麟。
翻然紫塞翮、下拂明月輪。
從人雖獲多、天笑不爲新。

〔四〕贈太子太師汝陽郡王璡

汝陽は讓帝の子なり、眉宇眞に天人なり。
虬髯太宗に似たり、色映じて塞外春なり。
往者開元の中、主恩視遇頻りなり。
出入獨り非時、禮羣臣を見るに異なり。
其の謹潔の極まれるを愛し、倍ゝ此に骨肉親む。』
從容朝を聽くの後、或は風雪の晨に在り。
忽ち思ふ猛獸を格たむことを、苑囿に清塵騰る。
羽旗動くこと一の若し、萬馬肅として駪駪たり。
王に詔して來つて雁を射しむ、命を拜して已に身を挺んづ』
箭は出づ飛鞚の內、上又翠麟を回す。
翻然紫塞の翮、下りて拂ふ明月の輪。
從人獲多しと雖も、天笑爲に新ならず。

王每中一物、手自與金銀。』
袖中諫獵書、扣馬久上陳。
竟無銜橛虞、聖聽矧多仁。
官免供給費、水有在藻鱗。
匪惟帝老大、皆是王忠勤。』
晚年務置醴、門引申白賓。
道大容無能、永懷侍芳茵。
好學尙貞烈、義形必霑巾。
揮翰綺繡揚、篇什若有神。』
川廣不可泝、墓久狐兔鄰。
宛彼漢中郡、文雅見天倫。
何以慰我悲、泛舟俱遠津。
溫溫昔風味、少壯已書紳。

王一物に中つる每に、手自ら金銀を與ふ。』
袖中諫獵の書、馬を扣へて久しく上陳す。
竟に銜橛の虞無し、聖聽矧んや多仁なるをや。
官は供給の費を免る、水には在藻の鱗有り。
惟帝の老大なるのみに匪ず、皆是れ王の忠勤なるなり。』
晚年務めて醴を置く、門に引く申白の賓。
道大にして無能を容る、永く懷ふ芳茵に侍せしことを。
學を好みて貞烈を尙ぶ、義形はれて必ず巾を霑す。
翰を揮へば綺繡揚る、篇什神有るが若し。』
川廣くして泝る可からず、墓久しくして狐兔鄰る。
宛たる彼の漢中郡、文雅天倫を見る。
何を以てか我が悲みを慰めむ、泛舟俱に遠津なり。
溫溫たる昔の風味、少壯已に紳に書す。

舊(七六)游易磨滅、衰(七七)謝增酸(七八)辛。』　舊游磨滅し易し、衰謝增〻酸辛なり。』

【字解】【一】贈太子太師汝陽郡王璡　汝陽郡王李璡、天寶九載卒して太子太師を贈らる。李璡が事已に贈特進汝陽王璡二十韻（卷一の五三頁）飲中八仙歌（卷二の七七頁）等に見ゆ、併せ看るべし。【二】汝陽　李璡をさす。【三】讓帝子　讓帝は李憲、睿宗の子にして其の太子となる。玄宗、韋氏の亂を平げしを以て太子の位を玄宗に讓り寧王に封ぜらる。開元二十九年十一月薨す、年六十三、讓皇帝と諡す。璡は憲が子なり。【四】眉宇　まゆ、ひたひつき。【五】天人　天上界の人。【六】虬髯　虬の樣なあごひげ。【七】太宗　李世民。【八】色映塞外春　顏色溫和の狀をいふ。塞外は春なき地なり、そこにも春が生ずるほどなりといふはよほどのあたたかみあるをいふなり。孫逖が永樂公主の入蕃を觀る詩に、美人天上落、龍塞始應春、といへるは公主の美を花にたとへて龍塞に春生ずるならんといひしなり。容貌の美と、氣象の溫和とのちがひはあれども塞外に春を生ずといふ言ひかたは相同じ。【九】開元中　玄宗の時。【一〇】主恩　天子の恩。【一一】視遇　めながけよくもてなす。【一二】出入　璡が宮中へではいりすること。【一三】非時　時節に制限なし。【一四】禮　玄宗が璡を見るときの禮。【一五】愛其　其とは璡をさす。【一六】謹潔　謹愼、潔白。【一七】骨肉親　血筋のあひだしたしむ、讓皇帝と玄宗とは兄弟なれば、璡は玄宗の姪にあたる人なり。以上起十句は王の人品と平時玄宗からの恩寵とをのぶ。【一八】從容　ゆつたり。【一九】聽朝　朝政をきく。【二〇】格　手でうちたふす。【二一】苑囿　植物園。動物園。【二二】騰清塵　車馬の塵をあぐるをいふ。【二三】羽旗　羽を飾りにつけたはた。【二四】動若一　行列のととのひたるをいふ。【二五】肅駪駪　肅はしづかな貌、駪駪は多くが疾く行く貌。【二六】詔王　王は璡をいふ。【二七】拜命　天子の仰せをうける。【二八】挺身　わがからだを前へのりだす。以上「從容」八句は玄宗が王を獵によびだすをいふ。【二九】飛鞚　鞚は馬勒なり。飛とは馬を早くとばすをいふ。【三〇】上又　上とは玄宗をさす。【三一】回翠麟　翠麟は駿馬なり、回とは馬首をむけかへて王の射を助けんとするなり。【三二】翻然　ひるがへる貌。【三三】紫塞翮　雁をいふ。秦、長城を築くに紫碑を用ふ、故に之を紫塞といふ、紫塞翮とは紫塞よりとびわたる鳥の意にて雁をさす。【三四】下拂　下は「くだる」。【三五】明月輪　弓の勢を形容していふ。【三六】從人　おとも。【三七】獲多　えものの多し。【三八】天笑　天子の笑ひ。【三九】鮮新　それがために新に生ずる。【四〇】王　璡。【四一】手自　玄宗の手みづから。【四二】與　璡にあたへる。以上「箭出」八句は王の儕獵を敍す。【四三】袖中　王のそでのなか。【四四】諫獵書　かりをいさめる文書、前漢の司馬相如、武帝の獵を諫むる書あり。【四五】扣馬　扣は控に同じ、ひかへる。【四六】上陳　たてまつりのぶ。【四七】銜橛虞　馬車のひつくりかへるしんぱい。銜は馬の口ばみ。橛は車の長柄のそりの處。口ばみがきれたり、ながえのそりがはれたりすれば馬車はひつくりかへる。【四八】聖聰　天子の聰明なこと。【四九】供給費　狩獵の事について供給する費用。【五〇】在藻鱗　藻草のなかに樂しくおよぐさかな。【五一】帝老大　玄宗の年よりしこと。【五二】王忠勤　汝陽王の忠義勤勉。以上「袖中」八句は王のよく獵を諫めしをいふ。【五三】晚年　王の晚年。【五四】置醴　學者を敬禮するをいふ。漢の高祖の兄楚の元王は少きとき魯の穆生・白生・申公と俱に詩を浮邱伯に受く。元王、申公等を敬禮せしに穆生は酒を嗜まず、因つて爲めに醴を設けしといふ。【五五】申白賓　申公・白生のごとき賓客、上をみよ。【五六】道大　王の道德大なり。【五七】容無能　容はいれる、無能とは作者自己をいふ。【五八】永懷　懷とは作者がおもふなり。【五九】侍芳茵　春の花さきにほへるしとねにはんべりしこと。【六〇】倚貞烈　倚はたふとぶ、貞烈は忠烈をいふ。【六一】義形　義氣、顏色に形はるるをいふ。【六二】揮翰　ふでをふるふ、文章をつくること。【六三】綺繡揚　文彩のうつくしきこと。【六四】篇什　製作をいふ。【六五】若有神　神助あるがごとし。以上「晚年」八句は王の虛懷賢を容れ好學能文なりしをいふ。【六六】川廣不可泝　泝は「さかのぼる」。「詩」漢廣篇に、漢之廣矣、不可泳思、とみゆ。其意を用ふ。【六七】墓久　璡は天寶九載に卒したれば大曆元年を距ること十六年前にあり。【六八】宛彼　宛は「詩」蓼莪篇の鄭箋に宛見貌とあり、ゐながらそのままみる貌。【六九】漢中郡　漢中郡王李瑀をいふ、瑀は璡が弟、已に屢〻見ゆ。卷十一に戲題上漢中王三首、翫月呈漢中王、卷十二に戲作上漢中王二首等あり、作者最近には梓州にて逢ひたり。【七〇】文雅　文章風雅。【七一】天倫　兄弟の關係をいふ、「穀梁傳」に兄弟天倫也とみゆ。【七二】俱遠津　ともに遠きわたしばになる。時に作者は夔州に在り、漢中王は歸州に在り。【七三】溫溫昔風味　此句は又汝陽王を敘合す、溫溫は王の溫和なさま、風味とは風采氣味。【七四】少壯　自己のわかきときより。【七五】書紳　紳は大帶なり、之に書するは忘れぬためなり、文は「論語」にみゆ。【七六】舊游　汝陽・漢中をあはせていふ。【七七】

衰謝　老境をいふ、北周の王褒が與周弘讓書に、容髮衰謝の語あり、容貌衰へ毛髮減枯するをいふ。【三八】酸辛　心中の苦をいふ。
以上「川廣」十句は汝陽王より漢中王をも追想して感慨をのぶ。

【題義】　汝陽王李璡を哀んでよんだ詩。

【詩意】　汝陽王は讓皇帝の御子で眉やひたひつきは眞に天人のごとく、虬髯は太宗皇帝に似、その溫和な顏色がひとたびうつれば塞外の地にも春の色が生じるほどであつた。そのむかし開元年中には天子(玄宗)の恩遇しきりで、天子が王におあひになる禮は羣臣におあひになるとはちがひ、王だけは時節を論せずいつでも宮中へ出入ごかつてといふことであつた。天子は王が非常に謹愼で潔白であるところを愛せられていつそう御血續きあひが親みをまされた。』　玄宗は朝政をおききになつたのち時として風雪の晨などには猛獸を手うちにしようかとふと思ひつかれて車馬の塵をあげて苑囿へおでかけになる。羽をかざつた旗は整一に動き萬馬しとやかにむらがりかける。このをり王に詔があつて來つて雁を射よと仰せになると王は仰せをうくるや身をのりだして用意をされる。』　王は馬を飛ばせながら口ばみのあたりから箭を射出されると、玄宗も騣馬をむけかへて王に仕損じあらばうけてやらうとかまへられるが、それを待つまでもなく柴塞の雁はひらりと射落されて滿月のごとくひきしぼられた弓のあたりを拂ふ。いくら從者が獲物を多くとつたとて玄宗は新にそれがためお笑ひになることはないが、王が一物に射あてたまふごとに玄宗はきつとお手づから王に金銀をおあたへになる。』　だが王は袖中に諫獵書をおもちになつてずつと以前から玄宗の馬を控へてそれをたてまつり其意をおのべになつた。これがため玄宗には馬車がひつくりかへるのごしんぱいがなくてすんだ。まして天子ごしんが聰明で仁愛に富ませられたに於てをや。それで官は獵のために供給の費を出すことから免れ、水にも藻のなかで樂しくおよいでくらせる魚が居れたのである。これといふも天子がお年よりになられたためばかりでなく皆王が忠義勤勉であられたおかげなのである。』　汝陽王は晩年に、楚の元王のごとく賢者のため務めて醴を置き門に申公・白生のごとき學者の賓客を引かれた。王の道德宏大であつて自分ごとき無能の者をもお容れになつた、自分はながく花のにほうた茵に侍つたことを忘れることはできぬ。王は學を好んで貞烈な行ひをたふとばれ、その事にわたると義氣顏色にあらはれてきつと涙を流して巾をうるほされた。また王は筆をふるはれると綺繡の樣な文彩が揚り、できた製作物は神助があるかとおもはれるばかりであつた。』　川水が廣いのでそれをさかのぼつて王の墓のところまでゆくわけにゆかぬが王の墓は久しく狐や兎の近づく場所となつてゐる。あだかもまた彼の漢中王は文雅のおかたでいかにも汝陽王の御兄弟だといふことがうかがはれる。じぶんのいまの悲みはなんで慰められるかといふとこの漢中王とごいつしよに遠きわたりばに舟を泛べてをるといふことである。汝陽王の溫和なおありさまはじぶんが昔少壯のときから紳にかきしるして忘れぬ。いま御兄弟との舊遊をかんがへるとその迹は磨滅し易いとおもふ。そんなことをかんがへて老境のじぶんはいつそう心

のつらさを増すのである。』

〔五〕　贈秘書監江夏李公邕

長嘯宇宙間。高才日陵替。

〔五〕　贈秘書監江夏の李公邕

長嘯す宇宙の間、高才日に陵替す。

古人不可見。前輩復誰繼。』

古人見る可からす、前輩をば復た誰か繼がむ。』

憶昔李公存。詞林有根柢。

憶ふ昔李公の存せしとき、詞林根柢有り。

聲華當健筆。灑落富淸製。

聲華健筆に當る、灑落淸製富めり。

風流散金石。追琢山岳銳。

風流金石に散ず、追琢山岳銳し。

情窮造化理。學貫天人際。』

情は窮む造化の理、學は貫く天人の際。』

干謁走其門。碑版照四裔。

干謁其の門に走る、碑版四裔を照す。

各滿深望還。森然起凡例。

各〻深望を滿たして還る、森然凡例を起す。

蕭蕭白楊路。洞徹寶珠惠。

蕭蕭たる白楊の路、洞徹寶珠を惠す。

龍宮塔廟湧。浩劫浮雲衛。

龍宮塔廟湧く、浩劫浮雲衛る。

宗儒俎豆事。故吏去思計。

宗儒俎豆の事、故吏去思の計。

眄睞已皆虛。跋涉曾不泥。

眄睞已に皆虛し、跋涉曾て泥まず。

向來映當時。豈獨勸後世。』

向來當時に映す、豈に獨り後世に勸むるのみならむや。』

豐屋珊瑚鉤。麒麟織成罽。

豐屋珊瑚の鉤、麒麟織成の罽。

紫騮隨劍几。義取無虛歲。

紫騮劍几隨ふ、義取虛歲無し。

分宅脫驂間。感激懷未濟。

分宅脫驂の間、感激未濟を懷く。

衆歸賙給美。擺落多藏穢。』

衆は歸す賙給の美、擺落す多藏の穢。』

獨步四十年。風聽九皐唳。

獨步四十年、風に聽く九皐の唳。

嗚呼江夏姿。竟掩宣尼袂。』

嗚呼江夏の姿、竟に掩ふ宣尼が袂。』

往者武后朝。引用多寵嬖。

往者武后の朝、引用寵嬖多し。

否臧太常議。面折二張勢。

否臧す太常の議、面折す二張の勢。

衰俗凜生風。排蕩秋旻霽。

衰俗凜として風を生ず、排蕩秋旻霽れたり。

忠貞負冤恨。宮闕深旒綴。

忠貞冤恨を負ふ、宮闕旒綴深し。

放逐早聯翩、低垂困炎癘。
放逐早く聯翩たり、低垂炎癘に困む。

日斜鵩鳥入、魂斷蒼梧帝。
日斜にして鵩鳥入る、魂は斷ゆ蒼梧の帝。

榮枯走不暇、星駕無安稅。
榮枯走るに暇あらず、星駕安稅無し。

幾分漢廷竹、夙擁文侯篲。
幾たびか分つ漢廷の竹、夙に擁す文侯の篲。

終悲洛陽獄、事近小臣斃。
終に悲む洛陽の獄、事は近し小臣の斃れしに。

禍階初負謗、易力何深嚌。』
禍階は初より謗を負ひしことなり、易力なるに何ぞ深嚌［せるや。］

伊昔臨淄亭、酒酣託末契。
伊れ昔臨淄の亭、酒酣にして末契に託す。

重敍東都別、朝陰改軒砌。』
重ねて敍す東都の別、朝陰軒砌に改まる。』

論文到崔蘇、指盡流水逝。
論文崔蘇に到る、指し盡くす流水の逝くを。

近伏盈川雄、未甘特進麗。
近くは盈川の雄なるに伏するも、未だ甘んぜず特進の麗［なるに。］

是非張相國、相扼一危脆。
是非す張相國、相扼して一に危脆なり。

爭名古豈然、關鍵欻不閉。
名を爭ふ古豈に然らむや、關鍵欻ち閉ぢず。

例及吾家詩、曠懷掃氛翳。
例吾が家の詩に及べば、曠懷氛翳を掃ふ。

慷慨嗣眞作、咨嗟玉山桂。
慷慨す嗣眞が作、咨嗟す玉山の桂。

鐘律儼高懸、鯤鯨噴迢遰。』
鐘律儼として高く懸る、鯤鯨噴いて迢に遰く。』

坡陀青州血、蕪沒汶陽瘞。
坡陀たる青州の血、蕪沒す汶陽の瘞。

哀贈竟蕭條、恩波延揭厲。
哀贈竟に蕭條たり、恩波揭厲を延く。

子孫存如綫、舊客舟凝滯。
子孫存すること綫の如し、舊客舟凝滯す。

君臣尚論兵、將帥接燕薊。
君臣尚ほ兵を論ず、將帥燕薊に接す。

朗詠六公篇、【原注】公有張相等五王泊狄相六公詩。
朗詠す六公の篇、

憂來豁蒙蔽。』
憂來つて蒙蔽豁なり。』

【字解】【一】贈秘書監江夏李公邕　李邕をいふ、邕に關しては陪李北海宴歷下亭詩（卷一の三三頁）あり。邕は廣陵江都（今の揚州府江都縣）の人、「文選」の注を以て有名なる李善が子なり。天寶六載李林甫に忌まれて殺さる。代宗の朝に秘書監を贈られしを以て贈秘書監といふ。江夏の李公と稱せしは理由夫のごとし。「新唐書」世系表によるに、後漢の會稽太守高陽侯、徙つて江夏に居る、遂に江夏の李氏となる。其後元哲徙つて廣陵に居る、元哲、善を生む、善、邕を生む。故に題して江夏の李公といふ。【二】長嘯　作者がうそぶくなり。【三】陵暜　暜は替の誤なり。陵替とは下陵上替の意、尊卑序を失ふをいふ。語は「左傳」にみゆ。作者「陵がれすてらるる」意として用ひしか。一本に陵を論に作るといふ、論は「しづむ」なり、論替ならば義明かなり。【四】誰繼　誰か前賢をつがむの意。起四句は高才の日に衰ふるを嘆す。【五】李公　邕。【六】詞林　文學の社會。【七】根柢　柢もまた木の根なり、

學に本源あるをいふ。【八】犀筆　犀名のひかり。【九】當健筆　當とはそれに適當して似つかはしきをいふ、健筆とは雄健なる筆致をいふ。【一〇】濩落　あつさりとしたすがた。【一一】清歎　文章の清らかなるもの。【一二】風流二句　上の健筆の句をうく。【一三】散金石　散は刊布さるるをいふ、金石は金や石に刻するなり。【一四】追琢　「詩」棫樸篇に追ニ琢其章一、とみゆ。追は雕なり、琢は「みがく」なり。【一五】山岳記　山岳のごとくするどし、碑勢を形容していふ。【一六】情窮二句　上の根抵をうく。以上「懷昔」八句は文章學問をのぶ。【一七】干謁　他人が求め謁する。【一八】其門　邕が門。【一九】碑版　碑は石碑、版は金版、金版に文をかきて墓に埋めてやる。【二〇】四裔　四方の遠地。【二一】滿深望　滿足するをいふ。【二二】森然　きちんとならぶさま。【二三】起凡例　碑版の文の一般原則を創立するをいふ。【二四】白楊　葉うらの白きやなぎ、墓地に植うる樹なり、これ墓道碑についていふ。【二五】洞徹　珠のすきとほること。【二六】寶珠惠　寶珠は文字の美しきをたとへていふ、惠とは施し與へること。【二七】龍宮　佛寺道觀をいふ。【二八】塔廟　蓋し塔は寺についていひ、廟は觀についていふ。【二九】浩劫　永き年月をいふ。【三〇】宗儒　人より宗とし貴ばるる儒。【三一】俎豆事　俎は「まないた」、豆は「たかつき」、共に祭りに物を盛る器なり。此句は學校の碑をいふ。【三二】故吏去思計　故吏とはもと部下たりし官吏をいふ、去思とは其地の長官轉任して去るとき故吏等去後に之を思ふなり、計とは去後の思を獻むるために計りて遺愛碑などをたつるをいふ。【三三】睇睞　睇は「ななめにみる」、睞は「あそびながむる」、碑を看るをいふ。【三四】虛　其人皆去るをいふ。【三五】跋涉　山をふみ水をわたる。【三六】不泥　道路の困難なことに拘はらぬ。泥は「なづむ」。【三七】向來　まへかた。【三八】當時　邕が生存の時をいふ。【三九】勒　碑中の人物の行事を以て後世に勸戒とする。以上「干謁」十四句は邕が碑版の世に重んぜられしをいふ。【四〇】豐屋　富家をいふ。【四一】珊瑚鉤　さんごで作つた簾を吊すかぎ。【四二】麒麟　圖の模樣。【四三】織成罽　織成は毛織物をいふ、罽は絨毯なり【四四】紫騮　紫色のくり毛馬。【四五】劍几　几は脇息。【四六】義取　義理にかなうてのち貰ひうける。【四七】無虛歲　もらはぬ歲なし。【四八】分宅　自己の宅を分ちて他人を置くこと。郤成子、晉に聘せんとして衞を過ぐ、衞の右宰穀臣之に觴し、闋畢りて贈るに璧を以てす、成子行く、衞亂れて穀臣之に死すと聞く、是に於て穀臣が妻子を迎へ璧を還し宅を隔てて之を居く。事は「孔叢子」にみゆ。又「三國志」に周瑜、道南の大宅を推して孫策を舍せしめ有無相通ぜしとみゆ。【四九】脫驂　驂馬を脫して他人に贈ること。「史記」にいふ、越石父、賢にして縲紲の中に在り、晏子出でて之に塗に遭ひ、左驂を解きて之に贈り延きて上客と爲す、と。驂は二馬のそへうまなり。【五〇】感激　邕が感激する。【五一】懷未濟　懷とは邕が心におもふなり、未濟とは先方の事を成すに至らざるをいふ。【五二】衆歸　衆人が美を邕に歸する。【五三】賙給　にぎはしあたへる、卽ち上の分宅脫驂の類。【五四】擺落　はらひおとす、邕が身より之をはらひおとすをいふ。孔璋が罪をさしていふ。【五五】多藏穢　多藏とは財貨をためこむこと、穢はきたなき行ひ。邕が傳に曰く、邕早く才名を擅にし尤も碑頌に長ず、職を貶せられて外に在りと雖も、中朝の衣冠及び天下の寺觀、多く金帛を齎持し往いて其文を求む、前後製する所幾數百首と。又曰く、邕、饋遺を受納する多きこと鉅萬に至る、時議以て文を鬻ぎ財を獲る未だ邕が如き者あらずとなすと。又曰く、讎人、邕貸を贓し法を枉ぐと告ぐ、許州の人孔璋、上書して之を救うて曰く、斯の人能くする所の者は孤を拯ひ窮を賙み、乏を救ひ賑惠す、積むも而も便ち散ず、家に私蓄なし、と。「豐屋」八句は物を受くるも之を惠施するをいふ。【五六】九皐唳　「詩」鶴鳴篇に、鶴鳴ニ于九皐一、聲聞ニ于天一、とみゆ。九皐とは外部よりかぞへて九層の内にある澤をいふ、唳は鶴のなきごゑなり、鶴鳴を以て邕の名聲に比す。【五七】江夏委　邕がすがたをいふ。【五八】寬掩宣尼袂　邕が道窮せるをいふ。「公羊傳」哀公十四年にいふ、十有四年春、西に狩して麟を得たり。孔子曰く孰が爲めにして來れるや、孰が爲めにして來れるやと。袂を反へし面を拭ひ、涕、袍を沾す、と。又曰く吾が道窮せり矣と。掩袂とは蓋し反袂のごとし、宣尼とは孔子をさす、孔子字は仲尼、唐に文宣王と諡す、因つていふ。（浦氏は曰く、直筆再びしがたきを謂ふ、と。）「獨步」四句は邕の時に遭はずして卒せしを傷む。【五九】武后朝　往事を追敍す。武后は則天武氏。【六〇】寵嬖　寵愛をうけたる僕賤のもの、張昌宗・張易之兄弟の輩をさす。【六一】否臧　可否をいふ、是非すること。臧は「よし」とするなり。【六二】太常議　太常は太常寺、禮を掌る官署、議は博士の議論をいふ。太常博士李處直といふもの韋巨源に昭といふ諡を授けんと議せしとき邕は二回まで之を駁したり。【六三】面折　面とむかつてくじく。【六四】二張勢　張昌宗・張易之の二人の勢力、この二人は容貌の美麗なるを以て武后の寵をあつめ勢力ありしなり。邕、左拾遺に拜せられしとき中丞宋璟、張昌宗兄弟が反狀を劾す。武后應ぜず、邕、階下に在り大に言つて曰く、璟が陳ぶる所は社稷の大計なり、陛下當に聽きたまふべし、と。后、色解け卽ち璟が奏を

可とす、【六五】衰俗　衰へて振はぬ風俗。【六六】悲生風　ぴりつとつめたく風が吹きおこる、恐れをなせしさま。【六七】排蕩　はらひうごかす。悲濁の氣をのぞくをいふ。【六八】秋旻霽　あきのそらはれわたる。天下清廉になるをいふ。【六九】忠貞　邕をいふ、忠貞の身でありながらの意。【七〇】負冤恨　無實の罪にかかるといふ怨恨をもつ。【七一】深旋㮰　此の旋㮰は作者天子の冕冠の前後に垂れたる旒の綴られしものの義として用ひしに似たり。張蘊古が大寶箴に、冕旒蔽目、而視於未形、黈纊塞耳、而聽於無聲とあると同意、旋㮰深しとは冕旒の奥ふかく目を蔽はるるをいふ、天子、左右のために壅蔽せられて事の眞相に見通しのきかぬをいへり。「往者」八句は邕が直節を持して冤枉に屈せしをいふ。【七二】放逐　中央から地方へおはれる。【七三】聯翩　ひきつづくさま。【七四】低垂　鳥にたとへたり、つばさをひくくたれること。【七五】困炎癘　炎熱と惡氣とにくるしむ。邕は多く南方に流されたり。傳にいふ、邕累りに晉州司戸・崖州舍城丞に貶せられ又欽州遵化の尉に貶せらる、と。【七六】鵩鳥入　漢の賈誼長沙に流さる、鵩鳥その舍に入るを以て賦を作り自ら傷む。賦序にいふ、庚子日斜、鵩集余舍、云云、邕が悲愁誼と似たり。【七七】魂斷蒼梧帝　蒼梧帝は舜なり、舜は南征して蒼梧の野に至りて死す、以て唐の天子に比す、魂斷とは邕、君を思うて魂たゆるなり。【七八】星駕　星をみて朝はやく車に馬をつなぐをいふ。「詩」定之方中篇に星言夙駕とみゆ。【七九】安稅　おちついて駕をとく。【八〇】分漢廷竹　竹は竹符、竹符を分つは州の長官となること、漢の文帝の三年に初めて郡守のために銅虎符・竹使符を爲る。已に屢見ゆ。漢廷は借りて唐の朝廷をいふ。【八一】文侯鑣　孔子の門人子夏、西河の上に處る、魏の文侯、之に師事し、ために鑣を擁す、鑣を擁すとは轡をかかへて道のほこりをはき清めんとするなり、禮をつくすをいふ。これ邕が州に在りて賢士を禮遇せしこと文侯の子夏に於ける如くなりしをいふ。傳に、邕は陳州刺史となり括州刺史となり、後ち淄・滑・二州の刺史を歷て天寶の初、汲郡・北海の大守となる。【八二】洛陽獄　後漢の蔡邕が故事。蔡邕、中常侍程璜といふものに訴へられて洛陽の獄に下さる。李邕が贓事を以て疑を招くは之と似たり。【八三】小臣斃　「左傳」にみゆ。晉の獻公寵姬あり驪姬といふ、驪姬太子申生を惡み之を讒せんとし、申生をして祭を爲して祭肉を獻公に致さしむ、姬、ひそかに毒を肉中に置く。先づ肉を犬に與ふ、犬斃る。小臣に與ふ、小臣亦た斃る。因つて毒は申生の置く所なりと誣ゆ。李邕、柳勣に馬をおくる、勣罪ありて獄に下さる、邕はそのまきぞひによりて罪ありとせられ、宰相李林甫がために刑部員外郎祁順之・監察御史羅希奭をさしむけられ北海郡に就きて杖殺せられたり、時に天寶六載正月なり。年七十餘。邕の死は晉の小臣の毒害されたるにも似たり。【八四】禍階　禍を招くきざはし。【八五】負謗　他人のそしりをうく。これはどの事實を指せりといふにもあらず、しばしば罪名を蒙らせられしことをいふなるべし。【八六】易力　「力を爲し易し」の意、容易に爲しうるをいふ。何を爲すやといふに邕を排斥せんとすることをさしていふ。當路者（李林甫の如き）についていふ。【八七】深嚌　嚌とは齒のところまでもちゆきてなむるなり。深く嚌むるとはたべつくすをいふ。深害するをいふ。李因篤曰く嚌は擠に作るべし、と。擠はおしおとすなり。以上「放逐」十二句は遷謫にあひて終には罪せられて殺害されしをいふ。【八八】伊昔　伊は辭なり。【八九】臨淄亭　臨淄は周漢の臨淄を指すに非ずして唐の臨淄郡をさす。卽ち今の濟南府なり。唐の天寶の初、濟南を臨淄郡となす。亭は歷下亭をさす。作者前に「陪李北海宴歷下亭」詩（卷一の三三頁）・「同李太守登歷下古城員外新亭」詩（卷一の三五頁）あり。【九〇】託末契　契りの末に託す、作者邕が後輩なるゆゑかくいふ。【九一】重敍東都別　仇注に公、邕と初めて東都に遇ふ、謂はゆる李邕求識面なり、といへり。この重敍といふは初遇にあらず、臨淄の會合に於て東都以來の別意を敍せしことをいふならん。東都は洛陽。【九二】朝陰　あしたのくもり。【九三】改　日影の改移するをいふ。【九四】軒御　のきば、みぎり、「伊昔」四句ふたたび交情を追敍す。【九五】崔蘇　崔融・蘇味道なり。この二人と李嶠・杜審言は、武后朝に於て文章四友と併稱せらる。【九六】指盡　ゆびなりかぞへつくす。【九七】流水逝　年月の過ぎさりしをいふ。【九八】近伏　伏とは心に服するをいふ。【九九】盈川雄　盈川は縣名、盈川の令楊炯をさす、炯は王勃・盧照鄰・駱賓王とともに初唐四傑の一人なり。雄とは文筆の雄なるをいふ。【一〇〇】特進麗　特進は位の名、李嶠をさす。嶠は神龍三年に趙國公に封じ特進・同中書門下三品を加へらる。麗とは文辭のうるはしきこと。【一〇一】是非　かれこれと評論する。【一〇二】張相國　張說なり。玄宗、蕭至忠を誅し張說を召して中書令となし燕國公に封ず。東封して還るや說を以て尙書左丞相となす。李邕もと說を輕んず、說甚だ之を惡む。【一〇三】相扼　扼は「もつ」、おさへつける。つかみあひをはじめるといふの類。兩人の交情のあしきをいふ。【一〇四】危蹤　あやふく、もろし、張說の中書令の時に邕が陳州刺史たりし時の贓事發せられ邕は獄に下され死罪に當るとされ孔璋に救はる。【一〇五】古豈然　魏の文帝の典論に、文人相輕、自古而然、とあり、句は之を變に用

ひたり。【一〇六】關鍵欲不閉　「老子」に善閉、無關鍵而不可開、とみゆ。注に横にとざす木を關、たてにとざす木を鍵といふといへり。鍵は鍵と通ず。ここの關鍵は心の戸締をいふ。邕がすこしく心にしめくくり無かりしをいふ。【一〇七】例及　例は例のごとく、いつも、の義。【一〇八】吾家詩　吾が杜家の詩、作者の祖父杜審言をさす。【一〇九】曠懷　ひろきむね。【一一〇】掃氛翳　もやひかげなし。【一一一】慷慨　邕がそれに感じて慷慨するをいふ。【一一二】嗣眞作　杜審言が作りし「和李大夫嗣眞奉使存撫河東」詩をさす。詩の原文は參考の爲めに後に掲ぐ。初唐に五言排律の長篇此の如くなるものは鮮し。以て作者の家學の本づく所を知るべきなり。【一一三】吞聲　邕が感じてなげく。【一一四】玉山桂　晉の郤詵、武帝に對へて曰く臣、賢良對策に擧げられ天下第一たり、猶桂林の一枝、崑山の片玉のごとし、と。玉山は崑崙山をいふ、玉山の桂とは郤詵が言ひし二事を一事として用ひしなり、審言が詩辭の秀抜なるをたとふ。【一一五】鯨律　審言が詩の音調の和雅なるをいふ。【一一六】鯤鯨　大魚なり、審言が詩の勢の壯なるに比す。【一一七】噴　潮水をふく。【一一八】沼遞　はるかにゆく。以上「論文」十四句は邕が詩文を評論せしことをのぶ。【一一九】坡陀　高く廣き貌、青州の地形を形容す。【一二〇】青州血　青州は今の山東省青州府益都縣治、即ち唐の北海郡の郡治なり。邕は此地に杖殺せらる、故に血といふ。【一二一】蕪沒　くさむらにあれて埋沒する。【一二二】汝陽讓　汝陽は縣の名、唐の武德二年北海郡に汝陽縣を置く。青州に邕が墓あるをいふ。【一二三】哀贈　天子より哀憐せられて官位を贈らるること。【一二四】蕭條　さびし、之なきをいふ。【一二五】恩波　天子の御恩の波。【一二六】延揭厲　延とは時をのばすこと、將來にくりさげられてゐるをいふ、揭厲は詩經に深則厲、淺則揭、とあり、水をわたるに淺ければ衣のすそをかかげる、深ければ帶より以上まで衣をまくりてわたるをいふ。これは押韻のためにかかる語を用ひしなれども、取捨する、斟酌して定むるなどの意にあてしのみ。朱注に高揭而揚厲之などいへるは恐らくは是ならず。【一二七】如綫　いとすぢのごとし、僅に絶えずにあるをいふ。【一二八】猜客　作者みづからいふ。【一二九】論兵　吐蕃しばしば來侵するを以て兵事を論議す。【一三〇】燕薊　直隸省北部、此句、河北の諸降將、安・史の亂を承けて未だ朝廷の命を奉ぜざるをいふ。【一三一】六公篇　六公の中の五王は張柬之・桓彥範・敬暉・崔玄暐・袁恕己なり。狄相とは狄仁傑なり。宋の趙明誠・董逌等李邕が六公詩の石刻本を見たりといへるも今其詩は傳はらず、惜むべし。【一三二】豁　ひろらか。【一三三】豪蕩　むねのなかが豪のため

におほはれること、末尾「坡陀」十句は邕が身後の荒涼たるをのべ時事に及びて慨嘆を發せり。

【題義】李邕を哀んだ詩。

【詩意】自分は宇宙の間に長嘯してみるに高い才能ある人物は日日すたれてゆく樣だ。古人は見ることはできぬ。古人にも近い樣な前輩もなくなる、だれが前輩のあとを繼ぐといふのだ。』自分は昔のことをおもひだしてみる、まだ我が李公（邕）が存在してをられたとき、公は文壇に於てしつかりとした學問の根柢ある人であつた。公の名聲は赫赫たるものであつたがそれは公の健筆に相當したもので虛名ではなく、公はさつぱりとした淸らかな製作をたくさんもつてをられた。したがつてその風流文彩は金石碑版のうへに散布せられ、雕琢して建てられた石碑は山岳のごとくするどく立つてゐた。其文章は情に於ては造化の理を窮め、學に於ては天人の際を貫くものがあつた。』求むる所あつて公に面會を乞ふものは爭うて公の門へと走つた。さうして公からかいてもらつた碑版の文章は四方の遠地にかがやいた。其文章の法は森然として一般原則を創立するに足るほどであり、もちろんたのみに來た人人はめいめい多大の希望を滿足させてもどつていつた。あのさびしく白楊樹の立つてゐる墓道には公はすきとほる樣な寶珠（碑文の字）をあたへてやつた。龍宮（寺、觀）には塔や廟が湧き出てをるにそれにしるされた公の文章は幾千萬年も浮雲がそれを衞つてゐる。儒者の祭器に關係した事（學宮の碑）、故吏が前上司をしたふための手段としたもの（遺愛の碑）、それらは之を觀にくる人はやつ

といま來た人がゐなくなつたかとおもふとまたあとの人がやつてくる、遠方から山水を跋渉してでも頓着なくやつてくるのである。公の碑文はまへから公の生存の時にあたつてすでにかがやいてゐるので決して後世のものにだけ勸戒をのこすにはとどまらぬのである。』碑文の謝禮としては、富める家で用ひる珊瑚の簾鈎、麒麟を模様に出した毛織物の絨段、また紫がかつた栗毛馬のあとから劍だの脇息だのがつきしたがつてくるといふ風であり、もらつてしかるべきものをもらふこと年年同じことであつた。しかし公は他人の困窮に感じては、或は自宅を分けて彼等を置いてやり、或は驂馬を解いて與へてやつたり、しながらもまだ盡くしてやり樣が足らぬほどにかんがへてをられた。だから多くの人人は公は他人ににぎはしてやる美德をもつた人だといひ、ため込み主義の人だなどいふ穢らはしい評判がでてもそれをはらひおとしてしまふことができた。』公はその當時に獨歩すること四十年、その名聲の高きこと九皐に鳴く鶴のこゑが風につれてきこゆるごとくであつた。それがなんとしたことか、まあ公の姿は、むかし孔子が麒麟を見て袂を反へして歎かれたといふ話の樣に「吾が道窮す矣」の運命となられたのである。』むかし武后の朝には用ひられた人たちはいやしい寵嬖が多かつた。その時公は太常博士の議論を可否して諱の贈りかたに反對したり、飛ぶ鳥もおとすほどな張氏兄弟の勢をも面りくじいたりした。そのため衰微した風俗もぴりつとして恐れをいだいてひきしまり、惡濁の雲霧がはらひのけられて秋の空がからりとはれわたつた樣になつた。その公が忠貞の身を以て冤恨を抱くに至つたのはまつたく天子が九重の奥におはして冕旒の房深く目を蔽はれてござられたからである。』やがて公はひきつづいて放逐せられ、つばさをしほたれて炎瘴の地方にくるしまれた。その配所の舍には賈誼の樣に夕方鵩鳥が飛びこんでき、君を戀ふる魂は斷えて舜妃が舜帝をおもふがごときものがあつた。公は榮枯の境に驅られて走るにも暇がなく、星をいただいて車に駕して出るがそれをほどいておちつくことはなかつた。朝廷から竹符を分ち與へられていくたびか地方の長官となられた。またもとより公は賢士を禮遇することは魏の文侯の子夏に於ける如きものがあつた。つひには蔡邕の洛陽の獄に於けるごとき事件がおこり、晉の小臣が毒害された樣な事がらとなつた。かかる禍のきざはしにはなにがなつたかといへば公が以前から人の謗をうけてをられたといふことに外ならぬ。當路者にしてみれば公をおしのけるにはさほどむづかしくはなかつたであらうに、かくまでにしてしまつたのはなんといふひどい害しかたであるか。』むかし自分は臨淄の亭で酒宴に於て公と末契を託したことがある。そのをりかねての東都（洛陽）以來の別意を重ねて敍し、ながく語りつづけていつしかのきばに日影がかたぶくまでにさへなつたことがある。』公は文章を論じて崔融・蘇味道におよび、前人を指をりかぞへて歳月流水の歎を發せられた。公は近代では楊盈川（炯）の雄筆に敬服してをられたが李特進（嶠）の綺麗なるには滿足してをられなかつた。張相國（說）のことはかれこれ是非を品評されたが公と相國とは仲がわるくてつかみあひでもせんばかりであつたものでこの事は

公の身にとつては危い次第であつたのである。文士名を爭ふといふは古代必ずしもさうしたわけのものではないのだ、が公は心のしめくくりをせずにをられた。この點に於て公にすこし缺陷がある。いつも話が吾が杜家の詩のことになると公は胸中をからりとしてもやくやをはらうて談じられた。公は吾が祖父杜審言の和李嗣眞詩をよんで慨慨し、之を歎美して玉山の桂だといひ、儼然として高く懸れる鐘の律音だといひ、波を吹いてはるかにゆく鯤鯨だとまでいはれた。』ああ坡陀として横はれる青州にそそがれた公の血。ああ草やぶに沒してしまつた汝陽の公の墓。公はなくなられても天子から哀贈の御沙汰もなく、その恩典の及ぶ加減はのちのちまで延期されてゐる。公の子孫はわづかに綫のごとく絶えずにゐる。而して以前の賓客であつた自分はいまここに長らく舟をとどこほらせてゐる。今や朝廷に於ては君臣ともにまだ兵事を論じ、武臣朝命にしたがはざるともがら、其地遠く燕薊までつづいてゐる。この時公の遺詩「六公の篇」を朗かに詠じてみると、しんばいのわき來るじぶんの心もからりとして蔽はれたものがきりひらかれた樣なここちがする。』

【附錄】

和李大夫嗣眞奉使存撫河東　杜審言

六位乾坤動。三微曆數遷。謳歌移火德。圖讖在金天。子月開階統。房星受命年。
禎符龍馬出。寶籙鳳皇傳。地卽交風雨。都仍卜澗瀍。明堂唯御極。清廟乃尊先。
不宰神功運。無爲大象懸。八荒平物土。四海接人煙。已屬群生泰。猶言至道偏。
璽書傍問俗。旌節近推賢。秩比司空位。官臨御史員。雄詞執刀筆。直諫罷樓船。
國有大臣器。朝加小會筵。將行備禮樂。送別仰神仙。城闕周京轉。關河陝服連。
稍觀汾水曲。俄指絳臺前。姑射聊長望。平陽遂宛然。舜畊餘草木。禹鑿舊山川。
昔出諸侯上。無何霸業全。中軍歸戰敵。外府絕兵權。隱隱帝鄕遠。瞻瞻肅命虔。
西河偃風俗。東壁挂星躔。井邑枌楡社。陵園松柏田。榮光晴掩代。佳氣曉侵燕。
雨霈鴻私滌。風行睿旨宣。惸嫠訪疾苦。屠釣採貞堅。人樂逢刑措。時康洽賞延。
賜逾秦氏級。恩倍漢家錢。擁傳咸翹首。稱觴競比肩。拜迎彌道路。舞詠溢郊鄽。
殺氣西衡白。窮陰北瞑玄。飛霜遙渡海。殘月迥臨邊。緬邈朝廷問。周流朔塞旋。
興來探馬策。俊發抱龍泉。學總八千卷。文傾三百篇。澄淸得使者。作頌有人焉。
莫以崇班閡。而云勝託捐。偉材何磊落。陋質幾翩翾。江海寧爲讓。巴渝轉自牽。
一聞歌聖道。助曲荷陶甄。

〔六〕　故祕書少監武功蘇公源明

武(二)功少(三)也孤。徒(四)步客(五)徐兗。

〔六〕　故(一)祕書少監武功の蘇公源明

武功少きや孤なり、徒步徐兗に客たり。

讀書東（六）嶽中。十載考墳（七）典。

書を讀む東嶽の中、十載墳典を考ふ。

時（八）下萊（九）蕪郭。忍飢浮（一〇）雲巘。

時に萊蕪の郭に下る、飢を忍ぶ浮雲の巘。

負（一一）米晩（一二）爲身。每食臉（一三）必泫。

負米晩に身の爲にす、食する每に臉必ず泫たり。

夜（一四）字照爇（一五）薪。垢衣生碧（一六）蘚。

夜字爇薪に照す、垢衣碧蘚生ず。

庶以勤苦志。報茲劬（一七）勞願。』

庶はくは勤苦の志を以て、茲の劬勞の願に報いんことを。』

學（一八）蔚醇（一九）儒姿。文（二〇）包舊（二一）史善。

學は蔚たり醇儒の姿、文は包ぬ舊史の善。

灑（二二）落辭（二三）幽人。歸來潛（二四）京輦。

灑落幽人を辭し、歸來京輦に潛む。

射（二五）君東堂策。宗（二六）匠集精（二七）選。

君が東堂の策を射る、宗匠精選を集む。

制（二八）可題（二九）未（三〇）乾。乙（三一）科已（三二）大闡。

制可題未だ乾かず、乙科已に大に闡けたり。

文（三三）章日自負。掾（三四）吏亦累踐。

文章日に自負す、掾吏亦た累に踐めり。

晨趨（三五）閶闔內。足踏宿（三六）昔跡。』

晨に趨す閶闔の內、足は踏む宿昔の跡。』

一（三七）麾出守還。黃（三八）屋朔（三九）風卷。

一麾出守して還る、黃屋朔風卷く。

不暇陪（四〇）八駿。虜（四一）庭悲（四二）所遣。

八駿に陪するに暇あらず、虜庭遣る所に悲む。

平生滿樽酒。斷此朋（四三）知展。

平生滿樽の酒、此の朋知の展を斷つ。

憂憤病二（四四）秋。有恨石（四五）可轉。

憂憤病むこと二秋、恨み有り石轉ず可し。

肅（四六）宗復社稷。得無順（四七）逆辨。

肅宗社稷を復す、順逆の辨無きを得むや。

范（四八）曄顧其兒。李（四九）斯憶黃犬。

范曄其の兒を顧みる、李斯黃犬を憶ふ。

祕（五〇）書茂（五一）松色。再（五二）扈祠（五三）（五四）壇墠。』

祕書茂松の色、再び扈す壇墠に祠するに。

前後百（五五）卷文。枕（五六）藉皆禁（五七）臠。

前後百卷の文、枕藉するに皆禁臠なり。

篆（五八）刻揚雄流。溟（五九）漲本末（六〇）淺。

篆刻揚雄が流、溟漲本末淺なり。

靑（六一）熒芙（六二）蓉劍。犀（六三）兕豈（六四）獨剸。

靑熒たり芙蓉の劍、犀兕豈に獨り剸らむや。

反爲後輩褻（六五）。予實苦懷（六六）緬。

反つて後輩に褻れらるるを爲す、予實に懷の緬なるに苦む。

煌（六七）煌齋（六八）房芝。事（六九）絕萬（七〇）手搴。

煌煌たり齋房の芝、事は絕ゆ萬手の搴。

垂（七一）之俟來（七二）者。正（七三）始徵（七四）勸勉。

之を垂れて來者を俟つ、始を正して勸勉に徵あらしむ。

不要懸（七五）黃金。胡（七六）爲投（七七）乳贙。』

要せず黃金を懸くるを、胡爲れぞ乳贙に投せるや。

結交三（七八）十載。吾與誰游（七九）衍。

交を結ぶ三十載、吾誰と游衍せむ。

滎陽(八〇)復冥(八一)寞。罪罟(八二)已横(八三)罥。
嗚呼子(八四)逝日。始(八五)泰則終蹇。
長安米(八六)萬錢。凋(八七)喪盡(八八)餘喘。
戰伐何(八九)當解。歸(九〇)帆阻(九一)淸沔。
尙纏(九二)漳水疾。永負(九三)蒿里餞。』

滎陽復た冥寞、罪罟已に横に罥れり。
嗚呼子が逝ける日、始は泰にして則ち終には蹇なり。
長安米萬錢、凋喪餘喘を盡くす。
戰伐何か當に解くべき、歸帆淸沔に阻せらる。
尙ほ漳水の疾に纏はれ、永く蒿里の餞に負く。』

【字解】【一】 故祕書少監武功蘇公源明　蘇源明、初の名は預、京兆武功の人、祕書少監となり卒す。源明が事、作者の詩に屢〻見ゆ。本篇に關しては特に哭台州鄭司戶蘇少監詩（卷十四の一八九頁）を參看すべし。【二】 武功　源明をさす、武功の人なるを以てなり。【三】 少也孤　わかき時にみなしごとなつた。也の字は語助におきたるまで。【四】 徒步　かちあるきする、貧賤にて車馬に乘る能はざるさま。【五】 客徐兗　徐州兗州の地方に客寓する、徐は江蘇省に、兗は山東省にあり。【六】 東嶽　泰山をいふ。【七】 墳典　上古の書籍をいふ。「尙書」の孔安國序に、伏羲・神農・黃帝の書、之を三墳と謂ひ、少昊・顓頊・高辛・唐・虞の書、之を五典といふとみゆ。又「左傳」にも見ゆ。【八】 時下　下とは泰山から平地へおりてくるをいふ。【九】 萊蕪郭　萊蕪は縣の名、長安四年に嬴縣（今泰安府萊蕪縣西北四十里）の地に於て萊蕪縣を置く、と。【一〇】 浮雲巘　巘は山頂なり、其上に雲浮ぶ、泰山の中の讀書の處をさす。【一一】 負米　孔子の門人子路、親を養はんがため百里の外まで米をせおひゆきたり、米かづきをして貨錢を得て生活の資とす。【一二】 晚爲身　晚とは晚年。中年をすぎてのちをいふ。爲身とは一身のためにすること、親を養ふがために非ざるをいふ。【一三】 臉必泫　臉は「ほほ」、泫はうるほふ貌、涙でぬらすをいふ、親在さざればなり。【一四】 夜字　夜みる文字。【一五】 爇薪　もやしたたきぎ、之を用つて光明をとるなり。【一六】 碧蘚　蘚は「こけ」なり。【一七】 劬勞顧　父母の養育の顧望をいふ、「詩」蓼莪篇に哀哀父母、生我劬勞とみゆ。劬もいたはり勞することなり、以上起十二句は源明、孤にして苦學せしをいふ。【一八】 學蔚　蔚は草木の茂る貌、學殖あるさま。【一九】 醇儒　純正なる儒者。【二〇】 文包　包は包藏、內部にひろくつつんでいれておく。【二一】 舊史沓　舊史とは舊來の歷史家、たとへば司馬遷・班固の類。【二二】 灑落　人物のさつぱりとしたさま、此語「幽人」を形容す。【二三】 辭幽人　辭は辭を告げて別れること、幽人とは山中に隱退生活を爲せし人人をいふ。【二四】 潛京輦　潛とはひそかに住居すること、富貴權勢の門などに奔走せざるをいふ。京輦とは輦轂の下、天子のお膝もとの意。【二五】 射君東堂策　射策とは試驗を受くること、詳は卷一の二七六頁 射策の句解をみよ、君は天子をいふ、東堂とは試驗場なり、唐の尙書省の東堂をいふ。晉の武帝の時にも、諸の賢良・方正・直言（試驗の科名）に詔して東堂に會して策問をうけしめしことあり。【二六】 宗匠　文章の大家をいふ、當時の試驗官にして受驗者の文を詮衡するものをさす。【二七】 精選　大家の中より更にすぐりぬいたもの。【二八】 制可　天子の仰せごとによりて可とする、これは可否の字を書して及第落第を定むるなり。【二九】 題　答案に可否の字をかくこと。【三〇】 未乾　乾とは墨痕のかわくこと。【三一】 乙科　唐にては進士の試問に時務策五條と、一の大經（毛詩・左傳・禮記等は大經）に帖して（出題の前後の場所に張り紙してだすこと）試む。而して經と策と全部得點すれば甲第、策は四を得、帖は四以上を得れば之を乙第とす。乙科は乙第をいへり。【三二】 已大闡　闡はひらく、及第の名聲の世間にひろがるをいふ。傳によるに源明、文詞に工に天寶の間に名あり、進士に及第す、更に集賢院に試せしむ、といへり。この詩句には集賢院の試には言及せざるに似たり。【三三】 文章日自負　進士に及第したるを以てますます文章に於てみづからたのむ所あり。【三四】 掾吏亦累踐　掾吏は屬官なり、これは進士及第後、太子論德とならざる前のことをさすならん、累踐とは下級より上級へと其地位をつぎつぎとふむこと。【三五】 趨闕闥內　趨はすこしはやくあるく、闕闥は天子の宮門、太子の宮も禁城の內にあれば闕闥の內といふ。これ太子論德の官となりしをいふ。【三六】 宿昔趼　趼は足のまめ、源明貧賤のなり足にまめをでかしたが、仕官してのちも昔ながらの徒步生活で足にでかしたまめをふみあるいてゐたといふなり。「學蔚」十二句は及第仕官を敍す。【三七】 一麾出守還　地方長官となりて出でまた都へかへりしをいふ。顏延之が詠阮咸詩にいふ、屢薦不入官、一麾乃出守、と。一麾とはひとたびさしまねきて去らしむることなり。出守は中央から出されて郡守となるなり。源明は東平太守として都より出で、召し還へされて國子司業となる。安祿山、都を陷れしときは病める故を以て僞署（賊に官を命ぜらるること）

を受けず。【三八】黃屋　天子の御乘車の車蓋、以て帝位をさす。【三九】朔風卷　北風が吹きまく、安祿山の軍勢燕北方の地よりおこり其勢の强盛なりしをいふ。【四〇】陪八駿　玄宗の蜀へ逃げしおともをする、周の穆王の八駿の故事を用ふ。【四一】虜庭　賊に占領されたる都の地をさす。【四二】悲所遣　定說なし、或はいふ、「悲恨して以て懷を遣るなり」と。或はいふ、「賊に遣ばされて僞署に充てらるるなり」と。或はいふ、「虜庭、悲を遣るの處となるなり」と。案ずるに「いかにして懷を遣るべきかについて悲む」の意ならんか。平日ならば懷を遣る方法は朋友と樽酒を酌むにあり、今はその方法なきなり。【四三】朋知展　展は展情、卷かれてゐるこころをのべひろげるをいふ。朋知は朋友知己。【四四】二秋　天寶十五載(卽ち至德元載)と至德二載との兩年の秋。【四五】石可轉　心は轉ずべからざるをいふ、「詩」鄘柏舟に、我心匪レ石、不レ可レ轉也、とみゆ。【四六】肅宗復社稷　至德二載九月癸卯、廣平王(俶)西京を收む。十月壬戌、廣平王東京に入る。同月丁卯肅宗長安に入る。これ肅宗社稷を回復するの事なり。【四七】順逆辨　賊軍より官を受けしものは逆なり、受けざるものは順なり、辨は之を區別して賞罰をなすをいふ、至德二載十二月丙午賊の僞署を受けし左相陳希烈・達奚珣等二百餘人を竝に楊國忠が第に禁して鞫問す、庚午、達奚珣等十八人を斬に處し、陳希烈等七人に自盡を賜ふ。【四八】范曄　宋の范曄、反を謀るに坐して誅せらる。刑せらるるに臨み醉ふ、其の子藹も亦醉ひ、地土及び果皮をとりて曄に擲つ、曄問うて曰く汝、我をいかるか、藹曰く、今日何によりていからん、ただ父子同じく死す、悲まざる能はず、と。【四九】李斯　秦の二世皇帝の時、李斯咸陽の市に腰斬せらる、斯顧みて其の中子に謂つて曰く、我、汝と復た黃犬を牽きて俱に上蔡(斯が故鄕)の東門を出で狡兔を逐はんと欲するも豈に得べけんや、と。李斯・范曄は陳希烈其の他之に類する人にあてていふなり。【五〇】祕書　源明をさす、傳にいふ、肅宗、兩京を復するや源明を考功郎中・知制誥に擢んづ。後ち祕書少監となり卒す、と。【五一】茂松色　しげれる松のみどりの色のかはらぬ如く節操を易へず賊に從はざりしをいふ。【五二】再扈　扈はあとより從ふなり。再とは玄宗肅宗兩次をいふ、玄宗朝のそれは蓋し天寶十載の大禮をいふならん、肅宗朝のそれは乾元元年四月甲寅九廟新に成れるを以て天子親享し、遂に圜丘に祭りせしことをいふならん。【五三】祠　神に求めて得る所あるとき報祭するなり。【五四】壇墠　祭りの處に於て土を築きてもりあぐるを壇といひ、土を除きてひくくするを墠といふ。「一麾」以下十四句は源明の出入と淸節とをのぶ。【五五】百卷文　「唐書」によるに蘇源明の傳せる「易元苞」あり、又「源明前集」三十卷あり。【五六】枕藉　或は枕とし或はしく、讀みふけるをいふ。【五七】禁臠　他人にはくはせられぬほどのうまきししむら。源明の製作物の善美なるをいふ。晉の元帝始めて建業に鎭せしとき一豚を得る每に以て珍膳となす、項下の一臠尤も美なり、部下のものつれに之を帝に薦め、呼びて禁臠となす、と。事は「晉書」謝混傳にみゆ。【五八】篆刻　辭賦をつくるをいふ。辭賦に於て文字を雕琢すること篆書を以て刻するがごとし。揚雄が「法言」に、或問、吾子好レ賦、曰然、童子、雕蟲篆刻、壯夫不レ爲、とみゆ。【五九】溟渤　大海の潮のみなぎり。【六〇】末淺　淺末を顚倒して用ひたり、曹植が責躬表に、詞旨淺末、不レ足ニ採覽一、とみゆ。淺末とは淺くして末なるをいふ、末とは細小なるをいふ。【六一】晉熒　熒はひかるなり。【六二】芙蓉劍　芙蓉の始めて水を出づるが如き飾ある劍。越王允、歐冶子をして五の名劍を作らしむ。其一を純鉤といふ、薛燭之を見て曰く、恍乎、如ニ屈陽之和一、沈沈、如ニ芙蓉之始生ニ於湖一、と。「吳越春秋」にみゆ。【六三】犀兕　さい、一角牛。【六四】豈獨閟　閟は「藏る」なり、犀兕をきるのみにあらざるをいふ。李尤が劍銘に、陸剸ニ犀兕一、水截ニ鯨鯢一、とみゆ。【六五】褻　なるる、なれあなどるをいふ。【六六】懷緬　おもひのはるかなること、はるかにおもひしたふをいふ。【六七】煌煌　かがやく貌。【六八】齋房芝　齋房は神を祀るときものいみをする部屋なり。芝は靈草なり。漢の武帝の時、元封年中に齋房に芝生じ歌を作れることあり。唐にては肅宗の上元二年七月、延英殿の御座の樑上に玉芝を生ず、一莖三花、天子玉靈芝の詩を製す。【六九】事絕　搴芝の事斷絕して行はれざるに至りしをいふ。搴芝のこと下をみよ。【七〇】萬手搴　搴は「ぬきとる」、芝をぬきとるなり、萬手は萬人の手なり、萬人の手もて芝を搴るとは、御座のうへの樑に芝が生えたとてそれをとるべしと祥瑞のことについてやかましくさわぎたつるをいふ。肅宗は乾元二年六月に宰相王璵が請ひに從ひて太乙壇(天の太乙星をまつる壇)を南郊の東に立てたり。これは漢の武帝以來はじめての事なり。そのほか禁中にて禱祀日夜を窮め、宦官事を用ひ、給養繁靡なり、源明は之につきしばしば疏を上りて政治の得失を陳べたり。【七一】垂之　之とは政治の得失を論じたる文章をさす。【七二】來者　後來の人人。【七三】正始　事の始に於て之を正す、害毒を微細なるうちに防ぐなり。【七四】微勸勉　微は「しるし」、證據をのこすをいふ、勸勉は督政をすすめつとめしむるなり。【七五】懸黃金　舊注に金印をつりさげる義とし高官となることとす。「晉書」周顗傳に、取ニ金印如ニ斗大一繫レ肘、とみゆ。これ一說なり。余

案ずるに或は「史記」呂不韋列傳の市門懸金の故事を用ひ文章の價値あるを言ひしに非ざるか。「史記」にいふ、呂不韋その客をして書を著はさしめ傚して呂氏春秋といふ、布咸陽市門、懸千金其上、延諸侯游士賓客、有能增損一字者、予千金、と。懸黃金とは千金を懸けて世評を求むるをいふ。【七六】胡鷲　何鷲に同じ、「なんすれぞ」。【七七】投乳贙　贙は猛獸の名、「爾雅」の注に、贙は西海に出づ、大秦國に養ふ者あり、狗に似て力多く獷惡なりとみゆ。乳贙は乳虎の如き義に用ひたり。源明が貴幸の臣の怒にふれしをたとへていふ。「前後」十四句は源明が文才と直諫とをのぶ。【七八】三十載　開元二十三年より廣德二年まで三十年なり。大略それらの年月をさす。【七九】游衍　衍はほしいままにするなり。「詩」に及爾游衍、とみゆ。【八〇】滎陽　地名、鄭虔をいふ。【八一】冥寞　くらくさびし、死せしをいふ。【八二】罪罟　罟は「あみ」。【八三】橫羈　羈は「かけとる」なり。【八四】子　源明をさす。【八五】始泰則終蹇　泰蹇は「易」の卦の名、泰は運命の通ずること、蹇はつまづきて艱難にあふをいふ。【八六】米萬錢　一斛萬錢、廣德二年秋より冬まで一斗の米千文なりしと。蘇源明鄭虔ともにこの歲沒せり。哭台州鄭司戶蘇少監詩にいふ、穀貴沒潛夫、と。又曰く凶聞一年俱、と。【八七】凋喪　しぼみ、うせる。【八八】盡餘喘　いきのこりのあへぎをなくする。呼吸の絕ゆるをいふ。【八九】何當解　何は何時、解はとけて散するをいふ。【九〇】歸帆　故鄉へかへるふね。【九一】阻淸河　阻はじやまされる。河水は漢水の下流をいふ。河漢の上流は之を經て長安に至るべし。【九二】漳水疾　劉楨が故事を用ひ自己の疾をいふ。魏の劉楨が贈五官中郎將詩に曰く、余嬰沈痼疾、竄身淸漳濱、と。漳水は鄴都(今の河南省彰德府臨漳縣)にあり。【九三】蒿里餞　漢の田橫死す、門人挽歌二章を作る、薤露・蒿里これなり。のち薤露は王公貴人の喪を送るに用ひ、蒿里は士大夫庶人の喪を送るに用ひらる。蒿里の歌は人死して魂魄の蒿の里に歸するをいへり。ここは借りて源明が墓所をさす。餞とは蓋し酒或は麥飯を冢土にそそぎて死者に手向くるをいふなり。「結交」十二句は長年月の親交ありてしかもつひに其の死後哀奠する能はざるを歎ぜり。

【題義】秘書少監蘇源明を哀める詩。

【詩意】武功の蘇君は幼少のときみなしごになり、かちあるきして徐州兗州の地方に客となり、東嶽泰山の中で讀書して十年がほど古典について考へた。雲の浮んでゐる山に饑餓を忍んで、ただ時をり萊蕪縣の城郭へおりてくるくらゐのことであつた。晩に負米の勞役をしたがそれは子路のごとく親を養ふためでなく自己のためであつたので食事をするたびに頰が涙でぬれた。君が勉學最中には薪をもやして夜の文字を照らし、垢ついた衣にはあをごけが生えるほどであつたが、君の心中ではかほどの勤苦の志でもつて生前御兩親が苦勞なされたおぼしめしに報いたいものだといふのであつた。』やがて君の學問は蔚然たる醇儒の姿をそなへ、文章は古代の歷史家の善きところをかねる樣になり、さらりとした山棲みの人のなかまを去つて京師へもどつてきてお膝もとにこつそりと住んだ。さうして東堂で天子の御試驗に應じたが、時の試驗官はいづれも文章の大家で一粒えりといふべき人たちが集められた。(受驗の難きこと推して知るべし)やがて及第の御許可が出て天子の御かきつけの墨もかはかぬうちに君の乙科及第の評判ははやくも世間にひろがつた。文章に於て君は日にまし自己の力をたのんでゐたが掾吏の屬官をもきらはず下の方からつぎつぎとのぼつていつた。しかし太子諭德に任ぜられて禁城の御門へあさはやくでる樣になつても、君は徒歩をつづけてむかしのままの足の豆をふみあるいてゐた。』それから京師より逐ひだされ地方官(東平太守)となつてまたみやこへもどつた時には(國子司業たりしとき)安祿山の亂がおこつて天子の乘御の車蓋には北風が吹きまくつてゐた。君は天子(玄宗)の御逃げになる御馬のあとにおともをする暇もなく、身は賊の占領した地域に陷つて

どうして胸の懐を遣るべきかに悲んだ。すなはち平生なら樽に滿ちた酒を酌みかはして朋友に對して心のむすぼれをほぐすのであるがそれがすつかりできなくなつたのだ。それで憂憤のあまり二秋といふものは病氣ですごし、この境遇に居る恨みはもつてゐたが君の堅固な心はどうしても動かすことができなかつた。肅宗が賊の手から兩京をお收めになり、社稷を回復あそばされたときには臣下の順逆についてさばきをおつけにならぬわけにはゆかなかつた。それで賊に從うた者と否とによつて賞罰を行はれた、時に范曄にも比すべき者は刑にのぞみて自分の兒をかへりみてものをいふたり、また李斯にも比すべき者は刑にのぞみてそのむかし故郷で獵のときひきつれた黄の犬のことをおもひだしたり、それはそれはあはれなことであつたが、祕書は順節を守ること綠色易へぬ松のごとくであつて官位を擢んでられ(考功郎中・知制誥となる)二回までも天子の郊廟のお祭りにおともをした。』君の著作は前後ともに百卷の文があるが、よみふけつてみるにいづれも禁臠ともいふべきものだ。その雕琢したうるはしい文字は揚雄のたぐひであり、大海の潮も之とくらべるとかへつて淺く細い樣の看があ る。またその論鋒の鋭利をたとふるならば靑熒たる芙蓉の劍の如くであり、犀や兕ばかりをきるに足るものたるにとどまらぬ。自分は實に之に對してはるかに慕はしさをもつものであるが、後輩が之をあなどるに至つてはどうしたものであるか。一例をいふと、かの齋房に玉芝が生えたといふ事件。祥瑞を口實として萬人が手をだして玉芝をぬきとらんとしたにかかはらずその事が斷絶してしまつたのである。(これは君の上疏して諫めた結果である。)君はこれ等の事を文章として殘し之を後代に垂れてつぎに來る世の人をまち、事の始めに之を正して後來の勸勉となるべきものの證據をとどめてをるのである。君の文章は千金を懸けて他人の文字の增損を求むる必要のなきほどりつぱなものであるのに(一說によれば、「君は金印を帶びたいといふ功名心も無いのに」)どうしてそれが子もちの猛獸(權臣)の怒にふれたのであるか。』自分は君と三十年からの交りを結んでをる。君がなくなつては自分はただれと氣ままに遊ばうぞ。滎陽の鄭君(虔)も罪のあみにむりにひきかけられてあの世へいつてしまつた。ああ、君がなくなられたとき。君ははじめこそ順境だつたがしまひには逆境におちいつた。長安では米が斛に萬錢もする樣になり、そのとし君はしばんで息をひきとつてしまはれた。いつになつたら戰爭の結ばれがほどけようか、舟にのつて歸らうとしても沔水の流れにじやまされてかへることもならぬ。それで自分はかの劉楨が漳水のほとりでやんだごとき疾に今なほまとはれて、いつまでも君のお墓に手向の物をおそなへせずにゐる、まことにすまぬことだ。』

〔七〕故(一)著作郎・貶台州司戶・滎陽鄭公虔

〔七〕故の著作郎・貶台州司戶・滎陽の鄭公虔

(二)鶢居至魯門。(三)不識鐘鼓饗。　鶢居魯門に至る、識らず鐘鼓の饗。

孔翠望赤霄。愁思雕籠養。　孔翠赤霄を望む、愁思す雕籠の養。
滎陽冠衆儒。早聞名公賞。　滎陽衆儒に冠たり、早く聞く名公賞すと。

【原注】往者公在疾。蘇公頲。位尊望重。素未相識。早愛才名。躬自攜問。臨以忘年之契。遂爲嘉之。

地崇士大夫。況乃氣精爽。』　地は崇し士大夫、況んや乃ち氣の精爽なるをや。』
天然生知資。學立游夏上。　天然生知の資、學は立つ游夏の上。
神農或闕漏。黃石愧師長。　神農或は闕漏す、黃石師長たるを愧づ。
藥纂西極名。兵流指諸掌。　藥は纂む西極の名、兵流諸を掌に指す。
貫穿無遺恨。薈蕞何技癢。』　貫穿遺恨無し、薈蕞何ぞ技癢なる。』

【原注】公著薈蕞等諸書之外。又撰胡本草七卷。

圭臬星經奧。蟲篆丹青廣。　圭臬星經奧く、蟲篆丹青廣し。
子雲窺未遍。方朔諧太枉。　子雲窺ふこと未だ遍からず、方朔諧太だ枉なり。
神翰顧不一。體變鍾兼兩。　神翰顧一ならず、體變じて鍾兩を兼ぬ。
文傳天下口。大字猶在牓。　文は傳ふ天下の口、大字猶ほ牓に在り。

昔獻書畫圖。新詩亦俱往。　昔獻ず書畫の圖、新詩亦俱に往けり。
滄洲動玉陛。寡鶴誤一響。　滄洲玉陛を動かす、寡鶴一響するかと誤らる。
三絕自御題。四方尤所仰。』　三絕御題自りす、四方尤も仰ぐ所。』
嗜酒益疏放。彈琴視天壤。　嗜酒益〻疏放、彈琴天壤を視る。
形骸實土木。親近惟几杖。　形骸實に土木、親近するは惟だ几杖のみ。
未曾寄官曹。突兀倚書幌。　未だ曾て官曹に寄らず、突兀書幌に倚る。
晚就芸香閣。胡塵昏坱莽。　晚に就く芸香の閣、胡塵昏くして坱莽たり。
反覆歸聖朝。點染無滌盪。　反覆聖朝に歸す、點染滌盪無し。
老蒙台州掾。遐泛浙江槳。　老いて蒙る台州の掾、遐に泛ぶ浙江の槳。
履穿四明雪。饑拾楢溪橡。』　履は穿たる四明の雪、饑ゑては拾ふ楢溪の橡。』
空聞紫芝歌。不見杏壇丈。　空しく聞く紫芝の歌、見ず杏壇の丈。
天長眺東南。秋色餘魍魎。　天長くして東南を眺る、秋色魍魎餘る。
別離慘至今。斑白徒懷曩。』　別離慘として今に至れり、斑白徒らに曩を懷ふ。』

春深(七一)秦山秀。葉墜(七二)清渭(七三)朗。　春深くして秦山秀づ、葉墜ちて清渭朗かなり。
劇(七四)談王侯門。野(七五)稅林(七六)下鞅。　劇談す王侯の門、野に稅す林下の鞅。
操(七七)紙終夕酣。(七八)時物集遐(七九)想。』　紙を操りて終夕酣なり、時物遐想を集めき。』
詞(八〇)場竟疏闊。(八一)平昔濫推奬。(八二)　詞場覺に疎闊なり、平昔濫りに推奬せらる。
百年見存歿。(八三)牢(八四)落吾安放。(八五)　百年存歿を見る、牢落吾安にか放らむ。
蕭條阮(八六)咸在。【原注】著作。與今祕監鄭君審。篇翰齊價。謫江陵。故有阮咸・江樓之句。　蕭條阮咸在り、
出處同世(八七)網。　出處世網を同じくす。
他(八八)日訪江(八九)樓。含悽述飄(九〇)蕩。』　他日江樓を訪はば、含悽飄蕩を述べむ。』

【字解】【一】故著作郎・貶台州司戸・榮陽鄭公虔　虔は鄭州榮陽の人、天寶の初、協律郎となる。事は詩句に就きてのぶべし。虔が事已に屢ゝ見ゆ。【二】鶢居至魯門　鶢居は海鳥の名、魯門は魯の城の東門なり。「國語」に云ふ、海鳥を爰居と曰ふ、魯の東門の外に止まること二日、臧文仲國人をして之を祭らしむ。展禽曰く越(迂)なるかな臧孫の政を爲すや、海鳥至る、已れ知らずして之を祀り以て國典と爲す、以て仁且知と爲し難し、今玆海其れ災あらんか、と。又「莊子」至樂篇に云ふ、昔者海鳥魯郊に止まる、魯侯御して之を廟に觴す、九韶を奏して以て樂と爲し、太牢を具へて以て膳となす、鳥乃ち眩視憂悲、敢て一臠を食はず、敢て一杯を飲まず、三日にして死すと。「左傳」文公二年に孔子が臧文仲を評して不仁なる者三、不知なるもの三、といへる中に爰居を祀りしことを不知の一とせり。【三】不識鐘鼓饗　鳥、音樂を解せざるをいふ、事は上にみゆ。【四】孔翠　孔雀、翡翠。【五】赤霄　仙山のあ

かきそら。【六】罹罻罬　りつぱなかごのうちにて養はれること、鶢居・孔翠を以て鄭虔をたとへたり。【七】榮陽　虔をさす。【八】名公賞　世に名ある人に賞讃されしこと。名公とは蘇源明をさす。作者の自注に、虔がやみしとき、蘇源明が未知のあひだがらなるに拘はらず之を見舞ひしよしをいへり。【九】地崇　地位たかし、著作郎たりしをいふ。【一〇】士大夫　士大夫の間に於ての義。【一一】氣精爽　元氣すぐれてさわやかなり、起八句は虔が人品地位をのぶ。【一二】生知資　生れながらにして知るほどの資性。【一三】游夏　子游・子夏、孔子の門にて文學に秀でたる人。【一四】神農　古代の王、「本草」を著はすと稱せらる。【一五】闕漏　てぬかりあり。【一六】黃石　黃石公、兵法に通じたる人、漢の張良に兵法を授く。【一七】師長　人の師となりめうへのものとなること。【一八】藥纂西極名　作者の注によれば、虔は胡本草七卷を撰すといへり、蓋しその書中には西極（西域地方）の藥名もあつめつゞられしものとみゆ。【一九】兵流指諸掌　兵流は諸兵家の流をいふ、掌に指すとは分明に說くをいふ、虔が學、地理に長じ、山川の險易、方隅の物產、兵戎の衆寡、詐奪ならざるは無く、嘗て天寶軍防錄を爲る、言典に事該、諸儒其の善く書を著はせるに服すといはる。【二〇】貫穿　諸學を一すぢの條理にてすべること。【二一】薈蕞　小さなものをあつめること、作者の注によれば虔は「薈蕞」等の書を著はすといへり、薈蕞或は「會粹」に作るといふ。【二二】技癢　自信ある技藝を有するとき、それを試みに爲したくてむづがゆきをおぼゆるをいふ。語は射雉賦の徒心煩而技癢に本づく。「天然」八句は虔が著述に長ずるをいふ。【二三】圭臬　圭は土圭、日影を測るに用ふるもの、高一尺五寸。臬は高八尺の杙木、日影と水平とによりて方位を正すに用ふるもの、土圭の法は「周禮」大司徒にみえ、臬のことは「周禮」考工記の匠人職にみゆ。虔が測地の術に精しく地理に通ぜるをいふ。【二四】星經　天文の事を記したる書。戰國の頃、甘氏・石氏の星經あり。【二五】蟲篆　書體の名。後漢の許愼の「說文解字」の序に書の八體を記せしうちに篆書・蟲書あり。【二六】丹靑　繪畫をいふ。【二七】子雲　前漢末揚雄が字。【二八】窺　書籍をうかがひ讀むをいふ。【二九】未遍　揚雄が傳には雄は博覽無所不見といへり、詩句は雄は虔に比すれば窺ひあまねからざるをいふ。【三〇】方朔　東方朔。【三一】諧太枉　諧は詼諧、おどけ、朔はおどけを以て知らるれど虔に比すればそのおどけの名あるは正しからざるをいふ。【三二】神翰　神妙なる書翰の文字。【三三】顧不一　顧は陳の顧野王、顧野王は蟲篆奇字、無所不通といはる、蓋しまた書にも長じたるなり、不一とは虔は第二の顧野

王といふべく即ち題が二人あるをいふ。【三四】體變　書體の變化。【三五】鍾兼兩　鍾は魏の鍾繇、三色書に工に、草・隸・八分・最も優なりといはる。鄭が子會も亦書を善くす。兼兩とは二つのものを兼ね有するをいふ。虔が書は二體を兼ぬ。【三六】牓　かんばん。どこの牓なるや明ならざるも、宮殿寺觀などの牓ならん。【三七】書畫圖　書圖・畫圖なるべし。書に圖といふは奇異の感あれど作者卷十五に楊監示張旭草書圖詩あり、傳にいふ、虔善く山水を圖す、嘗て自ら其の詩竝に畫を寫して以て獻す、帝（玄宗）其の尾に署して曰く「鄭虔三絕」と。【三八】俱往　詩をかきて書畫とともに天子のもとにやりしをいふ。【三九】滄洲　仙境、詩句畫中の仙境の趣をいふ。【四〇】動玉陛　玉陛は御座へのぼる壇のきざはし。玉陛を動かすとは天子を感動せしめしをいふ。【四一】寒鶴　やしめのつる、畫中の物なり。【四二】誤一響　ひとこゑ鳴きしかとあやまらる。鶴の活きてゐる樣なるをいふ。【四三】三絕　書・畫・詩のすぐれしこと。上にみゆ。【四四】自御題　御題は玄宗みづから題署あそばされしをいふ。「圭臬」以下十四句は虔が才藝人に絕するをいふ。【四五】疎放　世とうとくきままにふるまふ。【四六】彈琴一句　即ち疎放のさま。【四七】形骸實土木　形骸を土木の如く視る、肉體を輕蔑する。【四八】寄官曹　官曹はやくしよの部屋をいふ、「唐語林」に云ふ、玄宗廣文館を置き虔を以て博士となす。虔命を聞くも廣文の曹司の何に在るやを知らず、宰相に訴ふ、宰相曰く、上、國學を增し廣文館を置き以て賢者を居き、後世をして廣文の博士君より始まると言はしむ、亦美ならずやと。虔乃ち職に就く、と。【四九】突兀　崎嶇の貌。【五〇】書幌　書齋のまく。【五一】芸香閣　藏書室なり、芸は香草、紙蠹を避けしむ、故に藏書の所を芸臺といふ。詩句は著作郎となりしことをいふ。虔、廣文博士より著作郎に遷る、而して著作郎は文籍を司る、故に芸閣といふ。【五二】胡塵　安祿山の亂をいふ。【五三】泱莽　泱莽なり、上林賦に云ふ、過乎泱莽之野、と。如淳が曰く、泱莽は大なる貌なりと。【五四】反覆　官軍の方へひつくりかへりて來りしをいふ。【五五】點染　けがれにそまること、賊の僞命をうけしこと。祿山反せしとき百官を劫かして東都（洛陽）に置く、虔に水部郎中を僞授す、虔因つて風緩（中風でからだがきかぬ）と稱し市令を攝せんことを求め、ひそかに密章を以て靈武（肅宗の居られし地）に達す。賊平らぎて死を免ぜられ台州司戶參軍事に貶ぜらる。趙注に云ふ、賊平らぐや虔、張通叔・王維と竝に宣陽里に囚はる、三人皆畫を善くす、崔圓齋壁に畫かしむ。虔方に死を悸る、即ち思を極めて解を圓に祈む、卒に死を免して台州に貶ぜらる、と。【五六】微霰　そそぎうごかす、ごしごしあらふこと。【五七】台州掾　掾は屬官、事は上にみゆ。【五八】迢迢　はるかにうかべる。【五九】浙江棹　浙江のふなかぢ。【六〇】履穿　くつに穴があく。【六一】四明　山の名、寧波府西南百五十里にあり、台州に近きによりて名山をあぐ。【六二】檜溪　台州府天台縣東二十五里にあり、歡溪ともいふ。【六三】橡　とちぐり、食しうるもの。「晴酒」以下十四句は虔が台州に貶せられしまでの生活をいふ。【六四】紫芝歌　漢の初、商山に四皓（四人の老人）ありて山に隱れ紫芝を采り歌をつくる。虔が退棲に比す。【六五】杏壇丈　「莊子」漁父篇にいふ、孔子緇帷の林に遊び、杏壇の上に坐す、弟子書を讀む、孔子絃歌して琴を鼓す。杏壇は杏花のある壇、虔、廣文館博士たりしを以て之を孔子に比す。丈は丈人、長者を稱す。【六六】東南　台州の在る方位。【六七】魍魎　木石の怪、赤黑色にして三歲の小兒のごとしと。【六八】今　虔已に沒せし今日をいふ。【六九】斑白　髮の色まだらに白し、自己の老衰の狀。【七〇】懷舊　さきの日の事をおもふ。「空聞」六句は別離以來の懷をいふ。【七一】秦山　長安附近の山をいふ。【七二】葉墜　秋時をいふ。【七三】清渭　渭は渭水。【七四】劇談　はげしく談論する。【七五】野稅　田野に於て駕を解く。【七六】林下鞅　鞅は馬の頸にあたる革。【七七】操紙　紙片をとる、詩文をかきつけんがために。【七八】時物　長安に於ての四季をりをりの景物。【七九】追想　昔の賢豪に對するはるかなる追想。「奈深」六句は長安時代を憶ふ。上節の「懷舊」の說明なり。【八〇】凋傷二句　前後おきかへてみるべし。【八一】疎闊　台州を承く。【八二】推奬　長安を承く。【八三】存歿　我は生存し彼は死歿す。【八四】牢落　さびしきさま。【八五】安放　放は依なり、安放は「いづくにか依らん」の意、孔子死せんとせし前に歌つて曰く、泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎、と。子貢之を聞いて曰く、泰山其頽、則吾將安仰、梁木其壞、則吾將安放、哲人其萎、則吾將安放、夫子殆將病也、と。【八六】阮咸　阮籍が子にして阮籍が姪なり、竹林の徒なり、以て鄭虔が姪鄭審に比す。作者の註によれば審は祕書監にして當時江陵に謫せられ居りしなり。【八七】世網　世間羅網のあみ、審の謫、作者の客遊は共に世網にかかるなり。【八八】他日　將來をいふ。【八九】江樓　江邊の樓、江陵の審が樓。【九〇】飄蕩　ただようてゐる身境。「凋傷」八句は存歿の感をのぶ。

【題義】　鄭虔を哀みてよめる詩。

八哀詩・故著作郎貶台州司戶榮陽鄭公虔

【詩意】鶢鶋といふ海島が魯の城の東門へやつてきたとき、鐘鼓の音樂を奏して饗應されてもそれがありがたいことだとはおもはぬ。孔雀や翡翠はいかにうつくしい籠にいれて養はれてもそれを困つたことだとばかりかんがへて本心はむかし棲んだ仙山の赤いそらばかりながめやる。（鄭君が官吏生活にはいつたのはちやうどそんなものだ。）君は多くの儒者に冠たる人で早くから君は當時の名公（蘇頲）から賞められたときいてをる。君の地位は士大夫の間にたかくあつた上に君の氣はすぐれてさわやかなものであつた。』君は天然に生れながら知る聖人の資性をそなへ、學問は孔門の子游子夏がうへに立つほどであつた。君にくらべると神農にもておちが有り、君にくらべると黃石公も師長たることははづかしくおもふであらう。君は藥物の書を著はしては西域のはてまでの名をあつめ、兵法諸流は之を掌に指す如くあかるくあつた。君は諸學を遺憾なく一貫し、「薈蕞」の書をかいたなどは餘力のはてぢつとしてゐてはからだがむづかゆいのでやつた仕事とおもはれる。』君は測地の事、星經の事にはおくふかく、蟲篆の書、丹青の畫まで廣くゆきわたつてゐた。君にくらべると揚子雲もあまねく書を窺うたとはいへぬし、東方朔が諧謔の名を得てをるのはまちがつてをる。顧野王は書翰がうまいといはるるが君は第二の野王である。鍾繇父子は書體の變に妙といはるるが君は二鍾を兼ねたものだ。君の文章は天下人の口に傳誦されてゐる。君の書いた大字は今でも牓面に殘つてゐる。むかし君は君の作つた新詩とともに書畫の圖を天子にたてまつつたことがある。その時君の仙境の畫趣は天子の玉陛をも感動させ畫中の鶴はひとこゑ鳴いたとさへおもはれたほどである。天子御自身に「三絶」と題したまはつたことは四方の人人の尤も仰ぎたふとんだところであつた。』ただ君は酒がすきでますます氣儘にふるまひ、琴を彈きつつ天地を睥睨し、形骸なんぞは土木同樣に無視し、親しむものは脇息と杖ばかりであつた。役所の部屋に寄つたことはかつてなく、ぢつと坐つて書齋のとばりに倚りそうてゐた。晩年には藏書室のある處に身を寄せた（著作郎となる）がこの時胡虜（祿山）の兵馬の塵がひろく横はる樣になつた。君は賊に從はず朝廷の方へ歸順したのであるが賊軍の僞官を受けたとの汚れのしみはそそぎ洗ふに由なかつた。それで老年の身を以て台州の屬官におほせつけられ、はるかに浙江の舟をうかべることとなり、四明の雪をふみては履に穴があき、饑餓の境に陷りては楢溪の橡栗を拾ふの運命にであふに至つた。』自分はむなしく君が四皓のごとく紫芝の歌をうたうてゐるときくばかりで、杏壇の長者たる君が姿を見ることができず、遠く東南の天をながめやればただ秋色に魍魎のはびこれるさまののこれるを見るばかりである。お別れしてからむごくもとうとう今日となつてしまつた、しらが頭をしていたづらに曩昔のことをおもふ。』（長安時代はどうであつたか）春が深くて秦中の山山はたかく秀でてゐた。秋、この葉のおつるときには渭水の水は清くてほがらかであつた。王侯の門に劇談したこともある。田野にでて林間で馬の頸革をほどいてやすんだこともある。吟詠をかきしるす紙片を手にしながらひとばんぢう飲みくらしたあの當時は四時の景物に對してむかしの賢

豪に對する追想がしせんと集つてきたことであつた。』むかし君は僕のことをみだりに推奬してくれたが、今やとうとう文壇で君とへだたつてしまつた。百年の生涯に於て君と僕とは一は存し一は沒してしまつた。君沒してのちはとりのこされたさびしい自分はどこにたよつたらよいのであるか。（君は永久にかへらぬが）阮咸ともいふべき君の姪（鄭審）がをられる、姪のきみの進退は自分と運命のぐあひが似てゐる。後日江陵へいつて姪のきみをたづねるときには、かなしみの念をいだきつつ自分のただよへる生活の身のうへばなしをしようとおもふ。（君へのかはりに）。』

〔八〕故右僕射・相國・曲江張公九齡

〔八〕故の右僕射相國曲江の張公九齡

相國生南紀。金璞無留礦。　相國南紀に生る、金璞礦に留まること無し。

仙鶴下人間。獨立霜毛整。　仙鶴人間に下る、獨立霜毛整ふ。

矯然江海思。復與雲路永。　矯然江海の思、復た雲路と永し。

寂寞想土堦。未遑等箕穎。』　寂寞土堦を想ふ、未だ箕穎に等しくするに遑あらず。』

上君白玉堂。倚君金華省。　君が白玉の堂に上り、君が金華の省に倚る。

碣石歲崢嶸。天池日蛙黽。　碣石歲に崢嶸たり、天池日に蛙黽。

退食吟大庭。何心記榛梗。　退食大庭を吟ず、何の心か榛梗を記せむ。

骨驚畏曩哲。鬒變負人境。　骨驚きて曩哲を畏れ、鬒變じて人境に負く。

雖蒙換蟬冠。右地惡多幸。　蟬冠を換ふるを蒙ると雖も、右地多幸を惡づ。

敢忘二疏歸。痛迫蘇耽井。　敢て忘れむや二疏の歸りしを、痛は迫る蘇耽が井。

紫綬映暮年。荊州謝所領。　紫綬暮年に映ず、荊州所領を謝す。

庾公興不淺。黃霸鎭每靜。』　庾公興淺からず、黃霸鎭每に靜かなり。』

賓客引調同。諷詠在務屛。　賓客調の同じきを引く、諷詠務屛に在り。

詩罷地有餘。篇終語淸省。　詩罷みて地餘り有り、篇終りて語淸省なり。

一陽發陰管。淑氣含公鼎。　一陽陰管より發る、淑氣公鼎に含まる。

乃知君子心。用才文章境。　乃ち知る君子の心、才を文章の境に用ひしを。

散帙起翠螭。倚薄巫廬竝。　帙を散ずれば翠螭起る、倚薄巫廬と竝ぶ。

綺麗玄暉擁。牋誄任昉騁。　綺麗玄暉を擁し、牋誄任昉と騁す。

自我一家則。未闕隻字警。　我自りす一家の則、未だ闕かず隻字の警。

(五四)千秋(五五)滄海南、名繋(五六)朱鳥影。』　千秋滄海の南、名は繋る朱鳥の影。』
(五七)歸老守(五八)故林、(五九)戀闕(六〇)悄延頸。　歸老故林を守る、戀闕悄として頸を延ぶ。
(六一)波濤(六二)良史筆、(六三)蕪絕(六四)大庾嶺。　波濤良史の筆、蕪絕す大庾嶺。
(六五)向時(六六)禮數隔、(六七)制作難(六八)上請。　向時禮數隔る、制作上請し難し。
(六九)再讀(七〇)徐孺碑、猶思(七一)理煙艇。』　再び讀む徐孺が碑、猶は思ふ煙艇を理めむことを。』

【字解】【一】故右僕射・相國・曲江張公九齡　左・右僕射は官名、時に沿革あり、開元元年には左・右丞相といふ、九齡は開元二十四年に尙書の右丞相たり、故に右僕射といへり。相國とは九齡は開元二十二年に中書令たりしを以て之をいふ。曲江とは九齡は韶州の曲江の人なるを以ていふ、張公九齡とは尊びて公といへり。九齡字は子壽、一の名は博物、曲江の人、進士の第に登り、累官して開元十一年中書舍人となり、二十一年中書侍郎・同中書門下平章事、二十二年に中書令兼修國史となり、二十三年に金紫光祿大夫・始興縣伯、二十四年に尙書右丞相、二十八年に卒す、年六十三。文獻と諡す。至德二載三月、上皇（玄宗）九齡が祿山の反相を識りし先見を思ひ使を遣はし曲江に至りて之を祭らしめ、司徒を贈る。【二】南紀　「詩」小雅四月篇に滔滔江漢、南國之紀、とみゆ。鄭箋に衆川を紀理して壅滯せざらしむといへり、江漢の二水は南　諸川を紀理するものなるをいふ。從つて江漢以南の地を南紀と稱す。杜田が曰く、說者是の詩を援き江漢を以て南紀となすは非なり、南紀とは分野の名なり、唐天文志に云ふ、東循嶺徼、達甌・閩中、是謂南紀、所以限蠻夷也、と。張相國は曲江の人なり、曲江は韶州に隸す、正に嶺徼甌越の地なり、大抵江漢より以南は皆之を南紀といふ、ひとり江漢のみに非ず、と。【三】金璞　こがね、あらたま。【四】留礦　鐵石のなかにのこる、九齡幼にして聰敏、善く文をつづる、年十三、書を以て廣州刺史王方慶を干す、方慶、大に嗟賞して曰く、此の子必ず能く遠きを致さんと。これ礦に留まらざるなり。【五】仙鶴　九齡の人品をたとへていふ。また家傳に云ふ、九齡が母、九鶴天よりして下り飛びて庭に集まると夢み、

遂に九齡を生む、と。【六】霜毛　白色のけ。【七】矯然　あがる貌。【八】江海思　江海をしたふの情。【九】雲路　雲の径ばる天上の途、高く飛ばんとする意あるをいふ。【一〇】想土階　上古質樸の世を想ふ、司馬遷傳に云ふ、墨者も亦堯舜を上びて言ふ、其の堂高さ三尺、土階三等なりと。【一一】箕穎　箕穎は箕山穎水、巢父・許由の隱れし地、箕とは隱志をひとしくすること。起八句九齡が人品と濟世の志ありしをいふ。【一二】上君　君は天子をさす。【一三】白玉堂　うつくしき堂。【一四】金華省　漢の時、未央宮に金華殿あり、九齡進士に及第し、校書郎に拜し、左拾遺・左補闕・中書舍人・祕書少監・集賢院學士・中書侍郎等となる、これ玉堂金華より出入するなり。【一五】碣石　渤海にありし石門、今の秦皇島の附近、其地范陽に近し。【一六】歲崢嶸　歲は歲歲、崢嶸は高き貌、此の一句は以て安祿山の勢力歲とともに盛となるをいふ。開元二十四年張守珪、平盧討擊使安祿山をして奚・契丹を討たしむ、敗績す、守珪之を斬らんと請ひ京師に送る、九齡も其の叛相あるを知りて之を斬るべしといふ。玄宗之を赦す。【一七】天池　宮池をいふ。【一八】日鮭鼉　日は日日、鼉は「かはづ」、鮭鼉は李林甫等の小人をさす。【一九】退食　役所より退歸する。【二〇】大庭　大庭氏なり、上古至治の時代。【二一】記梼杌　記は記憶すること。梼ははりの木、杌は棒切れ、途のじやまになるもの、小人の讒言などをたとへていふ。「本事詩」にいふ、張曲江、李林甫と同列、林甫之を疾む仇の若し、曲江、「海燕」の詩を作くりて意を致す、と。詩に曰く、海燕何微眇、乘春亦蹔來、豈知泥滓賤、祇見玉堂開、繡戶時雙入、華軒日幾回、無心與物競、鷹隼莫相猜、と。又「感遇」に曰く、孤鴻海上來、池潢不敢顧、側見雙翠鳥、巢在三珠樹、矯矯珍木巓、得無金丸懼、美服患人指、高明逼神惡、今我遊冥冥、弋者何所慕、と。故に梼杌を記せざるものなり。【二二】骨驚　甚だしく心をいためること、江淹が「別賦」に心折骨驚とみゆ。【二三】長顧晳　前代の賢人に若かざるをおそる。【二四】鬒變　鬒は「くろかみ」、變は色かはりて白くなること、憂慮の結果なり。【二五】負人境　人の住む境地にそむく、片田舍へ逐ひやられしをいふ。【二六】換蟬冠　蟬冠は中書令の職をさしていふ、侍中と中書令とは冠に金蟬貂尾をかざりに附す、換とは他の職務にかへる、卽ち中書令を罷めしをいふ。【二七】右地　尙書右丞相の地位をいふ。九齡開元二十二年に中書令となり、二十四年に尙書右丞相に遷り知政事を罷む。【二八】恧多幸　恧は「はづる」、多幸は右丞相にてもまた幸多しとする。【二九】二疏歸　漢の宣帝の時、疏廣・疏受の二人、太傅・少傅の官をやめて故鄕に歸る。九齡亦同じ

念あるないふ。【三〇】痛迫蘇耽井　蓋し母巳に沒するにあひて歸里の念切なるないふ。「神仙傳」にいふ、蘇耽は郴縣の人、少くして孤、母を養ひて至孝、忽ち母に辭していふ、受ㇾ性仙に應す、當に供養に違ふべしと。母曰く、汝去らば我をしていかんが存活せしめんと。耽曰く、明年天下疫疾あらん、庭中の井水と簷邊の橘樹とは以て代りて養ふべからん、と。時に至りて病む者橘葉を食し井水を飲みて癒ゆ。これ「蘇耽井」の故事。傳にいふ、九齡工部侍郎に遷る、歸り養はんと乞ふ、詔して許さず、母の喪に及び職を解く、毀、哀に勝へず、紫芝あり坐側に產す、白鳩白雀、冢樹に巣くふ。是の歲(開元二十一年)十二月、哀を奪ひ起復して中書侍郎・同平章事に拜せしむ、固辭すれども許さず。官に在りても鄉に歸り喪に服せんとおもふ、これ「痛迫」のことなり。【三一】紫綬　金印を帶ぶるむらさきのひも、唐の制、大都督府の長史は從三品にして紫綬なり、九齡嘗て長安の尉周子諒といふ者を監察御史に薦めしに、子諒罪を受くるに至りしため、そのまきぞへをうけ晩年に荊州大都督府長史に左遷せらる。【三二】映　印綬の光かがやきうつろふないふ　【三三】荊州　荊州府江陵縣、大都督府の在る所、上にみゆ。【三四】謝所領　謝は拜謝、お禮をまをすないふ。文集に荊州謝上表あり。所領は管轄の地ないふ。【三五】庾公興不淺　庾公は晉の庾亮。亮、武昌に鎭せしとき諸佐吏、月に乘じて共に南樓に登る、俄にして亮至る、諸人將に起ちて之を避けんとす、亮徐ろに曰く、諸君且住せよ、老子此に於て興復た淺からず、と。九齡が風雅の懷、庾亮の如くなるないふ。【三六】黃霸鎭每靜　漢の黃霸、潁川の太守となり、其の治天下第一たり。鎭は鎭め駐まる所ないふ。九齡が鎭せし所つねに安靜なること黃霸のごとし、九齡は洪州刺史となり、洪州・桂州の都督・嶺南道按察使等となりしことあり。以上「上君」以下十六句は九齡の經歷心事ないふ。【三七】引調同　同調を引くといふに同じ、同調は同じ調子の人、同趣味の人。孟浩然が傳にいふ、浩然襄陽に還る、九齡時に荊州を鎭す、署して從事となし、之と倡和す、と。九齡が傳にいふ、九齡荊州長史に貶せらる、直道を以て黜けらると雖も戚戚として望を嬰けず、ただ文史自ら娛む、朝廷其の勝流なるを許す、と。【三八】務屛　俗務を屛ぞけ去ること。【三九】地有餘　餘地あるないふ、餘裕あること。【四〇】清省　清らかにしてむだなし。【四一】一陽發陰管　一陽は陽氣の初生のもの、發は發生、陰管は陰律の管、一陽陰管より起るは十一月、律、黃鍾に中るないふと。詩調の和氣あるないふ。【四二】淑氣含公鼎　淑氣はよき氣、公鼎は公家の鼎、廟堂大烹を宰るの鼎、鼎中に調理されし物美味なるにより鼎、淑氣を含むなり。

これは九齡が氣象をいへるならん。【四三】君子　有德の人、九齡をさす。【四四】散帙　九齡の文集の帙を開き散ずる。【四五】起翠螭　螭は龍の角なきもの、螭起るとは神物の躍りいづるないふ。【四六】倚薄　よりせまる。【四七】巫廬並　高きこと巫山・廬山とならぶ。巫山は夔州に、廬山は九江府にあり。【四八】綺麗　字句のあやありてうるはしきこと。【四九】玄暉擁　玄暉は齊の詩人謝朓が字、擁とはだきかかへる、提攜すといふの類。【五〇】箋誄　箋は他人に與へる手紙の文、誄は死者の德を累述して之を痛む文、並に文體の名。【五一】任昉騁　任昉は梁の文章家、沈約と共に沈詩任筆の名あり、筆は文章ないふ、騁とは相馳騁するに足るないふ。【五二】自我一家則　一家の法則を我自身よりして立てる。我の字を一に成に作る、しからば自成㆓一家則㆒なり。【五三】隻字警　ぴりつとひとをめざめさす樣な一字。【五四】千秋　千年、長き年月ないふ。【五五】滄海南　ひろうみの南。九齡が故鄉廣東地方をさす。【五六】朱鳥影　緯書「文耀鉤」にいふ、南宮は赤帝、其の精を朱鳥となす、と。「史記」天官書に、南宮朱鳥とみゆ。柳宿の八星を朱鳥咮と名づくるなり。南海地方は朱鳥の宿にあたるなり。「賓客」十六句は九齡が文學についていふ。【五七】歸老　かへりて老を養ふ。【五八】故林　故鄉の林。【五九】戀闕　宮門をこふる。【六〇】悄延頸　悄はしをれた貌、延頸はえりくびをさしのべてながめる。【六一】波濤　文章の勢の壯なるさま。【六二】良史筆　よき歷史家のごとき筆力、開元二十二年九齡中書令となるや嘗て國史を監修す、又「唐會要」にいふ、「六典」は開元二十八年九齡の上る所なり、と。又天長節ごとに公卿皆衣服を進む、九齡は「千秋金鑑錄」五卷を上り、帝王の興衰を述べて以て鑒戒となせし、と。皆其の史筆あるを見るに足れり。【六三】蕪絕　はなはだしく草にうづもれる。【六四】大庾嶺　嶺の名、韶州始興縣にあり、梅を以て名あり、嶺の新路は開元十七年に九齡に詔して開かしめし所なりと。其人沒して嶺路亦荒るるに至れるないふ。徐浩撰する所の張公碑銘に曰く、開元二十八年春、請㆓拜掃㆒南歸、五月七日、遘ㇾ疾、薨㆓於韶州曲江之私第㆒、享年六十三、と。新舊唐書に九齡が享年を六十八に作るは蓋し誤なるべし。【六五】向時　さきつ時、開元の末頃をさす。【六六】禮數隔　禮數は儀禮に關する階級ないふ、一方は宰相、自己は浪人なれば身分隔たる。【六七】制作　自己の製作物。【六八】上請　九齡に上呈して其の敎を請ふ。【六九】再讀　再とは嘗て之をよみ、いままた九齡の歿後に之をよむないふ。【七〇】徐孺碑　徐孺は後漢の高士、徐穉字は孺子ないふ。開元十五年九齡其の碣文をつくる。全文は後に

出だす、【七】理舾楫　理は「をさむる」、準備するをいふ、舾楫は楫のよこたばろこぶれ、水路南昌に往きて碑文を讀まむとおもふをいふ。「歸老」八句は九齡が鄕に歸りて沒せしことをいひ景仰の情をのべて結とす。

附錄

後漢徐徵君碣銘并序

張九齡

後漢高士徐君。諱穉。字孺子。南昌人也。先生受二天元休一。含レ道傑出。生知而上。貫レ之以レ一。率化體資二清純一。動適二玄妙一。知二道之將一レ廢。乃窮則獨善。躬耕取レ資。非レ力不レ食。鄰落所レ處。故進無二祿無レ訟。在二漢之季一。遭二時涸濁一。不レ抗レ跡以庇レ物。故退非二山林一。不レ苟レ利以辱レ身。尙書令汝南位一。五辟二宰府一。四察二孝廉一。又擧二有道一。就拜二太原太守一。皆辭レ疾不レ起。延熹二年。陳蕃、僕射南郡胡廣、相與上レ疏。極言下先生宜レ爲二輔弼一。協和中人神上。漢桓帝猶能安車玄纁。備レ禮致レ聘。而竟不レ屈レ志。知二時之不一レ可レ支也。然而諸公嘉招。雖レ不二之屑一レ就。及レ聞二薨卒一。徒步弔祭。禮有レ所レ尙。隻雞不レ薄。意有レ所レ加。生芻爲レ貴。士之感レ義。實裨世之有レ補。人而見レ德。俾二後生之可一レ尋。其廢中レ權。行中レ慮。皆此類也。昔者夷齊介潔而遠去。沮溺野逸而離レ羣。顏闔鑿レ坏以遁逃。接輿狂歌而詭激。此誠作者。或類二沽名一。夫有レ所レ不レ爲。志則偏也。無二適不一レ可。用之極也。先生則貶絕在レ心。而經二於世一。純儉以存レ戒。博愛以體レ仁。應レ物以會通。全レ己以歸レ正。漢廷所三以宗二其德一。天下所三以服二其行一。豈與二彼數子一直逕庭而已哉。靈帝初。欲二蒲輪聘一レ焉。會先生以レ疾終。時年七十有二。子曰二季登一。篤行孝悌。亦高尙不レ仕。皇唐開元十五年。予忝二牧茲邦一。風流是仰。在二懸榻之後一。想二見其人一。有二表墓之儀一。豈孤二此地一。則先生之德。其可レ沒乎。乃銘曰。

靈芝無根。醴泉無源。角立傑出。先生斯存。英英先生。德不レ可レ名。騫出無レ應。鴻飛入レ冥。道高事遠。跡陳名卻。勒二石舊邦一。以觀二其妙一。

【題義】張九齡を哀みてよめる詩。

【詩意】相國張公は南紀にあたる地に生れ、その世に出づるや黃金や璞の礦中に留まらぬごとく、また仙鶴が人間におりてきて獨立して白き毛を整へたるがごとくであつた。それで公は一方には高く江海をしたふこころをもつてをるが他方には靑空をしのいで遠く飛ばんとするこころももつてゐた。公はさびしく過ぎ去つた質樸の時代、堯の土堦三等の世を想ひはするが、巢父・許由とおなじ樣な志をもつて箕山潁水に隱れてくらすひまはなかつた。』だから公はみやこへ出てきて、天子の白玉の堂にのぼり、金華の省に侍るに至つた。そのころ碣石の山はとしどしに路がたかくけはしくなり、(安祿山の虜の勢が盛になり) 宮苑の池には日日蛙 (小人ども) がはびこる樣になつてゐた。公は官署から退出してかへれば古代の大庭氏の治世を吟じて、小人が邪魔することなどはこころにとめはせず。ただ自己が前賢に若かざらんことを畏れて骨髓まで驚かし、人境をはなれた地方へ出されたりするた

めに黒髮も白くなるほどにしんぱいをされた。宰相を免せられて貂蟬の冠を換へさせられたとき、右丞相に遷されたが、それさへもまだ幸が多すぎるとてはづかしとせられた。むかし蘇耽は井水と橘葉とを以て母を養うたといふが公は母をしたうて痛みがむねに迫つてゐたのである、どうして疏廣・疏受の樣に官を退いて故鄕に歸つてしまふことを忘れるものぞ。晩年には公は紫綬をかゞやかして荊州に貶しめられながら、そこから領地を授けられたお禮を言上した。公は任處に於ては庾亮のごとく風雅の興も深く、黃霸のごとく管内いつも靜かであつた。』また賓客としては同趣味のものを引き、詩を詠じたりして俗務をしりぞけるを目的とした。その詩は之を作り了りてもまだいか樣にもつくり得る餘力があり、一篇をつゞりをへたところで辭が淸らかで無駄がない。その詩律の調べは黃鐘の律のひびきのごとくやはらかであり、そのうまみは鼎のなかに含まる春の氣の樣である。これを見れば公の心はよほど才を文章の境地に用ひられたことが知らるる。公の集をひつくりかへしてみると翠螭が躍りだして雲間にせまつて巫・廬の山と高く竝ぶかとおもふ。その詩の綺麗なことは謝玄暉と手をとり、牋誄の文章の巧みなことは任昉と馳騁するに足る。一家の法則を自己より立て、一字たりとも警語をだすことを缺かさぬ。公の名は永久滄海の南に於て朱鳥の星影とともにかかつてゐる。』しまひに公は老を養ふため故鄕に歸つて園林を守られたが、宮闕をこひしたうてしよんぼりとえりくびを都の方へさしのべてをられた。波濤を捲き起す樣な公の良史の筆。それも公沒してしまつては大庾嶺の路も草の荒るるにまかすばかりだ。そのかみをかんがへると自分は公とは身分の階級が隔たつてゐたので自分の製作をたてまつつてみてもらふこともかなはなかつたのだ。いま公の撰に成る徐孺子の碑文をふたたび讀んでみると、小舟の用意をして南昌まで出かけていつてみたい樣な感じがする。』

夔府書懷四十韻

昔罷(一)河西尉。初興薊(二)北師。
不才名(三)位晚。敢恨省(四)郎遲。
屆(五)聖崆(六)峒日。端(七)居灔(八)澦時。
萍(九)流仍汲(一〇)引。樗(一一)散尙恩(一二)慈。
遂阻(一三)雲臺宿。常懷湛(一四)露詩。
翠(一五)華森遠矣。白(一六)首颯(一七)凄其。
拙(一八)被林(一九)泉滯。生逢酒(二〇)賦欺。
文(二一)園終寂寞。漢(二二)閣自磷(二三)緇。
病隔君(二四)臣議。慚紆(二五)德(二六)澤私。

夔府書懷四十韻

昔河西の尉を罷めしとき、初めて薊北の師興る。
不才名位晚し、敢て恨まむや省郎の遲きを。
聖に屆す崆峒の日、端居す灔澦の時。
萍流仍ほ汲引せらる、樗散尙ほ恩慈。
遂に雲臺の宿を阻つ、常に懷ふ湛露の詩。
翠華森として遠し、白首颯として凄其なり。
拙にして林泉に滯せしめらる、生れて酒賦の欺るに逢ふ。
文園終に寂寞たり、漢閣自ら磷緇。
病みて隔たる君臣の議、慚づらくは德澤の私を紆らさるるを。

（二七）揚鑣驚（二八）主辱。拔（二九）劍撥（三〇）年衰。』
（三一）社稷經綸地。風（三二）雲際會期。
（三三）血流紛在眼。涕灑亂交（三四）頤。
（三五）四瀆樓船汎。中原鼓角悲。
賊壕連（三六）白翟。戰瓦落（三七）丹墀。
（三八）先帝嚴（三九）靈寢。宗（四〇）臣切（四一）受遺。
（四二）恒山猶突（四三）騎。遼（四四）海競張（四五）旗。
田父嗟（四六）膠漆。行人避（四七）蒺藜。
（四八）總戎存大體。降（四九）將飾卑詞。
（五〇）楚貢何年絕。堯（五一）封舊俗（五二）疑。
（五三）長吁翻（五四）北寇。一望卷（五五）西夷。』
不必陪（五六）玄圃。超（五七）然待（五八）具茨。
（五九）凶兵鑄農器。講（六〇）殿闢（六一）書帷。

揚鑣主辱に驚き、拔劍年衰を撥く。』
社稷經綸の地、風雲際會の期。
血の流るは紛として眼に在り、涕灑ぎて亂れて頤に交はる。
四瀆樓船汎ぶ、中原鼓角悲し。
賊壕白翟に連なる、戰瓦丹墀に落つ。
先帝靈寢嚴なり、宗臣切に遺を受く。
恒山猶は突騎、遼海競ひて旗を張る。
田父膠漆を嗟く、行人蒺藜を避く。
總戎大體を存す、降將卑詞を飾る。
楚貢何の年か絕えたる、堯封舊俗疑はし。
長吁す北寇翻へるに、一望西夷卷く。』
必ずしも玄圃に陪せず、超然具茨を待たむ。
凶兵農器を鑄む、講殿書帷を闢かむ。

（六二）廟算高（六三）難測。天（六四）憂實在茲。
（六五）形容眞潦（六六）倒。答（六七）效莫支（六八）持。』
（六九）使者分（七〇）王命。羣（七一）公各典（七二）司。
恐乖均（七三）賦斂。不似問（七四）瘡痍。
萬里煩（七五）供給。孤（七六）城最怨思。
（七七）綠林寧小患。雲（七八）夢欲難追。
（七九）卽事須（八〇）嘗膽。蒼（八一）生可察（八二）眉。
（八三）議堂猶集（八四）鳳。貞（八五）觀是元（八六）龜。
處處喧（八七）飛檄。家家急（八八）競錐。
（八九）蕭車安（九〇）不定。蜀（九一）使下（九二）何之。』
（九三）釣瀨疎（九四）墳籍。耕（九五）巖進（九六）奕棋。
地蒸餘破扇。冬暖更纖（九七）絺。
（九八）豺遘（九九）哀登楚。麟（一〇〇）傷泣（一〇一）象尼。

廟算高くして測り難し、天憂實に茲に在り。
形容眞に潦倒、答效支持するもの莫し。』
使者王命を分つ、羣公各〻典司。
恐らくは賦斂を均しくするに乖かむ、似ず瘡痍を問ふに。
萬里供給煩はし、孤城最も怨思す。
綠林寧ぞ小患ならむや、雲夢追ひ難からむと欲す。
卽事須らく膽を嘗むべし、蒼生眉に察す可し。
議堂猶は鳳を集む、貞觀は是れ元龜なり。
處處飛檄喧し、家家競錐急なり。
蕭車安んずれども定まらず、蜀使下りて何にか之く。』
瀨に釣りて墳籍に疎なり、巖に耕して奕棋を進む。
地蒸して破扇餘る、冬暖かにして更に纖絺す。
豺に遘ひて登楚を哀む、麟に傷みて象尼泣く。

衣冠(一〇二)迷適越。藻繪(一〇三)憶遊睢。　衣冠適越に迷ふ、藻繪遊睢を憶ふ。
賞月延秋桂(一〇四)。傾陽(一〇五)逐露葵。　月を賞して秋桂に延き、傾陽露葵を逐ふ。
大庭(一〇六)終反樸(一〇七)。京觀(一〇八)且僵尸(一〇九)。　大庭終に樸に反らむ、京觀且つ僵尸。
高枕虛眠晝。哀歌欲和(一一〇)誰。　高枕虛しく晝に眠る、哀歌和せむと欲するものは誰ぞ。
南宮(一一一)載勳業(一一二)。凡百(一一三)愼交綏(一一四)。』　南宮勳業を載す、凡百交綏を愼め。』

【字解】【一】關河西尉　天寶十四年作者河西尉を授けらる、拜せず。卷三〇頁二八「官定後戲贈」詩をみよ。【二】名位晩　おそく官途につく、下の省郎還とおなじこと。【三】薊北師　薊州北方の軍、安祿山の叛軍をいふ。【四】省郎還　尙書省の郎官となることおそし、作者廣德二年六月嚴武が薦を以て節度參謀・檢校工部員外郎となり、緋衣魚袋を賜はる。【五】扈蹕　肅宗に扈從する。【六】崆峒　山の名、甘肅省平涼府固原州の西にあり、肅宗靈武への往來に經過せし所、作者自身は崆峒山に至りしに非ざれども肅宗との緣によりかくいへり。「洗兵行」卷六の六三一頁の常思仙仗過崆峒の句解をみよ。【七】端居　なにもせずに居る。【八】澆漬　堆の名、夔州に居ることをいふ。【九】萍流　萍の漂流するごとく流浪する。【一〇】汲引　井水をくみあぐるごとく地位をひきたててもらふ、嚴武の推薦をさす。【一一】樗散　樗は惡木の名、散は役に立たずうちすててあるをいふ、卷五の五一五頁の樗散の句解をみよ、自己の不才、樗木の散なるごとくなるをいふ。【一二】恩蟲　天子の恩をいふ。【一三】阻雲簪宿　阻は他物によりて阻隔さるること、雲棗は宮中の棗、宿は宿直、作者拾遺たりし頃には宮中に宿直せり。【一四】湛露詩　「詩」小雅に湛露篇あり、天子、諸侯を宴する詩なり、作者宮宴に侍せしことあるをおもふをいふ。【一五】翠華　天子の旗。【一六】白首　自己のしらがあたま。【一七】颯淒其　颯は風の吹くさま、淒其はものがなしきさま、其は助字。【一八】拙　世才のつたなきこと。【一九】林泉滯　山林に留滯せしめらるる。【二〇】酒賦欺　酒と賦との生活に身を誤らるるはそれにあなどらるるに似たり。【二一】文園　司馬相如、文園の令となる。相如を以て自ら比す。【二二】漢閣　漢の天祿閣、揚雄其上に書を校す。【二三】磷緇　「論語」陽貨篇に孔子の言として、不レ曰レ堅乎、磨而不レ磷、不レ曰レ白乎、涅而不レ緇、とみゆ。磷は石のすりへりて薄くなること、涅は黒ぞめにすること、緇はうす黒くなること。堅きものは磨りても薄くならず、白きものは染めても黒ずまぬといふなり。この句にては蓋し自己の銳氣衰へて身、塵土に汚されたるをいふ。【二四】君臣議　君臣の朝廷にての政治を議すること。【二五】慚紆　紆とはめぐらすなり、遠く身に及ぶをいふ。【二六】德澤私　君の恩德のうるほひの特に自己に與へられしこと、郎官にひきたてられしことをさす。【二七】揚鑣　鑣をあぐ、馬を飛ばすこと、國事のため躍りださんとするなり。【二八】憂主辱　主辱とは代宗のしばしば吐蕃の亂に苦しめられることをさす。【二九】拔劍　これも國難を平げんと思ふさま。【三〇】探　のぞく。起二十句は往年より今日までの境遇の變化と、現に君國を思ふことをのぶ。【三一】社稷經綸地　天下社稷のために經綸を行ふべきの地に於て。【三二】風雲際會期　君臣際會期といはんがごとし、風雲は蓋し「易」の雲從レ龍、風從レ虎の風雲を借用す、肅宗靈武に起るにより豪傑來り會す。【三三】血流　安・史の亂によりて戰血流る。【三四】交頤　おとがひにまじはる、涙がやたらに頰につたはる。【三五】四瀆　江・淮・河・濟の四川をいふ。【三六】白翟　陝西省の鄜州・延州は春秋時代の白翟の居りし地。【三七】丹墀　宮殿の丹ぬりの土堦、「社稷」の句より「戰瓦」までの八句は肅宗時の亂をいふ。【三八】先帝　肅宗。【三九】靈寢　陵前の御殿。【四〇】宗臣　天下後世の尊ぶ所の臣、郭子儀をさす。【四一】切受遺　ぢかに遺託をうける、寶應元年、建卯の月、肅宗不豫なり、郭子儀を召し臥内に入らしめて曰く、河東の事は一に以て卿に委す、と。これ受遺の事なり。【四二】恒山　山西省大同府渾源州東南二十里にあり。【四三】突騎　驍銳にして敵に衝突すべき騎、賊の騎をいふ。【四四】遼海　遼東の海。【四五】張旗　賊の勢あるをいふ。【四六】嗟膠漆　王洙曰く、儻昔時の天下朋友皆膠漆の膠漆なりと。これは平和時に朋友膠漆の如き親密なりしが今は然らざるをなげくとするなり。呂祖謙曰く、膠漆は弓をつくるに用ふ、その誅求の多きによりて田父之をなげくと。これは膠漆を兵器の材料とみるなり。今呂說に從ふ。【四七】蒺藜　鐵蒺藜なり、また渠荅ともいふ、鐵線にていばらの如きとげある障碍物をつくるなり、今の鐵條網のごとし。【四八】總戎存大體　總戎は元帥、これ副元帥僕固懷恩をさす。存大體とはこまかき所は論ぜず、

大局にさしつかへなければとてそのままにしておくなといふ。これ朝廷のために辭を飾りていふ。【四九】降將飾卑詞　降參せる武將等がへりくだつた詞をかざる。本心は降參するに非ざるにうはべだけ降參したしといふ。史にいふ、史朝義死するや賊將田承嗣・薛嵩等降る、副元帥僕固懷恩、賊平げば寵の衰ふるを恐れ、奏して承嗣等を留めて分ちて河北に帥たらしめ自ら黨援を樹す、是によりて驕慎集驚、遂に制す可からず、と。【五〇】楚貢　齊の管仲が楚を伐つとき之を責めし辭に、爾の貢せる包茅入らずといへり、楚よりは周の天子へ物を包むに用ふる茅を貢としてたてまつるなり、「左傳」に見ゆ。借りて地方の中央への貢物をさす。（仇氏は徽俯の小使をさすといへり）。【五一】堯封　「史記」周本紀に、堯の後を薊に封ずとあり、祿山の起りし薊の地方は堯の子孫の封ぜられし後なり。【五二】舊俗疑　堯の子孫ならば其の遺風存せば叛將の出づるはず無かるべきに今之あるは舊俗の存否疑ふべし、楚貢・堯封の二句は「諸將」詩の滄海未全歸禹貢、薊門何處盡堯封と同意ならん。【五三】長吁　吁はなげく。【五四】翻北寇　翻は翻覆、降參してはまたそむくこと、北寇とは回紇をさす。【五五】卷西夷　卷とは中國の地を席卷し侵略しきたるなり、西夷とは吐蕃をいふ、「先帝」以下は代宗の朝を敍す。以上「社稷」二十句は肅・代・二朝の亂をのぶ。【五六】陸玄圃　陸は陸宴、陸字の主語は天子、（舊註多く作者とす）玄圃は崑崙山の圃、周の穆王、西王母に會し宴することを用ふ。疑ふらくは代宗の陝州への出奔をとりつくろひてかくいひしか。【五七】越然　世俗をはなるる貌。【五八】待具茨　待は至道を聞かんことを待望するなり、待の主語は天子、具茨は山の名、「莊子」徐無鬼篇にいふ、黃帝將に大隗を具茨の山に見んとす、襄城の野に至りて七聖皆迷ふ、牧馬の童子に遇ひて塗を問ふ、と。具茨は許州陽翟縣にありと。【五九】凶兵　「老子」に兵は凶器なりとみゆ。凶兵とは凶器たる武器の意。【六〇】講殿　書籍を講ずる御殿。【六一】闢書帷　書帷は書を講ずる室のとばり。闢とはひらきて儒臣を出入せしむるをいふ。「不必」以下四句は皆作者希望の辭なり。【六二】廟算　廟堂のはかりごと。【六三】高議調　あまりに高處に在りて諧調しがたし。これは婉曲にいへるなり。【六四】天墜　天がくづれおちんかとのしんぱい。國家の危難に陷るをいふ。杞國の人に天の崩れんかと憂へしものありとの事「列子」にみゆ。【六五】形骸　自己のからだの様子。【六六】淪側　元氣の衰へし貌。【六七】答效　君國の恩に答へ力を效す。【六八】支持　ささへる、答效の志は有れども自己を支持してくれるものなきをいふ。以上の「不必」八句は治世の根本道をとき自己の微力を嘆ず。【六九】使者　中央よりのつかひ。【七〇】分王命　天子の命を地方へ分ちつたへる、この命は租稅徵求の命とみゆ。【七一】羣公　節度使及び地方長官をいふ。【七二】典司　職司をつかさどる。【七三】均賦斂　均とは公平にとりたてること。「論語」の孔子の言の不患寡而患不均の均なり。賦斂は稅のとりいれ。【七四】問瘡痍　瘡痍はきずなり、人民の疾苦をいふ。【七五】恆供給　供給の事煩瑣なり、供給は錢財をだすこと。【七六】孤城　夔州の城をさす。【七七】綠林　地方の盜賊をいふ。綠林は山の名、荊州當陽縣の東北にありと、盜賊等夥率物をここに藏くせしこと「後漢書」劉玄傳にみゆ。【七八】雲夢欲難追　「左傳」にいふ、楚の昭王、睢を涉り江を濟り、雲中に入る、盜之を攻む、と。雲中とは雲夢澤中をいふ。仇氏曰く、時に代宗陝に幸す、猶ほ昭王の國を出でしがごとし、故に之を用ふ、欲難追とは「追悔するも及ぶなき」の意なりと。（雲夢の事を韓信が事とみる說あり。韓信反すと告ぐるものありしとき漢の高祖は陳平が計を以て僞りて雲夢に遊び遂に信を擒にす。詩意は、韓信の如き叛人ありとして之を雲夢に擒にせんとするも往事を追ひ之に倣ふこと難し。亦一說なり）【七九】卽事　眼前の事に卽して。【八〇】嘗膽　越王勾踐、膽を忘れざるの故事、蓋し夷狄に復讐すべきをいふ。【八一】蒼生　人民。【八二】察眉　心情を眉宇の間に察知する。【八三】議堂　朝廷の政事堂。【八四】集鳳　賢人多く集まるをいふ。【八五】貞觀　太宗の年號。【八六】元龜　大龜なり、龜はトひに用ふ、先知の靈あるもの、大なるほど靈あり能く吉凶を知るとせらる、貞觀を顧みへすれば治體を知るに足るをいふ。【八七】飛檄　急を報ずる文書。【八八】急錙銖　錙銖は錐の尖ほどのわづかの利を爭ふこと。急とは已に誅求さるること甚しきにより、細利をも得んとするに急なるをいふ。【八九】畫車　黄育が車。漢の武帝の時、南郡の江中に盜多し、天子育を太守となす、育が耆舊の名臣なるを以て之を三公の使車に載せ殿に入り策命をうけしむ、と。【九〇】安不定　民心を安んぜんとするも民心定まらず。（一說に曰く、黄育が車、安樂なるも往くに定處なきをいふ）と。【九一】蜀使　司馬相如が事を用ふ。漢の武帝の時、蜀民動搖す、帝、相如を使せしむ、相如文を作り巴蜀の父老を諭す。かかる使者獨地に來るをいふ。【九二】下何之　ゆくべき場所あまりに多きゆゑどこにゆかんとするかといへり。「使者」十六句は夔州人民の誅求盜賊に困苦するをいふ。【九三】釣瀨　後漢の嚴子陵、桐廬江邊に隱る、その釣處を嚴陵瀨といふ。【九四】耕巖　後漢の鄭樸、字は子眞、谷口にあり巖石の下に耕して名、京師に震ふ。釣瀨・耕巖、並に以て自ら比す。【九五】進奕棋　碁盤を前へもちだす。

【九七】羈縲　ほそきあさいとのかたびらをきる。【九八】射濇　窮賊にあふをいふ。【九九】哀登楚　登楚は楚國への道にと登るをいふ。謝の王粲が故事、粲が七哀詩に、西京亂無象、豺虎方遘患とあり。(登楚を一に登粲に作る、登樓の王粲なりといふ、粲、荊州に至りて登樓賦を作る。)【一〇〇】麟傷　王者なきに麒麟がいでしことについていたむ。【一〇一】泣象尼　象尼とは孔子をいふ、孔子の首は尼山に象たりと。孔子麟について傷みしこと公羊傳に見ゆ。道の窮するをいふ。【一〇二】衣冠迷適越　宋人章甫(殷人の冠)を資として越に適く、越人は斷髮文身にて冠の用なし、事は「莊子」逍遙遊篇にみゆ。【一〇三】藻繢憂鄶　魏の陳琳が爲曹洪與魏文帝書に、「蕩蕩乎若遊鄶魯、雖有麗服、不能學藻績之紋」とみゆ。襄邑縣の南に睢水・渙水あり、其處の人皆く高級錦綺を織る、此に遊ぶものは其の風土の所爲を學ばんとするをいふ。藻はあや、繢は繍なり。襄邑縣は今河南歸德府睢州。唐にては宋州に屬す、作者壯時嘗て梁(開封)宋(歸德)に遊べり、故に此句あり【一〇四】延秋桂　延とは月光を延くをいふ、月を迎へること。秋桂とは「秋、桂花のさきたるあたりに」の意。【一〇五】傾陽逐露葵　傾陽とは太陽の光のあたる方へと葉を傾くること、露葵とは露をおびたる「ひまはり」、曹植が求通親親表に、葵藿之傾葉太陽、雖不爲之迴光、然終向之者誠也とみゆ。逐とは吾が心亦之を逐ふをいふ、逐は放逐にあらずおひすがるをいふ。忠誠君を思ふことをたとふ。【一〇六】大庭　大庭氏、上古至治の世。【一〇七】反樸　質樸なる世にかへる。【一〇八】京觀　「大なる示すもの」なり。叙戰者を埋め土をもりあげて作る。「左傳」宣公十二年に楚子の言に、古者明王伐不敬、取其鯨鯢而封之、以爲大戮、於是乎、有京觀、以懲淫慝」とあり。詩意は武人その戰功をほこるためかかる物を作るをいふ、下の「且」の字に之を重んぜざる語氣あるを窺ふべし。【一〇九】且僵尸　たふれたるしかばね、戰死者の屍骸。【一一〇】欲和鼎　和せんと欲する者は誰ぞ、これ「杜臆」の說なり。【一一一】南宮　後漢の明帝の永平中に帝前世の功臣に追感して二十八將を南宮の雲臺に圖畫す。【一一二】叙勳策　勳榮ある者は之を圖畫に載す。【一一三】凡百　凡百の君子、在位の百官をいふ。【一一四】慎交綏　慎とはつつしみて爲す勿れの意、交綏の語は「左傳」文公十二年秦晉の戰の條に見ゆ、曰く皆(秦晉みな)出戰交綏と。杜預は綏を退軍の名とし、孔疏には其意を推していふ、綏は安なり、軍退くは我行を安んずるためなり、しかし退くは大罪なるにより退くといふことを恥ぢて退くことを綏(安んずる)と稱せしならん、と。又李衛公は綏を解して曰く、綏とは六轡の綏なり、交綏して退くとは馬を交へて還るといはんがごとし、と。衛公の說によれば交綏といはざれば退軍とならざるなり、然るに司馬法には將軍死綏の語あり、これは軍退卻するときは將軍は其の綏死に當るをいふ、これ綏一字にて退軍の義あるなり。故に杜預說に從ふ。交綏は「こもごもしりぞく」なり。詩意は主としてこちらが退卻して進戰せざるをいふ。以上「釣瀨」十六句は夔州の客況をのべ當路者が亂を除き功を立てんことを希望せり。

【題義】夔州にて事に感せしことをのぶ。大暦元年秋の作。

【詩意】むかし自分が河西の尉を罷めたころちやうど薊北の謀反のいくさが興つた。自分は不才であるから名位を得ることがおそいのはあたりまへである、どうして郎官となつたのがおそいなどと恨まうぞ。かつては崆峒山の方面へ天子のおともをしたこともあつた自分であるが今は灔澦堆のそばにぢつと何もせずにくらしてゐる。自分は萍流の際に於ても引き立ててくれる人があつたし、うどの大木みた樣な身でありながら皇恩をかたじけなうしてをる。それ以來は雲臺で宿直を申しあげることもかなはなくなつたが「湛露」の詩意を以ての御宴に陪したことはいつも忘れかねてをる。あの翠華の影は遠くになつてしまつた、この白首には風がつめたく吹きつける。才の拙であるため今以て林泉に留滯させられてをる。じぶんといふ者は生れてからこのかた酒と賦とのためになぶりものにされてゐる樣な氣がする。じぶんの今は司馬相如が文園の令となつて病臥してゐた樣に寂寞であり、揚雄の樣に漢閣で書を校すべきであるのに才力が消耗してしまつた。病氣の身で御政治向きの議論とかけはなれ

てゐるが、じぶんごときものにまで御恩澤をおし及ぼしてくださつてゐることははづかしいことである。じぶんは吾が君が夷狄に辱められたまうたときいては驚いて鑣をあげて馬を飛ばさうとおもひ、年の衰へかかるのをのぞくためには劍を拔いて勇氣をはげましてゐる。』處は天下の經綸を施すべき地、時は豪傑風雲に際會したる時。どこをみてもなまなましい血が流れてゐる、之をみては涕がそそがれておのづとおとがひにみだれかかる。四大川には樓船がうかべられる、中原には鼓角の音が悲しさうにひびいてゐる。賊の設けた塹壕は白帝の方まで連り、戰ひに焚かれた屋根瓦は御殿の丹塗の堺にまで落ちちる。(これが近頃の戰亂の狀況だ。)先帝(肅宗)の御陵殿はいかめしく立つてゐる。その先帝から一代の宗臣(郭子儀)がぢかに國事について御遺託を受けたのだ。しかるに恒山にはまだ突騎があり、遼海では競うて旗を張り設けてゐる。田野の老人は弓を造るために膠漆をとらるることをなげき、みちゆく人は鐵條網をよけてとほる。總大將(僕固懷恩)は體裁上細かなことはみぬふりをしてゐるが、賊將が降參したといふても謙遜らしい詞をかざつていうてゐるに過ぎぬ。(本心から降參するつもりではない)。楚からの貢はいつの年から絶えたのだ。堯の舊領地だなどいうてもその舊俗がありやなしや疑ふべきものだ。北の寇(回紇)の飜覆常なきにはためいきつくばかりだ。みわたすかぎり西方の夷(吐蕃)が席卷してきてゐるではないか。』(この天下を治めるにはどうすればよいか)吾が君にはわざわざ周の穆王をまなんで崑崙の玄圃へ西王母の宴に陪するためお出ましにならずとも

よろしい、超然として黄帝をまなんで具茨の山に大道を聞くことを待望あそばさるるがよろしい。それから凶器である兵具は鎔かして農具を鑄、御講書のごてんには帷をひらいて儒臣をおいれになるがよろしい。(じぶんはそれがよいと思ふのに)廟堂のはかりごとはどういふものかあまりに高處に在るので臆測することがむつかしい。じぶんの天が墜ちはすまいかとのしんぱいは實にここに在るのだ。(だが)じぶんの形容はほんたうに元氣がなくなつた、いくら君國に報效の念ばかりあつてもだれもじぶんを支持してくれるものが無い。』このごろ中央から使者がでて天子のご命令を分たれてゐる、れきれきのご役人もそれぞれの職司をしてをられる、がじぶんのみる所ではその仕方は恐らくは賦斂を公平にするといふことに乖いたものではあるまいか、また民をいたはつてその疾苦を問うてやるといふ態度にも似ぬのである。すなはち萬里の遠地に於て種種煩瑣な供給をさせられるのであつて、ここの(夔州)孤城では人民が最も怨みの念をもつてゐる。綠林の小盜がはびこつてゐるのも決して小さな患とはいへぬ、楚の昭王が雲夢へでかけたとき盜賊に攻められた樣なことが出來てからは追ひつかぬことである。(或は「一朝叛臣が起つたときそれを擒にしようとしても、漢の高祖が韓信を擒にした樣な先例には追ひつくことがむつかしい」)當局たるものは眼前の出來事に卽して嘗膽の念を失うてはならぬ、人民のこころもちは眉根をみただけで察知してやる樣にせねばならぬ。今朝廷の政事堂には鳳凰の樣な賢臣が集つてをられる、貞觀の政治のことはよきお手本である。天下處處に急を告ぐる飛

檄がやかましい、どの家家もわづかな利益を爭ふことに急である。蕭育の車が民心を安定せんとでかけるが民心は安定せぬ。(或說「車は安樂であらうがひとところにおちついてをれぬ」)いくら司馬相如の如き蜀使を發しても無歡にゆくべき地をもつ彼はそもそもどこへゆかうとするのであるか。』自分は川瀨に釣を垂れて書物をよむことにはうとくなり、巖のもとに耕して時としては非盤をもちだしてたのしむ。土地がむしあつくてまだ破れうちはがころがつてをり、冬も暖いのでさらにかたびらを着るありさまだ。身は王粲のごとく豺虎にあうて楚の道に登るほどのあはれさであり、吾が道窮して孔子が麟を見て心を傷ましめた樣の態である。衣冠を着けてはどうして野蠻國に適けるものかと迷ひ、そこへゆけば藻績がよくできるといはれてをる睢水に遊んだ昔の事などをおもひだす。また桂花の咲くところに秋の月を迎へて賞したり、露を帶びたひまはりのあとをおうて吾が心はおのづと太陽に向て傾く。(これがじぶんの近來の生活だ。)今は戰爭ばやりで死んだ遺骸に土を盛りあげて記念塚などたててうれしがつてをるが、結局は大庭氏の治世のごとく質樸なところへもどつてもらひたいものだ。じぶんは枕を高くしていたづらにひるねをしてをる。かかる哀歌をうたうても誰がじぶんに和してくれるものがあらうぞ。百官在位の諸君。勳業さへ建てたなら諸君の像は南宮の雲臺の圖畫に載せられるのである、諸君は敵に對して退卻することをつつしみてなさず、國害を除くためさらに進んで戰ふべきである。』

(一)往在

(一)往在

往在(二)西京日。(三)胡來滿(四)彤宮。
中宵焚(五)九廟。(六)雲漢爲之紅。
(七)解瓦飛十里。(八)繐帷(九)紛曾空。
(一〇)疢心惜(一一)木主。一一(一二)灰悲風。
(一三)合沓(一四)排鐵騎。(一五)清曉(一六)散錦檬。
(一七)賊臣表(一八)逆節。(一九)相賀以(二〇)成功。
是時(二一)妃嬪戮。連爲(二二)糞土叢。
(二三)當宁陷(二四)玉座。(二五)白間(二六)剝畫蟲。
不知(二七)二聖處。私泣(二八)百歲翁。』
(二九)車駕既(三〇)云還。(三一)楹桷(三二)欻穹崇。
(三三)故老復(三四)涕泗。(三五)祠官(三六)樹椅桐。
宏壯不如初。已見帝力雄。

往在

往に西京の日に在り、胡來りて彤宮に滿つ。
中宵九廟を焚く、雲漢之が爲に紅なり。
解瓦十里に飛ぶ、繐帷曾空に紛たり。
心を疢しめて木主の、一一悲風に灰となるを惜む。
合沓鐵騎排す、淸曉錦檬散ず。
賊臣逆節を表す、相賀するに成功を以てす。
是の時妃嬪戮せらる、連に糞土の叢と爲る。
當宁玉座陷る、白間畫蟲剝がる。
知らず二聖の處、私に百歲の翁を泣かしむ。』
車駕旣に云に還る、楹桷欻ち穹崇なり。
故老復た涕泗、祠官椅桐を樹う。
宏壯初に如かざるも、已に見る帝力の雄なるを。

前春禮郊廟。祀事親聖躬。
微軀忝近臣。景從陪羣公。
登階捧玉冊。峩冕聆金鐘。
侍祠恧先路。掖垣邇濯龍。
天子惟孝孫。五雲起九重。
鏡奩換粉黛。翠羽猶葱朧。』
前者厭羯胡。後來遭犬戎。
俎豆腐羶肉。罘罳行角弓。』
安得自西極。申命空山東。
盡驅詣闕下。士庶塞關中。
主將曉逆順。元元歸始終。
一朝自罪己。萬里車書通。
鋒鏑供鋤犂。征戍聽所從。

前春郊廟に禮す、祀事聖躬親らしたまふ。
微軀近臣を忝なくす、景從羣公に陪す。
階に登りて玉冊を捧ぐ、峩冕金鐘を聆く。
祠に侍する先路を恧づ、掖垣濯龍に邇し。
天子惟れ孝孫、五雲九重に起る。
鏡奩粉黛換る、翠羽猶ほ葱朧たり。』
前者羯胡を厭ふ、後來犬戎に遭ふ。
俎豆に羶肉腐る、罘罳に角弓を行る。』
安ぞ得む西極自り、申命山東を空くし、
盡く驅りて闕下に詣らしめ、士庶關中を塞ぎ、
主將には逆順を曉し、元元歸すること始終、
一朝自ら己を罪し、萬里車書通じ、
鋒鏑をば鋤犂に供し、征戍は從ふ所に聽せ、

冗官各復業。土著還力農。
君臣節儉足。朝野懽呼同。
中興似國初。繼體如太宗。
端拱納諫諍。和風日沖融。
赤墀櫻桃枝。隱映銀絲籠。
千春薦靈寢。永永垂無窮。
京都不再火。涇渭開愁容。
歸號故松柏。老去苦飄蓬。』

冗官各業に復し、土著還た農を力め、
君臣節儉して足り、朝野懽呼同じく、
中興國初に似、繼體太宗の如く、
端拱諫諍を納れ、和風日に沖融、
赤墀櫻桃の枝、銀絲籠に隱映し、
千春靈寢に薦め、永永無窮に垂れ、
京都再び火あらず、涇渭愁容開け、
故の松柏に歸號することを。老い去つて飄蓬に苦しむ。』

【字解】【一】往在　往とは天寶末年をいふ、往在、昔在、單に「むかし」の意。【二】西京　長安をさす。【三】胡來　胡は安祿山の軍。【四】彤宮　彤は丹塗りの飾り、彤宮は天子の宮をいふ。【五】九廟　天子の宗廟の數は或は七、或は九、これ其の盛についていふ。【六】雲漢　あまのがは。【七】解瓦　解け散じたる瓦。【八】罘罳　細くあらきあみのとばり、廟中の神座の帷なり。【九】紛曾空　紛はみだるる貌、曾空は層空、いくへにもたかきそら。【一〇】疚心　作者が其の心をやましむること。【一一】惜木主　惜の字、次句までにかかる、木主は天子の御位牌なり。【一二】灰悲風　灰とは燒かれて灰となるをいふ、悲風とは人心を悲ましむる風。【一三】合昏　くらがりのとざす時刻、たそがれ。【一四】排鐵騎　排は排列すること、鐵騎はよろひたる騎兵、賊軍の騎。【一五】清曉　すつきりしたあかつき、曉一に旭に作る、清旭はすめるあさひなり。【一六】散錦幪　散とはひろく散布さるるをいふ、錦

韉はにしきの韉おひ、これ蓋し賊騎都に攻入り掠奪などによりて象に韉おひのうつくしくなりしをいへり。【一七】賊臣　もと朝廷の官にして賊軍の臣となりしもの、例へば宰相陳希烈が張均・張垍・等と共に賊に降りし類をさす。【一八】表逆節　表はあらはす、文書にしたたむるをいふ、逆節とは順道にはづれし忠節をいふ。【一九】相賀　互に祿山に對して賀する。【二〇】成功　長安を攻め取りしこと。【二一】妃嬪　皇妃宮嬪。天寶十五年七月、祿山は張通儒をして霍國公主・永王の妃侯莫陳氏・駙馬楊朏・等八十餘人を害せしめ、又皇孫・郡縣主・諸妃・等三十六人を害せしめしといふ。【二二】糞土叢　きたなき土の棄てられたる草むら。そこに屍の置棄せらるるをいふ。【二三】當宁　「禮記」曲禮下に、天子當宁而立とあり、門と門内の屏との間を宁といふ、天子朝を視るときそこに宁立する場所なるゆゑに宁といふ、宁は久なり、宁立は「たたずむ」こと。但しここの宁は必ずしも門内屏外の宁をさすに非ず、殿屋内にての宁立の場所をさしていへり。【二四】玉座　天子の座位。【二五】白間　景福殿賦にみゆ。門扉の背璅（くさり形の彫刻の處を青くぬりし飾）の側を白く塗りたる部分を稱す。（一説に白間は牖戾なりといふ、蟲雉を畫きたるついたて、天子之を背にして立つものなり。今取らず。）【二六】剝蟄蟲　剝は剝落する、はげちょろになる、蟄蟲はゑがかれたる龍の類、白間の上の飾なり。【二七】二聖　玄宗と肅宗と、肅宗は當時なほ天子に非ざれば聖といふべきには非ざれども、追敍の文なれば後日よりの稱にてかくいへり。【二八】百寮翁　長安の父老をさす。起十八句は天寶末、祿山長安を陷れ大混亂を生ぜしことをいふ。【二九】車駕　天子（肅宗）のおのりもの。【三〇】既云還　肅宗は至德二載十月癸亥に鳳翔の行在を發し、丁卯に長安に入る。【三一】楹桷　はしら、たるき、宗廟のそれ。【三二】穹崇　弓なりにたかくたつ。焚かれしものが新築されしなり。【三三】故老　長安の父老。【三四】涕泗　なみだ、はなみづ。【三五】祠官　宗廟の祭祀をつかさどる官。【三六】樹椅桐　樹は植立すること、椅はあづさの類、梓實桐皮の木の名。【三七】前春　往年といはんがごとし。或は實は夏なれども春暮に接するを以て之を春といひしか。【三八】禮郊廟　南郊と宗廟とに祀の禮を行ふ。【三九】祀事　まつりの事、上の郊廟のまつり。【四〇】親聖躬　天子の躬みづからまつりをなす。肅宗乾元元年夏四月辛亥、九廟成る、法駕を備へ神主（廟神の木主）を迎へて新廟に入る、甲寅、肅宗親ら九廟に享し、遂に圜丘（南郊のまろき丘）に事（祀事）あり。と「舊唐書」にみゆ。【四一】微軀　つまらなきからだ。作者自己を謙遜していふ。【四二】忝近臣　時に左拾遺たりしをいふ。【四三】景從　景は影なり、形にそふ景のごとく從ふ。【四四】羣公　もろもろの大官。【四五】玉冊　祭告文を記したる玉版。【四六】峨冕　たかき冕冠。【四七】聆金鐘　聆は「きく」金鐘は天子出入に鐘を鳴らす、或はいふ、宗廟の音樂をいふと。【四八】恧先路　恧は「はづる」、先路は路に先だつことにて先導するをいふ、卷八の寄岳州賈司馬六丈・巴州嚴八使君詩に、法駕還ニ雙闕一、王師下ニ八川一、此時霑ニ奉引一、佳氣拂周旋、とあるをおもひあはすべし。【四九】掖垣　宮殿のわきのかき、謂はゆる左掖の垣、宮より中書省へ通ずるとき出入の垣。【五〇】邇濯龍　邇は「近し」、濯龍は後漢の時、洛陽の興慶宮の左にありし池の名、宮池にあてていふ、此句は左拾遺たるの地位をいふ、「侍祠」の句と前後置きかへてみるべし。【五一】天子　肅宗。【五二】孝孫　祖先に孝敬を致す子孫。【五三】五雲　五色の雲。【五四】九重　九重の天。【五五】鏡奩　かがみ、お化粧ばこ、此句后廟の遺物をいふ。【五六】換粉黛　換とは以前の樣子と變換せるをいふ。【五七】翠羽　婦人の首飾に用ふる翠鳥の羽。【五八】蔥蘢　青色盛なる貌、以上「車駕」以下の十八句は肅宗京にかへり宗廟を新建して之を祀り、おのれ之に陪したるをいふ。【五九】前者　天寶末年をさす。【六〇】羯胡　祿山。【六一】後來　代宗以後をさす。【六二】犬戎　吐蕃をいふ。【六三】俎豆　宗廟の祭器。【六四】腐羶肉　羶肉はひつじ臭き肉、吐蕃等の食物、腐とは蓋し吐蕃等俎豆を以て食器となし喰ひのこしたる肉のくさるをいふなり。【六五】罘罳　この語の解は卷四の三八八頁・大雲寺贊公房詩の句解をみよ、罳雀網、門内の屏、二義いづれにても通ずるもここは門内の屏の義を用ひしならんか。【六六】行角弓　行は「はたらかす」こと、角弓は角もてかざりし弓、吐蕃の用ふるもの、「前者」四句は上を結び下を起す轉關の處にして、近來の亂をいふ。【六七】安得　希望の辭、此の二字、末尾の「歸號故松柏」までにかかる。【六八】西極　西のはて、西京長安をさす、卷九建都詩の其如西極存の西極と同じ。【六九】申命　天子の命令をかさねて敷く。【七〇】空山東　空とはからにする、全部を盡くすをいふ、山東は太行山脈の東、河北藩鎭の地をいふ、其地の武人今皆王命に從はざるものなり。【七一】詣闕下　長安の宮門の下に至らしめる。【七二】士庶　地位ある人も平民も。【七三】塞關中　塞はは充滿すること、京畿の地を慕ひて集ひ來るをいふ、關中は長安地方をさす。【七四】主將　鎭落の長官。【七五】曉逆順　曉は說諭して之をさとらしむること、逆順は王命にしたがふと之とさからふといづれが是非なるかのこと。【七六】元元　一般人民、元は善なり、民の實は善なるものなり、よりて民を元といふ。【七七】歸始終　終始ともに朝廷

に歸順する。【七八】一朝　一旦。【七九】自歸已　天子みづから自己を罪ありとしてお責めになる。【八〇】萬里　絶遠の地までをいふ。【八一】車書通　車も文字もとどこほりなく交通する、平和のさま。【八二】銷鋒供鋤犂　ほこさき、矢のかぶら、を鑄つぶして、農具たる「すき」をつくる、兵を農に化せしむるなり。【八三】征戍　征伐、屯戍。【八四】聽所從　本人の從事せんとする所にまかせてなさしめる。必ずしも征戍に從はしめざるなり。【八五】冗官　仕事なく手ぶらで遊んでゐる官。【八六】土著　土地に定着する、移轉しあるくことなきなり。【八七】力農　農事に力をつくす。【八八】國初　唐の開國の初。【八九】繼體　前朝のすがたをつぐ。【九〇】太宗　唐の第二代の君李世民。【九一】端拱　端坐して手をこまぬく、天子のお姿。【九二】沖融　空虚にとろけたるさま。【九三】赤墀　丹墀に同じ、あかくぬりたる土緣、宗廟のごてんのそれをいふ。【九四】櫻桃　さくらんぼ、「禮記」月令に、仲夏の月には先づ含桃（即ち櫻桃）を寢廟に薦む、とみゆ。【九五】隱映　おぼろにうつろふ。【九六】銀絲籠　銀のはりがねでくんだかご、さくらの實を盛るもの。【九七】千春　千年なり。【九八】薦靈寢　靈寢は祖先の靈のしづまります寢殿、寢殿とは享殿のうしろに平生の住居に模して建てられたるごてん。【九九】京都　長安洛陽等の都の地、此句また安祿山一段を承く。【一〇〇】火　火災。【一〇一】涇渭　二水の名、吐蕃入寇の路にあたる、吐蕃を承けていふ。【一〇二】開愁容　愁ひの顏色がひらける、其地方の人民がはればれとしたかほつきとなるをいふ。【一〇三】歸號　鄕里にかへりてさけぶ。【一〇四】故松柏　父祖の墳墓のうへに生じたるむかしながらの松や柏の樹、此の句までは希望をいふ。【一〇五】老去苦飄蓬　飄蓬は風にひるがへるよもぎ、流轉の身のうへをたとへていふ、現在の自己の境を嘆ずこの一句にてうけとめたり。「安得」以下二十六句は亂を靖んずるの希望をのべ故鄕に歸る能はざるを歎じて結とす。

【題義】長安の往事を追憶し懷鄕の念をのべた詩。起句の二字を切りとりて題とす。大曆元年秋、夔州にての作。

【詩意】むかし長安にゐた時分に、胡のえびすども（安祿山の軍）がいつぱい宮殿へいりこんだ。彼等が夜なかに九廟を焚きたてたので雲漢さへこれがために紅となり、解け散る瓦は十里のさきへも飛ぶ、神殿の細布の帷はたかき空へみだれて舞ひあがる。御歷代の御位牌が一一ものがなしき風に灰となつてちるのをみてはあまりの惜しさに自分はどんなに心をいためたか。たそがれには賊の鐵騎がならべられたかとおもふと、曉には錦の鞍覆をかけた騎馬があちこちに散布されてをる。賊に降參した朝廷の臣等は賊軍に對して文書を呈して道にはづれた忠節を表はし、このたびの長安の攻入りは成功であると媚辭をなして祝賀しあうてゐる。是の時皇妃や宮嬪は賊に殺戮されてしきりにきたない草叢の屑となつた。天子が臣下を御引見になるときお立ち遊ばさる場所に於て玉座さへ隤れてしまひ、門扉の白間の蟲畫ははげちよろになる。聖人おふた方（玄宗・肅宗）のおんありかさへ知れず、老人たちはただこつそりなきの涙をながすばかりであつた。』やがて天子（肅宗）の車駕が京師へおかへりになつてから、宗廟は新築になり楹や桷もたちまちたかくそびゆることになつた。祠官はさらに椅桐の樹をも植ゑる、これを見て老人たちはふたたび感涙をながした。新廟の宏壯なことは以前の樣にはゆかぬけれども、それでも帝王の力の雄大さはもはやうかがひ見ることができた。あのむかしの春に天子は郊と廟とに祀禮を致され、祀事は天子御自身に奉仕あそばされた。そのときふつつかながら自分は近臣の地位（左拾遺）をかたじけなうし、羣公のおともをして吾が君に影のごとくおつきそひまをした。そうして高い冠をつけながら金鐘の聲をきき、或は階に登つて御祭告の文を記した玉冊を捧げたてまつつた。自分の職を執る所は御所の掖垣のそと、濯龍池に近いのであるが、職務上とは

いへ天子の祠に侍りて御先導の任をうけたまはるとはおはづかしいことであつた。吾が天子は子孫として祖先に孝敬を致される、そのをりには九重の天から五色の雲が起つてくる、后廟の寢殿で鏡奩をごらんになると粉黛の類はもとのものとは樣子がかはつてゐる、ただ翠鳥の羽だけは昔のままの色よい青さをたもつてゐた。』前にすでに羯胡（祿山の軍）にはあきあきしてゐた。ところが、後になるとさらに犬戎(吐蕃)の難にであふことになつた。犬戎がやつてきてからは俎豆の祭器にくさい肉がくさつてゐたり、宮殿の屛のところに角弓を使用するといふ樣にまでなつた。』どうにかして自分はかくしたいとおもふ。西京（長安）から天子の御命令をくりかへしおときになつて、山東（河北）の武人どもをすつかり宮門のところへこさせ、士人も庶民も關中へ充滿させ、主將には順逆の道理をさとし、一般人民は終始かはらず朝廷に歸順させ、天子ごじしんは一旦自己の罪を責めて國事の責任をおとりになり、萬里の遠方まで車も文字も自由に交通しうる樣にし、兵器はとかして農具を作る用に供し、征戍の事は民に强ひず、その仕事を自由にし、むだな官はやめてそれぞれ本業に復らしめ、衆民は土著させてもとのごとく農業に力をださせ、君臣ともに節儉を守りてそれで足らぬといふことなく、朝も野も同じくよろこびの聲をあげ、中興の勢は國初の隆盛なりしがごとく、先朝の政體を繼ぐこと太宗皇帝が高祖皇帝をつぎたまひしがごとく、君は端坐して手をこまぬいて諫諍をおいれになり、陰陽の和氣ひにひにとろけあひ、年年銀絲の籠にうつろふ櫻桃の實は枝ながら宗廟の赤墀にもちきたされ、千年も寢殿に薦供せられて永永無窮の後までつづき、京都には再び火災が起る樣なことなく、涇水渭水の方面もその地の人民が愁ひの顏つきをはればれとさする樣になり、自分は故郷に歸つて祖先の墓上の松柏に號泣して哀意を盡さう。どうかそうしたいものである。しかるにいまそれができず老いこんでしまつて蓬のひるがへる樣に流轉することに苦しみつつあるのである。』

昔遊

(一)昔者與(二)高李。【原註】高適李白

晩登(三)單父臺。

(四)寒蕪際(五)碣石。萬里風雲來。

(六)桑柘葉如雨。(七)飛蓬去〔共〕徘徊。

清霜(八)大澤凍。禽獸有餘哀。』

(九)是時(一〇)倉廩實。(一一)洞達(一二)竇區開。

(一三)猛士思滅(一四)胡。將(一五)帥望(一六)三台。

(一七)君王無所惜。(一八)駕馭英雄材。』

昔遊

昔者高李と、

晩に單父の臺に登る。

寒蕪碣石に際す、萬里風雲來る。

桑柘葉雨の如し、飛蓬共に徘徊す。

清霜大澤凍る、禽獸餘哀有り。』

是の時倉廩實つ、洞達竇區開く。

猛士胡を滅せむことを思ふ、將帥三台を望む。

君王惜む所無し、駕馭す英雄の材。』

(一九)幽燕盛用武、供(二〇)給亦勞哉。　幽燕盛りに武を用ふ、供給亦た勞せる哉。
(二一)吳門轉(二二)粟帛、泛(二三)海陵(二四)蓬萊。　吳門より粟帛を轉ず、海に泛びて蓬萊を陵ぐ。
(二五)肉食三十萬、獵射起黃埃。』　肉食三十萬、獵射黃埃起る。』
(二六)隔河憶長眺、青(二七)歲已摧(二八)頹。　河を隔てて憶ふ長眺せしことを、青歲已に摧頹す。
不及少年日、無復故(二九)人杯。　及ばず少年の日、復た故人の杯無し。
賦詩獨流涕、亂世想賢才。　詩を賦して獨り涕を流す、亂世賢才を想ふ。
有能市(三〇)駿骨、莫恨少(三一)龍媒。』　能く駿骨を市ふもの有らば、恨む莫し龍媒少きを。』
(三二)商山議得失、蜀主脫嫌猜。　商山得失を議す、蜀主嫌猜より脫せむ。
(三三)呂尙封國邑、傅說已鹽梅。　呂尙國邑に封ぜられ、傅說已に鹽梅す。
(三四)景晏楚(三五)山深、水(三六)鶴去(三七)低回。　景晏れて楚山深し、水鶴去つて低回す。
(三八)龐公任本性、攜子臥蒼苔。』　龐公本性に任す、子を攜へて蒼苔に臥す。』

【字解】【一】昔者　天寶三載秋冬の交をさすならん。【二】高李　高適、李白。【三】單父臺　單父は縣の名、今山東省曹州府單縣治なり、唐の時には宋州に屬せり。單父縣の北一里に宓子賤が琴を彈じたりといへる琴臺あり、高さ三丈、單父臺は琴臺をさす、高適が集に登子賤琴堂賦詩三首あり、その序に甲申歲適登子賤琴堂云云とあり、甲申は天寶三歲なれば高適李白杜甫みな此臺同遊せしことを知るに足る、適又「同羣公秋登琴臺」「同羣公出獵海上」の詩あり、後にいだす。【四】寒蕪　寒天の荒蕪地。【五】際碣石　際とは遠く接するをいふ、碣石は地名、已に屢見ゆ。【六】桑柘　柘は「やまぐは」の類。【七】飛藿　藿は豆の葉。【八】大澤　蓋し孟諸の澤をさす、孟諸澤は河南省歸德府商邱縣（即ち唐時の宋州）の東北にあり、虞城縣界に接す。「昔者」以下起八句は高李と臺に登り又出でて獵せしことをいふ。【九】是時　天寶三載頃迄の時期をさす。【一〇】倉廩　穀藏、米藏。【一一】洞達　あけつぱなし、塞がることなきをいふ。【一二】寰區　天下をいふ。【一三】猛士　壯士。【一四】滅胡　えびすをほろぼす、えびすとは奚・契丹の類。【一五】將帥　武將、范陽節度使安祿山が輩をいふ。【一六】望三台　三公の地位を得んことを望む。三台とは魁下の六星兩兩相比ぶものをいふ、三公にあたる、祿山は平章事（宰相）を求めたり。【一七】君王　玄宗。【一八】駕馭　あやつる、「是時」六句は時世のさまをいふ。【一九】幽燕　幽州、燕國の地、祿山の根據地。【二〇】供給　軍の錢糧をだしてやること。【二一】吳門　江蘇省蘇州地方。【二二】轉粟帛　粟帛を轉送する、卷四後出塞五首の第四の雲帆轉遼海、粳稻來東吳、とあるをおもひあはすべし。【二三】泛海　海は支那海をさす。【二四】陵蓬萊　蓬萊山は山東省の東海にありと考へられし仙山、陵は凌ぐなり。【二五】肉食　美食してなる兵卒、「幽燕」六句は祿山の軍の放恣なるさまをいふ。【二六】隔河憶長眺　憶「隔河而長眺」とおなじ。隔河とは孟諸澤卽ち黃河の南岸より北岸を望むをいふ、長眺は遠く北方をながむるをいふ、北方は祿山軍の根據地の方位なり、憶とは今、往年大澤に獵せし時のことをおもふをいふ。【二七】青歲　青年期をいふ。【二八】摧頹　くだくる。【二九】故人杯　故人とはふるなじみの友、高適、李白等をさす。【三〇】市駿骨　千里馬の骨を買ふもの、已に屢見ゆ。【三一】龍媒　名馬、已に屢見ゆ。「隔河」八句は舊友見るべからず撥亂の賢才をおもふ。【三二】商山議得失、蜀主脫嫌猜　此二句指す所詳ならず、李泌が事をさすならんか、商山は商山の四皓、漢の高祖、太子を廢せんとせしとき、山より出で來りて之を調護す、李泌亦太子の事を周旋せしにより之を用ふ、時に泌魚朝恩に忌まれて衡山に在り、蜀主の句は希望をいひしものならん、蜀主は劉備、備、諸葛亮（字は孔明）と情好日に密なり、關羽・張飛悅ばず、備曰く、孤（われ）の孔明あるは魚の水あるがごとし、と。代宗の李泌に於ける、備の亮に於けるごとく他より嫌猜さるることなからんことを望むなり。【三三】呂尙封國邑、傅說已鹽梅　此二句も的確ならず、郭子儀を指せるか、子儀は汾陽王の爵を賜ふ、よりて呂尙

を以て比す、呂尙は周の太公望、齊に封ぜらる、子儀嘗て中書令（宰相）となる、故に傅說を以て比す、傅說は殷の高宗の賢臣、「尙書」說命篇に、高宗が說に告げし言に、若作㆓和羹㆒、爾惟鹽梅とみゆ、鹽梅は鹹酸の味料、五味調和の劑となる、以てその政治上の料理に比す。或はいふ、商山四句は毎句隱士の君より召用せらるるものをあぐ、由りて以て自己の起用せられんことを望むと。【三四】晼晚　日影のおそくくれかかること。【三五】楚山　夔州の山をいふ。【三六】水鶴　水邊の鶴、かうづるの類。【三七】去低回　去は暮歲に向ひ去る、低回はたちもとほるさま。【三八】龐公　後漢の龐德公妻子を攜へて襄陽の鹿門山に隱れ城府に入らず、以て自ら比す、「商山」八句は國政に任ずるもの尙其人あるをいひ自己の閒居をとく。

【題義】往年高適李白等と宋州に遊びし時のことを想ひうかべて現時の感をのべたり。大曆元年夔州の作。

【詩意】自分は昔、高適李白と日ぐれに單父の琴臺に登つたことがある。そのとき寒天の荒原は遠く碣石のあたりまでつづいて、萬里のかなたから風雲がやつてきた。桑や山桑の葉は雨の樣にばらばら散る、飛ぶ所の豆の葉などもそれとともにあたりにうろついてをる。きれいな霜がおいて大きな澤、（孟諸澤なるべし）は凍る、禽獸も狩りだされるので十分の哀みをいだいてをる。』是の時代には天下の米穀の庫は充實し、どこでも道路がつつぬけに開かれてゐた。猛士は胡虜を伐ち滅さうと思ひ、その主將は三公にでもならうとかんがへてゐた。之に對し時の天子は惜しげもなく彼等の欲する所のものを與へて英雄の材をあやつられた。』幽燕の地方は盛りに武力を用ひる、それに一一餱糧を供給するのはなかなか骨の折れたことではある。南方吳の地方から粟帛を轉送して舟を海に泛べて蓬萊山のあたりをしのぎわたつて北方へはこぶ。肉を食つてゐる兵卒が三十萬。それらが射獵をして黃い埃をたたせてくらしてゐた。』あの頃黃河の南岸から北方をはるかにながめたことをいまも憶ひだすが、もはや青年時代の元氣はうちくだかれてしまつた。とても少年の時にはかなはない。そうして高・李・の樣な舊友と酒杯を共にすることも無くなつてしまつた。それで詩を賦して我ひとり涙をながし、今の世の亂れたるにつけて賢才が居てくれたならとおもふ。今日でも昔の人のごとく駿馬の骨を買うてくれる者さへあるならば名馬が居ないことを恨むにはあたらぬのである。』今、商山の老人（李泌）は政治の得失を議しつつある。どうぞ蜀主にも比すべき吾君には臣下を信用し、他のものから嫌猜せらるることなき樣にしていただきたいものだ。いま呂尙（郭子儀）は已に國邑に封せられ、傅說は已に鹽梅の任に當つてゐる。(してみれば國政は必ずしも問ふにおよばぬ) いま楚地の山深く日がくれかかつてゐて、水邊の鶴が棲み家に去らんとしてさまよひつつある。このをりしも自分は龐公のごときもので本性のまにまにこんな場所にひきこもつて、子どもらをたづさへて蒼苔の蒸せる庭に臥てくらしてをるのである。』

【附錄】

秋獵㆓孟諸㆒夜歸置㆓酒單父東樓㆒觀㆑妓　　李　白

傾暉速㆓短炬㆒、走海無㆓停川㆒、冀餐㆓圓丘草㆒、欲㆔以還㆓頹年㆒、此事不㆑可㆑得、微生若㆓浮煙㆒、

驟發跨名駒、彫弓控鳴弦。鷹豪魯草白、狐兔多肥鮮。邀遮相馳逐、遂出城東田。
一掃四野空、喧呼鞍馬前。歸來獻所獲、炮炙宜霜天。出舞兩美人、飄颻若雲仙。
留歡不知疲、清曉方來旋。

同羣公秋登琴臺　高適

古跡使人感、琴臺空寂寥。靜然顧遺塵、千歲如昨朝。臨眺自茲始、羣賢久相邀。
德與形神高。孰知天地遙、四時何倏忽。六月鳴秋蜩、萬象歸白帝。平川橫赤霄、
猶是對夏伏、幾時有涼飇。燕雀滿簷楹、鴻鵠搏扶搖。物性各自得、我心在漁樵。
兀然還復醉、尙握樽中瓢。

同羣公出獵海上

畋獵自古昔、況伊心賞俱。偶與羣公遊、曠然出平蕪。層陰漲溟海、殺氣窮幽都。
鷹隼何翩翩、馳驟相傳呼。豺狼竄榛莽、麋鹿罹艱虞。高鳥下騂弓、困獸鬪匹夫。
塵驚大澤晦、火燎深林枯。失之有餘恨、獲者無全軀。咄彼工拙間、恨非指蹤徒。
猶懷老氏訓、感歎此歡娛。

壯遊(一)

壯遊

往者十四五(二)、出遊翰墨場(三)。
往者十四五、出でて翰墨の場に遊ぶ。

斯文(四)崔魏(五)徒。【原注】崔鄭州尙、魏豫州啓心。
斯文崔魏が徒、

以我似班揚(六)。
我を以て班揚に似たりとす。

七齡(七)思卽壯(八)、開口詠鳳皇(九)。
七齡思ひ卽ち壯なり、口を開きて鳳皇を詠す。

九齡(一〇)書大字、有作(一一)成一囊(一二)。
九齡大字を書す、作有りて一囊を成す。

性豪業嗜酒、嫉惡懷剛腸(一三)。
性豪にして業に酒を嗜めり、惡を嫉みて剛腸を懷く。

脫落(一四)小時輩(一五)、結交皆老蒼(一六)。
脫落す小時輩、交を結ぶは皆老蒼たり。

飲酣視八極(一七)、俗物多茫茫(一八)。
飲酣にして八極を視れば、俗物多く茫茫たり。」

東下(一九)姑蘇臺、已具浮海航(二〇)。
東姑蘇臺に下る、已に浮海の航を具ふ。

到今有遺恨(二一)、不得窮扶桑(二二)。
今に到るも遺恨有るは、扶桑を窮むることを得ざりしことなり。

王謝(二三)風流遠、闔閭(二四)丘墓荒(二五)。
王謝風流遠し、闔閭丘墓荒る。

劍池(二六)石壁仄、長洲(二七)芰荷(二八)香。
劍池石壁仄き、長洲芰荷香し。

嵯峨閶門(二九)北、清廟(三〇)映迴塘(三一)。
嵯峨たる閶門の北、清廟迴塘に映す。

(三二)每趨(三三)吳太伯。(三四)撫事淚(三五)浪浪。　吳の太伯に趨する每に、事を撫して淚浪浪たり。
(三六)蒸魚聞七首。除(三七)道哂要章。　蒸魚七首を聞く、除道要章を哂ふ。
(三八)枕戈憶勾踐。渡(三九)浙想秦皇。　枕戈勾踐を憶ひ、渡浙秦皇を想ふ。
(四〇)越女天(四一)下白。鑑(四二)湖五月涼。　越女は天下に白し、鑑湖五月に涼し。
(四三)剡溪蘊(四四)秀異。欲(四五)罷不能忘。』　剡溪秀異を蘊む、罷めむと欲して忘るる能はず。』
(四六)歸帆拂(四七)天姥。中(四八)歲貢(四九)舊鄉。　歸帆天姥を拂ふ、中歲舊鄉より貢せらる。
(五〇)氣劇(五一)屈賈壘。目(五二)短曹劉墻。　氣は劇す屈賈が壘、目は短とす曹劉が墻。
(五三)忤下考功第。獨辭京(五四)尹堂。　忤下す考功の第、獨り辭す京尹の堂。
(五五)放蕩齊(五六)趙間。裘(五七)馬頗淸(五八)狂。　放蕩たり齊趙の間、裘馬頗る淸狂なり。
春歌(五九)叢臺上。冬獵(六〇)靑丘旁。　春は叢臺の上に歌ひ、冬は靑丘の旁に獵す。
呼鷹皂(六一)櫪林。逐獸雲雪岡。　鷹を呼ぶ皂櫪の林、獸を逐ふ雲雪の岡。
(六二)射飛曾(六三)縱鞚。引(六四)臂落鶖(六五)鶬。　飛を射て曾ち鞚を縱つ、臂を引きて鶖鶬を落す。
(六六)蘇侯據鞍喜。【原注】監門胄曹蘇預　蘇侯鞍に據りて喜ぶ、
忽如(六七)攜葛彊。』　忽ち葛彊を攜ふるが如し。』
快意八(六八)九年。西(六九)歸到咸陽。　快意なり八九年、西歸咸陽に到る。
(七〇)許與必(七一)詞伯。賞(七二)遊實賢(七三)王。　許與せらるるは必ず詞伯、賞遊するは實に賢王なり。
(七四)曳裾置(七五)醴地。奏(七六)賦入明光。　裾を曳く置醴の地、賦を奏して明光に入る。
(七七)天子廢(七八)食召。羣(七九)公會軒(八〇)裳。　天子食を廢して召し、羣公軒裳を會す。
(八一)脫身無(八二)所愛。痛飮信行(八三)藏。　身を脫して愛む所なし、痛飮行藏に信す。
(八四)黑貂寧免敝。斑(八五)鬢兀(八六)稱觴。　黑貂寧ぞ敝るるを免れむや、斑鬢兀として觴を稱ぐ。
(八七)杜曲晚〔換〕(八八)耆舊。四(八九)郊多(九〇)白楊。　杜曲耆舊換る、四郊白楊多し。
(九一)坐深鄉黨敬。日覺(九二)死生忙。　坐に深くす鄉黨の敬、日に死生の忙はしきを覺ゆ。
(九三)朱門任傾(九四)奪。赤(九五)族迭羅殃。　朱門傾奪に任す、赤族迭に殃に罹る。
(九六)國馬竭粟豆。官(九七)雞輸(九八)稻粱。　國馬粟豆を竭す、官雞に稻粱を輸す。
(九九)擧隅見煩(一〇〇)費。引(一〇一)古惜興亡。』　隅を擧げて煩費を見す、古を引きて興亡を惜む。』
(一〇二)河朔風塵(一〇三)起。岷(一〇四)山行幸(一〇五)長。　河朔風塵起る、岷山行幸長し。

（一〇六）兩宮各（一〇七）警蹕、萬里遙（一〇八）相望。
兩宮各警蹕す、萬里遙に相望む。

（一〇九）崆峒（一一〇）殺氣黑、（一一一）少海（一一二）旌旗黃。
崆峒殺氣黑く、少海旌旗黃なり。

（一一三）禹功亦命子、（一一四）涿鹿親戎行。
禹功亦た子に命ず、涿鹿戎行を親らす。

（一一五）翠華擁（一一六）吳岳、（一一七）貙虎（一一八）噉豺狼。
翠華吳岳を擁す、貙虎豺狼を噉ふ。

（一一九）爪牙（一二〇）一不中、（一二一）胡兵更（一二二）陸梁。
爪牙一たび中らず、胡兵更に陸梁たり。

（一二三）大軍載（一二四）草草、（一二五）凋瘵滿（一二六）膏肓。
大軍載ち草草たり、凋瘵膏肓に滿つ。

（一二七）備員竊（一二八）補袞、憂憤心飛揚。
備員補袞を竊む、憂憤心飛揚す。

上感（一二九）九廟焚、下憫（一三〇）萬民瘡。
上は九廟の焚けたるに感じ、下は憫む萬民の瘡。

斯時（一三一）伏青蒲、（一三二）廷諍守（一三三）御牀。
斯の時青蒲に伏す、廷諍して御牀を守る。

（一三四）君辱敢愛死、（一三五）赫怒幸（一三六）無傷。
君辱めらる敢て死を愛まむや、赫怒幸に傷はるること無し。

（一三七）聖哲體（一三八）仁恕、（一三九）宇縣復（一四〇）小康。
聖哲仁恕を體す、宇縣復た小康なり。

（一四一）哭廟（一四二）灰燼中、（一四三）鼻酸朝（一四四）未央。」
廟に哭す灰燼の中、鼻酸未央に朝す。」

（一四五）小臣（一四六）議論絕、老病客（一四七）殊方。
小臣議論絕ゆ、老病殊方に客たり。

鬱鬱苦（一四八）不展、（一四九）羽翮困（一五〇）低昂。
鬱鬱展びざるに苦む、羽翮低昂に困しむ。

秋風動（一五一）哀壑、（一五二）碧蕙捐（一五三）微芳。
秋風哀壑に動く、碧蕙微芳を捐つ。

（一五四）之推避賞從、（一五五）漁父濯滄浪。
之推賞從を避く、漁父滄浪に濯ふ。

（一五六）榮華敵勳業、歲暮有（一五七）嚴霜。
榮華は勳業に敵す、歲暮嚴霜有り。

吾觀（一五八）鴟夷子、（一五九）才格出尋常。
吾鴟夷子を觀るに、才格尋常より出でたり。

（一六〇）羣兇逆未定、（一六一）側佇（一六二）英俊翔。」
羣兇逆未だ定まらず、側に佇つ英俊の翔るを。」

【字解】【一】壯遊　壯年の遊歷、仇氏は前篇は「昔遊」と題したれば此篇は「往遊」と題すべし、此篇には老少の事に及びたれば壯遊とはいふべからずといへるも、かく拘泥すべきにあらず。【二】十四五　作者先天元年に生る、十四歲は開元十三年、十五歲は開元十四年なり。【三】翰墨場　文學の社會。【四】斯文　學者をいふ。【五】崔魏　作者の自注にあるごとく崔尚、魏啓心、尚は久視二年の進士、啓心は神龍三年の才膺管樂科の及第者なり。【六】班揚　班固、揚雄。【七】七齡　七歲の時より、開元六年に作者七歲なり、これをさかのぼりて幼時をとく。【八】思卽壯　文思さかんなり。【九】詠鳳凰　蓋し鳳凰の詩をよみしならん。【一〇】九齡　開元八年作者九歲なり。【一一】有作　作は文章の製作。【一二】業　すでに。【一三】剛腸　つよきこころ。【一四】脫落　輕くたやすく視なすこと、眼中に置かぬこと。【一五】小時輩　小さき同時の人人。【一六】老蒼　年老い髮のごましほになりし人。【一七】八極　八方のはて。【一八】茫茫　ひろきさま、以上起十四句、少年時代を敍す。【一九】東下姑蘇臺　此句より「欲罷不能忘」まで二十句は吳越の遊を敍したり。作者は二十歲の頃晉の地に遊びしことあり、晉の遊び了りてのち吳越に向ひしものと考へらるるを以て、吳越の遊は恐らくは開元十九年より二十三年にわたる間にあらむ。姑蘇臺は江蘇省蘇州府吳縣の西南三十里橫山の西北姑蘇

山上に建てられしもの、春秋の時吳王闔閭築く、九年にして成る、臺の高さ三百丈、三百里を望見すと稱せらる。東下とは都より東南へとくだるをいふ。【二〇】浮海航　航は大舟をいふ。【二一】到今　今とは作詩の時をいふ。【二二】扶桑　東海に在りと考へられし國。【二三】王謝　東晉の王導、謝安、王謝の門族は江南に散布せり。【二四】闔閭　吳の王の名。【二五】丘墓荒　吳縣の閶門の外の虎丘に闔閭が冢あり、盤郢魚腸の劍を葬る、葬りて三日、白虎その上に踞す、因つて號して虎丘といふと。【二六】劍池　虎丘に在り、池上に石壁あり、高さ數丈。【二七】長洲　苑の名、長洲縣の西南にあり、姑蘇の南、太湖の北にあたる、闔閭の遊獵の地なり。【二八】芰荷　ひし、はす。【二九】閶門　吳縣の西の門。【三〇】清廟　吳國の先祖太伯の廟をいふ、後漢の永興二年太守糜豹の建つる所、閶門外にあり、又太伯の冢は吳縣の北、梅里聚にあり、廟冢相違る。【三一】迴塘　めぐれる池。【三二】每趨　趨とは廟冢の處へでかけること。【三三】吳太伯　太伯の廟冢をいふ。【三四】撫事　往事にそうて追懷する。【三五】浪浪　あふれる貌。【三六】蒸魚聞匕首　吳の公子光、酒を具へ吳王僚を請じ、專諸をして匕首を魚腹の中に置きて之を進めしめ以て僚を刺さしむ、僚死す、光自立す、これを吳王闔閭となす。【三七】除道哂要章　除道は道路を掃除すること、要は腰なり、要章は腰に帶びたる印章なり、漢の朱買臣が故事、買臣は吳人、晚年榮達して會稽太守となる、ひそかに故衣を著、印綬を懷にして郡邸に歸る、守邸の吏之を發見す、遂に民を發して道を除き之を迎ふと、哂ふとは買臣がはじめ印綬をかくして太守たることをいつはりしことを、をかしくおもふなり。蒸魚・除道・の二句もと「秦皇」の次に在り、仇氏之を置きかへたるなり。【三八】枕戈憶勾踐　越王勾踐、吳王夫差に破られし恥をそそがんとて戈を枕にするなり。【三九】渡浙想秦皇　秦の始皇の三十七年、南巡して錢唐に至り浙江に臨み、會稽に上り禹を祭る。【四〇】越女　越は會稽に都す、卽ち浙江省紹興府山陰縣なり。【四一】天下白　白は肌膚の白きをいふ、李白が越女詩にも玉面耶溪女、又は兩足白如霜とみゆ。【四二】鏡湖　鑑湖、一に鏡湖といふ、山陰縣南三里にあり。【四三】剡溪　紹興府嵊縣の南にあり、山水の美を以てまさる、謂はゆる千巖競秀、萬壑爭流、なるものなり。【四四】蘊秀異　蘊は內部にたくはへてなること、秀異は山水の奇異なる風景。【四五】欲罷　之を思ふことを止めんと欲す。【四六】歸帆　吳越地方より河南の方へかへる舟の帆をいふ。【四七】拂天姥　天姥は峰の名、浙江省台州府天台縣の西北にあり、天台山と相對す、其の峰孤峭、下、嵊縣に臨む、仰ぎ望めば天表に在るが如し、

拂ふとあれば台州を經過せしなり。【四八】中歲　中年をいふ、時に開元二十三年、作者年二十四歲なり。【四九】貢舊鄉　舊鄉とは河南鞏縣を指す、作者の居此處に在り、貢は貢進せらるるなり、唐制にては每歲仲冬に地方及崇文館弘文館太學の學力合格者を更に中央の尙書省に登りて受驗せしむ、地方出身者を鄉貢或は鄉貢進士といふ、地方より中央へ合格者を登りだす時には長官宴を開き、「鹿鳴」の詩を歌ひて之を遣る。作者は河南省の合格者として登りだされしなり。【五〇】氣劘　氣は意氣、劘は摩と音義同じ、摩壘とは春秋時代に敵軍に戰を挑むときの仕方にて、戰車の御者が旌をもつて敵壘を摩りて還ることなり。屈賈の壘を摩すとは屈賈に向つて戰を挑まんとするほどの意氣ありしをいふ。【五一】屈賈壘　屈は屈原、賈は賈誼、摩壘の義は上に見ゆ。【五二】目短曹劉墻　短墻とは「論語」子張篇に子貢が孔子を評せる言に、賜(子貢の名)之墻也及レ肩、窺二見室家之好一、夫子之墻數仞、不レ得二其門一而入一、不レ見二宗廟之美・百官之富一とあるに本く。曹劉は魏の曹植・劉楨なり、短とは卑しとするの意、曹劉ほどの文才ある者も作者の目より觀るときはその墻の高さなほひくしといふなり。【五三】忤下考功第　忤は「たがふ」「さからふ」試驗官の意に合はざりしこと。下第とは及第せざりしこと、落第なり、考功とは吏部省の考功員外郎をいふ。上にのべし如く鄉貢が中央の尙書省へ到着するときは戶部省にて本人の檢査を爲し之を吏部の考功員外郎の方へまはして試驗を受けしむ、考功員外郎は卽ち試驗官なり。開元二十四年の試驗の際に考功員外郎李昂といふもの物議をひき起し、玄宗は員外郎にては身分輕しとて改めて禮部侍郎を以て試驗官となしたり。作者今「下考功第」と言ふを以て見れば此の受驗は開元二十三年に在りしなるべし。「舊唐書」杜甫本傳に、天寶初、應二進士一不レ第、とあるは誤なるを知るべし。【五四】京尹堂　京尹は京兆尹なり、京師の長官なり、長安に住すれば尹の管轄下に在り、今長安より去る、故に堂を辭すといふ。【五五】放蕩　氣ままにあそぶ。【五六】齊趙間　齊は大略今の山東省をさし、趙は直隸省南部をさす。【五七】裘馬　皮ごろも、うま。【五八】清狂　正しく、しかしくるひ氣のさま。【五九】叢臺　趙の都たる邯鄲（大名府邯鄲縣）の城中にありし臺、臺多くむらがりしにより叢臺と稱せしといふ、此句趙についていふ。【六〇】青丘　山東省青州府樂安縣治。【六一】皂櫪林　皂は皁、黑し、櫪は櫟、イチヰの木。【六二】射飛　飛は飛鳥。【六三】曾縱鞚　曾は乃ち、常にの義、縱鞚、鞚は馬勒、縱は「はなつ」鞚を縱つとは轡を放ちて疾く馳するをいふ。【六四】引臂　節をためるために右臂をひく。【六五】鶖鶬　鶴に似たる大鳥の名。【六六】蘇

倏　作者の自注にみゆる如く蘇預卽ち蘇源明なり、源明は預が代宗の御諱豫と音近き故改名せしものなること「懷舊」詩の自注にみえたり、倏は敬稱。【六七】挹葛侯　葛侯は晉の山簡が愛將の名、簡が詩に「舉レ鞭問ニ葛彊一、何如ニ并州兒一」とみゆ、侯を以て自己に比す。「呼鷹」四句皆齊地の遊をいふ、以上「中歲」以下の十六句は齊趙の遊を敍す。【六八】八九年　開元二十五年より天寶四載までにて九年となる、まさしく此期間とはいふ能はざるも大約之に近し。【六九】西歸到咸陽　咸陽は渭水を隔てて長安の北にあり、咸陽の到着は上にいふごとく天寶四載か五載か明ならず、兩年中にあり。【七〇】許與　その文才あることを許し與ふるもの。【七一】詞伯　文壇の長、鄭虔、岑參が徒をさす。【七二】賞遊　山水風月を賞してあそぶ。【七三】賢王　汝陽王李璡。【七四】曳裾　衣のすそをひく、王門に出入するをいふ、語は鄒陽が書に見ゆ。【七五】置醴地　王邸をいふ、漢の時、楚の元王、穆生を敬し醴を置きて酒に代ふ、作者を禮遇せしをいふ。【七六】奏賦入明光　賦は三大禮賦をいふ、天寶九載に奏したるがごとし。明光は漢の宮の名、借りて唐の宮殿に充つ。【七七】天子　玄宗。【七八】廢食召　食事をやめて作者を召す、作者を集賢院に待制せしめ宰相に命じて試驗せしめしこと。【七九】羣公　諸公卿。【八〇】會軒裳　軒は車、裳は禮服のもすそ、軒裳を會すとは高き地位の人人が試驗を觀に來りしをいふ。卷十四「莫相疑行」の集賢學士如ニ堵牆一、觀ニ我落レ筆中書堂一、及び卷二の奉ニ留贈集賢院崔于二學士一詩を參看せよ。【八一】脫身　官界から身をぬけだすこと、仕籍に與らざるをいふ。これは天寶十四載河西尉に任ぜられて就かざりしことをさす。卷三の「官定後戲贈」詩をみよ。【八二】無所愛　愛は愛惜。【八三】信行藏　信は「まかす」行藏は行くとかくれると、進退をいふ。【八四】黑貂　くろき「てん」の皮ごろも。蘇秦が故事。【八五】斑鬢　黑白まだらのびんの毛。【八六】兀稱觴　兀は動かざる貌、稱觴はさかづきをあぐるなり。【八七】杜曲　長安の南、樊川の水曲の名、韋曲とともに名勝なり、作者の居宅此にあり。【八八】晚耆舊　晚一に換に作る、換に從ふ。耆舊は老人、暗に鄭虔等をさす、虔が居宅は韓莊の東南にあり、作者の居と近し、卷六「題鄭十八著作丈故居」詩をみよ。【八九】四郊　四方の野外。【九〇】多白楊　白楊は葉うらの白きやなぎ、墓地に植う、多しとは墳墓多くなりしをいふ。【九一】坐深鄉黨敬　坐の字名詞にみて深坐としおくふかくすわる、卽ち上席にすわることと解く說あり。余は必ずしもしか考へず、坐に敬を深くすにて可なりとおもふ、深くすとは尊敬の度を增して加へらるるをいふ。鄉黨は鄉黨の人人をいふ。【九二】死生忙

死生といふも生の方輕し、死するもの頻繁にして忙しきをいふ。【九三】朱門　貴族の家の門。【九四】傾奪　あひ手を傾け、あひての權力をうばふ。【九五】赤族　一族全體を殺戮する、赤は赤き血を流すこと、語は揚雄の「解嘲」にみゆ、傾奪、赤族の事實は李林甫が貴臣を誅逐し、楊國忠が王鉷を構陷せしごときをさす。【九六】國馬　「周禮」考工記の注によれば國馬とは種馬（玉路をひくもの）・戎馬（戎路をひくもの）・齊馬（金路をひくもの）・道馬（象路をひくもの）の四類の馬をさす。　ここにいふは玄宗が國費にて飼養せる馬をいひ、中には舞ひに用ひし馬などをもふくめていへり。【九七】官雞　官にて養ふにはとり、これは鬪雞に用ひしもの。【九八】輸稻粱　輸とは人民よりそれへはこぶをいふ。【九九】擧隅　一隅をあぐる。四隅のうちその一をあぐとは一端を示すをいふ。【一〇〇】見煩費　見は見せしむる、「しめす」なり、煩費はわづらはしき費用。【一〇一】引古　前古の例證をひく、嗇は亡び儉は興ること古今の常義なり。「快意」以下の二十二句は長安に歸りし後の事を敍す。【一〇二】河朔　黃河北方をいふ。【一〇三】風塵起　安祿山の叛亂起りしこと。【一〇四】岷山　陝西鞏昌府岷州にある山の名、江の出づる所なり、岷江をいはんとて岷山をいへり、岷江は蜀に流る、因つて玄宗の蜀に幸せしことをのぶ、玄宗岷山へゆきしにはあらず。【一〇五】行幸長　行幸は成都への行幸、長とは路遠きをいふ。【一〇六】兩宮　玄宗、肅宗。【一〇七】警蹕　道路のかけ聲なり。天子は出づるに警と稱し入るに蹕と稱す、行人を戒め止むるなり。【一〇八】遙相望　玄宗は成都に、肅宗は靈武に、兩者遠くへだたる。【一〇九】崆峒　陝西平涼府平涼縣西にある山の名、肅宗靈武への往來にその附近を通過す。【一一〇】殺氣黑　兵氣みなぎるをいふ。【一一一】少海　「山海經」に天皇之山、南望ニ幼海一と。幼海は卽ち少海なり、天子を大海に比し太子を少海に比す、この少海は玄宗に對する太子の義にして肅宗をさす　肅宗の太子廣平王俶をさすといふ說は余之を取らず。【一一二】旌旗黃　肅宗卽位して黃色の旗をあげしをいふ。【一一三】禹功亦命子　「論語」堯曰篇に、堯曰、咨爾舜、天之曆數在ニ爾躬一、云云、舜亦以命レ禹とあり、詩句其の語法を借る、禹天下を治むるの功ありて其の子啓に命じて帝位を繼がしめたりといふなり、玄宗が其子肅宗に命じて皇位を繼がしめられしをいふ。禹を肅宗に、子を廣平王にあつる說あり、取らず。【一一四】涿鹿親戎行　むかし黃帝、蚩尤と涿鹿の野に戰ふ、黃帝を以て肅宗に比し、蚩尤を以て祿山に比していへり、戎行を親らすとは天子親しく軍務に服せらるるをいふ。肅宗親征の事なしとて此句を廣平王に屬せしめんとする說あれども、廣平王をして天下兵馬大元帥たら

しめしは肅宗なれば余は之を肅宗に屬せしめて可なりと考ふ。【一一五】翠華　天子の旗、肅宗の軍旗。【一一六】擁吳岳　吳岳は吳山なり、秦、咸陽に都するや、この山を西嶽とす。陝西鳳翔府汧陽縣の西、隴州の南にあり。「舊唐書」禮儀志に、肅宗至德二年春、在鳳翔、改汧陽郡吳山、爲西嶽、とあるはこれなり。なほ吳嶽については卷八「青陽峽」詩の高秋視吳嶽の句解をみよ。擁とは吾がものとかかえこみしをいふ。【一一七】貙虎　貙もと螭に作る、杜篤が論都賦に、虓怒之旅、如虎如螭とみゆ。仇氏螭虎は無意味なりとて「列子」によりて螭を貙と改めたり「列子」に黃帝、炎帝と阪泉の野に戰ひしとき熊羆豺豹貙虎を帥ゐて前驅と爲すとの語あり。貙は五指ある虎なりといふ。貙虎も貔虎も並に以て官軍の勇猛なるものに比す。【一一八】噉射狼　噉は「くらふ」射狼は賊軍をいふ、肅宗の鳳翔に至るや、隴右・河西・安西・西域の兵皆來り會す。それらの兵が賊軍を討滅せんとするをさして噉射狼といふ。【一一九】爪牙　貔虎のつめ、きば。【一二〇】一不中　貔虎の爪牙が射狼にあたらざるなり、官軍の討伐思はしからざりしをいふ。【一二一】胡兵　安祿山・史思明の賊兵　【一二二】跳梁　跳りあがる貌、勢つよきをいふ。【一二三】大軍　郭子儀の率ゐる官軍をいふ。關內節度使王思禮、武功に軍す、賊安守忠等之を攻む、兵馬使郭英乂戰ひて利あらず、思禮退きて扶風に軍す、賊の游兵大和關に至る、鳳翔を去ること五十里、鳳翔大に駭く、至德二載四月、朝廷郭子儀を以て司空・副元帥となす、子儀賊と清渠に戰て敗績し、退て武功を保つ。【一二四】載草草　載は「すなはち」草草は勞苦の貌。【一二五】濶蹙　民力しぼみつかれしこと。【一二六】滿膏肓　膏肓は「左傳」成公十年に見ゆ。杜預の注に、肓は鬲なり、心下を膏となす、とあり。疾が鬲上心下にありては深くして療治すること難し。【一二七】備員　官員の地位にそなはる。【一二八】竊補袞　竊は「ぬすむ」謙遜の辭、みだりに其位に在るをいふ、補袞は袞職を補ふなり、天子の職の闕けたるを補ふなり、作者左拾遺の職をいふ。拾遺は諫諍を掌る。至德二載四月、作者は鳳翔の行在所に於て左拾遺に任命せられたり。【一二九】九廟焚　前の「往在」詩の中宵焚九廟におなじ。【一三〇】萬民瘡　瘡は「きず」、困憊をいふ。【一三一】伏青蒲　青蒲は天子の御座のしきものなり、三解あり、一に曰く、青色を以て圓形をゑがく、皇后に非ざればそこに至るを得ず、二に曰く、蒲の席に青き緣をつけたるなり。三に曰く、青き蒲を席となして地を蔽ふなり、と。第三說に從ふ。「漢書」史丹傳にいふ、元帝太子を易えんと欲す、史丹、帝獨り寢ぬと聞き直ちに臥內に入り青蒲の上に伏して泣き諫む、と。作者必ずしも肅宗の臥內にまで入りしにあらず、御座に近きて諫めしをいふ、至德二載五月、宰相房琯さきに陳陶斜に敗軍せしことと門下の琴客董庭蘭なるものに不正の行爲ありしこととによりて位を貶して太子少師とせらる、杜甫疏をたてまつりて小罪のために大臣を免ずべからざるをいふ。詩句此事を指す。【一三二】延諍　朝廷にて諫言する。【一三三】守御牀　おん椅子からはなれぬ、上逸の上疏の事をさす。【一三四】君辱敢愛死　愛は愛惜なり、「史記」范雎傳に、雎曰く、主憂臣辱、主辱臣死、と。【一三五】赫怒　まつかになつていかる、天子の怒をいふ、語は「孟子」にみゆ。肅宗の怒りたまひしをいふ。【一三六】奉無傷　そこなはるることなし、作者は一時三司(御史臺・中書省・門下省・三衙の吏立ち會ひするなり)の推問に附せられしも宰相張鎬が救ひによつて推問をゆるさる。【一三七】聖哲　肅宗の聰叡をいふ。【一三八】體仁恕　仁恕の德を身につけらるること。【一三九】宇縣　宇は宇宙、縣は赤縣(中國の義)「史記」始皇本紀、之罘刻石銘にみゆ。天下をいふ。【一四〇】小康　すこしく平安なり。【一四一】哭廟　肅宗至德二載十月丁卯に長安に入る、九廟賊の焚く所となるにより素服して廟に哭すること三日、入りて大明宮に居る。【一四二】灰燼中　宗廟のはひのなか。【一四三】鼻酸　作者自己の悲しさをいふ。【一四四】朝未央　朝は參內すること、未央は漢宮の名、借りて唐の大明宮をいふ、「河間」以下二十六句は祿山叛後、鳳翔に赴きしこと及び肅宗に扈從して長安に還りしことを敍す。【一四五】小臣　自己を謙遜していふ。【一四六】議論絕　朝廷に對して建言することなくなりしをいふ。【一四七】殊方　他方、他鄉、長安を去りて秦州より成都に、成都より梓、閬に、また夔州に至るをいふ。【一四八】不展　志ののびざるをいふ。【一四九】羽翮　翮はたちばね。【一五〇】低昂　ひくくなるとあがると、但しひくくなることを主としていふ。【一五一】哀壑　かなしげのたに、夔州の峽谷をいふ。【一五二】碧蕙　碧は葉色をいふ、蕙は蕙より枝のさく蘭。【一五三】捐微芳　捐は棄つるなり、陸機が詩に江蘺生幽渚、微芳不足宜、淑氣與時隕、餘芳隨風捐、とあり、捐の字之に本く。【一五四】之推避賞從　春秋の時、晉の介之推、文公に從て諸國に難を經、國に歸るや賞及ばず、亦之を言はずして賞を避けて山に入る。賞從とは從行を賞するなり、作者かつて肅宗に扈從するの功ありて今他方に在るは介之推が賞を避けしと似たり。【一五五】漁父濯滄浪　屈原が漁父辭にみゆ、漁父、滄浪之水淸、可以濯吾足、とうたへり。滄浪は蒼き水をいふ、或は水名とす、これも自己の隱退生活を比していふ。【一五六】榮華敵勳業　敵は匹敵、勳業に相應するならばまだよしとの意。【一五七】有嚴霜　歲暮には霜きびしくおきて草を殺

す、榮寵分に踰ゆるもの亦かくのごとし、戒めざる可らず。【一五八】鴟夷子　越の范蠡、勾踐を辭し去り、齊にゆきて鴟夷子皮と稱す、蓋し以て李泌に比す、泌は肅宗の寵臣、時に魚朝恩に忌まれ衡山にかくる。【一五九】才格　才力品格。【一六〇】羣兇　多くの兇賊。【一六一】側佇　ほのかにまつ。【一六二】英俊翔　英俊はすぐれたる人物、翔とは朝廷のうへに活動するをいふ。「小臣」以下の十四句は貶官以後、蜀に客たることをいひ英俊の出でんことを希望して結とせり。

【題義】少壯時の天下周遊を敍し且老後の感懷を述べたる詩。殆ど作者の自敍傳ともいふべきもの。大暦元年秋夔州にての作。

【詩意】自分はそのむかし十四五歳の頃から文學の社會に遊びに出たが、文學の士であつた崔尚・魏啓心・等の人人から班固揚雄に似てゐるとほめられた。自分は七歳ごろ已に文思壯で鳳皇の篇を口すさんだことがあり、九歳の時には大字を書き、製作物も嚢に滿つるくらゐであつた。性質は豪放で少年の頃からはや酒を嗜み、心腸剛直で邪惡をにくむことがひどかつた。自分は同時の小さな人物などは眼中に置かず、交を結んだ者は皆年ふけた人たちであつた。酒の醉が十分まはつたころ八方をながめてみるとただ俗物どもがいつぱいうようよしてゐる樣な氣がした。』（やがて旅行をはじめた）北方からでかけて東のかた姑蘇臺の方へくだつた、その時已に海に浮ぶ舟を用意した。あのとき扶桑國のあたりまでゆききはめることができなかつたことは今でも殘念におもう所である。吳地にうろつくうち、もとより昔の王氏謝氏一門の風流は遠き過去の事で見るべくもなく、吳王闔閭が跡を弔へばその墓は荒れはててゐる、そのそばの劍池には石壁が危く立つてゐる、長洲の苑には芰や荷がにほうてゐた。高い閶門の北には吳の太伯の廟が回れる池塘の水に映うてゐた。そこへお參りするたびに往事を追懷して浪浪と涙のおつるのをとめるわけにはゆかなかつた。吳地では闔閭が專諸をして魚腹に匕首をかくして王僚を刺させた話をきいた。（轉じて越にはいると）朱買臣が太守の印綬を腰につけてこつそり會稽へ來て、それが見つけられて土地の人人が急に道路の掃除をしだしたことなどをかしくおもはれた。勾踐が戈を枕にして讎に報いたこと、秦の始皇が浙江の水を渡つたこと、いづれも憶ひうかべてみた。越の女子は天下での色の白い美人であり、鑑湖のあたりは五月の炎天にも涼しかつた。剡溪には秀異なる景物があつめられてゐた。それらの事は思ひとまらうとしてもどうしても今に忘れることはできぬ。』歸舟の帆ははるかに天姥ヽ峯をかすめて故鄕（河南）へもどつた。この故鄕の地から中年（時に廿四歲）の自分は鄕貢生として受驗のため京師へおくりだされた。そのころ自分の意氣は屈原・賈誼・にむかつて戰を挑まんばかりであり、曹植・劉楨・をも眼下にみくだすほどであつた。それが京師の試驗では考功員外郎の監督のもとに落第の運命にあひ、ただひとり京兆尹の政廳から暇乞ひして立去ることになつた。それから齊趙の地方に氣ままにあそび輕裘肥馬、すこぶる淸狂の態をつくした。實例をいふと、春は叢臺のうへに歌ひ、冬は靑丘の傍に獵をする。黑いイチヰの林に鷹を呼びかけたり、雲雪の橫はる岡に獸を逐ひかけたり、たづなをゆるめては飛鳥を射、矢はずを引きさへ

すれば鶺鴒のとりを射おとした。之を見て友だちの蘇預（源明）が鞍によりながら喜んで自分を見ることまるで山簡が葛彊をたづさへる樣なありさまであつた。』こんなことをして愉快にすごすことがかれこれ八九年、西のかた咸陽へ歸つてきた。當時自分の價値を知つて相許してくれる人は必ず文壇の長たるものであり、自然を賞して遊びを共にするものは賢明な王（李璡）であつた。王は醴を置いて自分を敬禮してくださる、自分はそこに出入してゐたが、賦を獻上して明光殿（大明宮）に進み入ることになつた。そのをり吾が天子（玄宗）には食をやめて自分をお召しになる、多くの公卿たちは車馬衣服をむらがらして自分の召試さるのを見物にきたほどである。（結果は徼官を授けらるることになつたが）自分は官途から身をひいてすこしも惜しいとはおもはなかつた。そうしてただひどく酒を飮みふけつて進退は運次第ときめてゐた。黑い貂の裘はどうしてやぶれずにゐよう、それにかまはず自分は半白の鬢をいただいて兀然と酒盃をあげてゐた。自分の住地杜曲にはだんだん老人が換はりゆき、四邊の野らには白楊樹の墓所ばかり多くなる、生きのこる自分は鄕里の人たちから長老として祭りあげられるが日に日に人の死にゆくことの忙はしさを覺えた。貴族たちはとみれば彼等はかつてに傾奪しあふ、おたがひに一族を殺しあうてわざはひにかかりつつある。國費で養ふ馬は粟や豆を喰ひつくす、官費の雞にも人民が稻粱をはこびこむ、この一端をあげただけでもいかに國家がおびただしいむだづかひをしてゐたかがわかるであらう。自分はそれを見てむかしの例を引いてこれでは國が亡びるだらうことを惜しくおもうてゐたのである。』（果せるかな）河朔の方面から兵亂の塵が起り（祿山の叛）天子は遠く岷山の方へ行幸あそばされることになつた。兩宮（玄宗・肅宗）はそれぞれの行在所に於て警蹕をあそばされ、南と北と萬里をへだててはるかに望みかはされるの有樣となつた。そのうち肅宗のおいでになる崆峒の方には殺氣が黑くうごきだし、太子たるの身を以て天子たるの黃色の旗をお揭げになつた。玄宗も亦そのお子に位をおゆづりになり、ここに肅宗がみづから軍務をみそなはすことになつた。吳岳を擁して天子の御旗がなびく、諸方から馳せ參じた貙虎の樣な官軍はここに豺狼の樣な賊軍を呑んでしまはうとしたが惜しくも爪牙が中らなかつたので賊兵はさらにあばれまはることになつた。それでさしもの朝廷の大軍も非常な難儀をする、人民の疲弊は膏肓に入るといふみじめさに立ち至つた。時に自分は左拾遺として官員の末にそなはり、かたじけなくも天子のお手ぬかりの所を補ひたてまつる職務に居たので憂憤の心はいたづらにわきあがつた。一方には宗廟が賊の手でまるやけになつてゐることに感じ、他方には萬民がいたくきずつけられてゐることを氣の毒にかんがへた。それに宰相房琯が免職になるといふ事なので、自分はそのとき天子の御座所にひれ伏して、朝廷の席ながらおいさめをして御椅子のそばを離れなかつた。君が辱しめられたまふ際に臣たる者がなんで死を愛んでゐられよう。そのとき吾が君には激怒あそばされたのであるが、とりなす者があつたため自分の身は幸にもそこなはれずにすんだ。吾が君には聖哲でおはすうへに仁恕の心を身につけ

ておいであそばすによつて天下はふたたびすこしく安泰なることができ、吾が君ごじしんに灰燼の中に宗廟に哭せられ京師へおもどりになる、自分も悲慘のおもひに水鼻をながしつつ未央の宮殿（大明宮）へ參內したことである。』そののちはこのふつつかな自分は朝廷へ對し奉つて意見を申しあげることもなくなつて、老病の身を以て他鄕に客寓することになつた。自分の胸中は鬱鬱として志の展びざるに苦しみ、つかれた鳥の羽のただ低れさがつてゐるのに困しんでをる。いまや秋風が哀れな壑に動きそめて、碧なる蕙の花もかすかなかをりを棄てかけた。いまの自分は君におともをして賞與を避けたといふ介之推のごとく、また滄浪の水に足を濯はんと歌うた漁父の樣なものである。かんがへてみると榮華といふものは、勳業に相應すべきものであつて、もし不相應な榮華をする者があれば、忽ち歲暮に嚴霜がおりて草木を枯らす樣にその榮華は枯らされてしまふものである。自分は鴟夷子、（范蠡、李泌をたとふといふ）の人物をみてみるにその才格は尋常人よりたかくぬきんでてをる。まだ天下の羣兒は朝廷にさからうてその亂が定まらぬ、自分はただほのかに鴟夷子のごとき英俊が朝廷に立つて活動するのをまつばかりである。』

遣懷　　懷を遣る

昔我遊宋中。惟梁孝王都。　昔し我宋中に遊ぶ、惟れ梁の孝王の都なり。
名今陳留亞。劇則貝魏倶。　名は今陳留に亞ぐ、劇は則ち貝魏倶なり。
邑中九萬家。高棟照通衢。　邑中九萬家、高棟通衢を照らす。
舟車半天下。主客多歡娛。　舟車天下に半なり、主客歡娛多し。
白刃讎不義。黃金傾有無。　白刃不義に讎す、黃金有無を傾く。
殺人紅塵裏。報答在斯須。』　人を殺す紅塵の裏、報答斯須に在り。』
憶與高李輩。論交入酒壚。　憶ふ高李が輩と、交を論じて酒壚に入る。
兩公壯藻思。得我色敷腴。　兩公藻思壯なり、我を得て色敷腴たり。
氣酣登吹臺。懷古視平蕪。　氣酣にして吹臺に登る、古を懷うて平蕪を視る。
芒碭雲一去。雁鶩空相呼。』　芒碭雲一去、雁鶩空しく相呼ぶ。』
先帝正好武。寰海未凋枯。　先帝正に武を好む、寰海未だ凋枯せず。
猛將收西域。長戟破林胡。　猛將西域を收め、長戟林胡を破る。
百萬攻一城。獻捷不云輸。　百萬一城を攻む、捷を獻じて輸けたりと云はず。
組練棄如泥。尺土負百夫。』　組練棄つること泥の如し、尺土百夫に負く。』

(三五)拓境功未已。(三六)元和(三七)辭大鑪。　拓境功未だ已まず、元和大鑪を辭す。

亂離朋友盡。(三八)合沓歲月徂。　亂離朋友盡く、合沓歲月徂く。

吾衰將焉託。(三九)存歿(四〇)再嗚呼。　吾衰へて將に焉に託せむとする、存歿再び嗚呼す。

蕭條益堪愧。獨在天一隅。　蕭條益愧づるに堪へたり、獨り天の一隅に在り。

(四一)乘黄已去矣。(四二)凡馬徒(四三)區區。　乘黄已に去りぬ、凡馬徒らに區區たり。

不復見(四四)顏鮑。(四五)繋舟(四六)臥荊巫。　復た顏鮑を見ず、舟を繋いで荊巫に臥す。

臨餐(四七)吐更食。常恐(四八)違撫孤。」　餐に臨みて吐て更に食す、常に恐る撫孤に違はむことを。」

【字解】【一】 昔我　昔とは天寶三四載の頃をさす。【二】 宋中　宋とは宋州をいふ、中とは城中をいふ。宋州は今河南省歸德府商丘縣。【三】 梁孝王都　梁の孝王、名は武、漢の文帝と竇皇后との間に生まる。長子は景帝、次は孝王なり、文帝の十二年に梁に徙封せらる。睢陽に都す。卽ち商丘縣の地なり。景帝の五年、孝王睢陽城を廣むること七十里、大に宮室を治む。東苑を築く、方三百餘里。【四】 陳留亞　陳留は今河南省開封府陳留縣。亞は「つぐ」陳留の次位に在るをいふ。【五】 劇　繁劇　事のしげきをいふ。【六】 貝魏倶　貝は貝州、今山東省東昌府恩縣、魏は魏州、今直隸省大名府、倶は「ともに」、同列なるをいふ。【七】 邑中　宋州の管内をいふ。【八】 高棟　たかきむなぎ、大宅をいふ。通衢　四通のみち。【九】 半天下　天下舟車の半數がここに集まる。【一〇】 主客　主は本處土著の人、客は外來遊寄の人。【一一】 鋤不義　不義なる者に復讎する。【一二】 傾有無　財の有無にかかはらずそれを傾けてつかふ。【一三】 紅塵裏　紅塵は街路のちりをいふ。【一四】 報答在斯須　報答はあひ手にしかへしをすること、斯須は須臾におなじくわづかの時間をいふ。以上起十二句、宋中遊俠の俗をいふ。【一五】 高李輩　高適李白等、事は前の「昔遊」詩と併せ看るべし。【一六】 酒壚　酒を賣るへつつい。酒屋の店さきに設く。【一七】 兩公　高・李。【一八】 詞思　文學の思ひ。【一九】 色敷腴　色は顏色、敷腴は暢悅の貌、にこやかにのびのびしきさま。【二〇】 氣酣　醉まはりて元氣づきたるとき。【二一】 吹臺　繁臺ともいふ、今開封府城東南六里にあり、もと師曠の吹臺なりといふ。【二二】 平蕪　平なる荒野。【二三】 芒碭雲一去　芒碭は二山の名、碭山は江蘇省徐州府碭山縣の東南にあり、芒山は其の北八里にあり。漢の高祖かつて芒碭の山に隠る、居る所常に雲氣ありしといふ。雲一去とは蓋し帝王の氣の衰へしを昔に托していへるならん。【二四】 雁鶩　かり、あひる、「憶與」以下八句は高李との同遊をのぶ。【二五】 先帝　玄宗。【二六】 寰海　四海の內、天下。【二七】 猛將收西域　猛將は王忠嗣・哥舒翰が輩、西域は吐蕃の地域をいふ。【二八】 長戟　ながきほこ。【二九】 破林胡　林胡は契丹をさす、契丹の地は戰國の時の林胡の地なり、張守珪・安祿山皆林胡を破る。【三〇】 不云輸　輸は軍にまけること、まけてもまけたといはず、かつたと奏す。【三一】 組練　仇注に「左傳」襄公三年の組甲被練を引き精兵の義とせり。精兵とすれば下の百夫と重複す。余は賜與の物をいふものかと考ふ。「後出塞」詩の越羅與楚練、照耀興臺軀、これ其の義ならん。組は「くみひも」綬となす。練は「ねりぎぬ」。【三二】 棄如泥　泥土をすつるがごとく惜しげもなく賜ふをいふ、仇本に棄を去に作る、誤れり、因つて改む。【三三】 尺土　わづかの土地。【三四】 負百夫　百夫は百人の兵、一尺ばかりの土地を攻め取るも百人の兵の生命を失ひては其人にすまぬ、吾が本志に負くなり。以上「先帝」八句は玄宗の武を邊境に用ひしをいふ。【三五】 拓境　邊境を開拓すること。【三六】 元和　陰陽太和の氣。【三七】 辭大鑪　大鑪は天地をいふ、造化は大冶にして天地は大鑪なること「莊子」にみゆ。大鑪とはかぢやの大きな「ろ」なり。辭は去るをいふ。【三八】 合沓　相繼ぐ貌。【三九】 存歿　一は存し他は歿す。【四〇】 再嗚呼　寶應元年李白卒し、永泰元年高適卒す、これ再び嗚呼するなり。【四一】 乘黄　駿馬をいふ、以て高李に比す。【四二】 凡馬　以て自ら比す。【四三】 區區　こせこせとした心をいだく。【四四】 顏鮑　宋の顏延之・鮑照、以て高李に比す。【四五】 繋舟　此句以下自己をいふ、舟をつなぐとにかりに上陸してをるをいふ。【四六】 臥荊巫　荊州巫山、楚地といふの類、夔州に居ることをかくいへるなり。【四七】 吐更食　心おちつかざるをいふ。【四八】 違撫孤　孤は親無し子、撫とは撫で養ふこと、違とは撫孤の志にたがふこと。高李の遺兒の世話をせんとおもへどそれにたがひはせぬかと氣づかふなり。「拓境」以下十四句、亂後の存亡をいひ

友誼を全うし能はざらんことを恐る。

【題義】舊友高適李白との遊をおもひ、胸中のうさをやるためによんだ詩。大暦元年夔州にての作。

【詩意】むかし自分は宋州に遊んだことがある。そこは梁の孝王の都であつたところである。その名高さは陳留の次位ぐらゐだが繁劇さは貝州・魏州と同列になるほどである。宋州城内には九萬家もあり、高い棟が四通の街路を照らしてゐる。天下の舟車の半分はここへあつまつてくる、土地のものも、他處のものもみなよりあうておもしろく過すのである。土地の風は豪俠で、不義な者には白刃を以てかたきうちをする。黃金は有る無しにかかはらずありつたけを散財してしまふ。街上で人を殺したりしたらばしばしのまにそのしかへしがおこなはれる。』今でも憶ひだす、自分は高適・李白らと交りをむすんで酒屋へ飮みにはいつた。この二人は文學の思想さかんなるものであつたが、自分を得て彼等も顏つきがのびのびした樣であつた。醉ひがまはつて元氣づいたころ、我我はともに吹臺に登り、荒れた平野を見ながら過去を追懷した。芒碭の方面をみると帝王の雲氣は去つてしまひ、あたりにはただ雁や鶩が呼びかはしてゐるばかりであつた。』そのころ先帝（玄宗）にはちやうど武をお好みであり、天下はまだ疲斃してはゐなかつた。猛將は西域地方を吾が手に收める、また長戟をふるうて林胡をもうち破つた。武將どもは百萬の兵を以て敵の一城を攻めるが、いつも捷をたてまつるばかりで、まけてもまけたとはいはぬ。それで將卒に賜はる組練は泥土を棄てるごとくやたらに賜はり、また人の生命も粗末にとりあつかはれ百人を死なせてやつと一尺の土地を吾が有とするといふほどで本人にすまぬことであつた。』かくして邊境の土地を開拓する功がまだ了らぬうちに太和の元氣は天地から去つてしまひ世は大亂となつた。亂世のちりぢりのうちにじぶんのともだちもなくなり、としつきもそれからそれへと經過した。親友高・李・の二君に對しても、一生一死、二度まで嗚呼の歎を發することになつた。自分はこの老衰の身を以てどこに吾が身を託してよいのだらう。いまだひとり天のはてにをるが、まことにさびしくてますます愧づかしくおもふのである。乘黃の駿馬といふべき二人は去つてしまひ、自分の樣なやくざ馬がいたづらにこせついてをる。ふたたび顏鮑の樣な二人を見ることはできず、じぶんは舟をつなぎとめて荊巫の地にうち臥してをる。食事の際にも吐きだしたりまた食べたり、すこしもおちついたきもちになれぬ、それはいつも兩君の遺兒のお世話をしてあげたいとの念にたがひはせぬかと氣づかはれるからである。』

(一)奉漢中王手札、報(二)韋侍御・(三)蕭尊師(四)亡

漢中王の手札を奉ず、韋侍御・蕭尊師が亡するを報ず

秋日蕭韋逝。(五)淮王報(六)峽中。　秋日蕭韋逝けりと、淮王峽中に報ず。

(七)少年疑杜史。(八)多術怪仙公。　少年杜史を疑ひ、多術仙公を怪しむ。

不但時人惜。祇應吾道窮。(九)
一哀侵疾病。相識自兒童。(一〇)(一一)
處處鄰家笛。飄飄客子蓬。(一三)(一二)
强吟懷舊賦。已作白頭翁。(一四)

但に時人の惜むのみならず、祇だ應に吾が道の窮するなるべし。」
一哀疾病に侵さる、相識兒童自りす。
處處鄰家の笛、飄飄客子の蓬。
强ひて吟ず懷舊の賦、已に白頭翁と作りぬ。

【字解】【一】奉漢中王手札　漢中王、名は瑀、時に梓州にあり、巳に見ゆ。奉手札とはてがみを頂戴せしこと。【二】韋侍御　侍御史韋某。【三】蕭尊師　道士蕭某。【四】報亡　死亡せしことを報知してくれた。【五】淮王　漢の淮南王、以て漢中王に比す。【六】恨峽中　峽中に居る自己に報知する。【七】少年疑柱史　此句韋侍御についていふ、少年とは韋のまだ年わかきこと、柱史は柱下史なり、老子かつて周の柱下史となる、秦以後柱下史は後世の御史の職となるにより柱史を侍御史にあてて用ひたり、疑ふとは柱史ならば老子の如く長壽なるべきに少年にして歿せしを以て之を疑ふといふなり。【八】多術怪仙公　此句は蕭尊師についていふ、多術とは蕭尊師は道士なれば仙人の術を多く知るをいふ、怪仙公とは仙人ならば長生不死なるべきに今死したるを以て之を怪むをいふ。【九】吾道窮　孔子西狩に麟を獲しを見て吾道窮と歎ぜしこと「公羊傳」にみゆ。自己の行はんとする道のますますゆきつまるをいふ。以一起六句は蕭韋死亡の報を得て怪しみ且痛む。【一〇】一哀　しばしばみゆ、友人に對してひとたび哀哭の禮をつくすこと。【一一】侵疾病　侵とは疾病が吾が身をおかすなり。【一二】鄰家笛　晉の向秀、友人嵆康呂安が舊居を過ぎ鄰人の笛を吹くをきき悲みて思舊賦を作る。【一三】客子蓬　客の身分に似たるよもぎ、よもぎは風のまにまに移りあるく。【一四】懷舊賦　晉の潘岳、楊肇楊潭がためにこの賦を作る、「一哀」以下六句は友をいたみ且自らいたむ。

【題義】漢中王から手紙をいただいた。それによると韋侍御も蕭尊師もなくなつたとのことである。因つてこの詩をよんだ。大曆元年夔州にての作。

【詩意】秋の日にあたり蕭尊師も韋侍御も亡くなつたと淮王から峽中の自分のところへ報知してくださつた。まだ少年なのになんで柱下史たる韋君が死んだかと疑ひ、いろいろ長生の術を知つてゐたであらうのに仙人たる蕭君が亡くなるとはふしぎだとかんがへる。二君の死んだことはただ同時の人人が惜しむだけではない、我我同志の行はんとする道もゆきつまらうとすることなのであらう。』自分はこの報知をきくや疾病に侵されながら一哀の禮をつくす。我我が識りあうたのはこどもの時からのことなのであるものを。ああ、自分は客子にも似た蓬の樣に飄飄とただよはされてをり、處處に起る鄰家の笛のねをきいて二君をおもふ念にたへられぬ。もはや白頭翁となつた自分にはむりやりに懷舊の賦を吟じてみるだけのことである。』

存歿口號二首(一)

席謙不見近彈棊。(二)(三)
畢耀仍傳舊小詩。(四)(五)(六)
玉局他年無限事〔笑〕。(七)(八)(九)
白楊今日幾人悲。(一〇)(一一)

存歿口號　二首
席謙見ず、近、棊を彈ずるを、
畢耀仍は傳ふ舊小詩。
玉局他年無限に〔事〕笑ふ、
白楊今日幾人か悲しむ。

【字解】【一】存歿口號　存者歿者について口ずさみたる詩。【二】席謙　巳に卷十二章梓州水亭詩の題注にも見えたり。作者自注によれば吳の人にて善く棊を彈くといへり。此のものは生存するなり。【三】彈

【原注】道士席謙。呉人。善弾レ碁。畢曜善為二小詩一。

碁　こまなはじきあふ遊戯なり。【四】畢曜　曜は一に耀に作る、卷六に贈畢四曜詩あり、耀は曜とすべし。作者原注に善く小詩をつくるといへり。此のものは歿せしなり。【五】仿佛　死後の今もなほつたふるないふ。【六】短小詩　短とは生前ないふ、小詩は短小の詩篇をいふ。【七】玉局　碁盤をいふ、此句席謙についていふ。【八】他年　往年。【九】無限事　事の字一に笑に作る、笑に從ふ。無限事ならば碁事の妙無窮なるないふか、我が心事の無限なるないふか、二者いづれかなるべし。【一〇】白楊　葉うらの白きやなぎ、墓所に植う。畢耀が墓につきいふ。【一一】幾人悲　いく人もなし、ただ自己あるないふ。

【題義】生者と死者とについておもひのほどを口すさんだ詩。大暦元年夔州にての作。

【詩意】自分はちかごろ席謙が碁弾きをするのをとんと見たことがないが、畢耀は死後の今なほ以前の小詩を人間に傳へてをる。往年玉の碁盤に對して謙とともに無限の笑ひ興じをやつたが、耀の方は彼の墓の白楊について悲しむものはなんにんあるか、まづ自分くらゐのものであらう。

〔二〕

鄭(一)公粉(二)繪隨(三)二長夜一。
【原注】高士。滎陽鄭虔。善畫二山水一。曹覇善畫レ馬。

鄭公が粉繪長夜に隨ふ、

曹(四)覇丹青已白頭。

曹覇が丹青已に白頭。

天下何曾有(五)二山水一。

天下何ぞ曾て山水有らむ、

【字解】【一】鄭公　滎陽の鄭虔なり、虔が事已に前に見ゆ。【二】粉繪　ごふん、ゑのぐ、畫をいふ。【三】隨長夜　死せるないふ。【四】曹覇　畫馬に長ず、已に前に見ゆ。【五】有山水　眞に奇といふべき山水畫無きないふ、此句虔についていふ。【六】不解　解は解識すること。

人間不(六)レ解重(七)二驊騮一。

人間解せず驊騮を重んずるを。

【七】重驊騮　驊騮は駿馬、覇の畫馬をいふ、覇は生存するなり。

【詩意】鄭公は繪をよくしたが死んでしまつた。曹覇も畫がうまいが白頭になつてしまつた。鄭の死後は天下に眞の山水はなくなつた。覇は生きてをるが、人間には彼の畫いた駿馬を重んずることを知つてゐるものはない。

杜少陵詩集　卷十七

贈(一)李八祕書別三十韻

往(二)時中(三)補右。扈(四)蹕上(五)元初。
反(六)氣淩行(七)在。妖(八)星下直(九)廬。
六(一〇)龍瞻(一一)漢殿。萬(一二)騎略(一三)姚墟。
玄(一四)朔迴(一五)天步。神(一六)都憶帝(一七)車。
一(一八)戎纔汗馬。百姓免爲(一九)魚。
通(二〇)籍蟠(二一)螭印。差(二二)肩列(二三)鳳輿。
事殊迎(二四)代邸。喜異賞(二五)朱虛。』
寇(二六)盜方歸(二七)順。乾坤欲宴(二八)如。
不(二九)才同(三〇)補袞。奉詔許(三一)牽裾。

李八祕書に贈り別る三十韻

往時中の補右、扈蹕す上の元初。
反氣行在を淩ぐ、妖星直廬に下る。
六龍漢殿を瞻、萬騎姚墟を略す。
玄朔天步を迴す、神都帝車を憶ふ。
一戎纔に汗馬、百姓魚と爲るを免る。
通籍螭印蟠まる、差肩鳳輿に列す。
事は殊なり代邸を迎ふるに、喜は異なり朱虛を賞するに。』
寇盜方に歸順す、乾坤宴如たらむと欲す。
不才同じく補袞、奉詔牽裾を許さる。

(三二)鴛鷺叨(三三)雲閣。(三四)騏驎滯(三五)石渠。
(三六)文園多病後。(三七)中散舊交疎。
飄泊哀相見。平生意有餘。
風煙(三八)巫峽遠。(三九)臺榭(四〇)楚宮虛。
觸目非(四一)論故。(四二)新文尙(四三)起予。』
(四四)淸秋凋碧柳。(四五)別浦落(四六)紅蕖。
消息多(四七)旗幟。(四八)經過(四九)歎里閭。
戰連(五〇)脣齒國。軍急(五一)羽毛書。
(五二)幕府(五三)籌頻問。(五四)山家藥正鋤。』
【原注】山劍元帥相公。初屈幕府。參謀帷。相公朝謁。今赴後期也【又】祕書比臥靑城山中。
(五五)台星入(五六)朝謁。(五七)使節有(五八)吹噓。
(五九)西蜀災長(六〇)弭。(六一)南翁憤始攄。
(六二)對敭(六三)抗士卒。(六四)乾沒(六五)費倉儲。

鴛鷺叨に雲閣、騏驎石渠に滯る。
文園多病の後、中散舊交疎なり。
飄泊相見るを哀しむ、平生意餘り有り。
風煙巫峽遠く、臺榭楚宮虛し。
觸目論故に非ず、新文尙は予を起す。』
淸秋碧柳凋む、別浦紅蕖落つ。
消息旗幟多し、經過里閭を歎せむ。
戰は連る脣齒の國、軍は急なり羽毛の書。
幕府籌頻りに問ふ、山家藥正に鋤く。』
台星入りて朝謁す、使節吹噓有り。
西蜀災長へに弭まむ、南翁憤始めて攄べむ。
對敭せむ士卒抗はるるを、乾沒倉儲を費す。

(六六)勢藉兵須用。(六七)功無禮忽諸。
(六八)御鞍金(六九)騕褭。(七〇)宮硯玉(七一)蟾蜍。
拜舞銀(七二)鉤合。恩波錦(七三)帕舒。』
(七四)此行非不濟。(七五)良友(七六)昔(七七)相於。
(七八)去棹依(七九)顏色。沿流想(八〇)疾徐。
(八一)沈綿疲(八二)井臼。(八三)倚薄似樵漁。
(八四)乞米煩(八五)佳客。(八六)鈔詩聽(八七)小胥。
(八八)杜陵斜晚照。(八九)潏水帶(九〇)寒淤。
(九一)莫話(九二)淸溪髮。(九三)蕭蕭(九四)白映梳。』

勢に藉る兵須らく用ふべし、功無し禮諸を忽にせむや。
御鞍金騕褭、宮硯玉蟾蜍。
拜舞銀鉤合し、恩波錦帕舒べられむ。』
此の行濟はざるに非ず、良友昔相於てす。
去棹顏色に依る、沿流疾徐を想ふ。
沈綿井臼に疲る、倚薄樵漁に似たり。
乞米佳客を煩はす、鈔詩小胥に聽す。
杜陵晩照斜なり、潏水寒淤を帶びむ。
話する莫れ淸溪の髮、蕭蕭白、梳に映ずるを。』

【字解】【一】李八祕書　祕書省の官李某、この人初右補闕の官たり、のち祕書省の官となり、又蜀の杜鴻漸が幕僚となり、その推薦によりて入朝奏對せんとす。詩の原注に依れば時に鴻漸已に入朝し李祕書そのあとを追ひ、蜀より江を下りて夔州を經、東下北上せんとするものに似たり。【二】往時　至德二載頃をさす。【三】中補右　中は中書省をいふ、補右は右補闕の官たりしをいふ、唐の制、補闕・拾遺の官は、供奉・諷諫・扈從を掌る。【四】扈蹕　扈從、鳴蹕なり。車駕のあとに從ふこと。【五】上元初　「上の元初」なり、上は主上、肅宗をさす、元は年の元號を建つるをいふ、至德元載をいふ。【六】反氣　賊軍の反逆の氣、以下四句玄宗についていふ。【七】行在　玄宗の出奔の際のかりごてん。【八】妖星　不吉のほし、彗・孛の類、賊をいふ。【九】直廬　行在の侍

臣宿直のいほり。【一〇】六龍　天子の駕をいふ。【一一】瞻漢殿　漢殿は唐の宮殿をいふ、瞻とは仰ぎ見つつ之と別るるをいふ。【一二】萬騎　玄宗のおともの騎兵。【一三】略姚墟　略は巡行すること、「左傳」隱公五年の「吾將略地焉」の略と同じ。「帝王世紀」にいふ、「安原謂之嬀虛、或謂之姚墟」と。姚墟は卽ち嬀虛なり。嬀虛は今陝西省興安府の西北にありといふ。興安府は漢中府の東鄰なれば玄宗蜀に幸するとき漢中府を通過せしことを「姚墟を略す」といへるなり。【一四】玄朔　朔方をいふ、朔方は玄武の位なるゆゑ之を玄朔といふ。【一五】迴天步　天子の步をめぐらす、北より南へとひきかへす、以下四句肅宗についていふ。【一六】神都　長安をいふ。【一七】帝車　肅宗のおくるま。【一八】一戎　一戎衣の略、ひとたび戎衣を身につける、語は「尙書」武成篇にみゆ。【一九】鯨魚　已に見ゆ、死するをいふ。【二〇】通籍　已にみゆ、仕官してゐること。【二一】綰銅印　銅印は龜形の鈕の印、天子の璽は玉にてつくり螭虎の鈕をつける。この印を帶びる。【二二】差肩　兩人肩を互ひちがひにする。【二三】列鳳輿　鳳輿のそばに列する、鳳輿は蓋に鳳皇をつけたおこし。【二四】迎代邸　漢の惠帝の崩するやあとへ文帝代邸（代王のやしき）より迎へられて都に來り天子となる。【二五】貫朱虛　朱虛とは漢の朱虛侯劉章なり、章は漢の宗室にして呂氏の亂を平げ、文帝を迎立する功あり、帝位に卽くや章に封二千戶を益し黃金一千斤を賜ふ。李祕書は宗室なるにより之を劉章に比す、しかしまた優遇を被らず、故に「貫異り」といふ、起十四句は李祕書が兵亂の際扈從の功ありしをのぶ。【二六】寇盜　祿山の賊軍をいふ。【二七】歸順　兩京の賊降服せしをいふ。【二八】晏如　晏如に同じ、やすらかなるさま。【二九】不才　作者謙遜していふ。【三〇】同補袞　補袞は袞職の闕を補ふなり、李は右補闕、作者は左拾遺、竝に同じく天子の闕遺を補ふ官にあり。【三一】許牽裾　魏の文帝の時、河南の辛毗帝の裾を引きて諫む、牽裾は天子の裾をひきて諫むること。【三二】鴛鷺　をしどり、さぎ、文官の行列をいふ。【三三】雲閣　たかき閣、拾遺の職位をさす。【三四】騏驎　駿馬、李を比す。【三五】滯石渠　石渠は漢の閣の名、祕書を藏する所、未央宮の大殿の北に在りしもの。【三六】文園多病後　此句、仇氏は作者自己のこととせるも恐らくは李をいふならん、文園多病は司馬相如が故事、已に屢〻見ゆ。【三七】中散　嵇康、已に見ゆ、自ら比す。【三八】巫峽遠　遠とは都よりとほくはなれたるをいふ。【三九】臺榭　榭は樹ありて建てものなき築山。【四〇】楚宮　昔の楚王（襄王）の宮。【四一】非論故　故交を論ずるあひだがらの人にあらず、新相識のみなるをいふ。【四二】斯文　李が作る新しき詩文。【四三】起予　自己を啓發せしむるに足ること、語は「論語」に見ゆ、已に見ゆ。以上「寇盜」十四句は李との前後の離合を敍す。【四四】淸秋　臨別の時をいふ。【四五】別浦　分別せられたる水浦。【四六】紅蕖　蕖は「はす」の花。【四七】多旗幟　戰亂のためなり。【四八】經過　李のゆきすぐるところ。【四九】歎里閭　其の疲敝をなげく。【五〇】脣齒國　脣と齒との關係にある國、鄰境をさす、語は「左傳」僖五年にみゆ。【五一】羽毛書　羽檄をいふ、急を報ずる檄文には羽毛を附す。【五二】幕府　作者の自注によれば成都の杜鴻漸が幕府なり。【五三】借箸問　箸は「はし」はかりごとをいふ。問とは李にとふなり。【五四】山家　山中の家、作者の注によれば青城山の住居をさす、以上「淸秋」八句は李祕書が鴻漸の幕府に參せするをいふ。【五五】台星　三台の星、公卿にあたる、杜鴻漸をさす。【五六】入朝謁　中央に入りて朝廷にいで拜謁する。【五七】使節　劍南節度使たる杜鴻漸をさす。【五八】吹噓　あたたかき息をふきかける、李を推奬するをいふ。【五九】西蜀　西土たる蜀。【六〇】南翁　南方の老人、作者自らをいふ。【六一】愼始攄　攄は「のぶる」。【六二】對敭　對揚に同じ、「詩」江漢篇に「對揚王休」、鄭箋云ふ、「王の策命の辭に答へ、王の德美を稱揚す」と。作者の意は王命に奉答することを對揚といへるなり。【六三】抏士卒　抏は損也、挫也、耗也、損耗の義に從ふ、これ奉答の內容なり。【六四】乾沒　吏が人民のものを沒收すること。又一說にいふ、おもわく買ひをすること、おもわく買ひを爲して利を得るを乾といひ、利を失ふを沒といふ、と。相場をやるの類。【六五】費倉儲　倉儲は倉にたくはへたる糧食をいふ。乾沒を沒收の義とすれば沒收したる倉米を都餉が費すなり。相場の義とすれば相場の爲に倉米を用ふるなり。【六六】勳藉兵須用　此句及次の「功無」の句、明解なし、鄙見を用ふ。勳藉は勳勢の意、西蜀現在の武力の勢によるをいふ、兵須用とは兵を亂徒に對して用ふべきをいふ。【六七】功無謐忽諸　功無とは無功なり、杜鴻漸の管內の武將の功なきものをいふ、彼等功無くして地位を强占し居るものあり、謐忽諸の謐は「これ」謐をさす、忽は「ゆるがせにする」無功にして地位を占むるものに對しては長官たるもの禮法の上より決して之を等閑に附しおくべからず、宜しく之を嚴重にとりしまるべきなり、上句の用兵と同意をいふ。【六八】御鞍　御賜の鞍。【六九】金騕褭　金は鐙の金飾、騕褭は金喙黑身の神馬、是杜鴻漸に賜はるものをいふならん。【七〇】宮硯　宮中より下賜の硯、是李祕書に賜はるものをいふならん。【七一】玉蟾蜍　蟾蜍は三脚のひきがへる、玉にて作りし水滴をいふ。【七二】銀鉤合　銀鉤は字畫を形容

していふ、李祕書この硯を用ひて文字を書くなり、合は結合、字のくみたてらるること、此語は宮硯を承く。【七三】錦帕　にしきのくらおひ、鴻漸之を用ふ、此語は鞶囊を承く、以上「台星」十二句は杜李入朝の後の事をいふ。【七四】此行　李祕書の行をさす。【七五】不濟　濟は済時。【七六】良友　李をさす。【七七】相於　相與に親しむをいふ。【七八】去棹　棹の去らんとするとき。【七九】依顏色　依はよりそひしたしむ。【八〇】疾徐　水流のはやさ、ゆるさ。【八一】沈綿　病のおもるさま。【八二】井臼　水を汲み、米をうすつくこと、生計の事をいふ。【八三】倚薄　謝靈運が詩に拙疾相倚薄、還得靜者便とみゆ。倚薄は拙と疾とが相倚り相附くをいふ。【八四】乞米　米を我に與ふるなり、郭本にいふ、乞字、公自注去聲、と。音氣なり。【八五】佳客　李をさす。【八六】鈔詩　詩をかきうつす。【八七】小胥　こもの、小吏。【八八】杜陵　此句舊居を想ふ。【八九】灞水　長安縣南十里にあり。杜陵に出づ。【九〇】寒渚　渚は洲をいふ。【九一】莫話　齊鄉の人人にはなすなかれ。【九二】淸溪叟　淸溪は夔州の渓の淸流をいふ。【九三】蕭蕭　さびしきさま。【九四】白映枕　白は髮の白きこと、「此行」以下十二句は送別の情をいひ幷て自己の近況をのぶ。

【題義】祕書省の官李某が入朝せんとて夔州に立寄りしとき之に贈りて別れをつぐる詩なり。「舊唐書」杜鴻漸傳によれば鴻漸の入朝は大曆二年にあり。詩は大曆二年の作ならんか。仇氏は黃鶴に從ひて大曆元年七月の作となせり。

【詩意】君はそのむかし中書省の右補闕の官であり、時の天子（肅宗）の改元の初（至德元載）に天子のおともをしてその警蹕に從つた。その頃反逆の氣は玄宗皇帝の行在をしのぎ、不吉の星が侍臣の宿直の廬にまで下つた。玄宗の車駕は名ごりをしくも漢（唐）のごてんをみつつおでましになり、おともの萬騎は姚墟のあたりまで巡りあるくことになつた。また神都の人人が帝の車をお慕ひまをすによつて肅宗皇帝には朔方からその歩みをおかへしになり、一たび戎衣をおつけになり、馬に汗せしめられたるばかりに、天下の人民が死して魚となることを免れた。そのとき君は仕官して宮闕に名籍を通じて玉螭の御印の蟠るところに侍し、あるひは同僚と肩ちがひに鳳輿の傍にたちならんだ。この事たるやもとより昔漢の諸臣が文帝を代王の邸からお迎へして立てたのとは別であり、君の待遇されかたも朱虚侯が迎立の功を賞ぜられたときと喜びの情を異にしてをる。』やがて盜賊ども（安・史の徒）も歸順し、天地もやすらかにならうとした。そのときは不才なる自分も君とおなじく袞職を補ふ地位（左拾遺）にあり、詔を奉じて御裾を牽いてお諫めをすることを許された。それで自分はみだりに雲閣にのぼつて文官の鴛鷺の行列にくははり、君はまた麒麟の身を以て祕書として石渠の閣にとどこほることになつた。君は司馬相如が多病の故を以て孝文の園に退いたごとくひきこんでしまつたのち、自分は他の人人に對して嵇中散のごとく舊交も疎遠になつてしまつた。平生はもとより自分は君に對し十分すぎるほどの情意を抱いてゐたが、いま飄泊の身を以て君と再會しては哀れさがいひしれぬ。ここは風煙巫峽の遠方にあり、臺榭已に滅して楚宮虛しい場所なのである。ここで自分の目にふるるものはすべて故交を論ずるあひだがらの人ではないが、君だけは自分に新文を見せてくれ、それは他の人人にかかはらず予を啓發してくれるに足るものである。』今や淸らかな秋となつて碧の柳もしぼみ、支流の水涌では紅いはすの花が落ちちりつつある。このとき耳に入るたよりは軍隊の旗幟のことが多い、君の經過するところ必ず里閭の疲弊を見て歎息することであらう。脣齒の關係にある接

近した地方に戰が起つてをり、羽毛のついた檄文が飛んで軍務は急である。蜀の幕府はかつて君を煩はして之に處するはかりごとをおたづねした、君が山中に引きこもつて藥草のはたけを鋤きつつゐつたにも拘らず。』君の主人で三台の地位にある杜相公はさきに入朝謁見をされ、天子の使節として公は君を吹嘘された。西蜀の地もこれで災が永久にやむことになるであらう。南方にをるこの老人も憤りの心をはじめてのぶることができるであらう。君は勅命に對揚せらるるときには今日士卒が損耗してをることを申しあげられ、また官吏たるものがおもわくの相場などをやるために倉に藏してゐる軍糧を費してゐる等のことを申さるるであらう。自分の考では現在の勢によつて兵力を活用する必要があるとおもふ、また武將等が寸功なくして地位を强占して居るものがあるがその樣なものは禮法のうへから決して之をゆるがせにしてほうつておくべきものでないとおもふ。君が入朝されたならば天子は相公に御鞍を置いた金騕褭を賜はり、君には玉の蟾蜍の形をした宮硯を賜はるであらう。君は宮硯を拜舞してその硯で銀鉤のごとき文字をしるさるることであらう、また相公は恩波に浴してその馬に錦の帕をしきて騎らるることであらう。』君のこのたびの行は時世をすくはぬわけではない（濟ふためなので大事件であるとの意）けれども自分の私情からいへば君は我が良友であつて昔から相親しんだあひだがらである。だから君の舟棹の去らんとするや自然じぶんは君の顏色によりそうてそれをなつかしみ、君の舟が流れにそうてあるひははやくあるひはしづかにこぎゆくであらうなどとそのゆくさきの樣子をおもひうかべてみる。自分は長き病にしづみ、生計の事につかれ、生計の拙と疾病とくつつきあうて樵夫漁人のごとくまづしくくらしてをる。ために君の樣な貴客を煩はして米を給與してもらひ、吾が作詩も之を見せるに足る人物もなくいたづらに小吏などにかつてにそれをうつしとらせてをるくらゐのことだ。だが君が長安にゆきつかるるとき、じぶんの舊鄕たる杜陵に夕日がななめに照らすとき、また潏水の流れが寒洲を帶びてながるるところ、人もし吾が近況を問ふものがあるとても、吾がここの淸溪にうつす髮のけが近來はうすく風に吹かれて白さが梳の齒に映じてゐるなどとは決して話してくださるな。』

中夜

中夜江山靜。(一)危樓(二)望北辰。
長爲萬里客。有愧百年身。
(三)故國風雲氣。(四)高堂戰伐塵。
(五)胡雛負(六)恩澤。嗟爾(七)太平人。

中夜

中夜江山靜なり、危樓北辰を望む。
長く萬里の客と爲る、愧づる有り百年の身。
故國風雲の氣、高堂戰伐の塵。
胡雛恩澤に負く、嗟爾太平の人。

【字解】【一】危樓　夔州寓居の西閣をいふ。【二】望北辰　北辰は北極星、長安の方位なり。【三】故國　長安。【四】高堂

富貴の家の華堂をいふ。【五】胡雛　張九齡、安祿山を見て幽州を亂る者は此の胡雛なりといへり、胡雛は祿山をさす。【六】負恩澤　唐の天子の恩澤にそむく。【七】太平人　太平に逢へる人民。

【題義】夜中の感懷をのべた詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】夜中に江も山も靜まりかへつてゐる、このとき自分は高い樓で北辰星のある方をながめる。自分はいつまでも萬里の客となつてをる、百年の壽命しかもたぬ身に於てはづかしくおもふ。世が亂れてゐるため故國には風雲の氣がみなぎり、富貴の家も戰伐の塵にまみれてゐる。その源をたづねるとあの胡雛めが恩をわすれて鬧をしたためにほかならぬ、かつて太平をたのしんだ人民こそはまことにあはれむべき次第である。

垂白

(一)垂白(二)馮唐老。清秋(三)宋玉悲。
江喧長少睡。(四)樓迴獨(五)移時。
多難身何補。(六)無家(七)病不辭。
甘從(八)千日醉。(九)未許(一〇)七哀詩。

垂白

垂白馮唐老い、清秋宋玉悲む。
江喧しくして長く睡り少く、樓迴にして獨り時を移す。
多難身何をか補はむ、無家病むも辭せず。
甘んじて從ふ千日の醉、未だ許さず七哀の詩。

【字解】【一】垂白　白髮を垂るるをいふ。【二】馮唐　漢の馮唐白首にして郎官たり。作者老いて郎となるにより以て自ら比す。【三】宋玉　周末、楚の宋玉「九辯」を作り秋を悲しむ、又以て自ら比す。【四】樓迴　迴とは蓋し江山をとほく見やるをいふ。【五】移時　時間を經過させる。【六】無家　通常妻なきを無家といふ、作者今妻子と共に居る、故にこの無家は離家の意にて故鄕の家を失ひてある義として用ひたり。【七】病不辭　病はいとふべきものなるに辭せずといふは激語なり。【八】千日醉　中山に酒あり、之を飲むもの一醉すれば千日、劉玄石之を飲みて千日にして醒む、作者その如くなるなり。【九】未許　賦するを許さざるなり。【一〇】七哀詩　八哀詩の題下の注に於て解きおけり。但しここは王粲の七哀詩のことをいへるならん、王粲亂にあひ荊蠻にゆくとて新詩を賦す、作者も宜しくかかる詩を賦すべきに許さずといふは亦激語にして詩を賦するよりも醉にひたりてくらさんといふなり。

【題義】詩の起二字を切りとりて題とす、白首の感をのべたる詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】白髮を垂れて馮唐も老いた。淸秋となつて宋玉も悲しむ（自分は馮唐であり宋玉である）。自分は江水の音がやかましいのでいつも睡ることがすくなく、樓がかけはなれてゐるのでそとをみわたしてただひとり時間を經過させてゐる。天下多難のをりにこの身は何も世にためになることをしでかさぬ、故鄕の家を失つた身にとつては病氣になつたところがかまはぬ。自分はむしろ喜んで千日醉ひつづけることをやらう、七哀詩を賦するなどはまださせぬつもりである。

(一)中宵

(二)西閣(三)百尋餘。中宵步(四)綺疏。
(五)飛星過水白。(六)落月動(七)沙虛。

中宵

西閣百尋餘、中宵綺疏に步す。
飛星過ぎて水白く、落月動きて沙虛し。

(八)擇木知幽鳥。潛波想巨魚。　　擇木幽鳥を知る、潛波巨魚を想ふ。

親朋滿(九)天地。兵(一〇)甲少來(一一)書。　　親朋天地に滿つ、兵甲に來書少し。

【字解】【一】中宵　黄昏以後をいふ。【二】西閣　夔州寓居の西閣。【三】百尋　尋は八尺。【四】綺疏　あやぎぬの如くすかし隙りにしたる格子窗。【五】飛星二句　上三字下二字の句としてみるべし、飛星過とは流星が水面におちてすぐるなり、或は曰く飛星は流星と同じからず、下方より上方に向ひて走る星なりと。【六】落月動　落ちかかる月の光がてりそふをいふ。【七】沙虚　虚とは沙面の廣く横はるさまをいふ。【八】擇木二句　暗に自己をたとふ。【九】滿天地　多くあるをいふ。【一〇】兵甲　亂をいふ。【一一】來書　こちらへくるてがみ。

【題義】よひの口の感をのべた詩。大暦元年夔州にての作。

【詩意】自分の居る西閣は百尋あまりの高さの處にある、よひにそこのすかしばりにした窗のあたりをぶらついてみる。と流星がとほつて水面が白く見え、空虚にみえる沙原に落ちかかる月の光がさしてゐる。木深く棲む鳥がどの樹にとまらうかとまごついてゐるのもわかるし、巨大な魚もはやこつそり波間に影をひそめたことと想像される。あゝこのをり自分の親戚朋友は天地に滿つるほどどこにもあるのだが、兵亂のあるためにどこからも來る手紙はめつたにない。

不寐(一)　　不寐

(二)瞿唐夜水黑。(三)城內改(四)更籌。　　瞿唐夜水黑く、城內更籌改まる。

(五)翳翳月沈霧。輝輝星近樓。　　翳翳として月霧に沈み、輝輝として星樓に近し。

氣衰甘少寐。心弱恨容(六)愁。　　氣衰へて寐ぬること少きに甘んず、心弱くして愁を容るるを恨む。

(七)多壘滿山谷。(八)桃源何處求。　　多壘山谷に滿つ、桃源何の處にか求めむ。

【字解】【一】不寐　いねられぬこと。【二】瞿唐　峽名。【三】城內　夔州城內。【四】改更籌　更籌は漏刻の刻限をしらせる針、改とはかはる、卽ち時刻のうつること。【五】翳翳　くらくかげるさま。【六】容愁　心つよければ愁をうけつけぬが弱いために愁を容れる、愁が心のなかへいりこむをいふ。【七】多壘　多くのとりで。四郊多壘、卿大夫之恥也と「禮記」曲禮篇にみゆ。【八】桃源　武陵の桃源の仙境。

【題義】いねられぬをりの感をのべた詩。大暦元年夔州にての作。

【詩意】瞿唐峽のあたり夜の水の色黑く、城內では漏刻の針もいくたびかかはつた。くらくかげつて月は霧のなかに沈んでしまひ、きらきらと星の光が樓ちかくかがやきわたる。氣力が衰へては寐られぬことは平氣であるが、愁なんどいふものをだまつていれておくとは自分の心の弱さが恨めしくおもはれる。あたりの山や谷は壘だらけだ。どこへいつたら桃源の樣な仙境が求められようか。

送十(一)五弟侍御使(二)蜀　　十五弟侍御が蜀に使するを送る

喜弟文章進。添余別(三)興牽。　　喜ぶ弟が文章の進むを、添ふ余が別興の牽くを。

數杯（四）巫峽酒、百丈（五）內江（六）船。　數杯巫峽の酒、百丈內江の船。
未息（七）豺狼鬭、空催（八）犬馬年。　未だ息まず豺狼の鬭ひ、空しく催す犬馬の年。
（九）歸朝多（一〇）便道、（一一）搏擊望秋天。　歸朝便道多し、搏擊秋天を望む。

【字解】【一】十五弟侍御　排行十五の從弟たる侍御史某。【二】使蜀　蜀は成都。【三】別興　別れの感興。【四】巫峽酒　本處の酒をいふ。【五】百丈　竹索なり。【六】內江船　侍御のゆくさきについていふ。內江は成都の流江卽ち錦江をいふ。清一統志に曰く、元史河渠志に沱諸を以て外江とし郫江を內江とす、近志には郫江を外江とし流江を內江とす、蓋し成都一府よりして言へば郫は內江にして沱諸は外江なるも、成都一城よりして言へば流江は內江にして郫は又外江なり、と。ここは成都の城を主としていふものにて流江卽ち錦江をさして內江といへり。【七】豺狼鬭　成都崔旰等の爭ひをいふ。【八】犬馬年　犬馬とは謙遜の辭、自己の年齡をいふ。【九】歸朝　侍御が朝廷へかへること。【一〇】便道　間道なり。【一一】搏擊　猛鳥の鳥獸をうつこと、侍御史は非違を糾彈す。

【題義】侍御史の官にある從弟某が蜀の成都へ使にゆくのを送つた詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】弟の文章がめつきり進んだことは喜ばしい。そのため自分の別れの感興をよけいにひくものがある。ここで二三杯の巫峽の酒をくみかはしておまへは竹索の船を內江までやることである。豺狼のたたかひがやまぬのに、犬馬の齡だけはいたづらにはやくたつ。おまへは朝廷へかへるのにいろいろのぬけ道があつてすぐゆけるであらう。自分はおまへが秋天に狐兎をうつであらうとそれをながめてゐる。

江月

（一）江月（二）光於水、高樓（三）思殺人。　江月水よりも光る、高樓人を思殺す。
天邊長作客、老去一霑巾。　天邊長く客と作る、老い去つて一に巾を霑す。
玉露（四）溥清影、銀（五）河（六）沒半輪。　玉露清影に溥たり、銀河に半輪沒す。
誰家（七）挑錦字、（八）燭滅（九）翠眉顰。　誰が家か錦字を挑して、燭滅して翠眉顰むや。

【字解】【一】江月　江をてらす月。【二】光於水　水面已に白し、月は更にそれよりも白し。【三】思殺人　思殺は非常に甚しく物思ひせしむること、人とは自己をさす。【四】溥清影　溥はまろくかたまつてをるさま、或は團に作る、團ならば月が球形をなすこと、清影は月の淸き光。【五】銀河　あまのがは。【六】沒半輪　半輪は月の形の半分をいふ。【七】挑錦字　晉の竇滔が妻蘇蕙、字は若蘭、回文の詩三百四十字を錦に織りこみて滔に贈る、錦字とはかかる錦の字をいふ、挑は「かかぐる」、刺繡の針にて下方より錦面にほじりあぐるをいふ。【八】燭滅　夜深けのためならん。【九】翠眉顰　かき眉の眉根にしわをよせる、愁ひのさまなり。

【題義】江上の月をみて感をのべたる詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】江上の月が水よりひかつてみえる、これを高樓でながめると非常に我をしてものおもひをさせる。自分は天のはてでいつも客となつてをる、としが老いゆくと全く淚に手巾がぬれてしまふ。淸き月影のまへに玉の露はまどかにたたへ、銀河のなかに半輪の姿が沒してしまつた。いまごろはだれの家で留守居の婦人が錦字を繡ひとる針をつきさしながら、燭のきえた處で眉根にしわをよせてゐる

ことであらうか。

月圓

孤月當樓滿。寒江動夜扉。
委波金不定。照席綺逾依。
未缺空山靜。高懸列宿稀。
故園松桂發。萬里共清輝。

月圓

孤月樓に當つて滿つ、寒江夜扉に動く。
波に委して金定まらず、席を照らして綺逾〻依る。
未だ缺けず空山靜に、高く懸りて列宿稀なり。
故園松桂發かむ、萬里共に清輝。

【字解】【一】當樓滿　滿とは月光の圓滿なるをいふ。【二】動夜扉　動とは月をうけたる江水の光りがうごくをいふ。【三】委波金不定　委波は月光が波のまにまにまかせてゆらるるなり、金不定の金は金波の金なり、波にゆらるるゆゑ波上の金色安定せざるなり。【四】照席綺逾依　照席はおなじく月光が席をてらすなり、綺逾依の綺は綺席の綺なり、綺はあやぎぬ、月光席をてらすにより綺席の綺と月光のうつくしさとがいよいよ依りあふなり。【五】未缺　月滿ちてかくることなし。【六】故園　長安をいふ。【七】松桂發　發は桂花のひらくをいふ、松桂發と松の字をそへたるは造語の粗漏ならん。【八】萬里　夔州と長安との距離をいふ。

【題義】滿月の圓きをみてよめる詩。大曆元年夔州西閣にての作。

【詩意】樓のまうへにあたつてただ一つの月が圓滿に出てをり、それをうけて寒江の光が夜の扉にうつつてぎらぎらうごく。光が波のまにまにゆられるから波の金色もおのづとうごき、席を照らしてくるから席のあやと月光のあやとがいよいよよりあふ。こよひの月は一分も缺けずにさびしい山は靜まりかへつてをり、またそら高く懸つて星宿のならんでゐるのも稀な樣にみえる。いまごろ故鄉では桂の花がさきだしたであらうが、かしことここと萬里をへだてておなじ樣にこの清らかな輝きを浴みつつあるのである。

夜

露下天高秋水清。
空山獨夜旅魂驚。
疎燈自照孤帆宿。
新月猶懸雙杵鳴。
南菊再逢人臥病。
北書不至雁無情。
步簷倚杖看牛斗。
銀漢遙應接鳳城。

夜

露下り天高くして秋水清し、
空山獨夜旅魂驚く。
疎燈自ら照らして孤帆宿す、
新月猶ほ懸りて雙杵鳴る。
南菊に再び逢ひて人病に臥す、
北書至らず雁情無し。
步簷杖に倚りて牛斗を看る、
銀漢遙に應に鳳城に接するなるべし。

【字解】【一】疎燈　燈の光まばらにちるをいふ。【二】自照　燈火みづからをてらす、他を遠くてらさざるをいふ。【三】新月　新月ははやく落つべきものなるにいまなほ落ちずに天にかかれるをいふ。【四】雙杵鳴　雙杵とは二つのきれ。衣を擣つには兩人對立して杵をとること米を舂くがごとくすといふ、これは陸上のものをいふ。【五】南菊再逢　南國の菊花の開くことに二回であふなり。雲安と夔州とにて各一回花にあふをいふ。【六】人臥病　人とは自己をさす。【七】北書　北方よりの書信、故鄉のたよりをいふ。【八】雁無情　雁はてがみな

傳へるものとせらる。【九】歩簷　楊愼の說に歩簷は「大招」の歩櫚なりとし、歩櫚は長砌なりとときたり。上林賦の李善の注には歩櫚は歩廊なりとす、避歩する廊下なり。但だ「簷に歩し」と文字どほりよむも通ず。【一〇】牛斗　牽牛星と南斗星。銀漢はその南端を斗傍におきて北にわたりて横はるといへり。【一一】銀漢　あまのがは。【一二】鳳城　長安の城。

【題義】秋夜の景をみしときの感をのべた詩。仇氏は大暦元年九月初、夔州の西閣にての作ならんといへり。

【詩意】露はくだり天は高く、秋の江水はすんでゐる。このときさびしき山で夜ただひとりゐると旅の心が驚かされる。水面にはひとつの帆かけぶねが宿して、燈火がまばらな光をじぶん自體に照らしかけてをるし、陸の方にはまだ新月が懸つて二人でうちおろす擣衣の杵のおとが鳴つてゐる。自分は病にふしつつ二度南方の菊の花にであうた。それに北方故鄕からのたよりはすこしもこちらへこぬとは雁もつれなきものである。歩廊のあたりで杖によりながら牛斗の星をながめると銀漢がずつと北にひきはへてをるが、それはさだめしはるかに長安の丹鳳城にまでつゞいてゐるのであらう。（ますますふるさとこひしくおもはれる。）

草閣

草閣臨無地（一）（二）、柴扉永不關（三）。
魚龍迴夜水（四）、星月動秋山（五）。
久露晴初濕（六）（七）、高雲薄未還（八）。
泛舟慚小婦（九）（一〇）、飄泊損紅顏（一一）。

草閣

草閣無地に臨む、柴扉永く關せず。
魚龍夜水に迴り、星月秋山に動く。
久露晴れて初めて濕ふ、高雲薄くして未だ還らず。
泛舟慚づ小婦の、飄泊して紅顏を損するに。

【字解】【一】草閣　茅ぶきの閣、次篇の江邊閣と同じく、西閣とは異なるものなり。【二】臨無地　無地とは地のなきところ、水面をいふ、次篇に見ゆるごとくこの閣は水門のほとりに設けられたるなり、故に無地に臨むといふ。【三】柴扉　柴であみたるとびら。【四】迴夜水　迴とは魚龍が回伏して蟄するなり。【五】動秋山　動とは星月の光りが照らしかけるをいふ。【六】久露　長き時間をへたるつゆ。【七】晴初濕　天晴れたるときは露のこほることおそし、いま時久しくなりたればはじめてうるほふに至れるなり。【八】薄未還　未還とは中途で消えうせるをいふ。【九】泛舟　この二字は慚の字の下にあるがごとくみるべし。【一〇】慚小婦　慚は作者がはづるなり、次篇に無力正乾坤とあるごとく民を安んぜしむる能はざることをはづるならんか。慚の字は下句までにかかる。小婦は泛舟の小婦にて女性の船人なり。【一一】飄泊損紅顏　小婦のさまをいふ、仇氏は作者が飄泊して顏を損すととく、今從はず。

【題義】水門のそばに設けたる草閣に於ての感をのべた詩。大暦元年夔州にての作。

【詩意】この草閣はすこしも土地のない水ばかりのところにさしかかつてをり、柴の扉はいつもとざしたこともない。（いまここでながめると）魚や龍は夜の水にめぐつて穴へもぐりこみ、星や月の光が秋の山に照らしかけてをる。天が晴れてゐるのでおく露も長い時間たつて初めて濕りだすし、高く浮び去つた雲は薄いので立ち消えしてかへつてこぬ。飄泊のために紅顏を損じてゐる小婦が舟を泛べてをるが、自分の樣な無用のものはそれをみるとはづかしくてならぬ。

宿江邊閣（一）

江邊の閣に宿す

瞑色延（二）山徑、高齋（三）次（四）水門。
瞑色山徑に延ぶ、高齋水門に次る。

薄（五）雲巖際宿、孤月浪中翻。
薄雲巖際に宿す、孤月浪中に翻る。

鸛（六）鶴追（七）飛靜、豺（八）狼得食喧。
鸛鶴追飛靜に、豺狼得食喧し。

不眠憂戰伐、無力正乾坤。
眠らずして戰伐を憂ふ、力の乾坤を正す無し。

【字解】【一】江邊閣　これは前篇の草閣と同じ閣なり。作者或は暑熱をいとひてかかる閣を設けしものか。【二】延山徑　延とは瞑色がのびてひろがりゆくをいふ。【三】高齋　高き地にある書齋。【四】次水門　次は「やどる」なり、水門は蓋し水關の門なり。【五】薄雲巖際宿、孤月浪中翻　「薄雲巖際出、初月波中上」は梁の何遜が詩句なり、杜詩は僅にその數字を易へ用ひたり。【六】鸛　かうづる。【七】追飛　前後相追うてとぶ。【八】豺狼　暗に盜賊をたとふ。

【題義】江のほとりにある草閣にとまりしことをのべた詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】山の徑までくらがりの色がひろがつたとき、自分は高き書齋に於て水門のそばにやどりとまる。すると巖のきはに薄い雲がとまつてをり、一つの月影が浪のあひだにひるがへりつつある。鸛や鶴はしづかに相追うて飛び、豺狼は食物を得んとてやかましくさわいでゐる。自分は夜がふけても眠らずに世間に戰伐がたえぬことをしんぱいしてゐるが、遺憾ながら天地のまがつたのを正すだけの力をもたぬのである。なさけないことだ。

吹笛

吹笛

吹笛秋山風月清。
笛を吹く秋山風月の清きに、

誰家巧作（一）斷腸聲。
誰が家か巧に斷腸の聲を作す。

風（二）飄律（三）呂相（四）和切。
風は律呂を飄して相和すること切に、

月（五）傍關山幾處明。
月は關山に傍うて幾處か明なる。

胡（六）騎中宵堪北走、
胡騎中宵に北走するに堪へたり、

武（七）陵一曲想南征。
武陵一曲南征を想ふ。

故（八）園楊（九）柳今搖落。
故園の楊柳は今搖落す、

何（一〇）得愁（一一）中卻盡生。
何ぞ愁中に卻つて盡く生ずることを得るや。

【字解】【一】斷腸聲　聽く者をして腸をたたしむるごときあはれなるこゑ。【二】風飄二句　此の二句は第一句の風月を分ちて說きたり。【三】律呂　律の調、呂の調。【四】相和切　切とは悽切、ひしひしと身にせまる樣なものがなしさ。【五】月傍關山　傍とは「そふ」なり。【六】胡騎中宵堪北走　晉の劉琨が故事。「世說」にいふ、劉琨幷州の刺史たりしとき、胡騎之を圍むこと數重、琨夕に月に乘じ樓に登りて淸嘯す、賊之を聞きて悽然として長歎す、琨中夜に胡笳を奏す、賊皆涕を流して人ごとに懷土の思ひあり、曉に向つて又之を吹くに、賊竝に圍みをすてて奔り走ると。この笛聲をききてはあまりにあはれにて胡騎とてもよなかに北へ走らしむるにたへたりといふなり。仇氏はこの胡騎は永泰元年に吐蕃が回紇とともに入寇せしことをあてていひしものなるべしといへり。【七】武陵一曲想南征　武陵一曲とは武陵曲即ち武溪深の歌をさす、後漢の馬援南蠻を征せしとき、門生爰寄生といふもの善く笛を吹く、援、歌を作り以て之を和す、名づけて武溪深といふ、其辭に曰く、「嗟哉武溪一何深、飛鳥不度、走獸不敢臨、嗟哉武溪多毒淫」と。【八】故園　長安をさす。【九】楊柳今搖落　やなぎの葉が今は風にゆられておつる。【一〇】何得　怪みていふ辭なり。【一一】愁中卻盡生　卻の字も

と曲に作る、王洙（原叔）老杜の詩藁を得たるに卻に作りありたりと。笛の曲に折楊柳あり、楊柳の枝を折りとることなり、其實を翻して用ひたり、故園の楊柳は落つるといふに、何故なればこの笛聲の楊柳は、吾が愁中に於て生じて折らるることを得るやといふなり。

【題義】詩の句首の二字を切りとりて題とす。笛聲のあはれなるをききてよめる詩。大曆元年夔州にての作か。

【詩意】秋の山に風月の清きころしも笛の音を吹きすさぶものがある。あの樣に巧みに人の腸をたためる樣な聲をださせてゐるのはどの家かしらぬ。風は律呂の調をひるがへさせて二調の和ぎはひしと人にせまりくる。月は關山にそうて照りかがやいてゐるがどこどこがくまなく明るくなつてゐるのだらうか。この音をきいては胡騎もよなかに北ににげだすに十分であらう、（劉琨の時のごとく）。また馬援がその音におはせて武溪深の曲をうたうたといふ南蠻征伐の當時をもおもひだす。いま故鄉の楊柳は秋風にゆられ落つるといふのに、なんで笛曲では吾が愁のなかに於てその楊柳が卻つて生じ得るのであらうか。

西閣雨望

（一）樓雨霑（二）雲幔、山寒（三）著水城。

（四）逕添沙面出、（五）湍減石稜生。

（六）菊蕊（七）淒疎放、松林（八）駐遠情。

（九）滂沱（一〇）朱檻濕、（一一）萬慮（一二）倚簷楹。

西閣の雨望

樓雨雲幔を霑す、山寒水城に著く。

逕添へられて沙面出で、湍減じて石稜生す。

菊蕊淒として疎放、松林遠情を駐む。

滂沱朱檻濕ふ、萬慮簷楹に倚る。

【字解】【一】樓雨　樓にそそぐ雨。【二】雲幔　雲の居るまく、閣高きゆゑ雲あり。【三】著水城　著は附著、到りて就くをいふ、水城は水邊の城、夔州の城をさす。【四】逕添沙面出　逕添はこみちがこれまでよりも多く增して跡づけられたるをいふ、逕は水汲む人のとほるためできるなり。沙面出とはこれまで水に沒したるところがあらはれいづるをいふ、沙面出の結果が逕添となれるなり。【五】湍減石稜生　湍減はたぎりし水の量のへること。石稜生は巖石のかどがあらはれでること。此句は湍減の結果石稜の生ずるをいふ。【六】菊蕊　菊の花。【七】淒疎放　淒とは氣色のつめたきさま、疎放とはすこしく開くをいふ。【八】駐遠情　此語明解を得ず、仇氏は遠く情致をとどむる意とせり、雨、松のみどりをこめて風情あるさまをいふと。暫く之に從ふ。【九】滂沱　雨のさかんにふるさま。【一〇】朱檻　朱にぬりし樓のてすり。【一一】萬慮　多くのしんぱいをもつて。【一二】簷楹　のきのちかきはしら。

【題義】西閣にての雨中のながめをのべたる詩。本篇より「西閣夜」に至る五首は皆大曆元年の作。

【詩意】樓にふり注ぐ雨は雲の居る高いまんまくをうるほし、山の寒さが水邊の城にも到りつく。江邊に沙面があらはれ出てそれがため水汲む人のゆきかふこみちがよけいにまし、また湍水が減つたために巖石のとがりめが見えだしてきた。つめたい空氣のなかに菊の花はすこしひらいてゐるし、松林の翠は遠く一種の風情をとどめてをる。盛んにふる雨のために朱檻までしめつてしまつた。自分はさまざまのしんぱいをもちながら簷ちかき柱に倚つて雨中のさまをながめてゐる。

西閣三度期大昌(一)(二)嚴明府(三)同宿不到

西閣三度大昌の嚴明府の同宿するを期するに到らず

問(四)子能來宿(五)。今疑索(六)故要。　子に問へば能く來り宿せむといふ、今疑ふ故要を索むるを。

匣琴(七)虛夜夜(八)。手板(九)自朝朝。　匣琴虛しく夜夜、手板自から朝朝。

金吼(一〇)霜鐘徹(一一)。花催(一二)蠟炬銷(一三)。　金吼えて霜鐘徹し、花催して蠟炬銷す。

早鳬(一四)江檻底(一五)。雙影(一六)謾飄颻(一七)。　早鳬江檻の底、雙影謾に飄颻たり。

【字解】【一】期　時をきめて待ちあはす。【二】大昌　縣の名、巫山縣の一部なり。【三】嚴明府　縣令嚴某、明府とは縣令に對する敬稱。【四】問子　子は嚴をさす。【五】能來宿　こちらへ來て宿することができるといふ。【六】索故要　索とは先方がもとむること、故要は固邀なり、是非にとかたくむかへること。【七】匣琴　はこのなかの琴、作者嚴の來るを待ちて彈ぜんとするものなり。【八】虛夜夜　虛はむなしく、いたづらにの意、毎夜琴をとりだすこと無くして已むなり。【九】手板　笏なり、官吏の執るもの、これは嚴についていふ。縣令なれば毎朝之を手にとる、公務の忙しきをいふ。【一〇】金吼　金とは卽ち下の鐘をさす。【一一】霜鐘徹　霜の晨に鳴る鐘の音がよくとほる。嚴を待ちて曉に至るをいふ。【一二】花催　花は蠟そくの火花をいふ、催とは次第にとぼるをいふ。【一三】蠟炬銷　らふそくの火がもえてなくなる。夜おそくまで嚴を待つをいふ。【一四】早鳬　あさがたの「かも」。【一五】江檻底　江に面したてすりのした。【一六】雙影　ふたつの鳬のかげ。實物の鳬の「かも」と舃の鳬と被れひきかけて用ひたり。舃は後漢の王喬が故事、喬地方官にやられしときになほ朝廷へ來る、來るときには二つの鳬が飛び來る。已に屢〻みゆ。【一七】謾飄颻　飄颻は鳬の泛ぶ貌、謾はみだりに、縣令の化身たる舃の鳬ならばよろしきも、實物の鳬だけが飛んでゐるのでは嚴明府を待つにかひなし、故に「謾に」といふ。

【題義】大昌縣の縣令嚴君が自分の宅へ來ていつしよにとまると約束したので、西閣で三たびまで期限をきめて待つたがとうとうこなかつた。それでよんだ詩。

【詩意】あなたにおたづねしたときこちらへ來てとまれるとのおはなしであつたが、自分は今はなんであなたがわたしにかくまで強ひておむかへをすることを索めらるるのであるかを疑ふのである。わたしのはこのなかの琴はまいばん待ちぼけをくはされてゐる。之に反してあなたは毎朝手板を執つて公務に忙しくしてをられる。わたしはあなたを待つため、夜は蠟燭の火の花がつぎつぎもえて無くなるまで待ちとほして、つひに朝は霜にひびく鐘の音が金聲を吼えたたすころになる。朝みると江檻のしたであなたにはあらぬ鳬の影が二つふはりふはりといたづらに泛んでゐるばかりである。

西閣　二首

西閣　二首

巫山小搖落。碧色見松林。　巫山小しく搖落す、碧色松林を見る。

百鳥各相命(一)。孤雲無自心(二)。　百鳥各〻相命す、孤雲自心無し。

層軒俯江壁。要路亦高深(三)。　層軒江壁に俯す、要路も亦た高深なり。

朱紱(四)猶紗帽(五)。新詩近玉琴(六)。　朱紱猶は紗帽、新詩玉琴に近づく。

功名不早立。衰疾謝知音。　功名早く立たず、衰疾知音を謝す。

哀世非王粲。終然學楚吟。　哀世王粲に非ざるも、終然楚吟を學ぶ。

【字解】【一】相命　命は名なり、名を呼ぶをいふ、鳥のお互に呼びかはすをいふ。【二】自心　自我の心。【三】高深　層壁にそへる路なれば要路なれども高深の地に在り、深とは層軒より見おろしてふかく底にみゆるをいふ。【四】朱紱　朱色の革前垂れ。作者自ら緋衣をさしていふものなること已に前に屢〻いへり。【五】紗帽　紗にて作りし帽。隱居のときの冠なり。【六】近玉琴　自ら玉琴にちかづくをいふ、琴を彈じて新詩をうたはんとてなり。【七】衰疾　老衰、疾病。【八】謝知音　知音の人を辭謝して之に遠ざかる。【九】哀世非王粲　魏の王粲長安の亂を避けて荊州の劉表に依る、七哀詩をつくる。又登樓賦をつくりて故郷を思ふ情をのべていふ、鍾儀幽而楚奏、莊舃顯而越吟、と。作者世を哀むは王粲に非ざれども思鄕の情は存するをいふなり。【一〇】終然　つひに。【一一】學楚吟　楚吟は詳しく言へば楚地にての越吟の意なり。作者の五言律「卜居」に吟同楚執珪とある楚吟とおなじ。昔越の人莊舃といふもの楚に仕へて執珪（楚の貴爵なり）となる、其の病むや越を思ひて越聲をなせしとの故事あり。越吟は越聲にて呻吟するなり、楚吟は楚にて越聲の呻吟をなすなり。

【題義】西閣にての作。久しくここに留まるを歎せり。

【詩意】氣候の暖かい巫山もすこしく樹の葉がゆられ落ちて松林が碧色にみえる樣になつた。さまざまの鳥はたがひに呼びかはしてゐるが、ひとひらの雲は無心にうかんでゐる。高いのきばから江岸の絕壁をみおろすと要路も高深の場處についてをる。自分は朱紱を著る身分でありながらまだ隱者のかぶる紗帽をかぶつてをり、あたらしく詩をつくれば玉琴にちかよつてそれをうたふたりしてをる。なせ自分はもつと早くに功名を立て得なかつたのか、今では衰疾のために知己の人人とも交りを斷つてをる樣のことである、さうして世を哀むこと王粲のたぐひではないが、故鄕を思ふことはおなじであり、つまりは莊舃のごとく越吟を學びつつあるのである。

〔二〕

懶心似江水。日夜向滄洲。　懶心江水に似たり、日夜滄洲に向ふ。

不道含香賤。其如鑷白休。　道はず含香賤しと、其れ鑷白休するを如何にせむ。

經過凋碧柳。蕭瑟倚朱樓。　經過碧柳凋む、蕭瑟朱樓に倚る。

畢娶何時竟。消中得自由。　畢娶何の時か竟らむ、消中に自由を得。

豪華看古往。服食寄冥搜。　豪華古往を看る、服食冥搜に寄せむ。

詩盡人間興。兼須入海求。　詩は盡くす人間の興、兼ねて須らく海に入りて求むべし。

【字解】【一】懶心似江水　懶心はものうく、ぶしやうの心、似江水とは懶の似たるをいふに非ず、動流して已まざる點の似たるをいふ。【二】滄洲　海上の仙境。【三】不道　言はず。【四】含香賤　含香は尙書郎の職をいふ、尙書郎は闕を握り雞舌香を含みて事を奏す、作者現に郎官たり。【五】其如　如は如之何の略。【六】鑷白休　鑷白は白髮をはさみきるなり、人の老境をいふ。休るは百事休すること。【七】經過　時日のたつこと。【八】朱樓　朱にてぬりたる樓、西閣をさす、前にも綺疏、綺席、朱檻、等あ

り、作者の寓居せる西閣はうつくしき建築物なりしとみゆ。【九】畢娶　男女の嫁娶を爲し了ること、後漢の向子平が故事、向子平男女の嫁娶を畢り家事に關係せず五嶽に遊び去る。【一〇】竟　をはる。【一一】消中　消渇病の中症なるもの、この病に上中下の三症ありと。【一二】得自由　病あるがために自由なることを得。【一三】豪華　豪奢榮華。【一四】看古往　古往の迹を看るとは之を看れば皆悉に消滅に歸するをいふ。【一五】服食　藥を服用し滋養物を食すること、長生の方なり。【一六】寄冥搜　身を冥搜に寄托するなり、冥搜とは幽奇の境地をさぐり求むること、語は天台山賦序にみゆ。

【題義】この第二首は西閣より去りて仙境に入りたしとの意をのべたり。

【詩意】自分のものうき心もちの動いてやまぬことは江水が日夜流れて滄洲に向ひつつあるのと似てゐる。自分は雞舌香を含んで事を天子に奏上する尚書郎の職が賤しいとはいはぬが、白髮をはさみでつまねばならぬ老境となつて萬事おしまひになつたことをどうしようか。(いまさらしかたがない。)時がうつつて碧の柳もしぼんだ。このをりさびしくじぶんは朱樓に倚りかかつてながめる。向子平の樣に男女の嫁娶を畢るのはいつはたすことができよう。消中の病あるためにわづかに自由を得てをるのである。古來の豪華の迹を看るに皆消滅してゐるのである、自分は豪華は羨む所に非ず、藥餌を服食して身を冥搜に托したいとおもふ。だから已に人間の詩興をうたひつくしたのちは更に海境にまで入つてそれを求むべきである。じぶんは海上の仙山に詩興を求めようとおもふ。

西閣夜

西閣の夜

（一）恍惚寒江暮。（二）逶迤白霧昏。
（三）山虛（四）風落石。樓靜（五）月侵門。
（六）擊柝（七）可憐子。（八）無衣何處邨。
時危（九）關百慮。盜賊（一〇）爾猶存。

恍惚たり寒江の暮、逶迤として白霧昏し。
山虛しくして風石を落し、樓靜にして月門を侵す。
擊柝可憐の子、無衣何處の邨。
時危くして百慮關す、盜賊爾猶ほ存せり。

【字解】【一】恍惚　あるかなきかのさま、暮色暗昧の狀。【二】逶迤　うねりたる貌。【三】山虛　山空しく、又は空山といふは人無きをいふ。虛といふは物無きをいふ、物とは草木の葉の類是なり、草枯れ木葉脫しつくすときは山充實せずして虛なり。【四】風落石　崖壁の地、風に吹かれて石の落つる音す。【五】月侵門　月光門內に侵入し來る。侵とは遠慮會釋もなく勝手にさしこむといふこころなり。【六】擊柝　盜賊をふせぐ夜番の柝をうちならすなり。【七】可憐子　子とは男子をいふ。【八】無衣　寒くなりたれども著るべき衣なきなり。【九】關百慮　我が百慮之に關するをいふ。【一〇】爾猶存　爾は盜賊をさす。猶存とはまだ滅亡せずに存在してゐることよと深く歎息するなり。

【題義】西閣の夜のさまと感じとをのぶ。「西閣雨望」より此篇まで皆大曆元年の作。

【詩意】おぼろにうつとりと寒天の江水が暮れゆき、うねうねと白い霧がくらくとざす。山はがらんどうになつて風が石をがらがら吹き落すし、樓は靜に立つてゐて月の光りが門內へ勝手にさしこんでくる。柝をうつ音がするがきのどくなをとこではある、衣服がなくてこまつてるものもあらうがそれはどこの村であらうか。時世が安泰でないので種種の事がらに自分の心配がひつかかる、盜賊どもよ汝等はいまだに滅亡せずに存在してゐるのか。(いまいましさのきはみだ。)

月

四更山吐月、殘夜水明樓。
塵匣元開鏡、風簾自上鉤。
兎應疑鶴髮、蟾亦戀貂裘。
斟酌姮娥寡、天寒奈九秋。

月

四更山月を吐く、殘夜水樓に明なり。
塵匣元鏡を開く、風簾自から鉤に上る。
兎應に鶴髮を疑ふなるべし、蟾も亦た貂裘を戀ふるならむ。
斟酌するに姮娥寡なり、天寒くして九秋を奈にせむ。

【字解】【一】四更　夜を五分し、初更より五更に至る。四更は今の午前三時頃なり。【二】殘夜　のこりのよる、卽ち四更の時刻をいふ。【三】水明樓　月光水面に映り、水色樓を照らす、因つて「樓に明か」といふ。【四】塵匣　ちりのたかつたはこ。【五】風簾　風をうけたすだれ。【六】自上鉤　鉤は簾をつるしておくかぎなり、自上鉤とはおのづと鉤にのぼつてゐるをいふ。蓋し寢覺めの際にふと見たる實境なり。塵匣二句　舊解には二句共に殘月をたとへていふとし、沈雲卿が月詩の臺前疑掛鏡、簾外自懸鉤、及び、旣能明似鏡、何用曲如鉤の句を引く。余謂ふに、鏡鉤を以て月に比するは古來有り、然れども杜の此の二句に於ては上句は比ならんも下句は實景を敍したるものならん。試に思へ、下句若し比ならんには何とて風簾の風の字を添へる必要あるか、又弦月を鉤に比するは可なり、何を以て簾の鉤に上るを以てする必要あるか、故に余は下句を實敍とみなす。【七】兎　月中のうさぎをいふ。月中には兎ありて藥を搗くとの古傳説あり。【八】疑鶴髮　鶴髮は作者の白髮をいふ、疑ふとはその老の甚しきをうたがふをいふ。【九】蟾　蟾蜍卽ち三本脚のひきがへるなり。是亦陰精の月中に在るものなり。古詩に三五明月滿、四五蟾兎缺の句あり、又「後漢書」天文志上の劉昭が注に張衡の「靈憲」を引けるに云ふ、日者陽精之宗、積而成鳥象、鳥而有三趾、陽之類、其數奇、月者陰精之宗、積而成獸象、兎、陰之類、其數耦、其後有羿、請無死之藥於西王母、姮娥竊之以奔月、將往、枚筮之於有黄、有黄筮之、曰吉、翩翩歸妹、獨將西行、逢天晦芒、毋驚毋恐、後且大昌、姮娥遂託身於月、是爲蟾蜍と。是によれば姮娥の化身が蟾蜍となりしといふなり。【一〇】懸貂裘　貂裘は「てん」の皮ごろも、作者のきものなり、懸とは月光ののぞきこむをかくいひなせるなり。【一一】斟酌　先方の心を忖度るをいふ。【一二】姮娥寡　姮娥は嫦娥に同じ、嫦娥は羿の妻にして不死の藥を盜みて月世界へ奔り去りしものなり。事は「淮南子」に見ゆ。又上に引ける「靈憲」にみえたり。寡は寡婦なるをいふ。夫婦は君臣の象あり、作者朝廷に在らざれば君（夫）と離れ居る寡婦と似たり、因つて興を此に託す。【一三】九秋　三箇月、九旬の秋をいふ。

【題義】月を見て感をのぶ、梁權道編して大曆二年の作とす、仇氏は之を大曆元年西閣にての作とせり。

【詩意】四更の時刻に山が月を吐きだした。それで夜も盡きかけてるをりに樓上に水の照りかへしがさして明るくみえる。氣がついてみると風にあふられた簾はひとりでに鉤のうへにのつてゐる、さうしてかの月はもとより塵匣のなかからふたをあけて出した鏡の樣に懸つてゐるのである。かうまざまざと照らされては兎もこのおやぢの白髮の多きを疑ふであらうとおもはれるし、蟾蜍もじぶんの貂裘をこひしたうてよりそふのではないかとおもふ。さらによくかんがへてみると月のなかに居るといふ姮娥は寡婦なのである。やもめではこのさむ天に秋のながい時節をどうしてすごさうといふのか知らん。きのどくなことではないか。

宗武生日

小子何時見、高秋此日生。

宗武が生日

小子何の時か見えしぞ、高秋此の日生る。

自從都邑語。已伴老夫名。　都邑に語りしより、已に伴ふ老夫の名。
詩是吾家事。人傳世上情。　詩は是れ吾が家の事、人の傳ふるは世上の情よりす。
熟精文選理。休覓彩衣輕。　熟精せよ文選の理、覓むるを休めよ彩衣の輕きを。
凋瘵筵初秩。敧斜坐不成。　凋瘵筵初めて秩す、敧斜坐成らず。
流霞分片片。涓滴就徐傾。　流霞分つこと片片、涓滴就きて徐に傾く。

【字解】【一】宗武生日　第二男宗武の誕生日なり。宗武何年に生れしや不明なるも、至德二載「遣興」に、驥子好男兒、前年學語時の句あり、時に四五歲なるべし。其後作者乾元二年蜀に至り永泰元年に蜀を去る、又八年を經たり。時に宗武は十二三歲なるべし。【二】小子　わかもの、少年。宗武をさす。【三】何時見　見とは此世にあらはれ出でしをいふ。【四】自從　二字にて「より」の義。【五】都邑語　仇氏曰く都邑は成都を指す、都邑語とは成都の人誇り語るをいふと。余はしかおもはず、都邑何によりて成都一地を指すと限るべけんや。都邑とは蓋し都會縣邑の義にして長安以下ひろく諸處をさせるものならん。語とは學語時の語と同じく宗武が言語を爲すをいふならん。【六】老夫　作者自己を稱す。【七】吾家事　自家世傳の事業なりとの意、祖父審言以來の事なるをいふ。【八】人傳世上情　人傳とは世人が吾家の詩篇を傳誦するをいふ。世上情とは世間人情のならはしなりとの意。【九】熟精　熟達精通すること。【一〇】文選理　文選は梁の昭明太子の撰せる書の名、卷十四、水閣朝霽奉簡雲安嚴明府詩の續見誦文選の句解をみよ。【一一】休覓　もとむるをやめよ。【一二】彩衣輕　老萊子年七十にして二親を孝養し五色の綵衣を著けて親の側に戲ると、事は「列女傳」にみゆ。【一三】凋瘵　しぼみやむ。作者疾病あるをいふ。【一四】筵初秩　賀筵はじめて順序だてらるるをいふ、賓客など坐にならぶなり。【一五】敧斜　かたむく、ななめ。ゐずまひの正しからぬさま、病體のためなり。【一六】流霞　酒をいふ。項曼都といふもの天上に到り紫府仙人に遇ひしに仙人流霞一杯を以て之に飮ましむるに飢渴せずと、「抱朴子」にみゆ。【一七】片片　ひとちぎれひとちぎれ、片といふは霞の緣語なり。【一八】涓滴　ひとしづく。【一九】就徐傾　就とはこちらが酒のある座席のところへ就くなり、傾とは涓滴を傾くるなり。

【題義】宗武の誕生日によんだ詩。作時詳ならず、仇氏に從ひ大曆元年の作の中に置く。

【詩意】この少年はいつこの世へ出てきたかといふと、秋の今日生れたのだ。都邑でやつと物を言うた頃から汝の名は已に自分の名にくつついて人に知られたのだ。詩は吾が家の世襲の事業である、だから吾が家の詩を世人が傳誦するのは世間の人情よりして然るべき事である。だから汝も「文選」の文章の道理に精熟することをもとめよ、必ずしも親心をなぐさめるため五色の衣を輕くひるがへして舞ふ老萊子のまねなどせなくともよろしい。この病中に汝の賀筵がはじめてひらかれるが、じぶんは身體をかたむきかげんに斜に居ねばならぬ、十分よくすわることはできぬ、かやうな身なりで一片一片流霞の飮みものを分けてもらひ、其處に就いてそろりそろりとひとしづくづつ杯を傾けてのみほすのである。

第五弟豐獨在江左。近三四載。寂無消息。覓使寄此。二首

第五弟豐、獨り江左に在り、近三四載、寂として消息なし、使を覓めて此を寄す 二首

亂後嗟吾在。羈棲見汝難。　亂後嗟吾在り、羈棲汝が難きを見る。

草黃騏驥（二）病。沙晚鶺鴒（三）寒。　草黃にして騏驥病む、沙晚れて鶺鴒寒し。
（四）楚設關城險。（五）吳吞水府（六）寬。　楚は設く關城の險、吳は吞まる水府の寬なるに。
（七）十年朝夕淚。衣袖不曾乾。　十年朝夕の淚、衣袖曾て乾かず。

【字解】【一】羈棲　羈旅の棲居、たびずまひ。【二】騏驥　駿馬なり、自ら比す。【三】鶺鴒　せきれい。常棣の「詩」により兄弟のことに用ふ。已に屢〻見ゆ。此句は敍景にして比を兼ぬ。【四】楚　夔州方面自己の居所をさす。【五】吳　豐の居る地をさす。【六】水府寬　水府は龍宮の類をいふ、ここはただ水の世界の意に用ひしなるべし。吳には三江・震澤等の廣き水面あり。【七】十年　題に三四載といひ詩に十年といふは、十年は別來をいひ三四載は消息斷えてよりをいふなり。天寶十五載より大曆元年まで十年なり。

【題義】五番めの弟の豐だけ獨り江左（江東、江南）に居るがこの近くの三四年はさつぱり消息がない。それで使者をもとめて此の詩を寄せてやる。大曆元年の作。

【詩意】ああ自分は天寶の騷亂後ふしぎとまだ生存してゐる。おまへが旅住居をしてゐるのはさぞかし困難なことと見うける。今や秋となつて草が黃ばんで、駿馬かとおもふ自分も病みつかれてゐる。江上の沙は晚れかかつて鶺鴒が寒げに飛んでをるがおまへをなつかしくおもふ。ここの楚地は關城の險を設けてをるから出にくいし、おまへの居る吳の地は水面がむやみと廣くて其地を吞まんばかりであるからこれ亦ゆきにくい。十年といふもの自分は朝夕おまへを思ふ淚を流して衣の袖は乾くまも無い。

〔二〕

聞汝依山寺。杭州（一）定越州（二）。　聞く汝山寺に依ると、杭州なるか定めて越州ならむか。
風塵淹別日。江漢（三）失清秋（四）。　風塵別日淹し、江漢清秋を失す。
（五）影著啼猿（六）樹。魂（七）飄結蜃（八）樓。　影は著く啼猿の樹、魂は飄る結蜃の樓。
明年下春水。東盡白雲求。　明年春水を下らば、東白雲を盡くして求めむ。

【字解】【一】杭州　今浙江省杭州府。【二】越州　今浙江省紹興府。【三】江漢　楚地、夔州をさす。【四】失清秋　また一年の秋をむなしく過ごせしをいふ。【五】影著　影は自己の身影。【六】啼猿樹　巫峽の樹をいふ、巫峽は猿にて名高し。【七】魂飄　魂は作者のたましひ。【八】結蜃樓　蜃氣樓なり。蜃の吐く氣によりて結ばれたる樓、昔人はかかる原因によりて樓ができると考へたり。これは吳地、弟豐の居る地のものをいふ。

【題義】この第二首は弟を思ふのあまり之を訪ひゆかんとのことをのべたり。

【詩意】おまへは山寺に依つてゐるとは聞いてをるが、どこの山寺なのか、杭州の寺であるか、さもなくば定めて越州の寺ででもあらうか。自分の風塵のあひだにおまへとの別れてゐる時日が久しいのに、またもや江漢の地でこの一秋をなくしてしまつた。自分の身の影は猿の啼く樹にくつついてをるが、魂はおまへの居る蜃氣樓の方へとんでいつて居るのである。もし自分が明年にも春の江水を下

るならば、その時こそは東の方白雲の奥を盡くしきはめてまでもおまへをさがし求めるであらう。

聽楊氏歌

佳人絕代歌。獨立發皓齒。
滿堂慘不樂。響下淸虛裏。』
江城帶素月。況乃淸夜起。
老夫悲暮年。壯士淚如水。
玉杯久寂寞。金管迷宮徵。
勿云聽者疲。愚智心盡死。』
古來傑出士。豈特一知己。
吾聞昔秦靑。傾側天下耳。』

楊氏の歌を聽く

佳人絕代の歌、獨立皓齒を發く。
滿堂慘として樂ます、響は下る淸虛の裏。』
江城素月を帶ぶ、況んや乃ち淸夜に起るをや。
老夫暮年を悲む、壯士も淚水の如し。
玉杯久しく寂寞、金管宮徵に迷ふ。
云ふ勿れ聽く者疲ると、愚智心盡く死す。』
古來傑出の士、豈に特り一知己あるのみならむや。
吾聞く昔秦靑、天下の耳を傾側すと。』

【字解】【一】絕代　この人のほか世上に絕えて之なきをいふ。【二】淸虛裏　淸虛は虛空をいふ、歌聲一旦高く虛空にのぼりて更に虛空よりくだり來るがごとし。佳人以下起四句は先づ楊氏の歌聲を敍す。【三】江城　江ぞひの城、夔州の城をいふ。【四】淸夜起　淸夜はすみたる夜、起とは歌聲のおこるをいふ。【五】老夫　自己をさす。【六】玉杯久寂寞　玉杯は聽者の手にするさかづきなり、久寂寞とはじつと杯を口にすることをとどめてゐることをいふ。余案するに此句上解にても通ず。但余は玉杯は玉柱の誤に非ざるやと疑ふ。沈約が詩にいふ、金管玉柱響洞房と。玉柱は琴地に用ふる玉製の支柱をいふ、玉柱久寂寞とは琴を彈く者しばらく其手を停むるをいふ。【七】金管　黄金を飾りし笛。【八】迷宮徵　宮徵は五音中の種類の名、歌聲あまりに妙なるため笛もその調べに迷ふといふなり。【九】聽者疲　妙聲をきくゆゑそれに身がいりすぎて聽く人もつかれる。【一〇】心盡死　昔のもの心まで死んでしまふ。全く歌聲にひきつけられてしまふをいふ。江城以下八句は聽者の心理狀態より歌聲の妙をのぶ。【一一】傑出士　豪傑の士をいふ。【一二】豈特一知己　一人だけの知己あるにとどまらず。【一三】秦靑　昔の歌謳の名手の名、「列子」に云ふ、薛譚、謳を秦靑に學ぶ、未だ靑が技を窮めず、遂に辭して歸らんとす、靑、之を郊衢に餞し、節を撫して悲歌す、聲、林木に振ひ、響、行雲を遏むと。【一四】傾側　かたむけそばだてしむる。末尾四句はすぐれしものは世に多くの知音あるをいふ。

【詩意】絕代の歌の名手である一佳人が獨立して皓い齒をひらいて歌をうたひだす。その歌は虛空にまひあがつて虛空から響がくだつてくる樣に感ぜられる、之をきくものは滿堂のものすべてものがなしさをおぼゆる。』ちやうど江ぞひの城はしろい月の光を帶びてる頃で、すみわたつた夜にこの歌聲が起るのであるからいつそうその感がふかい。じぶんごとき老人は己の晚年を悲しくおもふし、壯士と雖も淚が水の樣にながれる。また酒杯を手にするものはその杯をじつととどめ、(鄙說によれば、「琴を彈ずるものはしばらく彈く手をとどめ」)金管を吹く者も宮徵のしらべに迷ふばかりである。之を聞けば聽く者が疲れるなどいふはおろかのこと愚者も智者も之をきく者はことごとくその心が死して生きたここ地もせぬほどである。』むかしから豪傑の士は一人の知己があるといふにとどまらぬものである。じぶんの聞く所では昔秦靑といふ謳の名人は天下の人の耳を傾けしめたといふではないか。(作

者暗に自己を寓するなるべし。)」

秋風 二首

秋風淅淅吹巫山。
上牢下牢修水關。
吳檣楚柁牽百丈。
暖向成都寒未還。
要路何日罷長戟。
戰自靑羌連白蠻。
中巴不得消息好。
暝傳戍鼓長雲間。

秋風 二首

秋風淅淅として巫山を吹く、
上牢下牢水關を修む。
吳檣楚柁百丈に牽かる、
暖に成都に向ひて寒に未だ還らず。
要路何の日か長戟を罷めむ、
戰は靑羌より白蠻に連る。
中巴得ず消息の好きを、
暝に傳ふ戍鼓長雲の間。

【字解】【一】淅淅 風聲なり。【二】上牢下牢 關の名、上牢は巫峽下牢は夷陵(今の湖北省宜昌府)のそれなり。【三】修水關 修は修繕、秋之をなす。水關は水上に設くる關所。【四】吳檣楚柁 吳楚の船をいふ。【五】百丈 竹索なり。【六】要路 要害のみち。【七】罷長戟 長戟を用ふることをやむる。長戟は賊を攻伐するに用ふるなり。【八】靑羌 吐蕃の羌種。【九】白蠻 嶲州(今四川省寧遠府)の嶲山は其地諸蠻部に接す、烏蠻あり、白蠻あり。【10】中巴 卷十五、夔州歌にも見えたり、今の重慶府をいふ。後漢の劉璋益州の牧となり、墊江(今の合州)以上を以て巴郡とし、江州(今重慶府巴縣)より臨江(今忠州)までを永寧郡(卽ち巴西)とし、朐䏰(今雲陽の西)より魚復までを固陵郡(卽ち巴東)とす。是れ三巴なり。而して巴縣は中部に在り、これを中巴とす。【一一】消息好 たよりのよきことをいふは戰亂のしづまることをさす。【一二】暝傳 くらがりにひびきをつたふ。【一三】戍鼓 番兵の太鼓のおと。【一四】長雲間 長くひきはへたる雲のあひだ。

【題義】秋風に對して世亂を傷むこころをのべたり。大曆元年の作なるべし。

【詩意】秋の風がちりちりと巫山の峯を吹き、上牢でも下牢でも水上の關所を修繕する。吳楚の船は百丈の竹索にひかれてのぼるが、暖かい時節に成都に向つたのが寒くなつた今日まだ戾つてはこぬ。(途中兵亂にさまたげられてゐるのだ。)いつになつたら要害の場所に長戟をふりまはすことをなくすることができるのだらうか、今や戰は西北は靑羌の居る遠い處から西南は白蠻の居る地方まで連つてをるのである。西鄰の中巴の地方からもよいたよりは得られぬので、長くひきはへた雲間からくらがりに番兵の太鼓のひびきが傳はつてきつつあるのである。

〔二〕

秋風淅淅吹我衣。
東流之外西日微。
天淸小城擣練急。
石古細路行人稀。
不知明月爲誰好。

〔二〕

秋風淅淅として我が衣を吹く、
東流の外西日微なり。
天淸くして小城練を擣くこと急に、
石古りて細路行人稀なり。
知らず明月誰が爲にか好き、

【字解】【一】西日微 西方にかたむく太陽の光かすかなり。【二】小城 夔州の城をさす。【三】擣練急 せはしくねりぎぬをうつ、留守居の妻が征夫の爲に寒衣の用意をするなり。【四】爲誰好 だれにながめよとてかくうつくしく照れるぞと月をうらむこころなり。【五】蚤晚 早

(五)蚤晩孤帆他(六)夜歸。　蚤晩孤帆他夜歸らむ。
(七)會將白髮倚(八)庭樹。　會ず白髮を將て庭樹に倚らむ、
(九)故園池臺今(一〇)是非。　故園の池臺は今是非。

晩に同じ、おそかればやかれ。【六】他夜歸　他夜は他日の夜、ここは後日の夜の意、將來をさす、歸るは故郷へかへるをいふ。【七】會　俗用にて「必ず」の義。【八】倚庭樹　庭樹は故郷の家の庭の樹をいふ、倚はよりかかりて立つをいふ。【九】故園　故郷の園、長安の住處をさす。【一〇】今是非　是とは舊のままのすがたなるをいひ、非とは然らざるをいふ。

【題義】この第二首は秋風に對して歸郷の思を動かせしことをのぶ。

【詩意】秋の風がちりちりと自分のきてゐるころもを吹き、水が已まず東へ流れ去る一方には西に傾く太陽の光がかすかになつた。天はすつきりとしてこの小い城に練ぎぬを擣つ音がせはしくきこえるし、ふるびた石ころの横はつてゐる細路にはみちゆく人も稀である。うつくしく月はかがやいてゐるが誰にみよとて照つてゐるのか知らん、じぶんが孤帆をうかべて將來或るひと夜故郷へ歸るのはそれはいつのことであらうか。とにかく自分はこの白髮の身ながらきつと故郷へもどつて庭樹によりかかつてみるつもりだ。がさて今は故郷の園の池や臺は果して舊のすがたでゐるや否や、きづかはしい。

(一)九日諸(二)人集于林(三)

九日諸人林に集まる

(四)九日明朝是。(五)相要舊(六)俗非。　九日明朝是なり、相要ふるも舊俗非なり。
(七)老翁難(八)早出。(九)賢客幸知(一〇)歸。　老翁早く出で難し、賢客幸に歸することを知る。
(一一)舊采黃花賸。新梳(一二)白髮微。　舊采黃花賸るも、新梳白髮微なり。
(一三)漫看年少樂。忍淚已沾衣。　漫に看む年少の樂むを、淚を忍ぶも已に衣を沾す。

【字解】【一】九日　陰曆九月九日重陽登高の節なり。【二】諸人　他の人人。【三】林　山上の林のある處。【四】九日明朝是　九日是明朝に同じ、是は九日を承く。【五】相要　要は邀、むかふるなり。【六】舊俗非　非舊俗と同意、舊俗とは長安往時の風俗をいふ、ここは異郷なればかくいふ。【七】老翁　自己をいふ。【八】早出　朝はやくより家を出る。【九】賢客　即ち題の諸人をさす。【一〇】知歸　仇注に歸とは林中に歸し集まるをいふとす。余謂ふに歸を歸集と訓するはいかがのものにや。案するに歸は歸嚮、歸往の義にして諸人の心が作者に向ひ歸するをいふならん、諸人が作者を尊敬して明朝は九日なるゆゑお集りくださいと邀ふるは卽ち其心の歸嚮するなり。【一一】舊采黃花賸　舊采とは往年黃花を采りしをいふ、黃花は菊花なり、賸とはあまる、此地の菊花は自己の往時の采りし所の餘なりとの意ならん。(仇氏は賸を多の義とし、舊采黃花賸、ととき、以前は興味多かりきの意とせり。)【一二】白髮微　白髮さへも亦微少なり。【一三】漫看　此句は明日の事を豫想していふ。

【題義】重九の日に人人が林中へ集まるといふことだ。それで先方より招かれたのに前日之を辭退したことをのべた詩。大曆元年の作ならん。

【詩意】明朝は重九の日だ。それで招待にあづかつたがここの重九は故郷の風俗とは似ないものである。諸君は幸にも歸嚮する所を心得てをられこの老人をお招きくださつたが老人は第一に朝早くから出かけることはむつかしい。またむかし採つた菊花が餘りあつて采るにたへたとしても、頭を梳けづ

つてみると白髮さへもうすくなつてゐるのである。往つてもいたづらに年少き方方の樂まれるのをみるにすぎぬだらう。今已にこらへきることができず淚がながれて衣をうるほすのである。

(一)秋興八首　　秋興　八首

〔一〕玉露凋傷楓樹林　　〔一〕玉露凋傷す楓樹の林

玉露凋傷楓樹林。　玉露凋傷す楓樹の林、
(二)巫山(三)巫峽氣蕭森。　巫山巫峽氣蕭森。
(四)江間波浪(五)兼天湧。　江間の波浪天を兼ねて湧き、
(六)塞上風雲(七)接地陰。　塞上の風雲地に接して陰る。
(八)叢菊兩開(九)他日淚。　叢菊兩び開くは他日の淚ならむ、
(一〇)孤舟一繫(一一)故園心。　孤舟一に繫ぐは故園の心よりす。
(一二)寒衣處處(一三)催刀尺。　寒衣處處刀尺を催す、
(一四)白帝城高(一五)急暮砧。　白帝城高くして暮砧急なり。

【字解】【一】秋興　秋時の感興をいふ。【二】巫山巫峽　巫山は特定の山名、巫峽は其の上下方に亘りてつらなる山峽の名なり。巫山は夔州府巫山縣東にあり。巫山巫峽に關しては已に屢解說しおきたるも更に「水經注」の記事を載せむ。「水經注」卷三十四、江水の條に曰く、江水又東逕巫峽、杜宇所鑿以通江水也、江水歷峽、東逕新崩灘、其下十餘里、有大巫山、非唯三峽所無、乃當抗峙岷峨、偕嶺衡疑、其翼附羣山、竝槩青雲、更就霄漢、辨其優劣耳、神孟涂所處、又帝女居焉、其間、首尾百六十里、謂之巫峽、蓋因山爲名也と。又其の下流に及ぶまでを記して曰く、自三峽七百里中、兩岸連山、略無闕處、重巖疊嶂、隱天蔽日、自非停午夜分、不見曦月、至于夏水襄陵、沿泝阻絕、或王命急宣、有時朝發白帝、暮到江陵、其間、千二百里、雖乘奔御風、不以疾也、春冬之時、則素湍綠潭、迴清倒影、絕巘多生怪柏、懸泉瀑布、飛漱其間、清榮峻茂、良多趣味、每至晴初霜旦、林寒澗肅、常有高猿長嘯、屬引淒異、空谷傳響、哀轉久絕、故漁者歌曰、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳と。以て其の狀を想見すべし。【三】氣蕭森　氣は秋の氣をいふ。蕭森は蕭索なるさま。【四】江間　峽を承けていふ。【五】兼天湧　水面上のみならず高く天までをもあはせて湧きたつ。【六】塞上　山を承けていふ。塞は夔州の城塞をいふ。【七】接地陰　城上の高きより起りてひくく地面に接近してくもる。【八】叢菊兩開　叢菊は叢をなしてしげる菊、兩開とは二度ひらくこと、永泰元年雲安にて秋にあふは一回、今大曆元年夔州にて秋にあふは二回、合はせて二度なり。【九】他日淚　舊注に他日を往日ととくあり、杜詩には他日を往日の義に用ふると後日の義に用ふるとの二つの場合あり、ここは大曆元年の今を含みていふものなれば之を往日の義としてみるは當らず、後日の義としてみるべきなり。蓋し去年今年兩回見し花の後日感傷の淚をそそぐたねとなるべきをいふ。猶賈島の「客舍并州」の詩意のごときものなるべし。【一〇】孤舟一繫　作者峽を下る準備としてつねに舟を繫ぎ置くをいふ。一繫とはもつぱらつなぐなり。【一一】故園心　故園を思ふの心、或は故鄉に歸らむとの念よりするといふなり。【一二】寒衣　寒時にあたりて需るころも。その衣を裁縫せんがためにの意。【一三】催刀尺　刀は織物を裁斷する刀なり、尺は寸法をはかる「ものさし」なり。催は用意をするをいふ。【一四】白帝城　夔州城の東部、公孫述の築きし城をいふ。已に見ゆ。【一五】急暮砧　夕ぐれにうつきぬたの音急なり。砧にて織物をうち、それに刀尺を施して衣をつくるなり。催刀尺は新衣を製するをいひ、急暮砧は舊衣を搗つをいふとて二句にて新舊を別ちて解く說あれども恐らくは非なり。

【題義】秋の感興をのべたる詩なり。感興はそれぞれ同じからず、各篇を見て知るべし。この第一首は秋の時節に逢ひて旅居を傷むことをいへり。大曆元年の作。

【詩意】露の白玉が置くにつれて楓樹の林が凋ませられ傷はれ、巫山巫峡にわたつて秋の氣がしんとしてきた。江上に起る波浪は天をもあはせんばかりに高く湧きたち、城塞にうごく風雲はひくく地面にまで接近してくもりを生じてゐる。自分は一つの舟をもつぱら此地に繋ぎとめておくがそれは機會だにあらばそれにのつて峡を下らうといふ故郷思ひの心からさやうにしてゐるのである。自分は去年と今年と二度一叢の菊花の開くのを見るがいま異郷の花として見る花もいづれは後日思ひ出ぐさとなつて感傷の涙をながさせる所のものであるであらう。さて秋とはいへ處處で寒衣を製するために刀尺の用意がはじまつたとみえる、白帝城の高くそびゆるあたりに夕ぐれの砧をうつ音がせはしくきこえつつある。（これをきくとますますじぶんの旅情をふかめるのである。）

〔二〕夔府孤城落日斜

〔二〕夔府の孤城 落日斜なり

（一）夔府孤城落日斜。　夔府の孤城 落日斜なり、
（二）每依北斗（三）望京華。　每に北斗に依りて京華を望む。
（四）聽猿實下三聲淚。　猿を聽きて實に下す三聲の淚、
（五）奉使虛隨八月槎。　使を奉じて虛しく隨ふ八月の槎。
（六）畫省香爐違伏枕。　畫省の香爐に違ひて枕に伏す、
（七）山樓粉堞隱悲笳。　山樓の粉堞隱れて悲笳あり。
（八）請看石上藤蘿月。　請ふ看よ石上藤蘿の月、
已映洲前蘆荻花。　已に映ず洲前蘆荻の花に。

【字解】【一】夔府孤城　夔州府の孤城。【二】每依北斗　每は每時。そのつど、北斗は星の名、北方に屬る、依とはそれを目あてとするをいふ。【三】望京華　京華は京城繁華の地、長安をいふ。【四】聽猿一句　前第一首の巫山巫峡の句解をみよ、巫峡は猿の名所、猿の啼くを聞き三聲に至れば人皆淚を流す。【五】奉使虛隨八月槎　故事あり、張騫が、「博物志」に云ふ、近世、人あり海上に居る、毎年八月槎來りて期を失はざるを見る、遂に糧をもたらし之に乘じて天河に到る、と。宗懍が「荆楚歲時記」は其の人物を漢の張騫を以てあてはめて云ふ、漢の武帝、張騫をして大夏に使せしめしに、河源を尋ね、槎に乘ず、月を經て一處に至る云云。之によりて舊解多く奉使乘槎を嚴武が事とし、此句を以て作者が成都に嚴武に隨ひし義となす。余も久しく其解を用ひしが、今案ずるに然らず、蓋し此句は卷十九に見ゆる秋日夔府詠懷一百韻詩の途中非阮籍、查上似張騫と同樣に作者自己の事をいへるものなり。奉使とは天子の使命を奉ずるなり、地方に在りとはいへ工部員外郎として存在するはこれ奉使なり。虛隨の隨の字は他動詞にして自動詞に非ず、槎を我が身に隨ふるをいふ、隨槎とは前首の「孤舟一繫」の意のごとし、槎を隨ふと雖も之に乘じて長安に歸るを得ず、故に虛隨といふ。八月とは作詩の時秋八月にして今春夔州に到りしより八個月なるをいへるならん、かく看て上句の三聲と對し得て妥當なるべし。但しこの八月は或は博物志の每年八月に來る槎の意を取ると爲すも必ずしも不可なし。【六】畫省香爐違伏枕　上五字下二字の句法として見るべし。違とは畫省の香爐に違ふをいふ。畫省は門下省をいふ、其の壁丹青を以て畫くにより畫省といふ、作者往年左拾遺としてこの省にあり。香爐とは拾遺宿直の時、女侍史が直者の衣服を薰らすために用ふるものなり。伏枕とは現在疾病の身を以て枕に伏して臥するをいふ。【七】山樓粉堞隱悲笳　此句も上五字下二字の句法なり。隱とは山樓の粉堞が隱るるなり。日暮れんとするゆゑなり。「野望」詩の孤城隱霧深とあると同樣の句法なり。山樓は夔州の城樓をいふ、粉堞は胡粉をぬりたる城のひめがきなり。笳は蘆葉を卷きて吹きならすもの。其の音悲しきにより悲笳といふ。【八】請見二句　これ暮景より直に夜景にうつりてのぶ、眼前見る所なり。何等の

寓意なし。

【題義】この第二首は夔州の暮景とかねて異土の感をのべたり。

【詩意】夔州の孤城に夕日が斜に落ちかかる。いつもながら自分は北斗星の方位によつて京華の方をながめるのである。自分は猿の聲を聽きては古人の言うたとほりまことに三聲めの涙をおとし、御命を奉じてゐるとはいへいたづらに八個月の槎を身に隨へてここからはなれ得ずに居る。さうしてかつては親しんだ畫省の香爐に違うて病の枕に伏しつつあるが、城樓のひめがきは今や暮色に隱れて悲しい笳聲がきこえてゐる。こんなことをかんがへてゐるまにあれごらんなさい、石上を照らす藤蘿のひまもる月がはやくも江の洲のあたりの蘆荻の花に映ひそめましたぞ。

〔三〕千家山郭靜朝暉

〔三〕千家の山郭朝暉靜なり

(一)千家山郭靜(二)朝暉。　千家の山郭朝暉靜なり、

日日江樓(三)坐(四)翠微。　日日江樓翠微に坐す。

信宿(五)漁人還(六)泛泛。　信宿の漁人還た泛泛、

清秋燕子故(七)飛飛。　清秋の燕子故に飛飛。

匡衡抗疏(八)功名薄(九)。　匡衡疏を抗げて功名薄く、

劉向傳經心事違(一〇)。　劉向經を傳ふる心事違ふ。

同學少年(一一)多不賤(一二)。　同學の少年多く賤しからず、

五陵(一三)衣馬自輕肥(一四)。　五陵の衣馬は自から輕肥。

【字解】【一】千家山郭　千家は戸數をいふ、山郭は山によりたるそとくるわ、作者の居處なり。【二】靜朝暉　あさ日のひかりがしづかにさしてゐる。【三】江樓　江邊の樓、屋上見ゆる西閣なるべし。【四】坐翠微　山の中腹に坐す。江樓が翠微中に在るなり。山氣の青縹色なるを翠微といふ。坐翠微を山腰ニ樓前ト解く説あり、非なり。樓前を繞るを言はんとならば對ニ翠微ニといふべきなり。【五】信宿　一宿は宿、再宿を信といふ、一夜二夜船がかりするをいふ。【六】還泛泛　泛泛は舟のうかぶ貌、還といふは彼も亦己の如くつれに漂泊しつつあるをいふ。【七】故飛飛　燕は秋の社日に立ち去りて翌年の仲春に復た來る。今去るべくして未だ去らず、ゆゑに「故に」といふ。【八】匡衡抗疏　漢の元帝の時、匡衡しばしば疏をたてまつりて便宜を陳ぶ。遷りて光祿大夫・太子少傅となる。抗疏は上疏の意、疏は上奏の文章なり。作者は宰相房琯を救はんとて論爭したり、又左拾遺としてしばしば疏をたてまつりしなるべし、因つて匡衡を以て自ら比す。【九】功名薄　衡は光祿大夫となりしが作者は卻つて官位より卻けらるるに至れり、これ功名薄きなり。【一〇】劉向傳經心事違　前漢の末、劉向は禁中の祕書を校して世に貽す、其の子歆亦父の職を襲ふ、是れ父子經を傳ふるなり。心事違とは傳經の心事遂ぐるを得ざるなり。蓋し其の子不肖にして己の業をつぐこと向歆父子の傳經の如くなるを得ざるを歎ずるなり。【一一】同學少年　幼小の時同じく學びし人人。【一二】不賤　高位高官となれるをいふ。【一三】五陵　長安の近地にして富貴豪俠の徒の住居する處なり。五陵とは漢の高祖の長陵、惠帝の安陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、昭帝の平陵、是れなり。【一四】衣馬自輕肥　輕衣を着、肥馬に誇るをいふ。豪奢なるさまなり。

【題義】この第三首は夔州の朝景をのべ、且つ自己の感懷を敍したり。

【詩意】千戸ばかりある山地の城郭に朝日が靜にさしてゐる。自分は毎日翠微の中に於て江樓に坐してをる。江上をみると一二泊する漁人はやつぱりぶはぶは舟をうかべてをる、秋であるのに燕子はたち去らずにわざとらしく飛びつつある。今匡衡ともいふべき自分は天子に上疏をしたが功名を得るこ

とは薄い。今劉向といふべき自分は經書を傳家の業としようとねがつたが心事はくひちがつた。之に反して同學の少年輩は如何にとみると彼等の多くは高貴の地位にのぼつて、自然長安の五陵あたりで輕衣肥馬の姿で得意にやつてをる。

〔四〕 聞道長安似奕棋

〔四〕 聞道長安奕棋に似たりと

聞道長安似(一)奕棋。　聞道長安奕棋に似たりと、
(二)百年世事不勝悲。　百年世事悲みに勝へず。
王侯第宅皆新(三)主。　王侯の第宅は皆新主、
文武衣(四)冠異(五)昔時。　文武の衣冠は昔時に異なり。
(六)直北關山金(七)鼓震。　直北關山金鼓震ひ、
(八)征西車馬羽(九)書馳。　征西車馬羽書馳す。
(一〇)魚龍寂寞秋江冷。　魚龍寂寞秋江冷かなり、
(一一)故國平居有所思。　故國平居所思有り。

【字解】【一】似奕棋　奕棋は碁のばくちなり。一勝一負あるをいふ。長安は或は安祿山に陷れられ、或は吐蕃に陷れらる。其の政局常に變化す。故に奕棋を以てたとふ。【二】百年　凡そ唐の開國の初より作詩の時までをいふ。【三】新主　騷亂のため舊主人みな奔竄し、新らしく別の主人入りて之に住むをいふ。【四】衣冠　貴位にある人をいふ。【五】異昔時　昔時はそれ相當の人が衣冠の地に居りしなり、しかるに玄宗肅宗の朝に或は審嗜、或は宦官等が朝廷の高位を占むるに至りしは、これ今の衣冠の昔時に異なるなり。【六】直北　甕州より正北、陝西・甘肅等の地みなこれなり、此蓋し回紇の內侵をいふ。【七】金鼓　鐘鼓をいふ。回紇をふせぐために鳴らすなり。【八】征西車馬　西とは吐蕃の來侵の方位なり、吐蕃來侵せんとするゆゑ我西を征するなり、車馬は軍用の事馬。【九】羽書　檄文なり、回紇・吐蕃の亂は廣德・永泰間の事なり。【一〇】魚龍寂寞　魚龍の類は秋分となれば降り蟄して淵に寢ぬ。謂はゆる冬眠の狀態に入る、故に寂寞たり　此句は時物をいふと共に亦以て自ら比するなり。【一一】故國平居有所思　趙注・顧注・杜臆等には故國平居とつづけて「故國の平居の事」としてときたり。恐らくは非なり。故國は故國に對しての義、故國は長安をいふ。平居は平生・居常など卽ち「つねひごろ」の意にて副詞として用ふ、所思は思慕する所のことをいふ。一句の意は「己れ平生故國に對して思ふ所の事あり」をいふ。

【題義】この第四首は長安の喪亂に思ひを馳す。

【詩意】聞く所によると長安の政局は奕棋の如く勝敗常なしとのことであるが、百年このかた世上のできごとは悲みにたへぬものがある。みやこの王侯の第宅は今は皆別な主人がはひりこんでをるし、衣冠をつけた文武の臣も昔時のそれとはちがつた人物となつてをる。北をみれば關山に金鼓の音が震うてをり、西をみれば車馬が征伐のために動いて危急を報ずる檄文が馳せ飛んでをる。今や秋の江水冷に魚龍のたぐひもひつそりと蟄居してをるが、（自分の今もその樣であるが）自分はつねひごろ故國の長安のことについてはいつもものおもひをしてをるのである。

〔五〕 蓬萊宮闕對南山

〔五〕 蓬萊の宮闕南山に對す

蓬(一)萊宮闕對(二)南山。　蓬萊の宮闕南山に對す、

【字解】【一】蓬萊宮闕　仇氏は

(三)承露金莖霄漢間。　承露の金莖霄漢の間。
(四)西望瑤池降王母。　西瑤池を望めば王母降る、
(五)東來紫氣滿函關。　東來の紫氣は函關に滿つ。
(六)雲移雉尾開宮扇。　雲移りて雉尾宮扇開き、
(七)日繞龍鱗識聖顏。　日龍鱗を繞りて聖顏を識る。
(八)一臥滄江(九)驚歲晚。　一臥滄江歲晚に驚く、
幾回青(一〇)瑣點(一一)朝班。　幾回か靑瑣朝班に點せられしぞ。

勝手に宮の字を高に改めたり、蓋し詩中に宮扇ありて宮の字重複するを以てなり、重複せりとて勝手に之を改むるは不都合なり、故に舊に復せしむ。蓬萊宮闕とは蓬萊宮の門闕をいふ。蓬萊宮は大明宮の別稱なり、「雍錄」に曰く、丹鳳門よりして北すれば含元殿あり、又北すれば宣政殿あり、又北すれば紫宸殿あり、三殿南北相沓す、皆、山上に在り、紫宸に至り又北して蓬萊となれば山勢盡く、と。蓬萊宮の在る所は龍首岡に在りて地勢最も高し。「唐會要」に曰く、宮、北は高原に據り、南は爽塏を望む、天晴れ目朗なる毎に南、終南山を望めば掌に指すが如く、京城の坊市街陌、檻內に在るが如し、と。其の眺望想ふべし。【二】對南山　南山は長安の南にある終南山なり。【三】承露金莖霄漢間　漢の武帝建章宮に承露盤を設く、銅柱の高さ二十丈、大さ七圍、上に仙人掌ありて盤を承く、この盤に天の露を承けしめ、それに玉屑を和して之を飲み、以て長生を求むるなり。金莖とは銅柱をいふ。此の銅柱は建章宮の西に建てられしなり。建章宮は長安城外の西北隅に在りしもの、唐の大明宮は長安の東北に位す、唐に金莖を建てしことなく又武帝時代の銅柱幾存せしにも非ず。此一句は作者が架空に想を設けしものに過ぎず。恐らくは暗に玄宗の求仙をほのめかせしものならん。【四】西望瑤池降王母　瑤池降王母の事は卷二「同諸公登慈恩寺塔」詩の瑤池飲の句解卷二の一〇三頁をみよ。又「漢武內傳」には武帝のために西王母の降りし話あり。王母は恐らくは楊貴妃の事を暗に寓せしならん。【五】東來紫氣滿函關　「關尹內傳」に曰く、關（函谷關をいふ、函谷關は河南省陝州靈寶縣の西南にあり）の令尹喜かつて樓に登り東極に紫の氣ありて西に邁くを望見して曰く應に聖人の京邑を經過するあるなるべしと、乃ち齋戒す、其の日果して老君（老子）青牛車に乘じて來り過ぐるを見る、と。此句蓋し唐、老子を尊ぶを以て瑞氣あるをいふなり。作者の他詩に、「紫氣關臨天地闊、黃金臺貯俊賢多」と同一用意のみ。陳廷敬・仇兆鰲・浦起龍等みな瑤池紫氣一聯を以て貴妃老子を諷すとするは前朝の失を責むるものなれば不可なりといふも、愚見はやはり貴妃老子を帶びていふものと考ふ。【六】雲移雉尾開宮扇　雲移の雲は扇影を形容していふ、移とは扇影が開くことをさす、唐の儀衞志によるに、唐には雉尾の障扇（雉の尾にてつくりし物をさへぎるうちは）あり、天子御座におでましにならんとするときは左右より扇を合す、天子の坐定まれば扇を去る　扇を去るとは卽ち雉尾にてつくりし宮扇がうち開かるるなり。猶卷六「至日遣興」詩の第二首の孔雀徐開扇影還の句解卷六の六〇六頁をみよ。【七】日繞龍鱗識聖顏　日繞とは日光が龍鱗をめぐるなり、龍鱗とは天子の衣は袞衣とて卷き龍の模樣をゑがく、その模樣の龍のうろこをいふ。日光が御衣をめぐりて照らすによりておのづと聖顏をしりわくるなり。聖顏は天子のおかほなり。蓋し肅宗についていへるならん。【八】一臥滄江　滄江はひろき江水、夔州にある揚子江をいふ。【九】驚歲晚　秋節を歲晚といへり。【一〇】靑瑣　宮門をいふ、その門の上頭鎖狀波狀に雕刻して之を靑色にて塗る、よりて靑瑣といふ。【一一】點朝班　點は點檢などの點なり、朝位に參列する者の姓名のうへに點を附けてしらべるをいふ。之を玷辱の玷（けがす）の義ととくはよろしからず。朝班は朝の班列なり、位の上下によりて班列が異なる。

【題義】この第五首は長安宮殿の盛をいひ、自己のかつて朝班に立ちしことを追憶す。

【詩意】蓬萊宮の宮門は終南山とうちむかうてゐる。それから承露盤の銅柱がおほそら天のがはの間にまで高くそびえてゐる。西の方をのぞむと瑤池には西王母の仙女が降りるし、東をみれば紫の氣がやつて來て函谷關にいつぱいになる。かやうな形勢をひかへた宮殿に於て、朝廷へ天子出御のそのをりには、雲かとまがふうちはがおしうつつたかとおもふと雉尾の宮扇がさつと左右に開かれ、日光が

御衣の龍鱗をめぐるによりてそれと聖顏をしりてふしをろがむ。(これはみな過去の事となつた)いま自分は一たび江邊に高臥してただ歳の晩れんとするに驚く。ほんに靑瑣の宮門に於て朝班につくための點檢をうけたことはいくたびであつたかしらん、これでもをりをり點檢をうけた自分であるのだ。

〔六〕 瞿唐峽口曲江頭

(一)瞿唐峽口(二)曲江頭。
(三)萬里(四)風煙接素秋。
(五)花萼夾城(六)通御氣。
(七)芙蓉小苑(八)入邊愁。
(九)珠簾繡柱(一〇)圍黃鵠。
(一一)錦纜牙檣(一二)起白鷗。
回首可憐(一三)歌舞地。
(一四)秦中自古(一五)帝王州。

〔六〕 瞿唐峽口と曲江の頭と、
萬里風煙素秋に接す。
花萼の夾城御氣通ず、
芙蓉の小苑邊愁に入る。
珠簾繡柱をば黃鵠圍み、
錦纜牙檣に白鷗起る。
首を回らせば憐む可し歌舞の地、
秦中は古より帝王の州。

【字解】【一】瞿唐峽　夔州にあり、已に見ゆ。【二】曲江　長安郊外にあり、已に見ゆ。【三】萬里　夔州と長安との距離遠きをいふ。【四】風煙接素秋　素秋にあたりて風煙相接するをいふ、素とは白なり、秋の色を白とす。【五】花萼夾城　花萼と夾城とは元來は別物なれどもここは一つに看なしていへり。唐の南内(南の御所)を興慶宮といふ、宮の西南隅に花萼相輝・勤政務本の樓あり、玄宗の開元二十六年六月、范安及を遣はし花萼樓を廣め夾城を築きて芙蓉苑に至らしむ。芙蓉苑は曲江の園なり、夾城とは左右に障壁を築きたる道路なり、他人に見られぬためと、危害に對する警備のためとによりてかくするなり。この夾城の道路は更に複道とて高下二重に道を設け天子は高き方の道をとほる。花萼樓よりつゞく夾城なるにより一つにみなす。【六】通御氣　御氣とは天子の氣をいふ、天子の在る所には雲氣あり、之を御氣といふ、通とは長安より夔州までとほりかようてくるをいふ。謂はゆる風煙相接するなり。【七】芙蓉小苑　小さき芙蓉苑といふこと。曲江は秦の時には宜春苑を置きたり、漢の文帝曲江の曲の字をにくみ、且其地芙蓉多きにより芙蓉園といふ。唐亦離宮を置き芙蓉園といふ。夾城・芙蓉園については更に卷二、樂遊園歌(卷二の九六・九七頁)をみよ。【八】入邊愁　舊解多く邊愁入とよみ、安祿山或は吐蕃の亂のための邊境に對する愁が苑に入りこんだと說けり。誤なり。邊愁とは作者の邊地に於ての愁をいひ、入邊愁とは苑が我が邊愁の中に入るをいふ。邊愁を邊境に對する愁ととくは已に非なり、まして邊愁といふ主觀的のものが苑の中に入り來るとはなほさら義を爲さず。且鄙說の如く考ふるを正當とする證をいはん。作者の祖父杜審言が「渡湘江」七言絕句にいふ、「遲日園林悲昔遊、今春花鳥作邊愁」と。この邊愁とは審言湘江のかたゐなかへ來りしにより邊地たる湘江にての自己の愁をさしていへるなり。又作者の「寄裴施州」詩(卷二十にみゆ)に、「三歲爲客寬邊愁」とあり。この邊愁は作者邊地たる夔州にての自己の愁をさしていへり。邊愁の作者の愁をいふものたること明白なり。【九】珠簾繡柱　珠をかざりしすだれ。ぬひとりの切れを施したはしら、離宮に屬するものなり。【一〇】圍黃鵠　黃鵠は鳥の名、これが實物なりや否につき異說あり。實物とするものは池苑中に棲む鳥とす。別說は簾柱のぬひとりの模樣とみるなり。今模樣とする說に從ふ。【一一】錦纜牙檣　にしきのともづな、象牙の飾りを施したほばしら。池苑に泛べらるる御船のさまなり。【一二】起白鷗　白鷗は池水に棲むしろきかもめ、實物なり。起とは水に泛びしものが御船のすぐるによりて飛びたつをいふ。【一三】歌舞地　天子が遊幸せられ歌や舞をしておたのしみになつたところ。卽ち曲江の離宮あたりをさしていふ。【一四】秦中　關中といふの類、秦の都せし地、卽ち長安をさす。【一五】帝王州　帝王が居住せらるる州、都たるべき處なるをいふ。第七第八の句は前後置きかへてみるべし。

【題義】この第六首は昔年天子曲江の離宮への御遊を追想して現時の荒廢を歎せり。

【詩意】　ここの夔州の瞿唐峽の口と長安の曲江の頭とは萬里の遠きを隔ててをるが秋にあたりて風煙はるかに相接してをる。すなはち彼地の花萼の夾城からここまで天子の氣がかようてをるし、かの大きくもない芙蓉園の樣子が自分のここでの愁のこころのなかにはつきりはいつてくる。そのかみの御遊のをりには御殿には繡柱がたちならび、珠のすだれがかけつらねられ、黃鵠のぬひとり模樣がぐるりととりかこみ、御船遊びのときには錦纜牙檣のすぐるところ白い鷗を飛びたたせたものである。（しかるにいまのありさまはどうであるか）古來秦中は帝王の居住あそばさるる州であるにかかはらず、ふりむいてかんがへてみるとあの盛に歌舞の遊をきはめられた場所も憐むべき狀態に陷つてをるではないか。

〔七〕昆明池水漢時功　〔七〕昆明池水漢時の功

（一）昆明池水（二）漢時功。　昆明池水漢時の功、
（三）武帝旌旗在眼中。　武帝の旌旗眼中に在り。
（四）織女機絲虛夜月。　織女の機絲夜月に虛しく、
（五）石鯨鱗甲動秋風。　石鯨の鱗甲秋風に動く。
波漂（六）菰米（七）沈雲黑。　波は菰米を漂はして沈雲黑く、
露冷（八）蓮房（九）墜粉紅。　露冷にして蓮房墜粉紅なり。
（一〇）關塞（一一）極天（一二）唯鳥道。　關塞極天唯だ鳥道、
（一三）江湖（一四）滿地（一五）一漁翁。　江湖滿地一漁翁。

【字解】【一】昆明池　池の名、長安縣西二十里にあり、周回四十里、漢の武帝の元狩三年、讁吏を發して之を穿たしむ。武帝之を作りて滇池（雲南にあり）に象り、以て水戰を習はしむ。武帝は身毒國（今の印度）と交通を開かんとせしに昆明國（雲南）が路を閉ぢしにより之を征伐せんと欲せしなり。【二】漢時功　漢代にしでかしたる事功なるをいふ。【三】武帝旌旗在眼中　武帝旌旗とは武帝の造りし樓船上の旌旗をいふ。「史記」平準書にいふ、武帝大に昆明池を修め、樓船を治む、高さ十餘丈、旗幟を其上に加ふ、甚だ壯なり、と。又「西京雜記」にいふ、昆明池中には戈船・樓船各〻數百艘あり、樓船の上には樓櫓を建て、戈船の上には戈矛を建て、四角に幡を垂れ、旍旄葆麾、涯涘を照灼す、と。船容の壯想ふべし。在眼中とは今猶彷彿として之を見るをいふ。此句表面は漢の武帝をいふも實は漢を借りて唐を言ふものにして玄宗の事をいふなり、作者の寄賈司馬嚴使君兩閣老五十韻詩（卷八にみゆ）に、無復雲臺仗、虛修水戰船、の語あり、玄宗も亦曾て船を此に置きたるを知るべし。【四】織女機絲虛夜月　曹毗が「志怪」にいふ、昆明池には二石人を作り、東西相望ましめ、牽牛織女に象る、と。又西都賦注にいふ、牽牛織女を左右に作り以て天河に象る、と。織女あれば機杼あり、よりて機絲といふ。虛夜月とは織女の石機の形體のみいたづらに月下に存するをいふ。【五】石鯨鱗甲動秋風　「西京雜記」にいふ、昆明池には玉石を刻して鯨魚をつくる、雷雨に至る毎に常に鳴き吼え鬐尾皆動く、と。動秋風とは今日猶鱗甲が秋風に動きつつあるがごとくなるをいふ。【六】菰米　彫胡米といふものなり、まこもに似たる植物にみのる一種の米なり。【七】沈雲黑　沈雲とは水底にうつれる米の影をたとへていふ、米のもみ黑きにより雲色亦黑し。【八】蓮房　はすのはなぶさ。【九】墜粉紅　粉は蓮花の花粉なり、墜粉はこぼれおつる花粉、紅とは墜粉のふるびてすこしくあかみを帶ぶるをいふ。【一〇】關塞　せきしよ、とりで。夔州の城塞をいふ。【一一】極天　天にいたる、鳥道の高きをいふ。【一二】鳥道　飛鳥のすぐる道。【一三】江湖　江と湖、夔州及び荊南をかけていふ。【一四】滿地　浦氏は江湖滿地とは漂流處處といふの類とときたり。愚案ずるにこの滿地は土地全部の義なれば「到る處」といふの意ならん。【一五】一漁翁　自己の漂泊することと一漁翁のごとくなるをいふ。

【題義】この第七首は長安の昆明池のことを思ひ、現在自己の之と遠く離れたるを歎じたり。

【詩意】漢代の人の功によつて長安の昆明池はできたものであるが、あの池の水に武帝の樓船の旌旗がうかんでゐたさまは今もはつきり眼のなかにある樣だ。があそこでは織女の石像の機織絲もいたづらに夜の月の下に形體ばかりをとどめ、石造の鯨の鱗甲もむなしく秋風に動きつつある。さうして黑くみのつた菰米は波にただよはされてその影が沈める雲の黑きが如くみえ、露冷に置いた蓮の花房からはおちちる花粉があからみながらこぼれてゐる。(自分はそんな樣子を思ひ浮べるのだが)ここの城塞から長安の方をながめやると、唯だ鳥のかよひぢが一すぢ天にとどく樣に高く橫はつてをるばかりで、此の身は江湖到る處飄泊を事としてをるひとりの漁の翁として存在するにとどまるのである。

〔八〕昆吾御宿自透迤

(一)昆吾御宿自透迤(二)。　昆吾御宿自から透迤たり、
(三)紫閣峰陰入渼陂。　紫閣峰陰渼陂に入る。
(四)香稻啄餘鸚鵡粒、　香稻啄み餘す鸚鵡の粒、
(五)碧梧棲老鳳凰枝。　碧梧棲み老ゆ鳳凰の枝。
(六)佳人拾翠春相問、　佳人の拾翠をば春相問ふ、
(七)仙侶同舟晚更移。　仙侶同舟晚に更に移る。
(八)綵筆昔曾干氣象、　綵筆昔曾て氣象を干しき、
(九)白頭吟望苦(一〇)低垂。　白頭吟望低垂に苦しむ。

〔八〕昆吾御宿自から透迤たり

【字解】【一】昆吾御宿　昆吾は地名、御宿は川名なり。羽獵賦序に曰く、武帝廣く上林を開き、東南、宜春・鼎湖・昆吾・御宿に至る、と。「長安志」に云ふ、昆吾亭は藍田縣境に在り、御宿川は萬年縣の西南四十里にあり、と。長安より渼陂に至らんとするに經過すべき處なり。【二】透迤　うねりたる貌。【三】紫閣峰陰入渼陂　紫閣峰・渼陂については、「渼陂行」の句解 卷三の一九二頁をみよ。渼陂はつつみの名、鄠縣の西五里にあり、終南山の諸谷より出で胡公泉を合して陂となる、廣さ數里、上に紫閣峰あり、紫閣峰は終南山中の一峰なり。峰陰の陰は北をいふ。【四】香稻啄餘鸚鵡粒　香稻には鸚鵡の啄むべき粒が啄みのこされてあり。この鸚鵡は富貴の家にありてはここに産する米粒を以て飼養せられしもの。啄餘の餘字、仇氏は殘字に依る、今餘に從ふ。【五】碧梧棲老鳳凰枝　碧梧には鳳凰が棲むべき枝が棲みふるされてあり。この鳳凰はかつてはこの枝に棲みたりしはずなり。今鳳凰在らずして枝のみあるなり。稻は水についていひ、梧は陸についていふ。香稻・碧梧は昆吾御宿に關していひ、秋節をいふ。【六】佳人拾翠春相問　佳人拾翠とは洛神賦に、或採明珠、或拾翠羽、とある意を用ひたり。賦にては女神たちが水邊に嬉戲することをのべしものにて嬉戲の際には首飾たる明珠や翠羽をおとすものあり、それをおたがひに或は採り或は拾ふことをいへり。ここの佳人拾翠は春の野あそびを試みる美人たちの他人のおとせる翠羽を拾ふをいふ。春相問、一說に曰く、問は問遺なり、と。おくるなり。一說に曰く、問は問勞なり、と。いたはるなり。問者は誰なりやといふに解するもの曰く、佳人こもごも相問遺、(或は相問勞)するなりと。余謂ふに、これは自己を主としていへるものにて作者自己が問ふをいふならん、問とは問遺・問勞などのかたくるしき義に非ず、「樣子をみる」といふくらゐの輕き意なるべし。此句春節をいふ。此句及び次句は渼陂についていふ。【七】仙侶同舟晚更移　仙侶同舟は李郭仙舟の故事を用ふ、後漢の李膺、郭泰(林宗)と舟を同じくして濟る、衆賓之を望みて以て神仙と爲すといふ。其實は作者、岑參兄弟等と渼陂の遊を爲せしことなどをさすなり。晚更移の移は一處に遊びあきてまた他處に移りゆくをいふ。此句は夏節をいふ、陳廷敬曰く、佳人の句は城西陂泛舟詩 卷三の一九〇頁の

意、仙侶の句は渼陂行（卷三の一九三頁）の夜遊の意なりと、其說從ふべし。【八】綵筆昔曾干氣象　綵筆は文彩ある筆をいふ。干氣象とは作者の他詩に氣衝星象表、詞感帝王尊とあると同じく其の勢、天の氣象をもをかしゝのぐをいふ。作者の「莫相疑行」に、往時文彩動人主、此日饑寒趨路旁とあるも類似の意なり。仇氏は裴緩の說により干氣象とはただ氣、山水を凌ぐことにて渼陂行等の詩篇のことをさすと爲したれども余は服せず。【九】白頭吟望　仇氏は張遠の說により吟を今の訛字なりとし今と改めたり、拘泥の見といふべきのみ、余は故に吟の字に復す。白頭吟望とは白頭の身を以て今製したる詩篇を吟じ且つ長安の方を望むをいふ。【一〇】苦低垂　白頭の低く垂るるにくるしむ、意氣の甚だ揚らざるを歎ずる辭なり。

【題義】この第八首は長安城西の勝遊を思ひ、今の衰老を歎息するなり。

【詩意】長安の西の方面では昆吾だの御宿だのといふところのあたりの地形がうねりくねつてをる、そこらをとほつて紫閣峰の北、渼陂へといりこむのである。途中では秋は香稻に鸚鵡の啄むべき粒がのこされてをり、碧梧には鳳凰の棲むべき枝が棲みふるされてゐたりした。又春は佳人の野あそびして翠羽を拾ふ樣子をたづねたり、夏は仙人なかまと同じ舟にのつて晩になつてもかまはず場所がへをしてあそんだりした。この自分は昔はかつて文彩の筆を以て天の氣象をもをかしゝのいだことのあるものであるが、いまや老衰して白髮あたまをかかへてこの諸詩篇を吟じつつ長安の方をながめやるにどうもあたまがたれさがりがちでこまるのである。なんといくぢなうなつたものではないか。

（二）詠懷古跡五首　古跡に詠懷す　五首

〔一〕　支離東北風塵際　〔一〕　支離たり東北風塵の際

（三）支離東北風塵際、　支離たり東北風塵の際、
（四）漂泊西南天地間。　漂泊す西南天地の間。
（六）三峽樓臺淹日月、　三峽の樓臺日月淹しく、
（八）五溪衣服共雲山。　五溪の衣服雲山を共にす。
（一〇）羯胡事主終無賴、　羯胡主に事ふる終に無賴なり、
（一三）詞客哀時且未還。　詞客時を哀みて且つ未だ還らず。
（一六）庾信生平最蕭瑟、　庾信生平最も蕭瑟、
（一八）暮年詩賦動江關。　暮年詩賦江關を動かす。

【字解】【一】詠懷古跡　古跡に於て我が懷を詠ずる義ならん。陶淵明が詩題に「懷古田舍」といへるものあり。田舍に於て往古を懷ふことをいへり。杜甫の詩題亦之と相類する命名なるべし。浦起龍は詠懷と古跡と二種なりとして曰く、第一首は詠懷なり、古跡と無關係なり、詠懷は下の四首とも關係なし、詠懷古跡の四字はもと兩題なり。或は同時に作りしものを誤りて合して一となせしのみ、井せ讀むは殊に語を成さず、必ず原文に非ず、と。亦一說に供ふべし。浦氏が第一首を詠懷なりといふはよし、古跡と無關係なりといへるについては一言する要あり。信は梁の元帝の時江陵（卽ち荊州）にあり。信が哀江南賦に其の江陵に住せしことをのべて曰く、誅茅宋玉之宅、穿徑臨江之府、と。臨江は江陵なり、宋玉が宅は江陵の城北三里にあり、と。これ荊州に宋玉が宅ありて信之に居るなり。又作者の舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄詩にも庾信羅含俱有宅（卷二十一）の句あり。又「淸一統志」にいふ、荊州枝江縣（江陵の上流にあり）の東百里洲に庾宅あり、庾子山の宅なりと相傳ふ、と。之に據れば荊州に庾信が遺跡あるなり。杜甫或は信が故宅を訪ひ、若くは故宅を想像して此詩を賦せしに非ずとは言ふべからず。余は次の宋玉の宅、昭君村なども甫實に之を訪ひしや否やを疑ふものなればそれとひとし

く此詩も庾信が宅より興をおこしてよめるものなりとす。然らば古跡と關係なきには非ざるなり。【二】支離　語は「莊子」人間世にみゆ、形體不全の貌なり。蓋し兄弟親族等離散の狀をいふ。仇氏は流離（おちぶれる）の意とせり。【三】東北風塵　河南・陝西・甘肅等をさして大體に於て東北といへり。作者は洛陽、長安、鳳翔、秦州、同谷、等にありしをいふ。風塵は兵亂のちりをいふ。【四】漂泊　ただよひあるく。【五】西南天地　蜀に於て東川・西川に往來し、今又夔州に居る、これ西南の天地なり。【六】三峽樓臺　三峽は已に屢〻見ゆ。諸説ありて或は瞿唐・巫山・黃牛をかぞへ、或は月峽・巴峽・巫峽をかぞへ、或は明月・巫山・廣澤をかぞふ。余は瞿唐峽・巫峽・歸峽（宜昌にある西陵峽）を以て三峽とする説による。三峽の樓臺とは瞿唐峽の樓臺をいひ、作者の寓する夔州の西閣をさす。【七】淹日月　淹は久しく留まるをいふ。【八】五溪　湖南省辰州にあり、雄溪、樠溪、酉溪、沅溪、辰溪をいふ。夔州よりは殆ど正南にあたる。「後漢書」南蠻傳にいふ、武陵の五溪蠻は皆槃瓠の後なり、槃瓠は犬なり、高辛氏の少女を得て六男六女を生む、織績し皮を衣る、五色の衣服を好む、と。五溪の衣服とは五溪蠻の五色の衣服を好むものをいふ。【九】共雲山　雲のゐる山をともどもにしてゐる。殊俗と雜處するをいふ。【一〇】羯胡　安祿山をいふ。【一一】事主　主は天子、玄宗をさす。【一二】無賴　あてにならぬものをいふ、或は狡猾なるをも無賴と稱す、祿山は玄宗に叛きたれば主に事ふることあてにならぬものなり。【一三】詞客　文學の士をいふ。自己をいふ。【一四】哀時　時世の事についてかなしむ。【一五】且未還　まづまづいまだに故鄕にかへらずにゐる。【一六】庾信　庾信は作者以て自ら比す。信、字は子山、梁の庾肩吾が子なり、徐摛が子陵とともに文章綺艶、世に徐庾體と號す。梁の元帝位に卽くや右衞將軍に拜し、武康縣侯に封ぜらる。西魏に使するやたまたま西魏滅す、遂に北周に仕へ長安に留まる。官、司宗中大夫に至る。信、北周に在り位望通顯なりと雖も常に鄕關の思ひあり、嘗て哀江南賦を作りて以て其意を致す。中にいへるあり、曰く、將軍一去、大樹飄零、壯士不還、寒風蕭瑟、又曰く、提挈老幼、關河累年、と。又信が傷心賦に曰く、對玉關而羈旅、坐長河而暮年、と。杜甫の詩意、賦語に本きて活用せり。生平　平生に同じ。【一七】蕭瑟　意中のさびしきをいふ。【一八】暮年　晚年をいふ。【一九】詩賦　信がつくりし詩又は賦。【二〇】動江關　江關とは江南・關中の二地をいふ、動江關とは江關人士の心を感動せしむるをいふ。（仇氏は江關を江南の意とし、信初め江南に在りしを以て其地をさして江關といふと爲せり。今從はず）

【題義】古跡に於て自己の懷ふ所を詠じた詩。五首あり。大曆元年身夔州に在り未だ各古跡に到らずして豫想して作りしか、それとも大曆三年峽を下り各處を經てのち作りしものを後日類によりてかくひとまとめにせしかは、詳ならず。全部を豫想の作とみるときは「古跡に於ける詠懷」といはんよりむしろ「古跡に關しての詠懷」といふを適當とす。この第一首は庾信を借りての詠懷なり。

【詩意】自分は前には東北方面の兵亂の塵のあはひにちりぢりばらばらの目にであひ、現今は西南方面の天地の間に漂泊生活を送つてをる。ここの三峽での樓臺で可なり長いあひだの月日を逗留してをり、五色の衣服を好む樣な五溪あたりの蠻人と共同に雲山に住んでをる。その原因をかんがへてみると結局あの羯胡たる安祿山のやつめが君におつかへすることとたのもしからぬものがあつたからであつて、そのために文學に從事する自分が時世をかなしみながらいまに故鄕へかへらずにをるのである。むかし庾信は異鄕へいつてふだん人なみこえてさびしいおもひをして、その晚年故鄕をおもふ詩賦を作り、その哀れさが江南關中を感動せしめたのであるが、自分はまさにその庾信である。

〔二〕搖落深知宋玉悲　〔二〕搖落深く知る宋玉が悲み

搖落深知宋玉悲。搖落深く知る宋玉が悲み、

【字解】【一】搖落　秋の樹の葉

風流儒雅亦吾師。　風流儒雅も亦た吾が師。
悵望千秋一灑涙、　千秋を悵望して一に涙を灑ぐ、
蕭條異代不同時。　蕭條異代時を同じくせず。
江山故宅空文藻、　江山の故宅空しく文藻、
雲雨荒臺豈夢思。　雲雨荒臺豈に夢思ならむや。
最是楚宮倶泯滅、　最も是れ楚宮倶に泯滅す、
舟人指點到今疑。　舟人指點して今に到りて疑ふ。

の風にゆられおつるをいふ。宋玉が九辯に曰く、悲哉秋之爲氣也蕭瑟兮草木搖落而變衰、と。【二】深知　自己も深く之を知る。【三】宋玉悲　宋玉が秋に對してなせる悲み。宋玉は秋を悲めるにより悲秋宋玉の故事をなす。【四】風流儒雅　宋玉の人物をいふ。風流にして儒者らしくみやびなり。【五】亦吾師　亦とは上の悲秋ばかりでなくこれもまたといふなり。【六】悵望千秋　千年の上代をうらめしくながめる。【七】一灑涙　一は「もつぱら」の意。【八】蕭條　さびし、中間に人物とだえたるをいふなり。【九】異代　宋玉と自己とは生れいでし時代おなじからず。【一〇】江山故宅　舊注によれば宋玉の歸州の宅をさすといへり、然れども愚見によれば必ず歸州の宅をさすとの確證あるなし。宋玉の宅は杜甫自らの言によるも二種あり、卷十八送李功曹之荊州充鄭侍御判官詩の言即宋玉宅、每歎到荊州、は荊州にある宋玉が宅をいふ、前詩の庾信が住みしといふ江陵城北の宋玉宅是なり。同卷十八「入宅」詩の宋玉歸州宅、雲通白帝城、は歸州にある宋玉が宅をいふなり。「清一統志」に宅は歸州の東二里にありといへり。此詩は二種のうち其のいづれをさすや明ならず。宅とはやしきをいふ。【一一】空文藻　文藻とは宋玉が作りし詞賦のあやをいふ、空文藻とは屋舍亡びて文藻のみがむなしく存するをいふ。【一二】雲雨荒臺豈夢思　此句諸說あり。余は愚見をのべん。雲雨荒臺、楚の懷王が夢に神女に會せしといふ陽臺をいふ、宋玉が高唐賦にいふ、昔先王（懷王をいふ）嘗遊高唐、夢見一婦人、王因幸之、去賦辭曰、妾在巫山之陽、高丘之岨、旦爲行雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下、と。荒臺といふは現にあれてなる臺なるをいふ。「清一統志」にいふ陽臺山は巫山縣城内北隅にあり、高さ百丈、上に陽雲臺の遺址あり、と。豈夢思とは反語にみる。宋玉の賦せし所は必ずしも夢幻虛構の想像に非ず、其の事實在りといふなり。余案ずるに作者此詩を作りしとき必ず玄宗と楊貴妃との事を暗におもひうかべて結びつけしならん。【一三】最是　「最も心を傷ましむるものはこれ」の意。【一四】楚宮　即ち楚王の宮、巫山縣東北一里にありと。【一五】倶泯滅　倶とは宋玉の古屋舍とともにの意、泯滅はほろびてなくなりしこと。【一六】舟人指點　船頭が指ざしする。【一七】到今疑　今日となつてはどこが昔のその場所なるかさだかならず、そこかここかと疑ひ迷ふをいふ。卷十五夔州歌の楚宮猶對碧峰疑の疑字と同意。

【題意】この第二首は宋玉が宅についての懷ひをのべたり、但、その宅の荊州のものなるや歸州のものなるやは不明。

【詩意】むかし宋玉は秋風搖落に對して悲んだといふが自分もいま深く彼の悲みの意味を知つた。又彼は風流儒雅の人物であるがこの點も亦吾が師とすべきものだ。彼と我とは代を異にして時を同じくして生れあはさぬことはまことにさびしい、自分はただ千年のむかしをうらめしくながめてもつぱら涙をそそぐのである。江山のあひだに彼の故宅はのこつてゐるが屋舍などは今はなくなつて彼の製作した詞賦のあやのみが空しく存在してゐる、彼が行雲行雨、陽臺之下、とうたうた臺が荒れながらあるが、彼がその臺のことを賦したのはどうして夢幻の思ひからでたものなどであらう。事實あつたことにちがひない、（「自分もおもひあたることがある」との意ならん）。ひとり彼の宅ばかりではない、

最も傷心にたへぬことは、楚王の宮までも彼の宅とともにほろんでしまつたことで、今になつては舟人がその場所を指してそこかここかなどと眞僞にまようてゐるのである。

〔三〕　羣山萬壑赴荊門

羣山萬壑赴荊門。　羣山萬壑荊門に赴く、
生長明妃尙有村。　明妃を生長す尙ほ村有り。
一去紫臺連朔漠。　一たび紫臺を去つて朔漠に連る、
獨留靑塚向黃昏。　獨り靑塚を留めて黃昏に向ふ。
畫圖省識春風面。　畫圖に省識せらる春風の面、
環珮空歸夜月魂。　環珮空しく歸る夜月の魂。
千載琵琶作胡語。　千載琵琶胡語を作す、
分明怨恨曲中論。　分明怨恨曲中に論ず。

〔三〕　羣山萬壑荊門に赴く

【字解】【一】 荊門　山の名、荊州府宜都縣西北五十里にあり、虎牙山と相對す。【二】 明妃　漢の王昭君をいふ、晉の時、文帝は名は昭、因つて晉人は昭の諱を避けて明君といふ、明妃とは元帝の妃明君の意。漢の王嬙、字は昭君、元帝の宮人となる、竟寧元年、匈奴の呼韓邪單于來朝し、漢の壻となりて親まんと請ふ、元帝、王嬙を以て單于に賜ふ、單于の子雕陶莫皐立つ、復た王嬙を妻とす、昭君死して黑河の岸に葬る。なほ「畫圖省識」の句解をみよ。【三】 尙有村　王嬙は蜀郡秭歸の人、今荊州府歸州の東北四十里にあり。【四】 紫臺　梁の江淹が恨賦にいふ、明妃去時、仰天太息、紫臺稍遠、關山無極、と、李善が注に紫臺は紫宮なりといへり。紫宮は紫色の彩を施したる漢の宮殿をいふ。【五】 連朔漠　朔漠は北方の沙漠、連とは沙漠のつづきなどこまでもゆくをいふ、卽ち恨賦の關山無極の意。【六】 靑塚　昭君の墓なり、「清一統志」にいふ、塚は山西省朔平府歸化城の南二十里にあり、蒙古名は特木爾烏爾虎といふ、と。其地は多く白草なるに昭君の塚のみは靑し、よりて靑塚といふと。【七】 畫圖省識春風面　「西京雜記」に曰く、元帝、後宮旣に多し、畫工をして形を圖せしめ圖を按じて召して之を幸す。宮人皆畫工に賂ふ、昭君自ら其貌を恃みて獨り與へず、乃ち惡しく之を圖す、遂に見ゆることを得ず、のち匈奴來朝して美人を求めて閼氏（匈奴の單子の后）となさんとす、帝、昭君を以て行かしむ。去るに及び召し見るに貌、後宮第一たり、帝之を悔い其事を窮按し、畫工毛延壽を棄市す、と。畫圖とは畫工のかきし昭君の畫像をいふ、省識とは元帝が之をかへりみみしりしをいふ、（省の字を略の義ととく說あり、非なり）昭君よりいへばみしられしなり。春風面とはうつくしき顏色をいふ。【八】 環珮　婦女子の身に帶ぶる金環や玉佩をいふ。【九】 夜月魂　月夜に乘じての昭君の靈魂、昭君身は匈奴に死して漢の方へかへる能はず、魂のみがかへる。【一〇】 千載　千年の後をいふ。【一一】 琵琶　びはの音曲をいふ。【一二】 作胡語　仇注に朱鶴の說を引きて昭君が自作の「怨詩」の中に於て胡語を爲して悲憤を訴ふる意とときたり。昭君は漢人なれども匈奴に嫁したれば匈奴の胡音にて詩をもつくるとみなせしに似たり。余案ずるに琵琶曲中にていふことが胡語の樣にきこゆるといふまでの意なるべし。【一三】 怨恨　昭君のうらみ。【一四】 曲中　琵琶の曲の中に於て。昭君が匈奴に入らんとするとき作りしと傳へらるる「怨詩」は左の如し。

秋木萋萋　其葉萎黃　有鳥處山　集於苞桑　養育毛羽　形容生光
既得升雲　上遊曲房　離宮絶曠　身體摧藏　志念抑沈　不得頡頏
雖得委食　心有徊徨　我獨伊何　來往變常　翩翩之燕　遠集西羌
高山峨峨　河水泱泱　父兮母兮　道里悠長　嗚呼哀哉　憂心惻傷

【題義】この第三首は王昭君の生れし村のことより昭君についての感をのべたり。仇注に「杜臆」を

引きて、宮に入りて妬まるると朝に入りて妬まるるとは千古同感ありといへり。昭君に同情して作れるなり。

【詩意】多くの山や壑が荊門山の方に向つて走つてゐる、かかる地勢のところ（歸州）にむかし明妃（王昭君）が生長したと稱せらるる村がまだのこつてをる。昭君は畫家に賂をせなかつたばかりに一たび漢の紫宮からたち去つてどこどこまでも沙漠の奧までいつてしまひ、（つひに匈奴の土となつたので）黃昏になりかかるころなど獨りさびしく彼の地に靑塚をのこしてをる。昭君は畫工が醜くかいた畫像によつてやつと天子にそのうつくしき顏をみしられたのであり、（生前はつひに寵愛を被らず）死後になつて月夜のをりなどその靈魂が環珮を鳴らして空しく漢へ歸つてくるといふ樣なきのどくなめにであうた。それで千年後の今日も琵琶にあはせてうたふ彼女の詩が胡地の言語の樣なふしをして、その怨恨のこころをはつきりと音曲のなかでかたつてをる。

〔四〕蜀主窺吳幸三峽

蜀主窺吳幸三峽。　蜀主吳を窺ひて三峽に幸す、
崩年亦在永安宮。　崩年亦た永安宮に在り。

翠華想像空山裏、　翠華想像す空山の裏、
玉殿虛無野寺中。　玉殿虛無なり野寺の中。
【原注】殿今爲臥龍寺、廟在宮東。

古廟杉松巢水鶴、　古廟の杉松に水鶴巢くひ、
歲時伏臘走村翁。　歲時伏臘に村翁走る。
武侯祠屋長鄰近、　武侯の祠屋長へに鄰近、
一體君臣祭祀同。　一體君臣祭祀同じ。

〔四〕蜀主吳を窺ひて三峽に幸す

【字解】【一】蜀主窺吳　蜀主は三國の時の蜀漢の劉備字は玄德をいふ、吳は吳の孫權の領土をいふ。「蜀志」にいふ、先主（劉備）孫權が關羽を襲ひしを怒り、遂に諸軍を帥ゐて吳を伐ち、秭歸に次る、章武二年（西暦二二二）猇亭に敗れ、步道より魚復に還り、魚復を改めて永安と爲す。三年四月、永安に殂す、と。是、吳を窺ふの事なり。【二】幸三峽　秭歸は歸州に在れば三峽の內にあり、幸は行幸、劉備を正統の天子としてみて下したる辭なり。【三】崩年　劉備の卒せし年、卽ち上記の章武三年をいふ。【四】永安宮　上に見ゆるごとく劉備は章武二年に魚復を永安と改めそこに永安宮を置きしなり。「清一統志」にいふ、永安宮城は今の夔州府奉節縣治にありと。【五】翠華　天子の旗。【六】想像　すがたをおもひうかべてみる。【七】空山裏　人なき山のうち。【八】玉殿　うつくしきごてん、永安宮の宮殿をいふ。【九】虛無　がらんどうなるをいふ。【一〇】野寺中　作者の自注に見ゆるごとく殿は作者の當時には變じて臥龍寺となり居りしものなれば野寺といふ。【一一】古廟　ふるびた劉備の廟。作者の自注に、廟は宮の東に在りといへば、上の玉殿卽ち野寺の東が廟なり。この廟は奉節縣東六里、白帝城の西郊、瀼溪の側にあるものなり、卷十五「謁先主廟」詩を參看せよ。【一二】水鶴　鶴の類ならん。【一三】歲時　一年、四時。【一四】伏臘　夏の伏日、冬の臘日、伏日とは五行思想にて金氣此日に至りて伏するをいふ、夏至の後第三の庚日を初伏、第四庚日を中伏、立秋後の初庚日を末伏となす、謂はゆる三伏なり。冬の臘日には百神を祭る、唐は冬至後の辰日に宗廟に臘享す。更に卷五の五一六頁「臘日」詩を參看せよ。【一五】走村翁　村の老人が祭をなすために奔走するをいふ。【一六】武侯祠屋　武侯は諸葛亮をいふ。此の

祠屋は卽ち卷十五「武侯廟」詩にうたへる廟、及夔州獻の武侯祠堂不可忘の祠堂と同一のものなり、上迭の先主廟の西に在るなり。【一七】長鄰近　長の字或は常に作る、同意なり。この長又は常の字は成都の祠廟を帶びていふなり。成都にても先主廟ありてその西が武侯廟なり。今ここの夔州に於ても亦同様なり。由りて長鄰近といへり。【一八】一體君臣　君臣一體といふに同じ。君たる先主と臣たる諸葛亮と同體にて離れず。【一九】祭祀同　同じ様にまつられてゐる。

【題義】この第四首は夔州の先主廟についての感をのべたり。

【詩意】むかし蜀の先主（劉備）が吳國の境土を窺ふために三峽へ行幸した。ところが敗軍をして崩じた年もやはり三峽の內であるここの永安宮に於てであつた。今や當時の玉殿はがらんどうになつて、野寺とかはつたなかに存してをるばかりであつて、自分はだれも人のゐぬ山のなかであの時の翠華の旗はどのあたりに建てられたであらうかなどと想像してみるのである。寺のとなりのふるびた先主の廟に生えてをる杉だの松だのには水鶴が巢くうてゐるし、一年・四時・伏日・臘日・などのそれぞれの祭日には村の老人などがあちこち奔走してをる。それから諸葛武侯の祠屋は（成都でもさやうであつたがここでも）いつも先主の廟ととなりあうてそばちかくあつて、君臣一體はなれずに同じ様に祭祀をいとなまれてをる。

〔五〕諸葛大名垂宇宙

〔五〕諸葛が大名宇宙に垂る

（一）諸葛大名垂宇宙。　諸葛が大名宇宙に垂る、

（二）宗臣遺像肅清高。　宗臣の遺像肅として清高。

（五）三分割據紆籌策。　三分割據籌策を紆らす、

（七）萬古雲霄一羽毛。　萬古雲霄の一羽毛。

（八）伯仲之間見伊呂。　伯仲の間に伊呂を見る、

（九）指揮若定失蕭曹。　指揮若し定まらば蕭曹を失せむ。

（一〇）運移漢祚終難復。　運移りて漢祚終に復し難く、

（一三）志決身殲軍務勞。　志決するも身は殲く軍務の勞に。

【字解】【一】諸葛　諸葛亮、字は孔明をいふ。【二】宗臣　後世の尊び仰ぐ所の臣、孔明をさす。語は「漢書」蕭何曹參傳贊にみゆ。【三】遺像　卽ち前詩の「武侯祠屋」の中にある像。【四】肅清高　嚴肅にしてさつぱりとして高し。【五】三分割據　天下を三分して其一に割據するをいふ、當時魏は曹操、吳は孫權、蜀は劉備と天下三つに分る。【六】紆籌策　紆の字を用ひたれども回又は運の字の意に用ふ。漢の高祖の語に、運籌策帷幄中とあり。孔明がはかりごとをめぐらせしをいふ。【七】萬古雲霄一羽毛　諸說紛紛たれどもみな取るに足らず。宋の王洙、淸の兪浙が說當れり、今之に依りてとく。萬古は永久にの意、雲霄はくも、おほぞら。一羽毛は鸞鳳凰の一羽毛をいふ。孔明の聲名の飛揚すること鸞鳳高く翔りて雲霄に獨步するがごとくともに匹をなすものなしとの意なり。更に愚見を以て之を補足せんに此句獨り鳳毛の高翔をいふのみにあらず、「衆人仰ぎて之を瞻る」ことをいへるならん。【八】伯仲之間見伊呂　伊呂を伯仲の間に見るなり。伊は殷の伊尹、呂は周の呂尙（太公望）、伊尹は湯王を輔け、呂尙は文王武王を佐く。孔明が人物この兩者の間にあり。伯仲は兄弟の順位なり。【九】指揮若定失蕭曹　「漢書」陳平傳に、指揮卽定矣の語あり。指揮定とは指揮一定するなり、天下皆孔明が指揮に服するに至るをいふ。蕭曹は漢の高祖の參謀たる蕭何、曹參をいふ。失蕭曹とは之あるも無きにひとし、蕭曹以上たり、

蕭曹も云ふに足らざるをいふ。【一〇】運移　蜀漢の國運が他へうつる。運命は魏に歸したり。【一一】漢祚　蜀漢のさいはひ、祚とは帝位をさす。【一二】終難復　復は恢復。【一三】志決　魏を伐つの志決するなり。孔明が「後出師表」に、鞠躬盡瘁、死而後已とあるは志決の度をみるべし。【一四】身殲　殲は盡くるなり、滅するなり。蜀漢の後主の建興十二年孔明北進して武功の五丈原に據り魏の將司馬懿と對陣し、相對すること百餘日、八月軍に卒す、年五十四。【一五】軍務勞　軍務につきて骨折りしこと。孔明は軍中の事巨細となく自ら決し、或は南征し或は北伐す、皆軍務に勞せし事なり。

【題義】　この第五首は諸葛廟につきて孔明が事に感じてよめるものなり。

【詩意】　諸葛孔明の大名は宇宙に垂れてをるが、この宗臣といふべき人の遺像は廟内に肅然として清く高く立つてゐる　孔明は天下を三分して其一に割據するについてはかりごとをめぐらし、其の聲名は萬古にわたつて雲霄に高く飛ぶ一の鳳毛のごとく仰瞻られてをる。孔明の人物は伊尹・呂尚・と兄たりがたく弟たりがたしといふ關係にある、天下若しこの人の指揮のもとに從うたとしたならば漢の蕭何・曹參以上の人物であるのだ。惜しいことに運命が移つて漢室の帝位もつひに恢復することがむつかしく、北伐の志だけは決してゐながら軍務の骨折りのためにからだがほろびてしまつたのである。

寄韓諫議注(一)

韓諫議注に寄す

今我不樂思岳陽(二)。　今我樂まず岳陽を思ふ、

身欲奮(三)飛病在牀。　身奮飛せむと欲すれども病みて牀に在り。

美人(四)娟娟(五)隔秋水(六)。　美人娟娟秋水を隔つ、

濯足(七)洞庭(八)望八荒(九)。　足を洞庭に濯ひて八荒を望む。

鴻飛冥冥(一〇)日月白。　鴻冥冥に飛びて日月白し、

青楓葉赤(一一)天雨霜(一二)。』　青楓葉赤く天霜を雨す。』

玉京(一三)羣帝(一四)集北斗(一五)。　玉京羣帝北斗に集まる、

或騎麒麟(一六)翳鳳凰(一七)。　或は麒麟に騎り鳳凰翳し。

芙蓉(一八)旌旗煙霧落(一九)。　芙蓉の旌旗煙霧に落つ、

影動倒景(二〇)搖瀟湘(二一)。　影倒景に動きて瀟湘に搖ぐ。

星宮之君(二二)醉瓊漿(二三)。　星宮の君瓊漿に醉ふ、

羽人(二四)稀少(二五)不在旁(二六)。』　羽人稀少 旁に在らず。』

似聞昨者(二七)[追]赤松子(二八)(二九)。　聞くが似くんば昨赤松子を[追]へりと

恐是漢代韓張良(三〇)。　恐らくは是れ漢代韓の張良ならむ。

【字解】【一】韓諫議注　諫議大夫韓注、蓋し岳陽の人ならん。【二】岳陽　湖南省岳州府。【三】奮飛　鳥のごとくふるひてとびゆく。【四】美人　韓注をたとへていふ。【五】娟娟　うつくしき貌。【六】秋水　秋の水、水とは揚子江、洞庭湖の水をいふ。【七】濯足　韓注が足をあらふなり、此二字滄浪歌の意をとる、滄浪の水が濁れる故足をあらふ。世亂れし故に退居するをいふ。【八】洞庭　岳州にある大なる湖の名。【九】八荒　八方のはて。【一〇】鴻飛冥冥　「揚子法言」の語、鴻飛冥冥、弋者何篡焉、とあり。鴻がくらがりに飛んでをればいぐるみをかける者も鴻を取ることができぬ。韓が世に遠ざかりて危害を避くるをたとへていふ。【一一】青楓葉赤　もみぢがあかくなる秋の節をいふ。【一二】

昔隨(三一)劉氏(三二)定長安。　昔劉氏に隨ひて長安を定む、
(三三)帷幄未改神(三四)慘傷。　帷幄未だ改まらず神慘傷す。
國家成敗吾豈敢(三五)。　國家の成敗吾豈に敢てせむや、
(三六)色難腥(三七)腐餐(三八)楓香。』　色腥腐を難りて楓香を餐す。』
(三九)周南留滯古所惜。　周南に留滯するは古より惜む所、
(四〇)南極老人應(四一)壽昌。　南極の老人壽昌に應す。
(四二)美人胡(四三)爲隔秋水。　美人胡爲ぞ秋水を隔つ、
(四四)焉得置之貢(四五)〔貢之置〕玉堂。』　焉ぞ之を貢して〔玉堂に置〕くことを得む。』

雨霜　雨はあめふらすをいふ。以上起六句は隔たりて居る韓注を思ふことをのぶ。【一三】玉京　白玉京なり、道家にていふ天の都なり。【一四】羣帝　道家にては東西南北に各〻八天、凡て三十二天ありて、三十二帝がこれに都すといふ。羣帝とはこれらの帝にて卽ち羣仙なり、諸王三公の如き貴人をたとへいふ。【一五】北斗　北斗七星なり、太微の北にあり。人君の象なり。天子をいふ。【一六】騎麒麟　「集仙錄」に羣仙畢く集る、位高き者は鸞に乘じ、次は麒麟に乘じ、次は龍に乘ず。鸞鶴は每翅各〻大さ丈餘、とみゆ。【一七】翳鳳凰　「杜臆」の說は翳は語助詞とし無意味の字とす。然れども翳は甘泉賦の翳華芝の翳のごとく蔽ふをいふならん、翳鳳凰とは鳳凰がむらがり來りためにそれにおほはるをいふ、「くらし」とよみて可なるべし。【一八】芙蓉旌旗　はすの花のはた。【一九】煙霧落　煙霧の中に落つるが如くなるをいふ、鶴鳳旌旗は騎從儀衞の盛なるをいふ。【二〇】影動倒景　影は旌旗の影、動は影がうごくなり、倒景は日月が日月の上方に向つて照らしあげるひかりをいふ。これは畢竟肉眼的主觀的の現象なり。【二一】搖瀟湘　搖は旌旗の影がゆらぐをいふ、瀟湘は瀟水と湘水、洞庭の南にあり。【二二】星宮之君　星の世界の諸仙人、天子の近侍者をたとふ。【二三】醉瓊漿　瓊漿はうつくしき飲料、酒の類。【二四】羽人　飛仙なり、「楚辭」にみゆ。都を去りて遠くに在る臣をたとふ、韓注のごとき是なり。【二五】稀少　かすすくなし。【二六】在旁　旁とは北斗（天子）の側をいふ、玉京以下六句は仙官を借りて朝廷貴人のことをのぶ。【二七】似聞　「きくが如くんば」なり。【二八】昨者　者の字にては此句義をなさず、恐くは誤字ならん。追或は從などの意味の字あるべきなり。暫く追の字として解かん。【二九】赤松子　張良が師とせる仙人なり。【三〇】韓張良　張良の父祖は韓の人なり、韓が秦に亡されたるにより漢の高祖に從ひて秦を滅し國の仇を復す、韓注は張良の生れ代りかといへるなり。【三一】劉氏　劉邦卽ち漢の高祖をいふ、蓋し肅宗を比していへり。【三二】定長安　長安の亂を平定す、蓋し韓注は安祿山の亂に長安を平定するにつき功ありしならん。【三三】帷幄未改　帷幄は陣中の幕なり、その中にて謀をめぐらす、漢の高祖曰く、運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不如子房功、と、子房は張良が字なり、未改とは張良の樣なはかりごとがそのままかはらずに存在するをいふ。【三四】神慘傷　韓注の精神がいたみいたむ、おもしろからぬ事できしをいふ。【三五】吾豈敢　吾とは韓注に卽していふ、豈敢とは謙遜の意なり、成敗に關する大事をむりにようせぬといふなり。【三六】色難　顏色のうへにてそれを爲すことをむつかしとする、はばかる。【三七】腥腐　魚獸の肉のくさく、くちたるをいふ。【三八】餐楓香　楓に香あるものあり、之を用ひて藥を和すといふ。似聞六句は韓注が官を去りし故をのぶ。【三九】周南留滯　「史記」司馬遷自序に見ゆ、遷の父談、周南（洛陽）に留滯して天子の封禪にあづかるを得ず。此の一節猶再考の餘地あるに似たるも暫く舊說に依る。作者自ら南土に寓するをいふ、卷十九奉送王信州崟北歸詩の太史尚南留の句以て證すべし。舊說韓注をいふとなすは余之を取らず。【四〇】南極老人　星の名、秋分の旦には丙に見え、夕には丁に沒す。見ゆれば治平なり、壽昌を主る。以て韓注に比す。【四一】應壽昌　星占の壽と昌とにあたる。【四二】美人　再び韓注をさしていふ。【四三】胡爲　何爲なり。【四四】焉得　希望の辭。【四五】置之貢玉堂　置之貢は貢之置の誤か。「之を貢して玉堂に置く」といふべきに似たり。楊倫は置之貢は倒句法なりといへるも余はしかもおもはず。貢は獻ずること、玉堂は朝廷の美しき堂。末尾四句は韓注を朝廷に致さんことを願ふ。

【題義】諫議大夫韓注に寄せた詩。大曆元年の作ならんか。

【詩意】自分はいま愉快な氣もちがせず君の居る岳陽のことを思ひ、奮うて飛んでゆかうとおもふが

病氣のため寢臺でねてゐる。ああ、うつくしい美人が秋水をへだてて遠方にをり、洞庭の水に足を濯うて八荒をながめてゐる。日月は白くかがやいてゐるのに鴻は害を避くるためくらがりに飛んでゐる。いまや楓は葉が赤くなつて天が霜をふらす時節である。』　いま天上の玉京では羣仙が北斗星の神の處に集まつてくる。或る仙人は麒麟に騎り或は鳳凰にのつて鳳凰の翅が虛空を蔽うてくらくするばかりである。芙蓉の旗が煙霧の中に落つる樣に見え、その旗影はまた天上の倒景に動いて下は瀟湘の水にもゆらめいてゐる。星界の諸仙人はそれぞれ瓊漿の飲みものに醉うた。が飛仙たちはいつかうに少數でだれも北斗の神のそばには居らぬ。』　聞けば前年君は赤松子のあとを追うて去つたとのことだから、君は恐くは漢代の韓の張良なのかも知れぬ。かつて君は劉氏のあとについて長安を平定した。しかるに祖先傳來不易の謀略をもちながらなにか心中におもしろくなく感じた事があつたか、國家成敗の大事にはじぶんごときものがどうして手が出せようかといつて退いてしまひ、とても腥腐のなまぐさ肉は喰へぬといふかほつきでいまは去つて楓香をたべものにしてをる。』　じぶんも昔の司馬談の樣に南方に滯留してをる、なにもせずかくしてくらすは昔から人に惜まるる所である、このをり君はまた南極老人星の如く南天にあらはれて壽昌の星占に應じてをられる。なんで美人はじぶんとかく秋水をへだててをるのであるか。どうにかして君を天子に貢獻して君を玉堂のうへに置いてやりたいものだとおもふのである。』

（一）解悶十二首

（二）草閣柴扉（三）星散居。浪翻江黑雨飛初。山禽引子（六）哺紅果。溪女得錢（九）留白魚。

（四）（五）（七）（八）

草閣柴扉星散して居る、
浪翻り江黑く雨飛ぶの初め。
山禽子を引きて紅果を哺し、
溪女錢を得て白魚を留む。

【字解】【一】解悶　もだえをとく。排悶・遣悶などの意。【二】草閣柴扉　一般住民のそれをいふ。【三】星散居　星の如く散らばりてをる。山上のさまをいふ。【四】浪翻　此句は江上のさまをいふ。【五】引子　ひなをひきつれる。【六】哺紅果　哺は口づからたべさせてやること、紅果はあかきくだもののみ。此句山上についていふ。【七】溪女　溪邊の女。【八】得錢　魚を買ひし人より錢をもらひうくるなり。【九】留白魚　留とは買ひ手のところにおいてゆくこと、白魚は白色の小魚。

【題義】悶を解くために作りし詩。其事がらは篇によりて同じからず。各篇をみて知るべし。詩中の一辭故國十經秋の句によれば大曆元年夔州にての作なるべし。至德二載より大曆元年まで十年なり。この第一首は夔州の風土についてのべたり。

【詩意】草葺きの閣や柴を結うた扉だのの粗末な家があちらこちら星が散らばつた樣にあつてそこにこその人民は住んで居る。そこへ雨が初めておちかかつてきて江面は黑く浪がひるがへつてをる。みれば山邊には禽が雛子をひきつれて紅の果實を口づからたべさせてゐるし、魚賣りの溪女は錢をも

らつて白魚を置いていつたりしてゐる。

〔二〕

商胡離別下揚州。
憶上西陵故驛樓。
爲問淮南米貴賤。
老夫乘輿欲東遊。

商胡離別して揚州に下る、
憶ふ西陵の故驛樓に上りしことを。
爲に問へ淮南米の貴賤、
老夫輿に乘じて東遊せむと欲す。

【字解】【一】商胡　胡商に同じ、胡人にて商をなすもの、但し胡といふも廣東以南の外商なり。【二】離別　作者とわかれる。【三】揚州　江蘇省揚州府江都縣治。【四】憶上　壯年時南遊せしとき上りしことをおもふ。【五】西陵故驛樓　西陵は今西興といふ、浙江省紹興府蕭山縣西十二里にあり、錢塘江をへだてて北方杭州と相對す、唐の時ここに驛ありしとみゆ。故驛樓とはもとからある驛の樓をいふ。【六】爲問　我がために問へ。淮南は淮水の南、揚州地方をさしていふ。【七】貴賤　たかいか、やすいか。【八】老夫　作者自己を稱す。【九】東遊　吳越方面をさして東といふ。淮南揚州は吳、西陵は越に屬す。

【題義】この第二首は夔州を去り吳越に遊ばんとの念あるをいへり。

【詩意】胡の商人が自分に別れをつげて揚州へ下らうとする。じぶんもむかし西陵の驛樓にのぼつたことがあることをおぼえてをる。おまへはあちらへいつたならばわたしのために淮南地方の米價はたかいかやすいかたづねてくれ、このおやぢは輿に乘じて東方吳越方面に遊びにでかけるつもりなのである。

〔三〕

一辭故國十經秋。
每見秋瓜憶故丘。
今日南湖采薇蕨。
何人爲覓鄭瓜州。

【原注】鄭祕監審

一たび故國を辭して十たび秋を經、
秋瓜を見る每に故丘を憶ふ。
今日南湖に薇蕨を采る、
何人か爲に覓めむ鄭瓜州。

【字解】【一】故國　長安をいふ。【二】十經秋　十たび秋をふ、十年をへしをいふ。至德二載より大曆元年まで十年なり。【三】故丘　故鄕の丘、少陵原をいふ。【四】南湖　荊州府江陵縣南三里にあり、唐の鄭審、江陵に謫せられしとき其のほとりに亭を構ふ。作者の夔州詠懷の詩にも南湖日叩舷の句あり。【五】采薇蕨　わらび、ぜんまいをとる。采るとは鄭審が之をとるなり。薇蕨をとりて食ふは貧居のさまをいふ。【六】爲覓　我がためにもとむるをいふ。【七】鄭瓜州　作者の自注にいへるごとく祕書監鄭審をさす、鄭審は已に見えしごとく鄭虔が姪なり。瓜州は卽ち瓜洲村なり、瓜洲村は長安（今西安府）の咸寧縣の南、神禾原のふもとにあり、潏水の陰にあり、杜佑が別業の在りし所にして鄭莊と近し。鄭莊は鄭虔の郊居にして、審は虔が姪なれば審が住居瓜洲村に在りしを想ふべし。

【題義】この第三首は鄭審を懷ひて作る。以下五首はみな詩友を懷ふ詩なり。

【詩意】自分はひとたび故鄕を辭してから十回の秋をすごした。秋の瓜を見るたびに故鄕の丘のことをおもふ。今荊州へ謫せられてをる鄭審は南湖で薇蕨を采つてたべてをるが、だれがじぶんのために彼鄭瓜州をたづねだしてくれるものがあらうか。（瓜につれて瓜洲に居たころの審がしたはしい、との

意。）

〔四〕

沈范早知何水部。曹劉不待薛郎中。【原注】水部郎中薛據

獨當省署開文苑。兼泛滄浪學釣翁。

〔四〕

沈范早く知る何水部、曹劉待たず薛郎中。

獨り省署に當りて文苑を開く、兼ねて滄浪に泛びて釣翁を學ぶ。

【字解】【一】沈范　梁の沈約、范雲。【二】早知何水部　何水部は梁の水部郎中何遜、「梁書」の何遜傳にいふ、范雲、其の（遜の）對策を見て大に相稱賞し、因つて忘年の交好を結ぶ。一文一詠、雲すなはち嗟賞す。沈約も亦其（遜の）文を愛し、嘗て遜に謂つて曰く、吾、卿が詩を讀む每に一日三復するも猶已む能はず、と。早知とは沈范二人はかく早くも何遜の文才を知りたるをいふ。【三】曹劉　魏の曹植、劉楨。梁の鍾嶸が「詩品」に「曹劉殆文章之聖」といへり。【四】不待　不待とは薛が後日生れ來るを待たず已に過去の人となりしをいふ。世を同じくせざるを惜むなり。【五】薛郎中　作者の自注にあるごとく唐の水部郎中薛據をいふ、薛據に贈りては卷二「同諸公登慈恩寺塔」詩以來作者屢〻詩あり。據は天寶六年、風雅古調科に及第し、水部郎中となり、給事中を贈らる。【六】省署　尚書省の役所をいふ。【七】文苑　文學の世界。【八】滄浪　ひろき水をいふ、必ずしも水名となさず、荊楚の江水をいふ。【九】釣翁　つりする老人。宋の陳師道が「後山詩話」に、省署開文苑、滄浪學釣翁、は薛據が詩句なりといへり、果して然るや否。

【題義】この第四首は薛據を懷ふことをのべたり。

【詩意】むかし沈約・范雲は水部の何遜の文才あることを早く知つたが、惜しいことに今の我が薛郎中は曹植・劉楨のごとき文豪に先だたれて其の知音を得るわけにゆかなくなつてをる。薛君は尙書省にゐたころは役所で一人で文壇を開いてをつたが、今はまた兼ねて滄浪の水に泛んで釣翁のまねをしてくらしてをる。

〔五〕

李陵蘇武是吾師。孟子論文更不疑。【原注】校書郎孟雲卿

一飯未曾留俗客。數篇今見古人詩。

〔五〕

「李陵蘇武は是れ吾が師」と、孟子の文を論ずる更に疑はず。

一飯未だ曾て俗客を留めず、數篇今見る古人の詩。

【字解】【一】李陵蘇武　漢の武帝時代の武人なり。其の作と稱せらるる五言詩「文選」に收錄せられ五言詩の祖とせらる。【二】是吾師　李蘇二人の詩は吾が師とするものなり。李陵蘇武是吾師の一句は孟雲卿の論詩の語の意なり。【三】孟子論文　孟子とは作者の自注にみゆるごとく校書郎孟雲卿をさす、卷六に「酬孟雲卿」「湖城遇孟雲卿」等の詩あり、論文の文はひろき意味にての文章にて詩をかねていふ。【四】更不疑　そのとほりにて疑ひを要せざるをいふ。【五】一飯　ひとたび飯をたべるにも。【六】留俗客　留とは雲卿が之を留むるなり、俗客は世間なみの俗人。【七】數篇　篇章のかず多からざるをいふ。【八】古人詩　古人とは漢の蘇武李陵のごときものの作る樣な詩。

【題義】この第五首は孟雲卿を懷ふことをのべたり。

【詩意】「李陵や蘇武の詩が吾が師とするものである」と孟雲卿はいうてをるが、彼の文章の議論はも

つともであつてまつたくそのとほりで更に疑ふべきところがない。彼は一たび飯するにもその席に俗客などをおいたことがないほど高雅な人物だが、彼の作は數篇であつてもそれは古人の樣な詩であつて、我我は今日にあつてさやうな名品を見ることができるのである。

〔六〕

復憶襄陽孟浩然。
淸詩句句盡堪傳。
卽今耆舊無新語。
漫釣槎頭縮頸鯿。

〔六〕

復た憶ふ襄陽の孟浩然、
淸詩句句盡く傳ふるに堪へたり。
卽今耆舊新語無し、
漫に釣る槎頭縮頸の鯿。

【字解】【一】襄陽孟浩然　孟浩然は襄陽に居る。浩然に關しては卷七遣興五首の第五首「吾憐孟浩然」の篇を參看せよ。【二】淸詩　淸麗なる詩の句。【三】堪傳　傳とは今及び將來につたへるにたふ。【四】卽今　今日。【五】耆舊　年老の人人、襄陽に於て生存せる長老たちをさす。晉の習鑿齒、襄陽耆舊傳を著はす、耆舊の二字之より借る。【六】新語　新製の佳句をいふ。【七】漫釣　鯿を釣るも詩句なし、これ漫釣なり。【八】槎頭縮頸鯿　鯿は頭の扁平なる魚、漢水に生ず。縮頸とは首をちぢめた樣のすがたなるをいふ、槎頭の槎は木をきりしあとにはえるひこばえにして「そだ」の類をさす。いま槎頭鯿といへば槎を設け鯿の棲處をせばめて釣るとみえたり。襄陽にてはむかし槎を設けて水を斷ち鯿をとることを禁じたりといふ。孟浩然が詩句に曰く、試垂竹竿釣、果得槎頭鯿、又曰く、鳥泊隨陽雁、魚藏縮項鯿、と。杜句之を用ふ。

【題義】この第六首は孟浩然を懷ふことをのべたり。

【詩意】じぶんはまた襄陽の孟浩然がことを憶ふ、彼はその作る淸らかな詩が、どの句もどの句もすつかり現代後世に傳ふることのできるものである。彼死しての今日は襄陽に長老たちはをるけれどもさつぱり新しい佳句といふものがなく、いたづらに槎頭の縮頸の鯿を釣るだけにとどまつてをる。

〔七〕

陶冶性靈存底物。
新詩改罷自長吟。
熟知二謝將能事。
頗學陰何苦用心。

〔七〕

性靈を陶冶する底物か存す、
新詩改め罷みて自ら長吟す。
熟知す二謝が能事を將てせしを、
頗る學ぶ陰何が苦に心を用ひしを。

【字解】【一】陶冶　つちをこね、かねをきたへる、そのごとく鍛錬する。【二】性靈　心のもちまへ、心の靈妙なるところ。【三】存底物　底は俗語、雅語の「何」なり、底物は何物、存底物とは「詩以外に何物か存する」の意。【四】新詩　あたらしくつくつた詩。【五】改罷　詩のおちつかぬ處を改正し了る。【六】長吟　ながくふしを引いて吟ずる。【七】熟知　よく心得てゐる。【八】二謝　宋の謝靈運、齊の謝朓、並に六朝にての詩の大家なり。【九】將能事　將は「もつて」なり、この「もつて」の裏面には動詞が省略されてあるはずなるも、註家明解を與へず。余愚見を以て之を補はん、蓋し「用心」の二字ならん。能事とは詩がよくできる腕前あるをいふ。（浦氏は將能事の將は「論語」子罕篇の天縱之將聖の將とおなじとし、朱子の注の意により殆の義とす、將能事と訓ますなり。二謝を以て事を能くするにちかからんとすとなすなり。）【一〇】陰何　陳の陰鏗、梁の何遜、二人亦其の時代の大家なり。【一一】苦用心　苦は「甚しく」の義、「ねんごろに」など訓ず。用心とは作詩のうへに周到な注意を加へることをいふ。

【題義】この第七首は作者が自己の詩觀と作詩の工夫とをのべたり。

【詩意】我我の性靈を陶冶するには詩をのぞいてそのほかに何物があるか、それには詩が唯一のものだ。だから自分は詩を貴重なる仕事とかんがへて新しく詩を作るとその不穩當な場所を改め、改め了れば自分で節つけて長く吟じてみる。自分は昔の謝靈運や謝眺が自己に詩をうまく作る腕前をもちながらやはり之を作るに苦心したことをよく知つてをる。(だからその樣にし、また)陰鏗や何遜が非常に作詩に心を用ひた態度を頗る學んでをるのである。

〔八〕

（一）不見高人（二）王右丞。
（三）藍田丘壑蔓寒藤。
（四）最傳秀句（五）寰區滿。
（六）未絕風流（七）相國能。

【原注】右丞弟今相國縉

〔八〕

見ず高人王右丞、
藍田の丘壑寒藤蔓る。
最も秀句を傳へて寰區に滿つ、
未だ絕えず風流相國の能。

【字解】【一】高人　高尙な人物。【二】王右丞　尙書右丞王維をいふ。維は乾元二年七月卒す。王維については卷六に「奉贈王中允維」其他諸詩あり。【三】藍田丘壑　藍田縣の丘や壑、王維の輞川の別墅をいふ。卷六「崔氏東山草堂」詩の何爲西莊王給事、柴門空閉鎖松筠、の句解をみよ。【四】最傳秀句　秀句は佳句なり、王維の秀句が他の詩人の句よりも最も世間へつたはる。【五】寰區　天下をいふ。【六】未絕風流　風流未絕と同意、王維の風流斷絕せず之を繼ぐものあるをいふ。【七】相國能　相國は卷十六「諸將」五首の第三首の稍喜臨邊王相國とある相國と同じく、王維が弟縉をさす。縉は代宗の廣德二年に同平章事（即ち宰相）となれり。由つて之を相國といふ。能は能事、或は能筆といふも可なるべし。當時の世評によれば詩を論ずれば王維・崔顥、筆、文章）を論ずれば王縉・李邕と稱せられ、祖詠・張說のごときは與るを得ざりしといふ。一句の意は相國の筆を能くするあるによりて風流未だ絕えざるをいふ。

【題義】この第八首は王維を懷ひあはせて王縉に及びたり。

【詩意】高人たる王右丞は此世の人でないから見ることができぬ。彼の歿後は藍田の山水もいたづらに寒藤がはびこつてゐるばかりである。彼の秀句はだれよりもいちばん世間に傳はつて天下ぢうに滿ちてをるが、その風流のあとをついで弟の王相國（縉）も筆（文章）がお上手である。

〔九〕

（一）先帝（二）貴妃今（三）寂寞。
（四）茘枝（五）還復入長安。
（六）炎方每續（七）朱櫻獻。
（八）玉座應悲（九）白露團。

〔九〕

先帝貴妃今寂寞、
茘枝還復長安に入る。
炎方每に朱櫻に續いて獻ず、
玉座應に悲むなるべし白露の團なるに。

【字解】【一】先帝　玄宗。【二】貴妃　楊貴妃。【三】寂寞　死後なるをいふ。【四】茘枝　龍眼肉に似たる果物の名。【五】還復　やつぱりまた。【六】炎方　熱帶地方をいふ、廣東の地をいふ、楊貴妃茘枝を好む、南海（廣東）より驛を馳せて之を長安に致さしむ、色味變ぜず、といはる。又蜀の涪州よりも之を進めしめしといふ。【七】續朱櫻獻　朱櫻は含桃或は櫻桃といひ櫻の實なり。「禮記」月令に、仲夏之月、天子、以含桃、先薦寢廟、とあり、歷朝五月に宗廟に櫻桃を薦むる例なり。朱櫻は之を內園に產する者に取りて貢獻によらず。續獻とは朱櫻が宗廟に薦めらるるあとをつぎてこの茘枝が貢獻せらるるをいふ。【八】玉座應悲　仇注に玉座を解きて先帝の神靈となせり。玄宗蜀より回りしとき嶺南、茘枝を進む、玄宗、

貴妃を念ひ畳えず悲愴して殆ど絶ゆ、高力士御座の旁に於て位を設けて之を享す、玄宗やうやく蘇息すとの話「唐史遺事」に見ゆ。仇注けかかる話に拘泥して上の如き解をなせしならん。然れども先帝の神靈をさして玉座といふはいかがのものにや、其の說首肯しがたし。余謂ふに玉座は現在の天子代宗の玉座をさす、悲とは代宗の茘枝について悲しみたまふをいふ。【九】白露團　團はまどかに凝結するをいふ、これ夏末の節をいふ、夏の末、露の結ぶころ茘枝の入り來るをみて先代の往事を追思して悲しみたまふならんとは代宗の御孝心をおもひたてまつるなるべし。

【題義】茘枝について今昔の感をのべたり。此篇以下の四首は皆茘枝に關する作なり。

【詩意】先帝（玄宗）も楊貴妃も今はおかくれになつてさびしいが、茘枝は今でもやはりまた長安へはいつてゆく。櫻の實が宗廟へ薦めらるるあとをついでいつも熱い地方から茘枝が貢獻されるのであるが、今の我が君は白露のまどかに結ぶ季節におあひになつて、玉座に於て、この茘枝について御先代の過去をお思ひになりてお悲しみになることであらう。

〔十〕

憶過瀘戎摘茘枝。
青楓隱映石逶迤。
京華應見無顏色。
紅顆酸甜只自知。

〔十〕

憶ふ瀘戎を過ぎて茘枝を摘みしことを、
青楓隱映して石逶迤たり。
京華應に見るなるべし顏色無きを、
紅顆の酸甜只自ら知る。

【字解】【一】瀘戎　瀘州、戎州、戎州は今の敍州、敍州の方が上流に位す。作者卷十四「宴戎州楊使君東樓」詩に於て輕紅擘茘枝、の句あり。【三】隱映　茘枝とうつろふをいふ。【三】石逶迤　石遥遥迤たるなり、遥迤ばうれる貌。【四】京華　長安をいふ。【五】無顏色　顏色は茘枝の果實の色をいふ、蜀の茘枝は瀘州敍州のものが上、涪州は之に次ぎ、合州は又之に次ぐと稱せらる。【六】紅顆　あかきつぶ、茘枝の殼の外皮は紅なり。【七】酸甜　すいとあまいと。【八】自知　自己のみが知る。

【題義】長安の遠地へ貢した茘枝は產地に於けるだけの色味なきをいふ。

【詩意】自分は前年（永泰元年六月の頃なり）戎州瀘州を經過して茘枝を摘んでたべたことがある。あそこでは靑い楓がうつろひ石の逕がうねうねとしてゐた。この茘枝を京華へもつていつてもみやこで見てはなんの色つやもないことであらう、このうつくしい紅い果實の酸いと甜いとは產地でたべた自分がひとりじぶんで知つてゐるばかりだ。

〔十一〕

翠瓜碧李沈玉甃。
赤梨蒲萄寒露成。
可憐先不異枝蔓。
此物娟娟長遠生。

〔十一〕

翠瓜碧李は玉甃に沈めらる、
赤梨蒲萄は寒露に成る。
憐む可し先づ枝蔓を異にせず、
此の物娟娟として長へに遠く生ず。

【字解】【一】沈玉甃　玉甃はうつくしき瓦、之を疊みて井側となす、沈玉甃とは瓦たたみの井泉のなかに沈めるをいふ。【二】寒露成　つめたき露のおくころに成熟する。成とは單に成熟するといふ事實をいふにとどまらず、是赤瓜李の如く珍重せらるとの意をふくむ。【三】先不異枝蔓　舊解に多く此句の主語を諸果（上述の瓜李梨蒲萄）とせり。鄙見は次句の「此物」ならんと考ふ。本篇の解釋は自ら安んぜざるものあれども暫く鄙見を用ひて解くべし。不異枝蔓とは茘

枝が他果と格外に特異なる形をなしてならざるをいふ。先とは他果にさきんじての意、他に先んじて異形異相にてもあらば人の注目をひくならんも然ることなしといふなり。【四】此物　茘枝をさす。【五】娟娟　うつくしき貌。【六】長遠生　長は「常に」の意、遠生は遠隔の土地に生ずるをいふ。遠きゆゑ人の注目をひくことすくなし。

【題義】この第十一首は茘枝の遠地に生じて人に知られざるをいふ。是暗に自己の身境を比したるものなるべし。

【詩意】翠の瓜だの碧の李は玉甃でたたんだ井泉のなかに沈めてひやして喰べられる。また赤い梨だの蒲萄だのは寒露のおくころに成熟する。（成熟して人に賞美される）ところが茘枝は氣の毒なことにはあらかじめ他の果物と特別にちがつたすがたもしてをらぬから人目もひかず、ただ娟娟とうつくしくいつも遠方の地に生えてゐてそのままずてておかれるのである。

〔十二〕

(一)側生(二)野岸及(三)江蒲〔浦〕。
不熟(四)丹宮滿(五)玉壺。
(六)雲壑(七)布衣(八)鮐背死。
(九)勞人(一〇)害馬(一一)翠眉須。

〔十二〕

側生す野岸及び江浦に、
熟せざるに丹宮玉壺に滿たしむ。
雲壑の布衣は鮐背にして死するに、
人を勞し馬を害して翠眉須つ。

【字解】【一】側生　他物の側に生ずるをいふ。字面は蜀都賦に「旁挺龍目、側生茘枝」とあるに本く。【二】野岸　田野の水邊。【三】江蒲　蒲の字浦に作れる本ありと、蓋し蒲は浦の誤ならん。今浦字に從ふ。蒲字を守る者、趙彦材曰く、戎・瀘（蜀の地名）よりして下は水のことを蒲といふ、江蒲とは江畔なりと。朱鶴齡は劉熙の「釋名」を引きて曰く、草、屋に圓なるを蒲といひ、又之を菴といふ、江蒲とは江菴なり、と。二說據ありと雖も作者恐らくは斯の奇語を使用せざるならん、且、江浦は作者常用の語なり、故に浦字に從ふ。【四】丹宮　丹をぬりし宮殿。【五】玉壺　白玉製のつぼ。【六】雲壑　雲のゐるたに。【七】布衣　貧賤の士。【八】鮐背　さめはだのせなか、老人の背はかくのごとし、暗に作者自身のごとき者をさしていふ。【九】勞人　人に難儀をかける。【一〇】害馬　馬をそこなふ、四川重慶府涪州城西十五里に妃子園あり、楊貴妃に獻じたる茘子の產せし園なり、當時貴妃は驛馬を以て宿つぎに馳せて茘枝を運ばしめ七日七夜を費して長安に到著せしめたり、途中人馬の斃るるもの甚だ衆かりしといふ。晩唐の杜牧が過二華淸宮一詩に、長安回望繡成レ堆、山頂千門次第開、一騎紅塵妃子笑、無二人知一レ是茘枝來一、とあるは貴妃が華淸宮にて茘枝の傳騎の飛び來るを待ちつつあるをうたへるなり。【一一】翠眉須　翠眉はうつくしき眉の美人、楊貴妃をいふ、須は之を必要とするをいふ。

【題義】この第十二首は茘枝のごとき果物が重んせられて、人がかへつて輕んせらるることを慨歎せり。

【詩意】茘枝の樹は野岸だの江浦だのに於て他物のそばに生えてをり、熟しもせぬうちにりつぱな宮殿へもつてゆかれて玉壺にいつぱいに盛られる。一方には山中貧賤の士がさめはだの背になつて老いぼれて死んでも顧みられずすておかれるのに、他方には美人がそれを必要とするからとて茘枝は人をつからせ馬をいためさせながら都まで大いそぎではこばれるのである。

洞房

(一)洞房環珮冷。(二)玉殿起秋風。
(三)秦地應新月。(四)龍池(五)滿舊宮。
(六)繫舟今夜遠。(七)清漏(八)往時同。
萬里(九)黃山北。(一〇)園陵(一一)白露中。

洞房

洞房環珮冷かなり、玉殿に秋風起るならむ。
秦地應に新月なるべし、龍池舊宮に滿つるならむ。
繫舟今夜遠く、清漏往時も同じかりき。
萬里黃山の北、園陵白露の中。

【字解】【一】洞房環珮冷　洞房はおくふかきねや、環珮は婦人のおびもの、此句は作者寓居の寢室をいふなるべし。蓋し作者その婦人の環珮より楊貴妃に連想し、貴妃とともに玄宗に懷ひを馳せしものならん。第一二句の關係は此地の冷を知るによりて玉殿の秋風を想起するなり。舊解は此句卽ち次句玉殿中の事とみなせり。【二】玉殿　長安の興慶宮をいふならん。【三】秦地　長安の地。【四】龍池　興慶宮の池、南薰殿の北にあり。【五】滿舊宮　舊宮とはもとの宮をいふ、滿とは池水が滿つるをいふ。興慶宮はもと玄宗の藩邸にして、俄に地陷りて池となり水をわきいでしめし處なり。【六】繫舟　「秋興」詩の孤舟一繫の意、夔州に舟をつなぎ客寓するをいふ。【七】清漏　宮殿にてのきよき漏刻のおと。【八】往時同　舊解に清漏與往時無異といへり、これは「往時と同じからん」とみるなり。鄙見は之に異なり。「往時同じかりき」とみる。往時我が聞きしひびきは今ひびきつつある清漏の（これは推測上よりいふ）それと同じくあつた、といふなり。蓋し此の一聯たるや今夜繫舟遠、往時清漏同、の意なればなり。【九】黃山北　黃山は西安府興平縣東北にあり、其地はむかしの槐里にして漢の武帝の茂陵そこに在り。舊解に茂陵を借りて玄宗の泰陵を比すといへり。此は紆曲の說なり。玄宗を漢武を以て比するはめづらしからざれどもそれは直接にいひがたきことある場合なり、ここは泰陵を直接にいふとも妨なきところなるに茂陵をかりて始めて泰陵をいふとはみるべからず、愚見を以てすればここは黃山以北の諸帝陵をひろくいはんとするものならん。泰陵は同州府蒲城縣金粟山に在りて黃山の東北にあたればおのづから諸陵中にふくまるるなり。【一〇】園陵　諸帝陵をいふ、而して泰陵其中にふくまる。【一一】白露中　秋節をいへり。

【題義】この篇「洞房」以下の宿昔、能畫、鬪雞、歷歷、洛陽、驪山、提封、通じて八篇は同時の作なるべく、いづれも長安の往事を追想せるものなり。起秋風の語によりて考ふるに大曆元年七月の作なるべし。この「洞房」の篇は玄宗のことを懷ふ。題は各篇みな起句の二字を切り取りて用ひたり。

【詩意】我が洞房に環珮が冷に感ぜらるる樣になつた。さだめし長安の玉殿にも秋風が吹きそめたことであらう。いまごろは長安地方は新月の節であるであらう。龍池の水は興慶宮のもとのところに於て充滿してをることであらう。じぶんは今夜はこんな遠方の地に舟をつないでをる、いまなりひびいてをるであらう所の宮漏のひびきはむかしもそのとほりであつたのである。あの萬里のさきに橫はる黃山の北、そこには吾が唐の諸帝陵が白露の中にあるのである。

宿昔

宿昔(一)青門裏。(二)蓬萊(三)仗數移。
(四)花嬌(五)迎雜樹。(六)龍喜出平池。
落日(七)留王母。(八)微風(九)倚少兒。
宮中(一〇)行樂祕。少有(一一)外人知。

宿昔

宿昔青門の裏、蓬萊仗數移る。
花嬌にして雜樹迎へ、龍喜びて平池より出づ。
落日王母を留め、微風少兒に倚る。
宮中行樂の祕、外人の知る有る少なり。

【字解】【一】青門裏　青門は長安城の東門なり、青門裏とは長安城内をいふ。【二】蓬萊　宮の名。【三】仗數移　仗は儀仗、行列の際のたてもの、移とは蓬萊宮より興慶宮へ場所がへするをいふ。【四】花嬌　嬌は愛らしきさまをいふ、花は即ち下の雜樹の花。【五】迎雜樹　雜樹は或はいふ、興慶池の東、沈香亭前に植ゑられたる紅・紫・淺紅・通白四種の木芍藥（牡丹）をいふと。或はいふ、桃李梨杏の屬をさす、と。今後說に依る。雜樹の花が行幸を迎ふるなり。【六】龍喜出平池　平池は即ち龍池をいふ、その水平なるにより平池といふ、「明皇十七事」にいふ、天寶中に、興慶池の小龍常に出でて宮垣水溝の中に遊ぶ、蜿蜒たる奇狀、人みな之をみる、玄宗蜀に幸するや龍一夕雲雨に乘じ西南を望みて去る、と。時時玄宗の出遊ぶをいふ。【七】留王母　王母は西王母、楊貴妃をさす、留とはひきとめて夜に至るをいふ。【八】微風　そよふく風。【九】倚少兒　少兒は漢の武帝の衛皇后（子夫）が姉なり。ここは楊貴妃の姉妹等をさす。倚とは肩などによりかかるをいふ、上に微風とあれば隨後風に吹かれながらよりかかるものなるを察すべし。【一〇】行樂祕　行樂はあるきながらたのしむ、ぶらぶらあそぶこと、祕は祕密、人まへにて言へぬ如き汚穢の行ひをいふ。【一一】外人　宮禁以外の人、李白に宮中行樂詞八首あり、其四に曰く、玉樹春歸日、金宮樂事多、後庭朝未入、輕輦夜相過、笑出花間語、嬌來竹下歌、莫敎明月去、留著醉嫦娥、と。當時の狀を窺ふべし。併せて此に附記す。

【題義】この「宿昔」の篇は玄宗の宮中の行樂を追懷す。

【詩意】むかし青門のうち、即ち長安城内では天子（玄宗）が蓬萊宮からしばしば儀仗を他所（興慶宮のごとき）へお移しになつた。そのとき雜樹の花はたをやかに行幸をお迎へし、また宮池のなかから龍が喜んであそびに出た。日が落ちかかるころになつても天子はまだ王母の仙女（楊貴妃）をおひきとめになり、あるひはほろゑひきげんでそよ吹く風にあたりながら衛少兒（貴妃の諸姨）の肩によりかかりになつた。（これなどはその一部分であつてそのほかに）宮中での行樂の祕密は宮外のものは之を知つてゐるものがめつたにない。

能畫

能畫毛延壽。投壺郭舍人。
每蒙天一笑。復似物皆春。
政化平如水。皇明斷若神。
時時用抵戲。亦未雜風塵。

能畫の毛延壽、投壺の郭舍人。
每に蒙る天の一笑、復た物の皆春なるに似たり。
政化平なること水の如く、皇明斷ずること神の若し。
時時抵戲を用ふ、亦た未だ風塵を雜へず。

【字解】【一】毛延壽　延壽が事は本卷「詠懷古跡」第三首にいだせり。なほ「西京雜記」にいふ、畫工、杜陵の毛延壽あり、人を寫すに好醜老少必ず其の眞を得、と。【二】投壺郭舍人　投壺は或る距離をおきて矢を壺のなかに投げいるる遊戲なり。郭舍人は漢の武帝の時の滑稽家なり。投壺をするとき驍矢といふ投げかたをなしたり、これは壺に投げこまれたる矢が壺內にて百餘回も旋回するものなりと。武帝はつれに之に對して金帛を賜ひたりといふ。【三】天一笑　天は天子、武帝をいふ、此句は投壺の句を承く。【四】物皆春　百物春の態を生ず、畫の巧なるをいふ、此句は能畫の句を承く。玄宗の時代には鷹馬を畫くには曹霸正・韓幹が輩あり。其の倖倡には黃𦁤あり、玄宗つれに呼んで肉几となすと。此輩は毛郭の流なり。【五】政化平如水　政化は政治の感化、平は公平。【六】皇明　天子の聰明。【七】斷若神　斷は事にさばきをつけること。【八】抵戲　角觝戲なり、「すまふ」。（「杜臆」は用抵戲と讀ませ豈壺を以て戲劇に當つる義とせり、今取らず）。【九】雜風塵　兵亂の塵がまじりこむ。叛亂の起るをいふ。仇氏は洪容齋が說を用ひて「政化」二句は上句と相貫かずとし二句の上に「若使」の二字あるごとくみ、「若し此く此くならしめば風塵を雜ふるに至らざりしならん」と條件的にみなし、玄宗の然らざりしを惜むと說明せり。さる解釋は道學的解釋、頭巾習氣的解釋にて取るに足らず、

ここは全部事實として敍したるなり。

【題義】この「能畫」の篇は玄宗時の雜技を追懷す。

【詩意】玄宗皇帝の御代には能畫の毛延壽・投壺の郭舍人の如きものがゐた。郭が投壺をやればいつも天子のお笑ひをうけ、毛が畫をかけば百物皆春色を生ずるの趣があつた。そのころは政化は水の如く平かであり、天子の御聰明、諸事を裁斷あそばさること神のごとくであつた。だから時時は抵戲のあそびなどもお用ひになつたが、決して兵馬の塵がとんできてまざる樣なことはなかつた。（まことに太平安樂の御代であつた。）

闘雞

（一）闘雞（二）初賜錦。（三）舞馬既登牀。
簾下（四）宮人出。樓前（五）御曲（柳）長。
（六）仙遊終（七）一闘。（八）女樂久（九）無香。
寂寞（一〇）驪山道。清秋草木黃。

闘雞

闘雞初めて錦を賜ふ、舞馬既に牀に登る。
簾下宮人出で、樓前御柳長し。
仙遊終に一闘、女樂久しく香無し。
寂寞たり驪山の道、清秋草木黃なり。

【字解】【一】闘雞　「東城父老傳」にいふ、玄宗藩邸にありしとき民間清明節の闘雞戲を樂しむ。位に卽くに及びて雞坊を兩宮の間に建て、長安の雄雞の、金毫鐵距、高冠昻尾なるもの千數を索めて雞坊に養ひ、六軍の小兒五百人を選び之を馴擾し敎飼せしむ。帝、出遊して賈昌が雲龍門の道傍に木雞を弄するを見、召し入れて五百の小見の長となし、甚だ之を愛幸し、金帛の賜、日日其の家に至る、天下號して神雞童と爲す、と。又云ふ、玄宗、乙酉を以て生れて闘雞を喜ぶ、と。觀風樓南に闘雞殿あり。以上玄宗の闘雞を好みしことを見るべし。【二】初賜錦　賜錦とは勝つた雞に賞として錦をたまふなり、「初」とは次句の「旣」と相應する辭なり、「やつと賜うたか賜はぬに」の意なり。【三】舞馬　「明皇雜錄」にいふ、上（玄宗）嘗て舞馬四百匹を敎へしむ、各〻左右部を分ち、某家寵・某家驕となす、時に塞外善馬を以て來り貢するものあれば、上之をして敎習せしむ、其妙を曲盡せざるなし、因て命じて衣するに文繡を以てし、絡ふに金鈴を以てし、其の鬃鬣を飾り、間するに珠玉を以てす、其の曲、之を傾盃樂といふもの數十回、首を奮ひ尾を鼓かし、從橫節に應ず。又三層の板牀を施して馬を上に乘す、抃轉飛ぶがごとし。或は壯士をして榻を擧げしめ馬を榻上に舞はしむ、樂工數十人環り立つ、皆淡黃の衫を衣、文玉の帶をなす、必ず年少く姿美なる者を求む。【四】宮人　見物の宮女なり。【五】御曲（柳）長　郭知達本の趙彥材注に循本に柳に作る、一に曲に作るとし、曲を是なりとせり。是曲の字必ず趙の改むる所ならん、余は柳の字をよしとす、故に柳に從ふ。御柳は宮柳をいふ、これは敍景にて一段の趣をそふ、御曲にては平平凡凡なり。【六】仙遊　玄宗の昇天仙遊卽ち崩御をいふ。【七】一闘　遊戲全くとぢて行はれざるにいたりしをいふ。【八】女樂　女子の音樂隊。【九】久無香　女は香を佩ぶ、女樂散ず、故に香なし。【10】驪山　西安府臨潼縣東南二里にあり、溫泉あり、玄宗華淸宮をその麓に置く。

【題義】この「闘雞」の篇は驪山宮の遊戲を追懷す。

【詩意】むかし玄宗皇帝驪山にての御遊のをりに、闘雞の勝負がついてやつといましがた錦の賞を賜はつたかとおもふともはやつぎにひかへた舞馬が牀にのぼつて藝をはじめる。簾のしたには女官たちが出て見物してをる、樓前にはしだれ柳がながく垂れてゐる。ところが玄宗がおかくれになつてからこんなお遊びごとはまつたくなくなつてしまひ、あれほど盛んであつた女樂隊もながらく香をきかぬ

ことになつた。いまでは驪山の下道もさびしくて秋にあたつて草木が黄ばんでをるばかりである。(かくじぶんは想像する)。

歷歷

(一)歷歷(二)開元事。分明在眼前。
(三)無端(四)盜賊起。忽已(五)歲時遷。
巫峽(六)西江外。(七)秦城(八)北斗邊。
(九)爲郎從白首。臥病(一〇)數秋天。

歷歷

歷歷たり開元の事、分明眼前に在り。
端無く盜賊起る、忽ち已に歲時遷る。
巫峽は西江の外、秦城は北斗の邊。
郎と爲る白首に從す、病に臥して秋天を數ふ。

【字解】【一】歷歷　一一はつきりしてゐる貌。【二】開元　玄宗の年號、治平の時なり。【三】無端　突然。【四】盜賊　安祿山。【五】歲時　一年四時。【六】西江　長江は長安よりみて西南にあり故に之を西江といふ。【七】秦城　長安の城。【八】北斗邊　北方にあり、故に北斗の邊といふ、毎依北斗望京華と同意。【九】爲郎白首　漢の馮唐が故事、已に屢見ゆ。【一〇】數秋天　幾回秋日を經しやなかぞふ、「南菊再逢」、「叢菊兩開」の類なり。

【題義】この「歷歷」の篇は亂後久しく蜀地に病客たるを歎ず。

【詩意】開元の太平時代の事は一一はつきりとじぶんの眼のまへにある。それだのに突然盜賊(安祿山)が起つて急にそれから年月がうつりかはつた。じぶんの居る巫峽の地は西江のまた外にあるし、故鄕の長安の城は北斗星のあたりに在る。郎官になりはなつたが白髮の身である、それもいたしかたがない、運命だ。ただかやうに病に臥して秋のたつのをかぞへてくらしてゐるのである。

洛陽

(一)洛陽昔陷沒。(二)胡馬犯潼關。
(三)天子(四)初愁思。(五)都人(六)慘別顏。
(七)清笳去宮闕。(八)翠蓋出關山。
(九)故老(一〇)仍流涕。(一一)龍髯幸再攀。

洛陽

洛陽昔陷沒して、胡馬潼關を犯す。
天子初めて愁思す、都人別顏慘なり。
清笳に宮闕より去り、翠蓋關山に出づ。
故老仍に流涕す、龍髯幸に再攀すと。

【字解】【一】洛陽陷沒　天寶十四載乙未十一月、安祿山反し河北諸郡を陷れ、十二月東京(洛陽)を陷る。【二】犯潼關　天寶十五載六月七日官軍哥舒翰の兵、靈寶に敗績して賊潼關に入る。【三】天子　玄宗。【四】初愁思　その時やつと愁の思をなす。【五】都人　長安の人人。【六】慘別顏　天子とお別れする顏つきものがなし。【七】清笳去宮闕　賊軍の鳴らす笳聲のうちに玄宗長安の宮門よりたち去る。(仇氏は清笳が宮闕を去るとき、至德二載九月郭子儀兩京を收復し賊衆夜遁れしことを指すとなす、今從はず)【八】翠蓋出關山　翠蓋は天子の車蓋、翠羽を以てかざるなり、出關山とは關山の路へと出ること、玄宗の蜀に幸せられしことをいふ。(仇氏は至德二載十月肅宗長安に入りて玄宗蜀を發せられしこととす、出關山とみて關山より出發する義となすなり、今從はず)。【九】故老　長安の父老。【一〇】仍流涕　仍はつぎつぎにの意。【一一】龍髯幸再攀　龍髯は黃帝の故事、黃帝、首山の銅をとりて鼎を荊山の下に鑄る、鼎既に成る、龍あり天よりひげを垂れ下り迎ふ。黃帝龍に騎りて天にのぼる、羣臣後宮七十餘人從て上る、餘の小臣は龍の髯につかまりしに髯拔けて地に墮つ、黃帝の弓を墮す、百姓乃ち弓と髯とを抱きて號ぶ。後世其處を名けて鼎湖とい

ひ、弓を烏號といふ。此事は多く天子の崩御の事に用ふ、ここは一どつかまりそこれた髯にふたたびつかまることができたは幸なりといふなり、玄宗の長安へ再歸されしに逢ふことをいふ、攀とはつかまること。

【題義】この「洛陽」の篇は亂によりて玄宗の蜀に奔り復び還京されしことを追懷す。

【詩意】昔、洛陽が賊に陷沒させられて、胡馬が潼關を犯してきた。そのときはじめて天子（玄宗）はごしんぱいになり、都の人もものがなしいかほつきで天子とお別れをした。天子は清笳の音のなかに宮門からおたちさりになり、翠蓋の御輦が關山の路へと出た。（蜀へおにげになつた）。（ところがまた都が回復され玄宗は長安へおかへりあそばされた）それで長安の父老たちは一どはなれた龍のひげに幸にもまたつかまることができたというて感動してしきりに淚をながした。（そんなこともあつた）。

驪山

(一)驪山絕(二)望幸。花(三)萼罷(四)登臨。
(五)地下無(六)朝燭。人(七)間有(八)賜金。
(九)鼎湖龍去遠。(一〇)銀海雁飛深。
(一一)萬歲蓬(一二)萊日。長懸舊(一三)羽林。

驪山

驪山望幸絕え、花萼登臨罷む。
地下朝燭無く、人間賜金有り。
鼎湖龍去ること遠く、銀海雁飛ぶこと深し。
萬歲蓬萊の日、長に懸る舊羽林。

【字解】【一】驪山　已に見ゆ、臨潼縣東南二里にあり、麓に華淸宮あり、溫泉あり、玄宗每歲十月此に來りて寒を避く。【二】絕望幸　行幸を望むことも絕えたり。玄宗旣に崩ぜられしを以てなり、玄宗は肅宗の上元二年（西曆七六一）四月甲寅、神龍殿に崩ず、年七十八、代宗の廣德元年三月辛酉、泰陵に葬る。【三】花萼　樓の名、詳しくは花萼相輝之樓といふ、長安の興慶宮の西南隅にあり、勤政務本之樓と相對す。玄宗藩邸にありしころ兄弟諸王と親愛せし所。【四】罷登臨　樓に登りて俯臨することもやみたり。これ亦玄宗の崩ぜられしをいふ。【五】地下　冥土をいふ。【六】無朝燭　朝は朝覲・參朝などの朝、臣下が朝早く宮中へでむくこと、燭は朝早く暗きゆゑ臣下路を照らすためとるともしび。【七】人間　生存せる人人のあひだに。【八】有賜金「漢書高后紀」に高后崩ぜしとき遺詔して諸侯・王に各千金を賜ひ、將相列侯郞吏には皆秩によりて金を賜ひしことみゆ。これ玄宗の崩時亦かくのごとくなりしをいふ。（或は曰く、玄宗の千秋節に百官に蛛蠡金鏡を賜ふの類をさす、と。別に一說なり）【九】鼎湖龍去遠　黃帝の故事前篇「洛陽」詩の龍髯の句解をみよ、玄宗の崩御をいふ。【一〇】銀海雁飛深　秦の始皇、驪山の阿に葬る、下は三泉を錮し、上は山墳を崇くし、水銀にて江海を爲くり、黃金にて鳧雁を爲くる、と「漢書」劉向傳にみゆ。【一一】萬歲　永久に。【一二】蓬萊日　蓬萊宮を照らした太陽、宮は玄宗の生時に居られし所なり。【一三】舊羽林　舊とは玄宗の生時よりありしをいふ、羽林は羽林軍、卽ち萬騎軍なり、のち改めて龍武軍といふ、（卷六「曲江對雨」詩にも龍武新軍深駐輦の句あり）玄宗の崩後、この軍を用ひて陵を護す。

【題義】この「驪山」の篇は玄宗の崩御を追懷す。

【詩意】驪山には行幸（玄宗の）を待望することが絕えてしまつた。花萼樓も御登臨あそばされることがやまつてしまつた。黃泉では參朝する臣下の燭はなく、人間にはおかたみに賜はつた金錢があるのである。黃帝の時のごとく鼎湖ではすでに龍が遠く去つてしまひ、御陵の壙穴では水銀の海に、そこふかいところで金雁が飛んでゐる。ただ御生前にかつて蓬萊宮を照らした太陽は萬歲ののちも長く

もとの羽林軍（現在の護陵軍）のうへに懸つてかがやいてゐる。

提封

提封漢天下。萬國尙同心。
借問懸車守。何如儉德臨。
時徵俊乂入。莫慮犬羊侵。
願戒兵猶火。恩加四海深。

提封

提封漢の天下、萬國尙ほ同心。
借問す懸車によりて守るは、儉德もて臨むに何如。
時に俊乂を徵して入らしめ、犬羊の侵すを慮ること莫れ。
願はくは兵の火の猶くなるに戒め、恩四海に加へらるること深からむ。

【字解】【一】提封　四封の内を提擧して其數を總計するをいふ、領内全部のこと。語は「漢書」地理志にみゆ。【二】漢天下　唐の天下をいふ。【三】萬國　諸道各節度使の領する地をいふ。【四】同心　「尙書」泰誓の同心同德の同心なり。同じく天子を佐くるの心あるをいふ。【五】借問　試みにとふ。【六】懸車守　「國語」に「懸車束馬、以踰太行」の語あり、太行山は險阻ゆゑ之をこゆるには車をつるし馬をくくつてこゆるといふなり。懸車とは車をつるしてとほるほどの險要の地をいふ、守とは其地によりてこちらが防守するなり。【七】何如　比較の辭なり。【八】儉德臨　儉約の德を以て天下にのぞむ、吳起が魏の文侯に對へたる言に、在德不在險とあると同意。作者又不過行儉德、盜賊本王臣の語あり。【九】俊乂　俊はすぐれた人、乂は賢才。【一〇】犬羊　夷狄をいふ。【一一】兵猶火　兵は猶火のごとし、戢めずんば將に自ら焚かんとす、と「左傳」にみゆ。

【題義】この「提封」の篇は治國の要道を說き、儉を行ひ賢を用ひ恩を加ふべく險を恃み武を用ふべきに非るをいへり。

【詩意】漢（唐）の天下の領土をすべてみるに萬國の多きあれどもそれはみな同じく王室をたすくる心をもつてをる。だから試みに問ふが、懸車を要する險阻によつて守るのは儉德を行うて之に臨むのとどうであるか。（儉を以てのぞむ方がよからう、儉德は無形の險阻である）。そうして時時俊賢の人才を地方から朝廷へ召し入れ、犬羊の樣な夷狄が侵略してくることなどはしんぱいせずともよろしい。どうか兵猶火といふ古語があるからそれについて警戒し四海萬民に深く恩を加へられんことをねがふのである。

鸚鵡

鸚鵡含愁思。聰明憶別離。
翠衿渾短盡。紅嘴漫多知。
未有開籠日。空殘舊宿枝。
世人憐復損。何用羽毛奇。

鸚鵡

鸚鵡愁思を含む、聰明別離を憶ふ。
翠衿渾て短盡す、紅嘴漫に多く知る。
未だ開籠の日有らず、空しく殘る舊宿枝。
世人憐めども復た損す、何ぞ用ひむ羽毛の奇なるを。

【字解】【一】別離　なかまとのわかれ。【二】翠衿　みどりのえり。【三】短盡　毛がみじかくなりはてる。【四】紅嘴　あかきくちばし。【五】多知　言語を多く知るをいふ。【六】舊宿枝　その故土に於ける樹の枝、以前その枝にやどつたことがあるなり。

【七】 **侵陵損**　顧霞・仇氏・浦氏、みなこの損の字を「害を加へる」義とみたり。恐くは然らず、蓋し此の損は下句の羽毛に關するものにして羽毛の損壞するをいふなり。【八】 **羽毛奇**　奇は異彩あるをいふ。此篇は大體に於て後漢の禰衡が鸚鵡賦の意を括約して用ひたり

【題義】 この篇は鸚鵡に托して自己の離鄕の感をのべたり。この「鸚鵡」以下孤雁、鷗、猿、麂、雞、黃魚、白小、通じて八首はみな禽鳥獸魚を詠じ、物に托して自己の意を寓したり。大曆元年夔州にての作ならん。

【詩意】 鸚鵡がうれはしきものおもひをしてゐる。それは聰明であつて故鄕の親しいものとの別れてゐることをおもうてゐるのである。この鳥はいま翠の襟元の毛がすつかり短くなつてをり、その紅い嘴はあいにくといたづらに知つてる言葉が多いだけで身のたすけにならぬ。いつ閉ぢこめられてゐる籠が開かれるのかその日が有るともみえず、むかし宿つた故鄕の樹の枝は空しくそのままにのこつてゐる。世人はこの鳥の美をかあいがつてくれはするが、どうせ損なはれてしまふ羽毛であるからにはその羽毛が特別綺麗である必要もなささうにおもはれる。

孤雁

(一)孤雁不飲啄。飛鳴聲(二)念羣。　孤雁飲啄せず、飛鳴聲羣を念ふ。

誰憐(三)一片影。(四)相失萬重雲。　誰か憐まむ一片の影、相失す萬重の雲。

(五)望盡似(六)猶見。(七)哀多如(八)更聞。　望盡くるも猶見るに似たり、哀多くして更に聞くが如し。

(九)野鴉無(一〇)意緒。鳴噪亦紛紛。　野鴉意緒無し、鳴噪するも亦た紛紛たり。

【字解】【一】 **孤雁**　ひとりぼつちの雁。【二】 **念羣**　なかまのむれをおもふ。【三】 **一片影**　一個のすがたなるゆゑにいふ。【四】 **相失**　他の伴侶とみはぐれる。【五】 **望盡**　伴侶を望みうるだけ遠く望みてその望みがつきるまでになつた。此句、第二句飛鳴の飛字を承く。【六】 **猶見**　それでもまだ何物かを見るかの樣である。【七】 **哀多**　かなしき音聲おほし。【八】 **更聞**　まだ伴侶の何かの音聲をきく、此句、第二句飛鳴の鳴字を承く。【九】 **野鴉**　のらにゐるからす。【一〇】 **無意緒**　意味なきをいふ。

【題義】 この篇は孤雁に托して兄弟の羣を思ふ詩なり。

【詩意】 ひとりぼつちの雁がゐる、この雁は水も飲まず、物をも啄まずに飛びながら鳴きたててをるが、その聲はなかまの羣をおもうてゐるのである。きのどくなことに萬重の雲になかまとはぐれてしまひただ一片の影だけあるのである。この雁はもはや前方を望めるだけ望んで飛んできたのだがまだなにか目に見えでもするかの樣にながめゆく。この雁はその聲に哀音が多くあらはれてゐるがまだなかまの聲でも聞えるかの樣に鳴いてゐる。この雁にくらべると野鴉なんぞは意味の無いもので、鳴きさわいだところがただがやがやとみだれてゐるだけのものである。

鷗

(一)江浦(二)寒鷗戲。(三)無他亦自(四)饒。　江浦に寒鷗戲る、他無きも亦た自ら饒しとす。

却思翻玉羽。隨意點青苗。　却つて思ふ玉羽を翻して、隨意青苗に點せしことを。
雪暗還須浴。風生一任飄。　雪暗きも還た須らく浴すべし、風生ずれば一に飄すに任す。
幾羣滄海上。淸影日蕭蕭。　幾たびか滄海の上に羣せしに、淸影日に蕭蕭たり。

【字解】【一】江浦　夔州の魚復浦をいふ。【二】寒鷗　寒天のかもめ。【三】無他　他事の喜ぶべきもの無きなり。【四】自饒　饒は多なり、自ら多しとするはみづから足れりとし、滿足してをるをいふ。【五】却思　此二句は春晩夏節の過去をいふ、さかのぼりていふ故に「却て」といふ、思とは作者が思ふなり。【六】玉羽　白玉の如く白きはね。【七】點靑苗　點とはぽつちりと白くみゆるをいふ、靑苗は稻田のあをあをとした苗。【八】雪暗　これは現在をいふ、暗とは雪ふりしきりてくらきをいふ。【九】浴　水中にて水をあみる。【一〇】幾羣　いくたびかむれをなす。【一一】滄海上　滄海はひろうみ、此句は江より想を海に馳せて述ぶるなり、江鷗も海鷗も同種類なればなり、而して作者昔年吳越の遊あり、今又江をくだりて海に泛ばんとの念あるにより象れて此に言及せしものかと察せらる。【一二】淸影　白鷗のきよらかなかげ。【一三】蕭蕭　さびしき貌。

【題義】鷗に托してその自得悠悠のさまをいふ。

【詩意】寒天の鷗が江浦に戯れてゐる。この鷗は別にこれといふおもしろいこともないがじぶんで滿足してゐる。ひるがへつておもふにこのかもめは以前は白玉の樣にうつくしい羽をひるがへして、かつてきままに靑靑とした苗にぽちぽち飛んでゐた。いま寒天になつたが、雪が小暗くふりしきるとも水浴はせねばならぬし、もしまた風がつよく起つたばあひでもひとへに吹きとばされるのにまかせてゐる。この鷗はかつていくたびか滄海のほとりで多くの鷗と羣をなしてきままにしたことがあるが今はこの江浦にさらしてゐる淸影が日に日にさびしさうにみえてをる、滄海の羣がしたはしい。（七八兩句の解、諸家の說も首肯する能はず、鄙見も果して當れるや否、暫く疑を存して考を他日にまつ）

猿

梟梟啼虛壁。蕭蕭挂冷枝。　梟梟虛壁に啼き、蕭蕭冷枝に挂る。
艱難人不免。隱見爾如知。　艱難人免れず、隱見爾知るが如し。
慣習元從衆。全生或用奇。　慣習元衆に從ふ、全生或は奇を用ふ。
前林騰每及。父子莫相離。　前林騰每に及ぶ、父子相離るる莫し。

【字解】【一】梟梟　たなやかなる貌、聲をひくさま。【二】虛壁　空虛なる峡壁。【三】蕭蕭　さびしき貌。【四】冷枝　秋冬の樹枝。【五】艱難　人生のなんぎ。【六】不免　之にかかるを免れず。【七】隱見　人眼からかくれ、或はあらはれるなんぢ、猿をさす。【八】從衆　猿の性は羣居す、故に衆に從ふといふ。【一〇】全生　生命を安全に保つ。【一一】用奇　奇術を用ふる、樹墜をつたひ、弓矢を避くる、等みなこれなり。【一二】前林　作者の住居の前方の林。【一三】騰每及　猿の騰躍が每に前林に及ぶをいふ。【一四】莫相離　諸倂多く命令にみる。余は直敍とみる。

【題義】猿の生活をのぶ、亦以て自ら比するなり。

【詩意】悲しげな聲をひつぱつてがらんどうの崖壁に啼いたり、さびしげに冷たき樹の枝に掛つてゐる。艱難なめにであふことは人間は免れぬのであるが、どんな風に身をかくしたりあらはしたりすれ

ばよいかは猿の方が知つてゐる樣にみえる。彼は習慣として衆のもののあとに從ふものであるが、自己の生命を保全するためにはときとしてふしぎな術さへ用ふるものである。彼はいつもをどりあがつて自分の宅の前の林までやつてくるが、父子離れたことはなく、つねにいつしよになつてをる。

麂

永與清溪別，蒙將玉饌俱。
無才逐仙隱，不敢恨庖廚。
亂世輕全物，微聲及禍樞。
衣冠兼盜賊，饕餮用斯須。

麂

永く清溪と別れ、玉饌と倶にするを蒙る。
才の仙隱を逐ふ無し、敢て庖廚を恨まず。
亂世全物を輕んず、微聲禍樞に及ぶ。
衣冠と盜賊と、饕餮用ふること斯須なり。

【字解】【一】麂　麂と同じ。おほかもしし、くじかの類なり。「本草衍義」にいふ、麂は麞の類、山の深僻なる處に頗る多し、其の聲、破鈸を擊つがごとし、と。【二】清溪　きよきたにがは、麂の棲處をいふ。【三】蒙　かうむる、受動を示す辭。【四】將　「と」なり。【五】玉饌　美食をいふ。【六】仙隱　仙人、隱遯者。【七】恨庖廚　庖廚は臺所、くりや、そこにて料理されることをさす。【八】全物　物を保全する。【九】微聲　かすかなる鳴きごゑ。【一〇】及禍樞　禍機のかなめの處にふるるに至る。【一一】衣冠　朝野の紳士。【一二】兼　「と」なり。【一三】饕餮　財を貪るを饕、食を貪るを餮となす。「左傳」にみゆ。【一四】用　庖廚の用に供するをいふ。【一五】斯須　須臾なり、しばしのま。

【題義】麂が鳴きしために人に獲られて食膳にのぼさるるをいふ。

【詩意】この麂は永久に清き溪流と別れてりつぱな御馳走とともに賞味される。仙人や隱遯者の跡を逐うて匿くれてしまうほどの才が無いのだから臺所で料理してたべられてもそれは恨まぬ。亂世の時期には人が物を保全することを貴ばぬから、かすかな聲でも出さうものなら禍機にふれてしまうことになる。それで朝野の紳士であらうが盜賊だらうがしばしのまに料理してむさぼりくつてしまう。

雞

紀德名標五，初鳴度必三。
殊方聽有異，失次曉無慚。
問俗人情似，充庖爾輩堪。
氣交亭育際，巫峽漏司南。

雞

德を紀するに名五を標す、初めて鳴くは度必ず三なり。
殊方聽くに異なる有り、次を失して曉に慚づる無し。
俗を問へば人情似たり、庖に充つるは爾が輩堪へたり。
氣は交る亭育の際、巫峽漏、南を司る。

【字解】【一】紀德　紀は別ち理むるをいふ。【二】名標五　「五名を標す」の義、五つの名をめじるしとしてたす。「韓詩外傳」に曰く、夫れ雞は頭に冠を戴くは文なり。足に距を傅くるは武なり。敵を見て闘ふは勇なり。食を得て相呼ぶは義なり。鳴くに時を失はざるは信なり、と。【三】初鳴　曉にはじめてなくをいふ。【四】度必三　度は「たび」回數をいふ、夜明けまでに三度なく。【五】殊方　他方、他鄉、夔州をさす。【六】聽有異　雞聲をきくに他所と異なれるあり。【七】失次　順序をあやまる、この雞の夜鳴きどりなるをいふ。【八】曉無慚　夜鳴きて曉には鳴かざれども慚づることなし。仇氏は「慚づるなからんや」と反語によみたれども、直敍と見るべし。【九】問俗　俗は夔州の風俗。【一〇】人情似　夔州の人情、德信なきことこの雞と相似たり。【一一】充庖　庖廚

の用に充つ、料理して薦てくらふないふ。【三】稠疊塒　稠疊は數なさす、塒は庖に充つるに堪ふるないふ。【三】氣交亭育際　氣は陰陽の氣、交とは二氣相交錯するなり。「老子」第五十一章に曰く、道生之、德畜之、長之育之、亭之毒之、養之覆之、と。陸德明が「音義」に云ふ、亭は「別つ」なり、毒は今育に作る、と。亭毒は卽ち亭育にて物をそれぞれ區別し育て成すないふなり。作者蓋し曉時を以て萬物生育の時となせしなり。【四】備司南　備は備刻(みづどけい)なり。司南の義諸解あり。「韓非子」有度第六に、先王立司南、以端朝夕、とみゆ。杜に司南は指南車なりといへり。韓子の司南は方位を正すの具にして此詩の場合に適切ならず。顧賞云ふ、雞は火德の精たり、南方は火に屬す、故に司南といふ、と。これ雞の才性をさして司南といふとみるなり。今暫く此解に從ふ。朱氏前氏は備を「もらす」とよませ「之を闕失する」義とせるは從ひがたし。

【題義】夔州の荒雞につきて感じたる所をのぶ。

【詩意】雞はその德をならべたてるときには德の名必ず文武勇義信の五つをめじるしにかかげる。また雞はあけがたに初めて鳴くには必ず三回ないてから夜が明けるをつねとする。ところがここの地方へ來てその聲をきくと他所とはちがひがあり、その鳴くべき順序を失ひながら曉になりてときをつくらずしてすこしも愧ぢてもをらぬ樣である。雞ばかりでない、ここの風俗をたづねてみるに人間の情もその德信の無いことはこの雞と似たところがある。かやうな雞ならば臺所の用に供して食物に充つることはあたりまへのことでそれだけのねうちがあるといふものだ。こんな雞だから曉の萬物生育の際、陰陽二氣が交るをりにあたつて、ここの巫峽では雞が司南のはたらきを爲さずして漏刻がその役を爲すのである。

黃魚

日見巴東峽。黃魚出浪新。
脂膏兼飼犬。長大不容身。
筒桶相沿久。風雷肯爲伸。
泥沙卷涎沫。回首怪龍鱗。

黃魚

日に見る巴東の峽、黃魚浪を出でて新なるを。
脂膏兼ねて犬を飼ふ、長大身を容れず。
筒桶相沿ふこと久し、風雷肯て爲に伸べしめむや。
泥沙に涎沫に卷く、首を回して龍鱗かと怪む。

【字解】【一】巴東峽　夔州の峽をいふ。【二】黃魚　魚の名、夔州の上流四十里に黃草峽あり、黃魚を產す、大なる者は數百觔ありと。「爾雅」の注にいふ、鱣魚、體に甲ありて鱗なく肉黃なり、大なる者は長さ二三丈、江東の人呼で黃魚となす、と。「なまづ」「うなぎ」の類にして巨大なるものとみえたり。【三】脂膏　あぶら。【四】兼飼犬　兼とは人が食ふうへにの意、「齊諧論」に、江陵之人、以魚飼犬、とみゆ。【五】長大　身なりのおほきいこと。【六】不容身　からだのいれどころなし。【七】筒桶　筒は「つつ」、竹にて作る、桶は「をけ」、木にて作る、仇氏竝に魚を捕ふる器とせり。案ずるに魚を盛る器ならん。【八】相沿久　ながいあひだの沿襲なり、盛魚の器に改良を加へざるなり。【九】風雷　風あり雷あるときは魚は變化して天にも升りうる機會あるなり。【10】肯爲伸　爲とは「この黃魚のために」の意、伸とは身志を伸張せしむるないふ。【一一】泥沙　泥沙に於ての義、副詞として用ふ。【一二】卷涎沫　涎沫中に身體を卷き屈するないふ、涎は「よだれ」、沫は「あわ」。【一三】回首　そちらへくびをふりむけてながむること。【一四】怪龍鱗　龍鱗とは龍鱗あるものの義、龍のことをいふ、鱗の字は押韻のために用ひしのみ。

【題義】黃魚についての感をのぶ。蓋し暗に以て自ら比するなり。

【詩意】じぶんは巴東の峽で日日黃魚が人に捕へられて浪のなかからでてくるのを見うける。この魚

はそのあぶらは人ばかりか犬の飼ひ料ともなる、その體はあまり長大で身の容れ場所も無い。從來のながいあひだの習慣で筒だの桶だのにいれて置くが、風雷の威力を以てしてもこの魚をして身志を伸ばさせてやることはできずにをる。この魚が泥沙のうへで涎沫のなかでとぐろを卷いてゐるのをながめるともしか龍ででもあるのではないかと怪まれる。

白小

（一）白小（二）羣分命。天然二寸魚。　白小も羣命を分つ、天然二寸の魚。
（三）細微（四）霑水族。（五）風俗（六）當園蔬。　細微にして水族を霑す、風俗園蔬に當つ。
（七）入肆（八）銀花亂。（九）傾筐（一〇）雪片虛。　肆に入れば銀花亂る、筐を傾くれば雪片虛し。
（一一）生成猶拾〔捨〕卵。（一二）盡取（一三）義何如。　生成猶は卵を捨くといふ、盡く取るは義何如。

【字解】【一】白小　魚の名、一に麵條魚といふと。蓋し「しらうを」の類なるべし。【二】羣分命　羣は「むれ」、其の全羣ないふ「みな」と訓す。分命とは天命を分賦されたるものなるをいふ。【三】細微　こまかなこと。【四】霑水族　水族は水中に棲む他の生物をいふ、霑の字諸家明辨なし、蓋し他生物の餌となりて之に惠澤を與ふるをいふ。【五】風俗　夔州の風俗。【六】當園蔬　當は、ひきあてにする、「代りにする」意。園蔬ははたけの野菜。【七】入肆　肆は市場をいふ。【八】銀花亂　銀の花とは魚の白きを形容していふ。【九】傾筐　かごをかたむけてあけること。【一〇】雪片虛　雪片とは上の銀花と同じく魚の白きを形容していふ。虛とはかごをあけたあとが空虛となるをいふ。【一一】生成猶拾卵　生成とは物がうまれいでて成育するをいふ。猶拾卵とは舊解この文字どほりに見て魚の卵まで拾ひ取る義とせり。かく解するときは此句は下句と接續し、下句の「盡取」と一意となるなり。余謂ふにかく一直線に接續するものには非らん。一本に拾を捨に作るといへり。余は捨の字をよしと信ず。捨は「すつる」なり、「おく」なり、卵を取らずにのこしおくをいふ。此句は生物愛護の一般原則をのべしものと考ふ、この原則をのべおきて下句には其原則に違ふことを責めしなり。儒家の生物愛護に關しては「說苑」權謀篇に、孔子の言として、丘聞之、刳胎焚夭、則麒麟不至、乾澤而漁、則蛟龍不遊、覆巢毀卵、則鳳凰不翔、丘聞之、君子重傷其類者也、とみえたり。「禮記」の禮運篇には聖人の治世のさまをのべて瑞祥を列記しその後に、其餘鳥獸之卵胎、皆可俯而闚也といへり。又漢の路溫舒が尙德緩刑書にも、烏鳶之卵不毀而後鳳凰集の語あり。杜詩の意此等とひとしく「卵を捨く」の意なるべし。猶捨卵とは「卵さへもなほ之を捨く」の意。【一二】盡取　この魚をすつかりとりつくすをいふ。【一三】義何如　そのわけいかんと詰責するなり。

【題義】白小魚の取りつくさるるを見て感をのぶ。

【詩意】この白小魚でもみな天からそれぞれの命を分與されて生れてきたものだ、天然に二寸くらゐのちさい魚ではあるが。その形體は細微であつて他の水族の餌となつて之に恩惠をうるほしてゐるし、またこの土地の風俗では之を野菜がはりの食物としてをるのである。このうをが市場にはいつてくるときは銀の花がみだれた樣にうつくしいし、之を筐から傾けてあけると雪片が空虛になつたかの看がある。（ただ物はいたはつて用ふべきものである）物の生成からいうと鳥の卵でさへもこれをすておいて取らぬといふが聖人の仁德である、しかるにこの魚をここの人人はすつかり取り盡す樣であるがそれはどういふわけであるか、仁意にそむいたしかたではないか。

哭王彭州掄

執友驚掄沒。斯人已寂寥。
新文生沈謝。異骨降松喬。
北部初高選。東牀早見招。
蛟龍纏倚劍。鸞鳳夾吹簫。
歷職漢庭久。中年胡馬驕。
兵戈闇兩觀。寵辱自三朝。
蜀路江干窄。彭門地里遙。
解龜生碧草。諫獵阻靑霄。
頃壯戎麾出。叨陪幕府要。
將軍臨氣候。猛士塞風飇。
井漈泉誰汲。烽疎火不燒。
前籌自多暇。隱几接終朝。

王彭州掄を哭す

執友掄沒するに驚く、斯の人已に寂寥なり。
新文沈謝を生ず、異骨松喬を降す。
北部初めて高選し、東牀早く招かる。
蛟龍倚劍に纏はる、鸞鳳吹簫を夾む。
職を歷る漢庭に久し、中年胡馬驕る。
兵戈兩觀に闇し、寵辱自から三朝。
蜀路江干窄く、彭門地里遙なり。
解龜碧草生ず、諫獵靑霄を阻つ。
頃壯とす戎麾の出づるを、叨に陪す幕府の要。
將軍氣候に臨む、猛士風飇を塞ぐ。
井漈はれて泉誰か汲まむ、烽疎にして火燒かず。
前籌自から多暇、隱几接すること終朝なり。

翠石俄雙表。寒松竟後凋。
贈詩焉敢墜。染翰欲無聊。
再哭經過罷。離魂去住銷。
之官方玉折。寄葬與萍漂。
曠望渥洼道。霏微河漢橋。
夫人先卽世。令子各淸標。
巫峽長雲雨。秦城近斗杓。
馮唐毛髮白。歸興日蕭蕭。

翠石俄に雙表、寒松竟に後凋す。
贈詩焉んぞ敢て墜さむや、染翰聊る無からむと欲す。
再哭經過罷む、離魂去住銷す。
官に之きて方に玉折す、寄葬萍漂と與にす。
曠望渥洼の道、霏微たり河漢の橋。
夫人先づ世に卽く、令子各〻淸標なり。
巫峽長に雲雨、秦城斗杓に近し。
馮唐毛髮白し、歸興日に蕭蕭たり。

【字解】【一】王彭州掄　卷十に王侍御掄許攜酒至草堂詩あり、王掄は侍御史を以て官を罷め、後嚴武が幕府にあり、又彭州刺史に遷りて卒せしものとみゆ。彭州は成都府彭縣なり。【二】執友　「禮記」の曲禮上に、執友稱其仁の語あり、執友は志を執ること同じき友、もと同師の友をいふ、ここは同志の友の意に用ふ。【三】掄沒　死をいふ。【四】斯人　同輩をさす。【五】新文　新しき文章。【六】沈謝　梁の沈約、宋の謝靈運、王掄をたとふ。【七】異骨　凡庸の骨相ならぬをいふ、仙骨あるをいふ。【八】降松喬　降とは天よりこの世へ降生せるをいふ、松喬は赤松子・王子喬、竝に仙人。【九】北部初高選　北部とは洛陽北部の尉をいふ。魏の曹操年二十にして孝廉に擧げられ郎となり、洛陽北部の尉に除せらる、此句掄が京畿の尉官となりしをいふ。高選は選拔さるるをいふ。【一〇】東牀早見招　東牀の牀字もと狀に作る、「杜臆」に牀と改む、從ふべし、坦腹東牀は王羲之が故事、已に見ゆ。これ王

掄が宗室と姻を締びしことをいふ、故に下に「鸞鳳」の句あり、見招とは壻として招かれしをいふ。若し東堂に從はば東堂に策問をうけて及第せしことをいふなり。卷十六「八哀」詩の第六首の射君東堂策の句解をみよ。【一一】蛟龍纏倚劍　蛟龍、掄が倚る所の劍をまとふ、蓋し尉官として威嚴ありしをいふ、尉は盜賊を治むる職なり。【一二】鸞鳳夾吹簫　簫史・弄玉が故事を用ふ、巳にみゆ。秦の穆公其女弄玉を簫史に妻はす、一旦簫を吹き鳳に騎りて仙となり去る。これその宗室の壻たるをいふ。【一三】歷職　侍御史等の職を經歷せしこと。【一四】漢庭　唐の朝廷をいふ。【一五】胡馬　安祿山史思明等賊軍の馬。【一六】兩觀　觀は宮門の闕をいふ、兩わきの小門。【一七】寵辱　榮辱・窮達のごとし、語は「老子」にみゆ。【一八】三朝　玄宗肅宗代宗の三朝、起十二句は生前事迹の大體をのぶ。【一九】蜀路江干窄　江干は長江のほとり、窄は地形狹小なるをいふ。【二〇】彭門　山の名、彭縣の西北三十里にあり、兩峰對立すること闕の如く、天彭門と名く。【二一】地里遙　地里は里程をいふ、遙とは京師よりしてはるかなるをいふ。【二二】解龜　漢の中二千石（地方官）は銀印龜紐なり、龜は印の鈕がかめの形なるをいふ、龜を解くは辭職すること、ここは侍御史を辭せしことをいふならん。【二三】生碧草　諸說あり、一は云ふ、印を草莽に委ておくなり、一は云ふ、印澀して苔を生ずるの類なり、一は云ふ、官を罷むると同時に死して草生ずるなり、と。いづれも首肯し難し。案ずるに、これ印を解き辭職せしことが碧草の生ずるとき卽ち春節にあるをいへるものならん。【二四】諫獵　司馬相如が故事、巳に屢見ゆ。【二五】阻靑霄　あをぞらをへだつ。中央朝廷と隔るをいふ。【二六】頃壯　頃は近年の意、壯は作者之を壯とするをいふ。【二七】戎麾出　戎麾は軍務を指揮するものをいふ、これ嚴武が蜀を鎭せしことをさす。【二八】叨陪幕府要　叨とは作者よりいふことにて謙辭なり、陪とは王掄のあとにつきしこと、要とは邀なり、幕府要とは嚴武の節度使の幕府より幕僚として邀へられしをいふ。【二九】將軍　嚴武をさす。【三〇】臨氣候　氣候とは用兵の氣候なりといへり。臨とは蓋し陣にのぞむをいふ、臨氣候とは兵を用ふべきの氣候にあたりてその陣にのぞむをいふならん。【三一】猛士　部下の强兵なり。【三二】塞風飈　此句の意詳ならず。舊解に云ふ、漢の高祖の大風歌の意なりと、大風歌は猛士を得て四方を守らしめたしといへり。歌意をみたすことを「風飈を塞ぐ」といふは語を成さざるものといふべし。風飈は或は吐蕃の兵勢の猛烈なるを比していひ、塞ぐとは其の入侵の途をふさぐをいふか。暫く疑を存す。【三三】井渫泉誰汲　井泉を汲むものなきをいふ。

井渫とは井をさらへて汚を去るなり。語は「易」にみゆ。軍隊の所在には必ず先づ井を掘る、これさる必要なきをいふ。【三四】烽疏火不燃　烽火は危急を報ずるために擧ぐ、今危急少きゆゑ烽まばらにして火をも燃かざるなり。【三五】前籌　張良、漢の高祖の食前の箸を借りて天下の長久なるや否やをうらなふ。巳に見ゆ。これ王掄嚴武がために計謀をなせるをいふ。【三六】自多暇　多暇とは軍務に閑暇あるをいふ。【三七】隱几　論息による、作者の態度。【三八】接終朝　接とは作者、王掄と應接すること、終朝は朝いつぱい。朝から公事なくて閑事にふけるをいふ。「蜀路」以下十二句は王掄朝廷を去りて蜀に在りし當時をのぶ。【三九】翠石俄雙表　雙表は二本の石柱、墓門に建つ。翠石は石柱の材料をいふ、これ王掄が墓を設くるをいふ。【四〇】寒松竟後凋　松柏後凋は「論語」にみゆ。此句王掄が死をいふ。翠石・寒松二句は前後置きかへてみるべし。【四一】贈詩　王掄が生前に作者に贈れる詩。【四二】焉敢墜　作者之を恭しく奉持して失墜せしめざるをいふ。【四三】染翰欲無聊　染翰とは作者が筆を墨汁にそめて文章をかくをいふ、主として此の哭詩を賦するをいふ。無聊とは賴りなきをいふ、親友を失ひたればなり。【四四】再哭經過罷　舊解に、經過を以て王掄の櫬が夔州を經過することとし　再哭を以て掄の死を聞きしときと今櫬の經過のときと二回哭することと爲せり。詩意を考ふるに當らず。宜しく浦注に依るべし。浦氏曰く、詩に雙表・寄葬等の語あり、當に是れ其(掄)の蜀に旅瘞するを聞きて詩を作りて之を哭するなるべし。又曰く、再哭經過罷とは前に其死を聞きて之を哭す、今彼の櫬來らず、我身往かず、臨弔せんと欲して再びする能はざるなり、と。この解是なり。浦意を推すに此句は「第二回の哭禮を行はんがために掄が新墓所に經過することもそのままにする」をいふ。【四五】離魂去住銷　離魂は王掄と作者との離れてゐる魂、掄については死魂をいひ、作者自己については生魂をいふ、去住とはなほ彼我のごとし、去は掄をいひ住は自己をいふ。卷六送賈閣老出汝州詩の去住損春心の去住と同意。(趙氏曰く、去住とは夔州より去り、或は夔州に住まるなり、仇氏曰く、之官玉折は去なり、寄葬萍漂は住なり、と。今竝に從はず)。【四六】之官　王掄が彭州刺史の任にゆくをいふ。【四七】玉折　死をいふ、語は顏延之が祭屈原文にみゆ。【四八】寄葬　客土に寄寓して葬る、彭州に葬りしか成都に葬りしか不明なれども之により掄が蜀に葬られしこと知るべし。【四九】與萍漂　葬のただよふと同樣なるをいふ、故鄕に歸葬するに非ざればおちつかぬなり。【五〇】矚望　以下四句は一氣に讀むべし、「矚望」の句は「令子」の句に、「霽徹」の句は「夫人」の

句に關係す。曠望は望みひろくはるかなるをいふ、遠く望むをいふ。【五一】渥洼道　渥洼は水の名、名馬を產す、卷三沙苑行の龍媒昔是渥洼生の句併をみよ、下の「令子」をいはんための句なり。【五二】霏微　さぎりのこまかにとぶ貌。【五三】河漢橋　あまのがはに架したる橋、烏鵲が河を塡めて橋となし織女星を渡すこと「淮南子」にみゆ。牽牛織女の會夫婦と緣あれば之をいふ、下の「夫人」をいはんための句なり。【五四】夫人　王掄が妻をいふ。【五五】先卽世　卽世はあの世へゆきしこと、死をいふ、語は「左傳」にみゆ。【五六】令子　よき子、令の字敬稱、掄が諸子をいふ。【五七】各清標　各といへば一人に非ず、清標、淸なるめじるし、すがたをいふ。「翠石」以下十二句は王掄が沒後をいふ。【五八】長雲雨　長は常の意。【五九】秦城　長安の城。【六〇】近斗杓　北斗星に近し、北方にあたるをいふ。北斗七星は、その第一より第四までを魁といひ、第五より第七までを杓といふ。長安の位置は杓にあたる。【六一】馮唐　漢の文帝時代の人、白首にして郎となる、已に見ゆ、以て自ら比す。【六二】歸興　故鄕へかへらんとの念。【六三】蕭瑟　さびしき貌、末尾「巫峽」四句は自己の蜀に留滯するをいたむ。

【題義】 友人彭州刺史王掄を哭したる詩。大曆元年夔州にての作。

【詩意】 自分は同志の友人等がなくなるのに驚く、同輩のものはもはやさびしくのこりすくなくなつた。王掄は文章に於て謝靈運・沈約が生れてきたかとおもはれ、凡骨でなかつたことは赤松子・王子喬が降誕したかとおもはるるほどのものであつた。彼は高選の初にありて北部の尉に任せられ、早くも貴族の壻に招かれた。卽ち彼は尉としては蛟龍のまとうた劍に倚り、壻としては鸞鳳に夾まれながら簫を吹きならした。彼は漢庭（唐の朝廷）に於て官職を歷ることが久しく、その中年に胡の兵馬が驕つて叛く樣になつた。ために京師の宮門には兵戈が暗くとざすことになり、彼はこの間に凡そ三朝、（玄宗肅宗代宗）にまたがつて一棨一辱の運命をへた。』蜀の道路は長江のほとりで地形狹小のところであり、彭門の山は京師からはいとはるかなところである。（彼は其の地方へでることになつた）。彼が侍御史の印を解いて辭職したときは碧草の生ずる春であつたが、彼は京師にゐるならば諫獵の書でもたてまつり直諫すべきのを靑霄をへだててそれを務すよすがもなかつた。自分は近頃では嚴武が戎麾をつかさどつて蜀へ出てきた事を壯とするのであるが、あのころ王掄も嚴武が幕府から邀へられてその幕僚となつたが、ふつつかながら自分もみだりに彼のあとについて幕僚となつた。あのとき將軍（嚴武）は兵を用ふべき氣候に應じて陣に臨み、部下の猛士は外敵の風飈のごとき勢の侵入する途をよく塞ぎとめた。行軍のため井ざらへをしてその泉水を汲む人も無く、急を告ぐる烽もまれで火を燒きつけるものさへなかつた。掄のごとき者が謀略を用ふるためおのづと軍務も暇が多く、したがつて我我は脇息によりかかつて朝ちう應對して閒談するを常とした。』ところが寒空の松の樹もとうとう後れながらも凋んでしまひ、（掄死す）このたび俄にその墓所に翠石の二本の柱が建てられることになつた。彼が生前自分に贈つてくれた詩は自分は之を大切にして失墜はしない、彼なき今は自分はたとへ筆を染めてもたよりがない氣もちがする。自分は彼の墓が建つときいてそこへたちこして再び哭禮を行ひたくおもふがそのままやまつてしまうた。それで彼我お互の離れてをる魂が彼處と此處とでめいつてをるのである。彼はちやうど彭州刺史の官に往いたときに玉の折れるごとく死んでしまつた。そうして萍の漂ふごとく旅の空で葬られることになつた。河漢の橋をみればさぎりが霏微としてとんで

をる。彼の夫人は彼より先きにあの世へ赴かれたのである、ただかの名馬の產するてふ渥洼の道をはるかにながむれば、その名馬にも似て彼のよき子どもたちはそれぞれ淸きすがたをそなへてをるものである。（是聊か以て死者の慰とするに足らんとの意ならん）』自分の居る巫峽はいつも雲雨ばかりである。故鄕の長安城は北斗の杓の懸るあたりに近く、萬里の遠きに在る。馮唐ともいひつべき自分は老いて毛髮が白くなつた。かく老いては故鄕へかへりたさの念さへも日に日にさびしくなりゆくばかりである。』

309
65

昭和六年二月十二日印刷
昭和六年二月十五日發行

續國譯漢文大成　文學部　第六帙ノ上

【非賣品】

著作權所有

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者　鶴田久作
東京市本鄕區西片町十番地

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田（五三五番
　　　　（八三八番
振替東京一八五七二番

終